蕉門俳諧續集

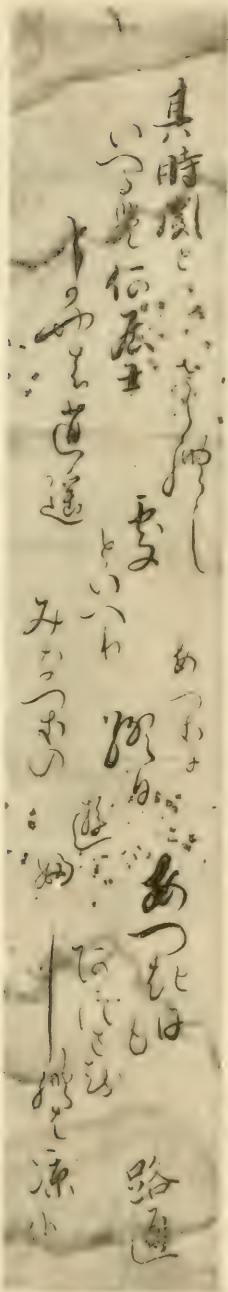
装幀　津田青楓

越人筆書翰

（高野辰之氏藏）

其角短册
（吉田里子氏藏）

白雲や花に成行顔は嵯峨　其角

路通短册
（同　）

あつき日もあつさたしれば涼哉　路通

解　題

江鮭子　　元祿三年板　　中本一冊

大阪の町家で屋号を伏見屋と稱した之道の撰である。之道は槇本氏、蟻門亭と号したが、元祿三年の秋、近江の幻住庵に芭蕉をたづねて行く折から、伊丹の鬼貫はその行を羨んで「橋よりも戻る心を瀬田の橋」の句を餞け、膳所の珍碩は之道を案内して芭蕉と向對せしめた其の三吟の連句

白髪ぬく枕の下やきり〴〵す　　翁

入日をすぐに西窓の月　　之道

の脇句に「湖水の名月をゆかしみ」て思ひ立つた旅の望みを叙し、題名の『江鮭子』は琵琶湖からとれる鮭に似た淡水魚の名で、「あめこ」又は「あめのうをこ」とよばれるが、大津八町の一膳飯屋でその燒魚に箸をつけ、「やきらのは近江成けり江鮭黒」と吟じたのを集の名に用ゐたのである。之道は後に諷竹と稱し、元祿七年芭蕉を道修町の家に招いたところ、はからず發病して花屋裏で遷化した爲め、「力なきお宿申せし時雨かな」と師弟の果敢なき宿縁を手向けて悲んでゐる。鬼貫の餞別吟に「中の秋十日あまり、之道、芭蕉翁をたづね行、後のなつかしき」とある詞書で、疑問視される鬼貫と芭蕉との對談の事實なる可きを示唆する点があるので、鈴木重雅氏の質疑に答へ、その際氏に京都大學に藏する原本より筆寫を煩はしたが、『蕉門俳諧前集』には右寫本が見つからず止むなく採錄を見合せて、その後、河村蓮月氏の手を經て曲齋文庫本を借覽筆寫し今回篇外に收めた次第である。

俳諧　深川　　元祿六年板　　中本一冊

「我は集作らんとて、卷をしたることなし」と落梧の申し出を固く拒んだ芭蕉が、その捌きに成る連句四卷の發表を許したのでも、洒堂の『深川』は七部集に劣らない内容である事が解る。洒堂は『ひさご』の撰者珍碩の別号で元祿五年近江から江戸へくだり、やがて新しい流行躰となる『炭俵』の前景として、輕く事を運んで平談な附句の中に變化を求むる芭蕉の捌き方を躰得し、深川の庵中に越年して翌六年洛にのぼり、江戸の嵐竹亭で卷き掛けたまゝの十句に『ひさご』の旧同志及び『猿蓑』の作者を促して一歌仙となし、これをさし加へて開板したものである。洒．の俳諧的境地は『ひさご』から『深川』へ、さらに元祿七年の『市の庵』へと推移してゐるので、前後の二集を收めながら『深川』一部を逸するのは甚だ遺憾なので豫定書目には入つて居ないが、篇外に加へる事としたのである。『深川』の單行本は元祿六年の井筒屋本の外に元文元年江戸の西村養魚が「右深川集は累年予が持來れるところの書にして、徒に書巣に朽ん事を梓にのこし侍るのみ」と奥書せるもの、又、採茶庵梅人が西村板の燒失を惜みて「杉風叟自筆の書をもて校合し」寛政二年新刻せるものと三本あり、『續七部集』にも入つてゐて廣く流布し注釋の書も行はれて居る。

卯辰集　　元祿四年板　　中本二冊

加賀の鶴來は金澤をすこし南に隔てゝ、風雅に志ある人ゝが一聚落をなしてゐたが、その一人の楚常はをり〳〵金澤に出て北枝・句空の徒と交際し、見聞くところの俳諧を一集にせんとの企圖をいだいて空しく故人となつたので、北枝が遺稿を補訂し、句空の住む卯辰山を集名に題したのである。芭蕉の北越行脚から年も淺いので、『奥の細道』にあ

る發句及びそれに洩れたものを收めてある中に、多田の神社にての「むざんやなかぶとの下のきり〴〵す」は「あなむざんやな」の七字冠になつて居り、北枝に對する惜別の吟は

もの書て扇子へぎ分る別哉　　　翁

とあつて細道の「扇引さく餘波かな」は後に推敲したものである事などが考證される。これを「續七部集」に入れたのは蕉門の俳書としての價値を認めたからであるが、本大系に本書を逸せる事を惜み川西和露氏から採錄の勸告もあり旁〻今回同氏の藏本によりて追加し、柱によつて發句は上に、連句は下に二卷となる事が明瞭なので、本文の卷第四の歌仙四卷を別にみだしを設けて區別したのであるが、元祿五年板の『誹諧書籍目錄』にも二冊本として掲げてある。

そこの花　　元祿十四年板　　中本二冊

遠く隔り行く芭蕉のうしろ影を慕つて万子は馬を急がせ、やうやく追ひついて餞別の一封をさし出したが、行脚に大金は却つて煩ひとなる理由で押し戾されて、いよ〳〵芭蕉の人となりを床しむ「俳諧世說」の記事で、万子の謹直な人物であることが頷かれる。伊駒氏、此君庵と號した金澤の藩士で、私財を散じて蕉門の徒の貧しき竈を賑はして居たさうである。『そこの花』は万子が井波の浪化と共に支考と對座して、その「ふるき笈を擔ふて共道の一筋をまよはず」風雅の好士たるによつて、その折の歌仙をはじめ北越蕉門の俳諧を一集となす可く支考に援助して編成させたのである。「泊船集」の撰者風國がこの年七月三日歿したこと、野童が院の御所で震死したことの如き俳諧史傳の資料となるものがあり、又、浪化の翁塚記の如き『白扇集』と對照して資料的の價値の多い記錄などもある。「そこの花草稿」と題した稿本を私藏してゐたので『蕉門俳諧後集』に收める豫定であつたが、作者の名の缺けたところがあるので、加

賀上金石の藏倚太郎氏の藏本により殿田良作氏に對校を煩はしたところ、不幸氏は類燒の厄に逢ひ私藏本も灰燼となつたが、氏の好意でさらに藏氏本をすき寫しとして寄稿されたのである。和露文庫にもたしか其の上卷がある筈で、また早稻田大學圖書館に一寫本を藏するのを見たが、殿田氏のすき寫しに依據して異本はすべて參照しなかつた。

花の雲　　元祿十五年板　　中本一冊

刹那々々の氣分で對境を支配しようとする惟然坊の俳諧態度は、坊の感激性に共鳴する者があつて、中國地方に一勢力をなした事は『二葉集』の解題に述べた通りである。坊の生活の支持者であつた姬路の千山は井上氏、春暑庵、又は丹頂堂の号で知られ、元祿九年『印南野』を編集してゐるが、そのころは來山派の淸雋な調子で跋もまた來山に囑して居るから、惟然坊との交際は『印南野』以後の事であらう。『花の雲』は惟然坊の信者となつた千山の主著で、詼笑と題した歌仙一折及び妙國寺興行の歌仙一卷に四季の發句を添へてあるが、別錄した雜体の發句は誠齋の序に「蓋シ中古撰ベル古今和歌集ノ雜躰ノ之中ニ有ルハ詼諧体一則チ今日ノ之詼諧モ亦タ可レ有ニ雜躰一也必セリ矣」とあるように、惟然の特に主張するところで「さあ／＼／＼癸でサア、盃を　至樂」などは好く惟然調を擬したものといひ得る。本文は藤村作教授の諒解を得て東大酒竹文庫本から筆寫したのであるが、筆記者の判讀を難んじたところ多いので更に川西和露氏の藏本を以て校正して置いたものを、又ゝ和露文庫本を借覽して誤寫誤讀を訂し得たのである。跋の烏落人は惟然坊の別号で、板下も坊の自筆らしく思はれる。

庵の記　　寶永四年板　　中本一冊

支考の歩いたあとを廻つて彼の弟子を手なづけた爲め其の怒を買つた露川は、もと〳〵言說の徒でなかつたから支考のような影響を後に及さなかつたが、生前諸國を行脚して多くの連衆を持ち、支考に劣らぬいろ〳〵の著述を殘してゐる。許六の評に「師の國より出たる人とて、風雅の手筋もよし」とあるように伊賀友生の人、尾張名古屋に出て藤屋とよぶ珠數師の養子となり澤市郎右衞門と通稱したが、元祿二年『花虛木』を著してゐるので俳諧に志したのはそれ以前であらう。『庵の記』は露川四十五の時、乘空和尚の授戒によつて剃髮し、月空庵を構へて全く隱居生活に入る事になつた際の選集である。しかし、

むづかしと剃てのければ又寒し　　露川

この告白では全く解脫者となる可く危ぶまるゝ處あるように、隱居して世業に煩はされざるを幸ひ行脚廻國を思ひ立ち一派の俳諧を弘通した結果、支考との勢力爭ひなどを惹き起したので、露川も亦一個の野心家であつたこと疑ひない。露川の末裔は名古屋玉屋町に二百年來の旧家として現存し、私もしば〳〵立寄つて露川の遺稿を見せてもらつたが、流石に旧家だけあつて一部も散佚せず大切に保存されてゐる。

鵲尾冠　享保二年板　中本三冊

開卷第一の「問ず語」に見える「私は越路の者に候間、名も越人と申候」の一語は熊本藩を勘當された作分利某なるが如く誤傳された越人の生國を明確にし、其の古き寃をそゝぐ正實な記錄として聽從しなければならぬ。越人は浪人こそして居たが、旧說のような不身持とは思はれず「貧乏にて學文など申事不ㇾ存」といふ正直な言葉。又「しらぬ字は節用集にて見、それになくはへば其分にて置ゆ」は衒學者に對する頂門の一針である。然も越人は決して無學の輩

ではなく、内外典を理解してその句を詞書に正しく引用してゐるから、當時としては寧ろ物識の一人であつたらう。『不猫蛇』で支考を難じた文章では傲岸な人物に見えるが、「問ず語」の頗る謙遜に卑下して、芭蕉・其角・杜國を思慕する言葉で見ると案外篤實な人間であつたらしい。「鵲尾冠」は越人一門の誹諧を收めたのであるが、歳旦の三ツ物に芭蕉の發句へ其角の『類柑子』から持つて來て脇を附け、杜國の舊作を第三に添へてあるのは特異な趣向である。越人は漢學の師個齋より詩にその例があつて集句と稱する事を聞き「我いかでそれを知らんや」と驚いてゐる如く偶然の暗合であらう。集中の連句は古俳人の發句による脇起しの躰であるのも、越人のそれらの人を仰慕するあまりでこゝにも彼の篤實性のあらはれを窺ひ知られやう。本文は寫本によつたが、和露文庫の上中二卷にて校合した分は誤寫を訂して原本の體裁を完全に傳へてゐる筈である。

西國曲　享保二年板　中本七冊

旅せねば却つて憔悴するといはれた其の旅行癖は、月空居士としての聲望を諸國に高くする手段の一つともなるので、露川は常に俳諧遍路に身を托したのであるが、同行者燕說が身の廻りを世話して、すこしも屈托なきを得させた勞苦も亦察してやらなければならぬ。燕說は伊勢村松の松林寺住侶である。無外坊と号して蕉門の信者となり、丈草の爲めに『竜が岡』の一集を追善し、露川の門に歸依してからは絕えず其の旅行に同伴して居たのである。『西國曲』は露川が西國十五個國を行脚した際の收獲であるが、其の筆錄は燕說の手を藉りたので、素笛・梅風・草風・氷蟲の四人が運訂校書を分擔した事になつて居るが、事實は燕說一人の編集したものであらう。凡例によると「西國曲」の外題は行脚した國々の方言を詠み入れた一國一句を作者不知として記錄してあるから名附けたので、「其國の風流也」とある

國ぶりの意味である。卷の一・二は紀行を露川と燕說の發句の詞書としたもので、近江に正秀の竹青堂をたゝいて閑談し、京に入つて「二千里をかゝえて連衆めぐりは無用」と吾仲亭に立寄つたのみで、大阪に野坡を紗方園にたづねて久濶を叙し、享保時代遺存する蕉門作者の消息を洩らしてゐるが、遠く長崎に卯七と對談した事なども考證材料となり得る。卷の三・四は國曲の部、卷の五・六は諸邦の發句を四季に類別したもの、卷の七は尾張・伊勢の作者と興行した連句を收めたのである。跋の裏枚は江戶蕉門の故老杉風の号である。本文は私藏本三・七の兩卷を缺き寫本で補遺し、和露文庫の完本を借用して校合したのである。

北國曲　享保七年板　中本七冊

露川・燕說の北國廻り中の俳諧を記錄したもので『西國曲』の姉妹篇と見られるが、編輯の體裁はやゝ相違して卷の一・二を諸國作者の發句篇に充て、卷の三・四は『西國曲』と同一の趣向で國々の方言を挿入した發句をあげ、且つその國ぶりを紹介し、卷の五・六は紀行の部となり、卷の七は「誹諧歌仙句解」と題して越後高田の卷耳亭連句に對する露川の評語を記し、終りに十一卷の百韻首尾を附載してある。全篇燕說の筆錄したものであらうが、撰者を卷耳としたのは歌仙句解を載せてある點から考へて、卷耳が特に出板費を負擔した爲め、撰者の名義を與へて喜ばせたのであらうと思はれる。時代は蕉門の凋落期に相當するので、北越に聞えた作者は大方故人となつて、越中の井波では浪化の遺子桃化が父の俳系を承けて露川のために送別辭をものしてゐるのが珍らしく、路健・林紅の徒がなほ生存するのみである。加賀には山中の桃妖が健在であるが、千代はやうやく心を俳諧に染めたころであらうか、「池の雪鴨あそべ連明てあり　女千代」の一句がはづかに採錄されてゐる。その他興味を喚られる記事は『露川責』の論爭を起した支考が同

じく北越行脚中で露川の金澤に滯在した時、越中の石動にあつて逢はず、支考より飛札到來した返事に「此度菓子一箱、貴坊と因縁三十余年、初ての音信不レ淺存ゆ」といふ一條である『露川責』は享保八年の筆であるから、その前年には如才なく菓子などを送つて「初ての音信」を通じながら、翌年はたけ〴〵しく喧嘩を吹きかけた支考の心事には解し難いところがあるが、その爭ひの此の年の行脚の鉢合せにあつた事が思はれて面白い。『西國曲』及び『北國曲』を通じて見た露川の俳諧は甚だ低俗であつて蕉門の閑寂境を守るものでない。支考と同じく俗談平話躰に墮落したものである。

桃舐集　元祿九年板　中本一冊

乞食路通として甚だしく人に貶せられるが、芭蕉がその心生活のどこかを蝕まれて居たであらう漂泊的精神を徹底的に生活したのは路通である。芭蕉の旅には必らず落ち着く目的地があつたので、行方知られぬ漂泊者の生活とはいひ難い。惟然坊の如きは單なる放浪者に過ぎない。ジプシイのような漂泊生活の躰驗者は蕉門中路通一人あるのみである。路通の「いぬ〴〵と人にいはれつ年の暮」は決して芭蕉の「住みつかぬ旅の心や置火燵」のゆとりある句と同視されない深刻者を持つてゐる。路通の心境は『勸進牒』によつて又『芭蕉翁行狀記』によつて窺知されるが、從來湮滅したものと思はれて來た其の著『桃舐集』の存在は、たゞに漂泊者としての彼を見る上からばかりでなく、馬琴の『簑笠雨談』の如き俗說に誤解された路通の生涯を研究する爲めにも重要なので、金澤の殿田良作氏が原本を藏架さるゝを聞き、氏に本大系への覆刻を懇望して快諾を得、豫定の書目以外ながらこゝに收錄したのである。『桃舐集』の名は路通の序に「爰に俳仙桃青翁、又一夥の桃を得て生涯の賞翫とす。其のあまりを舐る類ひあまたなれど信の味をしるものなし」とあるので解るが、選集の發企者は肥の長水であつて、京に於て路通と相知り彼を援助して本書を編纂させた

のである。小野のお通の發句、その小傳も珍らしいが、芭蕉の丹野亭に於ける歌仙は元祿本に載するものを知り得なかつたもので、本書によつてそれが確められたのであるから、これ亦新しい發見の一つである。全篇連句五卷、路通の接近した作者の發句を掲げたもので量としては一小冊子である。

笈のわか葉　正徳五年板　中本二冊（の一）

十八里の滄波を隔てゝ芭蕉の望見した佐渡が嶋に渡つて『摩詰庵入日記』を著述した雲鈴は再び北越に赴き、高田の旅寓にある涼菟の老杖をたすけ木曾路を越えて伊勢に送り屆け、それより近江の國に入るまでの旅行記である。雲鈴は吉井氏、摩詰庵は其の号で許六から蕉門の祕書二卷を授與された人である。芦本の序に「佐渡・越後の國の間に漂泊する事はたとせばかり」とあるが初度の旅は元祿十三年であるから、ことし正徳五年までは十六年である。かの許六の癩病說は涼袋の『芭蕉翁頭陀物語』に加賀の万子が屛風の中に入つて對談し、「屁欠落て酒咽にもる。臭氣人にせまつて――」とあるのが原據であるが、雲鈴は「五老井にいたりて菊阿佛に謁す。」として許六が「なつかしや勸學院のほとゝぎす」の發句に就いて自讃大笑した事を記してゐるのみか、許六の歿するその年の事になるので、頭陀物語の記事に疑問が起つて來る。――原本は帝國圖書館に一冊よりないが、柱に上とあり、下卷の別に存す可きであつて類本に接しない爲め、止むなく其の上卷のみを覆刻したのである。

その濱ゆふ　寶永二年板　中本一冊

嵐雪が同行七人で伊勢の太廟に參詣した紀行で、旅程五十日にして大阪に出て、江戸の連衆序令に向け、嵐雪・朝

叟の渾名で書き送つた事に編集されてゐる。嵐雪の著書は大部分覆刻されてゐるが『その濱ゆふ』『或時集』の二書は未刻なので、今回和露文庫本により『その濱ゆふ』だけを本大系の篇外に收めたのである。貞享四年板の『若水』はいまだ發見されない。其角の著書は全部現存するがそれは明治以前再刷本が普及して居たからで、嵐雪のものは『其袋』及び『若菜』の二集の再刷本があるのみなので、『若水』の如き体裁・內容共に不明な散佚本を生ずる事になつたのである。『その濱ゆふ』も現存本は稀覯のものであるから、こゝに覆刻して置く事は後の研究者の爲めにも意義ある仕事であらう。これは嵐雪一人の著書に限つた事でないが一言して置く。紀行に添へた『らくがき』の五吟歌仙は嵐雪一行の遍歴した名所を詠み入れたのが、老熟した技巧の存するところであつたのであらう。

附記、校正は筆寫原稿によつたので、「おほやけより奉行ありて」は「おはやしより」とあつたのを多分「おほやけ」の誤寫だらうと訂正したのであるが、校了後再び和露文庫本を借覽するとやはり「おはやし」であつた。疎忽な訂正を悔ゐてゐる。

ばせをだらひ

享保九年板　　中本一冊

豐後日田の西陲に旅寓しつゝ京阪の蕉門と絕えず交渉を保つて、多くの俳書を編集した朱拙は一寸疑問の人物である。阪本氏、四方郎と號して居たので、その人の在否は問題でなく、彼が芭蕉に直接師事したとも思はれないし、又一說の正秀門とするのも確證あつての事ではないので、朱拙が蕉門の知名な作者と交際して西陲に一派を構へてゐた事それが一個の疑問なのである。朱拙がどういふ關係で蕉門に重視されたかはさて措いて、純然たる蕉門の徒として取扱ふのも一問題なので、本大系にはその著を一冊も採らなかつたが、篇外として『はせをだらひ』を加入させる事としたのである。『ばせをだらひ』は筑前飯塚の古隣が發企者で朱拙は實際の編集に携つたのであるらしく、集中「芭蕉

先生前句附一は他に所見ないものである。芭蕉の發句として掲げた「布子着て夏より著し桃の花」は支考、「梅が香や通り過れば弓の音」は毛紈、「東路の毛髄耻かし床すゞみ」は一鉄の作を誤傳したので、それから推して絶對の信用はなし難くもあるが、「此わすれ流るゝ年の淀ならむ」は『葛の松原』に芭蕉の發句とあるが、素堂の作の誤であると註記してあるのは信じてよいようでもある。原本は帝國圖書館本により、更に和露文庫本で誤讀の判明した個所もあるが、校了後でさし換をなし得なかつたのは殘念である。

野坡吟艸　寶曆九年板　中本二冊

『元祿名家句選』に入れる筈で校訂用の善本を得られなかつたので見合せたが、川西和露氏の完本を入手されたものに據つて、その後校合をなし得たものである。野坡一代の發句を京都の門人風之が編輯し、坂行に着手するに及ばず歿したので、その子文下が遺志を承けて風之の豫選句の中から九百三十餘句を採錄し前編として出板したのであるさうだが、後編は遂に開板されなかつたらしい。野坡は『炭俵』に輕みを以て稱せられ、芭蕉の晩年その輕みが新しい流行躰となつたが、それは連句の技巧上の問題であつて、俗調として排斥さるゝ「長松が親の名で來る御慶かな」のような發句を輕みと評するのでない。『野坡吟艸』には近世月並調の卑俗な趣向に近い句の多い點は否み難いが、眞に閑寂な蕉風境に入つた句作もすくなくはない。『炭俵』のみで野坡の句品を評隲するのは公平な見解ではないと思ふ。野坡の輕みを安易に評價する者は、野坡吟艸』を再讀して、連句の輕みの必ずしも發句と同一の標準となる可きではない事を反省してよからう。野坡の俳諧は元祿以後、大阪に無名庵を移してから一層通俗味を帶びるようになつたが、流石に蕉門屈指の作者なので、一概には評されない特殊な持味がある事を主能したい。

俳諧御傘

萬治二年板　　横本十冊

貞門の俳諧は連歌の制式に基くものでないが、傳統的規約を悉く無視する事を難しとしたので、俳諧の式目として殊に前句に對しての指合や去嫌ひなどの點まで連歌より寛大にす可きかゞ問題とされ、俳席に於て其の爭論が絶えない爲め、貞德が連歌新式に準據して一々の言葉に就き其の制禁を定めて、いろは別に排列したものである。『御傘』の題名は「うへさまのおからかさ」には「あめが下にさしあひする人」のなき爲めに選ばれたので、「文字すくなにてきゝもよければ御傘をこゝによみて」おからかさを「ごさん」と音讀した理由が序文にあるので明瞭である。貞德の典據とした連歌新式は應安五年、後普光園攝政二條良基の制定したもので、貞德は新式の條件を大にゆるめたのであるが木食上人の『無名抄』の說に事毎に反對說を述べてゐるので、恰も『無名抄』の難陳書なるが如き觀を呈してゐる。蓋し指合とは前句に「いづこ」とあらば類似語の「いづち」は五句を隔てなければ前句の「さはり」となるといふ事である。去嫌とは前句に「車」があれば同じく乘物である「馬」とか「舟」とかは二句去らなければならぬ。又、戀や無常やは表八句に嫌つて用ゐないといふ意味である。たとへば『御傘』の「いにしへ」の註に「連に一座一句の物なれば誹には二ある也」といふのは、「いにしへ」といふ言葉は連歌の制式では興行の席上一句より詠んでならないが、俳諧にはその掟をゆるくして、席上二句までは詠んでもよいといふのである。「池、たゞ一、名所に一」とあるのも同然で、池は一座に一句より用ゐてならぬが、名所の池とすれば今一句詠んでも差支ない事になるので、甚だ煩雜な規定であるが、熟讀すればさうした理由の必要を領かれない事もない。板木は萬治以後たび〳〵模刻されてゐるので文字に異同もあるようで、底本としたものも後刷本らしく重複した語句が發見される。本文にはその都度傍註を施して誤讀の虞れなきように注

意した。

増補はなひ草

延寶六年板　小本一冊

立圃は貞德の『御傘』より以前、寛永廿年俳諧の指合及び去嫌をいろは別にして『花火草』を編纂出板したのである初板の出てゝ後それを訂正增補し、寛文四年『花火草大全』を脫稿したが、其の開板は延寶四年であつて『御傘』の規定も參照してゐるらしいが、兩者の間に意見の相違した個所もある。本書は『花火草』及び『花火草大全』とは別本で、立圃の歿後その他『花火草綱目』の類も現はれて、孰れが正本なりやに迷ふ者があるので、「立圃、後にあらため置れたる證本を以て」誤られたる個所を訂し、『御傘』の說を附記したのであるといふ。『御傘』には一語づゝ、より詳しく解釋してあるが、俳席には却つて簡略な此の『はなひ草』の方が便利として重寶されたらしい。『御傘』になき人倫・夜分・戀・居所・山類・水邊の用語をあつめて、賦物及び和漢の大要を註し別に季寄を添へてあるので、貞門以後の俳人にも使用されて流布本もなか〳〵多いようである。（勝峰晋風）

日本俳書大系 篇外 蕉門俳諧續集 目次

筆蹟

其角・路通——短册　越人——書翰

江鮭子（あめこ）

之道撰

（江鮭子）

江鮭子と名付るまつたく子細は。湖水の名月をゆかしみ。貧家にいとまをうかゞひ得たり。馬に乗力さへなければ。四文の草鞋を踏ンで十六里。八町の十文食に小茶のはしらかしあめのやきもの。腹のふくれたるまゝに

やきものは近江成けり江鮭魚

此句をもふけてそこらの人々の云捨をひろひ寄たるものなれば也

蟻門亭　槐之道

元禄三九月上旬

三吟

白髭ぬく枕の下やきりぎりす　翁
入日をすぐに西窓の月　之道
廿塩の鰯かぞふる秋のきて　珍碩
苅そろへたるかしらこの柴　翁
河風に竹の筏のから〱と　道
麦の小うねをたゝく冬空　碩
齋過て一むれ歸る細手道　翁
顧ほそや戀聟の顔　道
どし織の帯美しく脇とめて　碩
久しき銀の出る御屋しき　翁
山公変の埒の明たる初嵐　道
加太谷より踊り躍けり　碩
月影に鬭の芦毛を追かけて　翁
鯛も鰆もふみすべりつゝ　道
ものぐさも布子の重き春風に　碩
又も彌生の家賃たゝまる　翁
時〱に花も得咲ぬ新畠（アラハタケ）　道

薑茶わかして雲雀かたむく　碩

二句亂

杯立て干瓜辛き雨氣かな　及肩
敷居ふまへて戸をはづす月　珍碩
早稲藁をすぐり仕まへば用もなし　之道
人はしり寄辻の放下師　昌房
膳棚も淋しく見ゆる田舍旅　正秀
もがりつぶれし頃日のかぜ　探志
畚提て船のこけらを拾ふらむ　碩
はすね頭の髮もたばねず　道
居ならぶ増水時の夕まぐれ　房
神鳴おぢる娘かはゆき　秀
掛て置合羽の雫たりやまず　道
肌寒〱と博奕初める　碩
月の前酒にせはしき近喝餌　秀
茶を蒔なりと寺の傭人　志
上はりに鷄盗む臼の陰　房
口和にむきし霜の朝あけ　肩
どし〱と板椽ぬぐふ花盛　碩
荷ひつれたる春の入草　道
幅廣き砂川渡る長閑さよ　志
羽織そろゆる講參り也　肩
行にして朝起ならふ五六日　道
藥を休む喰もの〻味　翁
母親の仕立て見する嫁入夜着　秀
戀にさし出る旦那山臥　房
江戸棚を持て在所の門がまへ　碩
麥を煎香に咽のかはきし　道
脛(股カ)引の間を蚤にせゝられて　志
宵の小雨に眞竹生出る　肩
森〱と圍居の伊豫簾もる月に　秀
こゝろを告る秋のひよどり　房
山畑の木練色づく風の音　翁
石地の坂を歸る宮坊　碩
情強き聾者の大工咄して　道

かたぎを殘す奈良の纉(セン)上　眉
野の廣さとし〴〵花を植ひろげ　秀
がら〳〵とする春の曙　碩

七吟　落英

秋風や山田を落る水の音
向ひの岨に柹合す猿　蚊夕
晝の月見るに其まゝ鼻引て　忠清
寐ても居られぬ船心なり　光延
淋しさは口塩もなき夕まぐれ　舞郷
硫黄煎香にさし瞼(ノゾ)(盼カ)く家　是計
假初の鷹の御供に召れつる　之道
常も戀めく京のもの云　筆
行燈の影さへ賴む思ひ寢に　蚊夕
つかへ持身へ響く神鳴　落英
くじ取て豆腐を買に下ル坂　光延
いつ喰滿ん煤の玉味噌　忠清
儀は濟て讀くせわろき文の道　是計

只によき〳〵と杉の村立　舞郷
杜宇(ホトヽギス)得きかで月も明はなれ　英
亭主自慢の風呂を一息(イキ)　道
男ぶり少謇(ドモル)も花なれや　清
契(チギリ)初しは壬生の念佛　夕
住吉の汐干も塩の干た計　郷
眞砂の數か哥のよみかた　延
便有たび〳〵貰(モラ)ふ觀世より　道
いかつがましき秋の初風　計
一つ〳〵踊つぶるゝ月の色　郷
新酒をとに下戸の平(ヒラ)强(シイ)　英
冬紙子夏は大かた裸(ハダカ)にて　夕
他をそしりつゝかつく唐物　清
小便に立とみえしも歸りけり　延
ゆふつけ鳥の告る食時　道
隱氣成人と乘合やぐら馬　計
物どまゝに行ぬ世の中　郷
錢の穴是も次手に丸からて　英

問ず語りに小僧夜更し　　夕
御持鎗さや蝙蝠の打落す　　清
　花の嵐にひづむ假小屋　　延
疵のなひ壹歩揃る春の色　　道
　蜆たづぬる足輕の顏　　計

獨吟　　之道

蓮葉のうらにも降や秋の雨
　鳴所よし蜩のこゑ
新蕎麥にとをかきしは辛味にて
　長き話しに月は入けり
踏ところ眞菰莚やくぼむらん
　炭斗る手をぬぐふ水鼻
干佗ててゝら凍たる風吹に
　誰に添寢の小冠者夢見る
新敷木地の文庫に錠おりて
　形はる窓に夕日さし込
雁がねの空鳴渡るうそ寒き
　出家立てのはじめての穐
唐人の名月諷ふ夜もすがら
　茶ものがたりや莨菪(タバコ)編〳〵
むご〳〵と猫の產(ウミ)巣の破れ簑
　入時見えぬ機のへをもり
ういつらひ人に逢ばや花の比
　薺(ナヅナ)の音もなせば辻占
柴の戸の軒にかいよる春の雪
　石燒けぶりむねにむかつく
今はたゞ醫師もむづかし道心者
　寢ざめ〳〵に探る麻姑手(マゴノテ)
買置の棺に鼠あれやまず
　能治まりて續く代久し
伏芝に晝顏生(ハエ)し風の音
　燒酒のむに氣味よかりけり
筑前や九十九兀(ハゲ)の共獨
　已がちんばを云ぬ針立
灯燈や月も出かゝる姑(シウト)入

戀の障や宵の稲妻
南天の實をこぼしたる疱相さよ
旅人などか馬のあし音
海老賣のおかしき顔も今日は來ず
目を入替し双六の簺(サイ)
賑はしき伊勢の湊の春の花
桃の節供や二見はまぐり

雨吟

住吉の市の戻りや秋の風　光延
勝間(コツマ)新家は月の初夜時　之道
借廻る踊太皷の差合て　仝
正〳〵虚言の云れざりけり　延
中〳〵に盛つぶされて二日醉　仝
碁は負こして錢は皆にし　道
隠居田の植付見舞ふ夕間暮　道
茨堤をもどる烏さし　延
爰丹波あれやそのべの城ならん　仝

藁屋ならべて朝日白〳〵　道
灰焼の團子くれけり茶の塩に　仝
非時早かりし秋の寒空　延
本妻に妾を直す月の色　仝
戀には弱き相撲取也　道
照暮や日深に着たる肥前笠　仝
跡をせらるゝ(かか)水風呂の時宜　延
しかられてかくにはあらき花鰹　仝
具足の餅をひらく長閑さ　道

中の秋十日あまり、之道、芭蕉翁をたづねて行日、後のなつかしきを　伊丹　鬼貫

橋よりも戻る心を瀬田の奥
空いそぎする秋の船衆　之道
後戸の月の有間に食喰て　仝
膝へ飛しは青(アマ)蛙(ガエル)なり　貫
羊蹄のあたりや風の吹ぬらん　仝
丹波太良か聳(ソビク)晝時　道

第三まで

梓柿や鞠のかゝりの見ゆる家　珍碩

秋めく風に疊干門　之道

有明に湯入中間の荷を付て　翁

發句

猪もともに吹るゝ野分かな　尾　翁

吹風に唇うるむ木槿かな　加劦　越人

秋風に羽織はまくれ小脇指　加劦　北枝

月すむや宝のやだ船是一つ　京　去來

終夜や野分に落し鬼瓦　大坂　安枝

霧雨の降もしきらず庵の内　同　之道

名月や大津の人の人がまし　大津　尙白

名月や雷のこる柿の末　膳所　珍碩

宵〳〵の水増水や秋の風　大津　乙劦

宵暗や狐火に寄虫の聲　膳所　正秀

名月や寺の祕藏の茶木原　同　昌房

帷子を取置秋の物がたり　同　探志

茶袋や盆かたびらのたちはづし　大坂　之道

餞別

色黑に成をいとふな秋の月　同　蟻國

七月は船の中にも踊かな　同　古客

名月に人あをのくもうは氣哉　同　三樂

朝露もまだねむげ也馬の上　同　之道

古寺やものにかまはで秋の月　同　緣山

月見にはなどこもらずや惡源太　膳所　珍碩

烋風の吹わたりけり人の顏　伊丹　鬼貫

指さしてのびする兒の月見かな　大津　知月

さし出しな稻も彌六と名の付に　大坂　何處

おさへたる鰻よしばし月の影　大坂　光延

秋風のまだきびしかれ須磨の浦　同　舞鄕

秋風や未音もなし升落し　同　蚊夕

更るほどすゞむしの音や鈴の音　同　之道

翁に越路の簑を送りて

白露も未あら簑の行衛かな　加劦 北枝
行雲の移りかはれる殘暑かな　同 魚素
秋の日や爰らは障子張直し　大坂 之道
籠馬にすぐり藁する月夜哉　膳所 珍碩
名月や堅田の庄屋先に立　大津 千那
名月や雪に名をとる山の上　同 旭芳
引まけて草に首有きり〳〵す　同 乙劦
蜂櫻の紅葉皆ちりて　大坂 之道
跡先に生れて同じ月見哉　同 素立
照月の下にせはしや虫の聲　同 扇山
そよ〳〵と風に吹るゝ月見かな　同 一空
なと(おつ)むるか月の別れを朝皃の　大坂 落英
礒ひとり能染ものゝ匂ひ哉　膳所 珍碩

大(太)守より白山の月とある題を給りて

しら山や岸につかへて三かの月　加劦小松 塵生
屋根葺(フキ)の日も朝皃の唉にけり　千那
かいとりや木綿鹿子の烋まつり　之道

追善

野原哉しばし名に呼花薄　是計
夜半より後は隣の月見かな　加醉
十五夜の月に打出の濱いづこ　之道
竹の子の塩出す秋の夕かな　玉子
秋風や横にふかれて渡し舟　忠清
澁柹も次第に色の付にけり　桑 攝門受
月晴てさし鯖しぶき今宵哉　京 加生
石山の石の形や烋の月　鬼貫
名月や礒邊〳〵の鵆の聲　之道

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

俳諧

深川

洒堂撰

俳諧深川

壬申九月に江戸へくだり芭蕉菴に越年して、ことしきさらぎのはじめ洛にのぼりて、ふろしきをとく。

洒堂

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子　芭蕉
提ておもたき秋の新鍬　洒堂
暮の月槻のこつぱかたよせて　嵐蘭
坊主がしらの先にたゝるゝ　岱水
松山の腰は躑躅の咲わたり　洒堂
焙爐の炭をくだす川舟　芭蕉
祝ひ日の冴かへりたる小豆粥　岱水
ふすま摑むで洗ふ油手　嵐蘭
掛乞に戀のこゝろを持せばや　蕉
翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家　堂
寒徹す山雀籠の中返り　蘭
正氣散のむ風のかるさよ　水
目の張に先づ千石はしてやりて　堂
きゆる斗に鐙おさふる　蕉
踏まよふ落花の雪の朝月夜　水
那智の御山の春遲き空　蘭
弓はじめすぐり立たるむす子共　蕉
荷とりに馬士の海へ飛びこむ　堂
町中の鳥居は赤くきよんとして　蘭
吹もしごらず野分しづまる　水
革足袋に地雪踏重き秋の霜　堂
伏見あたりの古手屋の月　蕉
玉水の早苗ときけば懷しや　水
我が跡からも鉦鼓うち來る　蘭
山伏を切ッてかけたる關の前　蕉
鎧もたねばならぬよの中　堂

付合は皆上戸にて呑あかし　蘭
さらり〳〵と霰降也　水
乗物で和尚は禮にあるかるゝ　堂
たてこめてある道の大日　蕉
ウ
楪(ゴ)揚ゲて水田も暮る人の聲　水
莚片荷に鯨さげゆく　蘭
不斷たつ池鯉鮒の宿の木綿市　蕉
ごを抱へこむ土間のへつゝひ　堂
米五升人がくれたる花見せむ　蘭
雉子のほろゝにきほふ若草　水

草庵の留主　杉風

冴(サヘ)そむる鐘ぞ十夜の場(イ本(庭))の月
しのび返しにのこる檔(ダレ)　酒堂
馬取の䢊(ジ)存(セ)乗行霜ふみて　曾良
朝のいとまの提たばこうる　石菊
人聲も御藏出る日の賑(ニギ)ヤかに　桃隣

えだ垂(タレ)さがる(イ本(のり))松は久しき　宗波
ウ
中形の半着ものも旅馴て　筆
共まゝつくる鱠一皿　風
蓮の葉はちひさき岸の杜若　堂
地を摺ばかり駕籠の振袖　良
五六人天臺(台)坊主いろめきて　菊
太刀なぎなたの光る塀ごし　隣
月出て八つの太鼓を打仕廻　波
蒲團の時宜のあはれ秋の夜　堂
玉子吸顔もおかしき濁り酒　風
壹歩いれたる細布(サイフ)はなさぬ　菊
花の春小田原陣の前の年　隣
陽炎もえてかはる川筋　波
名
能因が身は留まらぬ雁の聲　良
釋迦に讃する壁の掛もの　風
眞木(マキ)(イ本(薪))一駄なくても年は取れけり(イ本(取れにけり))　堂
節季ゆさむき雪の編笠　良
出かゝりて茶の湯の客を誘ヒ合　菊

畠をへだつ吉田岡崎　隣
雨がたき空に月澄鰯雲　波
迎へかねたる駒のくたびれ　堂
ひやゝかに中稲の花を吹おとし　風
山の内裏の哥もしまざる　菊
糸の塵ほそき指にて撰分る　良
下着の紅に顔のかゞやく　波
ウ
祭見る向ふの見世の竹すだれ　隣
皆ばら〳〵とひらく傘　風
あの男やらじと路(イ本(道))をたてふさぎ　堂
駿河の田植ゆり輪いたゞく　良
長持に注連ひらめかす花の旅　菊
雲雀鳴きたつ聲も濁らず　波

二日とまりし宗鑑が客、煎茶一斗米五升、下戸は亭主の仕合なるべし

洗足に客と名の付寒さ哉　洒堂
綿館双ぶ冬むきの里　許六
鷦鷯階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉
春は其まゝなゝくさも立ッ　嵐蘭
月の色氷ものこる小餠賣　六
築地のどかに典藥の駕　堂
ウ
相國寺牡丹の花のさかりにて　蘭
椀の蓋とる蕗に竹の子　蕉
西衆の若黨つるゝ草まくら　堂
むかし咄に野郎泣する　六
きぬ〴〵は宵の踊に箔を着て　蕉
東追手の月ぞ澄きる　蘭
青鷺の榎に宿す露の音　六
ふたりの柱杖あと先につく　堂
乘掛の挑灯しめす朝下風　蘭
汐さしかゝる星川の橋　蕉
村は花田づらの草の青みたち(イ本(立チ))　六
塚のわらびのもゆる石原　堂

薦僧の師に廻りあふ春の末　蕉
今は敗れし今川の家　蘭
うつり行後撰の風を讀興し　六
又まねかるゝ四國ゆかしき　堂
朝露に濡わたりたる藍の花　蘭
よごれしむねにかゝる麥の粉　蕉
馬方を待戀つらき井戸の端　堂
月夜に髮をあらふ揉出し　六
火とほして砧あてがふ子共達　蕉
先積かくるとしの物成　蘭
うつすりと門の瓦に雪降て　六
高觀音にから崎を見る　堂
今はやる單羽織を着つれ立(イ本(立テ))　蘭
奉行の鑓に誰もかくるゝ　蕉
葭垣に木やり聞ゆる堀の内　堂
日はあかう出る二月朔日　六
初花に伊勢の蚫のとれそめて　蕉
釣樟若やぐ宮川の上　蘭

支梁亭口切

口切に境(イ本(堺))の庭ぞなつかしき　芭蕉
笋見たき藪のはつ霜　支梁
山雀の笠に縫(イ本(逢))べき草もなし　嵐蘭
秋の野馬のさま〴〵の形　利合
旅人の咄しに月の明わたり　洒堂
大戸をあけに出る裸身　岱水
雛のたま子の數を產そろへ　桐奚
あらたに橋をふみそむる也　也竹
綠さす六田の柳掘植て　梁
掛菜春めく打大豆の汁　蕉
細なる雨にもしほる蝶のはね　合
鐘かなぐる空坊の椽　堂
ばら〳〵と錢落したる石のうへ　水
酒で乞食の成やすき月　蘭
行雲の長門の國を秋立て　堂
露に朽けん一腰の鏽(イ本(銹))　梁
西日入ル花は庵の間半床　竹

萱の二葉のもえてほのめく　渓
名
みやこをば去年の行脚に思れて　合
兒にまたるゝ釋迦堂のくれ　堂
咲初て忍ぶたよりも猿すべり　蕉
鳥のなみだか枇杷のうすいろ　蘭
凡卑して鎖すともなき旅の宿　渓
淸げに注連をはゆる社家町　竹
日盛に鰡賣聲を夢ごゝろ　堂
みよしの房の双ぶ川口　梁
水つきの稻のしづくに肩重し　合
はえ黄みたる門前の坂　蘭
皮剝の物煮て喰ふ宵の月　蕉
上毛吹るゝしろほろの鷲　渓
ウ
谷つたひ流しかけたる竹筏　竹
太刀持ばかりふたごゝろなき　堂
物音も籭靜におろしこめ　蘭
盆に算ゆる丸薬の數　梁
花盛御室の路の人通り　渓
麥と菜種の野は錦也　合

九月廿日あまり、翁に供せられて、淺草の末嵐竹亭を訪ひて、卒に十句を吟ず。興のたえん事をなしみて、洛の舊友をもよはしそのあとをつぐ

苅かぶや水田の上の秋の雲　酒堂
暮かゝる日に城かゆる雁　嵐竹
衣うつ麓は馬の寒がりて　芭蕉
蕢草けぶる道の霧雨　北鯤
古戰場月も靜に澄わたり　嵐蘭
しばし見送る我客の笠　堂
ウ
さし汐の門の柱に打よせて　竹
窓を明ればに壁に入虹　蕉
巻藁に肩休まするはづし弓　鯤
水仙得たる房州の傳手　蘭

餅つきの釜まはし出ス雪の上　膳所 昌房
場(イ本 庭)にかさなる鰤の桶漬　正秀
小作りな内儀(イ本 義)かしこき初あらし　臥高
鶏(トリ)も鳴(イ本 啼)なと月待の戀　探志
懐にこぼす泪のやゝ寒き　游刀
とっていたゞく三方の熨斗(イ本 三寶の尉斗)　野徑
花の影(イ本 陰)射(ヨ)來す鏑(カブラ)防(フセ)ぐらん　京 去來
鐙にはねのあがる春雨　仝
暖に遊ぶ狐の耳かきて　野童
池の小隅に芹の水音　仝
燒付る蛤茶屋の朝の月　史邦
鳳に賓のいる賤が破れ戸　仝
老僧の帽子つれたる秋の昏　景桃
太鼓聞こゆる源太夫の宮　仝
六月は綿の二葉に麥刈て　素牛
たばこ飲子の北座淋しき　仝
揃(アヤ)をり(イ本 おり)の腰にさげたる操の總(フサ)　大津 之道
時雨に馬を下りる冬の日　仝

枝作る松に階子(ハシゴ)をさしかけて　車庸
二軒並で家のあたらし　仝
聞(ウ)へよき加賀の藏本ゆるさるゝ　ぜゝ 探志
女夫かたぶく木庵の禪　游刀
鎌入れぬ山は公事なき花の春　正秀
長芋の芽のもゆる赤土　臥高
里裏のすゞみ起せば去年の雪　野徑
かすむ夕べの鼠とる犬　昌房

松の中

梟の鳴やむ岨の若菜かな　曲翠
おぼろの月の椿つら〳〵　洒堂
新饗子先二疊敷く彌生來て　同
赤手(イ本 すっこ)すりたる馬士の詑(イ本 侘)言　翠
晴かゝる節句の朝の[illegible](イ本 合)　同
餌ふごの鮎をあぐる染付　堂
深(ウ)艸はをなごばかりの下屋敷　同

伏見の戀を晩鐘（イリアヒ）にきく　　翠
錢の利をしめて百づゝならべ置　　同
　母とむすこがてゝをあなづる　　堂
春先に田の荒仕事隙明て　　同
　鼠の穴をふさぐ二ン月　　翠
花吸ふと鳴鵯のひよ〱と　　同
　晝は衣をつゝむ風呂敷　　堂
侘しさや甲斐の夕氣の小麥餅　　同
　しどろに生（ハ）へて赤き雞頭　　翠
頬當をはづして月を打詠め　　同
　惡七兵衛かげきよが秋　　堂
名
世の中は手間もいらずに年寄て　　同
　さま〲かはる月額（サカヤキ）の形り　　翠
通天の紅葉もちらず初時雨　　同
　筏に切し大根の湯煮　　堂
追おろす犬も疊の上に寢（イ本（寐））て　　同
　山雀籠のかゝる折釘　　翠
菊やりて若衆〱となぶらるゝ　　同
　戀もがさつに城下の月　　堂
まだ暮ぬうちより藥師押合て　　同
　ところてん喰こはり（イ本（小割））立じま　　翠
笠縫（ヌイ）の里とみえたる竹の皮　　同
　何を心に行々子鳥鳴　　堂
ウ
待宵の身をもだえたる四ツの鐘　　同
　ほして干かね（イ本（ぬ））る絹の下帶　　翠
逗留の内をあかれて口おしき　　同
　門に立添ふたそがれの空　　堂
森の花甍（イラカ）見えたる塔ー上寺　　同
　塩（イ本（潮））に音なき鳥の囀り　　翠

忘年書懷　　素堂亭

節季候

節季候を雀のわらふ出立かな　　芭蕉

餅舂

餅つきやあがりかねたる鷄の泊屋（トヤ）　　嵐蘭

衣配

文箱の先模様見る衣くばり　曾良

佛名

佛名や饅頭は香の薄けぶり　洒堂

歳昏

腹中の反古見はけん年のくれ（イ本分ン）　素堂

餘興

としわすれ盃に桃の花書ン　洒堂

膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂

宵の月よく寢る客に宿かして　芭蕉

俳諧深川集終

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

卯辰集

楚常
北枝撰

この言草はこしのしら根の林下、鶴來の里の楚常子、哥林にたのしむあまり、かつ作を拾ひ、すき人どもに吐はゝせん事をおもひしかど、その秋のはじめかし世を夢になしぬ。跡に一つゝみのものあり。立花氏北枝、是を袖にして、猶しば栗のゑめるも、どんぐりのころ〳〵せしもとりあつめて、我住かたの山の名にしいふ卯辰集とはいふなるべし。

桑門句空書

卯辰集（上）巻第一

春

日の春をさすがに鶴の歩ミ哉　其角

けさの春は李白が酒の上にあり　杉風

我山里に春をむかへて

春立や山家に入て袖の數　楚常

病にふして

東君また身の耻ゆるしたびにけり　膳 秋之坊

來るとしのをも湯につなぐ命哉　貞室

湖水のほとりに春を迎へて

薦を着て誰人います花の春　翁

元日に誰か越ゆく不破の關　小春

はる立やさすが聞よき海の音　牧童

曙のおしや春たつ夷がしま　七尾 劉文

江戸にて

山は富士野はむさしにて年とりぬ　漁川

四日には寐てもや春の花心　北枝

のどかさに又かりそむる酒債哉　牧童

正月やかならず醉て夕附夜　万子

越中の國字坂の神祭の事におもひよりて

卯杖とはうさかの神の切にけん　句空

たゝくにも君を忘れぬ薺哉　紅介

若殿を抱てまたうつ薺かな　牧童

藪の中のなづなは人にあはぬ也　女　けん

かれ薄がさくさと摘なづな哉　淸宮司　英之

しら雪の若菜こやして消にけり　大津尼　知月

七種のみくさは摘し雪野かな　四睡

十錢を得て芹賣の歸りけり　小春

麥のためまづ風ゆらぐ雪の上　北枝

木曾義仲の塚に詣でゝ

雪消てあはれに出し朝日塚　尼　知月

殘雪を見渡す皃の陽氣也　芬芳

のこる雪下部あまたにあぐまれし　譽風

氷とけて鮒うく池の東かな　唐介

春さむきとし

にが〳〵しいつ迄嵐ふきのたう　宗鑑

寒しやと歸る春野の風ぐもり　秋之坊

匂ふらし梅さく里の牛の角　句空

蝶鳥にあぶなき梅の雫哉　岫曲

手鼻かむ音さへ梅の匂ひ哉　翁

病中に

毒だちに障らぬ梅のにほひかな　李東

酒興

おどけなとおらばおれかし梅の花　秋之坊

駕籠よりは牛の上から梅のはな　万子

さりながらむめにはじまる月夜かな　尾張　野水

けふの梅勝たり右も椿かな　同所　胡及

鶯やうは毛しほれて雨あがり　江戸　曾良

うぐひすのはまり過たる山家哉　北枝

塩ざかひしろ魚のかぎる風情あり　石動 宇白
白魚や海におし出すにごり水　鶴来 梅雫
塩河豚やはるも蛙のなかぬ時　越人
種ものや池にひたりて春の水　楚常
いたづらに柿接で居る彼岸哉　宮腰 普人
栗接ておもひをのぶる木の目かな　李東
白椿ちるや岩根のうつせ貝　松任 薫煙
雪はちく柳やいそぐ浅みどり　小松 致書
蝶の羽におし分らるゝ柳哉　蘇守
木づたひてましらのころぶ柳かな　楚常
涅槃像人はまづ見る阿難哉　遅櫻
ひとたびは寐ておがまるゝねはん哉　李東

鈴鹿の社にて

山蛇の遊びに出る花表かな　京 風喬
雲雀より上に休らふ峠かな　翁
うつむいてきけば草なるひばり哉　句空
ひとつともふたつともきく雲雀哉　元之
獨たゞみだれ初てや鳴ひばり　秋之坊

若草に鴫をかくしてやなく雲雀　南甫
かけはづす鷹より落るひばり哉　其糟
鳴雉やみどりのび立小松原　梅露
火屋ひとつ鳴残したるきゞす哉　小松 斧卜
屋腰より雉子鳴ゆく山路かな　四睡
きじ鳴て跡は木を伐ル響かな　蘇守
橋桁や日はさしながら夕霞　北枝
砂よりや霞ゆり出す岸の浪　譽風
しづかさや朧は月の香のやうに　漁川
朧月羽こく鴈も旅寐哉　貞喜
礒の家の菊植分む歸鴈　春幾
陽炎を見はるやものゝくらきほど　蕉下
かげろふや弓張月のくもる程　楚常
糸きれて蛸はしら根を行衛哉　山中小人 桃葉

粟ケ崎の漁家にて

わすれめや胡葱(アサツキ)膾浦小舸　牧笛
君いくら我はやつくし五七本　李東
頭陀袋うち明てえる土筆哉　順之

春の野に袂も袖もつくし哉　和平
七くさにあはでさかりや菠草　大坂 何處
たんぽゝや芹生小原のまがひ道　牧童
草もえて土のほろつく野澤哉　魚津 不的
くさの芽のうへに干をく莚かな　和之
なつかしき人のなづけん猫のつま　女
手をあげてうたれぬ猫の夫かな　尼 知月
囀やことに桃花の鷄の聲　共角
ふつゝかに青葉や交る桃の花　雨邑
ひとつ家のもゝぞ野道の春の色　破瓶
雨降ていつ迄ぬるゝ木蓮花　言露

秋之坊によす

遍昭の簑さへもたじ春の雨　牧童
春雨や淋しきやうで梅柳　漁川
もるまでは庇にしらじ春の雨　雨邑
はる雨や木のよごれとる下雫　石動 宇白
まだ鳴か曉過の江の蛙　一笑
鳴出てみななく小田のかはづ哉　孤舟

うち返し寐られぬ背戸の蛙哉　字路
篠の家のひくさや空に鳴蛙　流志
あまがいる栁を落て盆もなし　共糟
飛ゝて穴へ落たる蛙かな　魚素
蛙子のおよぎ習し古江かな　鶴來 匡柏
青柳に追出されたる燕哉　句空
川舟の跡に鳴來るつばめ哉　一草
とらへても放したふなる燕かな　宮腰 普人
海棠にゆらりと來たる胡蝶哉　燕子
草をたつ小蝶や風の一なびき　紅介
羽おれし蝶あゆみよるすみれ哉　雨邑
手にとれば猶うつくしき菫かな　孤舟

夕ぐれの籬に蝶のたつを見おりて

寢ル所ありて行らめたつ小蝶　北枝
おもしろき盜や月のうこぎ垣　李東
かくれ家や食喰さして摘五加木　牧童
里の晝菜の花深し鷄の聲　牧童
なの花や幾野かゞやく朝日影　拾葉

菜の花に虻しづか也朧月　其糟

草庵をとむらひて

梨一木菜の花二間四方かな　春幾

花に只來てはほしがる庵哉　漁川

雨ほち〳〵ふらじとて行花見哉　孤舟

中ゝに花のつよみや深みどり　素洗

寢に來るな花のちる迄山烏　浮葉

花や雲橋よりわかる道の數　松任 柳川

四方より花吹入て鳰の海　翁

湖や心はしりて四方の花　北枝

元祿三のとしの大火に、庭の櫻も炭に成たるを

燒にけりされ共花はちりすまし　同

判官を思ふ

かいそんが來てみん花の安宅かな　楚常

海士が家礒邊の花のおもて哉　字路

ちる花を澤蟹かつぐ岩間かな　元之

肌のよき石に眠らん花の山　路通

村雨や我跡ぬれぬ花の下　梅露

これは扨ゆけども〳〵はなの山　松任十歳 春之

何人ぞもとゆひ拂ふ花の寺　遲櫻

花咲て猶いかめしき二王かな　三秋

提灯にちりかゝる迄花見哉　柳絮

醉臥て次手に花を二日見む　小松 斧卜

獺やちらぬ花ふむよし野川　拾葉

渦のまくはなとめぐれる鯱哉　可友

手折とて花にかり着の袖長し　古庭

花も見ず止長（シチヤウ）にかゝる碁打哉　一傘

またも見る闇かは花のあかりある　秋之坊

朝な〳〵花を立のく乞食哉　草籬

草庵

おもしろや海にむかへば山櫻　句空

芳野にて花のちりけるを

錫杖よ心つくしのやまざくら　同

夕風やあいだを置てちる櫻　鶴來女 不中

かしましく櫻いためそてちつゝき　おなじ所 柳江

根ながらや櫻のせゆく渡し舟　少年 桃英
むら雨の羽織干にけり山櫻　紅尒
山ざくら見ゆる昨日の所かな　李東

旅行

風流の國主なるらん山ざくら　北枝
とにかくにうごく若木の櫻哉　北枝
水鳥の胸に分ゆく櫻かな　越中いなみ 浪化
岩根ふみひとめ〳〵や山ざくら　万子

秋之坊老母追悼

たのもしき子を置ちるや姥櫻　牧童
恭筍かくす寺は自慢のさくら哉　春幾
山吹やよりむく岸の舟はやし　路舟
黄なる花は皆やまぶきか川向ひ　譽風
山ぶきやおる手をはぢく瀧の露　楚常
やま吹に干つゞけたる手染哉　林陰
蚕がひする人は古代のすがたかな　江戸 曾良

餞別

雲に只鳥の巣だつ別哉　楚常

柿の花蟻のちからを斗かな　京 可迴

初瀬にまふづとて

空大豆の花に初瀬の道もなし　句空

西大寺にて

木ゝは藤春の柳を尋ける　同
家つとや包こぼれし藤の花　四睡

いつく嶋に詣しころ

嚴嶌よごれぬ足を春の浪　同
此儘に罪つくる身の日は永し　大津 乙州

紅尒が武藏にゆく時

いたづらに富士見て永き日をたてな　北枝

秋之坊にて

窓ひと有とて暮る春日哉　李東
行春や蕨ほうけてつねの草　尾張 野水

卯辰集　巻第二

夏

ふもとの里を見おろして

衣がへせしや綿ほす谷の家　句空

土を着る節もあるべし更衣　秋之坊

更科に戀しがる也ほとゝぎす　富山 達風

振舞の中に聞けり郭公　五歳 長皿

坂もとにしばしすみ侍しころ

皃見せぬ尼も愛らやほとゝぎす　句空

橘やいつの野中の郭公　翁

時鳥まとはとりがすくないか　牧童

辨慶はかしこまりけり佛生會　玉斧

やとはれて鬼に成たる祭哉　古庭

牡丹ちり芍藥ひらく且かな　少人 桃英

一輪のぼたんやちりてそこら内　共糟

何事ぞぼたんをいかゞ猫の様　南甫

麥の穗や芍藥埋む里の背戸　山中 自笑

四睡が武府にゆくおり

牡丹散て心もおかずわかれけり　北枝

ちる事は催しに似ぬ牡丹かな　牧童

子におくれたる人につかはしける

卯木垣似たる子のなく恨哉　楚常

うの花はたが折來しもしなびけり　秋之坊

青鷺のなどやねむれる杜若　小松 致畫

かきつばたしどろに咲し古江哉　鶴來 不中

八橋をかける繪を見て

橋ごとに踏はづしなんかきつばた　唐介

尼が薗泪にやそだつ芥子の花　草籬

竹の子をおる音響く小寺哉　濱茂

小麥田に鳴や狐の妻をなみ　鶴來 跡松

麥秋は身の置どころなかりけり　京 風喬

石山のほとりにかりなる庵をしつらひて

先頼む椎の木もあり夏木立　翁

ゆく水や裏屋芹咲夏こだち　楚常
雨をだに雫にしなす茂り哉　富山 遠風
ひとつ屋は捨もせぬ世の茂り哉　水橋 卜幽
くだけずもあだに成にし桐の花　幾葉
ひよく／＼と人跡になく水鶏哉　伯之
まこも刈うさに戸扣く水鶏かも　圓木
淋しがる人をよばるやかんこ鳥　孤舟
浮雲にまぎれても行夏の月　乙州
廿日とてやさしや遲き夏の月　楚常
みじか夜や百合草咲かけて明にけり　林陰

しのぶもちずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥くさを取りて、このいしをこゝろみけるを、里びとども心うくおもひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたざまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺　翁

更科山を見やりて

ところ／＼雲ある谷のさなへかな　紅介
さみだれやあかるき方に鷄の聲　雲口
降出し日もわすれけり五月雨　三秋

中將實方の塚は、みちのく名取の郡笠嶋と云所にて、道より一里ばかり侍るといへど、雨しきりにふりて、日もくれかゝりければ

かさ嶋やいづこ五月のぬかり道　翁
さみだれや軒に崩し土火桶　宇路

僧の路通、おもひたつ心とゞまらざりければ

さみだれや夕食くふて立出る　尾張 荷兮
五月雨やけふも又きく松の鷺　七尾 滴水
さみだれに龜の甲ふむ山田かな　高岡 市巷
小雨して田貝ふみわる花かつみ　貞喜
鷺立て人やら分るあやめ草　李東
もの取をく氣色ぞ池にかゝる眞菰　尾張 且藁(旦)

鴨の子や袋に入しまこも刈　邑姿

青梅を買ふて花問ふ里家哉　三岡

人ありや窓の枇杷くふ山烏　楚常

山ざとや明ゆく窓の麥いり粉　井闘

あぢさへは只おしやすき扉かな　伯之

ひとりすむ法師のためか夏の菊　女

ある女房に申侍る

鬼ゆりのまとしからぬ赤さ哉　秋之坊

辨ながら百合草は臥けり夏の雨　雨邑

渡りかけて藻の花のぞく流哉　京 加生

蓴菜の名の人めくもあはれ也　万子

幻住庵の夕を尋て

水汲に跡や先やのほたる哉　乙州

さびしさや一尺きへてゆく螢　北枝

瀧津瀬やひかりそろへて飛螢　唐介

螢火にとびつく魚や水の音　小松 鐘昏

のぼるよりおるゝは多きほたる哉　蘭子

打かへし扇子に遣す螢かな　春幾

家に來て袖よりにぐるほたる哉　一洞

乘ル駕籠をひらりとぬけし螢哉　源之

妹背山おとこばかりの鵜舟かな　万子

つかれ鵜やたれ羽干す間の峯の月　行山

まゆはきを俤にして紅の花　翁

山の井に蚊の鳴いづる夕哉　三秋

かり蚊屋の庇にあまる笑ひ哉　康樂

ほころびを明は尋ん蚊帳かな　春幾

蚊に覺て馬屋の音も哀也　一好

ほち〳〵と草の音きく蚊遣哉　李東

打拂ふ扇子にうつる蚊遣哉　芦沼

病中

花鳥に死はぐれひて蚤むしろ　楚常

東雲や耳そばだつる氷室守　何處

雫にはさのみきへぬかひむろもり　高岡 市巷

梢より浮ゆく蟬の命かな　梅露

むさし野は蟬の鳴べき草もなし　李東

空蟬や石の花表を鳴捨し　一井

水うてや蟬もすゞめもぬるゝ程　其角

無常迅速

頓てしぬけしきも見へず蟬の聲　翁

せみの鳴中に起たるうつら哉　又笑

蟬の脱(カラ)ははたらくやうで哀也　句空

少人のあふぎに

思へども雛の哥かく扇子哉　万子

うつくしき人にかられし扇子哉　孤舟

四條河原凉

川かぜや薄柹着たる夕凉み　翁

川ばたにあたま剃あふ凉ミかな　楚常

松原に山臥凉し袖まくら　同

すゞみ〳〵ゆく〳〵森の田中哉　句空

猶凉し松には人の居りかはり　四睡

凉しさや下馬より末の小松ばら　雨邑

秋之坊の行脚に

とく起て米をもらへ朝すゞみ　李東

よはる身のものにもつかぬ凉ミ哉　何處

捨舟に乘てはすつるすゞみ哉　其糟

顏洗ふ川邊凉しや魚の影　蘭子

川凉み扨もちいさき扇子かな　(玉)王斧

すゞしげに蘇(ス)積(サ)屋が家の川柳　乙州

六月は凉むばかりぞ荻の聲　遙里

白雨や猫の尾をふむ簀子椽　小春

ゆふだちの氣色に逃るちんば哉　柳宴

夕暮やはげならびたる雲の岑　京 去來

夢中に申侍る

はきながら屐を洗ふ清水かな　北枝

啜やはづむ清水の中波ん　一泉

岩に只口つけて呑ムしみづ哉　古庭

松伐て古年(マヽ)の清水のまよひ哉　英之

茶碗ひとつかり出したる清水かな　一男

雨乞や近江となりし川の數　乙州

あつき日やおもけに落る瀧の水　山中 自笑

寐ぐるしく燈あつき枕かな　新露

誰がふせる蔪なるらんさくら麻　宮腰 普人

行ぬけて家珍しや櫻あさ　一笑

病よはりて山里に歸る比、おの〳〵
餞別せし返しに

廡にそふ葱苳よはなれくるしさは　楚常

なでし子や貴妃の喰さく花のつま　春幾

夏の日やがんぴ喰ふ虫の紅に　牧童

いたづらに蓮に立し吹矢かな　遠里

はす貳本切れば淋しや寺の庭　白函

晝がほは塩燒賤の詠かな　僧 光山

尋る戀

ゆふがほやふくべやまがふ君が宿　万子

夕皃のさけども遲き夫哉　幽子

ひさごがちに蚊やりの細き住居哉　盧水

ゆふがほに片尻懸ぬさんだはら　北枝

虫おくり賤がしはざや夏はらへ　山中 自笑

卯辰集　巻第三

秋

越中に入て

早稲の香や分入右は有曾(磯)海　翁

君が代はかくす事なき稲葉哉　一笑

河骨にかゝる匂ひや早稲の花　牧童

夕暮やわせ立のびて人見えず　七尾少人 松鶴

蜻蛉の立居にちりぬ稲の花　遠里

實のる時民の捨置く田面哉　李東

刈しほを告るや早稲の時鳥　貞室

楚常身まかりしよし、母のもとより告來したる返しに

來る秋を好ける物を袖の露　北枝

古畑や所ゝに麻のはな　鶴來 李圃

ひとり寢

七夕を笑ふて寝入端居かな　牧童
明方の星にかしたる袷哉　雨邑

雨夜

銀河かきまくりても渡れかし　宇〔マヽ〕路
聖霊やけふこよろぎの礒の波　句空

旅宿玉祭

聖霊よ我も旅寐は水ばかり　楚常

おなじ時

聖霊に近付もなし草枕　李東
聲ひくに魂まつ宵の一間哉　盛弘

くま坂ざかと云所にて

熊坂が其名やいつの玉祭　翁
玉祭なく〳〵質を置く女　松任 雨柳

楚常追善

月薄もし魂あらば此あたり　牧童

あはれにしなしたるみどり子の墓にまいりて

秋風に卒都婆きはつく涙哉　鶴來女 不中

高燈籠松の木の間に見ゆる哉　五歳 長皿

七月既望

高燈籠しばらくあつて嶺の月　北枝
赤々と日はつれなくも秋の風　翁
行雲のうつり替れる残暑哉　魚素
稲妻に馬引かくる田面かな　洞梨
いなづまのつかへて戻る板戸哉　幽子

船中

いなづまやしば〳〵見ゆる膳所の城　素洗
稲づまに行先々の小家哉　孤白

旅行

霧くらき歩みぢからや鶏の聲　濮茂
宵闇や霧のけしきに鳴海潟　其角

籬の花の朝じめりとはよみたれども、庵のわびしさよ

うす霧のまがきにしめるわり木哉　句空
舟でなし只朝ぎりに木に乗りて　楚常

翁へ簑をおくりて

しら露もまだあらみのゝ行衛哉　北枝

古御所や露日にのこる石のはし　雨邑

わかくて身まかりし人に

さぞあらん仕のこす事や露の數　尾張 且藁

雨鹿身まかりし時

露は袖に葬禮せんと立さはぎ　鶴來 何之

おなじあはれを

春夏はやせて秋死ぬ哀かな　同所 盧水

小ざくらとわろびず名乘ル相撲哉　秋之坊

山陰の水のみにゆくすまふかな　盛弘

面なげに物打着たる相撲哉　春幾

蕣は咲ならべてぞしぼみける　北枝

あさがほやきのふは五けふは三　牧童

蕣の庭にのどけし鶴の聲　其糟

家こぼし詠る庭の芭蕉かな　宮腰 閑之

稲妻の形はばせをの廣葉哉　一風

しかられて芭蕉の陰の小僧哉　遠里

つぶ〳〵と露けし居所の女郎花　乙州

熊野へまふでける道すがら

ひとつ葉をたよりや岩のをみなへし　秋之坊

娠の追善に

くひものや大きにかへて女郎花　素洗

秋の野に花やら實やらゑのこ草　楚常

野田の山もとを伴ひありきて

翁にぞ蚊屋つり草を習ひける　北枝

つくろはぬ里の木槿のにほひ哉　四睡

咲つゞけ其の家わすれじむくげ垣　鶴來女 不中

いつの間に背戸の木槿は咲ぬらん　如柳

霧ふかき日、渡月橋を渡りて、きた嵯峨に分入比

川音やむくげ咲戸はまだ起ず　北枝

村雨や萩の根にある蜂の聲　冷袖

夕露に盃ながせ萩の原　楚常

萩原や鉢の子洗ふわすれ水　牧童

萩見つゝゆけば此野ゝ祭哉　忍市

はぎに來て立ばおもたき雀哉　雨邑

蟷螂や露ひきこぼす萩の枝　北枝

氣多の社にまふでゝ

竹の津に絶(泣カ)鈴舟をくつはむし　淺宮司 英之

はた／＼のはたと入来る雀かな　四睡

物にあたり尻ほつ立るつゞり虫　同

引まけて草に首ありきり／＼す　乙州

秋草に何のゆかりぞ黒き蝶　万子

色ゝにくだけて秋の小てふ哉　牧童

多田の神社にまふでゝ、木曾義仲の願書并實盛がよろひ・かぶとを拜ス　三句

あなむざんや甲の下のきり／＼す　翁

幾秋か甲にきへぬ鬢の霜　曾良

くさずりのうら珍しや秋の風　北枝

芭蕉葉の打かへされし月夜かな　乙州

かしましき樫の雫や月の隅　楚常

月を松にかけたりはづしても見たり　北枝

逢坂やおの／＼月のおもひ入レ　邑姿

くもれども月夜はやさし丸木橋　左里

南天の枝にうつろふ月夜哉　五藏 長皿

月の夜や道いそがしき人のくせ　漁川

稲舟も月も我屋も明にけり　順之

山中の温泉にて

子を抱て湯の月のぞくましら哉　北枝

隈もなく名もなき原の月見かな　意情

鑰もなき庵預る月見かな　洞梨

月は田面海鳴そふる夜比哉　秋之坊

櫂上て休める舟の月見哉　如柳

座敷より我舟さして月みかな　浮葉

月見する座にうつくしき皃もなし　翁

月み舟櫓縄きれたる笑ひ哉　雨邑

わや／＼と坊へ押込月見かな　唐介

花薄きびは穂に出てくはれけり　万子

はなすゝきまねけば喰ふ野馬哉　宮腰 清流

寐覺ても起ちからなし狄(荻カ)薄　路通

起もせず寝もせぬ雨の薄かな　松任何川 姉

おり立て馬かゆる野の薄かな　民屋
むら〳〵とむら〳〵とあり花すゝき　盛弘
蜻蛉もともにまねくや花薄　三岡
はなすゝき戸にはさまれし夜風かな　牧童
刈萱や露もち顔の草のふし　同
ゆく路の野菊の果は湊哉　柳宴
咲まゝに只さく儘に野菊哉　句空

りうたんをかくして
よりうたん藪越しにきく皷哉　玉斧
村雨や見る〳〵沈む澤桔梗　幾葉

このかみにおくれて我も病にふして、秋も半過ゆく比
是非ともの命よ露の赤毛蓼　岫曲

山色清淨心
鳥の糞つきても拾ふ菌かな　紅尒

翁の捨ゆく庵に行て
蓮がらの猶うそ〳〵と行衛哉　乙州
跡にたつは姥鵙と云鳥なるか　龜洞

雁落て芦半町のそよぎかな　遙里
吹からに鹿ぞうつむく山颪　句空
起あがる草の後の小鹿かな　孤舟
ますら男が矢を放つ間や鹿の聲　草籬

栗柄峠に泊りて
越中に碪うつ也夜中過　四睡
待宵のちからに成しきぬた哉　大坂 川柳
眠りつゝ現につよき碪かな　七里
打ものは淋しさしらぬきぬた哉　遲櫻
さびしさに來ればおもやも碪かな　孤舟
三ケ月の藪に道あるきぬた哉　万聲
燈心をゆりこむ夜半の碪かな　雪水
猪もともに吹るゝ野分かな　翁
音程はものにあたらぬ野分哉　句空

草庵をたづねありきて
捨る身のもの冷じくさす戸哉　柳宴

旅わたりして
あさ寒み醉のまぎれにわかればや　漁川

足はやき朝戸の音やゝ寒み　楚常

松岡にて翁に別侍し時、あふぎに
書て給る

もの書て扇子へぎ分る別哉　翁

笑ふて霧にきほひ出ばや　となくく申侍る　北枝

ひよどりの行方見れば山女哉　鶴來　李圃

市人の聲にもあはず烏瓜　椪雪

しき嶋やへちまの糸も捨ざりき　南甫

取跡や淋しく見へしずいき畑　如柳

我身

秋かぜや息災過て野人也　北枝

すばしりや秋ふく風のねらひ網　四睡

秌淋し　二句

穐や猶崩し池のにごり水　紅尒

鶯鳴て秋の日よはき曇り哉　牧童

秋の日や猶いたづらに馬子の鞭　意情

山中かうろぎばしにて

あきの日や猿一つれの山のはし　楚常

山中十景　高瀬漁火

いさり火にかじかや波の下むせび　翁

有省

よしあしをいはで守るはかゞしかな　僧　光山

物の音は水のむ獺と安(マヽ)山子哉　雲口

しよんぼりと山田のかゞししぐれけり　和角

秋の野を壁土にとる哀哉　德子

冬瓜や花にも葉にも捨られし　圓木

かもうりの方にかたがる庵哉　盧水

蓬生に持あはせけり菊くらべ　遲櫻

小家つゞき垣根〱の黄菊哉　牧童

しら菊の一重は寒し秋の暮　宮腰　橡青

鮭とんでさゞ波殘る川邊哉　圓木

山川にいほりかゝりし紅葉かな　如柳

心あつて櫨にもみぢをしかせけり　秋之坊

行馬の笑ふにもちる柳哉　李東

づぶ足の跡のみ多し刈田原　何之

二葉なる麥田にやせしいなごかな　雨柏

目に高し稲刈末の御調藏　宮腰 橡青
橙の葉の持こたへぬも哀なり　何處
秋の雨鷄の尾のしだりけり　小松 孤舍
人は住居ばかりすごすや秋の暮　楚常
あき暮て淋しき炭のにほひ哉　尾張 呂碧
行秋のさて／＼人をなかせたり　越人

卯辰集 卷第四

冬

寒さ來て野寺の花の簀子椽　楚常
藁曲て壁にをし込む寒サかな　草籬

路通の行脚を送りて

見やるさへ旅人寒し石部山　大津尼 知月
さむき夜の雨だりすごき寐覺哉　鶴來女 甚子
から風や水はちゞみて網代杭　鶴來 何之

淋しき庵のすさみ 二句

山あらし來よさむがりて明すべし　秋之坊
爐の隅に身や酎の神といはゝれん　同
木がらしや晩鐘ひとつ馬十疋　楚常
凩によりかゝり行馬上かな　春幾
木がらしや顏のみうごく鳩の聲　雨邑
釣瓶くる音凩と成にけり　梅露

木枯に咲て見せたる八手かな　林陰

身まかりたる人の庭のけしきを

鉢の木やぬしなきつゝじかへり咲　漁川

伊賀へ歸る山中にて

初しぐれ猿も小簑をほしげ也　翁

奥山は猿一聲にしぐれけり　幽子

亂山に日影あるあり夕時雨　紅尒

しぐれけり頓てその儘春でなし　牧童

古地藏しぐれ催す巷かな　小松 斧卜

ふり初て日半〳〵の時雨かな　句空

しぐれきゝ時雨聞夜のしぐれ哉　梅露

德利さげて賤の子うたふ時雨哉　四睡

垣あれて菊のうら見るしぐれかな　洞梨

とかくに悲しき時

ひへながら打寐て時雨きくばかり　北枝

十月にふるはしぐれと名をかへて　同

葉茶つぼやありともしらでゆくあらし　宗因

囊中略有七千首

不負百年風月身

我もとて袋に入し落葉哉　牧童

あはれにもつるみて落る木の葉哉　四睡

宗祇十三廻忌

地ごくへは落ぬ木の葉の夕哉　宗鑑

這出て落葉にねまる蛙かな　鶴來 跡松

海のかたはしぐるゝに、菴の庭は木の葉をしくも、おりしりがほなりや

はく跡も木の葉はもとの庵かな　句空

庵の暮と云事を

此夕たぞや落葉にすべる音　同

ねがはばや戀をばせじと日蓮忌　鶴來 何之

藪すぎて霜のみ重し葱苳　柳安

燐火や今朝は霜をくかれ蓬　牧童

あさ戸明てしも消る迄何もせず　共糟

皆落て木末に丸し月の影　孤白

十月ノ望

から崎の鮒煮る霜の月見哉　北枝
鶯の女の世をあまりなる姿哉　蕉下
簗火絶て鴨落る夜の寒哉　楚常
舟よせて立ば足見ん都鳥　雨邑
山茶花や蝶のをらぬも静也　李東
山茶花やさすがふりさす庭の雪　幾葉
水仙はほの咲笘のみぞれかな　楚常
種馬の駒待あはすあられ哉　同
さむしろや雹ふりをく旅芝居　朱花
曙やひかしも桶もうす氷　万子
有明の其まゝ氷る盥かな　字路
行道の音おもしろき氷哉　孤白
寒念佛歸るいほりも氷るらん　康樂
辛風の簑ぬぎて見るつらゝかな　鶴來雨鹿
狐ゆく跡は霜ふる氷かな　牧童
初雪や人のありくと日のさすと　楚常
はつ雪や松にはなくて菊の葉に　北枝
初ゆきのかくしえぬ石のはづれ哉　三岡

老人なまもり居て
しら雪の花とも見えぬつぶり哉　李東
元日の心や雪の朝茶の湯　孤舟
舟さして柳の雪を打かぶり　其糟

野田の山もとに住人を、たづねまかりしにあはず、かたへの垣にかづらのかゝりたるを
なんの實ぞたま〳〵見だす雪の門　北枝
折とてもあまり至極の雪吹哉　秋之坊

寒山の讃
寐る恩に門の雪はく乞食哉　其角
喰ふてや死ぬかと思ふふぐと汁　小松斧卜
ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ鰒　牧童
おもしろもなふて身にしむ神樂哉　北枝
戀しさもなくて寐られぬ師走哉　乙州
兒めきて泣つゝ寐るや年の暮　楚常
年の暮わやめくを只余波かな　盧水

草菴をしつらひけるとしの暮に

物うりの聲聞たゆる師走哉　荷兮
一とせや餅つく臼の忘水　万子
大年や難波堀江の鴨の聲　春幾
いざ汲ん年の酒屋のうはだまり　共角
輕薄を申つくせる歳暮かな　牧童

(卯辰集下)

元祿二の秋、翁をおくりて山中溫泉に遊ぶ　三両吟

馬かりて燕追行わかれかな　北枝
花野みだるゝ山の曲め　曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて　翁
鞘ばしりしをやがてとめけり　北枝
青淵に獺の飛込水の音　曾良
柴かりこかす峯の笹道　翁
霰降左の山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舍わたらひ　曾良
落書に戀しき君が名も有て　翁
髮はそらねど魚くはぬ也　北枝
蓮の糸とるも中〱罪ふかき　曾良
先祖の貧をつたへたる門　翁
有明の祭の上座かたくなし　北枝

露まづ拂ふ獵の弓竹　曾良
秋風は物いはぬ子も涙にて　翁
白きたもとの續く葬禮　北枝
花の香は古き都の町作り　曾良
春を殘せる玄仍の箱　翁
長閑さやしらゝ難波の貝づくし　北枝
銀の小鍋に出す芹燒　曾良
手枕にしとねのほこり打拂　翁
うつくしかれとのぞく覆面　北枝
つぎ小袖薫賣の古風なり　翁
非蔵人なるひとの菊畑　同
鴫ふたつ臺にすへても淋しさよ　北枝
あはれに作る三ケ月の脇　同
初發心草の枕に修行して　翁
小畑も近く伊勢の神風　同
疱瘡は桑名日長もはやり過　北枝
雨晴くもり枇杷つはる也　同
細長き仙女の姿たをやかに　翁
あかねをしぼる水のしら浪　同
仲綱が宇治の網代と打詠　北枝
寺に使を立る口上　同
鐘ついて遊ん花のちりかゝる　翁
醉狂人と彌生暮行　筆

柿喰三吟

八朔や胛の臟つよき柿喰ひ　乙州
だゞくさにつむ篠木のから　北枝
つゞり虫靜に見れば動き出　牧童
旅の月夜は物たらすなり　州
頭の点取どもゝ卷からけ　枝
虚言つく人の顔をじろ〳〵　童
楞陰馬の燒鉄ふすぶらせ　州
盆の李を置こぼしけり　枝
入御簾に跡戻りしてのぞく覽　童
しぼりつけたる涙さへうき　州

ちつくりとあたま結ける袴着に　技
　雪はつもれど去ぬ物買　童
臍の垢ほり盡しぬる世の中や　州
　のぼり〳〵て淀の畫船　枝
水雲（マサ）は畠のうねを作るかと　童
　式部が夢は泣つ笑ふつ　州
月花は男なぶりと詠むべき　枝
　酒とりにやる春の蛤蜊　童
鴈歸る鉢ふせ峠あれやらん　州
　宿クの二階の裏はみな山　枝
いつの日か障子に張し人歩帳　童
　額もぬかず角入レてより　州
唐の芋料まどひし夕間暮　技
　かさある月の雲にかまはず　童
肌寒くなえたる衣のうすよごれ　州
　つらし〳〵とならす鰐口　枝
夏來ては藥さまにくさる赤椿　童
　小哥斗のあがる所化寮　州

さがせどもとれぬ釣瓶に草臥て　枝
　行燈とぼす比のむら雨　童
怨靈の段讀返すむかし本　州
　涙もろげな里の肝煎　枝
いさかひてのがれ行らん後つき　童
　（炙）灸する日ともいへば風ひき　州
花の香の太秦迄も押移り　童
　うかとはなかぬ小鳥鶯　枝

琵琶五吟

風やいづこをならす琵琶の海　牧童
　西もひがしも燕引空　乙州
道草の旅の牝（サツ）馬（ヤク）追かけて　小春
　足の灸のいはひかへりし　魚素
さかやきの湯の涌かぬる夕月夜　北枝
　髭籠の柿を見せてとりをく　童
（陣）陳小屋の秋の余波をいさめかね　州

あだなる戀にやとふ物書　春
埒明ぬ神に歩みを運びかけ　素
池のすぼんの甲のはげたり　枝
橋普請木の切レさがす役に付　童
晝寐せぬ日のくせのむか腹　州
むら薄おほふ隣の味噌くさき　春
無欲にまつる聖靈の棚　素
布袋にも能似し人の踊出　枝
伏見の月のむかしめきたり　童
花はちる物を見つめて涙ぐみ　州
人は思ひに角おとす鹿　春
春の日に開帳したる刀自(トジ)佛　素
交〳〵にたかる飴うち　枝
馬盥額に成までやり置て　童
越の毛坊が情のこはさよ　州
月の前痛む腹をば押さすり　春
扱ふ野邊の露のいろ〳〵　素
簀戸の番烏帽子着ながらうそ寒く　枝
ゆるさぬものか妹が疱瘡　童
うつくしき袂を蝿のせゝるらん　州
食打こぼす郭公かな　春
醉狂は坂本領の頭分　素
松にきあはす辛崎の茶屋　枝
初しぐれ居士衣をかぶる折もあり　童
吹て通りし夜の尺八　州
旅まくらしらぬ亭主を頼みにて　春
藥を刻る床の片隅　素
うぐひすば杜子美に馴るゝ花の陰　枝
山と水との口ゝの春　童

霜六吟

人の年の霜の降る夜に寄にけり　四睡
洗ひすごせる河豚は味なき　北枝
鷹宿の壁も疊もよごされて　紅尒
木賊つりをく音はさら〳〵　漁川

あの月は耳にかけたら懸るべき　牧童
　秋の夕を頭なぶらせ　李東
幾度も小鯛ねぎりて買もせず　筆
　屎の馬を行ぬけにけり　睡
山科の談(論カ)所になれば衣着て　枝
　まづなげ出すかねの狀箱　尒
水風呂を跡の先のと長びかせ　川
　垂井ね深ときけばゆかしき　童
時ゝは月にきしくる部にて　東
　相撲はすけど禰宜のぬるさよ　枝
はへ〳〵と秋の空なる赤とんぼ　睡
　はづみもぬけてもの思ふ比　川
花見よと局がしらにいざなはれ　尒
　こたつふさげば廣く成ぬる　東
照降もしどろもどろに春めきて　童
　鼻につきたる旅の燒魚　睡
山道の草鞋ぶなりに作りかけ　枝
　浪は敦賀の礒にうつ也　尒
藪いしやのとゝろはげたる箱ながら　川
　また仲人をしそこなひたり　童
戀種のとはぬ事迄云過し　東
　月夜鳥も寐ほれ行らん　枝
身にしめる風より蚤はとらへられ　睡
　どこやら芋のわるき腹あひ　川
とり立てかりに連哥の草の庵　童
　鶴見に出る人はさはがし　東
風かはる夜は星影のきらめきて　尒
　ふすぶりがちに木綿ねり揚　睡
起るにも寐るにもとらぬ角頭巾　枝
　いらぬもの迄かさぬ也けり　童
溝ぎはの花に後地を盛出して　川
　春の小鮒の口ならぶ見ゆ　尒

元祿四年卯月日
賀陽庶人北枝
京寺町二條上ル丁
井筒屋庄兵衞板
金澤上堤町
三ケ屋五良兵衞

そこの花（はな）

上・下

萬子
支考 共撰

そこの花　上

序

〔一〕庵万子

元祿辛巳のとし五月十七日、旦緒の野亭にあそぶ。越の浪化あり、美濃の支考あり　これは万里漂泊の客、かれは十里の地をへだてたれども、相見る事のたま〳〵なれば、春天樹日暮雲、そのおもひをよするばかり、爰に半日の閑を得たりともいはむ。古翁そのかみ北國行脚も、十とせあまり二とせの春秋をかへたり。支考ふるき笈を擔ふて其道の一筋をまよはず。さるは櫻の山ぶしより、冬の花の陰のやすらひも、風雅の姿なりけらし。秋の月はいづこにかさびしからむ。雪の降日はいづくにか寒からむと、今三人眉を結んで、いさゝか此情をとゞめんとす。

埜亭即興

夕顔や半時の鐘に日のかへし　浪化
　門の早苗に風もおり〳〵　支考
空見せむ蚊屋出の鷹を手にすゑて　万子
　繪に其まゝな供の太刀持　林紅
赤飯に折箸そゆる闇の月　北枝
　あの柴舟はもみぢして行　化
詩にやせん哥にや讀む秋けしき　考
　江湖の僧の明日はばら〳〵　子
ともし火の高く懸りて茶の匂ひ　紅
　富貴に見ゆる余所の白壁　枝
神﨑をあがればやはり有馬道　化
　女中のつれに餅(アモ)はめいわく　考
宵の月かき起さるゝ客斛　子
　聖靈も來てたをす一門　紅
打水に庭をかはかす秋の風　枝
　まづ新しき鯛は見えけり　化
青(ナマ)公家もけふは取をく花の陰　考

さて保元の春の鶯　子
小屏風に金箔ちらす雛の袖　紅
竹の夕日のわたる長椽　枝
馬下駄の音をのぞけば小性(姓)衆　化
我等ごきの味噌摺の戀　考
一いきに酒二三盃つかまつり　子
松は松風波はさゞ波　紅
暮かゝる山は鳥に雪の華　考
翠簾より御意のたばこ盆出る　化
股だちにつくばふ膝をかくしかね　枝
野はよけれども蚋(ブト)のゐる也　子
三日月の影に笹ゆり咲ならび　化
お子樣がたを何にたとへん　考
此婆ゝに似あわぬ小袖着まはりて　紅
彼岸の花を見れば極樂　枝
雲雀なく千里の天氣うけとらん　子
餘寒の腹に今朝は白粥　化
何もなき葛籠の蓋の明かねて　考
寄あふ者も風雅千万　筆

同亭
題螢

田の水を見せて螢のさかり哉　北枝
しばらくは酒のさかなにほたる哉　万子
螢火や松と早苗に行もどり　秋之坊
笹の葉にぬれては壁の螢哉　林紅
ほたる見に扇をさゝぬ人もなし　長緒
笠に來て道いそがせぬほたる哉　關鳥
雨だれをくゞりあるいて螢かな　牧童
窓ごとに螢ぴかつく夜中哉　八紫
松の葉をつめたう握るほたる哉　浪化
寢れば蝶さむれば今宵螢かな　支考

文通

むら雨の木賊にとをる暑さ哉　其角

石原も踏とめられぬあつさ哉　杉風
水無月の布にや富士の砂ふるひ　許六
山臥の笈にせばめる清水哉　カ　從吾

淺茅が原にて

鳴あふや芋はやし鳥かんこ鳥　仝　雨青
かんこ鳥啼や青砥が臺所　支考

祇園下河原にて

傘の隙や松原かんこ鳥　ミノ　怒風
竹の子も裸に成てあらし哉　石　温故
若竹やこれらも後は一節切　カ　新故
わか竹に麥のほこりや日の盛　井ナミ　吏全
わか竹の日暮更にや小盃　秋之坊
神さびし松にまじりて今年竹　高岡　虚舟
居りよいか笹の若葉のかたつぶり　高岡　巴三

人の別墅に遊ぶ

橋かけて中嶋涼し茶の通ひ　北枝
木の客に心をりけり夕涼み　林紅
兀達のさりとはそろふ涼み哉　牧童

夜涼みに鈴ふる馬のゆくゑ哉　石動　遅動
門すゞみいざ白妙の河原迄　京　丹埜
白鷺の羽ずりにうごく早苗哉　浪化
額もしや早なへの月の夕嵐　八紫
夕だちに飛のく月や松の上　丈艸
夕立に川木ひろひや鴻の中　高岡　枝動
夕だちはいづこに森の蟬の聲　石動　亀從
初せみや日和鳴出す雲の色　仝　邦里
驚や浮世にかはる蟬のこゑ　仝　香鶴
夏野來て思ひも懸ず川に橋　万子
鵜飼火や魚の心も夏のむし　北枝
川狩や旦那と見へて何もせず　カ　桐之

谷汲にて

順禮も仕舞ふや襟に鮓の飯　去來
若葉にも醉て見ようぞ山に山　最上　風仙
空色の降くだりてや衣更　黒崎　沙明
禪門の杖つく〲ところも更　二川　白雪
綿抜や隱居に客の二三人　アリソ　高之

あぢさゐの花のみだれや雪の閣　仝　路青
桐の葉はいふ所なし夏木立　仝　玄指
鮓から國の黒さよ夏木だち　福光　一康

大和路をめぐりし比

五月雨に見殘したりや笠置山　仝　柳士
卯の花やお袋つゞきの峯は雲　城ケ端　不旧
山鳩や灰にまぶれし藍畠　仝　十治
旅人に都語らん一夜鮓　仝　榮信
芥子散て咄もうそに成にけり　カ　意ゞ程
いそがしや牡丹の花も一夜咲　カ　烏ゞ水
世の中は椽でめしくふ牡丹かな　桐之

義仲寺 翁の塚に詣て

ちつとした事もゆかりや杜若　大坂　諷竹
杜若さくや日照の朝曇　浪化

月瀞堂によばりて

飯鮓や艸の廣葉の折かへり　ミノ　木因
あの中に火やとぼされむ百合の花　支考
いねぶりや人の扇の風が來る　万子

納涼

風もふけ落たさうなる竹の皮　井ナミ　荻人
風持て出る木ずゑや夏の月　カ　此ゞ山
あだ花の咲ても嬉し瓜の花　仝　落月
夕立に花散あとや瓜の筆　井ナミ　夕兆
宵闇やいきりにつれて瓜のかざ　高岡　好風
風の香も瓜のうねりや馬の上　大聖寺　冠雪
ねたものはねせて置けり沖膾　大聖寺　方錐

美濃の關にて

町中の山や五月ののぼり雲　丈艸
螢火や夕立殘る竹の雲　烏水
雨はれて葉うらを出るほたる哉　石動　其夕
舟よせて見ればすくなし飛螢　仝　咫尺
柳出る螢や波のうねつたひ　福光　巴兮
草の葉に出たがる蚊屋の螢哉　高岡　北人
草の蔓引ばひかるゝ螢かな　カ　文ゞ砌
金屏に追こまれたるほたる哉　仝　一洞
ほたる火や人は見つけぬ藪の花　有ソ　海人

仕懸たる仕事も多き蚊遣かな　仝 野刀
片隅へやりてもみたる蚊やり哉　石動 方堅

東花坊を送る
暑き日や蘆間の田鶴のはなれ際　仝 宇白

おなじく
夕顔や誰とならばむ明日の老　不旧
夕顔の垣ねはどこへ蟻の道　石動 一点
夕がほに余所の娘かこれの子か　高岡 管吾

休七庵
晝がほに寐て夕がほに涼み哉　支考
晝顔や魚荷過たる濱の道　山中 桃妖
びいどろに酒のうつりや雲の峰　石動 濫吹
杣人も鳥もかよはず雲の岑　林紅
海中は舟ちり〴〵や雲の岑　井ナミ 呂風
日の入や紅がら吹し雲の峯　巴兮

支考を迎へて
ゆかしさの袖にも餘る暑さ哉　福光 半綾
一雨につゐて行たきあつさ哉　石動 爲尤

日黒みを鏡にむけてあつさ哉　仝 吏全
高札に蟬の來て鳴あつさ哉　長緒
行雲の切レにいきする暑さ哉　浪化
其形を水に咲たる菖蒲かな　カヾ 蕉雫
賣殘る菖蒲やをのが軒の妻　仝 小春
あやめふく屋根から鯛をねぎりけり　仝 南里
姫百合のそだてあげたる小蝶かな　仝 志榮
蓮待て卷葉日に〳〵涼み哉　城ケ端 知足
鐘樓から誰やらしかる池の蓮　カヾ 林陰
おのが花をうづむや夏の草の長　福光 素好
河骨やりきんだ雨のつゝみやう　仝 一雨
蚊の聲を吹ぬく風や闇の門　半綾
釣ときは酒呑童子も蚊帳かな　秋之坊

山家にて
鶯の世間仕まふて鳴音哉　浪化
又次におほつかなしや桐の花　尾呂 鼠彈
木履には誰挽そめて桐の花　高岡 丹岫
熊野路に知人もちぬ桐の花　去來

郭公

旅瘦や木の根岩ばな郭公　正秀
ほとゝぎす尻に聞ヵせて飛脚哉　浪化
あふのいた顔に夕日やほとゝぎす　雨青
月華の外へは出じほとゝぎす　カヾ 和丈
郭公卓に香爐の座敷かな　大聖寺 厚爲

越後の國山の下にて
雲あれて波から出たか郭公　カヾ 四睡
時鳥鳴夜は寒し夜着ふとん　巴東
傾城の茶漬ごろ也ほとゝぎす　仝 魚素
闇に來ば山ある方ぞほとゝぎす　井ナミ 路健
何あてに行やら闇の郭公　ブンゴ日田 倫女
初聲は何ニであつたぞ郭公　カヾ 翠女
一聲で姿を仕舞ふかほとゝぎす　万子

月夜の松原に醉狂ひて
狂亂の稽古の中に杜鵑　丈艸
若やぎて啼や五月の郭公　北枝
郭公こぼれかゝるや松のうへ　風國

ほとゝぎすのぼり坂より下ッ坂　小春
ほとゝぎす鴉の月夜や待まうけ　支考
田舍には青大豆時やほとゝぎす　句空

晩望　支考

其許は涼しさう也峯の松　支考
　客を送りに出る瓜畑　林紅
米櫃を御供の衆の見さがして　浪化
　日はがんがりと窓の朝夕　嵐青
ふら〳〵と百日紅に秋の色　吏全
　砂に暑さの殘る庭鳥　胡中
月にとて門は薄縁たばこ盆　濫吹
　若い心に子を抱たがる　巴兮
ウ 髮ゆふて跡も仕まはず白小袖　半綾
　持佛はじまる燒香のかざ　氷麥
美盡せる浮世の嵯峨の杉柱　荻人
　今年も雪の山茶花に降　呂風

手習はあがらぬものと思はるゝ　夕兆
鱧(ハモ)かと問ば糊をする也　路健
咋日から隣の内儀どこへやら　執筆
盆のこゝろのまた彼岸迄　支考
豆の葉も色づく鳥羽の畷(アゼ)傳ひ　林紅
雀吹たつ秋の朝風　浪化
殘月にしらけて雲は水の泡　嵐青
坂越す人を笠に見かすむ　吏全
花散て資貢の親仁淋しがり　巴兮
廊まく肥(コヘ)の匂ふ門前　濫吹

二

燕の何やらいふて行ちがひ　支考
舟からあがる杖に風呂敷　牛綾
振袖の連も似あはず道心者　胡中
洗足どきに雨の降出す　荻人
張なさぬ屛風に反古取ちらし　氷麥
よごれて來たる猫の鍋墨　夕兆
何方も神はおたちか此寒さ　浪化
水渺〳〵と松の出ばなれ　林紅
武者一騎見かへる城のいとま乞　路健
耳におぼゆる淨土寺の鐘　支考
三日月に蔦の夕日の照殘り　呂風
濃茶にならぶ人〳〵の秋　浪化
朝比奈は烏帽子着せても相撲兒　濫吹
幕の物見に風あるゝなり　嵐青
ウ川船の切手にあがる關の前　吏全
何あて事に牛房うるらん　胡中
若い衆とあそべば髭にたをされて　林紅
丁子小紋の羽織にもあく　巴兮
歸り來て伊勢の久居は久しぶり　浪化
掃除寄麗に寺の墓所(ドコ)　濫吹
雉子が出て啼ヶばあれをと思ひぬる　支考
これの山葵(ワサビ)を見るにつけても　浪化
月花に咄しの有た隱居なり　嵐青
おかいこでやる辰が仕あはせ　夕兆
開帳の土産も雨にぬれて來て　牛綾
鑵子は庭に尻ひやし居る　支考

芥子の花さても見事に咲せたり　荻人
　藪のあちらに味な比丘尼　呂風
三 宇右衛門がほれられ顔に咳ばらひ　浪化
　あれほど下手な笛もあるまい　路健
御馳走に殘る所もない日和　巴兮
　伊吹の山を田のうへに見て　林紅
桃色の娵入がとをる馬の鈴　支考
　今の子どもはおとな耻かし　半綾
鍋蓋に何やら煑ゆる冬籠り　氷麥
　ぬすまれさうな垣の水仙　荻人
有明のぬれたり干たり村しぐれ　夕兆
　我は泪のかゝる狩衣　浪化
息災で居やらば文を松の風　林紅
　壹步二つを鼻帋にをく　支考
あら壁にまづ腰張の青疊　呂風
　蚊もまれ〳〵にちかき川音　嵐青
ウ 都から明石の尼へ味噌が來て　浪化
　向ひの人が果報うらやむ　吏全

寐てばかり居ても世間はアゴだるし　路健
　やつこ豆腐にいざやもみぢ葉　濫吹
棹鹿の聲も高野ゝ秋の坊　支考
　さても〳〵の月の月影　巴兮
眩ばつて鼻かむやつは彼男　胡中
　膳が出たとて三味を取おく　浪化
北風に雪隱の戸を明捨て　荻人
　寺子どもには蠅がつく也　支考
齋米を持て來て守をいやがらせ　嵐青
　明日の節供にセキダをろすか　呂風
壬生の花東寺の花と打續き　半綾
　一圓隙のなき雲雀かな　荻人
田をくだく鍬のひかりに春暮て　濫吹
　どの御門主かしらぬ長刀　柳士
物とへば白髮の祖父のうなづかれ　支考
　甲賀でならぶ家もおじやらぬ　林紅
さあといふ時は段子の夜着ふとん　吏全
　野郎もしばし夢に我を折　胡中

弘法でないかや今の法師ゐ　路健
　分限な門は犬が鳴也　支考
魂祭る椴の木ずゑの夕月夜　柳士
　余ほどこびたる後家の秋風　半綾
朔日の今朝は團も打をきて　浪化
　芝の肴のたつた今來る　巴兮
陸奥殿の眞似を身どもはならぬ也　嵐青
　湯婆(タンポ)と寐れば夜こそ寒けれ　夕兆
化(ウ)やうが古いと狸とり置て　支考
　お茶屋の松に風さはぐ也　浪化
赤いもの着たには余所が思はるゝ　荻人
　田舍の衆は合点行まい　路健
何事も和尚次第に油あげ　濫吹
　障子はらりとはづす青天　呂風
秋なれや越の白根を國の花　浪化
　長月ごろの雪をいへりけり　林紅

かの夕顔の哥のおかしきにつけても、あさ顔は俳諧師の友ならずと、そこの花の哥なむやりて見ける

西花法師

あさ寐せよ夕ねはすなといふ事に
　それその花の白くさけりな

かへし

休ゝ山人

かほともを晝ねに見しかそれそこの
　花よりすこしあかくぞありける

そこの花　下

月見

黒い身に照こむ旅の月見哉　去來
家もたぬ身は家〳〵の月見哉　北枝
喰物を仕まふてからが月み哉　カ 巴ゞ堂
招かるゝ抄子わすれて月見かな　井ナミ 氷麥
名月や露を蹴させに夜の駒　浪化
名月や瓶ッのにほひの茄子汁　雨青
名月やくもりつめたる岑の松　魚素
蔦の葉のぬれやむ隙や峯の月　カ 林ゞ陰

仕官の身のいそがしく、名月の夜は更科の埜に駕をとばせて、やゝ明たる空に向ふ

月の雲鳥の鳴は何郡　万子
得手に帆をあげて夜鷹の月夜哉　支考
虫もはや鳴ておほゆる月夜かな　林紅
秬の穂の上に白根の月夜哉　大聖寺 虎角
水梨の水持そめよけふの月　仝 長水
名月やいつもといへど茶の匂ひ　宇白
小座敷や雨にかたまる月の客　野童

七夕三夜

前夜

逢坂のこなたや星の鏡山　浪化

其夜

星もさぞあかしちどみに淺黄うら　北枝

後夜

ばせを葉に今宵はほしもたどひとり　支考

文通

草の葉に出てなけ壁のきり〳〵す　露川
分限者の都に出よきり〳〵す　東推
溝のあるところへ掃ぞきり〳〵す　丈艸
生わたす野松の裙や蟋蟀　荻人
ゆつくりと芭蕉になけよ蛬　左右

涼しさを持て落たる一葉かな　四睡

採茶庵にて

朝がほや其日〳〵の花の出來　杉風

稲妻の跡についたる心かな　万子

稲づまや猫も歸らぬ宵の闇　カ 宜ヾ作

稲づまの殘りや松の薄赤み　福 竹ゝ紫

山行

松風に殘る暑さや帶の下　仝 是通

秋かけて土用ながしや風の音　路青

蜩や梛(ナギ)の葉ひかる片日照　海人

立烁のふりを直すや雲のさび　吏仝

瓢單(簞)になる花〳〵や今朝の秋　嵐青

葛の葉のまとを見せよ秋の風　山中 自笑

わせの香やつぼみて出る谷の風　方堅

稲の穂のしなひや秋の一しづく　石動 從古

山人も詠めて刈や萩の花　仝 正木

萩の雨笠かす程はふらぬ也　カ 三ヾ通

咲かけよ秋のあはれを萩の花　東推

相知りたる女わらはの宮仕に出る

時中侍る

狹萩もねたがる中ぞ女郎花　從吾

馬士に見られて赤し森の蔦　北枝

蜻蛉の隙なき空や竿釣瓶　一洞

灯籠の仕まひや虫の鳴はじめ　ミノ 李元

松むしや磯山陰を暮廻す　浪化

旧里に歸りて

聖靈にもどり合せつ十とせぶり　丈艸

芋角豆里の便や魂まつり　桐之

編笠に忍ぶもゆかし魂祭　半綾

松杉やしづまりかへる高灯籠　香鶴

盆市や精進物を棚がしら　アリソ 不流

筑前博多にて

菊の香にもまれてねばや濱庇　去來

門番も菊一かぶのあるじ哉　厚爲

酒のみの心にほれぬきくの露　北枝

菊の香や降ならひたる雨の瓣　石動 乃雛

菊萩とねばり合けり月の色　藕光　只艸
鮫鞘のあかつき淋し星月夜　柳士
朝露や畠によごす鹿の顔　素覽
鹿の音の入ほど窻のやぶれ哉　嵐青

蕎麥一生涯

花そばやうす紅(べに)の後墨衣　支考
白雲につれて平たしそばの花　林紅
塗笠を松にかけてや木の子狩　是通
照笠のいらぬ日和に紅葉かな　呂風

宰府奉納

幾穐の白毛も神のひかり哉　去來
しやんとして千種の中やわれもかう　路通

路通に別る

秋かぜに塵ふみたてし行衛かな　万子
百姓の秋の暮とや濁り酒　藕糸
鴫のよりてはくづす秋の暮　林紅
梟の何ほうばりて秋の聲　巴兮
深草も隣ありきやうづら好　牧童
雁のころ闘ば勝手はなら茶哉　小春
日の暮や穗にあく雁の友狂ひ　北枝

悼二風國一

洛の風國身まかりけるが、秋も文月の三日ばかり、露も置あへぬ風の音に人を驚かすならひは、これが身の上にも限るまじ。彼は蕉門に名をならべていみじき役者たらむに、人のかみにはたらきて、泊船とかいへる集作りて、風雅の名くたしたるも、先賢をはかるべき其身の修力にたへざるならん。又して初蟬・菊の香のふたつの題名にあやまりたれど、〽三日月の秋をはこぶや草の上　といへる一句は、人の及まじき一筋を得て、終に文月三日の其名殘とぞなれりける。

三日月や名は有明の草のかげ　支考

おなじく

朝夕に語らふものを袖の露　去來
稻妻に筆を投たる便かな　浪化

七月十日洛の去來文通、六月廿日平旦より辰刻迄、洛中迅雷大雨、珍事いふべからず。就中なにがし野童、院の御所宿直所に有て雷擊に當り、相果申候。數年之心友、今朝相弔候へば、老母の歎き稚子の悲しみ、行末思ひやられ落涙仕候。誠に无常迅速、其許にも御驚可レ被レ成候。此一難は鴨の長明が思案にも落申間敷候。

されば此そのこは、先師死後のはり笠を廟前に備へて、蕉門のなつかしき名なりしを、なくてぞ殊更に戀しき人なりける

其笠にその身も秋の旅ね哉　浪化

朝顏やゆふべの人のなき便　支考

翁塚記

元祿庚辰のとしの春、都にのぼりて、はからざる事に水無月半までありしが、すでに秋ちかき風の音におどろきて、越路の方に歸らんとす。道のつてよろしく粟津の義仲に詣て、故翁の廟前に跪て、つく／＼生前の事を思ふに、まのあたり遠からでなつかしかりし年月も、はやむとせの秋に立變りて魂まつる比は、我住里に其魂を招かむ。されば此塚の木の葉だに其ゆかり淺からねば、基下の小石を拾ひ取來りて、かねて此塚を築かむ事を思ふ。こゝに一字の淨蓮社あり。その所は人家遠からねど、松杉の木だち深く俗をへだてゝ、をのづから世の聞髭をきかず。竹茂り水流れて、淸閑その境を得たりといふべし。此寺の傍に地をえらぶに、林紅がともがら心ざしまめやかに、庵主もともに鍬をとりて三尺の方墳をまねび、かの小石を壺中に貯へたれば、神靈の契りもこゝに金口ならむと也。予かつて京師在留の中に、かねて師門の高弟其處ゝの一順をこふて、十月十二日には十百の韻を滿て、此度の手向とおもひ侍れば、遠近文通に令信して、已に一順を得る事にぞありける。其月其日は殊に加賀・越中の門人を催し志を遂侍るに、今この基前にをの／＼手向の句をぞならべ侍る。

梅が香にすはる佛の目もと哉　土芳

鶯の朝日まつ音や谷の底　去來
百姓の去年もの語りほとゝぎす　諷竹
蓮にのる蛙は似たる空也かな　李由
草まくら有その稻穂たむけ哉　杉風

ワセの香の前書有　畧之

さゞ波に源氏供養か魂祭　露川
八月やしぐれの雲の底光　丈艸
月雪もむかしや愚癡のしらず當　荊口

夢中問答の記アリ

問へば風夢にも寒し師のおしえ　万子
七度や心を灰に夜の霜　浪化

すでに今年も文月十二日、折から魂まつりの比成しが、東花坊支考こゝに旅ねして、此時にあへるを悦び、無縫塔を造立す。時に芭蕉翁の三字を、この法師の記念にとゞめしめて、此塚の不朽に残し侍る。我きけり、樹石みな神あり。ましてよ是はまたき塚の石なりければ、いかで其靈その憐みなからん。しかれば師翁の神こゝにいまさゞらんや。これよりこのかた我翁の流を慕はむ輩は、此塚に詣して深く風雅のまとをもとむべきもの也。此比粟津の僧丈艸、國ゝの翁の塚を記して、其文をとゞめ申さるゝよし。くはしくはそのかたにゆづりて、此翁塚の次第のみみづから記し侍るものなり。

元祿十四辛巳初秋日　浪化稿

七月十二日　廟參

おもかげの尾花は白し翁塚　浪化
みそ萩のけしきばかりぞ墓參　路健
帷子と泪あたらしはかまいり　林紅
さゞ波や非波にかはる墓參　支考

雪見

冬籠る火燵に雪を待て雨露霜雪の四を分ち、又雪月花の風雅を思ふに、雪の比は更なり、されば春の花も梅櫻咲より散迄に、雪の色を忘れず。夏はさみだれにあれ果る古屋の軒端、暮かゝる空に垣ねくもらぬ卯の花は、まして雪

の興あり。秋は更行夜寒をも打忘れ、待月の山の端白き影は、ふらぬ雪かとうたがふ。冬は枯わたる野邊に殘る菊も、すは初雪の余所目あり。是皆古人の心を集て雪の情深し。私にあらずと思ふうちに降初て、宵よりあくる程積ける。いざ見に出むといふに、予は常ゝ煩しければと、人ゝさまたぐる。猶そゞろに成て、股引よ合羽よと出立。病衰の腕達打わらひて

覺悟して風引に行雪見哉　杉風

其暮

降かくす小家は雪のすがた哉　杉風

其夜

ふる〱とおもふ寐ざめに月と雪　仝

所思

歸りての酒も有べし夜の雪　万子

詠めやる奥のとろゝや比良の雪　去來

初雪や火をもらはるゝ隣あり　牧童

雪中風狂

招きこむ人セイ高し雪の笠　北枝

初雪や桐の葉はまだ落果ず　路健

初雪や松の落葉をちらしかけ　半綾

粲好のさびしく居られければ

竹の雪おといて來たる手紙かな　十丈

西行も雪の降夜は茶飯かな　浪化

蹈ゝ切て人は旅せよ今朝の雪　野坡

十夜十題

黑谷

黑谷の松に箔ちる十夜かな　路健

鉦

木ずへより鉦の聞ゆる十夜かな　荻人

親仁

性わるのおやぢもそこに十夜哉　胡仲

納豆

次〱の納豆ねさせる十夜かな　夕兆

日和

薪荷のはいる十夜の日より哉　呂風

茶の花

茶は嗜(スキ)で花はきらひな十夜かな　林紅

時雨

ふところの草履しぐるゝ十夜哉　吏全

噫欠

あくびする腹は酢アヘの十夜哉　嵐青

巾着切

巾着の後生きらるゝ十夜かな　氷麥

月夜

極楽はいつも月夜に十夜かな　浪化

文通

初霜や鐘樓の道の履の跡　許六

十月や鼠ふすぶる唐辛子　仝

南天にさはる音ある紙子かな　彦根 木導

深川の旧庵に古翁の檜笠をしたふ

余は世にたづさはる霰かな　四睡

面かはる霜のあしたのほあか哉　賴元

くつさめの跡の小寒き落葉かな　從吾

掛ものに一風來たる木の葉哉　桃妖

木の葉ちる陰やうるめの明俵　京 吾仲

はたらいた梅のつぼみや小六月　嵐青

ほこ／＼と朝日さしこむ火燵かな　丈艸

菅笠を着ながらちよつと火燵哉　ミノ 二竹

火燵から出れば煎太豆(マヽ)こぼれけり　カヾ 野棠

爐開や竹の骨折風の音　巴東

此夜家兄を祝て

ゐの子から似合て餅に頭巾かな　北枝

麥蒔や夜まけのしたる天氣相　路青

麥まきや磯邊のかたに鳴千鳥　有磯 風絮

何もなき洲崎ゝすめば千鳥哉　溫故

楫取の目あてにむかふ千どり哉　荻人

一夜磯屋に泊る事有て

やはらかな枕せぬ夜や浦衛　桐之

雁鴨の居なじむ比や枯柳　江戸 楚舟

逢坂の先ぬるゝほど時雨けり　許六

雪雲は愛宕にたばふしぐれ哉　浪化

いとま乞すれば又降時雨かな　藕糸

炭がまの峯をはさみて烟かな　石動 笑音

雲霧に馴たる髭や炭かつぎ　仝 可水

並居たる膝に月さす十夜かな　仝 芦葉

乞食の法躰したる十夜かな　吾仲

竹雀之賛

雀には東坡が雪の笠もなし　支考

梢には雪見よとてや歸り花　魚素

梅が香もしみこむ椽の寒ざらし　和風

米ひとつ蟻のちからや冬籠　アリソ 爲貼

丸瓢もろふて行む冬ごもり　城ケ端 山之

鉢扣まはりあはせや上手づれ　浪化

盗人に負ともいはむ鰒の錢　去來

松陰に兎は白き枯野かな　カ 八十

材木を引た跡あるかれ野哉　胡仲

木枯のねつきは寒し余所とまり　長緒

半分にかけたる月のさむさ哉　和風

蚤の子の泣寐入なる寒さ哉　玄指

旅行

煤はきやまた此茶屋もぶあしらひ　万子

草庵へ煤掃竹の无心かな　イセ 柳玉

煤はきや跡からきしむ井戸車　十治

餅搗や一臼かゝる鷄の聲　林紅

私にけふの寒さや年忘れ　嵐青

寒は既望の日より明て、風景とさらに恖然たり

十五日春やのしこむ年わすれ　丈艸

節分

片尻は春へかけたり梅の花　浪化

五十ばかりの古猫の鼠もとらずなりて、常にいろりに鼻さしくべて冬籠りたり。なまじい南泉の刀をのがれたるを、身の幸にして今年も暮ぬ

いづれもの猫なで聲に年の暮　嵐雪

花見

塗樽の庇に立よる花見かな　丈艸
女房衆は旅のやうなる花み哉　野坡
眉くまの猿も花見の日和かな　浪化
夜はしたにして寢る明日の花見哉　荻人
乘打を人なとがめそ花見笠　北枝
餅酒をはなれて花の木陰哉　ミノ 猿之
巣鳥の聲のならひや花の中　句空
花による人數ならば老狐　万子

西行の苔清水にて

憂世をばちらして花の苔清水　ヒメヂ 元灌
花の中出て草鞋はく流かな　文砌
田でかこふ花はあちらの在所かな　不旧

芭蕉の塚に詣して

志賀の花湖の水それながら　江戸 素堂
岨道や見かけて遠き峯の花　[illegible]光 逸正
鳥さしや白きをあてに森の花　仝 竹紫
とりしめて花にもおらす鳥かな　仝 一康

西行法師の哥のこゝろを

鳥めといはれてやすし花の中　支考

更に劉伶が鍤を借はじと興じて

醉死ぬ先から花のうづみけり　丈艸
花守は和田酒盛の五郎哉　厚爲
花鳥も頭痛やむべき日和かな　海人
鰐口の夜も隙なし花の中　不動 瑩曙
三味線や借あふ花の幕隣　柳士
たゞの木も花にして見る月夜かな　胡中

嵯峨の釋迦、武江に下り給ひける時

白雲や花に成ゆく顔は嵳峩　其角

文通

鶯の音に起あがれ雪の竹　凉兎（菟）
鶯や庭に來てなく程拍子　芦本
うぐひすや紅裏見ゆる翠簾の外　烏水
鶯に水の流や簀子椽　魚素
うぐひすのちとかしこくば鶺鴒　万子
雨雲のさばけて風の柳かな　牧童

先ッぬれてまづひる雨の柳かな　三枝

鳥むしのたはぶるゝも猶さらにこそ

柳見よ花の跡先くりかへし　杉風

青雲の底といふべき柳かな　浪化

白壁をのぼり越たるやなぎ哉　路健

目ぐすりの看板かけむ糸柳　呂風

若衆の出て居る門の柳かな　冠雪

黒椀に柳の影や若みどり　不流

柳へはゆられにのぼる蛙かな　松宇

春雨やむかしは旅の无分別　高岡 十丈

有明や青物市の春の風　八紫

行蝶のみだれかゝるや竹の風　半綾

ふすふりとつれだちて出る燕かな　長緒

背戸からも來るや燕の二所帶　ミノ洲原 可吟

巣をくふやつばめ骨折水の泡　墟ケ端 一川

廻廊やまがり／＼て山ざくら　仝 如空

見る人のありや鳥飛山櫻　自笑

勢一ぱいたはむや雨の糸ざくら　遲動

鼓打屋敷はひろし初ざくら　大聖寺 何山

山僧に中道しける

おそ櫻ちるや仕廻はとろゝ汁　アリソ 野刀

黒海苔は雲のりとも俗にいふ。一種兩名にして能州福浦より出るとかや。岩間に降積れる雪の、日に照されて潮に浮されて、此ものとはなり侍るとぞ。此間浪化よりの惠賜に、瓊章を添られたるにて初て其來由を知ぬ。取あへず拙き言の葉の藻屑をつらねて、其浦波の過をおもふのみ

海苔の名やたゞ打見には雪と墨　丈艸

雛の日や神のすべりの洗ひ米　日野 紅

松笠で蛤焼む汐干かな　句空

品川にて

初花に近江の人の汐干哉　彦根 汶村

風澄て松にちぎるゝ霞みかな　不動 石紫

出替のみつちや見直す夕霞　サガ 爲有

行春を亭主ねさせぬ牡丹哉　荊口

山吹やまはればくらき谷となり　カヾ　和友
山ぶきにくらさはくらし谷の水　高岡　野角
山ぶきの色も消るや奥の院　恕風

歳旦

蓬萊にかけてかざるや老の袖　去來
蓬萊や椽であしらふ村雀　木因
紙子から世に出ゆよ花の春　凉兎
春も今朝夕がほ形にのどか也　左次

人日

うつくしき手も海老になる若な哉　溫故
庖丁に袂もぬれて若菜哉　浪化
一畦は胡蝶に殘す若な哉　肥後　惠松

梅の花見にこそ來つれ鶯のひとく／＼といとひしはおる

江を越て鳴うぐひすやよい合点　北枝
鶯や折／＼すべる竹のさや　カヾ　輕舟

夜深うして旅立ける時

鷄やまだ鶯は夜中藪　浪化

うぐひすも啼て出るや獨活蕨　巴東

石動山にて

鶯も鳴顏見せて谷深し　君之
蝙蝠もひろがり行や朧月　知足
朧月何と見たるぞ鏡磨　是通
夜雨して明るすみれの日の移り　桐之
植かへて菊にこかるゝ菫かな　城ケ端　和笑

餞別

見送りの先に立けりつく／＼し　丈艸
穗に出てつばなも野邊に廿日過　諷竹
朝露に松葉をにぎる蕨かな　野棠
布さらすそれから末も菜種哉　濫吹
花散ていかの尾かゝる梢かな　從吾
人ごゝろ木毎にうつる木の芽哉　石動　菅山
若餅の手ぎわや白き帳の耳　野紅
藪入や里の垣ねの一騎打　千川
屋根葺のほむるや余所の桃の花　魚素
足洗ふ石川淺しもゝの花　高岡　市中

抑懸の客けしき也桃の花　ミノ 大盧

四十雀地に囀るや麥の節　浪化

道〳〵や拾ひ喰ひして歸る鳫　ミノ上有知 吏明

横たはる雲は棊にひばり哉　林紅

夕闇に落る雲雀や子のあたり　北枝

朝空や星と雲雀と入かはり　賴元

獅子庵の主人、東西兩華の廻國終りて、此春又うき世の北の山櫻見ばやと思ひ立申されしが、一日湖山の草廬を敲て、離別の吟を催せり。折節山野が屏居の砌なれば棊汔送り行に、班荊の志にもまかせず、むなしく粟津の烟嵐に向ひて、遊鳥一聲の響に慣ふのみ。

松風の空や雲雀の舞わかれ　丈艸

梅

しづかなる上の閑かや梅の花　惟然

十分に咲ども梅はしづか也　江戸 依々

梅折て跡に物くふ手の匂ヒ　仝 希志

梅見るや客も亭主も出家衆　仝 子葹

梅が香やそしるも知らず小家好　此筋

んめが香や空とぶ鳥もたゞならず　八紫

梅が香や篠葉も垣も冬のまゝ　文砌

篠の葉を度〳〵はくや庭の梅　呂風

むめ咲てあがる日和のはなが哉　吏仝

越路の方に趣(赴)くとて、今宵はおもひがけぬ寺に一夜のやどりまうけて、明日は其人も歸らんなどいひなりしが、見しらぬ顔にさしむかひたるも、行脚の心づかひのはじめにぞありける

菜もつまむ梅見てあそぶ僧ならず　支考

進上に闇をかねてや梅の華　其角

物ごの春に殘るやんめの花　路健

此梅の花にまけたる小寺かな　狄人

若木でもぬからぬ梅のひねみ哉　落月

うかゞふて梅見にかゝる門がまへ　爲貼

梅が香を末へもて來る流かな　城ケ端 詩蕉

むめが香の咳氣は猫に小判哉　只帅

梅が香や物なつかしき硯箱　高岡 河菱

梅が香や物の音なき大工小屋　三通

白粥によばるゝ朝や梅の花　曾良

見殘すや火鉢へもどる朝の梅　杉風

野亭題梅

きのふけふ風のかはきや梅の花　浪化

ひいき目に宵のくもりや梅の花　北枝

何とした顏の出ようぞ窻の梅　万子

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

花の雲

千山撰

故翁の手跡をなん、とし月我懐にのみ、これすらむかし忍ぶのしのぶ摺、見にまかられける時の句なれば、なをあはれさ中〱にこそ。

もち摺石はふくしまの驛東一里斗に、山口と云所に有。里人のいひ傳へ侍るは、往來の人の此石試むと、麥草をあらし侍るをにくみて、此谷に落し入侍るよし。今はちがやのなかに埋れて、石の面は下ざまになり侍るとかや。誠に風流のむかしにおとり侍るぞ、いと本意なくおぼえ侍る。

早苗つかむ手もとやむかし忍ぶ摺

武陵芭蕉菴桃青

このたはぶれを今、集の濫觴として、あちらこちらの文に聞えつる佳吟をも、梓にものせんとする行脚烏落人が見て、此名をかちん染と言むか。いや〱花の雲と呼ん。そのより所はとゝへば、例の氣量無差別といひながら、その草枕のながめもさぞあらんものか。

播陽春曙菴　千山

夫開口言事遮口詠物豈一物哉一事哉酒落胸中鬱結心意一吐解紛不執一言之故有情有趣有興有樂也詠諧之於作也亦猶此乎今之詠諧者一人初唱謂之發句也其發句乃春光夏陰秋色冬景是而已矣使地雖他言語事實而不結構春秋冬夏之氣候之則不得爲發句焉世以爲麗(マヽ)格也頃者渠魁惟然之徒倡而誘之以諸雜之發句焉予聞然之何可無焉乎哉蓋中古撰古今和歌集雜躰之中有詠諧体則今日之詠諧亦可有雜體也必矣于山崎請余余不能拒以爲之小序云爾

元祿壬午秋閏八月念一日

播陽安積仙識斎書　［安積仙章］［識斎］

花の雲

誹笑一折

疾〳〵と言てまだ來ぬのつぼりと　元灌
めたくた風にそこら出て扨　千山
ざんざつと汲み捨たをなぐさむぞ　惟然
盧舍世界か世界こくうか　厚風
川からはいつそまたけた事にせう　良丶
ひつとり廻す露の稍むら　灌
どふか秋屁こきに出たる時なれば　山
ぬら〳〵是はこれはぬら〳〵　然
氣づかひのめの字もないぞ此しはさ　風
地獄鬼畜生むじや〳〵〳〵　丶
今時今とこらあたりへいなさんせよ　灌
瓜をふたつに割たじやはこれ　山
ちありとも人に青野が原などは　然
よういふ事よそれはたるまい　風
坊主でもはゆると申沙汰がある　丶
忘たらたゞわするゝもよし　灌
そこで花したぞやれ〳〵したぞ花　山
なるほどどかと長閑なりつら　然

八月十二日於妙國寺興行

そこら嗹譁寐の連の揃ふつら　千山
是はかふ〳〵かふ〳〵の事　良丶
すつぺりと殘らず山も空めいて　惟然
へこたり川と言はへこたれ　元灌
そうかそうハア〳〵月がハア月が　寒爪
あつたら秋に味噌をさいたは　梅高
とろ〳〵と日の細ひからほれが出る　往正
馬もならべば舟もせり合　菰洲
めつそふな所を禁てとつとたゞ　定當
我もよふたかおれも醉たぞ　布流
にょ〳〵むによがそこら〳〵に入事は　元用

風がよいとて凧ども引な　宜意
ありや鳥がそりや月じややらそりや〳〵よ　多幸
なまづけなげに鮎もさびたぞ　至樂
共とをり雨からさむい肌さつと　一風
元享(亨)利貞つてん〳〵〳〵　元川
身ども共などゝて花にくれかゝる　厚風
朧〳〵と湯づけなるほど　宜意
鶯の力ゝであつたか啼なんだ　梅高
糊をすつたら寺へまいらふ　一風
笑せう腹のたくれてあがるまで　流末
ころりとそこへ髮の曲たが　尋旧
あんなあかいお宮はそちに有まいぞ　寒爪
水あびそこなふてがんぶ〳〵　至樂
氣がゝりや死出の田長のしの字とも　洛茨
根つけのやうな祖母様なりつる　多幸
此山を廻て行ばやとゝをい　菰洲
御面かけたぞ扠はかけたか　尋旧
ちつとちとちつくりヅヽの月夜なら　布流
師匠があろとあの角力では　京風
どろ〳〵は秋を呼出すとろゝ汁　盾山
アヽ寐られぬぞ〳〵ぞアヽ　流末
降ほどでふがひもなげな初雪は　之畦
田樂せうや〳〵すまいや　雪柯
すつほ〳〵花にさそへどぬけたがる　冬月
ありやんもや東風が東風が扠こそ　雪柯

秋

松風のひき捨を啼うづら哉　浪化
何なりとからめかし行あきの風　支考
老の身の形見におくる秋の風　尼智月

湖南人にわかる

とかくたゞ筆がいのちぞあきの風　作　取貝
ずつとたゞ藪に木のある秋の風　千山
むし〳〵とすれどもけには秋の風　菰洲(ヒメヂ)

みなもかふ横になれ〳〵秋の風
(ヒメヂ) 元用

(若)愛客山奉納

調拍子や松から秋の風なれば
(ヒメヂ) 至樂

わさくさい娘をのぞくおどり哉
(同) 冬月

朝夕に見る子見たがる踊かな
(ブンゴ) りん女

見へましたお相撲見へた見えました
(大ツ) 尚白

會者定離のこゝろな

すまふ場へもどれば松の嵐かな
千山

象眼の錣やぴかつく釣灯籠
(岡山) 雲鹿

露とさへいへばすゝきの糸萩の
(的形) 學桃

秋季にもたるかよ露の五郎兵衛は
孤洲

湖南人にわかるゝ

うつむいて別るゝ道や草の露
(吉備) 高世

それもありこゝにこれ〳〵露が浮
(ヒメヂ) 良丶

三ヶ月の薪に入や浦はたゞ
(同) 厚風

物たらぬやうに沓いふ月夜哉
(同) 盾山

長崎にて

浦人を寐せて海見る月夜哉
去來

あれ月よあの雲の内〳〵
(ヒメヂ) 青柳

三桀軒の三字は、二百才にたらざる壽老の手跡にて、窓前松あり菊ありながら、再久世のおの〳〵に對面すといふことば書ありて

先あきよ月をたがいの無事ながら
惟然

盗人も見るであらふ(か)ら秋の月
(タツノ) 冬旨

月影を芋さ大豆さと爭や
(ヒメヂ) 友梅

三ヶ月にもふ木の上のしづかさは
(同) 梅高

月そうで月でそうなで松の中
(同) 宜意

ねぶたがる人を起して月見とよ
學桃

ふととらえふとはづれたる薄哉
素流

鶏頭は月夜ぶれども淋しやな
良丶

朝がほのあとにとんしやのかねぞ鳴
(ヒメヂ) 雪柯

松嶋に舟をうかべて

嶌〳〵や邪魔にもならず蔦かづら
(備中) 千調

先かふは出たらの稲のくれかゝる
(ヒメヂ) 梅嵐

栗かりに行はいたもののさすがゝ
(同) 布流

暮行や紅葉の上の風ちつと　同　玉林
桶しめる音も木槿もくれて行　西治　風聲
けりくさき茄子のあぢの寒サ哉　元灌

八朔

早稲の香やふもとへ出れば眞晝中　作州　たゝ女
挽臼のごろり〳〵に一葉哉　北條　風石
鹿の音の川原をころぶ嵐哉　同　輕舟
みち端へゆがんだ桐の雫哉　ヒメヂ　一峯
何所こくうさりとは桐のあんまりじや　ヒメヂ　寒爪
しら菊や二ッならべて後の秋　散人　雲鈴
蕎麦は先親と醫者とをおもにする　タツノ　雲召
桐の葉やおどりの中へばつたりと　的形　つね女

山寺をとひて

蓮の實の飛や時ゝちよんぶりと　風聲
あさがほに念佛申ふるみ哉　千山
暑もなし寒ふもないぞ菊の花　ヒメヂ　止風
こゝにさて何がこぼれてかいわり菜　梅高
壁土に娘の稲もくろみけり　皐桃

訴笑の一間もの新しさは、宗匠冬
月のこひらろゝにぞ

幾秋をかふ車座でやるならば　至樂
刀豆のすねたこゝろに成て見や　布流
こりや紅葉中に青みのちつくちく　ヒメヂ　多幸
風になびくもみぢの錦扨も〳〵　青柳
鶏頭や灸しまふた嬉しさを　梅嵐
散てから取はやさるゝいてふ哉　皐桃
それもしかれ是もしかれよからす瓜　盾山

虫は

虫の音やこゝらの土手を我物に　タツノ　一幸
虫の聲いづれもすいとさあ枕　冬月
虫の聲あれ聞わけよこりや何ンと　倉敷　簑里

旅行

物掛て寐よとや裙のきり〳〵す　丈草
すゞ虫がいつの間に來た坪の内　作州　山重
渡し場をあがればそこらきり〳〵す　ヒメヂ　紫藤
さびふぞとおもふて虫の啼かやれ　千山

朝露によるや門田のしほ蜻蛉　ヒメチ 之哇
あき雨や笹の裏葉を吹とをし　大坂 謳竹
鯉鮒の空や見かへす秋日より　雲鹿

待戀

ひいやひやなしもつぶてもなきよ哉　厚風

鐘聲出暮林

冷〳〵のけふらひはたゞ杉はらり　盾山
秋にむかふ橋は在所のちから哉　小谷 此谷
出たぞ〳〵何であらふと朝霧を　擧桃
野の色もさあさびて來る秋の空　布流
風しみて念佛すがる今宵哉　之哇
秋じやぞい噺に來たらはなそうよ　至樂

但州の湯に行き、こゝかしこに牛飼どもの淸水をかくしがほなるを、しらぬもおかし

糸萩を分て淸水の味さわい　多幸
此ごろの屋根のこけらや秋のくれ　北[illegible]女 一言
女郎花しなりくなりと秋くれて　大津女 錦江

びんぼなれど淋しさ何の秋のくれ　擧桃
川音も山をへだてゝ雁渡り　小谷 颯ゝ
鴫の聲萑もほどなふ明たはの　菰洲
田鳥（鴫）はしり氣むきしだいの旅なれや　盾山
ふうはりと鳴に出てまあ是はマア　元用
みそさゞい〳〵とて渡りがち　ブンゴ 朱拙
はた〳〵と露を拂ふかあさ鳥　ヒメチ 尋旧
つつと空風にしひける雁の聲　定當

聰の字のむづかしさに、言かえて
我と賀ス

あれめかで是めく秋か猶さらり　良ゝ

ふしみ夜舟にて

ほのくぞ（ら）に雁落かゝる夜さむ哉　路通

冬

有明にふりむきがたき寒サ哉　去來
寒そふにして居られたが去れたの　大坂 含羅

女房どももふ頃日のさむさ哉　風石
凩や屋根から鳥が啼出す　備刕 一市
木枯をたどしまらずに行まいか　多幸

佛法不離世間

紅葉のはなしもはてゝ十夜哉　雪柯
時雨るゝで念佛のしむ十夜哉　舉桃
もふ出よとおもへば時雨はあしぐれ　千山

閑居

しぐれいでいらぬ所は時雨ふか　菰洲
いさかいの相手うしなふ時雨哉　輕舟
此しぐれ奥はたぶんが雪である　御着 一聲
はつ霜やどちらむいても海の上　高橋 桃雫
初霜の置や鞍縄打たゝく　ヒメヂ 春宵
菜畑やひら／＼と古ふどし　之畦
めたくたと葉を引ちぎり大根／＼　越中 市中
山茶花や開きはじめの一調子　りん女
茶のはなに夜をこめて出るかく夜哉　雪下
枯芝に身をごそつくは雉子かやれ　越中 比人

ずうと行鳴の心をしらで何　岡山 兀岸(峯カ)
なけちどり逆(マヽ)に舟のさびしさを　的形 桃支
何鳥ぞとぶりと川へありやあ社　寒爪

野明別(雲カ)野にて

柴の戸や夜の間に竹を雪の客　丈草
夜明かとおもへば雪のふるにほんに　至樂
こは雪ぞ昨日の晩はよい日和　小谷 此谷
初雪や玉味噌わたるみそさゞい　ヒメヂ 流末

千句卷軸

此ゆきにのらこく連はたれ／＼ぞ　千山
何ぞふとかたまり初て海鼠かよ　ラヽ
冬がれの山を見かけて初くじら　大坂 芙雀
糞(こへ)とりがいふたでこそは初氷　ラヽ
白酒で女もまじるとし忘　舉桃
水仙や師走の空をうつかりと　但州直人 禮都
河豚汁や風呂に入ても何のその　尋問
師走の市葵の莕の縮に似たり　扶揺亭
木津川や舟で氷をたゝく音　ゼヾ 正秀

早咲の梅のにほひや院の御所　ヒメヂ 撥草

春

いつのとしならん、元灌亭千句興行、巻頭に

此風雅世にひろまれと花の種　惟然
鶯に雨をはらしてくれたふて　羽州 重行
うぐひすがそりや鶯が〱　至榮
春の雨ぬれても貰ふ梅の花　大坂 しゅん女
むめで持庭なればなふ詠ふぞ　柏原 坡三
物おほへよふない梅の時なれば　筑前 園子
傳具にする宿替の荷の梅のはな　輕舟
おもふまゝ思ひのまゝにんめの花　多幸
醉たやらんめのにほひも惣も　至樂
ちる梅を若菜つむ子のおしみけり　つね女
かる〱と隔夜の袖にんめぞ散　風石
紅梅や何もそだゝぬあそこらは　越中 一村

柳は

どふなりと逆うき世にいと柳　倉敷 青楮
青柳にぐふりとくゝるかいつぶり　ヒメヂ 梅枝

花

花はまた誰にほるゝぞ天王寺　松下氏 湖丸
それはそれ花は都でせかそもの　いよ 淡齊
あそこらも花であらふやホウ霞　元用

破禁盃

よしや死ぬ花にきはめし酒の數　カヾ 北枝
畑にも成ふ野を行花にけふ　越中 路健
暮ながらはなのけしきは有山ぞ　小谷 此谷
花に來る人には酒が有ふなら　ハシウ 竹獅
さあさらば花見の笠をかふかぶろ　定當

ある山寺に見まふ

もつぱらは大工の上をあるぞ花　ラヽ
味ほどに人は譽ずよなしの花　鈴木氏 一好
角菱の餅にありとも桃の花　大坂 鬼貫

蛙

かはづ啼此間やうは有ふ物　大つ 乙州
ゆふべほど蛙の飛だ夜はないぞ　ハシウ 素翠
この中になかぬ蛙も有そうな　千山
くらがりの峠を下りつゝ奈良に急
事あれば
晒場にかふか生駒の牛頭くも　盾山
麥ばたけそこに雲雀の寒さ哉　ミノ 怒風
あたゝかやすゞめ烏に蔦ひとき　颯ゝ
きじ聞に一夜どまりの用意など　千山
行人の春に着ないた笠見やれ　豊後 可曉
いとゆふは別してもなうてとにかくに　ラヽ
ばせを廟前
打むかふ春やむかしの塚の草　浪化
むかし／＼世上の春をばせを塚　江戸 素荻(狭カ)
烏落人のはりまに行を
こゝろせよ風などまんだ寒かへる　ミノ 大空
春なれや油のにほふ臺所　雪柯
はる雨や寐るにせうかよ出ふかよ　ヒメヂ 至柳

むつまじき人のもとにまかりて
立よりて春の名残をどふかせう　筑前 万袋
鳥飛てあらおもしろの春べやな　イヨ 鈍子
はるさめに無分別なる人が來で　千山
丹野が父の追善
中陰の酒のさかなは苔である　大つ 木節
宿替やつばきなんども散てから　風聲
すみれ／＼軒根かまねのつぼ菫　舉桃
岩かげにのがれて獨活の若葉時　仝
かれ水の小鮒ぴち／＼ぴつち／＼　定當
はるさめにさらば碁盤の置所　一葉
湖上眺望
霞／＼わざ／＼こゝに山はどふ　菰洲
出かはりか妹も先へあぶら筒　作州 貞義
はる／＼こゝにきみゐでら
どやらかふ鐘接(マヽ)に漸／＼霞から　之哇
行衛なき戀に疲や船の猫　舉桃
細道を過る

鶉野を出はなれ行は笠の蝶　颯ゝ

山里の青陽を

さりとては去年のなることを筋哉　仝

いとゆふに坂を坂ともおもはれず　一言

深窓恨

合点をしても春なりやのり歩ゝ　布流

咄しきく中に鼾や朧月　備中 除風

おぼろ月船に何ンにも殘らぬか　木曾塚 方舟

御あかしの朧〳〵と風が吹　風聲

おぼろ夜や舟につれ立淀づゝみ　擧桃

水風呂に夢見る朧月夜哉　支考

夏

雀公たゞあり明の狐落　キ角

廻り道は造作がましや時鳥　ヲハリ 露川

ほとゝぎす世は三味線の間の手ぞ　大坂 之白

拾ふまいひろひ物じやがほとゝぎす　作州 重就

ある人にけふ

冬の物人にくれうや郭公　良ゝ

子規酒といふまで待て居れ　作州 遅候

さあ〳〵皆ござつたぞ時鳥　岡山 山頂

ほとゝぎす夜はかふ明て朝ぼらけ　颯ゝ

郭公啼や田植の尻の上　ヒコ子 許六

眉山子の旅だちけるに

ほとゝぎすなくであらふぞゆだんなふ　千山

夏じや〳〵言たばかりで布子がけ　横大路 巴竜

卯の花やつつぱりかふた家斗　風聲

うの花は咲て散たか咲ぬかや　筑ゼン 團國

風聲子のあるじにて、七種山にあそぶ事あり。雨中の吟

瀧は瀧で曇りの中にあれ若葉　千山

水鳥のよりそふ岸の菖蒲哉　作州 蜘蛛

うつくしい腹を田うへに見てくれふ　吉備 高吉

梅落て蝸牛角引かきね哉　サガ 爲有

山の根に小家も見えて幟かな　擧桃

麥かり風もそよめきつゝ、この山にぬかづくとはべるとしは、元祿の午なれば也

夜にせふぞながむるならば吉備の山　惟然

津田の細江といふ所を

青麥に細江も埋る出かしたぞ　冬月

青麥に地紅出て來る時なれば　共風

裏口へ頭つき出せば青田哉　ヒメヂ丸水

むしや〳〵を青田の風に吹晴ぞ　巴竜

ちからなふ犬の眠るや青あらし　ヒメヂ風玉

若竹の是ぞしなへの覺束な　越中野角

竹の子に添て摘たぞ山桝の目　ヲハリ東推

よつほどの流もありて若竹ぞ　梅嵐

修行千竿一老身

のびたりな雨さつぱりと今年竹　冬月

若竹のゆだんもなげにずう〳〵と　布流

嚏苗や学に成時は暑からふ　江戸巴流

夏[illegible]のあめほしそうな時なれば　千山

いつそふにさびぞへちまのそほろ雨　梅嵐

爰のまた垣に上るも胡瓜哉　的カタ句白

外聞もへちまもいらぬ胡瓜ぞや　大坂諷竹

雨くるふ是が茄子のはなになろ　厚風

短夜や扨〳〵是が夜中よの　千山

みじか夜をかぶろは終に寐ぬそうな　溝口友松

夏の月外から誰か呼ような　ブンゴ若芝

道もつと涼しい月を待たらの　作州和流

寐こびれる菴の月夜や麥こなし　風聲

是はまあそよりともせず夏の月　巴竜

玉味噌の軒のにほひやかんこ鳥　ヒメヂ可笑

我菴は兎の糞のあたりにて

ふつと日のさめた所でかんこ鳥　孤洲

おもしろい何もなかぬでかんこ鳥　舉桃

蚊やり火に女夫そふなが寐るそふな　千山

にくさげに蚊をやく顔よ常ならず　晴嵐

虹の根のちつと殘てあつさ哉　輕舟

さま〴〵の物をくらべる夏野哉　多幸

一いきは分別も出ぬあつさ哉　横大路 若水
散は〳〵暑さかかりを竹の皮　學桃
きんたまの置所なき暑さ哉　盾山

游藝といふ游の字をおよぐとよめば、諸藝におよびて、しづむ事なかれとて

我もいざあさい所でうす立ふ　雪柯
白髪でも何かせいとろ水あびる　盾山
水あびてついへちくそな酒が覺た　布流
水あびよふよんべの事はあたご様　之畦
水あびるおよぎこくらのすでんどう　菰洲
雲影に俗か法師か水あびる　ヒメヂ 洛茨
蠅が來たしべ鉄砲でしてやろふ　寒爪
恭にせいて葛水じややらさ水やら　鈴木氏 一好
清水汲爰の茶碗でいたさふか　巴流
しみづよな伊賀殿道を出離て　ラヽ
水茶屋よどちへ行ふぞ雲の峯　備中 正興
十面で何拜むのぞ雲の峰　厚風

なふいかにどれどろ水鷄郭公　智月
あれ〳〵といへばくいなの叩にぞ　菰洲
水鷄啼なかばなけとて座禪哉　布流

致景は作は内久世といふながれにこそ

寄合ふものいちごから水鷄から　惟然
夕皃の咲やこゝらの涼しさよ　至樂
面ツラともどれも涼しやこゝな寺　路通
涼しさや漕行舟の末虚空　荻田氏 史常
けふは〳〵此くらゐなら螢がり　雪柯
夕立の來いかな客をもてなそふ　ヒメヂ 夏瓜
神鳴に寐も起もせぬ娘哉　御著 和夕

小野孫太夫園の言葉

つぎはしの三意は、すこしもそれめけば、それならぬと庭上なども豆畑にぞ。柿やの与四郎は、濱ちどりといふをもうちわりてん。軍中の織部も高麗とやらをうろしにぞ。是みな利をはなるゝならん。

とり廻しは、ふるきを元として、

涼しさは何もなきなすゞしきとぞ

夏はどこ雲から烏賊磬ふはさ　惟然

眞甍も門たゝかぬははな楞　撥草

狐火や明て川原の蓼そより　風聲

南天の花はちるやら開〻やら　御着　又則

河骨で仕舞て戻る凉哉　菰洲

さはいへどいばらの花の白ィ宿　若水

蓮の香やたゞすい〳〵と吹通る　仝

水のやうに煙のやうに蓮の花　扶揺亭

雑体

人な戀しのあながち、しみづのもとの心おほく、人ごとのやかましきほどぞ。いはゞ俳かいに山は桶居蝦が山、坂は砥石ざか・こいなおとし、しまは鞍かけ嶌、河はなに〳〵、里はなに〳〵

（マヽ）髮櫛山

五十嵐やびんぐし山の朝日和　元灌

惟然曰、五十嵐や髮櫛山、ほとんとにこそ。

くら淵

鞍淵の暗さを雨のしめりとさ　千山

すぢかい橋

此はしの上で何やらとう〵〵ん　良〵

蛤山

あけば〳〵蛤山にからすめが　元灌

こふやま

こふ山のこうを立たるやからもの　仝

辨慶石

辨慶が石なご石のしだらてん　多幸

辨けい水鏡

この井戸に辨慶が顏てうどかや　ヒメヂ少年　さぶ

砥石坂

やどり木か是〳〵こゝに砥石坂　多幸

中溝

なか溝にかめんとならばぎゝならば　寒爪

樫坂

馬の屁はそれながらたゞ樫坂　千山

ちゝぶ山

こゝちよい尻つき出いてちゝぶ山　ラヽ

馬ノ頭

秋草の野原ぞ馬も大皷うて　惟然

名所もそこ／＼に

猫の居る木は何じややら／＼　洛荧

湖南人にわかるゝ

ねぢゝぎるみな足もとは草の汁　盾山

一面に空はどろりどろり川　菰洲

げじ／＼の事で咄のとぎれかな　布流

日枝の山さつても扨もさつてもな　之畦

どつかりと上から臼がこけました　少年 黄瓜

空裏を走のこゝろならんか

さあ／＼／＼妥でサアヽ盃を　至樂

ぬつと出すことはりなしの夜食哉　ヒメヂ 理貞菴

あらましを口說ておいてやつとこな　雪柯

返し

最上川のぼればくだるいな舟の　女

須磨明石吟

眺望

春の海や鼻のさきなる帆掛舟　扶搖亭

うつくしう夜が明也淡路嶌　路通

人丸の社頭に月を見て

いやるないの所は明石三五の暮　大坂 梅翁

さびてらせつら／＼椿須磨あかし　元灌

松風に岡邊のやどの月夜哉　千山

ながめ合秋のあてどや寺と舟　丈草

逗留にくもり晴あれ須磨おもて　風國

人丸の社頭を拜す

やんわりと海を眞向の櫻の芽　惟然

三月十八日おなじく拜す

そこつには霞なけふの淡路嶋　ラヽ

ほとゝぎす須磨から啼てどこへ／＼　作州 口黄

須磨は須磨霞も須磨の霞かの　雪柯

名月やあはぢしまから須磨が嘸　尋旧

陽炎の天下日和ぞ淡路しま　盾山
春雨やほとけを譽るすま泊　布流
すま淡路どつちへ寐ても春の夢　アカホ涓泉
朝なぎや須磨の冬木の尻からげ　定當
草鞋がけでなけ／＼須磨の荒(アラ)籬　元灌
明石まで時雨をぬけんはしれやれ　多幸
ひき明や赤壁がちに明石領　仝
明石からすまの月見る須磨からは　厚風

月を見ても物たらはずやすまの夏　翁
あかし
霍公きえ行方やしま一ッ　仝

月の戯れ、花のたゞ言にぞなんつぶやかるゝ須磨の嵐、明石の空の朝夕をも、淡しう味はられけん千山風人こそ、今中和自然の處をうかべ得らるゝものか。されば何哉とさま／＼思ひはかるまどひの共事にとり付より、更に活ゝしき走りならざるのみ、唯有のまゝの形容にすらすらとうちはなれば、はか／＼敷響かそもあるべきと思ふにぞ、梅檀の色紫ながらはぎめかぬ梢さへ、厥中ひしとさしつまるから、霜のぬかり、五月のとばしりを履ばかりの器の材なるにぞ、またそれかともみぬ花の瓢箪のやは／＼しう物に熟すれば、ほつ／＼とこそ雫の折からは、梅柳の投入、なを谷の朽木も佛のすゝめの夜すがらの寒さもなん。是ぞ内外ながら空ゝと何のものなきゆへ、その輕きを上品とするにたゞ。

烏落人書

元祿十五年
蘜月

ゐづゝや
庄兵衛板

庵(いほり)の記(き)

露川撰

(庵の記)

月空菴記

寶永三年冬のはじめ、鱠山子、剃髪して方九尺の板屋に隠れたり。尤紅塵寸土にして、市聲四壁をめぐる。まづ東の連子にのぞめば、箒目に露降渡す比、鳥毛たて笠をふらせて行あり、馬士のあらそひ、駕籠かきの鬮取、車はめぐらず、人は見かへりがたし。又ぬけ参といふもの、むら猿のごとくに來りて、泊り定めぬさま、斷猿今夕衣をうるほすなるべし。誠に景色朝に變じて、ゆふべに轉ず。南の方は旅舘翼ゝと東海道につらなる。北は馬繼の札場より、甍綿ゝと東仙(ママ)道に續く。扨西の方は、尺地を退ひて葭垣あり。後に甘井深ふして、さばかりの炎熱にもかるゝ事難し。寐覺勝なる夜は、涌磬臨ゝとして寺〱の鐘、方〱の脊折しきりに心をこらしむ。時に鳥四方に鳴て、水汲音轆ゝと我朝起を慰む。扨前に五つの石臺をならべたり。春は四五輪の梅にかの鳥を待、夏はきりしまの夕日に五月雨の鬱氣を養ふ。また蘇鉄は松笠の化たるにして見ぐるしからず、見事ならず、不易なれば中央を得たるか。穐は唐柑子に鵯のつかんとをおもふ。冬は山茶華にさゞん九盃のたのしみなれや。すべて五峯・五湖の四序も此内に籠るといへど、けふすめば月空庵、明日住ざれば借屋となる。仍て字をもつて亭の号とす。

月空

露川居士書

林光山乗空和尚の剃刀を乞て、樗髮をおろし侍る時

澤氏露川丈毎ニ任ニ月花之詠一出塵之情篤卒解ニ印綬一ヲト一居ニ北隣一而成ニ圓頂一余感慨之餘授以レ字而嘆讃云

林光山
是中

內志眞俗道　外慕菅江風
可謂市中隱　露川字月空

露川誹雅玄冬之初除レ髻閑居光山中和尙附ニ道号一呼ニ月空ト月躰圓而掛レ空清影普不レ嫌ニ万水一客身圓而遊レ世交心等不レ撰ニ衆人一宜哉佳号猶有ニ讃詞一篇一尤幽美也如下窺ニ深淵底一望中春花林上實盡ニ其善行一雅言也予久知ニ川翁一爲レ此次ニ中公玉韵一並ニ高吟一置ニ卑詞一猶如ニ玉石相並一者乎

持名山
夢回

書盡漢和贖　誹精新古風
露川流髻去　圓月照霜空

初發心

世に日他物我をたつるは、栢榴の内とくくしきりて、その實を漉るに似てせばし。　露川

世を見れば栢榴の中のへだて哉
　六疊敷に月も日もさす　立枝
柴ふねのうはまい斗る穐暮て　藤乃
　からび嵐の平なへしふく　都柳
雷盆のけふの猪の子をこね舞し　朝雀
適にわせたにはやいなふとや　八葉
さはつたら溶もしそふな百合草の露　水也
　いまだに死なで鉦が鳴なり　何用
傾城の行衛は飴の吸からし　十竹
　爰では一首哥がなるなら　川
それ鷹に粟津の原の肌寒し　枝
　二十八九の月は名ばかり　乃
しと〳〵と銀杏のおつる宮遷し　柳
　椽(トチ)のやうなる泪こぼるゝ　雀
御膝をまくらに軍ものがたり　葉
　けに其ころは玉丸雪降　水
待華のあるが中にも北陸道　用
　種蒔じやとてわざと塩魚　竹
つばくらの唇うすき姉女房　乃
　四十九日のもの忘れ空　枝
嗚呼(アヽ)降たり白う垣根も柿の木も　川
　夜這の下手は土肥の彌太郎　柳
饉るけりや戀も無常もどこへやら　雀

ぼんと撞出す山彦の聲　葉
悠然と澄んだ流に暮の月　也
雖の破損の秋も來にけり　用
雇るゝ身はいそがしきわたり鳥　竹
存の外なるむら雨でゐ　乃
喫な冷食はさて是はさて　枝
簪(カウガイ)わけの彼岸ほどある　川
華も今しやむろに咲た比なれば　柳
手はけして出る獅子も旅だつ　雀
結講(構)な肴はないか鴻の池　葉
茶苑も添て山の肝煎　也
荒帋子月の京に有ながら　用
市の雪吹もふき納たり　竹

初發心
元來の隱者に猶隱居なすゝめて
粥を焚ば我米炊さん初しぐれ　東推
五十にして世を遊るゝ、その中を
しるや
八分に水はこぼさぬ氷かな　楚山
功なり名とげて身しりぞくは、天の道なりとうらやまれて
この水の塵に氷らぬはじめ哉　立枝
先の世にいかなる種を冬牡丹　林月
むかしは蕉翁の一所不住をうらやみし川子も、今は風塵を脫して、ともに九霄に宵(逍)遊し侍るか
一皮を脫すてゝこそ水仙華　机雪
蝶〱の羽根もはへけん小六月　瀞滄
どん栗の世話をぬけたり神無月　八葉
市中を去べき師の願をとゞめて
市中の冬木や人のちから草　吐山
霄とは君子の一滴、川とはその德の流なるべし
寒菊のはなに元から伊達もなし　一風
世の寒さかねて合点か石蕗の花　曾呂

浮雲を出ぬけて安し冬の月　枝殘

世の外をいかゞ見給ふはつ時雨　一戸

やかましき余所の落葉を尻目哉　夕道

しりぞひて時雨を笑ふ浮世かな　抱月

五柳先生は仕官を逃て菊の戸にたのしむ。いまの露川翁は、胸内を捜りて正法を得る。風雅の德にあらずや。人もつてにごらずば此流を汲んや

寒き世をくゞりぬけたる小春哉　林鏡

水仙は雪霜のさかいに遊びて寒苦を忘る。是を市中の隱に比興して

雪霜の分別はなし水仙華　木之

常に澄む川や殊更冬の月　澤水

美し風の世をすつほぬけ　ミノ下蘇生 九派

川先生の剃髮は、浮世といふ事を煩ふにはあらず。直に風雅の魂を得て、月花を友とするあたまつきは、此道の髓髓ならん。其實の深きを感じて

木がらしの中で咲けり歸ばな　捨石

折あらばあらばの木の葉散に兎　京 吾仲

剃髮　深ゆふの世話成と拂ひ捨れば、風はなはだ染て、元のくろしさにとならず。

むづかしと剃てのければ又寒し　露川

おかでは置ぬ霜の草の葉　獨ト

虫の鈴虫の轡を鳴りさして　推之

夜更てこんな宿を雁がね　水也

呑ば醉さなけりや淋し後の月　不識

二日ばかりの薪したゝめる　此通

子を連てお禮まいりに藪の神　楚山

哥にもほめた夏の朝影　東推

慰に結ひならべたる强箒　ト

藥鑵直しが虛言咄し聞　川

まざ〳〵と今降雪に晝の月　也
是ぞ名にあふ七色木なり　之
燒飯を出いて侘しきあたま數　通
下ばりながら屛風古びる　識
わすれぬと書たる文も持て居る　推
夢に覺ゆる祇園淸水　山
鳥啼てつら〳〵以ればはな　識
春は勿論雲もゆく空　卜
朝霞博除面の船くばり　川
取みだしたる年よりの髮　也
襟垢もつかぬきぞけに有常よみ　之
さばかり暑き土用胴中　通
ひかるすな桒じやが川はうんでゐる　山
鎌倉殿は遊山ずきなり　推
今晩もよん卜の通月はれて　卜
家でも織れば野でも機織　識
一くるは小人仲まの柿もみぢ　也
四面に聲の鍋〳〵と　之
根本の日和は風の廻り吹　通
植口あくる神の苗ひらき　川
諸白といふたばかりのそのうすさ　推
見事な雪に倒ひたいまで　卜
天竺へ續たほどの長づゝみ　識
もし太郎坊でないか篠掛　山
窓の燈にたぐり付たる夜のはな　通
畑になじみの深き梅が香　執筆

剃髮

吾此翁の辨馬をしれり

落髮やおさなき顏にかへり華　湖雀

剃髮の謎は解たり神無月　一秀

喜撰は世を宇治山と人はいへども、庵はすむでものうからず。今の月空隱師は只市中にありながら、閑窓を得てたのしむ

是までと剃るやあたまの一しぐれ　斗旭

葉は散て猶唐めくや百日紅　亀洞

(画)勸學院の雀の口まねなし、我此翁が行脚の腰を押ばやと

法躰の手本を匂へむめのはな　ミノ竹ケ鼻 巴靜

霜降らぬ間に剃れたる翁かな　咄松

苦を楽に替て剃けり髪の霜　吟松

早咲や雪の袖口むめのはな　勝全

かぶりものとれば世話なし水仙花　五夕

その丸さ撫ても見たし冬の月　ミノ大針 千皐

剃立を心して降れ玉あられ　ミノ野田 細石

冴て行月の形やらあたまやら　ミノ下麻生 石柯

冬枯を見せずに剃ぞ手がらなれ　同所 浮鴎

剃立の白いはなあり水仙華　ミノ保津 巾什

剃髪の身や山茶花の底匂ひ　笠寺 栖柯

髪請を持て、伯父の剃髪をよろこぶといへど、錫としてしのびざらんや

そり髪の雪散時や袖のつゆ　右松

葉を剃て赤さや冬の梅雄　左次

ト居

居室を作るはむづかしと有にまかせて、膝やすむるとはいへど

丸屋こそよけれ四角な冬ごもり　露川

雪は猶更おの形の松　吟水

灯挑をたゝむ小坂に夜のあけて　羽重

六文のめばむしの合点　任莭

引込で寐てから月の晴たげな　随九

こゝろもとなき風の鳴綱　林月

何とやら案山子と知て居りながら　亀洞

尾端にとらるゝ女子衆の中　斗旭

歯をみがく楊枝の先のほとゝぎす　莭

きのふの祭けふの留主番　川

曲ものゝ釋教臭き金山寺　水

かぜに笹葉もいさむ歳末　九

白馬の五両が所鈴ふりて　旭

隣あはせに煮賣算置　重

冴かえる月に奇妙な顔もあり　月
　實引縄の緣をきれ〳〵　洞
燃杭に燒付かぬるはなの雨　重
　箏寒なればよいに俊寛　水
わり菱の余所の幟もなつかしき　九
　寐起鳥の屋根に不機嫌　節
祖父様の帳に付たぞ木練柹　川
　黒羽二重の紅葉しかゝる　旭
たま〳〵の志賀の月見に鱠汁　水
　文庫さがせば爰に短尺　重
いつ來ても御意の得られぬ歩行坊　洞
　かくても咲か瘦百合草の花　月
降たらば物によかろふ涼しかろ　旭
　一振ふつてかゝる新鍬　川
水あびてをれが瘧は影もなし　節
　鳴てひかつて空はゆう〳〵　洞
行過た世に贅は古けれど　川
　かつぱと覺る夢の評判　九
塗桶を破いたぬしはなかり鳬　重
　火を賑にかりの移徙　水
市中はこゝろと葉の華ざかり　月
　あそぶに事をかゝぬつばくら　執筆

卜居

田螺の蓋の冬籠もさびしきにや、市中に戸を並べて遊ぶは、虎溪の橋をへだつるも古しとや

初時雨軒に隱者と額もあれ　素覽

先生剃髮して、浮世のちりを拂ひたる住ゐ、調度に至までしげからず、誠に剃髮哉

明暮の取置輕し炭瓢　獨卜

炭をかく貝がらはよけれど、手をよごすに愁あり。古き剃刀こそよけれと悟りて、世塵とゝもにうば玉の苦勞をさられたり

鍋炭やこそけ落して冬籠　推之

市中に世をのがれて、市聲は耳の役、繁花は眼の役として、六疊一間をかまへて、愚然たる翁は何人ぞや。これ月空庵露川居士か

世をへぎる壁のうちらや冬籠　藤乃

その住るかるいがうへの置火燵　林市

白う降れ雪ふれ庵の初住居　和町

目も白し三ッ輪組たる冬ごもり　孤千

百里こなたにありて、剃髪入庵を聞侍る

その菴や繪に書て見る冬籠　江戸 兀山

茶の湯は炉の切所に子細あり、砂取の功者は水色をしりて釣針をさぐる。風雅にさときものは、月雲によく遊ぶ

雪見るによき窓ひとつ誰が指圖　此通

題月空菴

寓情非水又非山　臥内繼圍城市間　法燈山 不識

世避風塵多少客　未知庵主一生閑

面白の時雨や富士も此屋根も　同

小春めく庵や中戸の腰障子　朝水

世を逃る人を追かけて、草庵のたばこをあらす

どこ迄も香を追ゆくや水仙花　朝雀

隱れ家の音は世上のしぐれかな　村俊

今更法躰を問ふも古しと、丁子釜を送りて

雪の日の鼻先あぶれ丁子がま　且栖

ひらき戸に石のおもしや冬籠　且柳

小春めく市のいほりや馬車　野木

夏冬によき水仙のすまる哉　如瓶

一日春レ訪月空菴談笑暫時聊得ニ浮生閑一因賦ニ野章一律一以錄呈ニ案下一併求ニ正字一　崎水浮草

嘉陰不追許支跡　風流自在趣尤佳　先放

市聲換境塵無到　閑詠從時新益加

行客戴來千里雪　樵翁將去萬山花
清談忘我轉消日　方外何尋仙界遐

月雪にかくれ得たりや隱れ里　同
板葺の庵ゆかしや水仙華　孚中
冬枯や蔦こそ植ねよしの垣　何用
門ひとつ二軒用ひて冬ごもり　不睡

市中にゐて寂寥發動しけるは、風雅の魂

木がらしを知るや隣家の椴の聲　巨竹

うしろには石臺の植木、前には驛馬の鈴の音を聞て

六疊に野ありやまあり冬籠　ミノ今ケ渕 之令
寒ひ世は屛風で遠き火燵かな　ミノ下生麻(ママ) 松寸
月雪のためとこそ見れはつ住居　鳴海 獨笑
うぐひすの丸うなりてや冬ごもり　同所 近利
今までの寒さわすれん炉の初　ミノ下麻生 似信
落つくや風なき庵の雪の華　ミノ竹ケ鼻 二鳥
此庵や佛祖も迯る冬の月　圓福寺
野山へもゆかで尊し冬籠　ミノ上有知 吏明
世中をあちら向てや冬ごもり　吟水

衣食

破れても着ればぬくとし、雜喉も喰ねばたらず、是人の常、是非なし。

兩面に浮世うらみぬ紙子かな　露川
初雪の日に柴の遠來　東推
水のない河に自然と橋ありて　推之
七夕振に御意を得ました　夾始
盃も爰はひとつと暮の月　湖雀
角目立たる壁の蟷螂　竹爲
藁葺は買手も付ず吹あらし　素覽
身は程ヶ谷の宿の有さま　川
念比に蹴揚のかゝる墨ごろも　推
包だ錢をほんと投出す　之
何事のおはしますやら白鏡　始
はつと振たる明松の影　雀
そなたのは蚌こちはきりぎりす　爲

九日ほどある黃裏赤うら　覽
戀をせば古風ながらも奈良の月　川
　汁に大根の銀杏短尺　推
羽子板と破魔矢は是の花盛　雀
　餘寒の空の晴てはれぬく　始
白魚をそろりと船に漕で來て　之
　ひろを提たる禰宜の通るよ　爲
一時雨またも殘てあるやうに　覽
　堀ちらしけり燕の赤土　川
先刻のいさかひ過て鐘の聲　推
　寐りやよかつたに茶漬してこい　之
有明の終には雨の降出して　始
　毬はなけれど九里の川ふね　雀
ゆく秋のあて事もなき酢牛ヶ房　爲
　てん手の年をしらぬ婆ゝ樣　覽
眞中にほとんど是は大柱　川
　闇ほとゝぎす扠もあやなし　推
こはいかに判官殿の立くらみ　之
　八ッつ八分の汐もたゝゆる　始
雲は散る十方くれの內なれど　雀
　簀子から莚おろす朝かぜ　爲
咲はなにどこの狐がついたやら　覽
　出代の日は猶も永かれ　執筆

衣食

尾陽の鰌山は一頭三面の市中に住て、神や佛や儒や萬屋のあるじと成て、等閑滑稽に心を遊せ、杜子が景情・山谷が廣作を我物とする事久し。今年秋の末至日、何やらむづかしと髮剃捨、浮世に後さしむけ、必と西行・遍照どきの佛たふとみにもあらず、旅衣が應ふ編綴がおふのかたちかろ〴〵し。予ある日、其閑戸を敲ひて例の一笑を進む。

彼袴蔦になつたか夕しぐれ　如行

市塵をはなれ市隱に入て、日比の本懐とげられけるを祝して

十徳の名も字も済て木の葉かな　夾始

世を中にかろくもくゝり頭巾哉　巴丈

もとより世の垢をされば

洗濯のいらぬ帋子ぞたうとけれ　隨柳

祝下露川雅伯脱上俗衣一　源頂山 呑水

星霜遠商耕　和鳳揮千城
塵海浮吟筏　市人風雅聲

十徳をよろひて出たり雪の風　同

十徳に一徳添て頭巾かな　淵翠

先生平生を見るに、まづしからず、富貴ならず、かたまらず、とろけず、唯松の葉の四時に渡るがごとし

折ふしはもとの布子に羽織かな　勇和

剃髪をおそく聞侍りて

まだ髪があるとおもふた頭巾かな　剛和

是までと世話や折こむ丸頭巾　誰螢

鉢の器と帋子で安しふゆ籠　知多亀崎 卜志

十徳の袖かうばしや冬の梅　水野 不泥

此叟はかどありて角過ず、丸くて丸過ず

世の業や耳にかゝらぬ丸頭巾　景芳

世はたゞ手に念珠をめぐらし、口に法号をとなふるといへど、心外とゝのふらず。爰に月空居士の何がし、常に幻夢の前に惑業の發る事をいとひて、市中をにげて市中に隠れ、わづかなる蝸家に移るは、あだかも聖に通ふべきまとならずや

色どらぬ人の表具に紙子かな　峯雪

似合たりその筈ながら置頭巾　笠寺 渚高

やかましき冬は鼻まで頭巾哉　ミノ深田 水尺

ゑり巻に當る浮世の風もなし　鳴海 重辰

寄露川誹客落髪　夢回

誹道乗時豪　呼名圖國褒

詞林花實富　心水玉波高
深慕西行跡　長思喜撰曹
手耘雙鬢綠　知足一閑袍

素帋子に茶の味かたれ雪の月　仝
世も丸しこゝろも丸し丸頭巾　津嶋 階子
寒き世はどこじやしらぬと頭巾哉　ミノ加納 樵船
袖に香をとめば帋子に水仙華　ミノ狐穴 珠竹

繪山の園をはなれて、しばらく
壁一重な草庵の隱れ家となせりけ
り。望たりぬれば、これや閑籠白
鷗の放つたのしみならんと

冬たちて案山子の笠を脱れけり　十竹
雲水の組うちせばや帋子づれ　イセ 涼兎(三)

行住　念佛過日を調ふて行かふ市中の寐覺がちなるも、結緣の端ならんかし。

凩の念佛くさし市の中　露川

月まだくらき四方の納豆　机雪
竪笠で旅立たまひけるほどに　斗旭
きのふの節供けふの絹綺羅　吐山
とち風が吹て貴樣は久しぶり　隨柳
同じ畠のほたん芍藥　勇和
ほとゝぎす鳴より店もなつかしく　通路
河越殿のいまの介抱　川
松の繪にしばし慰む小盃　雪
わざと斗に三ケ月の影　山
はや／＼と下向めされて初嵐　山
火を吹顏にきり／＼すなく　柳
思ひあればいつが盆やら晦日やら　和
かの衣着せて見たき抱籠　路
門しめて主の留主こそ凉しけれ　川
鳴て來そうな雲を降消す　雪
花もはや七日は咲て八日には　柳
いざ鞦韆（フラヽコ）をとしはよれども　山
きりもなふたはけをのばす風巾　旭

お日和様もようて果岸（マご）　和
何方も家出の遅き若い衆　路
一夜伏見の夜着の柏葉　川
刈かぶの田に降ゆへにたひら雪　雪
かしこい鳥の綱（網）を蹴てゆく　柳
安〱と閑をたばかる小山ぶし　山
かつえた腹を酒でたんのふ　旭
燒付の木破に交る柿もみぢ　和
露に時雨る南宮の月　路
落武者の連小便に穐のかぜ　川
内に居やればよいが次郎兵衛　雪
白い鷺黑い鳥も師走めき　柳
行燈殘るふねの明ぼの　山
雨蝦（エビ）にさへ醫者といふものゝゆき　旭
風はりう〱雨も降つゝ　和
下着には九十九夜さの華の袖　路
鶯ほるゝ石臺のむめ　執筆

行任

きのふまでは朦朧と遊び、今日よりは皎潔とあそぶならむ

月に雪又今からはゆきに月　ミノ蜂屋 魯九

一年は子ども等の國の春　と聞えし今、剃髮して世をまろく思へば、誹諧の兒童も猶、此師をよろこびずといふ事なし

是からの遊び業なり雪丸げ　千爽
市中の室で咲たり梅のはな　水也
水仙やこれもひとつの庵の友　芦澤
かくれつゝ咲や風雅のかへりばな　任節

世中の甘きに食れて、十分に受てこぼすもおかし。爰に露川先生は百年の半にたらずして、よく天命を知り、市中に冬籠て薄氷を合点しけるこそ心にくし。山林の月花を方丈にあつめたるぞ、こや風雅の德孤ならん　花林山 竹爲

居雖喧境別忘筌　淡水得魚足自然

五十年來求鍛練　富花富月入玄玄

白山さを見よと火燵に背延かな　仝

市人にまぎるゝは、聖にして施ふかし

市人の濁やすます水仙華　隨九

茶のはなや色も香もあり庵の道　桃牛

時雨るや見捨聞捨市のこゑ　通路

その實八重に咲けりふゆ椿　都柳

枯木かと人はおもへどかえり花　榎月

諺を替て市中の時雨かな　羽重

月空露川子のむかしを知るは我なり。此翁がつれ〴〵に入るなうらやみて

何のその種はひとつぞ水仙華　流葉

長篇序略爰　服部已己

驀投世事爲遊客　躬在市中需養心
坐看山川村里境　無邊風月四時吟

こまかなるへついしづけし夕時雨　仝

炉びらきや若き隱居の手なぐさみ　可和

雪の夜をさとりにゆかむ市の庵　仙市

茶の花に膝立ぬ身ぞうらやまし　箇口

月雪にいつが朔日晦日やら　素角

初しぐれ今が紅葉の眞さかり　拒雪

茶の花はどこに咲ても宇治臭し　不周

かくれても匂ひは市の水仙花　ミノ下麻生 嵐窓

月雪の流れは廣し露の川　ミノ下麻生 筍花

誹諧の大木に咲や冬のむめ　ミノ 圓井

葉の散た跡にものあり冬の梅　十貫

こそけても落ぬにほひや冬の梅　鳴海 鷺汀

その匂ひ後の世かけて水仙花　墨俣 風外

草木、天地のめぐみをしらず、魚の目に水見えず、人君、父の恩を盡さず

魚の目に水の恩しる氷かな　凉竹

見ず聞ず世をいはざるや冬籠　一之

かざりなき冬の柳ぞうらやまし　鳴海 業言

市中に冬咲むめやかくれん坊　ミノ竹鼻 呂巧

市中に吹れてあそぶ木の葉哉　ミノ錦織 左木
寐るも樂起るも樂の火燵かな　同所 是柳
見事ではむづかしいとや石蕗の花　同所 鷗小
安閑のかんの一字を冬ごもり　ミノ細嶽 國推
出格子や晝は雪見に夜ルは月　ミノ竹ケ鼻 素臺
有ていに火燵で悟る合点やら　ミノ洲原 可吟
雨風をのがれてやすき冬木哉　ミノ大野 松星

かねて同年と聞しに、隱居はおくれて

氷られて働がたしこちの水　三州新城 白雪
常齋の仲まに入む朝時雨　鼠彈

追加

かけはしや命をからむ蘿かづら　芭蕉
くりどを雛もあはれめ虎が母　江戸 其角
一軍見ばや尾華の桶迫間（ハザマ）　膳所 正秀
竈馬や淋しかれとは鳴ねども　大坂 諷竹

竹の戸も春は立けり餅臭し　十竹
名月の樂屋で味噌を摺にけり　千夾
立臼の寐て骨折や麥の秋　此通
辨柄の毒〳〵しさよ蔓茘舍華（マンジュシャゲ）　近江 許六
橘や唐の女のおしまづき　豐後 野紅
洒れて出て木の根か但し蕗の塔　捨石
藁で鼻かんだ姿の雛もあり　獨ト
出代や氷てはまた水となり　一秀
世は廣し十疊釣の蚊屋の月　京 怒風
落葉して膓寒し猿の聲　加賀 北枝
けふあすとうかゞふ雲のしぐれ哉　備中 除風
苔干すや雛の衣桁の小風呂敷　吟水
としの暮常さへあるを摺子鉢　藤乃
矢面に出女たてり玉あられ　白雪
誰ほしと松に出てゐるけふの月　巴靜
つばくらや手塗の壁の足らずまへ　信濃 還珠
水に入蛙や蛛手十文字　任節
面〳〵の目に一つ宛けふの月　朝雀

寒ひとか暖なとか鴨のこゑ　木之
浦嶋が釣ものがるゝ海鼠かな　都柳
畦道に簇かふたる稲穂かな　一風
摘人の肩から下や紅のはな　長崎 宇鹿
盆過や夜なべがゝりの高行燈　魯九
たつ穐の風や屏風の骨しばり　羽重
衣配りこんご草履も添にけり　水也
鶯の啼そこないもはつ音哉　剛和
雪隠の隣もありやきり〳〵す　景芳
追焼の飯の黒さやゐびす講　吾仲
何喰て雛とあそばん老の袖　凉兎
つり合ぬ巾や蓑に花すゝき　豊後 朱拙
切麥に刻む香はなし水仙華　斗旭
咲て出る小町が哥か草のはな　楚山
うんと突ふねから船へところてん　峯雪
名月の空には盆か正月か　湖雀
年かさを姉にしてをけ若菜摘　夾始
三ヶ月の一点寒しいつくしま　支考

大佛の屋根も出來たり一時雨　南部 玄梅
石垣を崩しはせじと蔦葛　竹爲
裸身に伊達な筋ありたかむしろ　誰螢
浮雲の時雨ふとして戻りけり　且柳
黒主が額に汗や雛の貝　淵翠
たま〳〵も下部(ゲビ)た名はなし草の花　林鏡
蚊の聲をちらしかけたり郭公　越中 路健
馬の尾や嶋田に曲ゲて五月川　推之
五月雨の晴間や月もほつと息　東推
神〳〵のぬけがら寒し札納　和町
女房にお髭の塵や早苗時　林市
紫陽花のはなの行衛や飛鳥河　林月
煎鳥の残が咲や芹のはな　立枝
咲れたよ耻しながらゆりの花　伊勢 燕説
松杉の近付もある庭火かな　如行
足よはとこそいふべけれ女郎華　素覧
兄嫁の功者めきてや若菜つみ　且柄
蔦の葉や返す風なき片男浪　随九

唐帋の淺黄は寒き火燵哉　不識
十月をしめ木にかけて時雨かな　ミ二ノ竹
鉢卷や鍬形打て花あやめ　ミ正ノ勝
吹降にさからふて啼蛙かな　八葉
爰らまで穐たつ船のきぬた哉　通路
源氏には似ひでつたなし錢葵　吐山
しら波を雲のすりゆく野分哉　勇和
庭鳥も隣へ客や煤はらひ　推敲
はつ雪にはたらく梅の匂ひ哉　狸山
塩鳥やみぞれ吹こむ池の鴨　隨柳
養父入や都を出たるおこし米　京范孚
寒聲やその呼織の濱傳ひ　机雪
きつさきの夕日に見ゆる燕哉　ミ大ノ川
鵙啼や木曾殿討れたまひぬと　露川
石殼のはなや小猿の水かゞ見　ミ木ノ因
風さそふ音は帋子の立居かな　江戸杉風

寶永丁亥人日　月空庵之閑文庫　東推錄　素覽校

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

鵲尾冠(しやくびくわん)

松・竹・梅

越人撰

負山叟丁酉之編集毎篇冠以先修之發唱而續之撰後進之新吟其體也有似集句之詩者又有如足柳公權之聯句者而格調起新舊沿革隨吃也附剞劂氏之日叟來求題於其首余卒名以鵲尾且吟唐詩曰錦韉裁冠添散逸是訌人故戴古冠以表閑散飄逸之高姿矣此集作意庶譏（幾）乎此也錦韉所謂漢高之鵲尾冠也

小出侗齋書

問ず語

私は越路の者に候間、名も越人と申候。壯年に及ぶ比より故郷を出、流浪仕り、貧乏にて學文など申事不レ存、本など讀ミ候事もなく候へば、しらぬ字は節用集にて見、それになく候へば、其分にて置候樣成文言者に候間、物知り達、此本を御覽候はゞ、笑ひ種にて可レ存候はん。此始ニ置

申候歳旦の三ッ物は、此三人の人々生前に奇（寄）合て、被レ致たる三ッ物にては無ニ御座一候。然ども句は三人の衆の句共にて御坐候。所々の會にて聞覺へ、又前々出たる本の中より拾ひ出して、ケ樣にならべ申候。芭蕉、私は多年交り深く、其角は芭蕉の高弟也。私は其角と念比に仕候。杜國は其角と懇意ながら面談は不レ仕候。互ニ句を通はして懇意にて御座候。此三人と私は多年交り申候。年に長短は候へども、志シには四人厚薄なく、三尾濃江行ク所、一器の食を分ケ、一ッ衾に眠り、旅寐の床の狭莚に腰を折て芝簑を重ね、草の枕の嵐には檜笠を立、飢寒を忘れ、胡蝶の花を尋て歸ル事を不レ知、烏の月に目をさめうかれ啼に似たり。杖頭に錢をかけて杏村にはしり、炮錸（マヽ）に粥を煮て隣に塩を貰ふ。或は道に鞋を破られ、驛路に馬なふして又錢なし。風に吹れ日にさらされ、陰晴に其具を持ねば、苦はかへつて情をのぶる端と成、風雲流水吟身と一般也。志し水と水にしてわく事なく、諫メて用ひられ、しかられて改ムるは君か臣か。愛して笑ひ、したしみて離れぬは父母か子か。師や弟や豈ニ有ニ方圓短長一

其三人は鬼牒に入て年あり、佳句を聞ヶと絶へ、愚句をまた定る所なし。かゝる事すゝめられ、思ひ出にも、先ッ泉下の人のみ思はれ侍れば、生前になぞらへ其始に出し侍りぬ。侗齋先生見給ひて、詩に似たる事あり、集句といへるとぞ。いか成事と尋まいらすれば、多ヶあれども宋の文天祥、老杜が佳句をならべて詩とせり。句は少陵が句也。心をあはせならぶるは文山なり。それを集句といへるとぞ。愚聞て、我いかでかそれをしらんや。古人の作に似る事あるは、倒(コロ)ぶ手に錢を拾ひ、水と見て酒にあふがごし。自然の幸なり。しかあれども是は似て似ざる事なれば、みづから人の謗りをまねき、我と世に笑はるゝ種を蒔たらんにこそ、それもむまれ付の不調法もの、今何とあらため申べき。

鵲尾冠　上

尾陽負山子　越智越人

歳旦

此發句は芭蕉、江府船町の囂(カマビスシキ)に倦(ウミ)、深川泊船堂に入ラれし、つぐる年の作なり。草堂のうち、茶碗十ヲ、菜刀一枚、米入るゝ瓢一ッ、五升の外不レ入、名を四山と申候。

其一

似合しや新年古き米五升　芭蕉翁

雪間をわけて袖に粥摘　其角

紋所その梅鉢やにほふらん　杜國

其角句は類柑子に出たる付合也。

杜國句は土岐一瘁子家にて、椋梨一雪、杜國が奇作を聞ンと、雜句五句出シける其一ッの付合也。其前句は

ちりけもとにて鶯の啼　一雪

紋所其梅鉢や匂ふらむ　杜國

其二

曙の人顔牡丹霞に開ヶたり　杜國
鶯おきよ紙燭とぼして　芭蕉
眠る蝶夜ル〳〵何をするやらん　其角

杜國句は天和の始の作也。
翁の句は冬の日の付合なり。
其角句は虚栗(ミナシグリ)に出たり。

其三

元日の炭賣十ヲの指黒し　其角
吹雪を祝ふあたらしき簑　杜國
辛崎の松は花より朧にて　芭蕉

芭蕉・其角句は人の知たる發句也。
杜國句は予、芭蕉と杜國草堂にて、
三吟の時の付合なり。

歳旦　舎了翁一空

不二は今朝來タれる春の姿タ哉
巖長閑に烏帽子着て立　仝
三番叟霞の匂ふ袖はへて　仝

歳旦

宇治川の先陣(陣)ならねど、元日の一
二もまた

梶原と佐々木なり梟(梟)雜煮居蘇　夕泉

氷の厚ト薄きを以て、年の豐凶を
知るは朝庭の事とぞ。我は今朝

氷のためし筆こゝろ見る硯哉　仝

禁裏にて元日より五日まで、此事
ありと。糸にて作れる菊也

裾を引ておの〳〵菊のかざし哉　簔笠
靜ヵさは居蘇波揚る釣瓶哉　仝
納るや君恩厚キ氷樣　仝
門松に坊主を入れぬ日出度さよ　間景

世の雜煮喰ふ時、雜水をくらふ草
堂に

のさばつて肱を曲たり宿の春　越人
傳に曰袴着ぬ物ぞ宿の春　仝

千代万代とは、松平ヵに治る御世
は

彌勒まで御世や兎の御吸物　仝

山谷が演雅の詩を今朝吟じて

誰に似て我は稻つむ鷗かな　仝

歳旦や只末へ摘ムの唐衣　梅振

未ノ年元日節分成ければ

引組ンで節分よはし今朝の春　飛泉

若ふ成と云ヮ程に見れば

元日や髭は剃レども皺そらず　仝

目出度さは色に出けり屠蘇袋　古考遊

難波津の梅やそれ〲けさの春　听子

雜煮の膳はすゆれども

商間メや乳母がつとむる東西子　春翠

ゆふべまで惜む月日の始メ哉　ヒボ個 是中

雪は豐年の御貢物と申せば

門松に雪なを嬉し白ラ髮ガ海老　濃州今尾 流水

白無垢で立や伊吹も着衣初　同所 洞霧

子母錢に祝ふ心やけさの春　木曾馬籠 望月

仙家に露を嘗ゝ、霞を吸ふと申せば

仙人は屠蘇に霞の空や吸ふ　濃州神戸 亀毛

白紙に筆の花咲クはじめ哉　尾州東福田 快月

若菜

脊中には雪摘む野邊の若菜哉　越人

耳順を過ろ身は

行年を跡へ摘ミたき若菜哉　仝

白髮には入間言葉の若菜かな　仝

むさし野も今は大名の御屋鋪にて、

身共等は裾濡し摘ム若菜哉　文錦

日ゝに繁榮

大名は武藏野を摘む若菜哉　尾州東福田 合六

木曾の山中は天梯石棧蜀道也。人また獮猴のごし

側へ來て猿にてはなし菜摘哉　木曾福嶋 廣竜

梅

柳のうごく時、何クよりか、梅が香さとし侍れば

梅が香は柳を馬に乘りにけり　佳木

哥には鶯が荅ると讀侍るを、我は

いざ

爰にありと荅る梅の匂ひ哉　昿枕

闇の夜は香ひを折ん梅の花　簑笠

花はいづくかと見侍りて

春風や鼻こそ梅の遠眼鏡　昿枕

物申と云フ聲より先キに

使よりむめの物云フ匂ひかな　問景

日蔭丈人の草堂を尋るに、白梅如レ雲軒を埋み侍るを見て

梅が香に吉野を移す菴かな　豆花

床にかゝる墨梅に、籠中の鶯啼侍れば

鶯よ繪に書梅は門ちがひ　黄雀

袖壁は香ひ袋よんめのはな　仝

隣家ノ梅

梅が香にうたて鯨の資寶哉　桃里

さいながら梅ににじまる月夜かな

といふ句を和して

散る事は梅に始マる草木哉　問景

馬士も鞭に折兼る野梅哉　即休

散レば雪鼻には梅のにほひ哉　芝響

伽羅焼イて梅見る人の淺サ哉　東嶋田 合六

南枝は早ク北枝は遲し

うぐひすにんめの南や片庇　濃州今尾 松叟

今咲と風のたよりや藪の梅　同州荒井 石文

むめが香は隣の鼻も中間哉　三州岡崎 片帆

やり梅に乗る鶯や御曹司　同所 夫乙

鶯宿梅

鶯の宿は散ラすな夜〻の雨　濃州今尾 湖舟

あねはの松の人ならば都へとは在五中將の詠也。我は名古屋に旅寐して、尾張の産赤味噌と云フ物の味おかしきを、京にて上戸に嬉しがらせんと芝苞に包ミ、馬に乗せる時

紅梅や都のつとにいざ赤味噌　京 法竹
紅梅や畑はみどりの鶯菜　吹葉
鶯の息見る比ぞ朝ぼらけ　東福田 合六
若草を啜るや馬の海雲汁　山之
若草の種蒔雨のあし細し　木曾贄川 時楓

歯朶・門松賣も大晦日限りに皆歸ル
に

氷解ヶ去年の浪の歸り泉(息)　飛泉

つく〲と見るに

赤椿こや山姫のむかし梳　旦藁

上役者は只一役にて菜も又

藤十郎中村七三山葵かな　臨之
杉菜畑木の葉天狗の林哉　木曾贄川 時楓

農は天下の大本

苗代は賑ふ穐の土臺哉　簑笠

山梁の聲空谷に傳へて、其形は不レ
見へ、不レ斬ニ斎一乎焚中ニといふ
言な思ひ出て

雉子何所木魂は聲の影法師　飛泉

角落て鹿や驚く水鏡　士口

柳

青柳の眉かく岸の額かな　神祇伯 守武

鶯の羽風には實ニ亂るべし

蝶の羽の風もよく知る柳哉　簑笠
筆なくて風を繪に書ク柳哉　仝
松に聞キ柳に見たる嵐かな　肱枕

まき葉にさゝれ、ぐる〲と

青柳の行衛ニぞまはる風車　湖嶋
散る雲を柳のつなぐ霞哉　止敬
柳より落る鞠待ッ居合腰　里鶴
春雨は柳を染る時雨かな　一歩
温飩打ッ眞似をあらしの柳哉　越人
おほこ成柳をなぶる嵐かな　尾州下ノ一色 嘉吟
夜ルの聲は漣なぶる柳かな　濃州神戸 蘭洲
障子には墨繪の動く柳哉　古川氏 吟風
連翹(廻)や冬の柳の黄なる花　晴山
天花菜摘ムとて蔓拾ひ梟　古 荷兮

不斷躾て咄ス人も、袴着ればむづかしきに

とてもなら白衣で御座れ土筆　艾石

秋ならば星に手向ン土筆　下ノ一色 嘉吟

買カイ入テ待ッうちは茶碗に茅花哉　文錦

不調法成形にても

貫之の筆に乘りたる蛙哉　桑原氏 琴松

鉄拐仙の繪を見て

田に居りて聲へ風に乘ル蛙哉　舞巾

眞ッ晝を啼ぞ蛙の哀なり　芝響

寒の水の瓶も田の面も

日々〳〵に減ッ行物や餅と鴈　如彈

かへる雁常世や菊の茖ムらん　越人

雁の聲霞にこぼす名殘哉　濃州神戸 足柳

二見浦にて

青海やあれ春風に帆立貝　濃州今尾 重和

陽炎や帆ばかり見ゆる海の面　兎耳

集立まで猫の御器借ル燕哉　喜友

爲レ君ガ不レ折二都柳一と云、僧江西が詩を吟じ

去年の巣を來て修覆する燕哉　春翠

燕青黄世界、黄金も夢成けり

菜の花に夢の長者の胡蝶哉　文錦

西風は下タ吹ならん朧月　間景

近代摸様は曙・紋所は

上繪なき至りなり梟朧月　尾州下ノ一色 和笑

おぼろ月見よフラスコに入るゝ酒　如水

みどり立ッ松やむらさきの夕煙　止敬

蒲タン英ポの土手やさながら秋の菊　花乘

ものゝ組の房とは見ゆれど

むらさきのふくべうつぶく莇哉　佳木

相撲とる名ぞ憂りけり菫草　濃州垂井僧 規外

雲雀

池水に下ルはあがる雲雀かな　三州藤川僧 夫推

落るかと汀を覗く雲雀哉　三州柳尾 梅翁

一むらの雲の囀るひばりかな　弓介

白雲の勝手をのぞく雲雀哉　濃州神戸 木公

母鳥は空に、雛は下に

わか草のゆかりを空の雲雀哉　仝

三月三日

其一　雛

小原の雛魚寐は大晦日の夜、それは不レ見、今見る里の亭に

紙雛も雛魚(ザコ)寐成梟升の中　機石

名は養父入で今蓬餅　芝響

人は風事は御のごくにて　越人

其二　提闘

今日闘の苗を提れば、一年の邪を拂ふ。是は本朝に云ッ藤袴也

邪を屠る劔の柄や提る蘭　越人

心の駒の鞭にうつ桃　機石

及第の首途(カドデ)に霞汲上ゲて　芝響

其三　曲水

上流にて下戸共、上戸泣せよと小盞をながせば

盃に重箱流せ夕日影　芝響

燕かるく舞ッ玉の段　越人

蒲英はいつたんほゝとはやすらん　機石

上巳

荀子曰、青出テ二於藍一ヨリ而青シ二於藍一ヨリ。けふ雛の餅も

蓬餅草より出てなを青し　舍了翁 一空

桃の花咲盃中の物　仝

夕暮の星や蛙を誘(サソ)ふらん　仝

雛の餅のかたちは

草餅の三蓋菱や小笠原　市行

毛氈の上を昇梟雛の駕籠　濃州今尾 風和

所帯持ッ眞似を雛立る娘哉　三州勝川 先子

大内の雛形は雛の姿かな　弓爾

小屏風や弟通さぬ雛の闘　越人

桃に照る顔は朝から夕日哉　間景

餅に酔へ下戸は色なし桃の節　濃州今尾 風和

奉礼夫婦に成、親のしらぬ男連立、
在所へ行、嬉しげ成さまは

朱買臣が顔は錦の桃の酒　泊船
盃や暦エフミにめぐる桃の波　濃州岬戸 蘭洲
童部に迯る奴や桃のはな　東福田 快月
草のなき武蔵野を見る汐干哉　簑笠
貝は口合せて居イたる汐干哉　弓介

御手帖辱拝見、兼々承候古人之発句ニ
遺候哥僊は散盗、最早入候事難レ成
由ニ而、古人之美冠は不レ被レ下候義
固障有ト乍レ云、此方共之怠リ千悔々
々、左レ共此一軸ハ、去年社頭之櫻
ニ各忘レ歸ツ、盃之淵瀬替ル〱暗見
シト明せしに、公の発句乗ジレ興ニて出、
首尾鯨肇ニ終ル其懐帯也。美冠を承
ろ列ニハ出間敷候。いか様成末莚ニ成共
御入置可レ被レ下候。つら〱思ふに、
昔、忠度朝臣は狐川ゟ歸り登り、三
位俊成卿之門を敲キ、中比、蜷川新
右衛門、撰集之沙汰を聞、度々百首
之哥を讀まいらせしか共、不レ入を悲
み、最期に又百首よみ、其包紙に
かきよする藻屑なりとも此たびは
かへらでとまれ和哥の浦波
と書たる一首は被レ入し由、世人今に
膾（炙）炎する事也。如何被ニ思召一候哉。幾
度も〱猶面布不一

九月日　吹葉 榎柢 桃里

貢山子 玉几下

一座一葉

花の酒に付タリ迯てかへる事　越人
胸毛ゲ敲ケばつんと若芝　桃里
綱ツナ引に何ンの苦もなく引勝て　榎柢
夕日追込ム軒の三日月　吹葉

中ましよふか簀に干ス木綿眞ッ盛　酌 吉左衛門
今年わるひは稗斗也　越人
ウ
見ましたは比丘尼倒合子投　桃里
最フ八ッ打に住ンで寐めされ　榎柢
二階から先ヾ出た顔がまた出る　吹葉
今太夫サン生捕ッて來た　里
どふぞいの思ひに塩が燒ますは　人
蒜でも喰へと御意が聞たい　葉
とんとなけ百兩包ミはづんだり　柢
烟筒の脂を拭ふ白無垢　人
幕張ルと野風爐に茶道畏ル　葉
首實撿も信玄は袈裟　柢
村雲に空も亂るゝ月の色　里
嬉し盈稲は苅仕廻梟　葉
ニオ
引晉のしぐれ賑ふ土磨にて　人
顔はゆけぬがうまそふな尻　里
成りたやな三嶋女郎衆の化粧の水　柢
論語讀ミにて論語よまれず　人
河豚汁に青蒜を刻ミ込ミ　葉
樽は借そふが錢は拔うち　柢
笑はせて靨開帳いたしたい　里
坊主殺しに坊ン生キて居ル　葉
極樂の月見より先ッ娑婆の闇　人
花火線香は〳〵　里
突キ込ンだ鞘刀とらるゝ大西瓜　柢
兩國僑(橋カ)へさしかゝる船　人
名
上ミ下モで魚釣ル江戸のだゞ廣サ　葉
米が高イと申されもせず　柢
それは其長者殿とは御門跡　里
あれで佛を願フ無思案　葉
釣瓶上ゲに吸膏藥を井戸に張ル　柢
此一卷は笑ひ付たり　里

三月盡

牛は鼻を松は願はぬ藤の蔓　賀川 時楓

千金の春の賣場や藤の棚　即休
行春のかけはし見よや藤の棚　梅振
藤の棚夏を胯(マタ)ぐや冬の梅　湖嶌
ゆく春やこれ取落すふぢの花　濃州荒井 吾竹
行春の泊りをかくす霞かな　濃州今尾 其流
ゆく春を繋(ツナ)ぎ留ぬか糸櫻　木曽福嶋 廣菴
ゆくはるや双六の簺(サイ)山法師　飛泉
ゆくはるを思ひ切ラせよ郭公　三語
行春のうしろ姿や遲櫻　即休
行春は又ちる花のこゝろ哉　文錦
あづさ弓はるの弦切る晦日哉　簑笠
蚊一ッに寐られぬ彌生三十日哉　古 重五

首夏

白芥子や時雨の花の咲つらん　芭蕉翁
むらさきの冠くらべや杜若　黄雀
悪(ニク)まじな朱(アケ)奪ふとて杜若　問景
似たりや〳〵是も又
いづれ色は舜の兄の杜若　豈羨

一茎二輪の花を見て
茎どに阿吽(ウン)を咲や蘮(カキツバタ)　機石
ませこしは季吟万葉の注に、青ざしの事成と、后宮定子に奉りし事、清少納言枕草帋に書(出カ)たり
ませこしやませ越シて見る雲の上　仝
簑虫や青狩衣に更衣　即休
簑虫は櫻が塵の青葉哉　夫石
病葉と書て、わくら葉と訓スと聞
わくら葉は雨に煩ふ黄ばみ哉　文錦
三十三間堂の矢數多キ中に、尾陽より上ル星野氏
八千の幟(ノボリ)染取矢數かな　晴山
相坂や淺き清水もふかみ草　三州岡崎 秋冬
青〳〵とあらしも時を得たり梟　伊勢内宮 三友
万山雪を改めて翠峯と成リ、人家村

里は白瓜・茄子を且見る比、士峯獨リ千歳の雪と、それは東海千里の行人の語を耳に傳ふ一聲の杜鵑に、垣根をみれば、こはいかに

不二はいざ若葉の比に雪見草　飛泉
　ほどときすぐる田子の藤浪　晴山
乘る人の眠るや馬も睡るらん　文錦
　日はかたぶきて月は眞ン中　越人
わや〳〵と藍(アイ)鉢作る薦(コモ)廂　晴山
　赤蜻蛉の番(トウ)叔(ガラシ)降ル　飛泉

ウ
德ッ利が有かと鵯(ヒヨ)ばそちが顏　越人
　すつと片鬢剃落シ梟　文錦
飛退(シサリ)不足のあらば口でいへ　飛泉
　細まくねても似れば蛇(クチナハ)　晴山
雨乞に驗をあらそふ僧二人　文錦
　佛の道も日の七ッ過　越人
唐士の花に小松の金渡シ　晴山
　儒にうとき身は鶯(ウグヒス)の彈琴　ひせむ

鶺鴒よくものをゆふべの陽炎か　越人
　富貴を神に祈る愚カさ　文錦
月影も登れば下ル最(モ)上(ガミ)川　飛泉
　稻の殿ごで孕む粟へ稗へ　晴山

二オ
嫁入リの終に沙汰なし龍田姫　文錦
　熱(アツ)ふはなひか大ィ世話やき　越人
袈裟かけて忘れたり梟魚の味　晴山
　おり〳〵夢に三味線は見ル　飛泉
源氏讀ム時は源氏の人を戀　越人
　官も位もトタン商ひ　文錦
佛法は鍋の月代石の髭　飛泉
　何いひ出スと顏を守れば　晴山
順の舞醉人の眞似を醉人する　文錦
　我影供に連て行月　越人
秋の野は夜〻こそ晝の錦なれ　晴山
　しらず合(カッ)浦(ポ)の王作の露　飛泉

二ウ
シャボン吹親(アヤ)仁(ヂ)が長ひ鼻の下　越人
　命の毒は思案分別　文錦

昔着る烏帽子に今は米入て　泉
炮烙ひとつ持ッ長者也　山
花の咲山〳〵は皆己レが庭　錦
去とは春の心いそがし　人

卯の花

夢にてはなき卯の花の垣根哉　生白
垣根から卯の花晴るゝ夜明哉　芝響

箱根を曉過るに

卯の花に松明いらぬ山路かな　開景
卯の花はさらに月無キ月夜哉　三河藤川 先子
篠の目の卯の花垣や雪の山　木曾馬籠 望月

雪かとばかり思はれて

卯の花に探サグり足する垣根哉　濃州今尾 雨牛

螢

火まはしは草を小よりの螢哉　豆花
おのが火で草に木賃の螢哉　簑笠

音もせで思ひに燃るといへども、

我はもへぬあはれを

あはれさは蛬を埋火の螢かな　越人
詠むれば燃へて涼しきほたる哉　開景
わづか成ほたるに闇キあたり哉　一耕
一ッ家の夕顔照すほたるかな　兎耳
風鈴に轆轤仕かくる螢かな　柏里
夏虫も火を守る宇治の網代哉　越人

早苗

千石も一荷に擔ニナふ早苗哉　市行
嘶ス聲尻より下に田植かな　兎耳
片言を何と正さん田植哥　湖穐

夜目遠目笠の内、笠脱では劣る

笠脱ぬうちぞけしきや田植哥　即休

早乙女の笠を見れば

詠むれば白鷺うゆる早苗哉　三河藤川 時笑
早乙女は稲妻植る早苗哉　越人

五月五日

其一　菖蒲

いづれの御ン時にか、官女数多侍らひ給ひける繪を見て

翠簾の外へ緋の袴漏る菖蒲酒　枝香

葵額につけるさげ髮　里鶴

郭公跡なき聲を見送りて　素仝

其二　幟

大公曰、婦人ノ織經ハ其レ旌旗也と。思ふに、今紙甲紙幟は本朝居レテ安キニ不レ忘レ危ヒヲ成べし

遠乘や綱も鞭打帋幟　素仝

けふは都に褐を引折日　枝香

しらぬ言知るは書物の御影にて　里鶴

其三　粽

角粽は屈原を弔するより始るといふは非也。本統は

周處いはく粽に孕む天地哉　里鶴

漢の續命和には藥玉　素仝

むづかしや根問イめさるゝ逢フ度に　枝香

裾野青し粽を解ケば不二の山　古杜國

紐とけば青き御光の粽哉　弓爾

魚でなし薦の苞の中は餅　泊船

短夜や行燈闇し窓白し　止敬

五月雨

五月雨や池の菖蒲も二三寸　問景

布引の瀑布もうるむや五月雨　仝

五月雨に煙もしめる夕かな　飛泉

筍は梅雨の比出る皮のよくみそかなるは、思ふに

竹の子の皮は合羽か五月雨　黄雀

寂しさは秋の來タるか五月雨　簑笠

登蓮法師が斷はつれ／＼草に書り

さみだれや十寸穗の薄笠もなし　濃州御戸 桂碩

八橋を見侍りに、杜若はなくて

皮とれる跡や竹の子のすき額(ビタイ)　仝

若竹は風のすぐなる柳かな　東福田 梅下

若竹に塵埃(ホコリ)のかゝるあつさ哉　豆花

船にて出侍る遊びに、風与青山枡を一房袖にして出ん。早、熱田の沖にて盃をおさへ

潮煮やさあらば鈴を青山枡　旦藁

蟬

雨あがり雫も暑し蟬の聲　黄雀

川音・松風の時雨は涼しきに

冬の名の時雨に似ぬか蟬の聲　簑笠

時雨といへば雨の字あれども

蟬の聲時雨るゝ松に露もなし　飛泉

時雨だけいよ〳〵暑し蟬の聲　下ノ一色 嘉吟

雪の下名のらで寒し花の色　越人

哀なり夢に蠅追ふ繋(ツナ)ギ馬　晴山

撫子やほつれかゝりし緒の切レ　機石

すし桶や今いく日有て蓼摘ん　古 荷兮

持參の樽はころりと寐る。それを引おこし持せ走ラかすに

川狩に酒屋狩する男かな　下ノ一色 和笑

鵜づかひを喩へ出シ梟猿廻シ　高木氏 若水

月の出にまがふ岩間の鵜舟哉　飛泉

百合の花の形は

酒うつす樽ぞ俛(ウツブ)くゆりの花　臨之

淵明が茄子濁すな苔清水　古 杜國

里近し茄子の蔕(ヘタ)の流レ來る　海木

香はせて惡ム氣を取莿(ムクラ)哉　市中堂

藤川先子の家をしらず、それを問フに其家成ければ

君が戸に敲キあてたる水鷄哉　越人

拍子木に月は殘りて水鷄哉　舍了翁 一空

敲ク戸は狐にてなし水鷄哉　弓介

蜘のるを蚊遣りに拂ふ火鉢哉　簑笠

撞ク鐘に蚊の聲高し一しきり　間景

冬の夜に蚊の居ル月の霜白し　越人

扇に葬の絵を見て

朝顔は扇の骨を垣ほかな　古 其角

上戸に欲なし

甞作る團は夜ルの酒價(サカテ)かな　夕泉

風の神の袋是見よ團かな　古川氏 吟風

甞の汗や月に干シ行帆かけ船　濃州今尾 不及

下戸達の曲水也梟瓜流し　越人

午熱

何ク(イツ)にか獣狩らん雲の峯　夕泉

人ならで暑サに黒ム田の面哉　三州藤川 時笑

清水流るゝ柳陰といふ哥を、一株の松下に

立寄りて夏にかくるゝ暑サ哉　一歩

（菅）菅笠は暑につく楯の野原哉　如水

居(イ)所をいろ〳〵替る暑サ哉　大川

看夜で魚賣ル市のあつさかな　藤川僧 夫推

日の前に居て知る今日の暑サ哉　肱枕

道ゆく人も家に有も

みんな人の口癖に成ルあつさ哉　市行

古池に動かぬ水の色あつし　簑笠

臭藥(ドクダミ)やしほれぬ花の色暑し　問景

一筋の蜘のゐ光るあつさ哉　仝

照付る耳に音ある暑サ哉　三語

軒下を蜻蛉も通るあつさ哉　犬山 豆箕

切麥は汗の汐干の白藻(モ)かな　如彈

きり麥や土用の中の藥喰　湖嶌

漣に蓮ヘ漕グ棹や鷺の足　東福田 合六

釜の鬻(ニヘ)聞ぬ蓮(ハチス)のいたり哉　越人

凌霄(ノウゼン)は夕日彩色あつさ哉　下ノ一色 嘉吟

凌霄は夕日を焦(コガ)す花の色　木雞

土用干

家〳〵の古かね棚や土用干　高木氏 若水

治る御世には今日斗いづれば

具足見て君が世拜む土用干　佐々木氏 梅夕

細ツ引に蟬かしましや土用干　仝

和漢の調度數多、親より讓り持る
人の出して風入ん迚、終日側に有
を見て

親が子に苦をとらせ梟土用干　越人

納涼

いつもよふあの顏通る朝涼み　仝

三川の國へまかる途中にて

肩輿(カゴ)舁(カキ)は肩かゆる間を涼ミ哉　越人

眠れば重しと起さるゝにこりて

駕籠舁と晝寐直をする風涼し　市行

あざなへる繩とは四昨吹風成べし

花に惡む風も六月は御出哉　臨之

瀧の味今ぞ忘るゝ心太　飛泉

凉しさや白雨晴てあとの虹　湖穐

白雨ははれて入日や蛹けしき　肱枕

長明が方丈の分別も、是を見て成
べし

夕立や家引あるく蝸牛(カタツブリ)　濃州神戸 龜毛

雷鼓を相圖に忽

夕立の雨に化たる雲の峯　文錦

清水

切レたかと手を引て見ル清水哉　簔笠

清水をばむすべば解る暑サ哉　越人

西行に長尻さするしみづ哉　仝

冬は煙り夏は自由な清水哉　仝

六月

彌生と長月の三十日は盡るを惜む
に、いかなれば

春秋のやうには泣ぬ御秡(祓)哉　問景

何よりも暑サを送る御祓哉　簔笠

盗人を見て繩をなひ、渇に望み井
を堀といふは、間にあはぬ事なり。
されば身の災禍を拂ふも

不斷只克レ己ニをみそぎかな　越人

初秋

夏明ケて秋へ屋越シの一日哉　兎耳

日の色にまづ初秋の哀也　越人

一氣の感ずる所は

闇にして吹ぬ風聞ク今朝の秋　簑笠

秋といふ名に息を續ク心かな　三刕藤川 時笑

夕顔は瓦屋しらず

蕣や心太賣ル聲聞ず　芥金

旅衣曉たちて過れば、竃屋の軒に

牽牛花に蚕見る雪の頭哉　晴山

朝顔は年代記繰る心地かな　越人

ゆふべの籬を見れば

あさがほは凋(シボ)むも莟ム姿かな　問景

瓜すかれ涼しさ讓る西瓜かな　听子

七月七日

其一　乞巧奠

水を湛へて今宵星の影を移し、其色にて願ひの叶ふを知ル事あり。それを

銀盤の水は五色ぞ星の影　豆花

逢ふ瀬の橋に渡ス瓜(瓜)琴　文錦

秋風の帛裂(セキサク)聲は松にして　簑笠

其二　蛛網

星に祈る祈の叶ふしるしは、手向の瓜に知る事有を

織姫や瓜(瓜)にすきかける蜘の網　簑笠

帋に折たる鶴も鵲　豆花

露程も虎に似ぬ繪や狗(イヌ)ならん　文錦

其三　懸糸

竹竿頭上の糸風に吹るゝ樣、おのづから文字に

糸口に十の字見ゆる願ひ哉　文錦

星の蚊遣リに香爐借ス暮　簑笠

翠簾の外へ御座(ノマシ)指出ス月晴て　豆花

繪に書るを見れば

彦星はとかく巣父が姿かな　機石

むかしより終に是を不ニ手向一

七夕は肴ぎらひか瓜茄子　古丈

假リ橋やたんだ一夜の天の川　泊船

兼好が八才の時、佛の始りを父に
問ふごとく隣家の兒、我に
三星の其曾祖父は何星ぞ　春翠

今宵は二星斎に逢ふ夜なれば、心い
そぐ成べきに、牛引はいかに
牽牛星に馬引せ度キ今宵哉　木曾福島 鳳龍

日の影を蟬の脱や二ツ星　東福田 合六

八日の曙を相像
今月見れば鵲赤し銀河　晴山

文ン川や八日ははづす竹の糸　問景

遠くて近キは聟なれども
天の川近キは遠キ八日哉　越人

淀伏見月のかくるゝ燈籠哉　東福田 合六

小人錢なき時は、蟻の茶臼を遣ふ
に似たり。小人錢有時は、虎に先キ
達如レ狐ニともに放心黒闇
世は燈籠油の有無の影廻し　越人

秋夕

男にて前帯(所カ)も秋の夕べ哉　蓑笠

芝居見物方我子といへども
抱イた子の笑ひさへ秋の夕べ哉　仝

松にさへ寂しき秋のゆふべ哉　仝

蔀さす音さへあきの夕かな　瓢哉

蜘のゐを詠メ盡すや秋の暮　桑原氏 琴松

まづ秋のゆふべぞ白キ鶏頭花　越人

其色としもなかりけり、といへる
こそ實秋の暮也
雨だれのすがたを秋の夕哉　飛泉

獨り飲ム酒に來る秋の夕哉　佳木

何見てもかわる事なし秋の暮　梅里

老人の來タる出見せや穐の暮　兎耳

かならず鳴ならでも
立鳥は鳴でなかり梟秋のくれ　仝

烏さへ惡ふは見えず秋の暮　文錦

菜畑に茄子殘り梟秋のくれ　市行

始終リ飽ぬ物かな秋茄子　即休

しがみつき蟬は死臭あき茄子　舎了翁 一空
ほむとした身にも針打ッ一葉哉　仝
風吹カで空蟬すがる一葉かな　箋笠
又負て云分ヶくどひ相撲哉　芝響
見る人の入レ歯もりきむ相撲哉　卽休
夜噺を名にとはるや合歡(ネム)の花　千且林永流堂 小千
蓮の實の前途も近き暑サかな　竹友
鬼灯や弟にかくす舌の下　栢枝
びくとして咄(マヽ)さしねぢむけば
稻妻や見あぐる窓に猫の顏　肱枕
いなづまや窓を出ィたり隱ィたり　止敬
稻妻を喩へば人の嘰(サクリ)かな　越人
音寂し木賊すれあふ秋の風　問景
何吹も茶臼の音や秋の風　由之
椽はしる篠の葉鳴らす秋のかぜ　黃雀
草菴ヘ尋て、あるじ留主成ければ
芭蕉葉の文字な破りそあきの風　尾劦下ノ一色 (沙)汝鶴 正雲
風流に聞や嵐も萩の聲　濃劦神戸 木公

草の葉にころび遊べや露の玉　古 嵐雪
おもきは落る世の習ひと有御計な、
おそれながら有がたく
草の葉の露を身持の手本哉　犬山 豆箕
浮ヶ身哉草の葉末の露の玉　鷺陵
靜カ成世にとく〱し轡むし　僧 是中
我住ム都は千里の跡になし、東海箱
根の雲に獨り旅寐せし夜、鹿の哀
に鳴侍ルは、哀猿の斷腸といづれ
哀くらべむ高根の鹿の獨かも　京 法竹
此鳥晝は諸鳥に笑はれ不レ出
木兎や見ぬ葛城(カツラキ)の神の顏　梅振
化レ田鼠爲ル鴽トとは申せど
抑鴽鼠の尾には似ざりけり　三劦幡川 時笑
魚で居て鹿の字を付河鹿哉　濃劦垂井僧 規外
唐の世には有やしらず、上戸は今
の世に沈程に
喰はせたし李白に今の拔茶汁　臨之

はかなさは槿(ムクゲ)のうへに花火哉　三語
賑ひの場でさび返る花火哉　芝響
蕎麦畑を一重帯かな山の腰　里鶴

世路に心いそがしき比

隙あくに老にけらしな女郎花　黄雀
花の名に肩衣はなし藤袴　兎耳
影法師嵯(サガノ)に散ルや萩の花　銑聲

近江八景の圖に

落雁や堅田は大イ菓子袋　弓爾

竿と見、弓と見る内に

鰹節編ンだ様なり渡ル雁　兎耳
蒔ぬ實のいつ鶏頭の花盛リ　三刕岡嵜 秋冬
影法師と踊ルか風の鶏頭花　犬山 豆箕

許由洗レ耳圖に

冬瓜は桁(コケラ)(柿)屋根見る嫌ひ也　昡枕
暴風吹キ落るぬかごは捨子哉　問景
野分ケふく顔も今朝なき柳哉　簑笠
漸寒ふ成や屏風の繪の出ル　如水

九月九日

其一　登高

治世ノ之澤ハ蒙ル二孤獨一跛蹇モ千里不レ為レ遠シト

君が世や高にのぼる二方格子(コシ)　問景
熨斗を肩ねる栗は山形リ　佳木
月の前薄茶を印度(イド)の茶碗にて　飛泉

其二　菊

谷水洗レ花ヲ汲ンデ二下流一ヲ得ル二上壽一ヲ

澤山に千世や買ふらん金草　飛泉
目出度秋のためしには松　問景
田作リに名を引替ル寸鰯(ヒシコ)にて　佳木

其三　茱萸

採レバ二故事ヲ漢武ニ一則茱萸挿二クリ宮人ノ之衣ニ一

是ぞ此齢ひを入るゝ茱萸袋　佳木
今日菊の香にかわる藥玉　飛泉
風よりも歸る燕に驚キて　問景

世にもてはやす菊の花を見るに、

何も

商人の能キ衣着たり作り菊　羽笠

淵明が菊は不變を愛す。今は

人の氣に花もかはるぞきく作り　兎耳

谷水や菊の香を燒里の食　問景

短冊と札とまぎれそ菊畑　濃州今尾 流水

菊見るは首實檢に似たり梟　越人

草堂閑

いかに菊吾に我を折レ十日から　濃州今尾 爾牛

人の心は天地と一般にして靈妙成物也。天地も人の心に隨ふ。善政には稻穀富饒なり。邪政には風雨物を破リ、訛言出て人の心あやうしといへり。皆人心の上より成べし。人好ニム奇異ヲ時は、奇異隨レテ人ニ出る。奇異隨ヒ人出て後チ人隨ッ奇異ニ。百事如レ此。近世菊作ル人と貰入作る者、無盡の奇異を出る。是を見るに、人の好ニム奇異ヲ隨レ心ニ奇異いづる也。奇異出て人の好むにはあらず。人心の奇を好むは先キなり。品物に奇異の顯はるゝは後也。奇異を愛するは我心なり。其變化也。莊周も說事不レ能、蘇秦・張儀も口を何ゾ開カん。若水子の起句を見て文盲の越人、聊か思ふ所を書して人に笑はれんと也。

たばこ入作る對かな菊作り　若水

松の操に疵つける蔦　越人

亭に見る月を池より釣上ゲて　梅夕

風にたゝまる屛風倒レたり　水

近付で互につんとしらぬ顏　人

そりや道行と本に章さす　夕

蕎麥切りを五間打ぬく棧敷にて　水

いたづら物は兎に角に金　人

夢を見る心の留主をする鼾　夕

具足鳴ラしておこす添イ伏　水

眞實を敵にほれて盡すらん　人
今姑蘇臺に足駄はく草　夕
影さゆる嵐の月の眼玉　水
餅をつかねば上ミ下モもなし　人
賣かへて洗濯しらず布子着る　夕
大師の後の細字雲竹　水
花に來て花見ず花にうそ眠リ　人
世の中に寐た程樂はなき物をしらぬあほうがおきてはたらく、と讀しは雲竹也。
山吹に醉ふ黄成蝶々　夕
ニオ
畑打の糯半ひら〳〵白キ鶴　水
あぢなけしきと鼻紙に書　人
なぐさみに旅をめさるゝ美し　夕
本陣(陣)〳〵で殿はあやつり　水
此たぐひ蜀の劉備の作リ馬鹿　人
雷盆(スリバチ)鳴ルと耳に手を當テ　夕
蕣に埒の明たる世の中を　水
露に布着せ萡(笛)は豐國　人
潔(イサギ)よき笈に寐て見る月廣し　夕

富樫だましてほつと息繼　水
ひだるひと云出すと皆ひだるがる　人
どふじやとたゝく前掛ヶの尻　夕
衛士ならで燃る思ひや釜の下　水
一番の碁に永ガ日一日　人
東山花に借上市がたつ　夕
實尋て見れば陽炎　水
春もなし戴ク桶の底ぬけて　人
雪も氷も解ヶて其後　夕

黄鳥は啼ぬ比なれども
鶯よだまられはせじ梅戻(モド)キ　湖嶋
退屈(クツ)かいかに柘榴の大欠(アク)ビ　上條　林竹
茸狩の戻りは杖に茱萸の枝　濃州今尾　其柳
茸狩や鞍の前輪に付る籠　三州棚尾　梅翁
清少納言もよく見て
木茸(キクラゲ)の形(ナリ)むづかしや猫の耳　機石

南天は星を括るや實の光リ　仝

花はさらに紅葉さへ又吉野山　桃牛

色もなき露を染メ汁の紅葉哉　豈羨

鬢髭も洗はぬ池にもみぢかな　巖之

水の影は渡れど絕ぬ紅葉哉　听子

假名の如クいろはにほはぬ紅葉哉　倫 是中

晴レ行を薄や繋ぐ露時雨　舍了翁 一空

蟋蟀よはるか聲は竈の下　問景

九月盡

載叙倫が沅湘東シシニ流ルの句を、身のうへに吟じて

行秋も伊良古をさらぬ鷗哉　杜國

ゆくあきは五郎丸なき五郎哉　飛泉

虫の音は雨夜の星か九月盡　問景

馴たれば寂しさも秋の別レかな　桃牛

くれて行秋のかたみにおく物は我元結の霜にぞありけり、と吟じ我は其ゆく秋に

鬢霜にして行秋の意地わるし　越人

時雨

三人に傘一本の時雨かな　夕泉

逬る日を雲や追ヒ付ク夕時雨　問景

松柳同じ時雨にへだて有　簑笠

傘や跡のしぐれに禮奉公　听子

星崎に星のこぼるゝ時雨哉　機石

面白フ風に取なす時雨哉　市行

日は西に痩て、むら雲は北へなぎれて猶雨少し

白糸の夕日に光る時雨かな　犬山 吹楊

僞りを夕日の笑ふしぐれかな　古 考遊

冬來ると目に見せて行雲哉　飛保倫 柳雪

我住ム都を捨テ世路にはしり、武城に有ル比、此所を通り侍るに、風子古鄕を思ひ出て

雲は行我ぞ時雨をするが町　京 法竹

不破の關月かと見れば霙(シグレ)哉　越人
万歳も麥蒔時は助作り　晴山
春の日を三ッ割ひとつ小春哉　黄雀
百番の外ぞ小春の菊あはせ　濃州今尾 重和
蝶に燒(タ)ク反魂香か歸り花　湖嵩
撫子を蝶尋出す枯野かな　柏里
我顔の皺に氣の付ク枯野哉　仝
冬野行叟らに旦那寺も哉　生白

貴賓なまれかゝる御約束、三年の
鳴りとかや。此鳴、韓氏未レ書

爐開キや汝を呼ブは金の事　古 其角
袴とは中のよからぬ火燵かな　肱枕
四人(タリ)の外はつめたき火燵哉　仝

念佛嫌ひ、數火燵して寐ルにたわむ
れ

鬼の喰フ蒲(ウマ)鉾(ボコ)ならん敷火燵　憲章
心よし夏かと見れば冬牡丹　濃州今尾 松叟
杜宇啼もやすらん冬ぼたん　弓爾

つくゞくと見れば

枯芦の難波に騷ぐあらし哉　臨之

花はさら也。櫻のもみぢも又類ひ
なし。それも今は

凩や松に成たる吉野山　飛泉
こがらしの松に喰付ク烏かな　三州岡崎 秋冬
こがらしはまつの葉研く木賊哉　若水
戰ひけり迯る嵐を追ふ木の葉　越人
罪のなき姿なり梟冬木立　熱田新田 洞水

舍丁翁は武門に立て、騎射・刀鎗の術
に精に、方略に寄也。好レ文ヲで如ニ書生一、
燕居には詩に哥に又俳諧を以て樂む。
更に禪骨有て物にかゝはらず、其句見
へ來るをいふて如ニ流水一ノ、淸濁に心な
し。實に爲レスルモ善ヲ無レシ近レクコト名ニ、爲レスルモ
惡ヲ無レシ近レクコト刑ニ。又慰樂に跡なし。何ン
ぞ毀譽に心あらんや。何ンぞ好惡の心を

しらむや。予其氣象をあふいで、獨吟を爰にしるす

舍了翁　一　空

冬嶺を見れば枯木や羅漢達
　塵を出たる雪の清淨
池の底も月や氷を研くらん
　五六十間ずい通ル庭
誰ガ見ても只大名の下屋鋪
　ほん／＼云てならぶ筒先キ
ウ
鹿猿の足跡續くぐはら／＼と
　黄ナ葉卷葉に拔ル葉の露
むら雨は晴て箒に殘る月
　天水倒るあきの初風
ちら／＼と白鶺鴒の羽の輕キ
　印判に知る友禪が筆
違イ棚いかさま是はせられたり
　蘭花すなほに生ケる細口
下ダ聲に鶯籠も黄昏て
　眠りこほれて霞落來る
春の雨砂糖生薑ガの芳しき
　あハヽばかりの子は雛を抱
ニオ
雛の首の縮も楷柱の側
　蚯蚓の伸か草鞋の細
塵埃ひぢのべたつく所十里程
　山峽ついと腹の減ル時
片雲を吹まどはせる夕嵐
　何く成らん天狗早鐘
皆付を見れば我慢の奉加帳
　腐ッた錢も牙に嚼〆
兀頭めが死なぬ合点の鼻に皺
　上手ナ事は妾からくり
色里の幾ク夜か月に晒されて
　夢も魂なす窓の鈴虫
（マヽ）ニオ
哀なり浮世を秋の若比丘尼
　かの上へ髭はころり息絶エ
德利の尻は其まゝぐはらり拔ケ
　踏む音高し燈臺の前

啫の花喰へんとや仰(ギヤウ)ナ蜘
霞を砕く小刀のさき

綾羅錦繡を菰に包ミ、縮緬を分頭(フト)
繩にからげ、荷ひ出ルも珍しから
ずと

顔見せや去ル御方より肥後百俵　佳木
日當リの竹ぞ汗かく朝の霜　問景
犬の寐た跡は穴なり今朝の霜　仝
初霜や息(イキ)を顯はす橋のうへ　止敬
湯豆腐や霜を通さぬ闘ならん　松雫
湯豆腐の筏崩れて霙(ミゾレ)かな　濃劦神戸 龜毛
松の葉の櫛に溜れる霰かな　同所 桂碩
傘持ぬ人は下タ見るあられ哉　如水

冬至

其一

今や山野に遺賢なく出て仕フ。花

儒の春を不レ待咲がごとし

皆江戸へ冬至リ咲花の儒者　越人
雪の御(ミ)貢(ツギ)も豐成不二　瓢哉
ためしには池の氷に馬牽て　秋吟

其二

獻履襪(タビ)ヲ於舅姑ニ

今日の襪(タビ)姜氏が妻に習へかし　秋吟
米負ふ時の胼(ヒビ)戀る子路　越人
嵐にもたはまず直に瀧落て　瓢哉

其三

宮中女工添フ於一線ノ

永キ日を今日一線や添へ始メ　瓢哉
鶯の子の織(フリ)習フ梭(ヲサ)　秋吟
雪の朝扇つくし見る鳥にて　越人

蓮と嬰子は花實同時成ルに

枇杷の花帷子時の用意哉　晴山
河豚汁や面目なさに皮好む　臨之

枯野の所〴〵霞溜りて

並松に入日の寒き光リかな　蓑笠

方円に私もなき氷かな　卽休

末の露本の雫も氷垂哉　仝

木曾の棧道に、小野の瀑布といへるを

百夜ほど落ぬ氷垂や小野の瀧　上條邑 林竹

手帋にて申入候冬の梅　仝

硯蓋に住の江のけしき繪書を見て

摺る度に啼住の江の千鳥哉　文錦

更級のかへり花哉冬の月　湖嶋

寒月を喩へば梅の立枝かな　三語

冬の月に波走ル事不レ聞

寒月や兎は見へず啼は鴨　文錦

山家を見るに知レ足ノ豈也

榾の夜着雪暖ナ山家哉　桑原氏 琴松

幾十丈の積雪も干事無レ眦——

橇(カンジキ)や雪の雲踏む早飛脚　春翠

合点しておくるゝ菊か雪の中　濃州神戸 木公

淵明是を見ば如何

寒菊は陶家にしらぬ乙子哉　同州今尾 其柳

氷蚕(サン)は何を喰ふて、繭(マユ)を作るならんと思ふに

寒菊や氷蠶の喰フ桑ならん　如水

冬季

父母に孝を盡ス爲ならば目出度からん

王祥が心あれかし網代守　湖嶋

淨瑠離(璃)・小哥に曉しらぬ家も有ルに

綿打の弦音寒キ夜半哉　市行

紺掻の師走仕舞に出す藍瓶を、乙瓶と祝ふに

乙甕に猩々来たり節季ハ　僧 松郁

節季候は心にあらぬ踊りかな　三州蓬川 先子

月は跡花に近寄ル師走哉。　東福田 合六

煤掃や編笠ぬげどしらぬ顔　空蟬

今宵船を畫(ヱガ)イて、敷寐とするに、我は
寶船に德利繪書て敷寐哉　犬山 吹楊
拂ひける厄に埋まん西の海　問景

柊・鰯の頭、豆うつよりはやく、
立春の暦は
豆をうつ音よりはやし猫の戀　越人

春たつといふばかりに、よし野の
雲を哥には詠む。然ども
山見ても霞まぬ春や年の內　簑笠

歲暮

其一　小松賣

笄賣は古箕をつかひ、呉服屋は棚
晒を着ル。商人の心、己を先キとす
るはなし
小松賣おのれが分か賣餘り　黄雀
今度の臼で作れ餅花　兎耳
横槌に踏むと後(ウシ)ロへ眞仰(アホノ)きに　肱枕

其二　節季候

親は大福帳を胸息にして、算盤を
琴彈クごとくに、錢を如レ神如レ君すれ
ば、子は嶋原へ行て、金を如レ土如
レ水する。此孫迷惑ノ事に逢ふ可レ成
節季候の三味線聞は椰(マヽ)かな　市行
よき大盡(ジン)の鯨つく君　黄雀
米二俵漸打チ手の小槌にて　兎耳

其三　煤掃

雞は塒(トヤ)を落され、猫は定器の蚫貝
を失へども
煤箒や厩靜に眠る馬　肱枕
とりつぎなくて寒キ掛取　市行
摺リ遂イ惡クや裸の乞食めに　黄雀

其四　年忘

明夜私の宅へ蕎麥切にて、吸物は
河豚、跡付は一ッも御ざらぬと約
束して立時
袴ならことはり云フぞ年忘　兎耳
羽織脱ギ捨テ鰤わくる世話　肱枕

門違ィ仕て來ル醫者は無首尾にて　市行

歳暮

借ス物は誰かわするゝ年の暮　舍丁翁一空

ひとり笑ひの早咲の梅　仝

寐度ィ程寐る日の今朝は窓明て　一空

佛氏日月を鼷白の鼠に喩へ、無常
をいへるも實に

年の尾や身を喰ィ迯の日の鼠　卽休

流るゝ年を水といへるも

年波はくり出す帳の小口かな　听子

行としや裏店もなき市の聲　木曾馬籠 望月

捨て行暦やとしの置土産　濃州今尾 其柳

義秀、曾我の五郎と力くらべは其
通り、何とぞ暮行年の留樣、その
ちからにて三郎殿頼むぞ

朝比奈よ年の草摺引ちぎれ　簑笠

年波は氷る間もなく流レけり　飛泉

賦何々賦連哥にする事、さらば我
は一句の中にて聞ゆるが取ルべし

隙ナ物何木枕ぞ大晦日　仝

春は芭蕉翁と同じく、吉野の花、
須磨・明石の朧月に杖を引、鞋を踏
しも射ル矢のごくにて、翁は深川
の芭蕉菴に歸り、我は伊良古の草
堂に眠リ、なす業もなく旅行の吟
など嘯きけるに、其所〱に著し檜
笠の壁にかゝりけるを見て、越人
が方へ申つかはしける

年の夜や吉野見て來た檜笠　杜國

鵲尾冠上終

鵲尾冠　中

負山子纂

花

此ほとはしろもしらぬも玉ぼこの
行かふ袖は花の香ぞする

華盛ゆきかふ顔は酒臭し　越人

水上はたが酒部屋ぞ花の瀧　肱枕

長明が車ぞほしきはなのもと　仝

花の後も雲に人よぶや芳野山　問景

動かぬで花としりけり嶺の雲　仝

月の夜はおぐらの山も名のみなる
べし

案の外花はさかりぞ嵐山　問景

瀧かいな松に音借ル花白し　仝

寺參するとて嶋原へ行多し。上戸
は花をいつはりて

酒飲に行ク替へとば華見哉　市行

山上山下たゞ雪夜のどし

闇の夜もあかるし花のよし野山　簑笠

此人俳諧はせず、たゞ聞ィてのみ
居られしが、其角とある時の會
に

花に鐘けふも暮ぬと聞人かな　有馬　涼及

狸々翁が淡墨の繪を見て

瀧本も墨繪は花の影法師　飛泉

陽炎は花に相圖の狼烟かな　仝

竜宮より取來ル俵藤太が鐘は、今
三井寺に地に落て有。つら〳〵つ
らぬ心を思ふに

華散ルな俵藤太が鐘つらず　晴山

風よりも花に夕の鐘悪し　躑躅

暮に散ル花は咲べし朝の鐘　文錦

出雲國には十月を神有月と俗にい
へるとぞ。予思ふに、吉野一山に
諸國の花不レ散、此所花有月なる
べし

彌生さへ芳野の外は花無月　木鷄

酒を好む人封を酒泉郡に願ふ。花
にあかぬこゝろにては

我は花によし野の山を知行かな　桑原氏 琴松

家に杖つく人の此花は、我二葉に
植し樹、今日雲の如く盛成を見給
へと、盃出侍れば

實植せし花に酒盛ル郭(クワク)橐(タク)駝(ダ)　艾石

よし野見ぬ目には取ッ湯や庭の花　昨王

落花の雪に歸る道を失ひ侍るに

管仲が老馬たのまむ花の雪　高木氏 若水

貞室がこれは〳〵といふ句に、
我もまたこれは〳〵

口あくや口ふさがれぬはなのやま　佐々木氏 梅夕

花遲き比、旅にて終日雨ふり侍り
けれは

ふらばふれ花に腹居(イ)ン旅の雨　京 保田氏 雷姉

常世のはなのいかなれば

是非もなし此華見ずに歸鴈　犬山 豆箕

さそはるゝ花に我身や松に藤　濃州垂井 吾竹

都の花見むと旅だちける人に

成ルならば目をあつらへん花の旅　尾州下ノ一色 沙彌 正雲

しら雲や威有よし野の花盛　冬央

夜に入て物のさえなしとは、兼好
が笑ふ所

中〳〵に櫻はよるのながめ哉　黄雀

櫻がり笠伏せる樽生ヶ捕ッたり　空蟬

散世話は夢も遁れぬ櫻かな　三州ヲカザキ 秋冬

太山でもあらはれ出るさくら哉　木曾福島 廣龍

樺(カバ)といふは何ンの木の皮ととふに

檜物屋はつらしさくらの敵哉　東福田 合六

さくら遲し藥屋にからず酒の間　下ノ一色 和笑

鶯に梭(ヒ)はうたせて

音もせず蝶の機(ハタ)へるいと櫻　舞巾

松梅は主人により、傘・船などの
形にまげらるゝに

作られず繩目のがるゝさくらかな　艾石

いつゝ花見る所より案内遲きを、おしかけて見れば、落華なりけるをうらみ

此雪に住遣はなしゆふ櫻　右(古カ)考遊

江府よりのぼり侍るに

あしたかの櫻や富士の雪の眞似　京 雷姉

はな咲カぬときは柳よいとざくら　簑笠

謫仙、廬山の瀑布を九天より落ルと、我は峯より谷につゞき咲さくらを見て

天の河峯よりかくる櫻かな　越人

昔も御堂殿と、公任卿の梅櫻のあらそひ侍ると

左はいへど梅にかちたる櫻かな　問景

郭公

寐られぬに啼てくれるな杜宇　越人

こよひも寢ずに明るならんと

待かねて我からなくぞほとゝぎす　肱枕

ほとゝぎす明イて居る目の覺にけり　越人

小侍従がまつよひの鐘や不如歸(ホトヽギス)　仝

時鳥おもへば去年も雨夜哉　簑笠

聲をこそあごがるゝ(マヽ)に、かたちを見ても又

繪に書イて何ンのとおもへど子規　仝

卯月のころ、聲なおしみそといさめて

晝吠る犬や六月ほとゝぎす　仝

鶯の籠に鳴、口おし

籠の鉗に啼ぬは淸し子(マヽ)宇(ホトヽギス)　問景

寐ずに心のうかるゝは

橘を籠にして聞クほとゝぎす　仝

ほとゝぎす戀にはあらで待夜かな　文錦

思ひいづるやはつねなる覽、とよめる。實に

待侘る初音や去年の蜀魂　飛泉

いま一こゑの聞まほしさに

おれらまで山路くらしつ子規　仝

下の句をさだめかねたり催歸(ホトヽギス)　兎耳

奥ヶ耳やきのふきゝけり不如皈　市行

五月闇聲は明るしほとゝぎす　琴松

聲こそいのちなりけるに

遠眼鏡つらし外山の謝豹(ホトヽギス)　卽休

歌よまぬ公家作病かほとゝぎす　湖秋

ほとゝぎす聞にきにけり須磨の月　桃里

ほとゝぎす感ぜぬものこそなかり梟　榎柢

人の口のうごくた、何事ぞと耳うときくせの根問ば

御隱居へ申あげけり帝魂　佐、木氏 梅夕

ほとゝぎす矢矧の橋や鑓の鞘　濃州今尾 重和

待に鳴ねばわざくれて

聞ヵば猶聞たかるべし時鳥　キソ福島 廣竜

まち／＼て待ぬ油斷や杜宇　冬央

越人、三河國に遊び、久しく歸らざりけるに便(タヨリ)ありて

あめやまの言傳申せほとゝぎす　且藁

月

虫の音で扨は夜也けふの月　越人

名月や餅屋をたゝく人も有　仝

今宵雨ふり侍れども、猶空たながめて、酒のみあかし侍れば

名月のあめやついでも印度(イド)茶碗　仝

世には心得られぬ事あり。一年一輪の良夜た

鼾かく家は盗人かけふの月　飛泉

文錦が亭に難題をさぐりて

十五夜半月

望月も五分(ブ)の蝕(ショク)に影薄し　仝

橋かくる神や晝よりけふの月　間景

なぐさめかねつと吟じて

酒飲ぬ月ぞ姨捨にあらねども　仝

明月は曇らで星を見ぬ夜哉　間景

十五夜より前も八月は名月

八月や夜あかし習ふ十日比　仝

月前に酒のまぬは殺風景、されば
盃の訓を思ふに

盃の訓は酒月が傳受なり　文錦

一日一斗盃は思ふに小盃なるべし

名月や七ッ鉢七ッ飲あぐる　榎柢

明月や猿虱見る岩のうへ　吹葉

花の後茶屋の師走やけふの月　高木氏 若水

むかしの鶍の繪は尤

武蔵野で月見る人や虵と蜂　佐々木氏 梅夕

あかぬこゝろには

夏の　と思ふばかりぞ今日の月　箕浦氏 鉄聲

月はいつも今宵ぞ晴の夜見せかな　岸上氏 空蟬

名月や去年の醉を噺けり　古丈

仲秋の三五はたゞ一夜なり。何とぞ

せめて香のあれな座頭にけふの月　春翠

談林風とて日本國もてはやしける
比、江戸にて有し句とて、昔聞侍
るを思ひいでゝ今もおかし。作者
の名を忘れぬ。いと殘おほし

滿月丸船によし行によし但シ酒にて用ユ　讀人不知

右の句に妄斷あり。我數十年の後
爰に

禁物や下戸者ン坊あきの雨　越人

今宵ハ酒は何物かいむ

天の原酒のむ蚘かけふのつき　晴山

めいげつや稻の穗ばかり低きぬ　尾州東稲田 快月

欄杆に顔揃へけり今日の月　全

働いた水主は鼾かけふの月　同所 和笑

將軍義教公の、とくすみあらせと
の御哥、まことに

あるゝほど見事也けり不破の月　濃州神戸 是柳

こよひの月の見事さは

姝の蝶きほへ三五の白牡丹　三州岡崎 胡叟

朝晩は橋のかうばいか月の影　柏里

七夕ばかりまつにあらず

めぐりあふ星のこゝろぞけふの月　止敬

秋も月も二の段で割リ塵なし　大川

女は多情の夫をうらむ。歌人はこよひのくもりを恨む

雨雲や男のうらみ今日の月　豆花

八月十五夜くもり侍れば

御簾越の美人やくもるけふの月　簑笠

身より出る是も錆なり月の笠　問景

分別のある人いやしけふの月　眩枕

見る人の盞と成けりけふのつき　多央

春の日の夜るへ廻るか烁の月　飛泉

三味線も尺八もなく、こゝろにくきさまは

めいげつや二艘ならべて噺ス舟　夕泉

久しく相煩ひ、漸〱とこよひいざり出て

此度は醫者にはかくす月見かな　三州藤川 光子

ある人、持病を治するとて番椒を多く作れり。其家にて月見侍るに、我はまた

名月に寐ぬ藥なりとうがらし　旦藁

十六夜

めいげつは降リ、いざよひ晴ければ

いざよひの晴レは裏研鏡かな　簑笠

いざよひは夕の客の板返し　兎耳

名月降リ、十六夜もくもり侍りければ

十六夜も牧狩以後のとらが顔　越人

ある年名月は降、いざよひはれ侍りければ、俗に二タ子は後に生るゝを兄といふ事を思ひいでゝ

いざよひはふた子の弟兄ならん　仝

三日月

みかづきのかつら男はいづくへか　黄雀

三日月は片肌いるゝけしき哉　仝

みかづきを見よや湖水に散一葉　三州藤川 夫推

唐墨の丸きを見て

摺リかくる墨や物ノ陰ゲを残す月　同州ヲカザキ 芦帆

みかづきや不盡山ひとり雪の後家　同所 胡叟

牛ベすぎ霧雨ふるか三日の月　柏里

九月十三夜

後の月須磨やあかしの遲櫻　飛泉

十五夜の二文目ぬけや後の月　泊船

天秤で名殘は重しのちの月　濃州神戸 是柳

二夜たらで名月といふは

月の名や角ミ前髪で團右衞門　越人

雪

ふりにけり豆腐買ゆく盆の雪　古 杜國

唐崎はいざ庭でさへ松の雪　簑笠

ゆきの花も入相のかねに散にけり　仝

雪の日は枯レ木にとまるながめ哉　仝

峯の雪に殘る松さへなかりけり　一步

日ごろはにくげなれども

雪の朝模樣おかしき烏かな　黄雀

脫でからおどろかれけり笠の雪　兎耳

おのがいろを雪に書たり村烏　豆花

潘安仁が二毛を思ひ

初雪は山の頭の二毛哉　里鶴

つむ雪に老木の松も二葉かな　桑原氏 琴松

一休のしの字や雪に落ル瀧　佐々木氏 梅夕

礫うてば雪こそ鷺と成にけり　東福田 梅下

相傘やかた袖づゝの雪白し　仝

籔の名や山と替へ見るけさの雪　千且林水流堂 小千

足ばかりとぶ氣色也雪の鷺　三州駿川僧 夫推

雪の原目藥ほどの土もれて　濃州垂井 吾竹

はつゆきといふ間に軒のしづくかな　同州府中僧 暮三

ながめけり鼻毛にゆきの溜ルまで　同州今尾 古光豐

初雪や牡丹に借サむ檜笠　同所 鳳脊

きぬたといふ花生は、天下の名物也といへり。それにあのけしきを

雪の枝礎にいけぬ無念なり　飛泉

雪に行挑燈の影おぼろ也　仝

花より酒のすゝむは雪なり。酒飲みばかりを雪見ると思へるに、發句はとはれて

どう見たと問れてこまる雪見哉　芝響

賢者而ノミこれありとは孟子、惠王へこたゑ給ふとかや。實に雪見ゐとは俗の難レ云

耻かしき雪に孟子の咎かな　越人

芋にはいもの味よし、栗は栗い味よし、いもの栗、くりの芋は面白からず。

華といふたとへは雪の名折哉　問景

ゆきの竹野分の草のけしきかな　仝

からすのねどころへ行も、おかしげに

面白し雪ー散ル中の夕日影　仝

題古詩

春

中殿ニ燈殘テ竹裏音

鶯や竹の葉烟る朝ぼらけ　問景

好シ是レ夜闌ニノ人不レ寢

半庭ノ寒影在リ梨花ニ

月と見て客はたちけりなしの花　仝

折ニ梅花ヲ挿バ頭ニ二月ノ雪落レ衣ニ

如月に香ふ雪ふる頭かな　文錦

梅花帶レ雪飛ニ琴上ニ

梅散や琴はさくらの吉野川　機石

春寒ノ花較ヤヽ遲シ

窓は雪うたゝねに見し花の夢　瓢哉

梅花門戸雪ノ生涯

皎潔窗櫺白ラ一家

子を持ぬ住居なりけり白き梅　濃州神戸 杜碩

巫女廟ノ花ハ紅ニノ似タリ粉

昭君村柳ハ翠ニシ於モ眉ヨリ

其中に華と敵する柳かな　豆花

陸地逐レ日水煙深シ

舟繫ツナげ柳は烟る陸の波　湖穐

水光長ク得タリ照ニヲ龍津ヲ

水底で風の眞似するやなぎ哉　艾石

東風吹レ綠映ニ村園ニ

園にさへ風の柳はうねる浪　濃州神戸 是柳

柳色相レ烟入ニ酒中一

さかづきはけぶる柳の朝日かな　機石

礙レテ石ニ遲ク來ハ心竊ニ待

流れ來る盃見るかきせる置ク　飛泉

牽レテ流ニ遊ク過レハ手先ツ遮ル

夕ばれや境をわくるやま櫻　濃州神戸 木公

春雨一晴望ニム遠山一ヲ

莫下向ニ花前一久ク留滯上スルヿ

紛々帶レテ雪鬢爲レ翁ト

あるじ待うちに降けり花の雪　市行

華下忘レ歸ヿヲ因ニ美景一ニ

花のもとに宿へ鎰やる夕べかな　越人

樽前勸レ醉是春ノ風

樽を横に吹倒しけりはるの風　間景

おなじこゝろを

幾銚子火花を散すさくら哉　桃里

鳥老テ歸ル時薄暮ノ陰

春さめに入相遲しかへる鳥　梅振

夏

可レ憐盤中ノ飧粒々皆ニ辛苦ナルヿヲ

田植見て我行厨の喰ィにくし　間景

無レ意故園住テ脚ニ行ク

艾人の吹れゆく畑は故郷かな　飛泉

伊勢壺ノ底ニ暗ニ皺レム眉ヲ

花散て隱居今するや梅法師　木公

微風不レ被ラ蟬凉却ス

大木に汗かゝせけりせみの聲　梅振

長安市上酒家ニ眠ル

肩輿釣りて醉人たづぬる涼ミ哉　吹桑

月照ニ平沙一夏夜ノ霜

すゞしさは庭も洲崎か月の霜　市行

天光雲影共ニ徘徊

釣竿の下にもたつや雲の嶺　間景

老妻畫レイテ帋ニ爲ル棋局一ヲ

風ふけば紙の棋盤やはぬけ鳥　越人

秋

守レ家一犬迎レ人ヲ吠ユ

忘れたか土臼作りをとがむ犬　飛泉

露及ニ明朝ノ涙不レ禁

芋の葉の歌洗ふ星の涙かな　仝

彭蠡秋聲雁引キ來ル

いなづまや思ひの外に雁の聲　簑笠

西風茅茨長淮ノ地
可レ有ニ征人帶レテ涙看ルー

けふの月江戸で泣らん母の文　問景

天寶ノ遺民見ルコト漸ク希也

なき友に指ど折盡す月見かな　仝

醒レ吃同ニシ交歡ノ醉後各分散

月は空へ殘る餅の酒臭し　越人

潭融可レ算ヘツ藻中ノ魚

珠を得てうなぎも守る月夜哉　機石

爭デカ得ニン梅花六月開クコトヲ

妒ンだりほとゝぎすとは秋の月　湖秋

半裘立チ盡ノ暮雲寒シ

迯し世を露かしましや落ル音　三州藤川 先子

燕ハ知ニア社日ノ辭レ巢ヲ去ル

巣を置ィてたかきに登る燕哉　飛泉

黄花何故ニ無ニ顔色ー
應レ爲ニ元嘉以後ノ記ー

大輪にいま咲菊ぞ元嘉以後　越人

外物ノ獨醒ルハ松澗ノ色

世は紅葉粕もねぶらぬ松の顔　問景

林間ニ暖レテ酒ノ燒ニ紅葉ヲ

燒いでも顔に間するもみぢかな　文錦

冬

坐ニ對スレバ眞成ニ被レ惱サ花ニ
出テ門ヲ一笑大江橫タフ

笑ふ時美人消へけり水仙華　越人

栟葉亂テ夜叉ノ頭

栟櫚の葉は風なげる大手哉　簑笠

鴛鴦ノ瓦冷ノ霜ノ花重シ

軒見れば嵐に咲よ霜の花　湖秋

一千年ノ色雪ノ中ニ深シ

雪に猶松は冬なきみどりかな　大川

座久ノ忽チ聞ニ庭竹ノ折ルヽヲ一

よるの雪竹に我を折長座哉　湖秋

梅花不レ覺竹先ツ知レ

大雪と頻に竹のよはりけり　吹葉

雪眼羞レテ明ヲ夜轉飛ブ

ゆきの日や内へはいれば皆雀目　問景

白日掩ニ柴扉一ヲ虚室絶ニツ塵想一ヲ

只降て跡なき雪や柴の庵　越人

風雲易下シ向ニテ人前一ニ暮上

行年の日影や駒の早飛脚　飛泉

歳月難下從ニテ老底一還上リ

跡へ行としの道なき師走かな　仝

題古語

有下リ朋自ニリ遠方一來上ルコ又タ不レ樂シカラ乎

柴の戸も花に賑ふ野風呂かな　大川

夫レ希レテ世ヲ而行ヒ比周ノ而友トシ以テ為レ人教ヘ以テ為レスルハ己ガ仁義之慝與

馬之飾惡ハ不レ忍レ為スルニ也

春日さへ淋し原憲が窓のうち　豆花

靜ニシテ而聖メ動ニシテ而王タリ無為ニ也シテ而尊シ樸素ニシテ而天下莫ニシ能ク與レ之ト

爭フコト美

世の中をまかせて見たき柳かな　三州藤川　先子

知レ足コトヲ足ルハ常ニ足リ

井の内も住メば蛙のみやこかな　木曾贄川　時楓

對レ花啜レ茶

紅井の花見る人の顔青し　臨之

不レ知周ガ之夢為ニ胡蝶一与胡蝶之

夢ニ為レ周ト与

蝶荘子跡なく夢に喰れけり　舎了改　一空

以ニテ天地一ヲ為ニ大爐一ト以ニテ造化一ヲ為ニ大

冶一ト

白雨や打鉄床のいなびかり　越人

夫天地者万物逆旅也
光陰者百代ノ過客

草籠や一夜泊リのきり〴〵す　濃州神戸 木公

草木黄落テ分雁南ノナミニ歸ル

しら雲にあらしの山や黄むらむ　止敬

墨ハ見テ練糸ノ哭ス

しら糸の雪のやなぎの行衛哉　肱枕

楚人ノ一炬ニ可レ憐焦土トナンヌ嗚呼
滅ス六國ヲ者ハ六國也族スル秦ヲ者ハ秦也

蜀山は兀て阿房の灰寒し　木鶏

雑

抑、飲食を口より入とおもふは最下の事なり。神仙は露をなめ霞を吸ひて長生し、佛は稱名誦經を食とし給へりとぞ。是を法味といへり。されば曹操が梅酸は一言万卒の渇を補ひ、恵遠法師が詩酒は淵明・陸修静と同じく酔ふて、虎溪の禁を忘るゝ過る。芭蕉は草にして雷聲を聞成長し、蛙は母の鳴ごゑを乳汁とする。眼に見、耳に聞キ、鼻にかぐ所皆好悪有て、心に味ふ書に向ひ、理を味ふて食を忘るゝ先賢多し。今發句を以て盛膳とし献立に顯はすに、心無味を味ひ、飯より酒菓にいたるまで、過不及なく毒なし。静に腸胃をやしなひ、鑊カナヘに柴薪を不レ借、器皿を不レ用、近侍之勞を見ず。山海の魚鳥、園圃の菜菓、心の欲する所に隨ひ、思ふ所にまかせ、飲食せずといふ事なし。さらに仙佛のごく、世をはなれ俗を破らず、梅酸の士卒を勞せず、腹胃（臓）過不及なく、暗に食ヒ中庸を得、燕居の心をたのしむ。何ンぞ八珍の得がたきをおもはんや。

献立

刺身

盛形に梅の枝みる香ひかな　夕泉

汁

切る音もざく〳〵汁や鶯菜

めし

時は春飽(アカ)ずかはらぬおぼしめし

二

歸る雁雲井も爰ぞ海雲汁

煮物

花衣魚も着にけり色崩し

引而

初鮒と茶津に相宿や焼若布

酒

桃色の顔やおさへばいたみ酒

取さかな

しらへぎに幸ひ雉子のほろゝかな

裝束

正月一日・七日・十六日の節會はおの〳〵夜ろなり。餘寒冬にもまさり、內辨褫を引給へるを見るに、打下襲(カサネ)の表白きは、さへかへる雪かとおもはれ侍りて

春ながら雪や引摺る下襲　山下氏 憲章

曲水

盞や桃色あぐる桃かさね

端午

けふはつくも所より藥玉奉り、御几帳に掛く。群臣も肘にかけ給へり

藥玉の香や闕腋(ケツテキ)のあき所

七夕

ぺん〳〵たる白氣を銀河とは世に知る所、星に祈るにふたつを兼ず、一事をいのれば、三年が内にかならず叶ふとかや。それは穀織のころもの見へすくがごとし

穀織(コクアリ)に空や見へすく乞巧奠

八朔

けふは本說たしかならず、正禮にてはなし。實敷公事にては努〳〵あるべからず。然ども近代裝束家より、眞の御馬を奉らせ給へり。馬の口とり白張を着、常の紺の

代なしにて、なしもみ烏帽子破れば、
糸髮もかくれ侍る

口とりや眞の御馬は揉ゑぼし

重陽

十月朔日よりは、冬の袍に群臣更
衣なり。九日はいまだ夏の袍なれ
ば、肌寒き比にて打見うすく見へ
侍り

菊の節禮なればこそ夏の袍

五節

豐のあかりの節は小忌を着す。小
忌も常の小忌とはかはり、青摺の
小忌と申成べし。そのさま烏賊の
白きに、青酢などかけたらん樣な
りけり

青酢かくる烏賊なり豐の小忌衣

題針

名は針立の部に入て、我も名人とおも
へど下手なれば人不レ用、去ル比清須と
申所へまかり侍るに、其里に久敷瘧病
を振ひかなしむ者あり。何と聞てか、我
を名人と手を合せて御慈悲にといふ。それ
我先、針より前に邑の名を聞て、
を種に時は冬ならねど

早お清。須。ほんと落ッ竹の雪　旦藁

松風の里を通り侍るに、旅人霍亂して
伏居たり。哀とおもひ一本ひねりゆへ
ば忽よし。其時

霍亂や我を松風の名に凉し

長久手の古戰場見に誘引まかりしに、
里人何として我名を知りたりけん、一
本と賴侍れば、松風の里の手がらに心
奢りして、自讚大かたならずいひちら
し

針長く手際捻らむ秋茄子

此度は何とかしたりけん、其針拔ず。
胸とゞろきさはぎけれども、せかぬ顏
にて、咳拂ひ打して、自由所を問ひ立
とひとしく、走りだし迯たりけり

針捨て歸るは迯る燕かな

それより一里あまりは、追やかくると息もつかず迯て、とある流レを見さぐり飲、汗ぬくび(ママ)

鷹よりも只今の針夢となれ

我針の百に三ッ病を治すると、犬の蚤をつみ得たるとおなじ。自然の幸也。されば今年五女子といへる里に、三年になる胸虫煩ふ者あり。針藥數人術を盡し、つんぼ程も聞ず。我にまた針を頼む。我心得たりと目をふさぎ、手の行所に隨ひ立るに、ふしぎや痛ミ忽にやむ。病人大キに悦び、其年の暮に麥一石馬に付、予が名を尋來り、主人の口上快氣御影との禮なり。我は病人より猶嬉しく、先祝へと酒とりよせ飲むところへ先キの男來り、麥は所違ひ鍛冶やへ參ルのなり。爰もとへは是なりとて大根二把と取かへ、又麥は馬につけ行ぬれば

年波や是も歸らぬ麥一俵

此所へ越人來り、此事を聞、年なみはかへるとも麥は歸るまじ。我もきのふ似たる事あり。鰒汁喰ふところへ行て、嬉しく箸ヲ取あぐるに、脇より其方は今日精進ならずやといへば、是非なく淺漬にて茶づけ喰ぬ。

河豚汁のきのふに似たり今日の麥　越人

よひはのめと、其酒は亭主の損なり。

朱子忌

侗齋先生、朱夫子の忌に、花中投レ師ニと云題出て、書生達おのおの佳作あり。予にも文字並べ見よと題來る。我何をかしらんなれども、めくら蛇におそれずのたとへにて

花中投師

吟行醉裏思ヒ無レ邪マ
花下投レ師ニ日已ニ斜也
道德文章何レノ處ニ覓ン

鶯梭柳糸織二煙霞一

道芝の花にわけ入手樽かな

三月日　　負山子越人稿

延壽院道三喫茶訓

もろこし我朝に、諸の茶飲ミ達の沈汐し申さるゝ、茶の湯茶にもあらず、只咽の乾きを休めむには、湯だにわかしぬれば、疑ひなくやむとおもひて飲ム外には別の子細候はず。但し數寄と申事候は、我胸のうちだに奇麗に候へばよろづ其中に籠り候也。此外に奥ふかき事を存ぜば、二人の隣にはづれ、數寄のかずに漏れ候べし。此道を信ぜむ人は、和漢の道具を得たりといふとも、一物不持の貧者の猶とおなじくして、只一向に湯をわかすべし。

　數寄の安心、此一紙に至極せり。愚老が所存全く別義を不レ存。京童部の邪義をふせがん爲に記畢。

天正十三神無月廿日　　道三

　此一紙を得て、我いぶかしき事有。胸の内の奇麗成と、邪義をふせがんといふ當時の茶人に問ひ度事なり。

道三の白湯(サユ)に口きる人もがな　　越人

　當時を見れば、此事天下の美歡なり。一器の價ひ數千人の飢寒を補ふべし。

龐居士が海は口切の數寄屋かな　　仝

峨嵋山論幷發句

盆石あり十指に捧グ。あるじ名付るに峨眉を以(モツ)てす。予其形勢を問フ甚だ稱す。ある人の曰、一掬の小石何ンぞ峨眉の大ィ成名を用ンや。我答へて曰、君蓬の心成かな　氷蠶(サン)に火鼠を不レ可レ語、鳴梟に白日を不レ可レ論、黄面老子が舌は口の内より出て至ニ梵天ニ、維摩が方丈は三万二千の獅子の座を入たり。形チ小にして心大ィ成物あり、徐卿が小兒は五歳にして牛を飲ム。小にして大ィならずや。形大ィにして心小サ成ものあり。桀紂、天下を以て一人を悪む事不レ能、天下返ッて小也。掬石、大山の形勢あらば大山なり。大ハ成山に不毛あり、是

小石におとる。今此小峯、思ふに莊周いはずや、夜半に負レ山走ると。人は荒唐の言とす。我はしからず、迂濶ならんやは。さらに此小石絶頂の素白は、四時不レ消の雪、まことに大山なり。不レ知負ッて走る山を。此家に捨たる成べし。

嵋山〳〵雪も千とせの峯白し　越人

菊之論

物いはぬ菊の心を知り生長さするに、人のおもふごとく十が八九不レ違。若ッ人が人に心を盡さば最安かるべし。誰か君父なからん、誰か兄弟朋友なからむ。菊をやしなふ心を右に盡さば、必忠臣孝子成べし。窮困をかへり見るは薄く、菊を養ふ事は厚し。彼の爲には千金も如ニス泥沙ノ。口腹をたすくる稻穀にもあらず、風寒をふせぐ麻棉にてもなし。只人にほこりて其詞をたのしみとす。婦人の紅粉を施し、鏡にむかふて我を悦ぶといづれ。一轉して爲ニ君父ノにせば目出度かるべし。人の生命に預る醫針薬にはおろそかに、病る家は堂へて呼に至らず。夜半に乘レ燭て菊畑に眠りを忘る。予嗟。

菊にして見度ィ事かな父と君　負山子

宣王羊を以て牛に替るを、孟子仁成とのたまへり。佛者は不レ此論ニ、我肉を切て鳩の秤にかけ、鳩をたすけて鷹の飢も補ふ。道家にも孫眞人がいへる、虻虫・水蛭の類ひ迄用る罪にて、天仙と不レ成といはずや。飢渇に到り、沙門の魚鳥の生を喰ひ、生命の爲に田圃を作り生虫を殺すは、破戒の持戒なり。飽まで喰ひ暖に着て凍餒を見、釋氏として一衣一飯を不レ施、已れが樂に無數の生を殺し、花の爲に錢を費やす事、罪ののがれ所釋迦に問ひたし。

菊の虫殺すや僧の波羅夷罪　負山子

淮南子曰以下蟹ニ觀池ノ之力上耕ス則ハ

田野必ズ避ン矣以テ積ム土山ヲ之高ヲ
修ム堤防ヲ則水用必ズ足ル

いかにせむ菊の費へを麥の糞　　仝

漢丞相武侯

古今將師方略の精密成人多し。然ども弑レ君奪レ世ヲ武侯は三德を兼備ふ。伊尹・太公はしらず、漢の前後公のごときはなし。先君の遺詔に廿餘年辛苦を嘗く、後主の闇君に忠をつくす情は出師の表にあらはれ、事は蜀史につまびらかなり。後世の君子不レ遂ニ素意ノ事を千歲ののちに涙を拭ふ。

伊川先生挽詞

巍々タル功業蓋ニ三國ヲ
凜々タル威風鎮ム八番ヲ
羽扇綸巾扶ク社稷ヲ
忠肝義膽展ブ江山ノ

忠や義や天下に着スる丸頭巾　　負山子

敵に厲風ノワキみかた凉しきあふぎかな　　仝

武侯贊　　參政葉士能

退クモ莫レ追フ兮進モ莫レ攻ルフ
來ルフ如ニ風雨ノ去テ無レシ跡アト

稻妻の手にもとられず跡もなし　　仝

孔明廟　　杜子美

出レノ師ヲ不レノ捷身先ツ死ス
長ニ使ムニレ英雄ヲ涙ダ滿タレ襟ニ

往昔を今時雨るゝや誰ガ實ト　　仝

李斯

難シ將テニ一人手ヲ掩ロ得天下目ヲと李斯が詞は汝が事なり。燒キレ書ヲ坑ンレ儒ノ秦ノ虎狼をたすけ、利ハ自ラ取ニ刑禍ヲ汝を滅すものは汝なり。死ぬる日、黃犬を引んと昔を泣く。おろか成事なり。

立願で我腹見へぬかはづかな　　槿花翁

馮道吟詩臺

五代の晋漢周の間に十君につかへ、世々高官にのぼり、政事に預

おといへども、其時〲にあふ様にして、文才有ながら輕薄無念の事なり。實に旅（モロ〱）進ミ旅ロ退竊レミ位ヲ、而苟（イヤシクモ）祿備レリ員ニ而全スル身ヲ者ハ亦タ無レ取、よく耻をしのぶ成べし

趙閑々

山意ハ似タリレ羞ヅルニ人ノ識ルヲレ面ヲ

雨ヘ昏レ丞相賦スルレ詩ヲ臺

穢されし臺をはづる山の色　槿花翁

王安石

賢人君子を退け朝庭に不レ置、佞才を以て新法を行ひ、万民を毒し、諌爭の人を仇敵のごとくにくみ、生老安石曾公亮病死富弼唐介趙下苦の其世の語、天下腹心の病は此人なり。天津橋上にて堯夫の攢眉可レ恐。

宋の世の骨うづきかな郭公　仝

梁武帝

帝發願文曰、寧ロ爲ニツテ提婆達多ト一長ク沉ムニ死地獄ニ一ハ爲ニツテ鬱頭藍弗ト一暫クモ天ニ不レ受レ生ヲ。これ人主の言にあらず、浮屠に淫溺し、持戒捨身に世を亂し、何ンの天堂に生ずる事あらむや。終に至テ臺城ニ一爲ニ侯景ガ一餓死し給ひ、國ほろび子孫絶へたり。

提婆より寧（ムシロ）おもへや民の秋　負山子

佛教にいはずや、佛法豈レ異ナランニ世法ニ一、佛者のふかく工夫すべき言也。武帝際限なき寺を建テ寶を費す。其費はこと〲く民の膏油なり。是を論ぜば民を悪み、世の靜成こそ大善根とは申べし。實に率（ヒイテ）レ獸ヲ而食（ハマシム）レ人ヲといづれならむ。

民のため武帝の寺は野分かな　負山子

菊の論より武帝に至りては、進ンで詩書の中へ入おくれて、釋教の中へ可レ入句どもは、へ共、愚か成予が心に善悪をならべ見は、心の蓍の一端にもやとこゝにかく。

神祇

はるかに年たけて伊勢宗廟へ詣ふで侍り。先、外宮へ參り宮居奉レ拝

ろに、只寛の宮階を書にうけ給る
様にて頬に涙こぼれ、年比詣ふで
ざりけるも悔しく

春日影音も香もなき鏡かな　越人

内宮へ詣ふで侍れば、いよ〳〵有
がたく、御裳裾川に望めば心の塵
洗れ、兼て承る御供なんどの事ど
も、皆万世の御教訓、我國は此御
神種より外、他姓の世をしろしめ
す事なし。天竺震旦に夢にもなき
事也。

長閑なれと世を天照す三柞春　越人

聖廟の奉納の發句被レ乞て

紅梅は文選よみの色香かな　仝

菅神の御忌に

散ルな梅心つくしの九百年　濃州今尾　尒牛

聖廟の御前にて詩經をよみ

廿堂や子どももおらぬ神の梅　問景

加茂の祭すたれたるに、二たびあ
らた成ければ

谷そこの葵世に出る祭かな　山下氏　憲帝

ある人螢を見、夜るは來れども書
みへず、と諷へば

笹の葉に三輪の神みる螢かな　木曾福嶋　廣竜

天滿宮の法樂に

青梅の鈴スヾ生ナリやふる雨の音　濃州今尾　風和

世に煤はらふ事は、節季候の聲、
田作リ呼る比なるに、北野の神殿
は七月七日なり。いはれある事に
や

盆候やあらむ北野の御煤掃　晴山

神無月に神詣ふでして

御神馬はしらぬ顔なり神送リ　飛泉

北野へ十月詣ふで侍りて

梅は留守松はしぐれて神送リ　濃州神戸　湖舟

何れの社も春は賑ふに、冬來れば
人も草ならねど

神垣や乙女足借さす夕時雨　勢州内宮　三友

駒犬は有のまゝなり神おくり　籬雀

駒犬へたのむべらなり神の留守　市行

神垣に冬咲梅やとし籠リ　鸎（鶯）

天然と足はあぶらぬ庭火かな　問景

余所は雪森は雨ふる庭火哉　飛泉

釋教

寂光の著初や具相三十二　濃州今尾僧 松槲

座は置ィて佛を敲キ祝ひたし　飛泉

佛に生死なし、其理を悟入するはなきにや

皆笑ふ顔の筈なり涅(槃)盤像　越人

尾州荒井といへる所に、志水といへる禪者あり、世をのがれ哥にかくれ給へり。其僧の哥に

白妙の雪の山路に跡つけて
あたら佛の世にぞ出ぬる

とよめり。實に隱者と申べし。それを和して

雪山に死なで見苦し涅盤像　越人

一休老人の哥を

虚言つゐて死ぬは佛と遊女かな　簑笠

小松の内府ノの給ふにまだ一ッ有

散ル花と涅盤に耆婆が藥なし　高木氏 若水

兒文(殊)珠見る白梅の蕾かな　東鶴田 梅下

紅梅のつぼめるを見て

長者にも越へたり梅の万燈會　僧 松槲

平等施一切のこゝろを

哥よまぬ人にも梅の香ひかな　磯石

不(布)施とらず花を本尊に蛇の經　木曾贄川 時楓

極樂の音樂有事經に見ゆ。酒は五戒の一ッなれども

一戒は花に破らむ小さかづき　僧 是中

箱根・草津の湯は、地獄の別所と申せば

陽煙や燃る中成鬼莇　千旦林 小千

前佛は過キ、後佛は三會の曉

御佛に消へおくれけり殘ル雪　三州藤川 先子

高野山にて

遅櫻散りて道なし女人堂　濃州今尾 重和

むかし仙人有、道を修するに鳥來て頭髪に巣作る。其鳥の巣立までうごかざりしとぞ

鳥の巣に卵(タマゴ)わる迄借ス頭　僧 豈美

一空居士は文武兼備の士也。耳順を過、壯心趙充國が氣象方略、刀鎗騎射の術精密なり。閑か成時には詩哥を弄し、又俳諧を好む。予に恩遇厚し。常に巻軸の來去に道を論ずる數万言、皆眞禪なり。去年より病床に付、ことし四月始に終りたまへり。平世生死を脱却す。何ンの生死に心あらんや。予、今靈璽に一句を投ず。予が言にあらず、公の平生なり。

投ニ舍了翁ノ靈璽ニ一

惡可絕レ臂嬰兒戯　趙州無酒飯尿屎

佛々出世傀儡休　一代藏經覆盆水

天地指す釋迦の指折君は誰　越人

灌佛

臍の緒や後五百歳の善の綱　濃州今尾 介牛

花散れば青道心やおこす芥子　濃州府中 僧 暮山

竹の子に悟れ龎居士が其簀(イカキ)　千旦林 小千

我に牛偶なし。しかるに

欠びする口へ入ル蚊は何レの行　僧 松椰

蓮に付病を見ればほとけかな　越人

先立子の魂祭すとて、生前ニハ毒なんどいへど、其好メる物なれば

青柿の手向あたらじ魂まつり　旦藻

妻と娘に、はると夏の間になくれし人の玉まつりに

涙つけに來るや夕皃の馬二疋　越人

飛花落葉は觀念の種と申せど、又

蕣や生死二本の枝折門　僧 松椰

籬を見て

蕣は悟りの馬の手綱かな　今尾 流水

蕣の種や卒都婆の産ンだる子　越人

山伏の地藏頭は近代ならぬ事成とぞ

露時雨わけ入ル木魚静なり　兎耳

日よみ頭子に伏寅に翁草　山下氏 憲章

僧の我に談ずるを聞

稻の花疑ひもなき御法かな　今尾 風和

臨齊(濟)ハ平地ノ波濤 炎天ノ雪雹

臨齊の喝は雲なき野分哉　桑原氏 琴松

百丈ハ尋常如シ虎ノ挿シ翅ヲ

雲に飛ぶ虎の息ふく野分かな　木鶏

雪降來れば寒くこそあれ。とよめるは有樣の事成に

ありの實をなしといふ也齋坊主　機石

遁世者は糝(甚)粏瓶一ツもつまじき物也といふに

菊作る僧や湯を涌し水にする　里鶴

鳥窠禪師は樹上に座し、心戒上人は常に蹲踞して、死の來るヲ頭燃の拂ふがごとし

菊作る僧や浮世をゆるり寛　臨之

高尾山にまかりて

文覺が尻あぶる跡の紅葉かな　桃里

達磨の像は六月見ても寒し

寒月は達磨の睨ムまなこかな　今尾 流水

老僧は寒し小僧をぬくめ鳥　尾張下ノ一色 和笑

有といはゞ喝と答へむ雪女　木鶏

生死を出るは大白牛車成に

小桑や雪車に火宅の出ぞこなひ　卽休

榾燒や油をしらぬ持佛堂　問景

述懷　哀傷

愛子を失ひ、又子といふものなければ

梅を見ぬ子一夏も子ゆへの盲哉　旦藁

父の遠忌に牌前に畏り

梅散りて木をはなれたる匂ひ哉　濃州今尾 風咊

子をころして

陽炎に燃殘りたる夫婦かな　古 杜國

子におくれ憂へ、我もいつ迄かと兼て石牌を立

陽煙や身を幽靈に見る逆修　旦藁

隅田川にまかりて

梅若の名斗繋ぐゝ柳かな　桃里

三位頼政は、椎を拾ひて世を渡るかな、と讀給へるに、當ニ老て仕官する人に

殘る雪は烏帽子招なりくらい山　神戸 木公

柴の戸は明けながら丸裸成は、獨身の安樂さ、醒て月に嘯キ、いねては衽に蚊をあつむ。錢なければ盜人にも見限られ、妻子なく酒飯とぼしければ、問ひ來る人希なり。命の儀は天次第、心は我心、富貴は羨せず、只太平の世に生れ、鯨波鉦鼓の仰山なる聲きかぬは樂の至りなり。其外は終に佛神に御苦勞かけ不レ申、鄙言を口にまかせて

今日〳〵成ほどこんにち

問へかしな蚊屋の色紙にのぼる月　濃州今尾 尒牛

山家問ふ人なし

蚊に迄も見限られたる住居かな　木曾福嶋 眞竜

失ひし子の生前にもて遊びしもの、猶殘りて

こがれよかいかに殘れる螢籠　旦藁

水錆て骸骨青きほたるかな　古 杜國

子におくれし人へ申遣す

帷子はかくすも漏るゝ涙かな　越人

父におくれし人の忌中をとぶらひ

晝皃のひとり露けき袂かな　仝

葬の牛ば開けるが、其まゝ日に凋めるを見て

朝顏や只小式卩が哥ならん　今尾 不及

すみだ川にて

涙散る柳こゝなりすみだ河　三州岡崎 夫乙

子のむなしく成跡にて、与風見つけ侍りて

墨付し行燈を泣〃きり〳〵す　越人

近く語りし人の七回忌に

かへり來て鶯もなけ梅戻キ(衰)　今尾 風和

俳諧は亡父好み給ひし道にて侍る

に、世を去りたまひて後、此二句物の中より見出侍るに、墨のいろはかはらず、只其時の心地し侍りて最悲し。殘し置ヵまくおもひ、越人が句帳へつかはしぬ。秋の比病ひに伏して、と書たまひて

吹風に熟柿あらそふ虫のころ

年比茶をもて遊び給ひしが、いつの比の會にか、同じ紙に

客前に路地の水かな行時雨

右の二句孝夕泉公より來りぬ。

父になくれ侍りて

炭消て心の闇ぞくすり風呂　越人

頼風が妻の墓にはへけん女郎花は、夫の心いかに有ならん

茶の花や利休が塚の女郎花　文錦

母におくれし人へ申遣す

竹の子をほるべき雪に棺(ヒツギ)かな　越人

憂へに沉み世をあぢきなく、もとより切りて

亂るゝも子ゆへぞ拂ふ髪の霜　旦藁

戀

旅人を宿す家の庭に、梅の咲るに立留れるを、例の女のおのれがいろにとゞまるとやおもふ。ころ〲に袖にすがりけるに

出女に聲借るむめの匂ひかな　黄雀

女にはとかく櫻のけしきあり

業平が女とも見えずむめの花　閒景

爲ㇾ君薫ズレ𪜈衣裝ニ君聞ナガラ蘭麝ヲ不ジト思ヘリ馨香ト

硯水をしらで、涙を偽りし誰ソ

愛せねば作り花なり薫る梅　飛泉

白魚の目は平仲がなみだかな　機石

太夫樣の御出と、一座どや〱いふに、何ンの事もなく、ずつと床ばしらにもたれ、足なげ出すかたちを

紅梅やしたり太夫がひとつ前　榎柢

祈戀

愛染に謎をかけたる柳かな　賀川 時楓

花をたづねて立入寺に、あてやか
成兒の經習ふを聞

あたらこと法師になさん兒櫻　市行

この比の菊作る人の出來花を願ふ
と、禪は少女を買ひ證キ、傾城に
仕立ると其情同じ

菊苗は嶋原に仕込ム禿かな　晴山

物おもふ人のすがたはすみれ哉　古川氏 吟風

楊妃が歯を痛ム圖に

海棠(棠)のうつぶくや歯の痛ム時　越人

旅ヘを留る女に、かたちにもよら
ず、よく留るあり、留ぬあり

出女や傳受の外のよぶこ鳥　肱枕

傾城と盜人に、眞實があつてはな
らぬ業なり。それを實にするは、
魚の釣針にひかれ、鴨の流しもち
にかゝるとおなじ。情欲にほださ
ると申物なり。

しら波は松をこへけり藤の花　文錦

筑摩祭の鍋は不義のいましめ可
レ成に、惡ふ心えて多くかさぬるを
よしとす

無慙なりいかにかさぬる筑摩鍋　肱枕

汀見よ冶郎の踊るかきつばた　里鶴

白ふても女そだちや杜若　簑笠

此鳥一名吉原雀といへり

三谷にてぎよう〱し鳥は花車が聲　夕泉

美少年の四ッ手綱をもち給へるを
見て、いふとも不レ覺

短か夜にあつたら夢の大夫かな　東福田 梅下

娥眉涼しさゝくれ立な四ッ手竹　旦藁

帷子はつらやあはて(せっ)の裏表　仝

玄宗の見給ば、いかに貴妃をいよ
〱

相生の思ひは實(ミノ)る小角豆哉　機石

高の師直平家を聞て

國よりも鵜射る賃のあやめかな　臨之

待宵は胸の烟を蚊遣かな　三州藤川 先子

寄日雨戀

夕立や御物あかりは蚊家の内　春翠

のどかさは夫婦端居の凉みかな　空蝉

逢ぬ戀

獨寐は星逢にくむ涙かな　簑笠

中絶戀

あらはるゝ中やひなたの忍草　仝

後朝

文書ん蕣の露落ぬ先　問景

文書に鳴仕舞ふ虫うらやまし　飛泉

忍ぶと我はおもへども、人はあらはに知るを、猶我は

名にも似ずながめられ梟(梟)忍草　文錦

野分の卷をよみて

まぎれなき樺(カバ)櫻見る野分かな　一歩

古風なる人の少年の口吸へるをいへる、おかしさに

村鳥も枝柿もぐかうらやまし　旦藁

王昭君にかはりて

我顔を我にらむ月の鏡かな　越人

錢に富る人、傾婦を妻とするを

千金で生るを放つ身うけ哉　湖嵩

蕣や傾城買ひの溜る金　越人

酒に和して或人の無分別な事ありと、義經の坂おとし、太閤(閣)の朝鮮陳(陣)と申さるゝに今はなし。秋樂といふ人、おどけたる人にてまだあり、地黃丸飲ゝで好色、今一ッはとて

乙姫に万戸が珠や露に打　古 秋樂

重陽の日は家〳〵の楊貴妃、綺羅を盡さるゝを

内儀達の襟や八重咲菊の花　春翠

笛鹿のもと手に貴妃が木履哉　飛泉

余吾將軍なればこそ命は拾はれけれ

美敷女に迯よもみぢ狩　兎耳

いなばの山の峯におふる

松風は行平を泣しぐれかな　今尾　重咊

待宵の時雨

僞りはあらじと賴む時雨哉　瓠哉

夕霧大將、維(惟)光が娘の舞姬に出るを待や兼給へる

舞姬の袖返す數は片手哉　簑笠

劉伶は禁酒すと妻をだます、今の世にも去ル人

雪の日は女房をおがむ德利哉　兎耳

忍戀

きぬ〴〵や雪かけて消ヌ足の跡　飛泉

錦木は昔みちのくに有し事とぞ。いかふ雪の降國なれば思ひやるに

破風口に錦木立る深雪かな　機石

戀佗てあるにあられぬ霰哉　旦藁

祝

君にひかれてといふこゝろを

万代の共うへをひく小松かな　簑笠

見た事もなふて目出度し松の花　仝

六十に成ける人に

六十は松の花見る當歲子　越人

四十二に成人を祝ふて

のどかさよ鶴の齡を六七羽　仝

はじめて男子をまふくる人に

立ならぶ軒も根づよき幟(ノボリ)かな　三州藤川　先子

男子うめる所へ

家の名を上ゲに幟の生れけり　今尾　風咊

老て夫婦隱居する人に

色かへぬ松高砂の箒かな　泊船

久しく子なくて、男を產する七夜に

千秌は樂にカニトリ小紋かな　越人

千句の卷頭に

目出度さを松に顯はす時雨哉　越人

新宅の祝ひに、水仙を古備前の壺に生るを

水仙も同じ酒仙の壺の中　機石

大名や御手に合する鷹の夢　文錦

重五子剃髪を賀す

重五子は世〻良材の事を業とす。燕居には俳諧をいふ事年あり。今年耳順有三にして、家事を賢息に委ね、時の風俗に隨ひ、圓頂を浮居に借るといへども、それに淫溺せず、家にあつて振衣、市中偸閑、忘世利、其婦、夫の志に習ひ、烏髪を薙る。つら〱おもふに世に柊といへる樹あり、四時不改色、綠翠松と等し。花芬〻と闔辟のごし。靑葉八稜有て鬼魅も恐る。年を經て觚角を新葉に讓り、古葉は團圓と成。今重五が心と形に似たり。目出度からずや。彼柊は俗にいへるのみならず、近世獨菴叟玄光師といふあり、博識多聞に其著述を集て護法集といふ。遠く異域にわたり、大淸國鼓山の爲霖禪師見て、日東に眞禪ありとよろこび、其卷首に序して玄光にをくり、其德を讃美す。此護法錄の中に、柊なのするに樹の德を書、詩有文有、其の文の序に、本草下學之二集名之曰黃芩而引本草爲據本艸所謂黃芩草也又民間或名之曰柊榕櫧皆有中其名實玄光高士花書ヒラギト訓ズ

曰經四時不彫(凋)。標凜然猶如高士雖處汚俗不可以非禮恩又曰因爲一絕賦高士花雖陋句不足發其德聊寫所見而傳好事者矣。予が俗間に聞所と同じ。此ゆへに彼是に似るを幸いに、一句の野語を

稜は花に讓る高士木の圓葉かな　桃林

父母の圓頂を祝して

雪箒て何の苦もなき頭かな　孝子　一歩

父病身のゆへを以て、ことし剃髪すを祝して

剃落す髪や病ひの煤拂ひ　同　簑笠

重五子は予が羇客の始より恩遇厚く、今に及んで四十有年、志改る事なく日ゝに親ゞし。今年薙髪す、又我を其座にまねく。祝して

雪と共に病ひ冠を脱にけり　越人

懐胎の帶をする人のもとに、与風行て

冬苔む梅はかならず男子かな　仝

入學の人に

梅が香を探り入けり徳の門　仝

髪置の賀宴に

髪置や小判いたゞき又御印　古　秋樂

杜國が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹のこゑを折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき　芭蕉

堯、二女を以て舜をむかへ、忠仁公、基經に家を讓る。皆聖主賢臣の跡なり。我友女子を以て他の男子を養ふをいはひて

年波に千代をあかしの迎船　飛泉

文學さかんなれば、北野御愛木色こまやか成と諷へば、書生を祝して

紅梅の色あぐる御世の論語かな　越人

鶴の巣にあらしの外のさくらかな　芭蕉

鵲尾冠中終

鵲尾冠　下

尾陽貝山子　越智越人

俳諧は昔にあたらしき有、今に古き有、古今にわたり不易なるあり。實にふるきを尋ねば新しきをしるべし。古きを不レ知してあたらしと思ふは無ニ礎束一。於レ爰に古人十一人の佳句を取て、今の人の冠とする事は、毎〻其美なる物を上ゲ、我にへだてなき人にかたる。各鱠炙して章をなさむ事を思へり。古人の微意をいたづらになさじと也。蓬頭もしか思ひより侍れば、白被て人を舞しめ、人〻冠して我助音する物あり。すべて十有余篇、始に置貞室が句は、名畫探幽齋を有時　女院御所様へめさせられ、曙の氣色を書可レ献ツルよしの　仰ごとなれば、肺肝を酸くし精神をこらしけり。其妙、筆にあらはれ、不レ施ニ五彩一淡墨を以て　院中へたてまつる。其比家の面目其時なされし法印なり。貞室以ニ狂句一世に鳴ル。都鄙かれが風躰をもてはやし、若き殿上人、火をたく衛士も此句・彼句を諳きかたる。さればおのづから　天聽にもれ聞へ、一藝に名ある物は、用ひすてさせたまはぬあまねき御こゝろにて、其道を得たる物と、彼曙の繪を下したまはりぬ。門人ども道の冥加なりと、ことぶきよろこびける會に

曙の叡慮かしこし春の山　貞室

貞室は家をうり、小町が琵琶を買。一世の風流もゆかしく

霞や四方に名は實の賓　黄雀
虚になる燕は花に皆咲て　眩枕
ぐる〳〵廻し臼かりて來る　越人
くれの月河岸端さはぐ船よばい　兎耳
わらぬ西瓜の事を請合フ　市行

だら〳〵と田舍武士行司召シ　筆
　寺さへ見れば中念佛　枕
ほとゝぎす聲を入日のちから草　雀
　筆持ながら筆をたづぬる　耳
雛ナ形の摸様何イツれと定め兼　行
　時ならぬとき通れ獅子舞　人
庭鳥は桁ケタの楪ユズはく臺所　枕
　今朝月寒く打こほす水　雀
泪にてたち場忘るゝ塚の前　耳
　花もあはれを凋れ手傳ふ　行
青柳の嵐は春の冬の松　人
　聲は拍子におとるつばくら　枕

二オ

しよろ〳〵とりゝの雨の脚　雀
　こゝろも草の生ウる生ナマ壁　耳
暈ウキリある身に暈ウキリなき世話を燒ク　行
　佛の道も金カネに極る　人
大黑の槌とははやる太夫なり　枕
　いづれ誓文いづれ葬　雀
胸はたゞ夢も現ウツヽも野分ふき　耳
　雲間の月の稻妻　行
閻魔より使鏡カヾミへ來る白髮　人
　夫婦連にて養子見立る　枕
小利口な小女メ郞ロウが持ッ小辨當　雀
　ゆふだち晴て店の禮いふ　耳

二ウ

表より裏へ迯てはほゆる犬　行
　ぞつとするほど大イカ山伏　人
けふに限り男のきれはなかりけり　枕
　見ておる內に鯛タイ腐クサらかす　雀
花の下へ心を先へやつて置キ　耳
　諷ふ平家の琵琶長閑也　行

月花を日にて見るものかはと書しもむべなり。されば望一は盲人なるに、子猷ガ看虎鳥レムㇾ煙ニといへる日のあきらかなる人の句とおかし。

望都

おのづから鶯籠や園の竹
一生梅に近づかぬ蝶　簑　笠
朧とは雲なき月のくもりにて　間　景
濁れば足を洗ふ河水　芝　響
閙(ワザクレ)と酒債(サカテ)に簑を脱つ着つ　機　石
柚の花の香に涎(ヨダレ)ながるゝ　文　錦
眠(ウ)る間を風は本繰(クル)時鳥　豆　花
御返事なれば御報不レ申　越　人
傘に木履くゝりてかたげさせ　笠
称付られし子がそれに様　景
夢といふ現(ウツヽ)を夢や笑ふらむ　響
鏡は照りて涙しぐるゝ　石
美しく生れ付たる顔ぞうき　錦
悪人方は天下一番　花
買ッてなる猿關白の猿利根　人
光秀が弑逆た秀吉聞て、曹操が漢賊の心決し、山崎の一戰幸に勝利、終に主君の君達をなやまし、其家にあらずして關白と成、大佛建立・朝鮮征伐、天下なくろしむる事、人の物なうばひ、ぬす人を長ずるにあらずや。
月の光を奪ふ出来星　笠
雲に入華火かへつて波を燒ク　景
天窓がちなる大阪の秋　響
二オ
粮生はとかく都のしづかなる　石
刀もさゝず樂な侍　錦
頼母子が闔にあほうな破軍くる　花
米の直上ゲに聖天の法　人
供連ず毎日袴着ていづる　笠
此包(庖)丁も見よ二十年　景
座敷たつといふては藏(クラ)を又建る　響
不審うちたゞ大キなる下戸　石
色ばかり親によう似てあかい顔　錦
しかれば舜は化ケ物の內　花
おろかさや月の蝕見てそしるらん　人
晝ほゆる犬よるの梟　笠

ナウ
松苗の盛に生る竹の子は　景
狂歌めでたく仕りたり　響
若殿へ年を上ゲよと御意で抱　石
絹が毒じやに木棉着めされ　錦
わざと花に小便をして金一枚　花
小ィ男の聲は駒鳥　人

二度草堂をいで、尾陽に來るとき
箱根にて

山路來て何やらゆかし菫艸　芭蕉翁
蝶行かたやさくら咲らむ　越人
妻こふる雉の啼音に輪縄かけて　旦藁
賤がたばこは大名の菓子　里鶴
明月や人見る店も遊山船　素全
京で雁ふたあれ音頭取　弓爾
來る顏も又來る顏も熟柿の香　杖香
はつてくれたる余所の疕　藁

磊々と中を飛するから車　人
杖讃ム二冂口月八三　全

此句は古き噺有。此六字は昔、市の中に火車落て人死す。其人の背中に如レ此爪の跡文字也。人見るによむ者なし。僧一人通りてつくづく見て云ク、此市人は市の商ひに小升をつかふ。其罪にてかくのごとくと、文字の上に杖をおけば

帀中冂小丰

十右衛門に蠅がとまつて千右衛門　爾
揚屋の門に闕札を打　香
振付て後安い世に何ンぞいの　藁
死ぬるは嬉し藥くれるな　鶴
氣にかゝる物は明石の朧月　全
よし野初瀬の花は別レて　余
路味噌の苦い所ぞおもしろき　香
袈裟も衣もみな帀子也　全

ニオ
松の葉の日に凋まぬも賴まれず　鶴

といふて鰒は喰ふ心なし　藁
褌まで小むらさきめにいきどられ　爾
枕はしらず邯鄲の夢　香
白癩(癜カ)に牡丹の白に出來る付ヶ　全
象牙の箸に廏(イン)はびしや〳〵　鶴
千世や〳〵伊勢の御供の三杵米　人
頭戴(イタヾイ)て飲ム酒くさい水　介
槍にてほしや節なき四海波　藁
挑燈(テウチン)とぼし慾二百文　全
寒る月醫者乘物が仲人なり　香
冶郎を入てかよふ蒸籠　藁
ナウ
木乃伊(ミイラ)取りに行とひとつかしのぶ戀　鶴
思へば哥もおほきなる罪　香
發心に胸の掃除の箒捨テ　介
寐てるたる子を又覗き見ル　人
鳥ながら折れぬ華の枝提ゲて　全
はるのけしきを野に置て來ル　鶴

むかし〳〵周穆王の八駿、漢ノ關將軍の赤鬼馬、本朝右近の少將廣嗣が龍馬は、太宰府より都へ半日の程に往來すといへり。滿政が赤六、貞任が大黑、今いづくむかあるや。人間萬事塞翁が馬にかへず。

項羽が騅(スイ)佐々木が生喰(イケズキ)の木瓜の花　素堂
眠る間に散世は櫻なり　琴松
霞かと見れば春雨雫して　佳木
燕ヲ待か戸をたてぬ家　越人
盃をおさへに月やさしぬ覽　松
かいうつぶいて薄キ亂るゝ　木
ウ
行秋を松は氣强ゥしらぬ顏　人
秦の太夫の官いかい疵　松
後の人の笑ひをおもへいまの人　木
ならひ長うて皆性と成　人
鱗形(ウロコガタ)着ればおそろし亂拍子　松
鸚鵡がへしをつかまつる姥　木

一輪で春に釣あふ冬の梅　人
　月は師走を見るべかりけり　松
涙問へば欠（アクビ）の跡とまぎらかし　木
　いむ事うくる尼君の留主　人
いそがしや吹ぬあらしに花の散ル　松
　節は四ン月月は三月　木

二オ

春ながらたしか今のは子規　人
　枕障やるあかつきのゆめ　松
浦嶋が箱か治郎の編笠は　木
　奈良茶一鉢とんと明ヶおる　人
猫またの光る眼を吹矢にて　松
　時にとつての本間孫四郎　木
義貞の最後限（ギリ）なり太平記　人
　短（ミジカ）い秋の日でもねぶたし　松
八月はいろ〳〵の名を月に付ヶ　木
　夜明は新酒飲出シは古酒　人
冬は河豚夏は蕎麦切講をして　松
　親は一代骨おられけり　木

二ウ

佛壇をとへば大佛見せる窓　人

此句は古、南都に樂坊主あり、本尊に大佛を用ひ、窓へ御顔をうつし朝夕物しけるとかや。三國一の本尊、其風流いたれり。

　此よい作で商ひは下手　松
しら髪にも乳を飲子にも笑はする　木
　花も實もあり分別も有　人
常はたゞ風のなき日の柳にて　松
　蝶の噺も聞ゆべらなり　木

たゞあり明の月ぞ殘れる、といへる三十一字を、十七文字にすべてよく聞えて興有俳諧なり。滑稽の後徳大寺なるべし。

扨はあの月が啼たか不如歸（ホトヽギス）　友吉
　其橘の香をうつす窓　豆花
中立に模様を盡す琵琶彈て　簑笠

さらに吝（シハ）さをかくす借上　越人
町醫者の何ンの刀を肩輿（カゴ）に入レ　花
船出させむと名乘ル代官　笠
ウ
杵（キネ）に水あびせるやうに降ラれつゝ　人
松ぞ柳はたのむ甲斐なし　花
散花のこゝろ短きうたてさよ　笠
搯鉢に來てとまる鶯　人
雪の日も內は夏なり糀室　花
息キなしに飲ム後の一升　笠
禪僧や美む戀も無分別　人
太夫盗ンで負ンでぬけ出る　花
蜆川いまの身にては芥川　笠
朔日ごろの月の入方　人
ながき夜や宿直（トノヰ）袋の口あけて　花
こゝろの底を露も殘さず　笠
二オ
耳洗ふ水は牛にもけがらはし　人
氣違どもがよりあひにけり　花
五六人あたまつくねて伊勢噺　笠

こんなときには盗めかまほこ　人
主の子を我子の樣に呵（シカ）る乳母　花
短い髮に染角の櫛　笠
たばこ飲煙行衛は空に消て　人
さかりをいへば久しあさがほ　花
めいげつは二タ夜おりないたゞ一夜　笠
くはれて高のしれた秋の蚊　人
立聞て彼三曲をつたへけむ　花
功をつむべし斧針に搯ル　笠
名
雜談の芝居破りに馬鹿な事　越
挑燈とぼせ身が內の者　花
晝のまゝ乳はあまさぬか小坊主は　笠
雨にさへ華雨にうつろふ　人
行はるの闕は繪に書さくらにて　花
雲にもいらず雁のなき鳥　笠

予思ふに、其角此句の心にて一生を終

らば、原憲・子夏なるべきに、晩年には可レ惜事あり。

其角

艸の戸に我は蓼喰ほたるかな　其角
煙を蚊屋に釣明す天　越人
村雲を難なく月はおしわけて　友賀
よい時に入差鯖の船　泊船
闘と闘取ルと札錢最一倍　湖秋
恭うち二人は留主嬉しがる　柳糸

ウ

釜の中見れば牡丹餅めしつぎに　人
木端の俵さがす五分鉥　賀
からくりで鐘は撞樓へ上りけり　船
無學なれどもこわい坊様　秋
河豚の皮終岩茸に仕てのける　糸
御時分よいと又行で來ィ　人
暮の付四本がゝりに圓座敷　賀
日のあるうちを光る三日月　船
性を斷美人の眉の霧はれて　秋
秋も驪山は花軍なり　糸
硝子の天井魚のおよぐ見ゆ　人
侘も榮耀の世は無盡藏　賀

ニオ

節分の豆は兩手にあまるほど　船
今ぞ杖つきのゝ字なりけり　秋
刀さす人いかめしき小城下　糸
莚つけ出す六齋の市　人
爰らまで覗き釣來て覗かする　賀
つがもないとき中念佛　船
今朝覺る夢は鯨の一のモリ　秋
此青雲に人はたへるゝ　糸
富士は扇月は要かかゝる空　人
注連あきかぜにそよぐ汁釜　賀

ニウ

大事氣に蔦の錦につゝむ松　船
土佐が墨繪は重たかりけり　秋
酒は酒餅は餅屋と思召せ　糸
烏はかあ〳〵雀はちう〳〵　人
一休の花は蜷川新右衛門　賀
鏡に見へぬ春風の影　船

獏釣ラむ夢の胡蝶を餌に刺て　秋

舟は魏王の其瓢なり　糸

梅翁鎌倉へ行しを、江戸より幽山追付て、雨吟せむと望めば

よれくまむ雨馬が間に磯清水　宗因

いかにも〱夏の日最中　風和

いぢる程猶平仄のあひ兼て　僧松榔

摺餌に鳥の足跡も文字　人也

月の朝山がら小がら四十雀　流水

帯仕シ所を瓢簞の形　鳳香

わすれたる扇は風の骨ばかり　重和

如露如電蓄妾切の跡　介牛

御歯黒も本の白歯に歸る後家　梅舌

氣所の思ひを燒付たがる　不及

半分は時雨にぬれぬ瀬田の橋　秋香

咨い秀句を何の卷舌　陸舟

捨て置臼に菌のはゆるほど　洞霧

須彌の北から見たき明月　其柳

須彌の北洲は人壽千歳の地なり。子の日の松を引事も、長生を移すなるや。北は子の方なり。

鼠まで物澤山な秋は來る　好文

切レるを笑ふ鈍ひ小刀　秀呑

不言花のつけたる顔の癖　和

晝寐嫌ひも茗草の氈　榔

ニオ

顔見せを春までのばし大あたり　也

しやれては餅も前に直をする　水

雜談もさかづきとれば力なし　牛

蠟燭消スな行燈の側　舌

あの尻目雲にしるつく嬉しさよ　及

片頬かくす白無垢の襟　香

いかにせむ松を根引にせられては　舟

水はかれても借錢の淵　霧

地黄丸虧たる月は補はず　柳

塔くむぞくあがる藍玉　文
わや〳〵とわめく子供は赤蜻蛉　呑
御幣打ふりかしこまる釜　和
ウ
僞りは漆と見ゆる膠にて　梛
詞の河豚に腰ぬかしけり　也
あはれさよ耳で花待座頭の坊　水
霞ぞはるを觸レ渡す山　牛
鶯の聲は暦のよい證據　香
若菜つむ手をふり埋ム雪　重

艸木禽獸皆可也。然れども其物其の物の情を知人は十に一二か。春澄が此句、葬を見る情いたれり。

口惜とあさがほの種を殘しけり　春澄
憂キは散ラずに凋む菊の香　越人
三十日には見よ長月の影もなし　仝
ふらぬ時雨の空時雨めく　蓑笠

替盞の重て家の餅くばる　仝
とゝさまの名をとへばとゝ様　越人
ウ
慾のないはなしを聞ぞ氣の藥　仝
風を薪に松の下庵　蓑笠
駕て來る鶴かたはらに羽を休め　越人
不思議な事はみんな虛也　笠
くつ〳〵と何思ひ出しわらふらん　人
なみだ顯る水入の墨　笠
張良も逃る女のいかり事　人
弱いものにて切レぬ鷄　笠
終消る露に萬里の月の影　人
霧はれわたる窓覗ク不盡　笠
京を華にいましら河は秋の風　人
日の短かさを步行にて知ル　笠
二オ
乘物は先ヅ藥代の上ゲ看板　仝
牡丹を好てかざる文盲　人
世の中は木に薄置て南無あみだ　笠
西施が眉の皺を疱顏　人

花といふ名ぞはづかしき栟櫚(シュロ)の花　笠
是もまたよしそれもまたよし　人
人の子の死ぬる聞ても莞爾(ニコ)〳〵と　笠
さりとは所帯持の下手也　人
公儀事因果で埒を明ヶて見よ　笠
先不合点な俗の碧巖　人
日の代を月が照ルとてする物か　笠
無理はしばらく秋よはる蜂　人
名ウ
一炬にて暴風(ノワケ)の跡よ阿房宮　笠
釘屋ほどあり釘(クギ)に氣が付　人
得ぬ事は陸にまどへる鸊鷉(カイツブリ)　笠
堋(ヒフ)のうらへもいらぬ楊弓　人
花の留主仕廻(イテ)人のなき溫飩桶　笠
柳のいとの尻も結ばず　人

野渡无レ人舟自横といふ詩は無形の畫なり。空しき舟に鷺をのせて及第せし繪は有形の詩也。此景情飲レテ水ノ冷暖自知するが如く、しる人は知り見る人は見る。されば西行上人は秋の夕ぐれを、岨の立木の鳩の聲に五百年ノ前に聞、芭蕉老人は枯枝の鳥に秋の暮を五百年の後に見る。たゞ一器の水を一器に移せり。

枯朶に鳥のとまりけり秋の暮　芭蕉翁
木棉(キワタ)且ッゑむ田の中の畑　越人
水の月いそげば急ぐ影見えて　佳木
晴てはしぐれしぐれてははれ　問景
雪呼に炭焼けぶりたちのぼり　飛泉
鮪(シビ)一本をわくる村中　文錦
ウ
花にさへ李斯が鼠よ咲キ所　越人
丘隅にとまる鳥はしらずや　佳木
坂落し手柄はおほく無分別　問景
土見る唐へわたる藤四郎　飛泉
舟に酔ぬ禁厭(マジナイ)聞に二度三度　文錦

まだめさるゝかながい看經　越人
食米も小遣ィ錢も若衆出す　佳木
繪に女なき金平の本　間景
何事もふるき世のみぞしたはるゝ　飛泉
袈裟の光るは有難ゥなし　文錦
京の月見るに及ず歸りけり　人
鴫たつ澤の哥集に入　木
二オ
萩のははとばかり跡はいひ消シて　景
松のくらゐを禿からもつ　泉
あの曆此鼻日利して置た　錦
何を出しても買ふ事でなし　人
死ぬときは負ねて行か蓑虫め　木
植替るさへ見せおらぬ菊　景
接木ほど上手に仕たい脉と匙　泉
乘ゞ入り前の娘かげろふ　錦
逆坂は眞似に及ぬ鷄の聲　人
西は遠いか月の痩たり　木
日の出て野はぬれ〳〵と秋の霜　景
荳蒄の花も皆稻に成　泉
二ウ
鏟鍬の米やる前のいそがしさ　錦
已は手水をつかふたがまで　人
引て行蟻にもんどり打ッ蚯蚓　木
雨のあがれば地から湯氣立ッ　景
咲はなを去年より質に入ル茶屋　泉
蚫松囃子の是も肩衣　錦

此句は僧澤庵の作なり。直筆な江府にて見侍りぬ。顯基の中納言に見せたてまつらぬ無念也。明星の西亦ノ東シといへる詩は、京より配所へ趣れしときの作なり。

象潟の月や流人のたすけ船　澤菴
西また東蓮の實の飛　越人
大腰に土俵の外へ聲懸ヶて　仝
明日物賣に來るぞ名を聞ヶ　朝山

半分はまじなひ殘し置田むし　仝
見とゞけられぬこゝろなり鳧　人
ウ　場を去ラずおなじ所につくねんと　仝
死ンだ眞似して鳥とる猫　山
頼朝の念佛平家を牛房(ゴンボ)抜キ　仝
劫を作るをしらぬ弱い碁　人
二ッ三ッ青葉覗けば花白し　仝
山ほとゝぎす月になる比　山
俳諧をめさるゝさうな氣の詰ル　仝
ッヽンッつんといふて出て行　人
天窓(アタマ)數障子に移るけんどん屋　仝
よふふる雨の程もある事　山
富士盗む雲や楊貴妃縊(クビ)るらん　仝
胸のけぶりに見ゑよ俤　人
ニ　しら紙をまだ繪も書ずうち詠メ　仝
ぬけて行ほどはつてくれたい　山
子を連て談議参りは魔王也　仝
二百十日にあたる申酉　人

初あらしふけども鳴(ナラ)ぬ松の枝　仝
地に落た物秋は皆金　山
玉の字がつくと兎は月になる　仝
酒は噺をのせる三味線　人
御暇と草履素足で尋けり　仝
紙燭とらんとすれば吹消ス　山
いはで思ふ心の闇を廊下にて　仝
腰もとに化(バケ)たまふ奥様　人
ナウ　淺草の人は蝿よりゑいや〳〵　仝
欲はひとつで似た顔もなし　仝
笑はせてくれるな腹がはや減ッた　山
よい養生は仕りたり　仝
花の散風にかまはぬ松を見て　仝
倅(セムシ)もはしる春の村雨　人

宗因が此句を見るに、眼前酒の通なり。其節其時を見よ、實に佳句也。

遠く求めむづかしく尋、纔十七文字の内へ何ンの心かの心と、我ばがり思ふて自慢すれども、人聞て不ニ聞得一。句はよく聞ゆる上にて好悪は有。聞えぬ句に善悪の品不レ可レ有。しれぬ事云て初心をまぎらかす、愚痴なる事也。付句もよく聞ゆるにてこそ面白けれ。今時皆まぎらかす事の上手多し。

一宗長曰、連歌は能イ事ばかりせんと思ふは心狭し。ことにより、いかにもかろらかなる風もよからんとなり。

一紹巴曰、作意といふ物は、あながち天竺・唐土の遠き境にもあらず、佛教・神道にもなく候。たゞ目の前の事に候。一ッ二ッの替り目なり。

両匠の言尤よし。目の前の事を置、大事祕事など利口のために偽り、廣き俳諧を纔なる穴へいるゝ様なる事云廻り、初心を迷す者はともに初心の迷盲人たるべし。貫之の書給ひしごとく、哥も見る物きく物に付て云出せる也と。又遠き所も出立、足本より始ると。實に見る物を置て、見ぬ物は何といはむ。一足を引ずして百里に行事なし。前キに見ては不レ見して見る。さきに行ては後に不レ行して行。紹巴がいへる目の前の事むべなり。今の人の心すべて今日往レテ越ニ至ル昨日一、と莊周がわらひしに似たり。

酒一升九月九日使菊　宗因
紅葉させたる摺子木の作　越人
翠簾の外もいつしか轟ドヨ笑ひにて　湖嶌
藥春キ見よさやかなる中　秋吟
何ンとする約束延た遊山舟　梅振
聞せたいまであげる尺八　木鷄
往ウ還を喧嘩買ふの腕ウデまくり　吟

公領私領の水際がたつ　嶌
なかんれば田植の笠の其白さ　鶏
夏野を眠る肩輿(カゴ)の影ほし　振
丁度たゞ繪に書中を行藥家(ヤ)　嶋
組ンで落たる雀ころ〳〵　吟
鶯も寄セじと花の番するに　振
柳は風のつかふ事かな　鶏
ばら〳〵と村さめ過て朧月　吟
たゞ此まゝと湯谷(ヤ)は御暇　嶌
目は明ィて現を夢と疑はる　人
金(コガネ)の釜にうち當る鍬　振

二ノオ

河豚汁と聞て碇を下(オロ)す尻　鶏
雨ふらば降レ風吹ばふけ　吟
蓬萊は爰伽羅臭い夜着の中　嶋
口をならべてひとつ盃　鶏
三聖の圖はある事かない事か　振
よい景地にて貧な觀音　人
梟を諸鳥笑へば散さくら　吟
羽織の雪を拂ふ蝶ゝ　嶋
夢覺て宿かと見れば春の野に　鶏
つる〳〵つるとさしのぼる月　振
赤壁の賦の日に舟で竹生嶋　嶌
穗(スヽキ)よりまた江鮭(アメ)の魚なり　吟

名ウ

樺(カバ)燒の味を談義につがもない　振
近付見つけ目ばかりで時宜　鶏
大鳥毛御馬がたつと杖につく　人
香煎上ゲて銀子頂戴　嶌
咲にけり花は祇園の梶が歌　吟
こゝろの鄕やはるの曙　振

杜國子は予が羈客たるをあはれみ、旦暮慇情を盡さる。おもふに管鮑が昔に似たり。彼は富り、我は貧なり。與へて報を不レ思、同志斷金の情不レ淺。さらに予が俳諧の手を引、泣ミ笑みせし

も去て三紀に近し。其馴睦びし年月の深ければ、時として夢に入り、昔をかたり、さめて又夢を泣ク。落月滿ニ屋梁ニ猶照ニカト顏色ヲ一日如ニ三秋ノなるは、生死絶ニ音問ヲ圍レ棋ヲ飮レ酒ノしも今何ンかあるや。彼人不幸に沉ミ、旧里を辭せしを、芭蕉老人江府に聞キ、甚憂て、踏レ鞋ヲ鳴海に來り、予に消息して其道路ヲ問フ。先登して枯藤ヲ引、杜國が草堂に至り、三人燒レ葉ヲ夜を明し、同ク馬を並べて伊良古崎に逍遙せしも、浮雲あとなく、流水もとの水にあらず。二人は松下の塵、我獨殘れり。日々に昔をしたふこゝろ、死して休セン而已。翁の句は前に人々と冠す。杜國子が句は我自ラ被りて、かくし侍るは旧情を纜ンとなり。

いそがずばぬれざらましを旅人の

馬は濡レ牛は夕日の北時雨　杜國子

窓にうごかぬ十月の蠅　越人

茶碗へは桶に立テたる泡汲て　仝

後には旅の苦を喘なり

されぱいの桂は實ミノル三五の夜

むしの聲添フ晝の葬

ウ
小便に起れば何所かまだ踊ル

隣は背戸で裸カ酒盛

獨りする手の窪惣〳〵手を出す

蒲團まくるぞ貧乏神ども

髭のある若衆はやるに蝦エビは〳〵

戀もさながら洛燒キになる

白き糸路の岐チマタに泣れけむ

花も紅葉もと打誦ズンじつゝ

其歌ウタに似合ぬ側な大福帳

吝シハいこゝろは砉る種にて

何いふも涼しげはなし胸の月

自慢我慢を荷ふ學文

二オ
埋まれに魏の彌オイ衡カウが鸚鵡洲

得た所より出來るあやまち
分別の絞汁(シホリ)にて遠慮　丸
大内山の坂はきざはし

進上　水邊　菖蒲

是に付て一ッの物がたり有。昔堀河院の御時、五月五日大江匡房朝臣、禁裡へ菖蒲を奉られしに、如レ此狀に書れしとなり。いかなる心かよむ人なし。師頼卿其時いまだ少將にておはせしが、よみ給へると

進上(タテマツリアグル)　水邊(ミギハノ)　菖蒲(アヤメグサ)
千年五月五日大江爲武(チトセノサツキイツカタヱセン)

興有事に思ひ、爰にならべ侍るに、跡を付煩ひぬ。若き人〳〵來れば、付て見給へ、それをもらはむと、申侍ればをの〳〵

淺香の沼は淺からぬ名ぞ　文錦

其ながきねを引ク〳〵ほとゝぎす　簑笠
字を知レ胸は苦をいろゝ箱　問景
どふ合点せむ猫に傘　豆花
これも曹娥が碑の銘の文字　飛泉

いづれも一ふしありておかし。我心迷ひもあやめの前と引煩ひしや、これな覽とそれになりて

目利しかぬる我も頼政
中〳〵にやはかりはなかりけり
十五箇國に笠着せる不盡(フジ)
隱月は天(ソラ)と波にて琵琶の海
聲を帆に上ル雁の羽は楫(カヂ)
御手まへが咄せば秋の夕なし
江戸におきたい江戸男なり
名ウ
汁も鰒燒物も鰒鱠河豚
鏡打ぬき樽を汲ミ飲ム
大叓へと經帷子を縫にさせ
金に靨(エクボ)の竹實(ジチンコ)枯がつく

性悪と華に來て知ル東山
　人は名利を接グふかみ草

當流開基は芭蕉老人の次韻にはじまる。其時其角いまだはたちに不レ足して振ニ新語一、滑稽の奇骨也。人の不レ發作有。されば其角・杜國は一双の作者、於ニ俳諧一は子房・孔明なり。是等の句いかむとか見ろ。

烏帽子着た船頭はなし都鳥　其角
　高根の影は水底の雪　瓢哉
梅が香の月へ杈(ズワイ)をさし延て　木阿
　七草薺たゝく黄昏(タソガレ)　象度
針打の子どもに渡す端座敷　哉
　あめのふる日はこまり物也　阿
釣(ウ)竿は蕣の蔓(ツル)はひ登り　度
　寐にながき夜も飽ヵでわかるゝ　哉

早稲(ワサ)酒を戀する人に飲せばや　阿
　隨分踊れよめりせぬ前　度
美敷キ眉出す顔や暮の月　哉
　菓子を小角に盛こぼしつゝ　阿
維摩會の講師は鳶が生ンだ鷹　度
　世は替るので面しろい事　哉
ゆく水やながれ次第の竹筏　阿
　阿波の蛙が讃岐でも啼ク　度
花はいざ月指渡ス佐渡越後　哉
　しるもしらぬも旅は長閑き　阿

ニオ
乘物へ御覽なさるゝ五文取　度
　幕串たつと出來る雪隱　哉
まだ覺ぬ日に卯の花の何ン時ぞ　阿
　最ゥ三番叟は過たかと問ふ　度
是は偖使の奴(ヤツ)の遲ィ事　哉
　川一瀬にて里は國ごへ　阿
きぬ〳〵を耳にはやめの鐘の聲　度
　思ひに燃て言の葉もなし　哉

馬で打ッ宮女の弓矢にほやかに　阿
濁すな鷺よ月移る池　度
西は皆白ラ荻原の下屋舗　哉
茸キノコを見ては諷ふ盛久　阿

二ウ

狩衣の袖を盃臺にして　度
文字さへ旅は哀なる方　哉
ながながと瀬田の長橋打渡り　阿
一人肩カツイて走るまけ竹輿　仝
蝶はとぶ顔はあふのく花盛　度
晝も夕べのごとく霞ム野　哉

此發句よりして白炭の忠知と鳴り渡り侍れ。四十有余年昔の作ぞかし。替る風俗毎に符合する句多し。又前人の中にも俊秀なる物なり。此人の作、いまの人何とおよばむ。

白炭や焼カぬむかしの雪の枝　忠知

一
蘆は枯葉を見るべかりけり　歩
書と酒と琴取入る船棹サシて　仝
傘しらぬ里のすなほさ　越人
月影カゲや名を賣ル京に埜るらん　仝
歌よめ顔の秋の夕ぐれ　歩

ウ

蜻蛉も稲葉そよげば驚キて　人
たづねぞ佗る礎うつ槌　歩
布杭に布をかくれば又ころぶ　人
笑ふ女の唐ヲ輪ほどける　歩
めづらしや一ッいたゞく筑摩鍋　人
羨むならん積る錦木　歩
何にてもほしがる欲の深い人　人
たゞ口癖に死たいといふ　歩
花咲ぬ間をさらに暮しかね　人
月の朧になるぞ嬉しき　歩
淡路嶋朝晩見ても百千鳥　人
仰のごとく名のつかぬ食　仝

二オ

中宮はまだ御腹のふくらかに　歩

玉に瑕見るむらさきの上　　人
いはれたり櫻には實のなるぞ憂さ　　歩
きゑてあとなき露ぞめでたき　　人
西行に月やは物を思はする　　歩
都に居ると脩は落栗　　人
〆出しは木の丸殿が名のらせて　　歩
耻のきよごす顏は反古に　　人
うらやまし藻を被たる玉柏　　歩
己にとかせよだまれ此謎　　人
居風呂の埒があかぬに入ッて來い　　歩
常六月の氣やとどらどん　　人
名ウ
二三人脇つめ比の娘もち　　歩
宿世はかなき世を宇治の宮　　人
よしあしはつんと嵐に兎の毛　　歩
相恭聖目いくつでも置々　　人
節饗をけふ丸山の花待て　　歩
よい雨はれて長閑なる空　　人

鵲尾冠下終

七巻

露川

燕説

正序

都巽 前僧正 早才 述

上位にありては歡樂に誇り、下位にありては辛勞に迫り。此中を行事中〳〵かたし。昔は西行、中比は宗祇、むそのむくにのくま〴〵にわたり、神佛に詣て舊跡をたづね、やまと哥・たはぶれ哥の友をさがし、今のたのしみ後の世の記念としてん。近くは月空居士といふ者有て、きのふは鳥が鳴く吾妻をめぐると聞けば、けふはしらぬひの筑紫をたどる。其長途を伴ひける燕說といふ法師、それが門葉二三子をかたらひ、彼日記を集錄して國曲と号す。亞親最上公、是に序をなすべきの仰せ事あり。才貴命を辭せず、その卷の端を穢すものか。

引

天地は四時の旅宿にして、しばらくも尻溜ぬこそおかしけれ。爰に吾師月空居士は其四序の風客にして、旅すれば肥膩し、旅せねば憔悴せり。ある時は高位國君に交りて瓢をこぼし、折としては笘をかぶり土座に伏て風雅を說く。予これをうらやむ事多年なりしが、過し春茅院を退き、中國・九州、二十余ヶ國を伴はれて、浮雲の風にまかする事一とせ也。凡行程一千五百餘里にして、好士同門のしたしみをなせる人、袋の芥子の數なるべし。たのしいかな、二ツの頭陀をひらき集めて、反古の皺をのせば、紫子えらびかぞえてわたす。梅子ははかり、草子はかんがへ、つゐに尾の氷子が筆に及ぶ。集なりて徒空(ツク)〳〵と思ふ、若あやまる事あらば、彼小田原評定なれば也と、後の人見ゆるしあらん事を。

享保二丁酉歲二月下弦　釋氏燕說謹書

論題号例

西の國曲と置く事、其國の風流(フリ)也。古今集の國ぶり、詩經の國風に准ず。水尺葉三が東の國曲あり。是に紛れやすからんと、西の一字をかぶるなるべし。

論序跋例

正序はおほけなき方より空居士に下り、跋は蕉翁の俤に寄る。引は燕說が思ひを述るなるべし。

論撰者例

伊勢の國紫筍・梅風・艸風、國曲を梓行する事、居士の門に入て久しき燕説が旧友なればなるべし。

論紀行例

紀行として神社・佛閣の細微ならざる事、物繁ふして數卷に及び、風雅人の見やすからざるゆへはぶくなるべし。

論國曲例

作者不知として、其國の名物をこめたる異言雜話の一句あり。居士その國に至りて拾ひ來れる句也。是を國の端に置て曲を定むるなるべし。

論一巡例

遊行十五ケ國、歌仙・百韻等三百六十二卷、其中に甲たるを拔萃して此集に載す。數卷に及ぶを以てなるべし。

論句牒例

諸國親疎の句を乞、首尾をあつめて都合七卷となす事、此道のちなみをかさねて、後の記念とするなるべし。

西國曲集 卷之一

雲水杜多止白堂 燕説 集
勢州樵柄向井氏 紫筍 撰
勢州一之瀬久野氏 梅風 訂
勢州一之瀬小山氏 草風 按
尾陽城下神谷氏 氷蟲 書

留別辭

親在すうちは遠くあそばずとや。美濃路を軒傳ひの行脚思ひ立て、跡の大夫に申。揺よせて咲かせよ花の藻鹽草といひ捨、是につゞきて中國二人行脚には、〽雲水の糸は切らさじ凧巾　と家慈ないさめて出しも、はや五とせの夢と成て、其心跡にひかれし老の鶴もゐまさねば、蝦夷・松嶋の國曲見に、〽飛鳥の千里も霞一重哉　と詫みやげして、數里をかけめぐりし。去年は又山陰道を獨行脚して、〽鳥の巣に風や

長居はおそれあり　と菴の床柱に張て出るといへども、長き命のつらき物から、今年もまだ小鳥囀る折にうかされ、果しなき西の國ぶり見んと旅用意すれば、數百の連衆袖にすがりて、老足をいたはり、長途をとゞむ。さるも又もだしがたければ、巖嶋見て頓て歸りなんとて出ぬ。時は衣更着初の一日、

月華に馬鹿の修行を筑紫浮　居士

熱田の彭令上田氏素人子の家に初旅寐して、明れば其所の連衆に船送りせられて、

昇る日に羽ぶしもつよし初雲雀　仝

同船の僧と語れば、近江坂本の住とや、風雅の志ありて三吟に船中の勞を忘る。

春寒しおせ〳〵船の假住居　仝

あつたの院主竹爲子におくられて、七里の渡しを越す。時しも二月の風にさへられ、夜に入て桑名にあがり、問はずして仙呂亭に入る。

白梅に探りあてたり月下の門　仝

二日を宿して又ト向にとて出ぬ。居士は、此道筋の往來折〳〵なれば、しばらく記行の筆を休む。

月空菴と運行脚して、西の國ぶり見んと思ふから、伊勢の國を立て長途の無事を祈。

梅櫻守れ宰府の旅はじめ　燕説

二千里の旅堅めに、䑺柄・一の瀨を經廻りて

梅が香に隙な目鼻はなかりけり　仝

鈴鹿

むら雲や谷に雉鳴くすゞか山　仝

鏡山

淡雪や星ちよぼ〳〵とかゞ見山　仝

竹青堂を扣いて、等實堅固の閑談に廿とせの胸欝を散ず。尊しや風雅の正道に遊んで、いさゝかも邪路にまたがら

ざる事、金鉄の翁ともいふべし。

春雨や雫をもらず樫の陰　仝

唐崎

松の花散るや湖水の魚の泡　仝

蕉翁石碑

感涙に春も芭蕉の枯葉哉　仝

大津・松本の連衆に見おくられて

たんぽゝの拍子にかゝる首途哉　居士

燕説は此地に居士を待得て、是より同行二人

しる谷越に牡丹花の石碑を見る。

かき濁る關の清水や鳴蛙　燕説

十日洛陽に入る。二千里をかゝえて連衆めぐりは無用と、吾仲子にのみあふて立歸りけるを、二日の雨やむ空もなければ

紫のさめぬ連哥や菫草　居士

華の雨樂屋で聲をからしけり　仝

響頂寺にまふでゝ花の散がてなるに

紅梅の長夢さませ鐘の聲　燕説

十三日大坂に移て紗方園を訪ふ。野坡、月空庵に杖を休しも早三とせと過て、けふやいせ・尾張・難波の長物語とはなりぬ。

雲水を鳴や雲雀の三ッ鉄輪　居士

旅店の雨間をうかゞひ、野坡の閑窓を訪ふ。

菓子盆にあられ咲けり桃の花　燕説

芙雀亭興行

雨に日に角組む芦の一連衆　仝

十五里の夜舟に乗て播磨の國に趣(赴)。

いざ虱須磨や尾上の花見せん　居士

龍燈や夜半の華の木の間より　燕説

尾上

尾上とはいへど田中の櫻かな　居士

高砂

松の花ちるや眞砂の鶴の糞　燕説

姫路千山亭はさはる事侍れば、おとづ

れのみにして、龍野道にさしかゝる。

先達をいさむるさくら峠かな　燕說

竜野等年亭興行の折ふし、我が國近き西美濃の旧友唯好上人に逢ふ。

因緣の席めづらしや華に鳥　居士

折ふしの宿借るしほや花の雨　燕說

脇坂氏の隱士、此道に名あつて多年也。今更に句の變化する事、壯年の人の如し。此亭にまねかれて、書院に立て風景を見るに、山を抱き川を帶て水木最上の地也。

山川や金屛移る華の宿　居士

金輪山小宅寺に遊ぶ。

守護神の森や四隅に雉の聲　燕說

淨心庵賦

播磨の國龍野の西山の半腹に攀登りて、手のひらにすゆべき一宇あり。淨心庵とや。麓は金城坤に折けて千店の市聲かまびすし。伊保の大河、北南に流て郊郭を分つ。左右は高山二三里しりぞいて百村連り、青麥天に等し。向ふは遙にあはぢ嶋見えわたりて、行かふ帆は七夕の笹舟に似たり。朝夕にみればこそあれ住吉の、とよみし有様よりはと眼を爰にとゞむ。此しも鳥空に囀り、櫻は開くあり、散るあり、万花松葉を隔つと見なしたるも尤なるかな。此地勝かぞふるに指なければ、茫然として佳景を一口に吐のみ。

月華の二本障子や無盡藏　居士

盆石記

吉野は花に尊く、姨棄は月にたふとし。實山水花月は聖賢にたのしむ一筋とや。爰に龍野の何某洞月子、盆石を旅店にたづさえ來て是が名を乞。其石は嶮からず低からず、半腹より上は雪かしら雲かとうたがふ風流あり。されば富士・白山の深雪にはあらず、彼安積山・にらかみやまにちかき奥の山を見る心地す

るから、此号を取たり。

三月の雪や甲干す奥の山　燕説

播磨より美作に越る迚、佐用といふ所の何某福岡氏の許に縁ありて宿す。見渡せば自然の高山をかまえの内に入れたり。

櫻散る宿や手作のよし野山　居士

はりま・美作の堺に坂ありて、面白き名殘の別れ場なり。

境目の木を引合ふや藤の花　燕説

土井より壹里半を過て、えひ川・わたり川迚あり。冥途にもかくおそろしき名あれば

此世にも燃たつ木瓜や渡り川　居士

美作の國津山に至りて、藏合推柳子を主とす。別家に移して向ふを見れば、土藏の屋ね並びて、普請の音はるかに、庭は松はら〳〵として閑なる事市中を去がごとし。

白壁やしかのみならず松のはな　仝

銀屛の雲の氣色や夕雲雀　燕説

鈴木氏南松子に對話する事、神女の雲霧をへだつるに似たり。日あつて旧里の流行を語る。

咲分の桃の變化や八とせぶり　居士

南松亭

芋種の無事な浮世ぞおかしけれ　燕説

一日院主楞羅をいざなひて、久米のさら山・さら川なんどたづねて哥あり。

略し爰

さら山や皿に桃盛る赤つゝじ　居士

若鮎や久米の更川さらの長　燕説

蕉翁自畫讃解

美作や推柳子の亭にあそびて、蕉翁の手跡を見る。夕にも朝にも付かず瓜の花　とや。實、朝顔の哀、夕皃のまづしきにもあらず、歎然として此花の本情を云つくす事、凡口に及ぶまじや。

二十余年の後、自書を感じて、二度泪を蠟紙のうへにおとす。

名にしあふ種うしなふな瓜の花　居士

烏帽子折讃

澤浮の折葉立葉やえぼし折　仝

琵琶法師讃

初雪に杖のまよひやびは法師　燕説

連衆に見送られて推柳亭は出しが、又其滴(嫡)子の別墅に引留られて宿す。

欲垢の市をうしろや梅のはな　居士

何某の院主に道おくりの案内せられて、うなての森に著。

寄生木や宇那提の巣からこぼれ種　居士

見送りの道行二の宮を拝して

つばくらの糞いま〱し門守神　樗羅

院の庄

紙雛の内裏はもろし院の庄　燕説

備後三郎石碑櫻

范蠡も隱居する代の櫻かな　居士

樗羅上人の別れに

久米川に行脚落すな舞雲雀　燕説

山中六里を經て久世の湊、且流子の隱居に入。大河を欄干の下に見下し、晨に舟を流し夕に舟引向ふに、高山芝青く疊扇のひだの如し。爰に伏して夜すがら瀬の音を村雨かと疑ふ。

春雨や蛙は轉じて川の音　居士

朝市のいきりさまして柳かな　燕説

一日興善寺に遊ぶ。境内の廣き事、山門に入て本堂はるかに遠く、三方竹椽に老樹枝をつらねたり。諸鳥我が宿りを得てその聲をなす。是、心害なければの故なるべし。

つかえなき庭や雲雀の揚をろし　居士

法華最上の道場に入れば、水鳥樹林寂々として、摺鉢の音も實相の響かと尊し。

妙法の髭から枝垂れさくら哉　燕説

旦流子を伴ふて、高田の町可風子が留守に來て、其家大人のもてなしにあふ。

留守に來て裾に蒲團や花の宿　居士

其次の日は神庭の瀧見んと、久世・高田の連衆にいざなはれて、麓よりのぼること十八町、峽々峭々として谷迫る處に、雨垂の瀧とてあり、方廿間ばかりの巖窟、屋れ葺がごとくなるに、山汁の落るさま、朝日に氷柱をならぶるに似たり。

蓑ゆかし雨だれ瀧の春の暮　仝

雨垂の瀧や夏まつ縄すだれ　燕說

それより二丁ばかりよぢのぼりて、かの神庭の瀧五十丈ばかり、白糸を亂し、其落る所の壷、幾尋といふ事をしらず。しばらく石に座して各口を閉たりしが、

雲霞奈落に入るや神庭（カンバ）の瀧　居士

むら雲の微塵になるや瀧の花　燕說

又、久世に立歸りて、芳船子の亭に興行

但馬樂の哥に契らん玉椿　居士

雨にさへられて、いよ〳〵逗留長し。

長尻の客を咲たり藤の花　燕說

久世より十八里の川舟に乘て、山鼻村といへる高山を見あげて、

白雲に乘る村もあり山櫻　居士

夜泊

河鹿鳴く船の艀やおぼろ月　燕說

備前國岡山に入て、山知何某を尋ねて其一連衆に對す。世異風にあふるゝといへども、正風一筋を變ずる事なし。

木瓜原に色な奪れそ菫草　居士

船あがりの草臥を、其連衆と夜すがら語る。

盃も廻れやしほの木の芽時　燕說

大森氏の亭に有て咄す事數日、此主も一度は武術の修行に國〳〵を經めぐりしとや。其品は我に替れど樂む所はかはらず。

蝶鳥や梢に宿し草に伏し　居士

備中の國に移りて、吉備津の神官高吉の許に足をとゞめて終日誹談して、明れば吉備の神前に詣でゝ、一飯國下にかゞやけるの徳を思へば、時ならず寒けだちて、正しく邊にゐますがごとし。

神風にいづれ十握(ツカ)のつばなの穗　居士

此しも三月十七日、恒例の會式とて、山下は三重四重の市店をかまえ、繁昌つねに万倍せり。是神徳の民をうるほすならんか。

神垣に市のはこびやむら燕　燕説

同國倉敷にわたりて、露堂隱家に入。

閑居誌

露堂老人と句に因む事幾年ぞや。今其地に至りて見るに、一字四間にしきりて皆四疊半也。唐土の廬仝が住ゐにもおさ／＼劣るまじや。見渡しに平山あり。青麥に菜の花をまじえて、畔／＼のかさなり錦とやいはん。茂林夏待顔なるに、藤のさかり時を得たりと、くら敷の倉庫赤白の箔をちらせば、市聲朝鴉にひとし。構せばからずして枝をたはめず、艸を刈らず、竹椽の前に一枚の菜畑露置わたして、旅寐の眼を此所にさます。

彼岸菜の庭にいさむや旅雀　居士

見たい夢みるや蝴蝶の花盡し　燕説

三ツ葉四つ葉の殿造りは、おほやけの幸草なるべし。枳邑子が作る三ッ穗の麥からは、民家の富の韮草なるべし。

此國は宜も肥たり三ッ穗麥　居士

もろこしへ種は渡さじ三つ穗麥　燕説

蘘里亭にあそぶ日あり。庭は小草・小木をのせず、後に丈餘の蘇鐵を植、前にはたひろの藤をしのびがへしに這せたり。猶住ゐの床しきを是に准えて、

矢きりから誰がたもとぞ藤の花　居士

藤は夕こそしほらしけれと、

白藤を西日にしぼる雫哉　燕說
　倉敷より五里を經て、矢掛の宿に着て、
　江木氏の家をあるじとす。
常盤なる蘇鉄に匂へ玉つばき　居士
　江木氏何某が後苑の一字は、丸太作り
　に竹の床縁、利休のさびをつくして、
　納涼の儲處とや。此亭にのぼれば眼の
　行ところに勝地有て、四季事かゝぬな
　がめなるべし。
八景に爰ひとつ添んいかのぼり　燕說
　竹にあさがほの繪讃
蕣の世やゆがめじのちから竹　居士
　髮の毛に象を繫ぐ畫讃
大象も釣らるゝ色や蔦かづら　燕說
　ゐばらとは里の名のおそろしきに、其
　花のうつくしき匂ひある事、正興亭の
　あそびなるべし。住居の木立等にあま
　り、日出度家の形勢なれば、
角文字の庭や二本の松の花　居士

青柳は何れ寐安し添安し　燕說
　掃夫亭のもてなし
行春を惜まん蕎麥に華鰹　居士
　名にしあふ鞆の湊、一藤子が市店に旅
　寐す。
借り着する嶋の坊主や衣更　仝
　鞆を立て一里ばかり阿伏兎の觀音に詣
　す。道なき斗の山坂を行事半里、夫よ
　り先は海を足下に柘植・つゝじに取つ
　き、岩を傳ふ鳥もたやすくは行がたし。
　堂にのぼるべき便りなふして、岩より
　岩に二丈ばかりの階をたてゝ、是をの
　ぼれば雲中に入がごし。
たぐり行藤の若葉や長階子　燕說
　又、回廊に着て、石壇三十ほどのぼり
　て、漸〻靈前の欄干にのぞむ。中〱
　眩きて二目とはみられず。
舞臺から下やうづまく青あらし　居士
　方丈にくだりて茶を乞ふ。抑、此地は
　出るにも入るにも等しき嶮難に草臥

て、藤江の里より三里の便船して、尾の道福善寺に入。花畑を見るに、數十間の庭、芍藥のみにして余花をまじえず、紅あり、白あり、開く有、散るあり、麾風に動けば、つぼみ風にうなづく。彼高祖萬國を治めしことぶきの躍り子もかくならんかし。

芍藥の花や唐子の舞の袖　居士

妙宜寺に遊びて、朴の珍花を見る。花形の大さ尺に及び、手厚き事板にて作るがごく、蓮花に似たり。

八葉のかぶれ傘とし朴の花　仝

聞可亭にまねかれて

卯のはなに隱者すゝめん此住居　燕說

丑寅の宮奉納

そも鳥居逆緣ながら諫鼓鳥　仝

田螺舍記

備後の國尾の道は、往昔秀吉公もろこし渡海の時、船休めの場所とて、今に御茶屋歷〻たり。此乾に當つて岨をならし、茅屋あり。何がし寺の隱居已禮子とかや。向ふに嶋山、前に入海、月日は出るより入迄照らし、一つとして風雅の器物に事かくことなからん。外の柱は皮つき、內の柱は虫くひ、壁は中ぬり、皮籠天井、四疊半の次は埃有、終日反古をちらして、ほこりは客の掃次第と定めたるもおかし。鴨の菊太が笈よりも狹き此庵に。あるじの一生を籠られたるは、尤よき田にしの家がまえなんめり。

蓋とれば天地の中の田螺かな　居士

尾の道を出て、三原糸崎の八幡に詣す。此邊に二千餘年といへる大松あり。

老松や腹に巢だちの鳥千羽　燕說

其夜は安藝國本江市に宿す。明れば案內の一孤子に別れて、三里の山坂人家を見ず。

水の音に娑婆の遠さや夏の山　仝

紅塵繁華の廣嶋に入て、常也亭に遊ぶ。

天秤の音にひらぐや白牡丹　居士

見臺にためさん千代の夏氣色　燕說

嚴嶋に渡りて、爰の連衆に初て對す。

誹諧のさびらきせよかほとゝぎす　仝

嚴島賦

蒼海に獨立して廻り七里の嶋あり、彌山とや。本堂・虛空藏井・三鬼の宮・奥の院、鐘の古さは平宗盛建立と銘に記せり。小宮・小堂、日の行所にあり。麓は本社辨財天、續いて五重の塔・多寶塔すべて一山の寺社數をしらず。百八間の回廊潮にゆられ、左右の町屋甍を並べ、晝の市聲・夜の万灯、船に立て是を見れば、龍の宮古を爰に押出しぬるかとあやしむ。

硝子の國や若葉のいつくしま　居士

月涼し回廊波に八重一重　燕說

爰の連衆に林風といへる男を、雲五と名乗あらため、風雅の實を云越せなんど契りて別れぬ。

雲五重ぬけても匂へ塔の花　居士

嚴島八景序

名にしあふ嚴島は、山のたゝずまゐ、水の流れ、木立の古び、巖の姿、ひとつとして佳景ならずといふ處なし。さるをちかき比ほひ、いと尊きかたより、勝志八ツの題をそなえ、和哥を下したまへるより、連哥の花のもとも一ゝの句を物して奉納ありしとや。誠に神司・社僧のめいぼく是に過ざらめや。丙申のことし、野翁しらぬひの行脚に此國を經て、其神を拜し、たはぶれ哥をなして、京・難波の句にその里の二三子をまじえて、謹んで獻じ奉るのみ。

嚴島明燈　万燈を潮に配る風涼し　月空居士　露川

大元櫻花　大もとや四方の手本に櫻花　洛陽　吾仲

瀧宮水螢　しら玉を染る螢や瀧の宮　難波　芙雀

鏡池秋月　池清き化粧心やけふの月　宮島　胡洞

谷原麋鹿　鹿の子や餌飼處は谷が原　廣島　雲五

笠濱暮雪　笠濱や雪から出たる名なるべし　宮島　件古

有浦客船　有の浦に霧や飯たく夕煙　宮島　恐伯

彌山神鳥　彌山から寒し御供に呼烏　伊勢　燕説

卯月十八日、兼て聞く橋見ん迚、岩國に入る。板橋五桁にして百廿間とや。高さ虹のごとく、下に立て裏を見るに、その工みの奇なる事、から錦の糸組に似たり。覺て人に傳ふべくもはらねば其名斗を記す。

錦帶橋

組橋やにしき織てふ菖蒲草　居士

はしら市と云所より、一里半の坂十二曲の名あり。

蛇の名に十二まがりの坂暑し　燕説

行盡す西海の數百里、難所に汗を流しては袷を脊負、峯に宿しては卯の花の雪に寒く、合羽の中にちゞむ。又ある日は十德を振ふて郡王に對し、ある時は綺の間にもてなされて、愛子の笛に慰み、昨日と過、けふと暮て、周防の國遠石といふ處に着ぬ。爰に幡部氏の浮木子、正風を慕ふに年あり。さるを此春自然の火災に遭て、いまだ其小屋がまえなるに、野翁が杖を引き、笠を隱して晝夜を語る事、幾日ぞや。回祿の後を祝して、軒号名乘を改る事しかり。

黄ばむ葉は散らせて竹の茂り哉　居士

押合の芥子の旅寐ぞおかしけれ　燕説

八幡宮影向石といへる、撰集の望に任せて

すはや今影向石の日のはじめ　居士

朝寒や影向石に五位の聲　燕説

西國曲集一畢

西國曲集　巻之二

きのふは渚、けふは砂鉢海を左に見て、たどる事幾日路ならん。浮卜子の亭に、折節豊後國、箏竹・曉明の二子ありて、幸の出船にさそはれ、赤間が關のかたに趣(赴)く。

五月雨を船にはらさん尻ふり茶　燕説

罪なくも浮てあそぶや夏生海鼠　居士

長門下の關立枝亭に入て、霖雨の船のつらさを語、數日興行して是より九州小倉に渡る。

さみだれに流れありくやかゞ見草　仝

此所にして、名にあふ平家蟹をもらひし。

世を横に歩むも暑し平家蟹　居士

瓜の蔓に茄子はならず平家蟹　燕説

筑前の國黒崎に着。水颯・砂明の二子に野叟が下向を待れて、一昔の物語に數百里の勞を消す。

蚊屋廣しいでや野の夢山の夢　居士

此宿や槇の霖雨の乾く迄　燕説

五月二日黒崎を別れて直方に行、頓野と云所、原田一定子の庵に遊ぶ事久し。

隱家辭

山林に入を小隱といひ、市中に在を大隱といへども、其市の隱はまぎれ安く、山林の隱はつとめくるし。筑の前州頓野といふ里の山際に、仕へをかへしてのがるゝ人は一定何がしなり。三方は築竹、翠に吹れて、向ふは生垣まばらに門もふけす。一字のめぐりは荒畑にして、無嫁の徑路草しげく、居は六疊二間、竹椽のみ。閑なる事彼方丈に過たるべし。

郭公山の一字で猶ゆかし　居士

端午は一定老人の閑居にありて、浮世の幟を垣越に見る。

もらひ粽むけや菖蒲は生ながら　燕説

無僕の菴室に無僕の客人、

粽がらの掃除をいざや貧乏閣　仝

杉氏の亭は、後に樹木の山高く、前に田畠生育の川流れたり。

木に水に何の不足も夏がまへ　居士

竹明亭即興

葉櫻に山ひきよせよほとゝぎす　燕説

九日頓野を立つ。一定子の徒に壹里ばかり送られて、店屋と云所に盃取かはし別るゝ。

うけ酒の殕ふく時や苣の花　居士

瓜蔓の手を引はなす別れ哉　燕説

其日當國内野に着く。道にたじろかざるな徹人とや。荒卷氏助然子は年來異風に眼をよせず、正風の徒を撰んで、抖擻行脚に交を結ばずと云事なし。是此道の徹人ならずや。

懈怠なき聲や闇にもほとゝぎす　居士

酒煮るや棟は朝日の鶏のこゑ　燕説

竹の自書讃をもつて大路・菊女の二子を示す。

風雅とは此一筋ぞことし竹　居士

朝露に紅なちらしそ博多百合　燕説

大路亭興行

海山の膳部は清し若楓　仝

日をかされて内野をたつ。助然何某、秋月越の八里を見送られたり。隱者の供に騎馬連たるはおかし。彼嚴〻が杜子か錦江に伴ひし類なるべしと打笑ひて、難所を越す。

夏草になぐさむ花や大石越　居士

藤井何がしの宅に休めんとて

日は永しいざ紫陽花の一住る　助然

若竹の宿に挽茶の匂ひかな　燕説

紫陽花のあぢな住居や隱れ里　居士

白川村に半三郎と云男あり、過し年難波の舍維が途中の病をいたはりしとや。

感じて其人を尋ぬ。

夏艸の花や邊土にこぼれ種　仝

秋月の左克子が宅におとづるゝといへども、吉井の急ぎにして杖を休めず。

藻の花や尻のすはりは水次第　仝

秋月の山の暑さや月戀し　燕説

筑後の國芳芦子が宅に入て、そこの連衆に逢。此は後の五月廿日あまり、炎熱甚しく、山雀庵といへる別墅に居を移し替て、屏風山の嵐、窓に吹入れ、涼しさ秋の如く、山雀もわたり來ぬべき庵号とや。

涼しさを客に渡すや假世帶　居士

對連衆

水筋のなるゝもはやし一夜酒　燕説

立出てかるかやの關は、同國惡蘇の宿過也。名乘して行人はたが子ぞと云哥をおもひ出て、旧關に錫杖を鳴らす。

釋迦の子と名乘れ關所の杜鵑　居士

善導寺に參詣して、霄刀子が宅におそふ。家は南を面に作るべしといへど、又、東より來る涼風もあれば、主の此物數奇を合点して

涼風をのがす日はなし二方窓　仝

木端亭の閑居に興行

涼しさを隣へ分ん菜花畑　燕説

折しも廿四日宰府の天神に詣す。森廣〳〵として廣前物さびわたりて、有難さいふばかりなし。其夜は此地に宿す。

梅青し御袖こぼれて幾かへり　居士

梅若葉拾へ詩の種哥のたね　燕説

長堤五里の暑さに草臥、博多未雷子が宅に入る。宵は倉庫の間に涼床をならべ、更ては座敷の障子をあけて、東南の風に朝寐のもてなし。

朝風にさすり加減や蚊屋の足　居士

ない風を呼や八手の下涼み　燕説

未雷子にいざなはれて、箱崎の八幡に

詣でゝ、かの松原を廻る。

箱崎や麻に蓬の松林　居士

利久舊跡

松葉散るふすべ茶の湯の跡床し　燕説

肥前の國そのべの里、嵐州・紫貞を尋ぬ。其夫ははるか他出と聞て此一句をのこす。

留守に來て名殘を蓮の立葉哉　居士

紫貞が下部を添て、田代の一波。紫白亭に行。此夫婦は久しく正風に遊ぶ事、先達て我聞事あり

高砂に並らべ齢ひは樫の花　仝

面白しまくらあはせに啼水雞　燕説

嶮難炎暑を經て、長崎古道亭に入。昔今の事うらなく語りて、十疊の樓に碇をおろす。涼しさ二方に青き連山を見越、唐土を海に隣りて人の言葉も物の名も、めづらしき旅寐のひとつ也けり。

立むかふ二階の我と雲の峯　居士

二千里の風のへだてや蚊屋一重　燕説

許風亭　白雲生ずる所人家あり、涼風涌く處白壁あり。

風薫る蔓の間の木だちより　居士

涼しさや野山も斯て青疊　燕説

高木氏芦香菴子の書院に入れば、折節の小雨に土用のいきりをさます。

涼しさや氷室砕けて庭の雨　居士

涼風の袋明けり庭木だち　燕説

宇粧亭興行

雨あしのあちらに高し雲の峯　仝

長崎賦

丙申水無月中の五日、暑さと平且の氣さへ覺えず。此地の連衆にいざなはれて、小船に棹さし、浪上にたゞよふ。時に頭をめぐらし崎陽をかへりみるに、三方の山けはしからず、ぬるからず、先諏訪明神を初て、諸社の鳥居高くまたがり、西國の風波を鎮め給ふと見えたり。寺院の刹竿梢にあらはれ、數万

の石碑片嵯峨にたてり。續いて柿屋ね翼を重ね、瓦の棟甲をならべて、長く谷に伏したるは、いかに實、佛法あれば衆生あり、衆生あれば傾城あり、たけき武士、吝なる親仁も此所にして卽時に角を折らすと聞し丸山なるべし。すべて神祇・釋敎・戀・無常を一眼中におさめて、山郭・市店麓に連り、稲佐・水の浦を向ふにかまえて、海の奇麗なると泉水のごく、唐土・和朝の船の往來は嵐の木の葉に異なる事なし。南北の關所は魚鱗・鶴翼に向ひて物見を明け、矢ざまをひらきて、鳥も自由には翔りがたし。しばらく船をかけて、酒あれども呑人なし、茶あれども饅頭なしと興じ、爰にわたり、かしこによぎり、虚然として桃源に行かとうたがふ。

石摺に長崎の繪や夏氣色　居士

泛船辯

一日夏日堂、一二の連衆を引て、千本

神崎の波風に行脚の客を涼ませ、此浦の佳景に人々の目をさまさせんと、出嶋より樓船を艤ふ。あるじ梓柄をとれば棹を廻すもあり、舳先に立て名所をあかすもあり。風搖々として船は二階に居るよりも安し。彼老杜が魚細浪を吐て舞扇をうごかすと嬉しがられしも、けふの風狂に異ならんや。すべて漁村山〱の眺望、眼のさへぎる所に有。右に一樽左に一重、おかしきあそびに、日ははや西にかたぶきなんとす。

喰物はしつほこらしや凉み船　燕說

蘘田氏の卯七、三十年來古翁の示を忘れず、今日や野叟が恙なき下向を祝び、西日の家は夕日に暑しと、辰の刻より迎て、半日の納凉を得たり。庭の岬木青々として、三尺淸池窓外に閑に過たり。

六尺の池に風あり朝凉み　居士

松叉亭記

公なるかな、此木の四序を見るに、十

かへりの綠とよまれ、若松さまと囃せろもよろし。衣更もいつしか過て、溜り水の蒸ゆる比は、下葉已れと透て涼風涌くも奇也。紺靑强氣にして難面きにはあらねど、紅葉のたかはきをいさむるならん。枯木の中にふみとゞまつて凩をにらむさま、鍾馗大臣とも云也けり。終日賓客の目をよろこばしめ、夜は主の寐酒をすゝめて颯々の聲をなすも、枝を分ち葉にまたふりを分つ故ならんか。天長く地久しき衆妙の門をわすれまじきとの号なるべし。

二股と成てそのゝち松のはな　居士

氣粉子が二階に招待せられて、石臺の數〳〵をならべ、涼しき大音寺の月の出をみよとや。

石臺に風引よせつ夏の月　仝

宇留子に誘引せられて、例の連衆、淨名菴に上る。初秋の風山を吹まはして、三伏の勞をいやす。

秋涼し山をゆりたてゆりおろし　仝

文月六日、長崎を立て宇旣・古道の兩子をはじめて、連衆誰彼に道おくりせられて、茂木と云浦より船に取乘、肥後の國に渡る。其夜は天草の四郎大夫が談合嶋を弓手に夜泊す。

珍らしき談合島や星の宿　仝

笹垣や海士は數珠揩る星祭　燕說

翌日空いさゝか曇りて、うんぜんが嶽を左に行。

雲泉の霧やくだりて船の雨　居士

三十五里を漕れ〳〵て、肥後の川尻と云所より船をあがり、蓮臺寺に詣て、檜垣の女の古墳を見る。

芦かづら三ッ輪組むとも諷はばや　仝

熊本の城下を見懸て、折ふしの雨乞、數百人の里人の鉦太鼓にはやされて、何某の院に至り、使帆子に對す。

雨乞の數によばれん笠の露　仝

大小の奇石をあつめて、庭は自然山の如。

庭曠さひぐらし鳴て松柏　燕説

江細子に招かれ、尼如空のもてなしに逢て哥の贈答あり。共に賂レ之。其夜は使帆子も此家にわたりて五吟。

長き夜や旅物がたりの鳥の聲　居士

熊本を立日は坂道八里に足をいためられて、的石と云所に日暮に着ぬ。驛なられば一宿叶ふまじとぞ。さるが中に彌助といへる者の養子なき家に宿し、米ありや求んと、村中をさがすに一粒もなし。斯ても世はおくられけるよと、胸ふくれにけり。名主に侘て盆米となん半升を買得たり。山中の此夜の寒さ、草莚を卷て伏ぬ。蚤甚多して飛音障子に砂を蒔がごとし。一目も合さず漸曉に起て、阿蘇の野道にかゝる。

白粥に聖靈なみの旅寐かな　燕説

抑見上れば阿蘇の御池三里上りて、山上の凹なる所、三口の釜に湯のたぎるが如く鳴動して、燃る事天に屆く。

阿蘇山の蓋とる息や霧煙　居士

是を本社として麓に三十六坊、又山伏軒を並べて數をしらず。一里斗退いて宮司の禰宜、十二の棟をつらねて、いにしへ友成の筋目を先として、すべて廿一家。其夜はそこに宿し、明れば宮の原栢川亭に入。

宮城野を圖にして咲や萩の華　居士

榎木水記

肥後國小國といふ所、怒留湯氏の一族あり。屋敷の巽の隅に當つて、三抱ばかりの榎の本より清水の吹出る事、水玉のごとし。根元年月いつの比より涌はじめけん、年代記にも見えず。源遠き七玉川、とく〱の水の簡疎なるにもよらず、川と流れて村人の物洗ふたよりとなれば、醒井の水に似たり。たま〱旅客の袖を引て、照つゞく日

の暑氣をたすくるは、彼清水ながるゝ柳陰に等しかるべし。爰ハ州一の難所として、回國の笠を此山中に休め、十日の殘暑を非邊にしのぎ味ひて、其名を爰に記す。

空知らぬ雨や榎の實の下清水　居士

酒の涌く音やいかさま榎木水　燕說

西東亭興行

鷄哉彩色のなき亭主ぶり　仝

栢川亭

箔散らぬ山里もよし盆の月　仝

山城の瓜や茄子を其まゝに、と云はれし法師の魂祭に似て、小國の山中に盆するこそめづらかなれ。

盂蘭盆のあぶら流すや稲の花　居士

怒留湯氏の家大人、不幸にして兩子におくれ、なみだ鯉子に別るゝがどくなるをいさめて、

桐苗のかう散る物と敎えけり　居士

院主右隣子は正風に志をはこびて、居士の吟行をよろこび、其門のちなみをむすぶ。

一雨の首尾や牡丹の分子(マヽ)時　燕說

左白子にまれかれて語る。近く三度の回祿に、假屋の住ゐをことぶけといはれて

猶たのめやがて十寸穗の元孕　居士

居とげる身にしあらねば、牛田の瀧迄連衆に道送りせられて、

霧を出て霧に入けり牛田の瀧　仝

はつとちる早稲の香もよし牛田の瀧　燕說

西東子が下部に案内せられて、杖立の湯本に行三里の間に嶽幾ツか越す。其坂の嶮難杖をたつべき所なし。わづか三里に日暮て、岩角に尻うちかけて一息をつきぬ。

小男鹿の聲に側るや岩の角　仝

二日湯元に止り、晝夜名湯に入て草臥

を養ふ。

月夜よし温泉壺に鹿を聞ながら　居士

のぼりては岩、くだりては川、旦に尾上、夕に岨道、しのぎ〳〵て豊後の日田渡りと云所に着ぬ。長野野紅・りん女の二子にいまだ面を合せずといへども、筆にちぎる事年あり。ことし卯月の末、中國より文通して、待たれて恙なき事を悦ぶ。

萩桔梗無事で咲けりわれもかう　仝

千里の漂泊もめぐり〳〵て、椿庭舎に移り、朝鮮の客のひとりに入て

旅もはや借り着の袷か鷹の聲　燕說

遊長善寺拂雜行

分別は松に預けて華野哉　居士

寐て留守をする客もあり種瓢　燕說

朱拙子、月空庵に閑談せしも、はや十年あまり、今千里にたづねて年月の恨みを放散すれば、共に昔の心と成ぬ。

見しや今十年先の竹の色　居士

茶のふるみぬけつ小庭に虫のこゑ　燕說

里富士辭

豊後の國日田の渡り野紅何某が門に出て、東をはるかにのぞみ見れば、松の原とて平山、龍のごとく南北によこたはりぬるは、彼あしたか山にひとし。其見越に三ツ峯の孤山忽然とあらはれ、青き扇さかさまに懸たるか、餌招鉢うつぶけたるか、是なん里の不二とや。あしたの霞・夕の霧、むら雲に似て高根にかゝり、千町の嵐に波うちよするさま、おさ〳〵山子にもおとるまじや。

風に靡く霧を煙や里の富士　居士

前の辭に委しければ、

一雲秋もさらばか里の不二　燕說

藤井

汲む人の袖にも咲やふぢの水　燕說

一化粧ひ咲たり藤の水かゞみ　居士

朝寐間

朝顔の夢見て遊ぶ一間かな　　全

腰張に五月雨の繪や朝寐の間　　燕説

琥珀水

やまぶきに咲かれて涌やこはく水　　全

琥珀井や中さぬとても秋の水　　居士

幽泉靈追福興行

荻は野にいざ水むけん豐後川　　全

往生や假名で中さば入月夜　　燕説

衰老の頭痛に枕をあたらしくくゝりていたはられし、りん女に申す。

伽に鳴く跡やまくらの蟋蟀　　居士

菊と楊弓にあそべる野紅子が令弟にまねかれて

物毎の的にあたるやかなめ菊　　全

斗梁子が亭にして、連衆の流行を

變化する里の風雅や五色艸　　全

風岡子が不幸をいさめて

渡り來て地鳥うかすや鴫の聲　　居士

後に生え山、前に百田、色めきわたる只薰士が宅。

水木の中にいさむや竹の月　　燕説

筑前把木の兎城子をたづねんとは、難波を出し後の人數なりしが、思はず崎陽に日數を經て、蕉翁の回忌に逃なはるべきと、すでに對話あやうかりしを、彼子數里を馬に鞭うつて、夜陰に野紅子が亭に入わたる。再子が越楚をへだてたる恨みも此時に散ず。

彼是も穗に出て白し華薄　　居士

同じ時

流れ來る一葉垢なし筑後川　　燕説

九日日田を出て、中津の方に趣く。三里にして見送りの人に別れ、其日は梯坂の善正寺に宿。

是もまた他力や椴の蔦紅葉　　居士

明れば山坂三里を歷て、羅漢寺に詣す。巖窟をのぼる事五六町、方廿間ばかり、岩をうがちて五百のあらかん並びたつ。

其道〳〵の五輪石碑の木に草に蘋たはる事、中〳〵高野の奥の院より寂し。

石佛の中いま〳〵し裾の露　全

鴫啼や讀盡されぬほとけ達　燕説

人の心の常ならざる事、日田・小國の山中に、一月あまりの閑靜をたのしみ、今又中津に出て、市中のかまびすしきもおかし。

舟帆亭

あり明の夢や四方の鑿の音　居士

豐前の長洲に來りて、鶴氏方翠の住居をたづぬ。

隱者なら此道ゆかん小茶臼　全

折節庵に五三子有て語る。

此窓は我ぬし付ん月の雲　燕説

中須賀桂輪庵に興行

茶多葉粉を借る隣あり蔦栬　居士

悼集跋

丙申の秋、長洲の里鶴氏方翠子の亭に

在て語る事日あり。さつた此夏十八歳の一子におくれ、愁膓(傷)日をかされて盆す。釋氏のおの〳〵生死不常を説て示せども、なげき止時なし。尤なるかな、生ある物何れか子を思はざる。まして三歳の比より北堂におくれ、十五とせの程慈父の手の上に育して、あらゆる學びを盡させ、末長きおもひをなせしに、今黄泉獨路の旅につきはなして、など惜まざらんや。野叟かつて歎をいさめず、去ものは日〻に疎しといへる其日數を待のみ。あるじ追善の數句、詩哥共に集めて自序をなして、予に跋を乞。よつて是が爲に泪を松烟に交ふるものか。

五月雨の長き泪や誰が實　居士

とぶらひにやすき齋日や瓜茄子　燕説

長洲のおの〳〵に案内せられて、宇佐の宮に詣づ。茂林の楷概すがゞく、甲に似たるが故に、萬代の龜山となんい

へる。遠く寶劔の徳を仰ぎて、

神息のみだれ燒にや霧の山　居士

鳥居に笠ぬぎて、くれ橋を渡り、よろも川・月の瀬を左右にながめて、仁王門の内に入れば、神社・佛閣石ずえの跡のみそれが中に殘りて、歷々と棟を並べたる、本社の廣前にひぎまづきて

紅葉した中を鎭めて榊哉　仝

きざはしや兀目彩る蔦紅葉　燕説

月見序

雲水の身の定なき事、嵐の雲の如し。今年は豊前の國長洲の名月に値ふ。あろじ方翠子の下知に依て、其門弟子の誰彼、船に取乘て櫂歌をのぼす。空しばく曇りて月一入あはれに、弓手をみれば中須賀の白壁、馬手は長洲の赤壁、其中に遊んで茶有、菓子あり、風雅あり。又海の方に船を下して見れば、東の渚・沖に張出て三保の松原に等しく、左のかたは森の村つゞきより、名もすみよしの江とや思へば、難波・潯陽の江もかくたらんかと、各〻舷をたゝきて諷ふ。

猩〻も舞へや長洲のけふの月　居士

名月に餅つく里はおこがまし　燕説

十七日は吾竹子が伴ふて、高田の湊に渡る。此夜は光圓寺に宿して興行。

立まちの月や高田の遠干潟　居士

眞玉の湊、海印・松谷の二子、其一連衆を引、駒をはせて入ぬ。莊嚴の間に其夜は並び伏たり。

菊の香や幾間に配る塗枕　燕説

又長洲に歸りて、出船の晴を祈る。

晝からは照れと咲たり日向草　仝

葉月の末の一日、長洲を立て歸路に趣く。方翠・吾竹の二子が始め、一連衆船中の食器・調菜の品〻、又線次第にとて別る。

絶ず鳴け命長洲の友鶉　居士

新蕎麥をねだり忘れて出舟哉　燕説

船二十里ばかり行て、蒼海天にひとしき折から、風雨しきりに日當の嶋を隱して、船くつがへるがごとし。申の刻より丑の下刻迄、新とまりの沖に懸て、ゆられもまれて舟に臥ぬ。やう〳〵夜明に空しらみわたりて、入心にはなりける。廿三日は空晴やかに鳥鳴わたりて、蘇生の思ひをなし、豫州津和の浦に夜泊す。翌日ははなくりの瀨戸を越て、

はなくりの瀨や秋風の衝がけ　燕説

廿四日風雨あしく、三嶋雨崎と云所に碇をおろす。此船に豊前の武士・肥前の所化・宇佐の僧あり。船主も富屋金兵衛とて、さるしれ者にて誹諧・詩哥かけ合て慰むとはいひながら、晝夜四五日のかゝり船に各屈し、氣朦朧たれば、雨間に菌狩せん迚、嶋里にあがる。

島めぐる袖や笹茸唐辛　居士

長月朔日は阿波の日向泊りと云、嶋に船を寄す。此地は菌茸といふ名をしらず、なばとのみいへり。國によりて物の名のちがふ事めづらしからず。いざなば狩せん迚、眞先に立。

高聲をしたら迯ふぞ菌狩　仝

順風吹ありて船を走らかす。

朝霧の船の日あてや淡路嶋　燕説

藤戸の浦をつたふて、佐々木が先陣の昔を尋ぬ。

案内も今や藤戸の晚稻守　居士

節供の九日、難波に入て生玉祭にあふ。

生玉に咲やこのはな菊祭　居士

三惟亭にあそびて、

なつかしき小庭や菊の痩加減　燕説

山城の伏見に移り、中埜何某の宅にありて、初て我國の噂を聞て寢所に手足を伸す。

生國の匂ひこそすれきくの花　居士

名月は豊前にたのしみ、後の月は伏見に照る事、月のめぐりにしたがふがどし。

順のよき旅やふしみの後の月　燕説

二千里の旅も仕廻の月見哉　居士

古田織部の袖摺松は、中樂子が庭前に有。

茶の湯者の袖の雫や松の露　居士

萬里のいとま乞せしもきのふと過て、戀しき人にあふみなる松木の正秀亭に入。

月空庵はさる事ありて京に行ば、燕説法師は古翁の旧友に逢んとて、伊賀の上野に別れ行ぬ。其日は雨に降られて南都に宿す。

大竹を割るや町屋の鹿の聲　燕説

笠置山に登りて六坊をめぐる。

茸狩や今も笠置の忍び道　仝

千里の西國には草臥ずして、十六里に足をいためて、伊賀の上野におよぎ着ぬ。

高尾寺の法印杜玄子は、吾師空居士の族也。今日此亭に入てうらなきもてなし、笹の嵐のいさみなるべし。

什物のもやうか夜着の濃紅葉　仝

風雅の大綱を握りて、異風に足をためらはず。今の變化に油斷なきは、此上野の連衆。

日／＼に山かきたてゝもみぢかな　仝

十日あまりの對話に、年月の馴染を重ねて、又來年を期すとて、もとの大津へ歸りぬ。

長生を契らむ菊の御命講　仝

月空庵はしばらく京にありて、きのふは通天、けふは岩倉の紅葉と、連衆にさそはれありきて

田樂の爐に照りあふ紅葉哉　居士

鶴羽堂興行

朔日の待るゝ數かはつしぐれ　居士

松木風竃軒は膳所・大津を窓の左右に見て、湖水は目の下なり。竹青堂を伴ふてこの亭にまねかれ、折ふし宇治よりの一服とて、もてなされたるも尊し。

朝霧や湖水に配る茶の烟　仝

才陀何某の物ずかれたる庭がまえの、年〳〵古びゆく面白さを感じて、

庭の雨蒔た菌もはえぬべし　仝

竹青堂の菜園に雨を聞。

濃柿も紅粉や流れて初時雨　仝

十月十二日芭蕉翁の舊忌とて、會所を青蓮坊に定め、位牌を此床に移して、大津・松木・膳所・尾張、其外滿座して一日一千五百韻、申の刻に終る。委くは追善の集に出べし。其卷頭

師二十三周門人既白頭

塚の霜掃くやおの〳〵老萊子　居士

龜山餞別

燕說法師を同心して、中國・九州を遊行、きさらぎより霜月に及ぶ。まさに一時一刻別身なしといへども、一夜の夢と過て、今伊勢・尾張と別ろ。物に始終あろから噫末期の離別も眼前なる事を。

此別れにつこりとして時雨けり　仝

二千餘里の頭陀をたすけ、今一日路となりて、關の追分より伊勢・尾張と別ろべき名殘をしのびかれて、龜山に一宿してわかれぬ。つゝがなき阿叟を尾張二三子うけとりたまへ。

月雪の追分過て別れかな　燕說

西國曲集二終

西國曲集　巻之三

○攝津國曲　大坂

けな者といはれて甘し蕪汁（嘆美ノ語也、律儀者ト云心）　作者不知

表

雲水を鳴や雲雀の三ツ鐵輪　居士

顔ほほかめく酒に蕗味噌　燕說

幔につく長屋の禮の春は來て　野坡

もとの筋目の流れ一筋　士

兀山の月に狂哥をつかまつり　說

飯のあまりを鹿に喰はする　坡

表

雨に口に角くむ芦の一連衆　燕說

雀も梅にかはる羽つかひ　芙雀

町馴て高切米も春ならむ　居士

手は持料の御家やう也　松堂

名月に隅が隅迄掃除して　三惟

虫に砂糖の水そゝぎぬる　執筆

別（姫路は清十郎が生國也。是に趣き たまゝ雨行脚を早送りて）

花と咲け笠がよく似た二人連　松堂

比は華秋の實を見ん頭陀袋　芙雀

（紗方還の春雨を詠るの長篇略レ之。）

あるく日はひばり寐る日は庭椿　野坡

餘興

おもしろし千石とをしはるの雨　三惟

月もやゝ入あふ華の十五日　松堂

やかましき寐物がたりや萩薄　芙雀

○播磨國曲　龍野

飯蛸やあゝ是ごろの馳走振（計ト云變言也）　作者不知

（跡心老賦有略レ爰。）

月華の二本障子や無盡藏　居士

雑葉も苔も是は芳飯　等年

永き日に迎ひの馬のいなゝきて　紫々

髭ぬく顔の水にさまぐ　夕聞

面白うかみなりなしの晝の雨　吹万
　によつと出るから惜き竹の子　溪士
居黑めく小鳥もなじむあら屋敷　一行
　口過させて通す旅人　燕說

風雅にあそぶ事廿余年、花實のさかひを此居士に見る。

別れ行霞に筋や鳥の道　等年
破れ笠をさゝげて待んはなの下　溪士
など忘ん名殘の華とほとゝぎす　夕聞

十餘年を經て居士に逢ふ

冴かへる緣にたちあれ播磨浮　唯好
是からは續け櫻に杜鵑　紫々

餘興

麥の穗の山伏ごろや雉の聲　紫々
八雲たつ日やつる〳〵と花の上　丶
八千代とはそれがふるみか玉椿　溪士
斑猫のねぢむく道の暑さ哉　丶
短夜や水鷄に鳴て井戸車　吹万

水仙や霜より咲て霜覆ひ　丶
客とめよ〳〵と降か春の雨　夕聞
傘をすぼめる道や蕗のたう　一行
牛買の醉て行日や山つゝじ　等年
のら猫の戀ははかなし石つぶて　丶

同國佐用　居士

櫻ちる庭や手作のよし野山
　へつらひもなき鶯のこゑ　洞水
春風の紙衣は糊のはなれ來て　燕說

餘興

問はれても雨の揚句や華のしべ　文隣
八重一重二夜はとまれ花の宿　洞水

○美作國曲　津山

暑き日や塩硝はたく人のてう（手ノ事也。ウハ助語）　作者不知

表

咲分の桃の變化や八年ぶり　居士
　雛の馳走は蕨川苣　南松

春風の六齋市に宿借りて　燕説
手紙麁相に書なぐる也　凡鳥
打板に麪棒添て暮の月　梼羅
しらぬ菌の汁をもみ出す　鶴芝

表

今年こそ奉りけめ草の餅　推柳
日はかげろふの床に菅笠　燕説
雲雀啼出船は四ッと觸て來て　居士
雲のあくらに峯のつく〳〵　車二
名月に御意の普請のきらびやか　梼羅
素人相撲は一ながめなり　其滴
それ〳〵に花やせかれて菊わつは　螢娥
手のひらほどな菴も世の中　遲柳

別　空翁、燕子を坪井といへる所迄三里送りて

雲に入る鳥の名殘や首の骨　梼羅
飛で行跡も消す也匂ひ鳥　凡鳥
出つ入つかげろふ笠や小松原　其滴
行杖になれも飛つく蛙かな　推柳

永き日の旅にあぶなし尾長鳥　螢娥
囀りに二念はづかし花に鳥　鶴芝
兩袖にかゝりてとめよ藤のはな　車二
瀬ぶみして別れん川の朧月　綠殘
別れ端のはなれがたなや花に蝶　南松
菅笠の目ははなれしや華の跡　壺客
跡に聲殘る雲雀の別哉　松叟
草臥の杖はしらとも桃の花　吸風
段々に雨をほどこせ遲櫻　猿之
行春や二日灸の跡さびし　遲柳

餘興

よしあしの耳はきらはず郭公　遲柳
都見ぬ袖の出たちや赤つゝじ　ヽ
峠から袖口むけん夏の風　螢娥
笋で其盗人を片手うち　其滴
小娘の踊崩れや草のはな　ヽ
陽炎を打消す雲の柳かな　車二
螢見かきつねか礒の小挑燈　ヽ

名月のあかつき寒しから車　推柳
茶の花に何を追込む鳶の聲　ゝ
母の氣をすかし兼てやおどり花　鶴芝
散る花や寐みだれ髮の果所　ゝ
紫陽花の世やこんにやくのひだり卷　楞羅
口よせに火とぼす比や藤の花　ゝ
出かはりやうつくしつくて歸雁　凡鳥
香煎を直に蒔つゝ山淸水　ゝ
大判のひたと散けり松のはな　絲殘
七夕の試樂わたさん一夜酒　夫木
行燈に影恥かしや後の月　猿之
白魚や實に去年の寒ざらし　是誰
見られたい迚はしだれぬ柳哉　瓢去

同國久世

表

妙法の髭から枝垂ざくらかな　燕說
流れあふたる水のやはらぎ　ゝ嶺
永き日の下りぬる鶺鴒に錢突て　取貝
旅のうちも座敷也けり　且流
ほとをりをさましてまはる夏の月　居士
えしれぬ諷を瓜畑の番　芳船

同國高田

表

留守に來て裾に蒲團や華の宿　居士
蝶々の羽をぬらす水鉢　可風
陽炎の燃えたつ空もすみ切て　和風
船の荷物の打揃ひけり　且流
白壁にへたと書たる文字の月　燕說
木の葉散ぬる搦手の風　和跡
居士の行脚なうらやみて、たはぶれのあまりに
月華の小あげとならん頭陀袋　ゝ嶺
めづらしき旅の小帳や花くらべ　山重
念願の花やこゝろのよし野山　且流
無事とさへ書たら跡はいはつゝじ　芳船
引合ふて頭陀の緒つよし藤の花　可風

月と日の切字や告て歸る鴈　和風

餘興

買にやる油は遲しふぢの花　ヽ嶺
出代やあとに名殘の猫の聲　ヽ
名月の夜明や船に乘る鳥　芳船
鷄鳴て見直す空や桐の花　ヽ
霞ひく筋や神庭の瀧の糸　且流
戸一重のあちらに八重の霞哉　ヽ
鎚梅のさびとは古き匂ひかな　久世扇意
糸ゆうや鷺に日の照る時の華　高田白鳥
山吹や雨だれ瀧のしぼり粕　高田水月
煩らはし身につまされて華の雨　和風
神無月跡の女神やちる紅葉　ヽ
繪に書て畫の螢ぞ本意なけれ　可風
朝霧の仕替て見する氣色哉　ヽ
一度にも落す日暮を散る椿　久世哥仙
初時雨笠着て通る人もあり　同之由

○備前國曲　岡山

「でこ（大分と云ふ變語）作れ冬もちかよる伊部燒　作者不知

表　居士

木瓜原に色な添れそ菫草
水につれたつ岸の陽炎　山知
永き日の旅の浴衣は鷺に似て　燕說
面白かりし雨はやみけり　機石
弓張の影も壘に落のこり　楓鹿
いけた桔梗にまた秋の蝿　如醴

表

叔羽が風氣の病床に、一客袖な据切たまへば　山知

縮緬の墨なはなれそ華の旅
鴉に舞はれて若芝の家　居士
永き日の何にくれたる隙もなし　梅林
ひつ添ふ船に月朧也　吉治
から風の小城ひとつを吹あぐみ　燕說
喰ふとのむとに冬も立行　眞瓶

川翁を一香子が宅にもてなして

見あげねばならぬ心や山櫻　山知
塀越や余所の落花を馳走振　一香
そゝなかして人をとめばや花の旅　知義
風ならば吹てゆかうに花の旅　楓鹿
草履はく人や千里も華の旅　一香

○備中國曲　宮内

蒸栗やしやつち〔「是非尼ト云ハ也〕節供の飾物　作者不知

表

雨の手に預る杖やわらび時　高吉
鳥も羽虫をふるふ巣がまへ　居士
晴あがる空ゆつたりと東風吹て　燕説
寄せて奉行を待る番匠　吉
菊咲て日のみじかいはしれた事　士
流るゝ雲の中に弓張　説

同國倉敷

一巡

見たい夢みるや胡蝶の草盡し　燕説
窓からそゝる春の朝風　枳邑
永き日の寶引繩にまねかれて　居士
戻りに馬士は際で寐てゐる　蓑里
三ケ月の姿ばかりは雲の中　露堂
芦の穂綿に嵐しらける　故搆
杖笠に一重の旅の秋更て　師雄
三盃きめる風の養生　吃風
隣には火も消したやら音もせず　野圭
雨にさらして夕顔の花　執筆

餞別

市人に見かはす笠か華曇り　吉備 高吉
苗代に踏留られぬ別れかな　吃風

居士・燕説兩師のもてなしせよと、老父が下知の世帶を受取て

盛相に最貝はならじ春の雨　枳邑

遠州の井といへる旧跡に、兩翁を伴ふて

水沈む雲雀の聲や畑の中　蓑里
突へらす杖を休めよ春の雨　矢掛宿 除柳
衣更着に發句をせつく蛙哉　同 何虹
くり言を御馳起ぶりや舞雲雀　同 直史

餘興

魚に餌をあたえてあそべ春の暮　露堂
鳥の目はさぞや舞ふらん鳴子縄　高吉
しほらしき根芹もあるを田螺賣　丶
山彦に笠のうごきや青あらし　枳邑
日は横にさすや汐干の戻り舟　丶
似る物の草にだもなき柳哉　故搆
筝や出來榮のする朝曇　師雄
山茶花に鼻ひて居れば朝日哉　文州
茶の花や雨の鳥の居り所　時風
馬の屁の首途さびし冬の月　蓑里
烏帽子着ぬ時の寒さや蕗の塔　丶

同國井原

表

角文字の庭や二本の松の花　居士
羽ねを休める鳥のあたゝか　正興
例年の飯に田打の屆はれて　燕説
窓のしろさのいつ張たやら　掃夫
それ迄の空も堅まれ後の月　宗也
木破のうへで萩の折箸　執筆

餞別

行春や猫に胡蝶のそで別　正興
川越や跡ふりむひて雉の聲　掃夫
笠かへす若葉もにくし此わかれ　宗也

餘興

名月や堤にかよふ汐の音　掃夫
梨ひとつ梢に寒し後の月　正興
ほだしなき我に聞けとかかんこ鳥　掃夫
出代や尻のすはらぬ八軒屋　正興

○備後國曲　尾道

いざへ（座せヨト云變詁也）たれ干蘭のうへの夕凉　作者不知

表

芍藥や時に唐子の舞の袖　居士
いさみて出る夏の夕月　己禮
湯洗ひの六齋日に風吹て　燕說
髭を撫つゝさらば一盃　一故
當分の釘にかけたる折烏帽子　共芝
急に建ぬる別屋寂しき　聞可
若猫のさわたりありく草の中　可雪
さい〳〵取にまはる新綿　一芳

餞別

見隱すや若葉の山の肱まがり　己禮
國ぶりや弓手も馬手も青嵐　竹原一故
寒くとも馳走にひらけかきつばた　可雪
逢ふ迄の覺えに見せん袂百合　共芝
あれだにも名殘惜ひか散笹葉　聞可
取かはす扇子に哥の別れかな　鞆一藤

餘興

兩國を告てあるくやほとゝぎす　己禮
棚經や立ざまに啼蟬の聲　共芝
水底をながめて寒し心太　聞可
竹の子や角ものびたつ蝸牛　可雪
晝前は借着して居る卯月哉　一故
目藥の日をさまさばや稻の花　己禮
戻り駕籠預けて直に角力かな　一藤
聖靈のいぬるや跡へ秋の風　丶

同國鞆

表

借り着する嶋の坊主や衣がえ　居士
古跡に杖を休む夏の日　一藤
鳥啼く松から風のこほれ來て　燕說
錦繡段の聲しづか也　士
雪よりも猶照る胸の月白し　藤
酒も豆腐も上がたの水　說

○安藝國曲　廣島

ごつちやれや西條柿を枝ながら（「タマハレト云心也）　作者不知

表　居士

天秤の音にひらくや白牡丹
　今年は麥の出來の十分　常也
是非共にとめたき人の見舞はれて　丶
　柴たく埃の手はひけぬ也　燕說
三日月の又降りたがる風の聲　丶
　船かけて居る山の色〳〵　士

同國嚴島

表　燕說

誹諧のさひらきせよるほとゝぎす
　初竹の子の垣をしがらむ　胡洞
道問へば直に教えぬ村ありて　居士
　きのふの照にけふの一雨　雲五
月は秋さらば疊のおもて替　伴古
　米賴母子の根は菊の花　恐伯

餞別

只二人飽れぬ旅かほとゝぎす　伴古
一吹の風や追ゆくほとゝぎす　朶臨

羽ね留て鳴けやしばしは時鳥　良儀
道くだり松にやすらへ郭公　雲五
足跡に物がたりあり夏の草　胡洞

餘興

山鳥の尾から流すか五月雨　常也
取る年を思へば減らす齡哉　丶
過去よりも未來の道や諫鼓鳥　雲五
玄翁の碎けや浪に飛蛙
兀山に何の風情も羊躑躅（イハツヽジ）　恐伯
飼鳩の覗きてありく接木哉　丶
灌佛やいろ〳〵の葉の雫より　壺天
梅が香と踊り合ふたり落の塔　丶
川音や雲は時雨を待ながら　机毫
すみ濁る空から涌かほとゝぎす　胡洞
日の暮てさへ我が宿はかんこ鳥　丶

○周防國曲　遠石

莭饗や乘人はさまれ（サモアレノ略語也）小荷駄鞍　作者不知

表

押合の芥子の旅寐ぞおかしけれ　燕説
舟路よかれと鳴くほとゝぎす　浮ト
盃を平めな石にのせ置て　曉明
袴着ぬから屁はゆるし也　居士
招待の使戻れと夕月に　等竹
咲ともなかるしら菊の花　執筆

餞別

最一日留ん田颯の國なまり　浮ト

同船して雨翁を長門の方に送る

蚊は居らでよしや苦しや苫の雨　豊後日田 等竹
水鶏なく風しづまりて篷の雨　同 曉明

餘興

さひらきや雨の降日は天乙女　浮ト
法界のあて事もなし揚燈籠　丶

○長門國曲　赤間關

骨折て喰ふにひじなや探り鮎（ヨシナシト云心也）　作者不知

表

五月雨に流れありくや鏡草　居士
ぎやう／＼し鳴く末はてしなき　立枝
他所山もみゆる窓から差圖して　燕説
茶の下もやせどこも飯時　士
丸薬の船にこぼれて暮の月　枝
今年も紅葉只音にのみ　説

三物

物數奇を鳴くか市中の諫鼓鳥　居士
取あへず咲く夏艸の花　小倉 柳推
下された山の祝ひの酒盛に　燕説

餞別

行先のうらやましさや瓜茄子　立枝

餘興

草餅に何のゆかりぞ伊吹山　丶
しのゝめに鈴鹿越るや節季ゆ　丶

西國曲集三訖

西國曲集　巻之四

○筑前國曲　黒崎

されば「くさ（コソト云變語也）姉の華咲く博多練　作者不知

表　居士

蚊屋廣しいでや野の夢山の夢　居士
田植も客も共に飯時　水颯
だら降の跡は手際に照出して　燕說
落た釣瓶をあぐる鳶口　砂明
槇榑の中を漕込む丸太船　和山
鮎のさかりも四五日の月　調五

同國頓野

表

杜鵑山の一字でなを床し　居士
袴の入らぬさみだるゝ時　一定
配りあふ今年の麥の團子して　探水
川にこりたも道理初旅　桃語

名月にのらぬ枕を乞出し　宇雷
秋のさび氣は付ず金屏　燕說

同國内野

表

酒煮るや棟は朝日の鷄の聲　燕說
傘のゆき路を五月雨の跡　太路
旅心まだなをらぬに役が來て　助然
羽織三つにひぼが一かけ　舜女
十六夜を田舍で見れば珍らしく　苔和
今の鳴たは鳴かばけもの　菊女

同國博多

表

朝風のさすり加減や蚊屋の足　居士
田植の聲の越る袖垣　まん女
樗散るたしかな雨と守り居て　未雷
綿の相場の爰も同前　燕說
月細ふ馳走にならぬ皿砂鉢　木詠
古いをもつて芭蕉葉の哥　執筆

餞別

惜めども急ぐ物あり夏の月　未雷
ことぶきて待ん田うえの幾かへり　太路
やがて音を出してみせばや郭公　菊女
時鳥いかで忘れん耳の底　舜女

二日路を送りて、猶別れのうき事、おくらぬ先がましならめと呼りあふて

肱曲り鶯も音を入れにけり　助然
晴るゝ間もあるか五月の此別れ　砂明
五月雨を甲出す日にわかれけり　水颯

いつ迄草と思ひしも此別れとなりぬ。崎陽の行脚を思へば、半入唐の大儀とも云べし

雨行脚聞け唐音のほとゝぎす　一定
時鳥いまさら耳に置土産　桃語

餘興

しばらくは律義の膝やけふの月　一定
はじめ逆思案で降か雪曇　丶

客留よ〳〵と降るや五月雨　宇雷
笋に杓子定規や菱はこべ　桃語
松明も時のながめや五月雨　竹明
狗脊の穂になる迄や雉の聲　助然
一筋につらき戀あり壁の蔦　丶
茶の匂ひするや利休の松の月　苔和
小男鹿の狂ふて遊ぶ折もあり　菊女
降さかる雪や女中の立くらみ　太路
竹の子のゆるぎ出たり古舞臺　丶
炭竈や岩間に燃る馬の沓　砂明
大根の二葉裂きけり比良下風　丶
小洗ひの水田すみゆく早苗哉　水颯
朝霧の刈立稲や藁とり田　水颯
いなづまや鮨賣通る八ッ下り　まん女
山高し春を丸めて杉五本　丶
蚊柱の中通したる螢かな　未雷
今も日は永し六時に七時雨　丶

肥の前州大村に至りて、此公にまみゆ

べかゝりけるを、古翁同忌の急にひかれてやみぬ。是をうらみて、さうそこを
贈りたまふ。其句を爰に記す。

釋迦はやり彌勒はいまだ杜鵑　大村 龜明子
引て待つ蚊屋釣草も引捨ん　亀徳

○筑後國曲　吉井

日は晴て心はいけど紅のはな　「スミヤカト云變語也　作者不知

表

涼しさを客に渡すや假世帯　居士
一重の垣にあまる夏草　芳芦
何虫の聲ともしれず月出て　猿芝
羽織は薄し旅の秋風　助然
うら枯の赤味噌汁を喰習ひ　燕說
四方旦那の菴の葺替　廿口

同國善導寺

表

涼風をのがす日はなし二方窓　居士
家鴨は出る若竹の中　雪刀
畑物は鑓あてたがごとくにて　燕說
欲しがる雨にぬるゝ嬉しさ　木端
鞠箱を借るか返すか月の秋　雪刀
城下は菊も一はやりなる　士

餞別　二師の情をしたふ事切也

吹通る跡は陰なし青嵐　猿芝
夏菊や數につらなる痩ながら　廿口
留甲斐もなつ野に殘る胡蝶哉　芳芦

空翁の顏の若きは、此道の仙を得給ひけるや。今まれに逢て後會を祈る

死なで居て身は花咲ん夏の草　木端
杜鵑一筋鳴て通りけり　塩足 市山

兩翁の袂にすがるといへども、長崎の急ぎあれば其歸りをまつ

待て居る風の久しやことし竹　雪刀

餘興

鶯の足どりかるし笹の雪　雪刀
梅咲やまだ伊勢道の小淋しき　木端
帆に向て跡へ／＼と鳴雲雀　雪刀
けふばかり庵の富限や芹薺　木端
青柳の吹かれぬ隙や下駄の音　市山
何祭る小祠かしらず鴫の聲　吉井 楚兒
わざ／＼の雨水臭し早稲の花　同 女明

○肥前國曲　長崎

留守したらば「兒ト云俗言也」ぼうに浦荷ちぎらせん　作者不知

表　居士

涼しさや氷室砕けて庭の雨　居士
後れて花を見せる晝顔　芦香
手六十三百石を書出して　燕説
材木つみし船にへり取　素楓
只置かぬ心休める冬の月　不雄
みな寐たあとにはしる活炭　宇鹿

表　宇鹿

吉日の窓みな明て涼みかな　宇鹿
月影流す若き竹の葉　燕説
植つけていまだ水ひく沙汰もなし　居士
跡で工夫の出來る生魚　古道
初雪に椽も敷居もこはしたり　宇粧
人が見ゆればたゝく拍子木　宇留
昔から小事の絶ぬ山はやし　宇峯
淵の名ありて共淵はいさ　許風

表　古道

白雨のそれ矢か海のいなびかり　古道
聲ぎやう／＼し村の者共　居士
暮の風草鞋を石にふみ切て　恕風
濁酒があらばとぞ思ふ月　氣粉
夜咄の俄に止んで蟋蟀　芝圓
尾花の露のしんかんと置く　共雲
二十年年の寄ぬる松林　塘鳥
獨庄屋の片隙もなし　燕説

三物

六尺の池に風あり朝涼み　居士

乾かぬ色をもつて若竹　卯七

雀啼く半元服をほめに來て　燕說

餞別

尾勢の兩師に向ふといへども、身のいとまなきにさえられ、はや別と成し杖の行末を惜みて

めぐり行杖はとめぬか秋の風　芦香

二老人崎陽の旅寐も限ありて、今日すら肥後のかたに趣きたまふを

蜩の鳴所までおくらばや　古道

露川老人は奥羽の行脚に身を堅めて、今年此長崎に待うけしも、今は別と成ぬ

手の爪も延さでたつや秋の雲　怒風

たま〱に逢て、其親むと銀河の波より深し

別れては星にしらせじ旅の笠　宇鹿

峯ならば見やりもせふに森の秋　其雲

雲水の跡は荒ぶか秋の野等　芝圓

錫杖のひゞく門出や今朝の秋　塘鳥

其杖の影法師移れ秋の水　氣粉

しらぬ火に照らせ行脚の戻船　宇粧

餘興

卯の刻の眸清しかきつばた　放化子

山吹は酢盞に香あり春の暮　丶

初雪や青き合羽に朧なる　錦口

むら立に流れて行かぬ暑さかな　丶

其君の筆の歩みか蔦かづら　水蒿

水鳥の巣組はかなや假の妻　山指

蕣や人のあくびを寐入華　吟杖

行鷺の我から雪を降らせけり　丶

此暑さ索麪見ても雲見ても　加岡

東行の折柄は空菴に立寄て語りなんと約しけるに、暮行年の急ぎ、尾城を左に見て、江府の方に走る

餅花を見捨てゆくや船あがり　芦香
椎樫の中や椿の切通し　丶
行春に行ちがふてやほとゝぎす　丶
波際にあきて日當の柳かな　怒風
人みせの仕事出してや花あふひ　丶
風の香や森の中なる井戸車　楚我
雇ひ人のあたまならべて雲雀哉　可蛙
養父入や病もせぬ目を緋の切れ　芝圓
夜寒さや藪をへだつる假(鍛)冶の音　丶
引息に里は越たかほとゝぎす　古道
一分はぬからで咲や山ざくら　丶
襟もとに顔引入れつ葛の花　宇留
初雪やまだ壁つけぬ火の光り　丶
名月や日をさす森のうら表　砂丈
鳥も木も共におどるや夏の雨　丶
行春や嵐の動く山の色　格意
華鳥の祈過してゆく春ぞ　氣粉
就中彌陀のひかりや冬籠　丶

白粉の多葉粉に散るや梅の花　塘鳥
五月雨や烏帽子かぶりの懷手　丶
髮水の行衞肥たり石蕗の花　共雲
寒菊や是も法事の運び物　丶
蜂や三人寄れば老ひとり　卯七
滿月になるや眞向の馬の影　丶
鳥啼や嵐に戻る雲の峯　桃因
其方へ枕かへりや神かぐら　不雄
涼しさや居所かはる宵の星　宇粧
青鷺や消すがごとくに朧月　丶
餅花に咲かれて宵の日は堅し　宇峯
香煎を波にたゝえて清水かな　許風
長官の席に着く日や松の花　蘇英
沖の火に行聲早し郭公　宇鹿
秋の影ちらりと寒し塗折敷　丶

同國奈良田

表

高砂にならへ齡ひはかしの花　居士

夏草ふかき門の萱葺　紫白
船をろす風の直りに降出して　一波
人の羽織を着てはしる也　紫貞
錢湯の板間にすべる冬の月　燕說
鼠もあるゝ寒のかはりめ　執筆

餞別　隱れ家に二人の客を留めまいらせて

凉しさや二人とふたり物がたり　女 紫白
水影に手組蓮のわかれかな　女 紫貞

往還まで田中の道を送りて

啼合て老ゆく蟬の別れ哉　一波

餘興

はねあがる柳の下やなぎの花　紫貞
冬枯の中いそがしや梅の花　紫白
乘掛の顏のひねりや山ざくら　一波

○肥後國曲　熊本

干苔に雨や一ッ時遣ふて行け「早速ノ心也」　作者不知

表

永き夜や寐物がたりの鳥の聲　居士
大方西にまはる晨明　江柳
萩薄隙になる身の旅だちて　使帆
たゝむに手間のいらぬ縮緬　燕說
喫飯から並べた棗をさし覗き　輕路
たま〳〵鶴のうへ向て啼　如空

餞別

虫なくや一夜前からいとまごひ　使帆
二夜とは見たらぬ月の名殘哉　江柳
見送りの人や秋たつ雲の峰　尼 如空

餘興

雨がちに咲てしまふや蜜柑畑　使帆
蓮瓶に錢葉の名こそ賤しけれ　ゝ
凉しさや水を平地に川烏　江柳
柿の葉の赤味に世話や鴫の聲　ゝ

同國宮原

表

宮城野を圖にして咲や萩の花　居士

川じよほ〱と霧の脚立　栢川
杵さばく時分に秋の風落て　西東
　客と申すも内縁の月　左白
さら〱と機嫌上戸の鴈の聲　右隣
　一息通る笹のむら雨　燕説
高みから筧の水をからくりて　路莇
　もらふた菓子の殆(カビ)干て置　只白

餞別

秋の日のちゞみ〱てわかれかな　右隣
足摺のさまや別れに散柳　西東
せきとめん手だてはいかに秋の水　栢川
燕の歸り野を越え山をこえ　左白

　空翁のわかれを留めかねて

最一夜は留ん時雨の此蒲團　きん女

餘興

竹の子や垣から投る牛の禮　西東
しかられた伯父や殊更魂まつり　丶
向ふから冬のもやうの蜜柑かな　少人野葉

ぬれ袖をふるへ螢の小しば垣　左白
　山茶花の照りや小壁のあたゝまり　丶
人里のきれて笛聞く華野哉　栢川
　笋や片肌ぬぎて水かゞみ　丶
息のたつ手に撫られて菊の花　女きん
峯入や笠に取つく雲の足　路莇
仕つかぬ娵の手業の榾火かな　丶
楢の葉や露ふみかぶる鳥の聲　女にし
水引のほむらや燃て夏の照　朴林
年もはや二染三染里の秋　右隣
分別は雲と見せてや山櫻　丶
夏書する側にはかなし火取虫　戸艸

○豐後國由　日田

「キヤウコツノ變語也」しうゑなや女の酔る麻地酒　作者不知

表

萩桔梗無事で咲けりわれもかう　居士
　初鴈をろす北のため池　女りん

有明に錢ほしがりの名を請て　紫道
手織紬の物にまぎるゝ　燕說
箱入の梅や小春にひらくらん　野紅
雨を通して灘を一のし　野螢
目のうへの瘤山右は何の嶽　朱拙
窓から麥の鳴子から〳〵　釣壺

表

戀やみの筆捨山や鹿の聲　野紅
化粧の窓に古き草花　居士
七夕の八日の朝の淸めして　朱拙
酒もやはらぐ胸の有明　斗梁
凉風の海へ落込む水の音　風岡
馴ては鶴の里をかぞゆる　紫道

露川老居士、此秋此里の我人をおどろかしぬ。旅寐の明暮、正風の奥義を問ふに一ツとして答ずと云事なし。五十年來の大望此時に得たり。仍、季をえらばず其事を述。

月よ華寸の楔のしめどころ　紫道
露を持つ節はたふとし男郎花　りん女
笹の葉に影をとゞめよ三日の月　野螢

兩翁を茅屋に留て、夫婦のよろこびを伸(こ)

墨うすき繪に似て里の礎かな　野紅

今やと待る空翁、我里に寄らずして、日田に趣き給ふと聞て、夜通しに駒を馳す。兼て待もふけの句、

二張は釣らで語らん蚊屋の月　筑前把木　兎城
橋はむかしとなるや庵の菊　釣壺

十年不過の思ひを述て、廿日ばかり席をしりぞがずして語ると云詞書、長篇略レ爰。

此わかれ腸をたつ瓠かな　朱拙
初鴈やわづかに馴て水替　斗梁
いつの秋か鶴の瞳に見合せん　野紅
最一聲聞けや寒くと峯の鹿　紫道

餘興

蕣やあぶら氣もなき花の色　朱拙
梅咲や是は手際な冬仕事　ゝ
風馴て心やたけやおみなへし　りん女
發足にきほひ付てや雉の聲　ゝ
何段の替りか旅と國の秋　紫道
鼻紙の折目は高し衣がえ　ゝ
虫狩や素足忘れて小石原　斗梁
醉た日はまつわりくさし秋の蠅　只薫
華咲て後かきんかの匂ひあり　風岡
紫苑咲く塚やむかしの鬼の首　野紅
月雪の中にひらくや初鯨　ゝ

窓居士・燕法師、日田より中津に通り給へる迚、求ずして一夜なまいらせ清談な聞事

夢かやれ霧よりもれて初紅葉　柿坂里 吟松

風雅の縁ふかゝりしにや、不慮に其寺院に居合す

妄想の氣をすゝげとや秋の水　津民邑 勝正

○豊前國曲　長洲　作者不知

口かまし（喧キト云事也）機織虫の小くら嶋

表

茶莨を借る隣あり蔦紅葉　居士
袷にうつる風の朝月　桂輪
降らぬ日も秋は仕事の跡先に　方翠
繫ひだ牛のほし物をそれ　燕説
堀替て見ても檜杓（マヽ）の屆く井戸　随風
暑き時分に暑き振舞　吾竹
世話もはや走りくらゐの世悴共　仙戸
雀の飛べば螻のよろこび　路陽

同國高田　表

立待の月や高田の遠干浮　居士
もてなし顔に笊籬（ザル）の間引菜　大梨
嵐ふく庭は四角に紅葉して　吾竹
大概に詩も作り覺ゆる　燕説
さらば出て雪の程見ん暮の山　素牧

今日は荷馬の行沙汰もなし　可弟
借り物といへばとぼしきしらしぼり　海印
下着のゆきの長きせんさく　松兮

餞別

露川老人たまさかに、予が庵の秋を訪れて語るに、朧氣なはらすといへども、日を重ぬるに程なく、はやわかれに及びて、船場の方、出舟蹕聲にさはげば

手に入らぬ魚の料理や浦の秋　方翠
菊色〳〵とむるに筆のいそがしや　吾竹
天津雁送れ船路を難波迄　隣甫
耳なしも覗く別れや秋の雲　仙戸
見る間もなふてかつ散る紅葉哉　宇佐宮 相睹

雨風士を茅屋に寐せ申て、何なかもてなさんと、

秬の穗に烏のつがひの旅寐哉　中津 曾帽
秋の雨今もたふとし檜木笠　眞玉 海印

借り出して我が物めくや蚊屋に夜着　同 松兮
手をついて見るや名に增菊の花　高田 大梨

餘興

四五尺の井戸の濁りや花あふち　吾竹
借り物を藪から呼か鹿の聲　、
鳶鳴て木を割音や冬籠り　海印
行秋や狐もひまで小笹原　松兮
寐がへりの枕も堅し冬の梅　隨風
手雫を障子に振るや子規　舍友
菊咲くや今年も白し細簾　隣甫
ゆく春をしめて鳥啼小雨哉　仙戸
玉笹の手やうちあけて風凉し　尼 桂輪
かけろふや障子にをそ鳥の影　亡人 青峯
たじろかぬ影や水田のけふの月　玉仙
時鳥さぞや遠見の番所　万里
山伏の髪かきみだす時雨かな　晩翠
雨のふる中に照日や花菜種　二千里
藻の花や魚の息ふく土用干　峯月

雉鳴やしまふて包む紙合羽　方翠

つく／＼と山のほそりや秋の暮　丶

西國曲集　巻之五

諸邦發句

春之部

雄に錦着せゆく雉子かな　亞親沾亭 最上子

醉狂の肩にかゝるや藤の花　イセ一ノ瀬 草風

鶯や夜寒ゝゝのふるひ聲　ナゴヤ 十竹

忘るなよ梅に鶯田に鰯　大津 尙白

うぐひすのはつ音や春の清絶　ナゴヤ 吟水

藪越に散るや椿の印地うち　同 心圃

白梅や鳥の初音のちから紙　ナゴヤ 仙角

雨しよぼ／＼ことにあやなし梅の花　奥劦桑折 馬耳

內證はしつこと堅し粥柱　尾劦津嶋 未了

中日に片手ひらくや鍵わらび　越後柏崎 雲皐

其陰に草履隱しやちる椿　ナゴヤ 桃川

西國曲集四丁

左義長に頬の赤さや一在所　伏見　中樂
川除の無理に廣がる柳かな　大津　扣角
雜遝の世を見物や假座敷　ナゴヤ　楚山
釋迦提婆咲や櫻のあらし山　三河岡崎　夫一
鶯は綸子の客にはつ音哉　ナゴヤ　里艸
永き日の徒目さしに行下手碁哉　イガ上野　青瓢
桃咲て見られた顏やさら屋鋪　ミノ深田　水尺
隱れては住ませぬ比や桃の花　イセ山田　國室
笹の葉を飾りに咲やむめの花　ナゴヤ　白雲
丸腰もさのみ目だゝじ櫻狩　尾州市江　鵝心
鳳巾華鳥風月の其ひとつ　ミノ狐穴　疎竹
海雲汁胡桝の花が咲にけり　ナゴヤ　和雪
分別は棚に揚たり藤の花　イセ一ノ瀬　浮翠
上﨟の手に植て見る若菜哉　ナゴヤ　風埃
菜やほしき柿木原の朧月　加賀小松　宇中
男狐につかれて歸る茶摘かな　三河鳳來寺　始葉
此垣が庄屋と咲や梅のはな　イセ一ノ瀬　覺風
きは〳〵と日和あがりや雉の聲　ナゴヤ　調千

人事は聞かじや我もいはつゝじ　イセ道瀬　鉄子
內證を笑ひに來たるつばめかな　ミノ鷹生　洞風
家主を手本に囃す薺かな　イガ上野　其水
青鷺や消すがどくにおぼろ月　ナゴヤ　里翠
苗代や當麻の鍛治(冶)がわかれ道　越中イナミ　桃化子
門〳〵をすつてさらしの燕かな　ナゴヤ　兀山
鶯や小式部が手に鳴たがり　ナゴヤ　不又
鞦韆や人間の身のいかのぼり　ナゴヤ　鵆洞
梅が香や障子の月の敷寫し　木曾贄川　時楓
葬禮に他人顏して櫻かな　ナゴヤ　瓢風
鶯の糞もかたまる初音かな　熱田　竹爲
老松もそゝなかされて藤の華　ナゴヤ　櫻川
左義長や空かきまはす朧月　イガ上野　琅玕
あか〳〵と躑躅を盞や摘茶賣　ナゴヤ　朝尺
御隱居の息やかゝりて鳳巾　イセ一ノ瀬　吟夕
茶の花や耆らぬ色の鼠壁　尾州市江　輕加
青苔や閻浮に歸る鉢の中　ナゴヤ　可中
なぐさみの沙汰こそなけれ田螺取　イセ桑名　仙呂

白魚のあぶなし凍のとけ序　ナゴヤ　除酉

藤の花咲てまたぐや川二瀬　イセ一ノ瀬　二雞

青柳の龍頭にとまる鳥哉　ナゴヤ　林月

乗物にいけてあへなし藤の花　イガ上野　杜幸

鳥の巣やもとは本來無東西　ナゴヤ　弓丁

雉鳴て不動は高し木間より　アツタ　東藤

砂に筋引や雉子の常陸帯　ナゴヤ　水明

むく起の機嫌を撫る柳哉　イセ一ノ瀬　龜足

出代やみがきたゝいて木履迄　ナゴヤ　千里

雛達の餘座になをるや江戸双紙　木曾福嶋　還珠

鶏でさす氣色をちるや赤椿　ナゴヤ　羽重

二番栄三番ぞめや桃のはな　イセ一ノ瀬　水葉

鍋洗ふ中へ輪廻の諸子かな　ナゴヤ　椿叉

此婆婆に輪廻や下手の鳳巾　月空居士

何ほしき心もなしや山ざくら　イガ上野　丹荇

松明に迯る夜うちの蛙かな　江戸　浮見子

雑草も萠出る時やひとり立　アツタ　化光

奥山や櫻は睡る中の刻　奥刕桑折　素弦

胸に手を置や夜半の雉のこゑ　尾刕犬山　夢月

柴垣や腰から上を星かむめ　大和郡山　柳水

韋駄天の鉾にさはるや雉の聲　ナゴヤ　林子

身躰も地形かたまれ粥ばしら　ミノ岩村　水垢

凍解に軒の柳や骨くばり　越中魚津　松幽

山婆も子共にまじるつみ菜哉　ナゴヤ　栢風

したゝるし干た紙衣にぬる胡蝶　アツタ　芦錐

雪霜のとごりや今の梅の花　尾刕佐屋　洞龜

種蒔や里の子共は籾の數　ナゴヤ　一歩

苗代や御城から來る貰ひ水　尾刕知多　狐笑

鶯の柳に啼や女舞　ナゴヤ　万聲

華さそふ風や津浪の引殘り　奥刕桑折　闘角

春駒や手の舞足のふみ所　ナゴヤ　夕思

節饗の馳走過てや雪の花　ナゴヤ　立枝

炮烙の荷を鳴破るや雉の聲　尾刕犬山　梅イ

初櫻さくや當座のさかばやし　ナゴヤ　推扣

あかゞりの手のまじなひや若菜摘　尾刕津嶋　兎足

池水に身を投込や北袖鳳巾　ナゴヤ　風鳥

養父入や筵屏風に縫の袖　ミノ千旦林 小千
鶯の聲の行衛や藍の色　ナゴヤ 玉丈
やぶ入や戻り化粧の二遍ぬり　イセ一ノ瀬 加吟
白骨を啄き碎くや雉の聲　ナゴヤ 涓流
奥の手の春を出さふかふぢの花　江戸 林鏡
手うちしてあそぶ局の柳かな　ナゴヤ 杉月
聟の聞えはじめや雉の聲　アツタ 登虹
置髪の髱ぬけてや蕗のたう　ナゴヤ 露竹
紅梅に木兎の顔出過たり　駿州沼津 英和
出かはりや摺木も裾に付まとひ　ナゴヤ 保合
味噌玉の匂ひもくどし桃のはな　尾州ツシマ 昆綱
奥さまも許しの杖や年男　ナゴヤ 之山
夜日遠目手にとる角や木瓜の花　ミノ中津 谷水
櫛の歯を通すか風の初柳　ナゴヤ 風野
散り口の感(咸)陽宮やつゝじ山　イセ道方 唯子
橋ひとつあちらの國やいかのぼり　ナゴヤ 倀予
茆蘘や去年のにほひの搔繪　尾州一ノ宮 松翠
つなげとて華に穴あり玉椿　大津 才陀

庇あはひを横に行身や紙雛　ナゴヤ 推之
碓に隣の椿散りにけり　奥州桑折 不球
月華の宿にもまるゝ引茶哉　ナゴヤ 藤乃
山吹の照るや雨間の七度燒　イセ一ノ瀬 拳石
白魚や波に濁りの目は二つ　熱田 祖月
彼岸から欲をはなれて蕨かな　ナゴヤ 古江
枝折や一木させて散るつばき　イセ辻柄 紫筍
高札に書く新道の柳かな　ナゴヤ 専九
飛過て跡先遠き蛙かな　大津 松琵
流れ矢にほつと落るや鹿の角　ナゴヤ 氷蟲
山ともに櫻やうごく池の波　アツタ 拾翠
境論なき世は斯と霞けり　ナゴヤ 橋雀
春の寒いかほども降れ梅の花　イガ上野 梅隖
雪隱に舞こむ蝶のあはれ也　江州松本 楚江
唐網に振ひ出さるゝ椿かな　ナゴヤ 万始
出代や年季の錦着るもあり　雲州 燕說
紙鳶髮ゆふうちもひかえけり　ナゴヤ 冬卜
あと見ずに世を暮せとか鳳巾　尾州西保 露水

姥嫁々の朔日毎につばめ哉　ミノ下麻生 洞玉
蜂の巣やよせ手を防ぐ夕氣色　ナゴヤ 隨九
死ぬる日の知れぬで持た接木哉　飛驒高山 江鷗
柚の日に涙は垂らじ山ざくら　ナゴヤ 丹哥
三吉野や川に散こむ櫻鮠　奧州桑折 牛陸
枯芝に粉やふりかけて朧月　ナゴヤ 如友
寒けれど春を合点の野山かな　イセ桑名 午湖
歸る鳫とられたつれを置土產　ナゴヤ 素林
手ばしかふ咲くが手柄か梅の花　ミノ堀津 阿什
彼岸迚寄てさいなむ團子哉　アツタ 紫頂
氣短な君やかくまで散る椿　ナゴヤ 遊竹
人魂の亂るゝ時や華に風　イガ上野 況獅
野はせばしとや藪入の放れ駒　ナゴヤ 氷工
蒲公英の夕べ白骨と成にけり　尾張知多 楓花
出代の中に冥途へ行もあり　熱田 素人
一國を華にひらくや豐後梅　木曾マゴメ 望月
門設けたりといへども田螺哉　ナゴヤ 曉井
籾種に蒔くらべるや雨の脚　尾張津嶋 高山

生烏賊や鳶引懸ていかのぼり　ナゴヤ 箇口
會すや〱華に一棒鳥の聲　伊豆長澤 閑夢
糠味噌の匂ひによらじ窓の梅　ナゴヤ 卽止
のばす氣は糸より長し風巾　イガ上野 防風
鶯の聲末世にてはなかりけり　ナゴヤ 湖寂
出る日に光明添て柳かな　イガ上野 舍草
つばくらや調子そろへてはね釣瓶　ナゴヤ 莞爾
涅槃會やあれは泣組あきれ組　駿州嶋田 如翠
出かはりの思案相人や井戸車　ナゴヤ 雲窓
親木とは十里へだゝる接木哉　イセ道方 四休
かゝはゆき智惠や宮古の梅の花　ナゴヤ 汪冲
湖を結きる橋のかすみかな　イセ桑名 楓里
燕は捨子の椀にとまりけり　ナゴヤ 三父
盃に糸ひく空のさくら哉　イセ桑名 杉長
生壁の乾くところを朧月　ナゴヤ 可考
六祖ではないか茶つみの破れ笠　イセ一ノ瀬 知夕
ねち臭き女上戸やふぢの花　ナゴヤ 三和
天鵞絨の牛うつくしや躑躅原　イガ上野 魚日

さかづきの稽古に照るや山櫻　ナゴヤ 夾始
鶯の脉のたかぶる日和かな　ミノ大針 葉三
水鼻の咳氣祭らん梅の華　ナゴヤ 誰也
鶯も木の丸殿で初音哉　イガ上野 沙蟹
木の端に伊達も有けり梅の花　ナゴヤ 乔水
出代のうき世はあぶら臭さ哉　京 吾仲
甘苔や蜑の肩つき裾の繼　ナゴヤ 斗曲
雛鶴の耳かく日あり梅の花　イセ一ノ瀬 梅風
御供所や覆面たれて若菜摘　ナゴヤ 林木
北窓に後めたしや猫の戀　尾州ツシマ 万山
聞馴ぬ笛や峠のはつざくら　同木地 松翁
かげろふやたばこ輪に吹く椽の上　イセ村松 茂枝
梅見たる紙衣もけふがわかれかな　江戸 衰杖
白梅のちるや二王の耳の垢　イセ簁柄 露葉
曇る日は上帶しめて柳哉　尾州サヤ 一珍
啄木鳥の世話で枯木も木芽かな　ナゴヤ 芦澤
かりの世の役や雛の友かせぎ　加賀 白兎
晦日のやみ日に茶とやなく蛙　ナゴヤ 洞庭
つかまるゝ身や天水に啼蛙　ミノ大ガ 凍左
虎杖や安達が原のこぼれ種　ナゴヤ 子拙
誹諧に民とは堅き田うち哉　同 繩秋
梅が香の京にも丹後鰯かな　同 一秀

夏之部

しら河も笹の黑みや五月雨　桃化子
寂滅の鐘の響きや雲の峯　正秀
白雨に流れ殘りや晒し臼　呑小
門立や人のまよひの美人艸　楚江
懈怠なふ出たり五月の見せ苧桶　燕説
面白やけふの小雨をすかし百合　大津 圓入
落かへる風より後のほたるかな　江戸 その女
梅ほしに塩のはぜたる暑さ哉　大津 奇芳
作られて世を張る竹の若葉哉　藤乃
竹の子やまだ當歳のはなれ駒　越中イナミ 晩丈
鳴破つて通れ奈須野の杜鵑　推之

裸身に蚊屋の布目の月夜哉　魚口
座の低き佛は乘らん芥子の花　心圃
眞晝の石に手を引暑さかな　大津 しけ女
竹の子や遂とあそぶ一文字　素人
窓の山枕にしてやほとゝぎす　大津 大朔
笋はほそし蛇籠をぬふて行　隨九
其若さ矮鶏の羽葺の藥屋哉　イガ上野 夏夕
鐵漿付た妹が垣根や初茄子　三和
影法師も澄むや衆寮の茄汁　ナゴヤ 風尙
百草にすゝめてちるや美人草　ミノ中津川 膽馨
手にのせて御藥師餅や初なすび　莞爾
夕立のあとやくさめの一氣色　曉井
間はれては嬉しなみだや五月雨　ナゴヤ 又童
淩霄のかはきや甍の手水鉢　高山
川ひとつ寺と宇治との凉みかな　遊竹
時めくを見よや衣桁の白重ね　防風
取敢ず母衣にさゝばや今年竹　イガ上野 露醉
砂水をあびて秋まつ鶉かな　素林
灌佛や日出た〳〵の莭念佛　況獅

手拍子は二階座敷かほとゝぎす　丹哥
夕立にあらひあげてや虹の橋　イガ上野 雷洞
唐桐やもたれ柱のさしむかひ　ミノ墨俣 風白
早乙女の乳をまつ子や水遊び　沙蟹
道草のほこり拂ふやなつ衣　一秀
追たつる其手に付や蟬の聲　木曾福嶋 圭堂
葺替の繩切れ掃くや栗の花　羽重
笋は棘も除ひて通しけり　居士
新麥や雲の山築く冷し鉢　ナゴヤ 竹詞
塗なをす壁や先手の衣がえ　梅風
郭公鳴や山路の馳走雲　斗曲
穂の露のちるもしらずや行〻子　越中イナミ 牧野
悟りかと思へばまよふ螢かな　三
若竹や浮雲を掃く夕景色　拾翠
凉み賣る棚やかき出す水の上　ミノ兼山 季春
まじなひの䁕や軒のあやめ草　誰也
四方山に配れ早苗の靑あらし　杉長
蚊屋に留守させて其身は凉み哉　夾始
朝起の名にこそ立れ單物　イガ上野 素雲

掻田から出てかき田に入日かな　三父
痩たるがゆへに尊き巣鷹哉　江沖
霖にまはる笹の日影や蝸牛　ナゴヤ 枝東
御座うらの拍子にたよる水鶏哉　雲窓
身を買に来る人待か百合の花　氷工
山に山共に動くや雲の峰　ミノ下麻生 玉泉
神子のもつ天照る金の扇子哉　十竹
山風の出かけにあたる幟かな　艸風
耳調子取て鳴なりほとゝぎす　越中イナミ 路健
朝風の露をつかんで藺刈かな　吟水
藤棚はむかし隣や夕すゞみ　兀山
五月雨に浮きぬしづみぬ野雪隠　水明
鉢の器の子を尋ねてや郭公　ナゴヤ 圓木
芥子咲や不断机の奉加牒　洞玉
非番なふ啼や夜半の杜鵑　ナゴヤ 洸木
油あげするや野寺の軒の蝉　イガ上野 虎文
誰やらがわすれがたみやゆりの花　イセ一ノ瀬 雨亭
獅子舞の首もよだるし麥の花　仙角

時ならぬ餅香高し桐のはな　桃川
まゝ事をはじめて釋迦の産湯哉　楚山
筒鳥の聲や霖よけに麥の空　水尺
蓮ちるや壁にまじはる芥川　里艸
山の手を我借顔やほとゝぎす　江戸 寸志
姫宮のおとこしらずや夏花摘　尾劦サヤ 宇林
あの界に事や起りて雲の峯　白雲
とろゝ摺る音にねばるやかんこ鳥　和雪
葉柳や壺中はしらず月涼し　江戸 闌柳
鶯も音をとめ空も黴にけり　風埃
たてこめて蛛手かくなは蠅たゝき　共水
忍べとの水雞の聲か茶の木原　越中イナミ 林紅
舞轉ぶ八挺がねや風車　調千
御秡川流るゝ袖のぬしは誰　廻洞
昔には歸りかたなし蝉のから　竹爲
神風や内外清浄衣がえ　イセ造柄 三杜
人しれぬ祕藏娘や華葵　相劦足立郡 朱人
今ならば与市がひねり子哉　櫻川

むらさきの夢はあふたり初茄子　青瓢
西風に竹こそ折れね夕涼み　木曾野尻 櫻星
手に足にかゝりがましき虹かな　ミノ岩村 柳子
竹栽て共に痩たり影法師　氷蟲
出女の夕日や暑き田うち蟹　鉄子
汗ふきや涼み戻りの袂艸　江戸 一舟
形代や跡しら浪と成にけり　可中
二行角豆や哥の文字あまり　除酉
ほとゝぎす鏡のうらに隠れたり　林月
郭公鳴や野に伏山に起　ミノ下麻生 尋里
浴水の流に染まじかきつばた　仙呂
足曳の山芋か是が奈良晒布　奥刕桑折 櫻吟
奇麗さや今朝たつ山の夏氣色　朝尺
穴あらば〳〵と豆を植にけり　弓丁
蚊柱を突崩してぞ通りける　ミノ岡穴 湖南
つぶやかば呑でやらふぞ一夜酒　杜幸
散雲は息のかすりか杜鵑　千里
凉風のぬけ穴ほしし四疊半　イガ上野 栢漢

長の日に誰があくびぞ雲の峰　還珠
鹿の子吹ちるか嵐の春日山　椿又
笋やその日〳〵の枝仕事　尾刕大山 和全
入滅の會座につらなれ蚰蜒　瓢風
輕薄の朝日にちるや美人艸　イセ一ノ瀬 端歩
虫ほしや搔さがしたる瘡頭　尾刕ツシマ 清空
飯櫃の蓋も簾や衣がえ　化光
鷺の羽も黒みのつくや五月雨　林子
初蟬や杖に懸ゆく薄羽織　木曾山口 序水
葭芦の一期を夢かぎやう〳〵し　栢風
切麦や笠摺かざる床の前　芦錐
新桶を越すや樂屋の砂雜水　一歩
夕顔に身も狹筵とよまればや　木曾贄川 加流
修行者よ跡とひたまへ葛の花　万聲
鶺鴒の水隈とるや夕すゞみ　夕思
法樂に咲た氣しきや野撫子　尾刕上條 林竹
襟につく鳥か繁華の杜宇　立枝
悪智惠のつかぬ若葉ぞ尊けれ　風鳥

蚊の聲を隣となして蚊帳哉　ミノ成戸 巴水
蚊柱は思案のうちに崩れけり　南笑
御嶽の雪を鏡や田うえ水　玉丈
とらせふぞ喰はせふぞ迚瓜の番　イガ上野 之午
足に帆を揚てや河岸の篁　杉月
權現の息やすなはち雲の峯　之由
百日紅散らぬ小町ぞつれなけれ　楓里
葉櫻のうへに赤しや塔二重　ナゴヤ 唯人
夜着蒲團中に親仁も土用干　イセ一ノ瀬 迂齋
五月晴ちらと化すや晝の星　江戸 東水
幣を振る影や御祓の波の華　尾張津嶋 里柳
灌佛やすまふはじめも此手より　イセ一ノ瀬 青山
さま〴〵の風や四條の夕涼み　志柳
侍は軒も四角や白丁花　一珍
こざ〳〵と比丘尼呂や瓜茄子　イセ道方 幸敎
小男鹿の子にせめられて足細し　ミノ千旦林 洗月
籜(タケガハ)も剝ぐといふ名ぞ賤しけれ　イセ一ノ瀬 青岳
むら雨に剃こぼしてや芥子坊主　夫一

蝙蝠や生れぬ先の母戀し　万山
駿河路に甥やもたれて初茄子　イガ上野 水鼓
一夜酒二日醉する折もあり　同 藏六
化粧水かゝれ迚しもかきつばた　梅隅
新麥の毒とる聲かほとゝぎす　橋雀
筵敷く凉みや傍のつなぎ馬　湖寂
一時もくねれ扇子の女郎花　ナゴヤ 野柳
火宅よりまじとながむる浮巣哉　木曾川嶋 東仙
柚の花のにほひに角はなかりけり　涓流
夏菊や姑に飽かぬ娵もあり　江戸 松海
しはがれて子持臭さや鹿の聲　千流
風を漉く凉みやいづれ白南來　イガ上野 東風
姿見に其聲殘せ蜀魄　大津 きち女
何ぞ此穢土に迷はん芥子坊主　紫筍
棚かきて中に蚊帳や夕すゞみ　ナゴヤ 芳兮
朔日に餅こそつかね衣がえ　ミノ飯山 摘葉
ほし瓜の皺はあへなし玉手筥　登虹
卯の花の卯の字は白し月頭　冬卜

晝顔の邊りぬらひて咲にけり　ナゴヤ 晴燕
蜻蜓の膀にすはるや夏座敷　不又
うら門の白張共や合歡の花　ナゴヤ 巴雀

西國曲集五畢

西國曲集　卷之六

秋之部

月見るや庭四五間の空の主　江戸杉風𡚒 嚢杖
鷃を射よ〱と標木の鳴の聲　梅風
人あつてつかふか風の花すゝき　才陀
さこそ迚覗けば彌に粟穗哉　斗曲
我が菊は脊高嶋や小人じま　兀山
送り火の消て行間や虫の聲　松琵
黄金の釜で柚味噌や後の月　中樂
雲晴るゝ後朝分けて月見哉　岩城 露沾子
待宵の松原近し軒づたひ　吾仲
相思ふ中の垣根や長ふくべ　林月
蕣のよみぢがへりや一曇り　夢月
西瓜割る女おそろしさばき髮　鼠及桑折 虎木
夜寒さや木賃枕の柱きれ　魚日

吉岡にちらせてあそぶ尾花哉　楓里
脇の目も白髪に散るや薄の穂　汪沖
影法師にたつや待夜の鷄頭花　ナゴヤ 朝木
素麺の霖みだれ髪や女七夕　アツタ 辨三
たなばたの夜るや片田の船呼ひ　誰也
神鳴の序に一葉二葉哉　氷工
哥にもれた草花も有て哀也　素林
鷄頭の寒さはじめや頬かぶり　尾刕津嶋 柳水
さりともと年は寄けり角力取　推之
蔓も葉も枯るゝ因果や種瓠　莞爾
朝比奈に駈破らるゝ踊かな　曉井
ほめそしる果はうき世の絲瓜哉　香水
稲妻に突かれてこけぬ案山子哉　京 早才
律義さを鳴やうづらのむつか腹　水尺
面役や拳ならべて屋形菊　奥刕岩城 右巴
松にさへ八苦はありて蔦葛　隨九
何が降る空をまぶつて唐辛　氷蟲
据鳥のつかみはづすや秋の雲　東仙

十六夜は一歯入てやうす曇　里翠
退てゐて逢ふや鏑の二ッ星　ナゴヤ 岐峯
小相撲の他國あるきやわたり鳥　万聲
辨慶が常の相人や唐がらし　夕思
此時が秋や夕日の影法師　木曾福嶋 秀陽
雨繼の拍子に咲や躍り花　風鳥
木守りを置てさらばの熟柿哉　林竹
欲垢のにほひはじめや早稲の花　玉丈
筵道の裾にすがりてやきり〳〵す　奥刕桑折 南畝
空臑を誰かなぐりて鷄頭華　加吟
色外に出てはづかしき熟柿哉　涓流
掃溜に一ィ頒白(ハンハク)や蓼のはな　野柳
仕盡した世に白張の切籠哉　杉月
のら猫の道に蔓はる冬瓜かな　露竹
狐より目に化されて花野かな　ナゴヤ 知新
くつさめの呪ひに散る一葉かな　之由
伊非諸の梵語や今朝の菊の花　奥刕岩城 立市
いろ〳〵の業のはじめや鳥怖し　芦澤

留守の戸や辰巳あがりの虫の聲　イセ田九 徹義
蚯蚓に吸はせて見たし長瓢　遊竹
名月の目があまりけり下り船　防風
蘭の香に床の殘暑を冷しけり　杉長
別れ端を移す鏡やあまの川　素雲
末枯や一寸ばかり伊吹山　ナゴヤ 推角
蕣のはたちや紕のもどる時　素人
行秋の風のうなりや水の底　露水
たなばたやのせてわたさば鶴の足　イガ上野 朗吟
穂懸していでや笹葉に一祝詞　三父
手みやげや松の葉にさへつゝみ柿　則止
起〳〵の顔もぬぐはずふくべかな　紫頂
くれなゐの升目やことし唐辛　ナゴヤ 十叉
浮雲や四十八ヶ瀬けふの月　推扣
こそぐりて見ばや桔梗のつぼめ口　艸風
稲妻にとばしる笹の雫かな　吟水
盂蘭盆を蓮につゝんであるきけり　ナゴヤ 和泉
咲きらぬ華や命のかなめ菊　アツタ 階向

風に乗る夢見てあそべ仙翁花　仙角
いなづまの間や釋迦の八千度　未了
産れたに見よと投出す案山子哉　イセ燈柄 宴子
燒飯に毛のはえて飛鶉かな　昆綱
眞中に一目置くや今日の月　十竹
巻かれたは誰が卒都婆ぞ蔦紅葉　最上子
ぼた餅も黄な粉も咲て花野かな　白雲
稲妻や目の塵はらふ笹の露　イセ燈柄 龜遊
しら粥の煎りつく哭やきり〴〵す　風野
木鋏に蟷螂向ふ嵐かな　沙蟹
十弟子の外は數なし瓢かな　一秀
蕣の今朝の器量や中直り　三和
名月や水かねこぼす鏡山　心面
冬瓜や自墮落坊の裏隣　湖寂
皀角の鞘や雲の先ばしり　雲窓
日に見えて盆こそ來たれ梢より　イセ田九 習鳥
名月や空と水との二住居　燕說
一霜に生き過したり種ふくべ　迂齋
あたらしき屋根の匂ひやことし藁　岐峯

下冷に色の惡さよ花木槿　イセ一ノ瀬　竹葉
十六夜の遲さや親を疊輿　馬耳
諫言の口もとすぼし唐がらし　桃川
稻妻をとぼしつけてや狐の火　楚山
星合の露や女の髮のつや　イセ一ノ瀬　芦竹
箔に水そゝぐ夕日の芙蓉哉　千流
中のよき両隣の鳴子かな　里艸
むら雲の皺にゆらるゝ月夜哉　イセ一ノ瀬　宣丸
蜻蛉や山道形に往戻り　水尺
蛬なくや陀羅尼と連拍子　疎竹
五器皿の音に更ゆく月見哉　常陸筑波　立柳
杵さげた軒や野分の祭かえ　和雪
粟餅の世にも逢けり鳴子引　浮翠
あさがほの世や開帳の手水賣　江戸　芦人
名月や酒より出て酒に入　イセ一ノ瀬　きく女
朝數奇の爪先赤し蔦紅葉　林鏡
しら菊を箸ではさまば月夜哉　越前府中　榮木
末枯やさらでも庇のつるし柹　奥州須加川　晋流

寐ぬ星のそしりもがもな二おもて　晋流妻　霜楠
聖靈や世はせんぐりの繼子立　宇林
木抹香にさくいほとけや魂祭　關柳
冬を待つ空や碎けて雲高し　其水
名月の雲しほらしや頬かぶり　イセ一ノ瀬　柳糸
人界を出よ案山子の九月盡　調千
先蕎麥の花に照る也月頭　イセ山田　風也
象眼の山ふるびたり秋の暮　朱人
秋は來て白かたびらの七變化　龜洞
素讀する後になくや蟋蟀　ナゴヤ　峯雪
物いはぬ客氣づかはし靈祀り　竹爲
落栗や腹は破れて鬼子母神　風挨（埃カ）
峯入の夢や綸子の蔦紅葉　朝尺
空瓶のうなりや添て虫の聲　可中
別れ端に一さし舞へや女郎花　不又
一雨に白骨となる燈籠哉　除酉
名月に笛の音ちかし野雪隱　ミノ岩村　湖船
葉を笠に着て葬の朝寐哉　櫻川

相客の席はえらばじ靈奠　青瓢
馬上から笠もろともに一葉かな　尋里
いなづまのこそぐり出すや峯の月　仙呂
うら枯や人魂の尾の引殘り　弓丁
朝がほと顏の契りや水鏡　ナゴヤ甲由
稻妻の跡つけたすや夜這星　奇芳
菲狩や役の行者の跡を蹈　羽重
祐經を嗅であるくや辻角力　椿叉
流れ行新酒の醉や落し水　瓢風
秋風に封じ目解て一葉哉　化光
たのまれてうき世をわたる踊かな　圓入
華火かな月に苔んで闇に咲　栢風
三界は火宅や埃のきり／＼す　清空
惜みたる時もありしに落し水　林子
みちのくの手柄や京へ萩の聲　奥刕桑折素柳
皀角のほころび安し比丘尼寺　序水
鹿鍋の下に燒かるゝ紅葉哉　居士
紅粉筆の山に雫や龍田姫　水明

浮ひた世におもりかけてや種瓢　千里
懷を追ふてありくや秋の蝿　栢渓
たて琴を筏にくむや天の河　倘白
日は横にさして芙蓉の泣寐入　芦錐
御隱居の熟柿は置て死なれたり　一歩
うがひにて天社に入や菊作　奥刕岩城沾梅
菲狩や緋のたもとにきり／＼す　洞龜
程／＼に罷出て咲く花野哉　林木
松竹に雨手かけてや蘿紅葉　立枝
稻妻の眞似を秋たつ螢哉　ミノ下麻生支木
笠取や小栗こぼるゝ臼の音　正秀
寐入るなら裾に物置け蟋蟀　イセ一ノ瀬有之
荻萩の肥てさびしや人やき場　藤乃
寐て耆る秋の最中の冬瓜哉　拳石
漸鴫の磁石にめぐる後の月　奥刕岩城沾荷
鼻ひるか但し鼾かきり／＼す　吟夕
日をよみて指やそこねん女七夕　巴雀
戀／＼て死ぬる覺悟か鹿の聲　濁子

駈出のそも〱是は鷄頭花　紫笥

冬之部

初時雨雀怖して通りけり　前僧正 早才
饅汁に盛長立て戻りけり　居士
遊臭き聲のやつれや紙衣賣　林月
分別も皺のよりたる頭巾哉　吟水
煎藥に壹分のはいる師走哉　誰也
頭巾着た木兎笑へ年の晩　藤乃
憂しと見し湯婆も今はたんぽ哉　桃川
我は紙衣雀は竹にもまれけり　推之
片袖は何に喰はれて寒念佛　燕説
雪の日や老の火鉢のかたつぶり　紫笥
身のうへの沓りや棚に置頭巾　紫笥 老母
木曾殿に手向よ後家の大根引　千里
そぐはぐな中や火燵の紙衾　和雪
六道の夢の迷ひや雪の原　白雲
齒朶振りて咲や師走の梅の花　仙角
一轉じ又一てんじ時雨かな　里帅
闇一重きのふの夢かぬくめ鳥　京 狩御
潮に醉ひ水にたゞよふ生海鼠哉　拾翠
嘘つきの彌勒は遲し冬木立　ナゴヤ 十字
ふし漬のむかしを聞や濱衛　イセ龜柄 池草
一筋の煙も寒し泊り舟　不毬
炒豆に鳩をなづけん雪の上　一秀
錢とりて案内はどこへ散紅葉　沙蟹
蜀江の手まへ紙衣と笑ひけり　唯子
墨がねのあからさま也雪の原　風野
たゝかれて則(ゞ)座に悟る納豆哉　登虹
蓑笠の三衣かけてや鉢たゝき　之山
橋中で取てかへすやむら時雨　梅隣
形ッ〱に咲てあそぶや雪の花　洗月
草蓑も塵にまじはれ神ゝ樂　風也
庭燎たく梢に赤し猿の尻　ナゴヤ 拾石
生海鼠かな太公望に一不審　洓(こ)左

虻蜂は出ぬか小春の茶大根　和泉
猫だにもなじまぬ宿や置火燵　安子
江戸留守を嫁ゝの岡見ぞおかしけれ　涓流
朔日でなふてもよいに一しぐれ　ナゴヤ楚竹
見をろせば土藏ばかりや冬の月　野柳
寐て起て又なぶらるゝ納豆哉　兎足
第一に煮煎じの間や雪見船　玉丈
干さぬ袖なら已がまゝむら雲　三州長瀬吟笑
黒塚に榾火の影や姥ひとり　杉月
降隱す雪の水川や日本の圖　尾州犬山隨岐
旅人をなぶるはつらし村時雨　風鳥
大霜に笹の息見る冬瓜哉　南笑
水鳥にふみたをさるゝ案山子哉　夕思
あかゞりもつらも挟持とるや年忘　駿州嶋田如舟
乖房は物着がよふて紙衣哉　朝木
薄皮に風もひくべし水仙花　氷蟲
縮綿は黴との事か衣配り　洗木
影法師も醉て戻るか年忘れ　琅玕

風にかうはりつよし峯の松　江鷗
百八の鐘や枯野の果すごし　推扣
初雪は朱椀の照に消にけり　立枝
引かぶる蒲團短し鴫のこゑ　晋流
餅つきや蓮生坊は杵の役　イセ造柄團露
化かねて啼や枯野の親狐　午潮
夜の寒さ取かへしたり今朝の雪　況獅
御茶壺の口もならぶや丸頭巾　イセ造柄雀枝
寒垢離や此水桶が酒ならば　素林
霜となるきのふの露や玉手箱　紫頂
穴かしこ夜半過ての藥喰ひ　遊竹
清明が祈らば何ぞ枯尾花　氷工
山彦に冷てゆく夜や鉢扣　曉井
から風に吹かれ顏也初頭巾　イセ造柄聞之
きつね火の今や稻荷の神迎　莞爾
寒聲に寐酒の恩を報じけり　汪沖
あてがふて咲や小春の梅の花　三父
風呂ふきの辛みほめてや鶺鴒　イセ造柄辨六

紙賣を横に追はへて時雨けり　楓里
歸華さくや隠居に座枕　（ナゴヤ）夕道
しぐるゝやとろ／＼睡る石燈籠　杉長
五郎とは晶紙にもなし衣配　三和
天目の息や其間のぬくめ鳥　可考
炉びらきや置手拭に置頭巾　（イセ一ノ瀬）知夕
人息に咲や師走の市の花　心圓
堅炭や爐に成ゆく自然居士　湖寂
八卦見た道具が出たよ煤はらひ　魚日
寒垢離やいづれ身の行ロの行　呑水
置火燵きんかに灰のかゝりけり　斗曲
足曳の泥に生るゝなまこかな　梅風
から堀や追手搦手散紅葉　不又
餅つきや山のあちらに臼の音　（ナゴヤ）砂水
行年の小松の下に着にけり　摘葉
野に連て聲も枯けり寒念佛　一歩
ばせを葉の破れなぶるや初時雨　芦錐
寒月や猿木を落る氣色有　栢風

十月の分別赤き木の實哉　林子
炭の火や志賀の都は荒にしを　化光
はつ雪は一寸やりの寒さかな　（木曾贄川）時楓
木の枝に辨當懸て岡見哉　椿又
節季ゆや暮行年の寄せ太鼓　風白
日あたりや痩て終には雪佛　瓢風
冬の梅胡粉の筆を点じけり　夢月
寐姿の誰も短し冬籠　丹嵩
夜興引の褒美とならば握り飯　羽重
大川挽纈子の腕のほそさかな　杜幸
過去未來どちに住身ぞ鉢たゝき　水明
炉びらきと山家の聟が勸めけり　二鶏
能物はとかくすくなし降木の葉　仙呂
炭賣や片手よごれて小六月　弓丁
遲牛の鼻引かけな小松賣　（イガ上野）杜玄
風はなにはつ雪の間を合せけり　可中
しらくぼのあたまかく日や冬の梅　朝尺
脇からは窓を日鏡や雪の山　（イセ佐楠）寸吉
罷出て斧の餘情や山の講　青瓢

云事の耳にかゝるや破れ頭巾　櫻川
昨日の秋の形見の冬瓜かな　竹爲
春待や顏も洗はず枇杷の花　龜洞
一年を辛苦で越すや室の梅　加賀山中 桃妖
つめたさに自然とかゞむ神樂哉　共水
丁々と響く年木や雪の山　調千
息のたつ臼をこかすや雪の上　三杜
醉人の菰槌越すや年の市　立柳
初雪は紅粉さし指に消にけり　水尺
柴漬のむくひや後こそばゆし　楚山
正月の二ッある氣や年忘れ　雨亭
白鷺もならびに行か里神樂　兀山
雞に組しかれてや雪の竹　十竹
羽二重の膝に小猫の湯婆哉　艸風
歸り花咲や剃たりからげたり　露葉
水鳥は今を春邊と泳ぎけり　風埃
水鳥やちよつちよと覗くあの世界　素人
煤掃や九十九度の運び物　除酉

西國曲集六終

西國曲集　卷之七

首尾　尾張　羽重

御幸なき野中の水や芹の花　居士
蹴綱をぬけて歸る雁がね　桃川
跡につく智惠は霞の風ならん　白雲
すほんと釜の口明きにけり　呑水
木の俣に寐たる津波の物語　香水
うたがふ氣から伯母か狸か　仙角
鐘の聲日は照月は有ながら　兀山
瘦穗枯穗の蛇きれ新田　水明
箕造りの果はさもこそ秋の蟬　士
世界一目に遊行上人　重
足もとで雷の鳴る摩耶が嶽　雲
千の矢先にかゝるほえづら　川
當年も靑菜に湯氣と暮て行　角
から鮭とつてまねく夕月　水

華に狂ふ佛洗ひの三位殿　明
寐よげに見ゆる風の草先　山

首尾　尾張　氷蟲

方便の法はさま〲草の華
普天の月は蟻の穴迄　弓丁
司食汁のぬき茶は定まりに　三父
順につまづくあら筵かな　氷工
夜鳥の鳴て大事の寒がはり　林子
若殿原は寐せて松風　千里
笹の葉のうは氣諫むる箇條書　居士
山に吐出すゆふだちの雲　瓢風
しばり繩袈裟に替たり由井が濱　丁
因緣でこく屁は是非もなし　蟲
月寒き雲綱べりの五十疊　工
牛王に料紙添て三方　父
かぶり物脫で礒等も畏り　里
小判に戀の賤しかりけり　子

咲花も眞那盤臭き借り座敷　風
舌にほめたる苔の浦〲　士

首尾　尾張　素人

鶯のよつぴけひやうと初音哉
どつと崩るゝ岸の殘雪　芦錐
春深き瓶にうさんな銘ありて　登虹
三人寄れば三國の風　化光
晨明に寒き出立の鳩の飼　紫頂
狸の寐たる跡もこはもの　居士
山本はめそ〱として鐘の聲　拾翠
茶をはこばせて白氏文集　竹爲
朝晩に好けば小豆の大納言　錐
世間の口は明はなちなり　人
白萱に似たる月夜の忍ぶ山　光
鈴ふる迚も闕の明神　虹
はじめられゆへ村の笹角力　士
二疊だゝみを敷て佐殿　頂

ほとをりの付て枯木に華心　爲
千葉も鳳巾にあがる朝風　翠

首尾　尾張　朝尺

百合若を盛つぶしたる新酒哉
しおにと申す花の關脇　立枝
照る月のわたくし山をまたぎ來て　藤乃
過料とあれば新三束　不叉
狹い氣で葭の穴から行々子　汪冲
ぬめる鱣に取みだしぬる　曉井
間に髪をいれぬ乾のだんた降　之由
今日の宿直はたぞや侍る　誰也
梟鳴く女怖しの木脇指　枝
三くだり半も書て有明　尺
本草に見えぬ菌が圍爐裏端　叉
韮雜吸(ママ)は太田道灌　乃
理不盡に七日咳氣の富士詣　井
ない鳥狩は血忌なるらん　冲

華翠にくつろぎ付る泊りがけ　也
とろりと解て風呂の梅が香　由

首尾　尾張　林月

梢〳〵星や咲かせて夕凉ミ
翠簾も瓦も青き八ッ棟　斗曲
大筆を白木の臺にのせて出て　楚山
折ふし耳の動く人相　風埃
月代も居に間ぢかき磯の波　吟水
撿見にわたる鳥の道中　里艸
箸で撰る蕎麥の走りを奉り　龜洞
一本ざしの二十一軒　居士
盜人を埋めて戻る生ながら　曲
神無月とは上無月也　同
ほた餅は子のこの餅のまぎらはし　埃
子じやと思ふて居たがお內儀　山
入寺してまた方角も郡山　艸
凡慮とゞかぬ船の手づかひ　水

一療治馬糞呑まする時の花　士
　春の世界へ月は出けり　洞

首尾　尾張　十竹

鵜飼火の罪や親仁が手くらがり
　觜音すごき鴻の五月雨　和雪
建て見て轉んだ杖を案内に　可中
　呪ひをせふ灸をおろさふ　素林
八專と赤う晴たる割西瓜　隨九
　千歳丁と槌に行秋　一歩
有明の鳥も笑ふ陰囊玉　風鳥
　喧嘩は風の吹散らしぬる　夕思
神事は押すにおされぬ鰺の鮨　雪
　渡唐渡天の夢の折ふし　竹
雪隱の下は嵐の通り道　林
　後にひかり前に鳴雷　中
將門が七人藝もほろ味噌や　歩
　子共たのんで又借家替　九

月華の繪の具によごす小緣取　思
　頓て雛に宵寐朝起　鳥

首尾　尾張　三和

穗茅花の中や茄の大童
　小鳥千羽に雉子一聲　心囿
寶引の窓を年增に覗かれて　遊竹
　出て居る膝のやら笑止也　居士
御存知の汐汲濱に松の風　調千
　三四十二の月の方角　栢風
耕作に功者狐のすこんこん　涓流
　脚氣に味噌を敷てふす〱　杉月
振舞の夢しら河と明はなれ　囿
　古人の申す一片の雲　和
藥掘裾をむすんで肩にかけ　士
　黍ぬく猿のしかられにけり　竹
輪番にからだたをしの寺の月　風
　棹なき碓のあくびするかも　千

散る華にすかぬ夏季か梟の先　月
　瘦てちからも峯の蕨手　流

首尾　尾張　櫻川

赤嘘の名にこそ立れからす瓜
　晝寐て化す霧の青鷺　莞爾
あり明の小判でまねく双六に　椿叉
　二階の高さ假の道中　南笑
十五里を汲ませたまひて塩燒場　居士
　牛のあくびのつゞく夏草　林木
松の葉で帷子越に驚かせ　推扣
　新地の事は疾に合点　万聲
苞にして是は山から里芋を　爾
　梢の幡に盆はかなしき　川
暮の月今朝の御符が中直り　士
　颱追出す閨のどさめき　又
落てある柏木どのゝ汗ぬぐひ　木
　五日〳〵の賀茂の神前　笑

彼烏の番ひ來て鳴く花の雲　聲
　毛臑に足袋をはいて鋤初　扣

首尾　尾張　除西

雨脚のふみ崩しけり雲の峯
　水ひく聲の四十八里　岐峯
持參した紙帳も古き旅寐して　和泉
　奇怪咄しの嘘が半分　冬卜
下司ちかき御前に晴るゝ暮の月　里翠
　卜治初茸扨馬糞茸　志柳
秋ふかき鼠の閾か杵の音　風野
　氣の付時が日は七ッ過　居士
饅頭の案に相違な聟入に　峯
　がばとぬけたる濡椽の板　西
佛法も末じや〳〵とかんこ鳥　卜
　濁つて暑き清瀧の月　泉
道風の病目に筆も取上ず　柳
　熊笹の葉を楪子のかい敷　翠

一ッ富突かせて神も華の緣　士
横に降來る誰が化粧文　野

首尾　尾張　推之

イキシチニひめゆりの花咲にけり
うつくしよしとよしど蟬鳴　湖寂
扇屋と紺屋は心白地にて　居士
拾ふた金が御捌になる　子拙
月影もすでに廿日の朝氣色　竹詞
盆の匂ひの水に消ゆく　圓木
來る笘の山さへ見えぬ今年蕎麥　玉丈
寐るにははやき暮六の鐘　一秀
顏出しもならずの雨の意地くさり　寂
辻井戸一ッおちこちがある　之
化物の至極といふか大坊主　拙
きつい多葉粉に嘯てゐる　士
研捨の刀に氷る宵の水　木
あれた鼠の死んである也　詞

月華の首途に足を踏直し　秀
日は丑寅に春の頂上　丈

首尾　伊勢　紫筍

往還に上手こかしの柳かな
蝶の糸くる日は吉野紙　寸舌
養父入の長居に常の小袖着て　三杜
砂鉢の破れた時の料簡　團露
塗笠に月は出たれど宵の闇　居士
冬瓜の顏の白き葉隱れ　燕說
機織の哥よみかけていやがらせ　梅風
三獻ほして慮外ながらも　艸風
此雪に前後を忘じゆよ　舌
近付の火のもゆる松陰　筍
活て居る小まんを神の御供とは　露
使の者は云捨て行　杜
流れ木のいざ一見に夏の月　說
山ほとゝぎす鳴かざ鼻賭　士

慢勝な局がしらの老の華　風
奉書に載せて臺の初夢　梅

首尾　伊勢　梅風

はつ雪の座敷行脚や豊火燵
善哉餅の身は小春也　拳石
泰平な牛の叫きと聞なして　雨亭
虱あぶなし建捨の家　迂齋
金蔓の出ぬさへあるにつる根太　艸風
物際ちかき物賣の聲　紫筍
ふんどしを嵐のつかむ船の月　居士
大手ひろげて葭芦の花　燕説
たゝき掃爰の面廊かしこの霧　石
寺は甘露寺殿の裁配　風
往還に枯松の木のこけかゝり　齋
七本鎗のむかし高名　亭
形代に鎮を祀りて月涼し　筍
まくら屏風にはつと濡髮　艸

華に鳥こそつく音も花若か　説
余所は朱(シュ)傘に初午　士

首尾　伊勢　艸風

木から木へ蚊屋釣る床の夕凉
瓜もろともに涌て水玉　浮翠
三文の手づま奇妙に笛鳴りて　燕説
誰がゆるしの吾妻百官　二雛
權柄はさせぬ日ぐらし門の風　知夕
そびれてはしる眞黒な雲　梅風
晝の月など化されん山烏　紫筍
生松茸を嚙て四五盃　居士
薄霧の狹間に寄手を眺めやり　翠
明德二年けふの巳の刻　風
臍の緒の篦竹切に麻袴　雛
顏に眞砂の濱のさゞ波　説
暮〳〵て師走越す夜の月の闇　梅
馱賃して來ぬ馬の打擲　夕

ちる華の鵝毛に似たるはつと髮　士
穂けて薇も立晝寐比なる　筍

首尾　伊勢　仙呂

礎うつ音やむかしの伊勢が家
通りしづまる宵月の闇　楓里
行秋に石地を馬の口取て　午潮
酒のわるさにたちまちの醉　居士
頼まれの判突てやる窓の風　燕説
晝と覺しき晝の鷄　竹爲
浮雲のふみまよふたる棘がき　雲芥
喉の乾きのぬるみ一ぱい　杉長
味噌を搗く千本杵の賑かに　里
庭子の膳ののびにける哉　呂
濱荻に背はつく／＼と葭の風　士
盆も袖に付て便船　潮
緣組は佐渡と越後の暮の月　爲
梓の不思議いふも今更　説

華の雨たれやむ隙はなかりけり　長
殊に雉啼く川端の宿　芥

首尾　伊賀　魚日

十丈の瀧や緣とる羅紅葉
日本めかぬ鳥の連雀　共水
それ形の髭も頭も秋ふけて　青瓢
手ぬりに埃の扠も夕月　梅隣
ちやう／＼と機織虫の三軒屋　燕説
肥しいらずの國の水仙　杜幸
田樂も紙衣もしらぬ冬行て　防風
きのふは薪今日は水　沙蟹
答えたる女は見えず杉の風　水
皿の御用は餅とうらなふ　日
目算の外に晴たり初月夜　隣
稲刈によし鰍取によし　瓢
當言もなま物知の袖の露　幸
点はうたれぬ哥の三夕　説

華と咲く神の子孫の國なれば　蝌

種やき米の重の往來　風

跋

五月雨の晴間に來りて、茶庵を敲くものあり。明れば尾の露川居士の一翰を届く。披き見るに此僧は伊勢村松松林寺を隱れし燕說禪師とて、二十餘年の古翁の跡を慕ふ友なりと書れたり。まねき入れて芭蕉の古を語り侍るに燕子の曰、去年は月空庵を作ふて、衣更着の初より霜降月の末迄、西の數箇國をめぐりしとや。想像西海の風景を枕に聞、島の松に暮ては遠山の花に明し、ある時は日月海より出て海に入る時も有べし。夏は沖より送る風に涼み、秋は月影云はんかたなき磯にやすらひ、もろこし船の便手近に聞て、珍らしき青の葉・めづらかなる器物、一興とやいはん。冬は吹たつる白砂に、いはほの見え隱れなるを隼かとあやしむもおかしかるべし。其折柄ロずさみせし中國・九州の句に、諸國正風の句ども一連衆に結びて歸りぬ。さすがに居士・禪師なるかな。一とせを旅にしてたのしむ者、是乾坤の旅人といふべし。此國曲の撰者は伊勢の誰かれ三子のよしにて予に跋を乞ふ。辭すれ共許さず。さるを說子、今、松嶋・象潟に趣(赴)く事、嗚呼過し世に亡師奥の細道の首途も思ひ出られたるを、此一紙の奥に筆入れて贈りぬ。

七十一老　衰杖（舊名杉風）

享保二丁酉仲夏下旬

書肆

京都　醒井通五條上ル町　杉生五郎左衛門

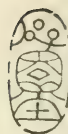
江戸　日本橋南一町目　須原茂兵衛

大坂　高麗橋一町目　芳野屋彌兵衛

西國曲集大尾

北國曲（ほっこくぶり）

七巻

露川
燕説

北國曲集序

時雨は北を本として、萬のこと草を染るの父母たり。居士月窓菴、正風の門を開ひて諸國を行脚す。猶も殘れるを求んと釋の燕說と共に、きさらぎひとひの日、二法師旅鴈に伴ひ・こと〴〵共道を懷にして神無月の比歸菴とや。誠に謝靈運が笠の曲れるは又直なるに歸する謂有て、國曲と名付るもむべならずや。撰者は越の後州卷耳とかや。居士共志を遠きに傳へて、予に序を乞ふたり。行ひとりはぬれぬと聞し風雅より、紅葉の一滴に筆を染る而已。

遊園堂

露沾

北國曲集大綱

題號解

北國ぶりと題事其國〳〵の風流也。古今の國曲、詩の國風に准ずる也。

序跋解

序は數百里をへだてゝ、國主雅君の想慮也。跋は撰者の膽腸也。

雜躰解

數箇の句を集めて雜躰とし、初に元祖の句を載せ、終りに上位の句を置き、中にもろ〳〵の句を並べたるは、諸國の正風をあまねく融通せんとの思ひなり。

風俗解

作者不知として其國の名物を句中にこめたる、万葉らしき興談の一句あり。是居士其國に至て拾ひ來り、國の始に置て曲を定るなり。

抖擻解

紀行と見えて旧跡順途の委細ならざるは、風雅人の見やすからざるため也。又奥の四ヶ國は居士乙来の紀行なりしが、此序を期して今、越前・若狹と國を並べて續く也。

首尾解

百韻の首尾一牒となす謂は、撰者尾府に來て三十余日、好士に對する事三百餘人、其崑石の卷抜輯して爰に載るなり。

一巡解

遍歷十六ヶ國、百韻哥仙等四百八十卷、大部に及ぶをもつて、秀作の一巡ばかりを記す也。

撰者解

中閑舍卷耳、此集を錄する事八ヶ國の行程、越後の高田に終るをもつて也。

句評解

卷末に載る一句一巡の哥仙、川居士の評成て經書の註解のごとく、遠國遊(ママ)嶋の初學を導んがため也。

北國曲集　卷之一

越之後州高田森氏卷耳撰
雲水之沙門無外坊燕說補
尾州名護屋神谷氏氷蟲筆

蒼天

よしや降れ麥はあしくと華の雨　泰勝院
足元は見ぬ鶯の初音かな　ナゴヤ 呑水
散埋めて鼾かくあり花の陰　大津 松琵
夏を待つ末の若みか藤のはな　京 吾仲
あつらへの暮や夜みせの朧月　ナゴヤ 十竹
分別のしまりや鳥の巣の始　同 一秀
大助がまじなふ二日やいとかな　同 吟水
干葉飯のかざやかまえの梅の花　同 白雲
はゝき木の我が影法師や猫の戀　同 斗曲
雨だれの水さゝれてや猫のこひ　熱田 化光
どう突をしらぬ顔して柳かな　ナゴヤ 藤乃
鉄砲に逆毛たてゝや雉の聲　同 椿又

やけて來る山を相手や雉のこゑ　イセ一ノ瀬　草風
山風の轤鞴(タヽラ)にかけて木の芽哉　ナゴヤ　桃川
からくりの雨を降らする柳かな　同　林子
長からん心もしらず藤のはな　同　汪冲
藪入の中に去られて來るもあり　同　和雪
藝の底たゝきて春は行にけり　イセ桑名　楓里
鶯の七分にかゝるはつ音かな　ナゴヤ　和泉
葛城の神の夜明や谷の梅　同　楚山
志賀の海埋んとするや山櫻　同　素人
茶の花の色はつれなし明屋敷　イセ一ノ瀬　拳石
くらき世の泥に繪をかく田螺かな　ナゴヤ　羽重
御身拭ひくさめこらゆる顏もあり　同　可中
黄鳥を塩水打て鳴かせけり　同　風埃
鶯のなくや隣は知行とり　イセ一ノ瀬　梅風
此界をはなれすますや凧巾　同佐柄　芦梢
北嵯峨や地なし小袖の若菜摘　ナゴヤ女　風式
一の富突て出代せぬもあり　同　櫻川
行春の置て行けり峯の雲　同　林月

もらひ乳の鶯もけふ初音かな　同　右柳
百本の借し傘やはなの雨　イガ上山　其水
山寺に火桶戀しや遅ざくら　善光寺　紫柳
初蝶の花屋へ舞ふて來たりけり　ナゴヤ　池天
出かはりや狐あたりの鍋ひとつ　同　露竹
芋だねや穴に千年岡に又　同　栢風
輪廻とやあかる障子の虻の聲　熱田　吐龍
出し雲をふまえてのぼる雲雀哉　津嶋　泉壺
鶯に草履の重き氣色あり　三刕西尾　千丈
ひだるくは田をうて迚の柳かな　ナゴヤ　凍左
薄衣に小町が肌やおぼろ月　津嶋　一口
畑うちの雨の祈りやてんこ笠　ナゴヤ　莞爾
黄鳥や土から湯氣のあがる時　同　涓流
夕月にこそぐりかへすやなぎかな　津嶋　長繩
麥畑にいまだ輪廻や歸る雁　ナゴヤ　一志
余の花に呑てまはすや梅の花　同　三林
鶯の今の初音や一千里　同　風姿
澁柿の若代は甘き接木かな　同　風鳥

脇留て後は匂ひも梨のはな　同　風野
晩鐘の百八つくや藤のはな　佐屋　宇林
せめ馬の鼻息に散る燕かな　ナゴヤ　不又
梅咲て澤庵漬のにほひかな　犬山　梅イ
野あそびの上着を懸る柳哉　三州高宮　可斗
緋純子に消すや手水の薄氷　イセ山田　柳巴
仙人も苦い顏して野老かな　ナゴヤ　兀山
十念の内のまよひや雉のこゑ　同　湖寂
雉鳴て夏ほど暑し俄照り　イセ押淵　只山
雫どけに鯰も髭を洗ひけり　木曾福嶋　櫻泉
霤(アマダレ)に散るや椿の諸拍子　サヤ　等窻
積善の餘慶に寺の接木哉　ナゴヤ　古甃
ちる梅の干葉に刻みこまれけり　犬山　露黑
雉鳴て喧嘩の夢は覺にけり　尾張一ノ宮　松翠
蒲公英の卒都婆小町と散にけり　雲水　燕說
糸つけぬ物ならなくに朧月　ナゴヤ　朝尺
七草の祭にもれて菫かな　同　調千
人中を見て應〳〵な柳かな　木曾福嶋　珠子

稲葉木のうへに内裏も雛かな　ヒダ高山　蛙水
賴光を目がけて鳳巾のうなりかな　ナゴヤ　三和
出かはりやかぞえた家も忘れ水　佐屋　一珍
彼鳥に鳴けと咲けり梅の花　犬山　一靜
芹摘の鶴と化してや水かゞ見　ナゴヤ　三父
七草や多賀の抄子のあら削り　同　龜洞
丸過た里に角あれ鬼あざみ　サヤ　輕加
振袖の高機織や藤のはな　尾張一ノ宮　伽陵
白無垢の下着やいつの古雛　ナゴヤ(マヽ)　迂齋
むねうちをくはせた時か雉の聲　イセ一ノ瀬　二雞
我先にとてや木の芽の品くらべ　ナゴヤ　弓丁
世智な代を二月とは見ぬ柳かな　同　曉井
つばくらや鷹に酢を乞あぶな物　イセ一ノ瀬　柳絲
鼻息の心元なしおぼろ月　木曾贄川　古調
梅に呑み柳に下戸と笑ひけり　ミノ堀津　阿什
散溜て後に流すさくらかな　ナゴヤ　固有
子飼からくぜる宿尾の燕かな　同　玉丈
蒸籠にむして野山の木の芽哉　同　夾始

しと〳〵としばらく降て梅の花　ミノ大垣 此筋
弓張や光こぼれてむめの花　イセ四日市 宗音
犂に舌出す牛や木瓜の花　作州津山 樗羅
七草の儀式は過つ蕗の塔　ナゴヤ 芦澤
搗立に白粉かけてや春の月　居士
むさくさな中に祖師あり蕗の塔　イセ朝熊 万夢
鎌で薙ぐ莇も花のゆかりかな　イガ上野 梅隣
尾のみゆる隠れん坊や雉のこゑ　ミノ高須 素功
脇ひらも見ず定宿の燕かな　キソ贄川 亀三
鶯や蜜の涎も落ぬべし　ナゴヤ 心圃
皿に咲く鮹の指身や桃のはな　イセ一ノ瀬 君故
色を見て灰汁さす雨の櫻かな　同八俣 淡月
出代の輪廻や磨の巡り合　ナゴヤ 遊竹
不細工の仕あげを見よの接木哉　ヒダ高山 露江
出かはりや跡は濁さぬ流し水　イカ上野 車風
野心のつくや煉茶の摘れ時　ナゴヤ 松波
照れば咲山や躑躅の地獄谷　同 倀予
しら雪のうす彩色や若菜畑　同 春翠

辻風を抱き留たる柳かな　同 宵月
神託の前に出て舞ふ胡蝶哉　ナゴヤ 除酉
盲目の人を見盡す彼岸かな　同 楓橋
夕ばえの半襟赤き燕かな　イセ[illegible]橋 紫筍母
似我蜂の巣や罪多き此世界　同山田 會北
手を引て飛ばする岸の柳かな　同小俣 芦穂
夕晴や捨子の五器に鳴蛙　ナゴヤ 初汲
戻りには藤に巻かるゝ公家も有　同 此山
肩で風きるや御前の鳳巾　同 竹枝
紅梅のさくや太子の御誕生　ミノ長良 卜之
寶鐸にさそふ嵐のやなぎかな　備後尾道 己禮
明家のたましるひくや桃のはな　奥州白川 四夕
糸脈をとる手や風のいかのぼり　ナゴヤ 且酒
鏡から御慶の顔の生れけり　ミノ笠田 摘葉
吸物に朝日のちるやさくら苔　ナゴヤ 仙角
雲に波たてゝ囀る雲雀かな　同 晴燕
出かはりや大津繪張て置土産　同 誰也
松明に尾もはえぬべし朧月　同 千里

松に藤巴が住だところなり　同　雲窓
波の端にとまりて見ゆる燕哉　ミノ大垣　海東
又六が門に醉たるつばめかな　イセ小俣　石露
大足に咲けり庭の小米花　ミノ郡上　流石
空に日の照れば此地でも躑躅哉　同ド蘭生　尋里
引のばす蜂や幾ひろ揚雲雀　ナゴヤ　雨船
風巾落るところを猪早太　同　水明
鶯や雨替町の二日たち　出羽龜山　遊野
涅槃會や濡巾(シメシ)をかゆる手つきもあり　ナゴヤ　推扣
雉の尾の隠す方なし鏡やま　同　鴎白
一雨の晴間に痒き木の芽哉　ナゴヤ　露碩
涅槃會の疊に砂やうき世寺　羽州酒田　斗南
七草の末座は青し佛の坐　奥州桑折　湖柳
出かゝりて寒し木芽の一思案　木曾奈良井　斗風
起〳〵に出てまばゆし山ざくら　ミノ大垣　此勢
紅梅や匂ふ酒ははかりなし　同鍼穴　湖南
泥龜をたゝいてあそぶ柳かな　信州池田　千之
長太刀にしたがふ風の柳かな　同　度解

種まきや當字だらけの紙幟　ナゴヤ　左岡
落風に帯紐とくないかのぼり　ナゴヤ　珍木
鶯も素湯ほし顔の初音かな　同　常久
さゞ波を作つてあそぶ蛙かな　同　芦江
鬼子とは葉になる後の蕨かな　同　坂車
爪に火をとぼす牡丹の芽ざし哉　イセ小俣　丸龍
風呂を出て軒に流るゝ柳かな　同大湊　兎友
たんぼゝやひようきんらしき草の花　キソ福嶋　利有
金王がだまさるゝ日や鮒なます　ナゴヤ　鷗波
宇津の山蔦はむかしぞ赤椿　同　野柳
春雨や將棊はじまる金閣寺　ナゴヤ　推之
風に散る華を非に見て椿かな　同　氷蟲
水鏡みれば痩たり芹の花　同　杉月
涅槃會にはづれまひ迎燕かな　同　五條坊
美尾谷が錣になくや猫の戀　越後高田　乞耳
初櫻自然と照るや天赦日　津嶋　知水
櫻には餅こそつかね桃のはな　ナゴヤ　巴雀
行春の詰り盡たり鳥の聲　桃化子

吳天

いくばくか人の夢喰ふほとゝぎす　延陀丸
野ざらしのあなめに響け杜宇　兀山
上に居て奢らぬ軒の菖蒲哉　素人
下風とはいへどふかぬよ雲の峰　江戸 衰杖
逆鉾の先に浮巣のさはりけり　心圓
地年貢の澁ひかはりや柹の花　除酉
數珠を繰る片手に悲し蠅たゝき　大津 宰陀
錢百で緣起委しやかきつばた　誰也
櫓の音を陸で聞夜の幟かな　水明
緋扇にあふぐ風あり風呂あがり　柏風
將門が上見る時かほとゝぎす　長繩
子に伏して寅に起けり郭公　津嶋 市藤
花散るや此世に殘る芥子坊主　卷耳
裏道やからむる人をすかし百合　和泉
ちる芥子に蝶は手品のなかりけり　千里
瓜の皮むきて涼しや立泳ぎ　作州津山 等年
灌佛やまづ丈六の枝配り　氷蟲

牛を飼ふ隱者もありや若葉山　三林
蓮池やおつ肌ぬぎの佛達　推之
万日のあとや何蒔くかんこ鳥　初汲
杜鵑蹴あげし鞠の下よりも　春翠
鼻聲で鳴やむぐらの羽ぬけ鳥　十竹
華塩も粥の味方や白牡丹　備中倉敷 枳風
鳥なくや蚤の狂氣のさめる時　豊後小國 西東
松明の聲や夜討の夜水引　奥刕桑折 馬耳
日に雨に傘さしつれて牡丹哉　信刕池田 不堪
色好むではなし花の初茄子　木曾奈良井 栢烏
夏菊や汝にゆるす朝曇り　奥刕保原 易耕
卯のはなや搔揚城の水鏡　同桑折 不珴
やけ石に風や抱付く蟬の聲　佷予
ねんねこの昔思ふや眞桑瓜　ナゴヤ 涓溪
啄木の響もすごしなつの山　此山
堅板に水の流れや五月川　ミノ中津川 藤先
耻かしき出合は麻に蓬かな　流石
篝火に日を取られたる鵜船かな　筑前内野 耴然

空青し疝氣の間の衣がえ　ナゴヤ　氷支
木鉄に懲ぬうき世の若葉哉　同　之楓
先達は右へひだりはかんこ鳥　遊竹
衣更雲も刷毛目と成にけり　ナゴヤ　旭山
まねかれて團をまねく螢かな　爽始
涼しさや水影見ゆるところ迄　筑前博多　女　まん
蜀魂今や持參の雲ひとつ　イセ簱柄　三杜
夏の月草や青田やうはぬめり　伏見　中樂
錢取て案内消る茂りかな　イガ上野　沙蟹
水の垂る雲に降けり栗の花　玉丈
鴨の子の錐にあぶなし眞菰刈　固有
一話則ぬけて袷となりにけり　曉非
よもや此山のあなたはほとゝぎす　イガ上野　露醉
耳底にいつの山路の郭公　同　紫山
行雲に聲をのせてや時鳥　佐屋　辨慮
駒ヶ嶽樂屋にしてや雲の峰　尾張鳥井松　林竹
此疵も愈て漆のわか葉かな　犬山　夢月
目の垢の柱暦や百日紅　吟水

剃てから結ふはむづかし粽から　松翠
雨風の六具しめてや蝸牛　弓丁
海山を父母にして雲の峰　龜洞
厚紙のひあふぎの花咲にけり　杉月
船綱を卷て圓座の凉みかな　三和
庭鳥の尾は帆に成て風凉し　尾州知多　雪客
山門の内雲臭し五月雨　イセ押淵　吾人
凉風の吹越す竹の林かな　ミノ駒ヶ江　可嘯
抱籠を余所に見て居る女哉　善光寺　末格
蚊に施行ひくや捨子の丸はだか　イガ上野　魚日
旅だちといはれて見たし衣更　尾張知多　桐花
子規あはれ降日もふらぬ日も　木曾贄川　五明
目から火の出たか飛途に散螢　調千
有耶無耶の關や覆盆子の蔓の中　朝尺
蓮ちるや爰を去事遠からず　露江
川狩の共はたらきや鵜の仲間　善光寺　扣山
灌佛や末世の我も一檜杓　信濃松本　三省
凉しさや窓に吹こむ帆かけ船　イセ簱柄　寸吾

鶴に乘る世界はなひか富士詣　潮寂
衣がえけふより淺き嵐かな　ミノ兼山 甲山
仲國を召すや夜明のほとゝぎす　宇佐 吾竹
泥に醉ふ人の中から蓮の華　泉州桑折 衣吹
世の外や枕一つの蚊屋の中　ミノ深俣 風白
剃つけた皮や痳むく女ばら　不叉
蓼の葉や團三郎が脊くらべ　風野
此邊に水もあるべしとぶ螢　信州仁科 弄兎
時鳥採茶にまぜて初音かな　木曾贄川 加流
いざ神樂一にすゞしめ二に涼み　風鳥
辨天の浪にあそぶやところてん　風埃
佛法の精に苔や誕生會　竹枝
水影にどちらが鳴ぞ郭公　莞爾
研ぎ物の内を大工の涼みかな　羽重
麥刈の娘や馬士の頬かぶり　信州松本 湖水
なぐさみの苧桶にたまる霖雨哉　木曾贄川 序人
山を呑み川を吐けりほとゝぎす　イガ上野 鼠角
哥で喰へ清水ながるゝところてん　ナゴヤ 束芳

めづらしの花は問はずや初茄子　風工
石竹は針目揃ふて咲にけり　イセ押淵 淵魚
蓴菜は茶道が池に咲にけり　楚山
熱のうへにさつきの花も咲にけり　有柳
しら土の壁のこはれや白丁花　イセ押淵 既白
松を出て壘はしるや青嵐　ヒダ高山 江鷗
一つかみ雲の陰りか郭公　イセ桑名 仙呂
山道や尻を頼みに飛ほたる　同一ノ瀬 白圭
杜鵑なくや田原の又太郎　和雪
智惠の輪をぬく間に夏の夜明哉　尾州西保 慮推
不二の繪に雪を握りて涼みかな　津嶋 未了
風待て狂ひたがるや若葉山　可中
かう云へばあゝ云聲やぎやう〳〵し　櫻川
仁德の御代とはびこる若葉哉　ナゴヤ 丹哥
牛の尾にはさかふて來る螢かな　津嶋 氷下
竹の子も裸に成て暑さかな　一珍
咲かせばや普賢の御手に杜若　勢田 登虹
雨は木のうへを降ゆく蘩(茂)り哉　木曾ナラ井 吟冬

生贄も千年さきや木下闇　林子
陸に咲く水は手作やかきつばた　汪沖
竹の子や塚は二ツにさつと破れ　林月
紙着せた藥人形や御祓川　熱田 竹爲
百日紅唐の内裡と咲にけり　草風
紗の袷のせて扇のしはりかな　イガ上野 良品
灌佛や指の邊りに輩の星　イセ櫛柄 何十
初蚊屋や大藤内が途にまよひ　藤乃
形代に灸するこそおさなけれ　桃川
瓢簞の中から駒やかたつぶり　凍左
長病や時もはからず散る松葉　椿又
ちる華の後宴と啼やほとゝぎす　イガ上野 雷洞
熊坂も泣くや小つぼな青山枡　ナゴヤ 楚竹
石菖の漏に置かれて肥にけり　風姿
雲に入る鳥も有けり夏の嶽　一秀
江戸留守や筝はえて納戸口　露竹
能う寐たか〳〵と鳴や諫鼓鳥　池天
旅籠屋の裸火燵や青すだれ　巴雀

蓮ちるや祇園精舍の鉋屑　ナゴヤ 壺睡
照降を同じ出たちや眞菰刈　同 美蛙
咲出しや鐙ふんばるかきつばた　津嶋 一口
行水の世とや澄まして鵜飼舟　白雲
麥空は馬屋で祝ふ粽かな　津嶋 泉水
杜宇聲は色紙に殘りけり　同 榎堂
冷汁の味や淺瀨の水加減　同 市藤
一雨にさらささめけり雲の峰　ミノ下麻生 洞風
咲かゝる蓮や朝日の糸加減　斗曲
裏口や蜘手かくなわ蠅たゝき　ナゴヤ 氷工
恨めしの幽靈顔や葛の花　飛弾高山 連木
卯の花に二丈ばかりの欠伸哉　ナゴヤ 岐峯
蜀魄なくや闇浮の片便り　松波
白壁にちからを得たり五月闇　常久
物毎のあさぎと芥子は散にけり　津嶋 一管
用水の深さもしれずわか葉かな　同 紅友
散てゆく芥子や飯綱の仕舞口　珍木
一國を斯かためよの蚊帳かな　芦江

十一のあたまこつりや眞桑瓜　ナゴヤ 阿文
笋を共鍬柄にくらべけり　盧推
正直の親を定規やことし竹　佐屋 吟山
あけぼのに化粧ふて出たり顔よ花　信刕松本 木川
朝寐仕の天然礫やほとゝぎす　尋里
石竹や濱の眞砂と咲かへり　且柄
江戸留守を見込で鳴やかんこ鳥　宵月
散りはせで崩れてのける牡丹哉　五條坊
暑き日の目星やちりて夜這星　長崎 古道
灌佛や生れながらの袈裟はなし　鷗波
毎日の留守を水鷄のたゝきけり　推扣
春夏の縫目正しやころもがえ　左岡
瓢箪を吹て鹿子をよせにけり　イセ小俣 大斗
明ほのの風や槐のはなの雪　善光寺 元水
竹の子や親は近江に有ながら　仙角
五月雨に寐腐らぬ日の出にけり　イセ桑名 午潮
夕立の晴や勘氣の御免状　三刕市子 淡水
笠の名の加賀に心の若葉哉　見龍

月の出て雲うつくしや郭公　ミノ大和田 露白
一日の暑さ流すや紀川　ナゴヤ 雲歩
持寄て暑さくらべの凉みかな　イセ四日市 鳴之
ぴん／＼と馴染かねてや今年竹　三刕西尾 市中
初音よと下見て鳴やほとゝぎす　ナゴヤ女 素蒿
呑む事を忘れて居たる清水哉　イセ四日市 周行
曉の嘘遠しほとゝぎす　信刕上田 共得
わか竹に敦ゆる枝垂柳かな　三刕高濱 二巴
よし𡚴も同じ夏野の娑婆世界　イセ四日市 杉高
子をもたぬ細すうわりや今年竹　ナゴヤ女 素柳
火宅からくゞりぬけてや夕凉み　三刕西尾 千丈
裸でも華は咲けり猿すべり　居士
晝顔や後は山に前は海　三刕西尾 水音
般若轉る峯の茂りや雉のこゑ　四日市 祖洲
芍藥の出臍を蝶のなぶりけり　同 如水
雨だれの瀧にのぞむや蝸牛　同 砂水
智恵付の風にもまるゝ植田かな　同 流川
君ならずしてと解るゝ粽かな　燕說

夕がほは闇の中から咲にけり　三刕吠舊 素木
梅澤の香もなつかしき新茶哉　ナゴヤ 翠山
幽靈と共に夜明の螢かな　同 扇招
面影にたつや若葉の山櫻　同 可中拙
牡丹見に出立は輕し白綸子　同 古邑
蕣の智惠や取越す夏の花　津嶋 昆綱
美人草咲やしばしの身だしなみ　ミノ福江 起外
脇つめた袖や六日の花菖蒲　佐屋 鵝心
辛き世に柯もたをさず兒よ花　信刕仁科 五峯
こまかなる細工は暑し菱の花　ミノ深田 水尺
臨終の勸めいやがる葵かな　ナゴヤ亡人 瓢風
夏花摘夜なべ〳〵や藕の糸　熱田 拾翠
禪の流れて賤し御祓川　龜明子

北國曲集一 終

北國曲集 卷之二

旻天　再昌院

城山や施餓鬼の幡の一流
蜻蛉のとまりて安し牛の角　推之
あさはかに二布干けり柹紅葉　羽重
宿替に猫も流浪や秋の暮　正秀
敵に成味方になるや秋の雲　氷蟲
道ばたにあらいたはしや女郎花　朝尺
神か應佛か應のけふの月　林月
今織の糸ごしらえや菊作り　調千
樽化して四宗兼學の踊かな　京 竹宇
生贄のやむや共後割西瓜　風块
腮に血を付て嘯く柘榴かな　三和
むら雨に降照の世やけふの月　梅風
客立て跡うけとるや蟋蟀　柳巴
眞先に鉄漿壺や星まつり　可中

礎うつ音や山路のちから草　和泉

隔年に川を越るやふたつ星　和月

金との塊（ナフ）に唾吐てや藥ほり　三父

殘る葉はなき世なれども一葉哉　善光寺 放牛

傘さして出るも至りの月見かな　信州松本 湖舟

さがり日の溜息暑し秋の雲　鶴洞

いなづまの筋違橋や佐渡越後　弓丁

志賀寺の戀や穗に出て散尾花　曉井

憎まれた共澁柿も熟柿かな　固有

松ばかり染まらで外は絶かな　ミノ郡上 瓢水

名月に塩をつけてや此曇り　同狐穴 夏鳥

月の名をにほへ田毎の稻の花　吟水

稻妻に雲の小鐵や玉手筥　玉丈

篠懸にちるや奉加の柿紅葉　芦澤

我こそは種よとすねる茄子哉　旭山

三味線に秋をうかすや松の聲　善光寺 木丈

骨折を風に渡して鳴子かな　信州松本 直方

朝霧の粉𥸮咲けり稻のはな　備前岡山 三知

敎經の矢先に白き桔梗かな　且栖

うつけぞといはれたがるや長瓢　遊竹

三盃の裾に血はなし鷄頭花　心圓

往生にもれた因果や種茄子　松波

節𩞄の人數やけふも墓參　肥前女 紫貞

二千里の空に鐵なし今日の月　ナゴヤ 滴志母

掃溜に咲くも余義なし菊の花　信州松本 木川

分別のうへはわたらし萩の露　大坂 芙雀

稻妻の燃し捨てや割西瓜　イガ上野 栢溪

生魚の秋や木曾路も海近し　キソ福島 野鶴

乘懸に花野をのせて夕日哉　同 圭堂

もとゆひにかゝらぬ髮や鷄頭花　木曾贄川 曾天

茸狩に猫をひかせて嗅せばや　同 朝栢

初秋や水に一筋何のあと　大坂 三惟

實搶にそなふる臺の西瓜哉　ミノ大針 葉三

稻妻の隱れん坊や岡の松　信州池田 千之

川ひとつ照つ照られつ二ツ星　同 梅茗

繩節に及ばぬ先の一葉哉　木曾奈良井 吟水

白雲によごれ日早し後の月　鳴立澤　米人
法談は其座に置て踊かな　豐後日田　野紅
織物の糸ぬく音やきり〳〵す　同所女　りん
付て來て野郎の消る木槿哉　十竹
鉢の子に米かす側の穗蓼かな　岐峯
虫鳴て腹探らるゝ案山子かな　佩予
秋もまた木の俣ぬけて夕日かな　長崎　宇鹿
名月の池へ通すや使者の船　奥刕岩城　沾梅
飛〳〵て疲れや虫の九月盡　善光寺　仙風
一霜にあら臆病や女郎花　信刕松本　和水
一度は笑ふた山も秋の暮　同　谷之
溫石の御供申すや後の月　ナゴヤ　涓溪
きのふから勸進橋や後の月　同　嶋舟
散る一葉井戸の水屑と成にけり　初汲
一變し雲に華火や星の影　春翠
松を出て引目のつくや月の雲　備中吉備津　高吉
照〳〵てそのゝち桂の影法師　奥刕岩城　立圃
其昔畠と見ゆる花野哉　木曾福嶋　洒口

葉雞頭鴈待かねてこがれけり　京　侍徂
草ばなの膝にも咲やぬれ佛　木曾須原　洞曉
寺ありや山をへだてゝ揚燈籠　風白
三日月の眉に化粧や薄曇　竹林
蕣を夢に見るこそおかしけれ　木曾奈良井　雲步
行秋の森や錦のまき柱　大津　圓入
まゝ事の串にさゝるゝ紅葉かな　イセ小俣　以上
名月や髭喰そらす芋魁　同一ノ瀬　詞林
稻妻や野はからくりの草の花　同　知夕
蓑虫の音や三日月の尖りから　ミノ駒ケ江　梅陰
明日の夜もありとやちらと三日の月　ナゴヤ亡人　芦舟
今日の月旅の舞子の新世帶　奥刕岩城　沾薄
とゝのへば家治まりつ後の月　同　素文
襟に顏入るゝ夕日の芙蓉哉　ナゴヤ　橋雀
しがみつく聲のしぶりや明の鹿　千里
落る日の瀧や糸繰る秋氣色　ナゴヤ　風朴
稻妻は闇の紅葉と散にけり　朴龍
品玉のたもとにふける鶉哉　誰也

はねられて烏帽子に泥や駒迎　ミノ下麻生 洞玉
盂蘭盆やうき世に戻る餅の音　推扣
澤菴の舌に響れの蓼穂哉　水明
油斷すな世は四十雀五十雀　ミノ中津 吟濤
菊酒や三々九盃の口拍子　同 合之
烏帽子着た人にさゝやけ女郎花　鷗波
挨拶の何からいはむ女たなばた　露碩
行秋の雲をしたふや風の脚　近江松本 しけ
嚔の鼻から飛やあきの雲　珍木
穂薄の千人切や蚊の弱り　涓溪
早稲に繩張て牛馬の案山子哉　此由
出かはりの常陸小萩や秋の雨　古甃
あさがほの咲や瞬(マタヽキ)十ばかり　ナゴヤ 松遊
山畑に鉄砲疵の西瓜かな　同 峯雪
やごとなき小野の月見や夕御膳　奥紡岩城 右巴
稲妻の只一なめや美濃尾張　ミノ麻生 洏毛
さかづきのもやう百色菊の花　同千旦林 洗月
日は西にすくひとらるゝ花野哉　木曾福嶋 千流

名月の晝より晝や雲母の地　奥紡岩城 芳葎
豆引の一棒くるゝ案山子かな　兀山
稲妻の舐り兀すやかゞ見山　不又
責念佛中せば落る熟柿哉　風野
樞(クヽリ)戸のみあきてや庭の鷄頭花　備中イハラ 正興
稲垣や百間堀の外がまえ　木曾福嶋 冬雀
女郎花たつきもしらず野雪隱　ミノ千旦林 小千
藁槌に散てうたるゝ一葉哉　風姿
伊達もはや死裝束や野の錦　風鳥
稲妻に錆の付たる野山かな　木曾福嶋 東仙
雨袖を帶にはさむや菌狩　同 還珠
七夕の酒間見たし遠目鏡　莞爾
門破る手なら足なら唐辛　ナゴヤ 雲跡
腹たゝず醫も入らず菊のはな　風式
葬の行義見せたる曇かな　信州松本 大河
公家衆も笠と寂びてや嵯峨の月　同 蟻道
なまぐさき百万遍や鳴子引　楚山
首だけを泳ぐや星の天の河　素人

名月や小嶋の海士の肌くらべ　ナゴヤ 右烏
根がそちの冬瓜ぞ迚投にけり　イセ桑名 正筑
盃も顔も小袖も紅葉かな　信劦松本 南澤
仙蓼の立聞するや影法師　右柳
心根の馴染は憎し唐がらし　素行
蘭の香の相伴らしや萩薄　信劦松本 巴仙
見通しの神御免なれ木の子狩　同曾川 五梅
秋風や須磨より配る日本図　イガ七人 青瓢
落栗やすぶたかぶりに鍋かぶり　櫻川
畑主の不性そしるや草の花　木曾福嶋 瀾昏
喫數に入るや花野の赤蜻蛉　同 秀陽
鎌の刄のこぼれかゝるや草の露　ミノ高須 素功
蔦の葉の壁にかゝるや手かけ者　イガ上野 峯尺
秋たつや梢の鐘のひゞきより　共水
蟷螂は一本橋にひかえたり　和雪
嚀〳〵は錦の縁りや蓼の花　三林
女郎花側の旗雍やかゞ見やま　大坂 野坡
日ゝにあらたな釜の柚味噌哉　何十

竹の節の細みに鳴やよるの鹿　イセ桑名 杉長
春にしてほしがる蝶の花野かな　林子
月見かな下は奈落の底迄も　汪冲
翠簾越や踊る女中の影まはし　午潮
月だにも朝はたらきや九月盡　イセ桑名 鯉白
雍がへりの足に付たる鳴子哉　蛙水
十六夜の闇こそ祕事の睫なれ　イセ一ノセ 加吟
後の月尉殿の面脱れけり　呑水
赤味噌の口を明けり冬瓜汁　桃川
一喝の下に二聲うづらかな　凍左
八重手間も片時の夢の花火哉　椿叉
小男鹿を聞なら一二三笠山　柳巴
いなづまは山を廻んで失にけり　吾人
山〳〵は木曾を手本や初紅葉　木曾福嶋 桃瀬
猪の木の根にあざる野分哉　同 東吟
薄氷を踏んで老木の熟柿かな　尾劦犬山 雲靜
一梓かけたし星の思ひ事　同 一靜
風に繪をかく蕣のさかりかな　三劦高畠 三巴

から風のあとに門出度熟柿かな　白雲
蜘の園に牛も繋ぐや星の宿　栢風
萩白し夜は幽靈の薄化粧　ヒダ高山 車水
冬瓜やふらりと比丘尼隣より　藤乃
しら菊は神代の木地の匂ひ哉　津嶋 清空
擂鉢に輪廻は深し秋の蝿　燕説
我が智恵に葉や奪はれて梅嫌　熱田 化光
闇の夜に鳴かぬ鳥や魂むかえ　居士
狼の足跡さびし曼珠沙花　露竹
稲妻になぐられて散る柳かな　ナゴヤ 梅思
滿月や松を庇にならべ床　ナゴヤ 如農
もてはやす四十しまだや後の月　津嶋 木卮
黄金の土にも朽(朽)ずのちの月　同 舟木
蕣のねぎりこぎりや檜(ヒノキ)賣　宇林
つきあひは只丸かれの躍かな　梅夙
白糸の瀧といはゞやけふの月　ナゴヤ 滴志
轉んでも柸はつかまぬ花野かな　津嶋 一管
名月や船に酒屋に出來富限　同 竹葉

神にさへ寐ず權現や今日の月　同 松翠
いと若き君のおもしやたね瓢　等廻
拾苗は拾はでけふの落穂哉　ナゴヤ 白陽
芋の葉は破れずや雨のからさはぎ　宵月
冬瓜や寐樂にふとる草の中　羨蛙
妻乞の鹿や山また山めぐり　津嶋 露瓢
欄干に千躰佛や今日の月　同 万山
捨扶持に共日暮しの瓠かな　嘯吟
稲妻や羽織の下の猿の聲　池天
後の月照るや美人の脇ふさぎ　榎堂
狐釣る男に惜しや女郎花　卷耳
見とをしや手の行たらぬ魂祭　松琵
生綿取る氏子や口で津嶋笛　市藤
稲妻の息に破れたか二子山　鶏心
未來記を咲く鼠尾草の盛かな　佐屋 應水
金もたぬかまへは安し花木槿　吟山
鳩吹や空から顔へ糞ひとつ　起外
古郷の錦は菊の十日かな　一秀

いかにとも山路の菊のあぶら筒　雪沾子

上天　風羅翁

今日ばかり人も年寄れ初時雨

口切と隣あはせや根深汁　吟水

御命講や世は從弟煮の焦臭し　藤乃

夜の明て物に蹴られや綱代守　巴雀

榾の火や柱に兜巾ほらの貝　イセ山田 園室

大津繪の眼開頼まん鉢たゝき　和雪

借金の年の瀨ぶみや團三郎　桃川

冬枯の梅や彌勒のあらかじめ　竹爲

圖法師や五體見えすく冬木立　阿文

水鳥や桿取直す身のひねり　栢風

清明に轉じられてやみそさゞゐ　可中

寒聲のつかひおさめや鬼は外　風埃

一座から御聲頼むや冬のむめ　不ヌ

春秋を知らぬもあるぞ紙子賣　朝尺

からくりの夜は曙や雪の富士　野柳

氣ちがひの直道戾る時雨かな　奧州スカ川 晉流

笹の葉に霜や降らせて里神樂　水明

寒菊や風を相手に小長刀　鷗白

碓の音に崩れん雪まるげ　アキ宮嶋 虎洞

起〳〵に鳥の息見る寒さかな　木曾福川 里藤

素人の墨繪流るゝ生海鼠哉　信州松本 可明

大助が睾丸あたゝめて火燵かな　推扣

胎内のからくりや此年のくれ　珍木

毛蒲團や上みぬ人のぬくめ鳥　推之

荒浪の追つ追はれつ霙かな　信州仁科 修琴

つれなくも野風呂見ぬ日の小春哉　居士

彥七がかつぐも重し傘の雪　木曾福川 算甫

東西へ鞭うつ雲の時雨かな　ミノ下麻生 玉泉

綿衣着て兎の眞似か冬籠　風白

節季候やうちよせて來る磯の波　瓢水

矢表にたつや一りん冬の梅　誰也

一錢は戾り駄賃や寒念佛　千里

大雪の性根やぬけてみそさゞゐ　善光寺 巴翁

下駄の緒の相訪ひやよるの雪　同 回山

八百の虚言吹はらへ神迎え　氷蟲
糠星を簸出ひた宵の寒さ哉　ミノ高洲 鳥道
三ヶの庄相違あらずや歸り花　氷支
開かずば扇であふげ寒牡丹　此山
十月をまき込む雲の寒さかな　善光寺 暮三
大雪に日も延引や五つ過　イガ上野 防風
飛さまに鳥のさそふて落葉哉　イガ女 松風
透間からちらと見せてや闇の雪　ミノ大針 葉三
大鳥の足取はやし年の浪　尾劦一ノ宮 榮子
耳たぶは薄し夕日の雪佛　初波
凩は山伏の尻まくりけり　イセ押淵 蛙井
ふところに腕を連理の寒さ哉　除酉
池波に木目つけてや夕千鳥　春翠
山茶花は葉に世中をみせにけり　ナゴヤ 流枕
餅つきに佛そろえや神揃え　魚日
煤掃に陳皮の袋かぶりけり　イセ道方 唯子
掛乞や世を宇治山の物がたり　イセ睦柄 露竹
草の葉もいたゞき習へ今朝の雪　沙蟹

雨だれの袈裟に切らるゝ紙衣哉　侲予
おもしろき夢や則年忘れ　柳巴
衣配り妹君へは子もち筋　嶋舟
井戸掘も常は番衣の着込哉　十竹
天然の子共あつめや雪布袋　之楓
過去牒につくや十夜の茶大根　燕説
麥蒔や餓鬼も人數の影法師　イセ小俣 加鶯
鍬からや笠着て二人大根引　同 子元
飛込て釋迦の袂やぬくめ鳥　心圃
業平のもゝだち寒し竹の雪　松波
生垣の雪にするどし冬椿　ナゴヤ 箇口
柿澁の紅葉しにけりあら紙子　玉丈
凩に涌き嵐に涌くや鶺鴒　旭山
公達の雪に素足や水仙花　遊竹
水鳥や絕て久しき平家方　イセ雲津 笑々翁
春迄は行儀崩すな梅の花　尾劦知多 可立
行燈の側へいざるや置火燵　犬山 隨岐
物枯れて隣は近し冬がまへ　木曾ナツ井 歪鶴

幸便に麥を見て來る岡見哉　イセ一ノ瀬　浮翠
退屈のあまりや少し冬の梅　弓丁
高倉の宮に謀叛や冬籠り　曉井
納豆の添寐もおかし道心者　イセ一ノ瀬　荻川
寸白の序に火燵明にけり　同　有之
入舟の浪にまかせて生海鼠かな　固有
大儀さよあたる十月の水仙花　三和
あかゞりの膏藥はこべみどり丸　調千
出る日に湯氣の立らん冬牡丹　杉月
雪の日のたき火覗くや鶺鴒　三父
降物に鳴らせてあそぶ紙子哉　龜洞
白雲の辛味しぼるや雪霙　ナゴヤ　狐白
宵鳴を致して見ばや玉子酒　古甃
行君に余情付てや散紅葉　熱田　登虹
雪霜の楔ゆるむやみぞれ酒　ナゴヤ　扇雀
水鳥の業なうき世や風次第　女　風式
乾鮭や此店先に八九年　風鳥
小細工の手ははなれたり笹の雪　風野

太刀取の眼くらむや水仙花　兀山
長久手に追つまくつゝ時雨かな　拾翠
あふのひて何を神樂の鈴の音　羽重
湯あがりに笑へ白齒の水仙花　涓流
戒存も榾火に寄るや腹鼓　莞爾
松一木我を忍ぶがくや雪の山　氷下
摺針の海より雪の門田かな　佐屋　家雞
唐網の落つかぬ日や初時雨　雲窓
初雪の肌目うつくしや妹背山　素人
茶の花は朝から暮の氣色あり　楚山
内々の覺悟をさくや冬の梅　素行
雪車で見る雪や下界の人の聲　右柳
帶にさすから鮭寒し懷手　慮推
顏みせや手燭に苔む梅の華　ミノ狐穴　蛙聲
くつろがぬ物や舅の置火燵　瓢工
山茶花や寒ひ性根を入直し　ナゴヤ　可考
餅ばなは親の慈悲から咲にけり　櫻川
肩繼は昔の袈裟か新帋衣　林子

夢幾ッ胸に組手のぬくめ鳥　汪沖
正法に奇特もありやかへり花　和泉
山伏の不思議噺も榾火かな　椿又
顔にうつ波をはらふや年忘　千之
何神の蹴たつる水かはつ時雨　呑水
息かけて見たら咲うぞ冬の梅　凍左
雲の上に青み配るや小松賣　梅若
ふり袖のつゞやはたちや衣配り　摘葉
相談の小田原陣やとしの暮　白雲
茶のはなや始末隱居の朝詠め　露竹
分別の氷る間はなし年の暮　滴志
影法師の勝手へ見舞ふ小春かな　ナゴヤ 梅夕
寒の梅にほへや春へ一またぎ　信刕池田 柳邑
置かぬ棚さがしありくや鷦鷯　一秀
たつ鳥の跡は荒さじ今朝の雪　卷耳
碓(ウス)をふむ隙や六祖の落葉掻　流枕
借りられて一夜ゝゝや水仙花　吐龍
水仙の花や二八の薄化粧　木巵

あたゝかな慈悲は上から玄猪哉　万山
あぶら香に狐の寄て十夜かな　周防遠石 浮卜
雲水の一寸やりやはつ時雨　露瓢
荒行や數珠さら〳〵と一しぐれ　津鶴 来了
神の留守さばすまじとや歸華　ミノ狐穴 湖南
倩は年猿の尾ほどに成にけり　江戸 闘柳
銀屏に一筆書て寒さかな　奥刕木庄 南石
水仙や浦の笘屋の朝げしき　ナゴヤ 閣頭
卷返す暦の末にみそさゞゐ　長門下ノ関 立枝
影法師の踏つふまれつ冬の月　池天
冬の梅こそぐられてや苦笑ひ　ナゴヤ 直水
雪の日や竹に魚釣る氣色あり　宵月、
行年の神は荒ゆく嵐かな　竹枝
手も足も蒲團かぶらば生海鼠哉　風姿
寒熱の往來を降る時雨かな　東芳
横雲によみがへりてやぬくめ鳥　三林
茶の花は我家樂に咲にけり　滴志母
寒梅や人のこゝろのたまり水　一志

達磨忌や酢あえの喰に九年母　ナゴヤ 捨石
風と成浪となりてや鳴く衛　扇招
瓢箪で錢おさゆるや鉢扣き　飛刕高山 辻木
御火焼や絹の帯して馴子舞　作刕津山 遅柳
山櫻見ちらす恩や山の講　ナゴヤ 龜秋
思ひあらば明家に年も越ぬべし　烏道
煠はきや箱から箱へ宮移し　熱田 階向
一巽見きくやうは氣の藥喰　梅夙
肱張て風に一重や冬の梅　且栖
惡念を灰に埋込む火桶かな　林月
寒聲や油しめ木の諸拍子　木曾奈良井 壺珀
是非ともといはれて咲や水仙花　鷗波
口明て冬やおどろく栗の毬　斗曲
山寺も師走は來たり玉だすき　最上子

北國曲集二終

北國曲集　卷之三

越前曲

縣召えんばの口とて萋に襟　「晴ガマシキト云俗語也」　作者不知

首尾　敦賀　居士

洗ひたてゝ窓のむかふや若葉山
新茶を旅の雨のなぐさみ　東恕
噓よと後。から物羽織らせて　燕説
疎遠〳〵の人の挨拶　既白
浮雲にたづね出したる三日の月　拂袖
うけてはこぼす芋の葉の露　巴格
からくりの繩に案山子のうなづきて　青山
八方に目を配る落武者　嘉席
鎌研でしまへば余所は寐鎮り　可抑
暑き蚊帳に風の戀しき　北山
此庭が寂びたら華の夕氣色　東吾
春早ゝにはやる目藥　東宇

餘興

埋火や美濃と近江の膝がしら　東恕
山伏の吹や眞瓜を丸ながら　仝
一軍過る粽や大わらは　嘉席
名月や御兎と坐して野雪隠　仝
埋火に故人も餅とよまれたり　既白
やまぶしのぶうの音も出ぬ時雨哉　仝
打寄て唐と日本の火燵かな　拂袖
番(マヽ)枡ある時は花降らせけり　仝
水鳥や甥も從兄弟も無事な顔　東吾
思ひ切て火燵を出るや歸華　巴格
梅が香の里へくだるや川づたひ　梨月
傘鉾のさげ物赤し鳳仙花　東宇
武藏野をゆるがす風の薄かな　琶舟
しら波や陸にはまねく薄の穗　北山
白露の手からこぼるゝ楓かな　青山
冬瓜の寐所かえて八百屋哉　筆甫

表　府中

山風も日を付かゆる幟かな　燕説
馬の沓うつ時の卯の花　梅摘
五幾(畿)内は詞のちがふ事もなし　居士
吹つふかれつ風呂のそよ〳〵　榮木
三角の窓面白き三日の月　嵐枝
撿見のあとも天氣重疊　露凝
相聟の御座れ〳〵も菌狩　皈的
灸してからよほどまめ鳥　柳鼓

餘興

咲迄は梅に慮外や雪のはな　嵐枝
澁柹のかみのかたさや九月盡　仝
宵毎の蚊やりや里の淺間山　榮木
わか葉から二度もてなすや薄栬　梅摘
病みぬきて若き男や糸すゝき　露凝
風の傳手ほしがる垣の薄かな　皈的

百韻首尾　三國

藻の花の尻のすはりや水の縁　居士
岸のしるべに夏の三日月　播東

盃を笠に着る迄興ありて　環露
抱て出る子に銀とらせけり　燕説
古繼の拾ふた中にから錦　十步
薄雲に日のしづむあやどり　閑栖
まぎれても今に睡さは其時刻　慰角
夜やり〳〵にのばす振舞　祖菊
戌亥から合点のゆかぬ野鉄砲　一統
竹もなびきて風のこはそも　朴水
出家さへ負腹立る盤のうへ　環里
黒い連子に月の影法師　錦流
鈴虫の來てめづらしき市の中　笋露
籠に小柴を敷て松茸　扶浪
優婆塞の御手はふるはぬ筆の花　湖月
雛の事をくれ〳〵の世話　露谿

歌仙表　昨囊

盃をまはす水ありかきつばた
水雞追出す笹の夕月　貴和
暖簾を目當に馬も悦びて　伯兎

顏見ちがゆる人の剃たて　燕説
口切のけふはもつとも衣がえ　居士
寒ひ中にも凌ぐ山茶花　北水

餘興

猫の戀鰯にかはる時もあり　環露
並び寐も齒ぎり物うき夜寒哉　仝
長田から寺の牡丹の訴人かな　播東
わか餅や此上ながらはつ櫻　仝
机から眠り落たる椿かな　貴和
痩る程戀する猫や夜の雨　仝
飯蛸や鍋の中なる唐錦　十步
穗薄に一筋道や隱れ里　仝
舌ばやに鳴て寒さやみそさゞる　江西
湖にこぼしてありく時雨かな　仝
ぬり笠の袋出る日や桃の花　慰角
雪吹せよ顏に名殘の遲櫻　仝
覗かれて終には枯る接木かな　閑栖
蒲の穗や明て狐のとぼしさし　扶浪

紙屑の吹るゝ谷やさくら狩　筝露
豆の花おしわる時やこがね虫　北水
十六夜をながめへらすや朝烏　一簀
鶯やじつと春まつ藪の奥　昨嚢
寒垢離やうき世の塵の流し時　仝
入相の山をかさねて紅葉かな　伯兎
降物に隙なき山の木の葉哉　仝
鳴かれてや明星曇る郭公　府中　梅摘
時鳥闇の行衛や石灯籠　同　榮木
破れて居る岩のしまりや蔦かづら　同　歸的

加賀曲

加賀笠にあをたかされな女市　「人ヲ侮リ嬲ルノ變語也　作者不知

表　山中居士

五月雨の爰ぞ咄しの無盡藏
　茶袋ほどの蚊屋に一ぱい　桃妖
船の追ひ待てるる間に食にえて　馬泉
　まだらに兀た山の三方　芦枝
弓張にそばえて朝のわたり鳥　燕説
　袷出たちの寒ひ秋かぜ　林久
いつ迚も豆腐にけふは菊の花　桃戎
　丸太にさばす京の造作　柳季

餘興

切麥のまちかね山やほとゝぎす　桃妖
かけあふた秤のうへや二つ星　仝
人も巣に首出して居る紙帳哉　馬泉
水鳥の聲や寐耳に水の音　仝
耳取て鼻かむ茶摘ばなし哉　愚言
むかひ火の船路や磯の魂祭　三枝
稲妻の夢見てあそぶ螢かな　林久
さかづきの淵に瀬ぶみや菊の花　桃戎
干棹の雫や秋の行どまり　柳季
名聞をはさみたてゝや白丁花　八九
神妙に源氏屋鋪の花すゝき　仝
いなづまと忍びくらべんふたつ星　芦枝

歌仙一折　小松

小松とは風ににほひの便より　居士
ほたるの歩み雲のかけ橋　宇中
巻樽に綸子がそへば月照て　燕説
十人扶持の角力見て置け　薄紙
笹の葉の露振ほどく臺どころ　左上
鳥わたる日の天氣よろこぶ　朴人
ながむれば波おもしろき嶋がまへ　乃露
あつたら駕籠を乗らで釣らする　示弓
祈らずに利生の知るゝ神はなし　乙甫
請酒したが今は瓦屋　一洞
老松に月の入端もよかりけり　造本
雨に一先ほそるひぐらし　龜房
若菜の共物ごしを秋の風　草蛙
ためして見たる人の中言　是宙
空はそれ元より青い空なれば　之仲
喰はるゝ時を魚の成佛　夕市
金剛の身は華咲かず散もせず　塵生
吹かれてあそぶ竹の春風　素吟

哥仙一折

青嵐生ずる所神社あり　居士
目をさましたる合歡の晝中　一イ
氣まかせに心まかせに物喰て　玉枝
器に水の時のまじはり　八九
見臺を取てのければ月廣し　何嘯
諸事實のらする風の勘辨　佳氏
褌をしめてぬからぬ秋の暮　山視
つれだつ馬に咄して行　買孝
梟におなじたぐひの鳥の聲　和什
戌亥でしれた降らぬ雲とは　之憂
澁紙をふむに反古の始末して　之直
たばひ過した鮓桶の蠅　柳支
水無月に匂はぬ風はなかりけり　知夕
ちよつちよと寐度か御座れ山寺　染藤
有明の比おもしろき野邊の色　寸照
歩行でしづかに虫の聲〱　可至
八朔の餅に言葉の華も咲　玉甫

翠簾のおもりの初嵐吹　不晉

餘興

涼しさや橋をはるかに小人嶋　宇中
三日月も添て出るや雲の峯　仝
取合ぬうちは眼にすまふかな　左上
傘にたゝんでもどる螢かな　仝
眞晝もねぶたき顔の柳哉　塵生
道すがら馬もかたるや夕すゞみ　仝
涼しさのなぐれて今朝の一葉かな　紫貝
初雪の綿で咲けり水仙華　仝
梅が香のあかるを走る月夜かな　造本
梯の足代よはし雲のみね　仝
精進の涼しや籠の放ち鳥　之中
海山に野分碎くや暮の雨　仝
夏櫨は私山のにしきかな　乃露
しら張の切籠の影や尉と姥　仝
芍藥や牡丹の下にたゝん事　草蛙
つゝ立て湖せはし雲の峯　仝
消る事忘れて居るか春の雪　和什
灌佛を拜む手もあり若楓　仝
わか竹や雀隱るゝ葉はいまだ　素吟
雨風の支度先よし鷄頭花　仝
梢より忘れもせずに一葉かな　一洞
松高く波こぼれけり藤の花　仝
斧の柄の夢や老木の梅の花　朴人
篠杭をうつや其夜の魚の夢　仝
浮草の花や世上の人のうへ　乙甫
大風にかだみ顔なる瓢かな　仝
蝙蝠や日は今入て雲の紅　一イ
くどひたら落もしさうな牡丹哉　可室
好事門を出ぬ柑子のにほひかな　是宙
涼しさの力くらべや松に杉　佳氏
五月雨の名殘や雲に星二ッ　何嘯
ゆく水に洗ふて染る螢かな　賈孝
涼しさや小石ながるゝ水の月　元直
雨いまだ苗のうへ行小船かな　知夕

裁物にせばき一間や冬籠　夕市
木兎の重たひ尻もわたりけり　山視
湯豆腐や雪の骨散る夜の氣色　不晋

表　元吉居士

傳ひ來てねまる葭原雀かな
　肥たが貴からでなでしこ　半睡
朝嵐鍬つかふ手もなぐさみに　左上
　箆馬蜱知た顏なり　若水
月薄し白壁町の折曲り　燕說
　暑さは殘る風はふけども　山視

餘興

呼び事も聞かではかなや猫の戀　半睡
延過て馬子に引かるゝ大根哉　仝
世の願ひ糸の限りや鳳巾　若水
白壁の霜やこぼれて蔦の網　仝
うち綿の雲も出る日や衣更　桃風
笹苞に翠の花咲く山家かな　林下
水底の雲にとゞくや藤の花　何也
竹の子の馳走や土の腹こもり　普白

百韻一折　金澤　燕說

竹を出て松にのぼるや夏の月
　螢をつかむとてころぶ袖　左林
裏門の明たを不審立られて　湖夕
　空に盞した朝曇り也　布荃
大河の渡りもつかず水の音　居士
　短い裾の借り着して居る　東孜
印籠の內も見え透く安蒔繪　維周
　散るあてこともなしの山茶花　三徑
近ひ比ふせたか石にさびが付　繁州
　肩へながるゝ鞠の奇麗さ　九李
刀もち探幽が畫にいきうつし　生可
　御祓の川のあら靜なる　桃里
赤い蔦黑い烏と照つゞき　野洞
　洗足もなき丹波路の宿　市中
きれ筆にさりとは耻を柿暖簾　素石
　抑つめて來る空の大雪　侶鶴

柊に目の用心をなく雀　吳云
　味噌こぼすかと庭の壁土　會及
回國の上使の泊り急になり　宜副
　ことしの鰤に齒はたゝぬぞや　曉川
橋からは月をひだりに右は華　蘇守
　一景たちてかへる雁がね　知角

歌僊首尾

砂山の夏をしきるや秋の風　居士
　薄も孕む弓張の影　秋鼓
蜩に鞠のかゝりをあらためて　序章
　板は手重し靑竹の椽　右通
晴かねて又ちよつと降り〳〵　元相
　烏もかへる峯のしら雲　一之
生柴を馬の裾湯に煙らせて　除兮
　裸喧嘩のあぶなかりけり　由之
五皿はどこへくゞつたところてん　三通
　瀧の社のあたらしき屋ね　一莊
私に制札たてゝ花ざかり　野角
　蒔て殘りの種を法樂　雨洗

表

雲の峯秋たつ岡と成にけり　居士
　掃たけぢ目も蕣の庭　一箭
茶釜のたぎりに水さして　紫仙
　丸い心のおのづから月　史梅
山道はたがひの聲を杖に突　獅吹
　洩つたか樽に酒は半分　遲櫻
一しきりはやる假屋の心太　太義
　公義普請の他所の入込　紀因

表

表裏なき風のあそびやことし竹　居士
　名ある淸水の爰に流るゝ　素然
二里三里かゝり〳〵の旅をして　燕說
　ひだるい時は味噌に蓼の穗　市虎
躍りたや夜半の月の此照に　觀水
　さらりざはりと荻萩の風　山隣

餘興

草臥もやさし雛の給仕人　蘇守
煩惱の衾悟りのふすまかな　仝
川挽の材木積や桃のはな　野角
ひかり出て清し螢の木賊原　仝
川水に十万石の柳かな　布荃
（巳）巳の時の鐘や燃たつ凌霄花　仝
おそろしき虚言や兀行雲の峰　紀因
草の穗にぬけ出る聲か野の鶉　仝
岩水のたまりとぼしや飛螢　女 紫仙
朝顔や宵の化粧ひのはづかしき　仝
日の界の及ぶ塵なし牡丹畑　湖夕
うつゝなや照ちらされてけしの花　仝
行水の裸に散るやもゝの花　左林
六月の口を明てやこほり餅　仝
長〱とまづことぶきや藤のはな　史梅
いが栗や破れても後は鍋の中　仝
羽根のある物はみな出て霞かな　生可
鮎釣るや夕日の山へ影法師　仝

聲に羽を合せて雉の日和哉　除兮
雲水に寐るか佐渡より歸雁　史石
稻妻の矢先にころぶ案山子哉　獅吹
野の仕事山の仕事も月夜かな　三徑
野を丸う鳴まはしたる雲雀かな　桃里
出かはりや鳥の鳴けばもらひ泣　野洞
寄せて來る波か嵐の芦の花　三通
松植て行か繩手の霧に凧　九李
なじみよき風や秋たつ花すゝき　女 しか
ふんばつて草花守るか鷄頭花　雨燒
くれなゐは日に奪はれて落葉哉　迂行
垣越して夏を咲たる常山木かな　笆童
池の雪鴨あそべ迚明てあり　女 ちよ
傘の骨ははなれて朧かな　十一歳 子云
雷を山でしきるや夕すゞみ　土黑
めづらしき雁や鳥も水鏡　五菱
此降に照れとは鳴かで蛙かな　而來
行螢ありくほたるや川むかひ　和水

置露の水上仰ぐ清水かな　市虎
何の葉か動く障子の朧月　桃司
あだ波は跡にたてとや歸る鴈　山隣
鳴銜なかぬ千鳥も猶寒し　仝

越中曲

八講の十徳涼しおんのさま「老人ヲ崇ルノ郷談也　作者不知

百韻首尾　高岡　居士

星を待宿や蘭草履ちらし砂
一葉二葉のゆかし風呂敷　東白
冷たはと西瓜に人を留かけて　五趙
かじかの聲もはや閏年　欽之
はら〱のしよふとて黒き月の雲　李青
扉はあれど明捨の門　爲町
さかやきの時は人手を松の風　夜航
碁盤はそこに石が拂底　碁由
うつ〱と空も曇りて精進日　兎格
芥子ちるあとの石竹はまだ　燕説
打水に落つく土の其もやう　桃卮
もはや普請も振舞の段　丹岫
つね〲の心は淸し雪の月　吾白
添寐忘れぬ主の身がはり　蘭水
再一首衣桁のきぬの袖の花　河菱
糸遊のうづまひて唐紙　温故

餘興

星合のあはれや水の出ばなより　東白
したたる暑さや砂の野撫子　仝
たましゐを鳥の見ぬく案山子哉　河菱
釣鐘を左右にいだくや赤蜻蛉　爲町
朝草に場をとられてや秋の蝶　仝
卯のはなに頭痛くらべや薄曇　欽之
蜻蛉や糸くり返し〱　仝
丑みつやかならず曇る天の川　五趙
とんぼうの尻でけがすや手水鉢　仝
追〱に夜馳の舟や星むかえ　丹岫
臍の緒の莚も枯ゆく狐かな　兎格
十分の根ざしや二日三日の月　仝

籠の目をぬけて落ふぞ初茄子　夜航
郭公雲に汁氣のかゝりけり　桃后
一双に中ばかりは華野かな　基由

歌仙首尾　有磯　燕説

繪の具散る貝や有磯の秋氣色
月もさもあれ里にまれ人　芳山
小鷹狩階子を假の架にして　居士
一吹荒た風も沙汰なし　野刀
畠から田中へ咄す聲高に　路青
暑さの挨のつゞく往來　未因
米つけた馬に鳥の乘ながら　巴流
わる口いへば娘隱るゝ　素令
待宵の人をまつやら袖の風　杜亮
行燈の火の細う更ゆく　佳朴
月華もあるかなきかの嵯峨の奥　海人
苞の蕨はどこの音づれ　八十里

餘興

狙夜に雪消殘るわか菜哉　海人

葉櫻に輪廻して居る胡蝶かな　全
水漉しにかゝる嵐の柳かな　野刀
赤欲の手足ひろげつ鳳巾　路青
木も折れず竹も曲らず五月雨　巴流
朝寐して草に露なし蝸牛　杜亮
海山を目がねの中やけふの月　素令
窓ひとつ有て船呼ぶ茂り哉　未因
行水の染汁長し岩つゝじ　八十里
水影の我をねたむや藤の花　佳木

百韻一折　今石動　燕説

馴安き庭や草花に鳥の聲
山を小楯に青天の月　龜從
秋の水なぐさみ船に棹さして　可水
酒の轉じによい諷が出る　釣舟
ふすま戸の間から覗く風の音　鷺洲
夜中に松も杉も大雪　子川
こちらより呼べば荅ふる切通し　安之
龜相な顔で利發也けり　蛙曰

澁紙のなさに手嶋を市の屋ね　正木
烏も鳥の眞似をして啼　幾全
茶をのめと招く晝間は命なる　霞柳
何やらのせて片木に足打　秦昌
榊葉も樫もつや〳〵朝の月　吏酉
國の稻田にかゝる水上　可省
勘兵衛が磁石振るより秋涼し　居士
星は北へと足ばやに入る　右橋
つけ出しの馬の小付に氣を配り　寸長
惡ひてはなし老のくり言　香鶴
降れば飽く降らねばほしき夏の雨　眉泉
下張までに屏風二双　周睡
縫針のきいて娘の袖の華　方堅
いまだ高音はあげぬ鶯　鵜亭

餘興

石磨の諷や何國も合歡の花　麁從
松の木に飽かれて蔦の紅葉哉　麁從
行雲の碎けてちるや雉の聲　蛙曰

手拍子にひらく桔梗の莟かな　仝
食時に祠かたどる田刈かな　秦昌
茸狩や城の女中は放し鳥　雨荻
はづかしと穗に出かゝるや糸薄　子川
ながれあふてつれだつ浪や菱の花　眉泉
狹筵に脊中合せの礎かな　香鶴
鳴〳〵て身は蟬と成にけり　右橋
長生をふとりてみする冬瓜哉　山志
寒月の梢を裂くや猿の聲　幾全
雪丸け布袋の傍開かれたり　哥休
夜よりも晝猶すごき枯野かな　鷺洲
秋もはや嵐になじむ呑衣かな　六旨
老松も取みだしてや凌霄花　寸長
ひぐらしの覺束なしや丹波越　可省
居通しの鵙の壽命や稻筵　吏酉
茸さしの屋ねや京でも不破の月　周睡
名月の照にたはむや荻薄　正木
ひぐらしに常念佛の鉦細し　釣舟

まだ風の掃足らひでや稻むしろ　方堅
八重霧の中おそろしや械の音　安之
猿すべり咲やはじめて籠枕　可水
影燈籠晝は消つゝ鵙のこゑ　曾林
城郭のうしろにたつや雲の峰　風吹
まだ殘る暑さや菱の枯木原　柳吹
秋たつや裏の隱居の敷團扇　爲尤

歌仙一折

井波　居士

たちばなの後に物あり藤ばかま
袂に影のたまる初月　桃化子
鴈金を千疊敷によびかけて　路健
落葉をちらすかと小さかづき　吏全
新艘の天氣よろこぶ川をろし　嵐青
氷室ぞ來たるけふの朔日　瓢寞
鬘鬚を剃れば若竹ことし竹　荻人
空の直りにつれて寸白　鮮和
唐網に三べん濃を引渡し　呂風
堺のしれぬ裏も中よし　嵐詞
誓文もきかず不斷の律義さよ　壺江
手織の布の太き鐘の緒　秀之
ぼた餅の木幡あたりは稻の出來　乙嵜
月まつころの窓の淨瑠璃　桔外
好〱に鳴て鈴虫くつわむし　巴箭
うつより浪の戻るしづかさ　菊輅
森の華名高い宮のつまむ程　林紅
眠りさませと雉の一聲　燕說

餘興

どこへ行春ぞ平等にかけはなし　桃化子
蚊屋に當る風の靑みや伊勢の海　仝
手の物は落さぬ風の柘榴哉　路健
四五丈の雪や下ゆく水の音　仝
秋もまだ寐卷の外に足二本　嵐青
掃出す反古と飛やみそさゞゐ　乙嵜
木のうらは動きたがれど殘暑かな　荻人
はつ蚊屋に網うつ眞似や小盃　呂風
葉隱れて咲山藤のあはれなり　嵐詞

葭芦の白髪と年は成にけり　巴箭

木がくれに夕日の殘る熟柹かな　仲由

昔なら二人こもらん庵の長　盞風

ぬれて來て壁に身を干す螢哉　吏全

煩惱をさらしに懸る糸瓜かな　林紅

表八句　富山　燕説

船橋や鎖藤綱蔦かづら

　鴈も下り羽をつかふ芦の穂　二川

有明に日和日利の窓ありて　居士

　雷盆の鳴り出せば十方　一空

代官のかはりてゆるむ年の風　闇州

　野飼に肥てはづむ牛馬　仙遊

塩物の俵に是はむら烏　白推

　引ゆく水に泥の堀川　卜道

餘興

橋かけん扇ならべてあまの河　白推

冬枯を黑めに來たか夕鴉　仝

のぞかれて見たひと咲や百合の花　二川

拜まする臍や布袋の生身魂　仝

いざ笈の小鍋出さばや山櫻　闇州

夕がほや闘のこまんが出立榮　仝

粥太に見入られてや蟬の聲　蘭醉

我が妻と思へばおかし鉢たゝき　仝

まん勝の世界へ出たる踊かな　卜道

寐て御座る佛も起て十夜哉　仝

我宿の火影ちからや網代守　野調

虫干に出るや其地の虫のから　隨風

稲妻や藁燒く家の窓あかる　一空

昔見し振分髪や[illegible]すゝき　蘭舟

暮杭の相手櫻もさきにけり　烏焉

義理あひの屆けばかりや歸華　序要

雁首の錆ぬ花咲く桔梗かな　桂夕

赤馬は枯て毛色の枯野かな　一庸

白雲に紅粉をふきたる椿かな　一融

目のうへの塵と拂ふや舞雲雀　渭竹

見らるゝもうるさ顏也山ざくら　仙遊

寒聲やうちかけて來る波の音　有節

水鳥のつゝきくだくや浪の月　隨柳

歌仙一折　魚津　居士

末座から諫言申す野菊かな

青貝壁に秋しらぬ家　倚彥

名月の池水を前に照出して　雨村

手飼のごとく鴻に白鷺　柳雨

草蓑を風にふかるゝ詩の形　貞子

木の間をくゞる山越の鐘　丈風

氣づかひの犬さへ鳴かぬ年の暮　燕說

から鮭賣の辛い目もせず　外故

二里四方柿がちなる町作り　蟻城

影法師涼し橋の欄干　巴湫

能い聲の念佛にほれておかしがり　從意

文に書るゝ鹿のたはぶれ　市穗

八瀬ながら寢ぬ物ありけふの月　秋幽

軒近冷て來たる川音　隨風

雨泄に如來の顏の黑雫　朋云

ひとり男のしかもぬる作　野泉

竹齋が笠をしたふて花の山　方救

下る蝶ゝのぼる蝶〱　玄扇

餘興

狼の人とる沙汰や遲ざくら　倚彥

名月の出かけの酒に打れけり　仝

陽炎をあやつる砂の柳哉　貞子

こがらしや化をあらはす晝狐　仝

鶯やしめらぬ空の若みどり　雨村

雲を踏浪をふみゆく田植かな　丈風

廣澤に一疋鳴て蛙かな　從意

門たゝく音にほつきと一葉かな　外故

稻妻や寐覺に起る物狂ひ　柳雨

宵闇やそなへ崩れてなく蛙　野泉

穗茅花に野馬ちいさく見えにけり　市穗

鯆に下腹摺るなほとゝぎす　巴湫

一疊吹てやらばや初ざくら　蟻城

種瓠よみ人しらず成にけり　朋云

歌仙一折　生地　燕説

九重にない都あり草の華　燕説
撰られに出る虫のさま／＼　枝中
御湯殿も手早う濟ば月照て　逸松
まづ取あへず片木の蒸物　松波
替馬の荷を付かゆる晝の鐘　管五
たちまちに引く夕立の水　柳翠
權現をいさめる例の鈴太鼓　扇之
子は袴着て夫ゝの代相　二水
はつ雁は鳴けど沙汰なき戻リ船　誘之
二十四五夜の月の出兼る　芳水
新蕎麥の勝手もさびて茶漬比　潜之
いとまとらせた娘の戀しき　波文
たゝみ込む小袖にいつの匂ひやら　藤闕
明日の御命講が年の出納め　龜邑
越路にもまけまひ雪の尺あまり　蒼夫
憎まれ鳥七つからなく　有桂
鼻も鍛ず華の富限の親仁殿　居士
內造作はしまふ糸ゆう　和舟

餘興

いきほひを竹にもたせて涼み哉　枝中
亭坊の留守やこたえて蓮　扇之
さま／＼の帛借りけり星祭　波文
七夕に油斷の顏の星もあり　藤闕
稻妻の引かゝりてや蔦かづら　柳翠
一霜に秋はしづみて松高し　蒼夫
傘も出て廣がるや土用干　管五
芦の穗やなぐさみ船の往戻り　松波
廣き野や一化はげて霧の海　潜之
狐火のもやう付てや木瓜の花　立花
柴付て冬は來にけり風の音　逸松
たましゐの雲から落る雲雀哉　有桂

百韻首尾　泊町　居士

初鴈の聲や暑さの行どまり
浦風わたる稻のさゞ波　松宇
御入部のかたじけなさに月照て　斗南

おの〳〵膝に雨手置く也　雨夕
朔日を見しらかしたる此寒さ　广千
雁おろせば荒家もなし　里童
汐汲もあそぶ時には絹の帶　芦情
ほしがる折は降らで長雨　許丁
まだ暮ぬ日に三德の火をとぼし　如睛
最ない人に何の人参　燕說
むし〳〵と兩國橋に汗の息　會六
馬に步行荷に瓜の賣買　五株
世の中は九分〳〵となく烏　花郎
厚ふ葺れた菴のふき替　凉夫
來まひ人迄もわせたよ華の時　巴人
日和も機嫌よふて蝶ゝ　和泉

餘興

鶯の關や四五里の野の靑み　松宇
秋の浪岩戸にふせげ親しらず　仝
海川に暑さ〳〵ますや越の秋　堺町流志
鳥わたる御代也けふの親しらず　仝

笠摺て鷹や鳴ゆく峠茶屋　共栢
秋の日の照や夢にも親しらず　仝
名月を洗ひながすや瀧の音　雨夕
名聞を捨てみせたる一葉かな　許丁
たゝかふや岸の尾花と波の音　里童
几帳から解ひてあぶなき粽哉　巴人
聞耳のわたりに船やほとゝぎす　芦情
稻妻を中に碎くやいばら垣　如睛
敷居越す日あしや例の諫鼓鳥　會六
卯の花や夜明烏の起まどひ　松外
研たてゝ空の靑さや鳴雲雀　五株
名月や人のこゝろの別世界　湖量
梅が香や照に趣く朝氣しき　義調
水仙や菊と梅との中直し　斗南
蕣は木魚の音に盛かな　广千
身がふたつほしやと飛や花に鳥　广成
茸狩や土に穢るゝ白綸子　里天
卯の花の散や亭主の朝仕事　周路

雲に乘てやかへる雁　楚且
野も山も錦破れて冬近し　胃水
角のなき人の這出る青田かな　下條至朋
船からも手取や雪の三上山　素林
いが栗の鍛碎くや初あらし　涼夫
薄墨の霞に古し鴈の聲　洗耳
瓢簞もしのび返しを忍びけり　和仙
乘懸に折てかざりは野菊哉　巴吟
鳶の來て虱こぼすや家ざくら　雨江
ぬけがらに抱付く蟬の初音哉　佐文

能登曲

秋を待つ浦やおや〱（肝ツブスノ異語也）鯖の山　作者不知

哥仙表　所口　居士

渡り來て鳥も息繼ぐ七尾哉
日和しまらぬ初汐の比　和荊
暮の月繩うつ聲をかけ合て　志路
盛てならべる太唐の飯　夏嘯
兎角する内に師走ものあたり　海人
肝つぶすほど梅のはや咲　燕說

餘興

やつれたる枝にしほあり梅の花　和荊
朝な〱秋海棠の爪はづれ　志路
四十雀灸せよ迚わたりけり　夏嘯
青柳の奥に米舂く小家かな　海人

北國曲集三終

北國曲集　卷之四

越後曲

かたびらの縮み上手や御料人（内室・嫁ナドノ尊稱也）　作者不知

歌仙首尾　糸魚川

つかの間の角あらそひや亂れ鹿　燕說
　月照り分る雨國の山　甫桂
旅衣桑に相違と冷て來て　晌竿
　明日入る味噌か糊か摺鉢　兎陽
汁氣なき空にいさゝか散らし雲　坡十
　下手の墨繪の松にしら鷺　卜爪
折節は泊りもとめる在郷茶屋　居士
　御たづねもの〻觸狀が來る　呂中
靑虫の飛で火に入る戀も有　菓千
　其伽羅燒けば薰る佛　于敲
文字摺の石になぐさむ華の陰　文單
　人なとがめそ雉のけん〱　里丁

餘興

我が老をそゝなかすらん餝り雛　晌竿
智惠はみな根に埋めてや菊作　仝
豊顏や蒸殘されて砂の上　甫桂
湯から出て痒き所を柳かな　于敲
靑空に誰が爪あとの三日の月　卜爪
雲に腰かけて一照けふの月　里丁
つみ綿や暑さ涌出る雲の峰　呂中
から尻に乘る人起せ雉のこゑ　兎陽
凩の骨のつよさや冬の山　坡十
丁銀に錆の付たるなまこかな　文單
目をさませさませと顔に時雨哉　菓千
隙さうにしぐれて行や合羽持　史井

表八句　今町

稻妻の要はしるや峯の松　居士
　醉を吹する立まちの月　過角
腸にしむほど虫の鈴振て　陸夜
　よめぬ書物に誰ぞひらがな　皷雪

一晴ははれても雨はぬけもせず　官仙
杉からのつと城のしら壁　盤泉
川魚の白山もたつて海も又　燕説
事に馴たるこちの薄鬢　碩人

餘興

名月や手際な空に乗移り　過角
千鳥鳴額や浪のよずる音　仝
鳴なをし／＼ても蛙かな　陸夜
味ひを梨に残すや秋の霜　仝
下崩やたが踏崩す下駄の跡　官仙
神の留守守るもすごし鴻の嘴　碩人

百韻首尾

高田　居士

山雀の海に飽かれて山戀し
板屋萱屋の間の栗柿　巻耳
羽織めす公家の御出に月照て　兎行
やらいそがしの手は二本也　廿谷
五七日雨をほしがる早苗時　諷乙
鉄砲きかぬ鷺のいたづら　蘭風

高札にひかえの岡の躑躅と　イ舟
けうとき雲の乾から出る　燕説
迯尻の早き平家の鼻たらし　芹汀
落した物に何の後悔　岐雪
世中はながれ行水はしり水　百歩
木の間に聲のあれは瀧口　青柳
田植蓑借りてしのぶの隠れ笠　翠兄
短夜の鐘のはや明るやら　巴流
燈火の華ちる風の吹をろし　春草
帳でくり出す船の段／＼　嵩也

餘興

涼しかれ人の國迄富士おろし　廿谷
雪女のせてもかへれ鴈の聲　仝
初瓜や蔕をかい敷に隣より　兎行
名月の入るやすなはち十万里　仝
いざ駕籠の我もさし出の磯清水　蘭風
一口に鳴たけもなき鶉かな　仝
青柳や雨は降ても降らひでも　梅翠

哥よみの傾城ひとり柳かな　風乙
鶯のはつ音を鑑や豆腐賣　仝
明日の夜もあるに更して礎哉　イ舟
うそのなひしるしの杉や初時雨　仝
青梨を腮でかぞゆる梢かな　青柳
辻賣の氷砂糖に丸雪かな　仝
飯板の音を心の水鶏かな　百歩
こがらしに年は寄けり干蕪　仝
雛鶴もいふや若菜の背揃　芹汀
足音に駒のいばゆる夜寒哉　仝
鶏もたゝき起して薺かな　竹詞
鐘の音のきれて行間や秋の雲　仝
青田さへあるに凉しや水車　相夭
茶わかして餅の實る木や今朝の雪　仝
川筋にこしらえ瀧や早苗時　蒲右
隱れ家にあたまの光る熟柹哉　仝
尼寺の齒はみな白し花木槿　千歌
行秋や臍所は日のてる村雲　仝

松風や梢の月ののびちゞみ　魯堂
室咲の梅や寒さの消どころ　如閑
そら焼の行衛や降て梅の花　巴流
思案して又鶯のはつ音哉　嵩也
世話の世をかぶり／＼の柳かな　岐雪

柏崎

青芝の奚も奈良なら四月堂　荃浣
納豆の聲のねばりや寒念佛　宇曲
蚊柱のむごうころぶや咳ばらひ　蟠室
かけ渡す佐渡と越後や青嵐　重英
蓮の花ちるよいつもの豆腐賣　郁翁
娘もつ隱者もありや山櫻　素澤
雲雀かな人間界を目八分　扇峯
鶴林に鳥なく也よるの雪　北有
雪の夜や噺もにほふ梅林寺　類月
揚ひばり芝を去事幾由旬　凉雅

出雲崎

麥の穗に鳴や雀の朝茶時　素十

細清水末は流の青田かな　鶴士
茶たばこはいかほどなりと家櫻　雛應
其中に男女山伏つく〲し　路貫
胡葱の匂ひつたなしさくら鯛　七星
染物のうは繪や落て朧月　泰常
初雪に付て痲氣も降にけり　魯丈
たゝかれた夢もおかしや納豆汁　都雪

三條

青麥に染るや今のしのぶ摺　如竹
鶏の片足やすむる寒さかな　一瓢
出たゝせて七人の子を華見かな　幸白

新瀉(潟)

涼風をいさしら波の魚は水　虎角
ながめやる雲に聲あり小夜衛　七里
蝸牛も戸口しめてや秋の雨　慈竹

佐渡

長旅や現世後生の道明寺　芝緣
吸物に青山枡や衣がえ　眞七
鴈ひとつをくれて鳴か旅も又　浦秋
走りては戻りもどれば衛哉　羊秋

歌仙一折

去年の秋、月空居士行脚の杖を卷耳亭に隱し、頭陀の反古を拾ひ得しより、集作らん事を語る。予も又彼がためにそゝなかされて、同じ穴の狐とは成ぬ

人の寐た跡まだくぼし五形畑　竹司
一雨しめれかしの春の日　卷耳
鳳巾の緒の長くもがなと紡績(ツモ)よりて　蒲右
とろひ行灯に塩を振かけ　千歌
旅籠屋は喰事のみに暮す月　耳
菌とるころ鱸釣る比　司
日印の赤う成たる蔦紅葉　哥
三七日の宮に夜參り　右
しのぶ身の我手にをろす額髪　司
余所は降らひで此地ばかり雨　耳

蓮池をいやしめる世の牡丹畑　右
古ひ〳〵のはやる印籠　哥
朔日に先御目見は十二人　耳
菊は手づよし萩はかほそし　司
あれほどに月は走らじ雲の脚　哥
工夫の兀に風しみぬ也　耳
城取の見入もふかき華の奥　右
八重山吹の咲て出かはり　哥

若狹曲

是より四ケ国の行脚は、はや七ヒをへだつといへども今北陸道の幸便にしるし侍る。

かた苔をめせ其味はおんない事（ヲンデモナイト云畧語也）　作者不知

歌仙表　小濱　居士

鯱當る花たちばなや風の中　春門
折ふし他出してほとゝぎす　呉草
狐より太虚に登る時ならん　和今
嵐にもめる竹の友ずれ　分橋
尖りたる廿七夜の月赤し　執筆
馬の上から初鮭の事

餘興

七草の梢〳〵やはるいまだ　分橋
口切や其みなもとの茶の木原　仝
鶯の小便こきてはつ音かな　春門
人丸の祉ひゞきて今日の月　仝
行春や洗濯蚊屋の小石川　和今
喰物の欲やはなれて鹿の聲　呉草

但馬曲

やんづ聞け是に家傳の干蕨（序語ニシテ先ヅノ俗語也）　作者不知

歌仙表　出石　居士

甦る聲や市中のなつの月（ヨミガヘ）　太方
凉しき風のあたる樓欄の葉　天白
南京を萬里に去て塵もなし　鉄山
蕎麥の辛味は何所も大根　鹿松
額母子としらで親仁のにこにこ　素來
降るもからくり照るもからくり

餘興

鳶に糞しかけられたる瓠かな　鉄山
御火たきや手の炭足の數奇屋足袋　鹿松
めん鳥の雛は玉子の遠見かな　天白
西東見て札おさめ錢おさめ　素來
火串さす火影や鬼の出立振　未夕
花を好く胡蝶もあるを蝙の聲　曉栢
共蕘も序に流せ崩れ簗　太方

丹後曲

鰯ひく網の盛りはけふかあて（應ト荅ル俗語也）　作者不知

哥仙表　宮津　居士

行ゝ子なくや櫓の音馬の鈴
　夏の夕日のむせる壁土　水陸
又雨が降ればよいがの噺して　遊情
　鼾のうそを知てこそぐる　寸長
船で出たきのふの月の夜半比　水澤
　蚓も鳴てさびしがらする　執筆

餘興

梅の花咲や紙衣に紅の裏　水澤
あふのけば蜘の圍に夜は朧月　寸長
瞬に散らしてみせんけしの花　水陸
炭燒にぬくめてもらへ握り飯　仝
竹齋が水鷄にとれと荅けり　遊情
夏山を淺黃に吹て通りけり　仝
神の代は天から降た生海鼠哉　斗酌

丹波曲

落栗やまあ〱（扨モ〱ト感ズル俗語也）打た兀あたま　作者不知

歌仙表　福知山　居士

風の香を配れ普天の京便
　達者に昔た物を虫干　長草
桐の木の延るに昔思ひ出て　三計
　十日のうちはすべて三日月　維休
秋はそも鎌研ぐ時が休みやら　是石
　まだ籾ながら米の算用　執筆

餘興

出頭の奢過てやけしのはな　維休
若草やあだし扇の芝の露　長草
消安き世に六月の峯の雪　是石
臘八や爰に邪見な狐わな　山龍
咲にけり生野の道の鬼薊　風志
九月野や七へん染のから錦　三計
野鳥にあぶら流すや山ざくら　細木

附尾　左の五ケ國は先集に出すといへども、此度北國行脚始終の道草として爰に載す。

信濃國

歌仙首尾　善光寺　居士

晨には紅粉白粉の華野かな
來たは近ひが歸るつばくら　招山
機を巻く隣は衣うち出して　末格
盛捨てある膳の夕月　元水
遊山ではなふて寐てゐる屋形船　一洞
芦の青葉にうまひ風吹く　紫柳
京方のまけて主從六七騎　放牛

雪降かゝる綾の腰帶　仙風
此祈りおぼつかなくも神無月　巴翁
とぼせば消る火の不思議也　序秋
ねんねこに睡らする子の花の顔　回山
金魚銀魚の鉢の糸遊　暮三

百韻表　松本　居士

松本やいざ松茸に笠ぬがむ
わざとは卷かぬ岩に蔦の葉　三省
月を待十日前から撫掃に　可明
生けて持たする魚に餌もなし　直方
商賣の隙な時分は竹細工　湖舟
芝居嫌ひの沙汰もいやがる　和水
城下は宿むづかしと立歸り　卷之
此吹出しは雪に決定　一玎

歌仙首尾　居士

私をはなれてあそべ花すゝき
水さへ澄めば月は忽然　木天
還幸の御門きりゝと風冷て　蟻道

立小便は醉た人やら　五峯
物まへの市もしづまる鐘の聲　太河
たまりさうなる雪の降出し　一葉
葺替に屋ねで莨をあぶながり　正筑
咳も子細な祖父の後手　山竹
つまむほど蒔た夏菜の一畠　坂途
土用の明で雲の風口　南澤
本復も炎返し飯に華鰹　燕説
駒の立途も朔日の門　孟志

百韻表　贄川　居士

彩色の中の住居や紅葉山
野飼に交る暮の棹鹿　古調
喰荒す破籠に三日の弓張て　五梅
足手まとひはさきへ御供　燕説
强ひ木が吹當らるゝ雨あらし　朝栢
汰輪の水に角菱はなし　序風
海川も垢のとれたる人ごゝろ　龜三
芝居のはやる比は卯の花　加流

歌仙首尾　福島　燕説

福嶋の昔やもみぢの都風流
世を新嘗麥の幸み大根　東仙
照る月の夜あそび組をさそひ來て　居士
渡しの船を諷でまつ也　桃瀬
小鳥鳴く小春の石のあたゝまり　千流
殘らず枯た中に水仙　湖唇
示された輪廻の垢をはなれたり　還珠
赤味噌の口流すひや水　默鶴
祭禮の庭に心も飛ぶほたる　冬雀
乘行馬に摺ちがふ袖　圭堂
出頭の華のさかりは十五日　秀陽
糸ありたけに鳳巾のほる也　智宥

美濃國
百韻表　居士

其蔓は切れず風雅の蔦かづら
折ふしこよひ九日の菊　中津川 吟濤
旅の月晝から足の隙を得て　同 藤先

みがく煙筒の手まめ也けり　同　合之
お廣間も留守と申せばかんこ鳥　千日林　洗月
少し吹ても風の涼しき　燕説
干鰯ほす濱に續ひて小松原　尾劦鳥井松　林竹
纏に付てまはる屆ひ人　千日林　小千

歌仙表　大針　居士

口ゝの美濃路や汁の菌がり
案の時分に鴈わたる聲　葉三
宵からも寐られぬ窓に月の出て　水尺
一風呂入れば腹もよい比　細石
笹の葉の霜竪に降横に降　燕説
ゆとりのならぬ村の觸状　執筆

伊勢國

哥仙表　四日市　居士

闇の香を今や手にとる梅の花
掃除甲斐なき凍の解口　鳴之
霞む日に御召料のいなゝきて　砂水
笹にあらしのさつ〳〵と吹　周行

面白の輕ひ出たちに木の子狩　杉高
同年ごろの袖の弓張　宗晋

歌仙表　小俣　居士

橙や家は二月の庭かざり
春を手に取る比の日中　石露
から尻の眠りを虻に起されて　大斗
名も長町の風の痩藪　燕説
綿をうつ障子に照て宵の影　以上
當事なしの鴈の鳴ゆく　丸龍

百韻首尾　一之瀬　居士

唐津から來て猿入の椿かな
達者な羽ねを禁る乙鳥　草風
春風の奇妙は山に雪もなし　二雞
夜詰した日を寐てさましけり　松下
算盤を取て掃出す窓の月　加吟
節供用意の菊の火とぼす　有之
穐もはや頭にのぼりたるわたり鳥　梅風
加地子を付て牛の何疋　拳石

新宅も兼て期したる屋敷取　以上
辰巳の角に五尋の樅　白圭
弐万石大坂以來ふくあらし　君故
黒餅着ぬる袖の勿躰　知夕
殘る月しづまりかへる能芝居　荻川
段〳〵になく鈴虫のこゑ　竹葉
春の華秋の紅葉に一變化　青岳
蔓うしなふた瓢の末枯　柳絲

伊賀國

百韻首尾　上野　居士

和らかな日本は猫に牡丹かな
扇子をさせば氣もひざまづく　其水
式日は兀たあたまに曲つけて　沙盤
鳩のくゝうもちかき雨空　青瓢
旅籠屋の月照かはり〳〵　良品
しれぬ菌に腹のどうやら　露醉
書た物吹ちる森のはつ嵐　松下
ぬかつて居るに一つ雷　燕説

早駕籠はちらりと醫者か東堂か　鼠角
菜刀に似た鞘の長刀　虎文
鬼百合の奥州ながら系圖達　雷洞
田の草の手で直に默禮　魚日
繩張はかたじけなくも備前殿　紫山
霞廣がる祈願所の護摩　車風
藥沙汰頃日止んで華ざかり　梅隣
夏も近よる網の手傳ひ　防風

近江國

歌仙表　大津　居士

杜鵑鳴かねば京も田舎なり
硯の水になつの村雲　松琵
船隣火をうつ音に山見えて　宇陀
たんなうの目の覺て何時　松下
松風の加減に吹て月清し　燕説
萩にすゝきにどちをどうとも　圓入

北國曲集四終

北國曲集　卷之五

留別論

いつしか行脚のやつこと成て、凡廿とせを歷て五十余ヶ國を巡り、今はた北陸道に旅たゞんとするに、あまたの門子錫杖にすがり、老衰の長途あやうしとゞむ。とゞむる厚志山のごとし、何の謂ひ有て旅行をとゞまらざるや。さればあたゝかに着て、飽迄喰ふは人の道にあらず。居を我が物として、常住のおもひをなすは、逝水のとゞまる所に垢あるに似たり。此世・後の世の風雅の修行には、旅こそよけれと云捨て、燕子を伴ふて三越路に趣(赴)く。

山神も呼繼げ越のさくら狩　月空庵居士

時に如月朔日、あつたの令司素人子の館に入る。例の首途迚、此地の連衆一日一夜の名殘を惜む。

門出や雀さへづる道くだり　居士

三日は七里の海をわたり、桑名午潮亭に來りて、六とせぶりを語る。

燕の巣のうはぬりぞ久しけれ　同

翌日四日市の宿に入る。此地の謠彼は文通の同門にして五年を過ぬ。けふや鳴之が亭に梅を生けて、對顏の花始て開く。

闇の香を今日や手に取梅の花　同

勢州櫻堂の縣に太田氏の老人あり。ことし九十六歳、何仙人の術を得てや、堅固なる事彭祖・大椿のさかんなるがごとし。唐の帝に逢はせざるは殘念、人としてなどあやかる事をのぞまざらんや。

長生の法傳はらむ八重椿　同

遠山氏の隱士あり。後に驛馬の鈴の音

を聞、前に眞砂をちらして流れの氣色を移し、安閑として彼莊周が吾忘我の三字を甘なふ。

白晝の夢見にかゝる胡蝶かな　同

杉葉立たる又六が門、とおどけは、此杉高亭なるべし。

酒の香に蒸されて赤し梅の花　同

一日蓮生寺に遊びて御堂を拜するに、數代法の一燈を切らさずかゝげて、一切他力にもらさじとや。

血脉のきれぬ誓ひの木の芽哉　同

四日市を立つ日はやゝ曇りて、神戸・上野も足ばやに過て、阿野津宮崎氏の家に宿す。

行鴈も一夜の夢や芹の花　居士

小俣石露亭に入れば、本陳（陣）上壇の脇を待請の會座と定て、此地の連衆なみゐたり。

橙の家や二月も庭かざり　同

十四日一の瀨に着て、ふたゝび偸閑舍に入る。

三重七重くどさはゆるせ赤椿　同

梅風子が書には、高かれの手につゝなりて、いまだ二月の枯芝に色なし。あるじ立て、いざ手作の花咲かせんといへるを見るに、

山を燒く火や一ぺんの赤つゝじ　同

雨亭老人興行

唐津から來て飛入の椿かな　同

一日廣福寺にあそぶ。向ふに高山青々として一ッの流をうけ、村里往來眼の前に見ゆ。

此寺の知行や華の十二景　居士

いざ是より知夕亭を訪んと、畑の中道をよぎれば、僧あり俗あり旅人あり。

虻蜂の聲や一むれ何奉加　同

二雛法師の寺前は、四壁大山の中に又山を築き川を流すは、其杜陵子が詩の

俤を移す。山に負ふあり覗くあり抱くありや。

花咲くや親峯子峯孫の峯　同

川に傳ふてのぼる事一里斗か。其せまる所に河上と云村の茅屋、所〳〵の木の間にみゆ。中に竹葉軒とて、山にもたれ川に望む家あり。我朝にては隠れ里、もろこしにては桃源縣とや。又何れの仙界にみちびかれ來るやと怪む。

水上に藥流すか桃のはな　居士

逢ふ度に若やかなりし柳糸のぬしは、不老の藥やなめけん。

花に皺よらぬをもつて玉椿　同

遊園珠院

雑亂の雲吹消すや雉の聲　同

行脚の道よりに、きのふは川上、けふは小萩、

飛鳥のうかるゝ方ややま櫻　同

首途辭

東西六とせの旅あかゞりいまだ愈ざるに、月空居士山神に呼かけられて、北陸道の櫻狩とや、我此たび師の老をたすけずば、いつの日か風雅の金山に入らんと、ちざれ脛巾に修復を加へて、立出る事瓢箪をこかすより安し。

日荒せな月も有磯のはつ櫻　無外坊　燕説

三月十一日一の瀬をたつ。見送りの大勢、中にも女子共は門を出やらで、さらばの聲東雲の鳥にひとしく、草風・梅風・雨亭子諸共に參宮せばやとて、川船をおろし、五里の遊び仕事に、

いざ發句して鶯を鳴かせうか　無外

鶯の追はえて鳴くかくだり舟　居士

内宮法樂

垂跡の氷やとけて五十鈴川　居士

のぼる日や山は和光の花盛　無外

西行谷

しかはいさ伊勢の辰巳の山櫻　居士

大々神楽を拜して

大ゝや晝の錦によるの華　同

一千里の草鞋のとき初迚、大斗子が宅に入れば、名殘に入つどひて其夜を寐せず。

燕の旅や神よしありきよし　無外

連衆辯

五人の連衆大斗子が家に入れば、あるじの心きゝの長寐させんとや、別屋に移す。まづ草子は鼾の高きに人を驚かし、梅子は目を明ながら起ぬ事を鍛錬す、燕子は間暇を見て夢みるに晝夜をわかず、雨子は狸寐入といふ事をならひて、人を起す工夫あり。亭主がたの三子は客に起さるゝ事を得たり。

雲雀鳴く朝や寐上手起嫌ひ　居士

小林氏の以上子、つねに親家の業を捨ず、一閑舍をもとめて、夜は市中の塵埃を風雅にすます、あゝ感なるかな、情なる哉。

世に居つて夜は隱者や五加木垣　同

石露亭

家櫻床の具足に咲かせけり　無外

齋宮にて

馬とゞめ車とゞめやはなの跡　同

伊賀の國阿波と云所にて、大佛の旧跡を拜む。

雨露の石座に蓮花つゝじかな　無外

阿叟の旧里友生に入て、何某澤氏の亭に滯留。

つたひ來て藪入らしや華の宿　同

古城記

伊賀の國山田郡友生と云里は、澤氏何某の居城として、天正のころをひ要害きびしく、信長と戰ふ事兩度に及ぶといへども、終に其利を失ひ、信雄のために沒收せられて、そのゝち末葉民家にくだり、今既に五代ばかりとや、猶

武威を倒さず、彼山城をおつ取卷て、澤の一族軒を並べ、友生殿といはぬばかりの有さま、昔の遺風目出度ぞ覺ゆ。されば吾が空菴の生緣たるによつて、杖をこの地に引、其舊地に頭をめぐらせば、二町四方に高土居を築き、上に本丸とおぼしくて大松曠くたり。又二の丸と見えて、から堀の跡ふかく、一の木戸は麥畑に通ふ道となる事、時運の變化・人世の盛衰、一やうならぬこそ猶おかしけれと觀じ侍る。

城跡の木瓜や血かぶれ何かぶれ　無外

詣信田大明神

產神の乳ゝの竿や藤の花　居士

長樂寺記

長樂寺といへるは、いにしへ澤黨の菩提所なりしが、天正年中の一亂に燒失して、一院の礎のみ殘れり。其一族の石碑、木にもたれ草に横たはりたり。まことに人は百代の過客といひしも今さら也。漸く五代の後、霜露降かはるありさま、先祖を思ひ父母・はらからの事しきりに戀しく、時刻の移るをしらず。

まぼろしの反魂香や雉のこゑ　居士

上野に出て魚日亭に則興(マヽ)

春雨や野山に智惠を付て行　無外

雷洞亭

芍藥の鷄冠こぼれて夏近し　居士

鼠角亭

金銀のうき世や花の菜大根　同

沙蟹亭

つくばねの峯より落る雲雀哉　無外

紫山亭

翅を替て歸るでもなし鳥の聲　居士

良品亭

鐵の寄る城下ではなし衣更　同

軍風亭

卯の花の市中も應と咲にけり　無外

別墅の感あり。爰に奚す。

ほとゝぎす景色富限口富限　居士

露川老衲一日誹席をひらく。市中の風流めづらしからずと、久米の一字を明はなちて、寢し數奇には松風、寐好きには木枕、共に給仕、酒は手酌と定るも一興。

手を替て仕出し料理や郭公　無外

其水亭興行

やはらかな日本は猫に牡丹かな　居士

居士、燕説の跡をしたふて、伊賀國に來り、正連衆に對す。

追はえ來て牡丹に虻の契りかな　松下

上野を旅だちける日

連日の晴やわか葉の逆弱り　無外

奈良越の蜻蜓

跡先に斑猫暑き山路かな　居士

笠置山にのぼる。

おこがまし皇居のあとに石楠花　無外

伊勢より伊賀に跡を追ひ、いがより京に同伴せしも、兩師は北國にわたり、我は又東に、

別れ行廻りぐらゐやほとゝぎす　松下

都めくわかれでもなしかんこ鳥　無外

笄や堅固を祈る三法師　居士

京に只三日の逗留して大津に出る。思ふ事ふたつのけたる其あとは花の都も田舍也けり、と古翁のよみ給ひし其ひとつは此事なるべし。

杜鵑鳴かねば京も夷中なり　居士

竹青堂の病衰心もとなかりしに、今本復を祝して、

芍藥のからめく機嫌上戸かな　無外

毛を替て今のかたさや老の鶴　居士

松琵亭興行

色ぐのわか葉や庭の風盡し　無外

十八日山王の祭禮見んとて、大鳥居の松陰に席を定む。時に正秀老人下知し

て日、頭巾を脱ぎ笠を取べしと。程なく數百の法師練終るといなや、七社の神輿かまびすしく空中を走りて、雷の海に入るかとあやしむ。

山王の雲より波に神輿かな　居士

祭禮の湖水にひかる鱗かな　松下

障らばと鳴くか神事のほとゝぎす　無外

廿一日湖水十八里をわたりて貝津に趣。

時鳥吐殘してやうき御堂　居士

藻の花の鋲釘ちるや浮御堂　無外

白髭明神

千早振卯木や鴉の水かゞ見　居士

あらち山を越す。

岩角は高し鹿子の新乳山　無外

敦賀東恕子の別座に移りて、天筒山を常に眺むる。

洗ひたてゝ窓のむかふや若葉山　居士

野遊詞

越の前州敦賀の湊に、伊吹氏の東恕子、

野杖が北國の首途をむかへて別所に移す。ある日晴渡りたる空に、めづらしき松ばら見せんと、いざなふて其地に至る。まづ毛氈をならべ、野風呂に炭つがせて四面を見るに、方半里ばかり水晶の眞砂をちらし、數万の松、地をあらそふてたてり。濱面はふとき事二ひろ三尋、枝東西に屈曲として、彼北州の人の並ぶに似たり。又半より汐風を仕切て、細く枝なく高き事五丈・十丈、背高嶋ともいふなるべし。殆ど箱崎の松に嬌を添る物ならん。是を兄弟に比せば、櫛川の松を松風とし、博多の松を村雨と定めん。各〻輿に乘じて句を左にしるす。

箱崎の松は恨みん夏げしき　居士

櫛川や唐繪ならべて散る松葉　無外

遊警法山金前寺万景縮看一望中

涼しさの要や寺のかねが崎　居士

日は若葉月の波うつ金が崎　無外

十景序

敦賀の湊は仲哀天皇の御船さしよせたまひし跡絶ず、數千艘の出舟・入船に浦富み里賑ひて、北國一二の浦とかや。山は四方に丸く、海を圍みて廣き事六七里、其奇麗さ底の鯛・鱸もかぞえつべし。名におふ色の濱はますほ貝に名高く、常宮の龍燈たえず明にして、氣比の鳥居聳て青葉をうがち、風も神德のふかきを薫るならん。柳川の松原は汐風に練れ、木毎の風流藍を流すかと。金が崎には新田將軍の昔を語り、天筒の峯は月に便よく、安玉の清水の歸帆を見をろす。野坂道口春によろしく冬におかし。佳景ひとつとして手を打ておどろかざるはなし。熊澤氏の何某すぐられたる十題に、

道口行人

浮沈む笠や霞のみちの口　無外

金崎晩鐘

明六つや紅葉碎けて鐘が崎　居士

晦日朝から空晴、峠の暑からん事を思ふ。既白・拂袖・嘉席の若人、老足をいたはり三里を送る。

うら若葉腰押す木の芽峠哉　同

夏痩のはじめに木の芽峠かな　無外

五六日の交りに、田もなく畑もなき三里を送られたる、三子に別るゝとて、

百合の花さらば云はぬも未練也　同

目も暑しわかれ行山かへる山　居士

歸る山鏡石をながめて、今庄の宿に着。府中に入て、文通に久しき欒木子に逢。

あらかじめ花の若さやかきつばた　居士

山風も目を付替て幟かな　無外

遊行上人正統の血脉を續がせたまふ金蓮寺に會して、

靡すぐる寺の教えや一かまへ　居士

もらさじの聲を配るかほとゝぎす　無外

府中をとく出て、白鬼女川を渡る。

白鬼女のすまぬ匂ひや華棘　居士

朝六つの橋と聞て

あさむつの橋や田植のむら雀　同

福井愛宕山壽妙院に入て、三日杖を止。

愛宕賦

越の前陽あたご山にのぼりて、壽妙院の書院をひらけば、東南に折けて福井の金城目の下なり。市店かまびすしく、數万の白壁左の眼にかゝやき、百村千田藍染のごとく右の眼を養ふ。向ふは二三里しさつて、山岳かこふがごくつらなり、諸鳥の往來・風雨のはこび、惘然として眺望。

天降る織か雲の朝げしき　居士

院主、牡丹に名ある事を

彩色にならふ墨繪や白牡丹　無外

足羽の明神にまうでゝ

蚤蠅も追ふや足羽の白和幣　居士

吉祥山永平寺に詣

諫鼓鳥山は千衆を入れながら　無外

皐月六日三國に入て、幡東昨曩子をたづねて、永昌寺をあるじとす。新保・瀧谷・三國の中にあそぶ事日あり。

藻の花の尻のすはりや水の緣　居士

翌日興行

夏をもつて鳴る里もあり賤の聲　無外

日和山にのぼりて

あやかしものくや五月の日和山　居士

兩濱讃

海より北を三國といふ。海よりみなみを新保と云。あなたよりはこなたの景をうらやみ、こなたよりはあなたをうらやむ。是もろこしの兩婦が紅顏をあらそふに似たり。まねかれては行、くどかれては歸る。

海ひとつへだてゝまねく扇子哉　居士

東盡坊十題中　七塚

晝顔のつなぎに咲や七ッ塚　無外

野狐亭誌

高き石垣の院に野狐亭の名ある事を思ふに、喜雨獨樂の子細にも非ず。あるじは一向専念の灯をかゝげ、數百の旦方朝時夕參りの肩衣を吹かせたり。さるを時折の閑暇をねらひ、磯の波・松の聲颯々たるに、風雅の化の皮をかぶりて、爰に狂はるゝの謂ならんかし。

狐火をさそふ水鷄や磯の浪　無外

表は御堂、裏は閑居、草木おのれがまゝにして、垣一重あちらは千艘入つどひて、船頭やら、市人やら、佛者やら、化物やら、あまさず、もらさず、すくふ合点の野狐亭なるべし。

松かしは狐もあそべ庭すゞみ　居士

十四日、大聖寺のかたに杖を引。砂鉢四里をたすけて、汐こしの松見せんとや、見送り十余人、未の下刻に着。松陰に物打敷て盃取かはし、おの／＼汐こしの松に矢たてを動す。

汐こしの松や葉で漉す風涼し　同

木綿帆の汐ごし涼し鷺の聲　無外

猶名殘や盡ざりけん、惣連衆葭崎にしたひ來りて暮に及ぶ。三子を此地にとゞめて、殘りは三國に歸る。丹羽氏の亭に會して、夜すがら風雅を語る。

草ふかき中のにほひや花柑子　居士

うかれよる日やよし崎のぎやう／＼し　無外

加州大聖寺に至る。

表は八疊、勝手は貳疊、八九子は出みせと思ひ、我が眼には菴室と見る。鍋ひとつ瑛一ツ、此外の調度人の爲にせざれば、むさぼる事なふして、道中一のやどりなるかな。

初穂から呑でさしたる新茶哉　居士

羽二重の加賀や色めくかきつばた　無外

湯本の山中に移る。主の桃妖子と紙面に談（ママ）る事廿余年、其宅に入て雜話の糸

口を失ふ。

五月雨の爰ぞ噺の無盡藏　居士

何某長氏は先師授名の門人、四十有餘にして流行に後れざるは、是桃妖の二字むなしからざる物か。

植られて涼しや竹の獨だち　無外

水盤銘

せばく見ば西湖も水鉢にひとしからん、廣く見ば水鉢も西湖にまさらむ。

水鉢の西湖巡るや鶺鴒　居士

同銘

水鉢に雲吹かけよかたつぶり　無外

温泉記

山中の湯は聖武帝の比、行基井はじめて發出したまひて、建久年中長氏の何某再興あり、綿々として數十代、涌止む間なく入やむ間なし。名湯なるかな、駕して來たる病人、幾程なく獨歩して歸る者多し。予も今桃妖子に行脚を迎へられて、逆縁の温泉壷にのぞむ事幾日。

山中や若葉しぼつて温泉の翠　居士

裸湯や日も巳の刻の行々子　無外

蚌橋

かうろぎの細き橋あり秋の霜　同

醫王林花

糸遊にやしなふ華の林かな　居士

北國の名山那谷寺にまふでゝ、折ふしむら雨を聞く。

那谷寺の雨や廬山の蟬の聲　同

石山の圖や吹立て雲の峰　無外

儲家辭

加賀の小松長圓寺の側に一間をしつらひ、疊に青嵐を吹かせ調度を改め、飛石をみがき、古壁をぬりて、垣より田畑十里斗向ふに白根の雪を備ふ。是予が老足の長途をなぐさめんとや。此地に河南・河北の風人四五十輩、一涸の魚の

ごとく正風にさかのぼりて、毫末も異風をまじゆる事なし。我爰に杖を忘れて困む事日あり。一日富家に遊んでは、又一日はもふけの家にあり。夜は風雅を語るに鶏の聲を聞、朝は巳の刻の鐘に起出て、歡然として四方山を見る。

耕作を朝寐の蚊屋にながめけり　居士

二十五日小松の連衆に對す。

小松とは風ににほひの便より　同

八幡に詣でゝ實盛の甲冑を見る。

空蟬のなみだや生た時よりも　同

麥畑の音にこそ鳴かねかぶと虫　無外

きのふ河南にあそべば、今日は河北に狂ふ。

南北にあそぶ雲あり五月晴　同

遊寺院

天蓼の逢がたき世やさしみ皿　居士

願勝寺即興

涼しさや白根の雪の水かゞみ　無外

安宅舊關

麥秋の關はゆるさじ勸化牒　居士

盜人の關に繩とや瓜ばたけ　無外

稻荷山興行

靑嵐生ずるところ神社あり　居士

小松の河南を去て元吉の方に趣く。時に河北の若連衆、途中に出向ふて柱杖を隱す。

蚊柱の立はぐれたる夜半もあり　無外

水無月十二日元吉に入る。越の浦めぐり、五里行ては小松、三里行てはもとよし。

傳ひ來てねまるよし原雀かな　居士

半睡亭に笠を脱てくつろぎ過たるも、あるじの風雅を見付たれば也。

初對面ながらなれ〳〵茄子かな　無外

手取川詞

手取川の水上は白山より吐出して、百川枝の如く流れ入て、ぬるき所は湖水

に異ならず、早き所は激して岩をこかし、末は本吉の湊にして大海に呑。

夕だちや船の足とり手取川　居士

風雅の睦び十日ばかり、晴間を見て本吉をたてば、牛睡・若水の二子別を忍びかねて、柏野の宿迄貳里半を送られて、つらさ重る名殘とはなりぬ。

引はなす兒手柏の暑さかな　同

行々子水嶋かけてわかれけり　無外

十九日ほがらかにはれて、空おもしろき日金澤に入る。蘇守・野角の兩子塵を取て、卯辰山賢聖坊を本陣と定めて、東西南北に興行。

惣連衆會合の日

金澤の澤に咲なら無盡草　居士

布莕亭

夏知らぬ城下や四方に松の聲　無外

生可亭

竹を出て松に昇るやなつの月　同

市虎亭

表裏なき風のあそびやことし竹　居士

春日山賦

ある日加陽北春日山の神社に遊ぶ。此地にひとつの舞臺あり。立て西を見るに二三里しさつて、北海をへだつる眞砂山東南に横はり、左の方に金澤の城、千店軒をならべて樹木青々たり。右の方は万田目の限にひらけて涼し。始て秋の至る事をしる。

砂山の夏をしきるや秋のかぜ　居士

見龍子我に先立て此道筋に下り、旧友多ければ此地のあるじ心迚、所々の云置數々の言傳。予金澤に居れば此御坊石動にあり。其間八里をへだてゝ飛札到來、其返書に曰、此度菓子一箱貴坊と因緣三十余年、初ての音信不淺存ル。互の年程をかぞへ申のみと書て遣す。

相共に年寄る聲や松に蟬　同

文月五日金澤をたつ。連衆の見送りはとゞめて、蘇守・野角・紀因三通のみ城

外迄。

葛の葉の表は見せじ長送り　同

星合の隣や雲のたち別れ　無外

　加賀・越中の堺をこゆるとて

蔦紅葉たぐるくりから峠かな　居士

　今石動觀音院にして、濫水・見龍の二客に逢ふ。

亂れあふ時節こそあれ萩に風　同

　此日此地の連衆二十餘人、誹談の事侍りて短夜明六つに及ぶ。翌日高岡東白亭に入る。そこ／＼の掃除、庭石に水打廻して、今や／＼のもふけの氣しき。

星を待つ宿や藺草履ちらし砂　同

　七夕の興行に

まねきあふ星のこよひや佐渡越後　無外

　養老軒興行

二日から雲のいさみや空の秋　居士

　高岡より辰巳にあたつて古城あり。青芝に毛氈敷並べて、二上山を向ふに、

先一葉ふたかみ山のはつもみぢ　同

二上や二日の月の尖る山　無外

　盂蘭盆

海川の旅やぬれ手の魂祭り　同

盆つれて來たか野道の赤蜻蛉　居士

　四里を迎られて有磯の濱に行。

見覺えん草の花貝哥仙貝　居士

繪の具散る貝や有磯の秋氣色　無外

　氷見の湊は繁華にして、其後ロの方を有磯といへり。漁村まばらにおりて白砂長くつらなり、荒浪のよせ來る音物すごふ、景色に美をかざらざるさま、彼瀟湘の秋の源疊に似て、誰やらが胡國に送られて、都をうらむる容ならんか。

あちら向く袖や有磯の葛の花　居士

　一日布勢の海に船遊びして

秋涼し綠りは青磁のふせの海　同

　摩頂山國泰寺

堂高しいたゞきなでる秋の雲　同

　海人・野刀の兩子は、名殘有磯の四里を

送りて東白亭に入。野角子は金澤より落合、何がしの院に伴はれて、三方の風人三ツ輪四つ輪の興行。

咲添てあそびあたらし草のはな　無外

廿日高岡をたつ。されば此里の花野を見もらさんも本意ならねば、招待にまかせてふたゝび石動に入る。

招く穂のありて燕の再(フタ)かへり　居士

遊愛宕坊

馴安き庭や萩咲く鳥の聲　無外

埴生の八幡にもふでゝ、寶物覺明が自筆を見る。

かき曇る空の願書や鴫の聲　居士

中さしの錆ぬ一葉ぞ悲しけれ　無外

廿四日井波に趣く。送りの者に案内せられて、安居の觀音を拜し、寶前を見れば、繪馬に我が名の句あり、ふしぎの縁なるかなと、

こぼれても念彼のちからや大根種　居士

北國曲集五終

北國曲集　卷之六

姿情說

そのかみ古院の涙化仙居は、風情のふかさ有磯海にして、遠里の尾城に芳章の飛來る事幾度ぞや。今又桃化雲居は、風姿の高さ礪波山のごとく、予が老杖を待たまふ事五とせばかりならん、正風の緒を堅めて、流行自在の糸尻を捌かしめん。

橘の後に物ありふぢばかま　居士

移ります影や木に月草に露　無外

送別辭

鴫明齋 桃化子

餞別の禮に貨を持、酒をむかゆるは、尋常の定にして文詞にはまさらずとや。爰に尾陽の露士、蕉門に滑稽誹諧の脊をふるふ事久しく、五箇八鉢の要より四花八月の信をあらはして、松嶋・象浮の春曙に俊成の千鳥を鳴かしめ、姨捨・

更科の隈なき家隆の月に夢を驚かし、今年有磯の哥仙貝の名を尋ねて、五沃洞の閑窓に金槃をかゝぐ。寶や昔より因と縁との喜びに染毫をならし、盃の數深く汐かよふほど、名殘の鷄の聲をせめ諷へば心苦肝酸重席を襲ひて送る。

霧に入る月をとゞむる心かな

井波はかねて知人多き中に、路健子は旧友

臍の緒の物がたりせん蔦かづら　居士

淨蓮社にあそぶ事しばらく。あるじの常を見るに、掃除・勤行他に讓らず、よく足る事を知るものか。誠に淸淨の行者ならん。

蓮の實の唯行かゝり成次第　無外

林紅亭

蜻蛉の逢ふたり笠に別れたり　同

井波をたつ日は風未申より吹て、白雲涌ながら飛ぶ。岡見川の嶮岨を廻る程一里ばかり、百丈の棧道を行事凡半道。

青淵に爪先かゆし葛のはな　居士

爰の拜殿かしこの御堂に殘暑をしのぎて、其暮富山に入る、

來迎寺

蚊の聲にかはる夜もありきり〲す　居士

此宮山に秋鳴舍の一字あり。四隣は草木に取まはして、小川三方を巡り、其水を分て床の下を十文字に流れたり。爰に殘暑をさけたるは、秋を鳴るともいふべし。

水に寐た夢より秋は立にけり　同

神通川

船橋や鎖(クサリ)藤綱蔦かづら　無外

二川・閻州・白推の三子新庄におくりて、我が老身の又逢がたき名殘をいさめて、

蜻蛉のゆかば又來ん身の輕さ　居士

やらじ迚引づる聲かきり〲す　無外

魚津の湊に入れば、市聲繁花にして、磯には大綱をひく聲かまびすし。

晴嵐の魚津や浦はよしの花　居士

神明社家

後の世を恐るゝ柿の紅葉かな　無外

外故亭

北國の手染は早し錦艸　居士

貞子亭

立初る虹から山のにしきかな　無外

此津に壷江子といへる風人、野叟が此度此筋の行脚をよろこび、待事久しかりしが、今五日にして急疾身まかりけりとぞ。定なき世の哀いまさら也と手向。

流れゆく一葉顔見ぬわかれかな　居士

熟柿畫讃

葉隠れに浮世のがるゝ熟柿哉　同

馬上大黒畫像讃

養父入にまねく大黒祭かな　同

方救亭

末座から諫言申す野菊かな　同

待事久しうして交るに日のなきを恨み、二里の濱道を送られたる廿四翟に對す。

穗薄は千手の御手の別かな　居士

生地の海は唐に續て青く、浦は眞砂を磨きて雪の散がごとく、立山の風白雲を連來て殘暑をさます。

濱の屋の秋や庇をめぐる雲　同

枝中亭

九重にない都あり草のはな　無外

舊筆讃

越の中州生地の里に、何某の枝中といへる男あり。年來正風にあそびていつのころをひにや、古翁の手蹟幻住菴の記の草稿を得たり。是に讃してかれが家の什物とする事しかり。

飛咲や爰に湖南の椎の花　居士

相木の橋の高き事雲霧に懸たるがごとし。

永沈を橋から覗く一葉かな　無外

生地より三里、見送りの衆中に相木のはしにわかるゝ。

我咲ふ人送らふの華野かな　同

あひもとで逢べしやがて下り簗　居士

松字何某に再會する事十余年抜

面白の無事や瓠に種茄子　同

草臥を垣に預けて冬瓜かな　無外

御坊に遊んで堺の山をながむ。

初鴈の聲や暑さの行どまり　居士

越中・越後の境にして泊の惣連衆に別。

關の戸にたてきられてや鵙の聲　居士

雁鳴て送り切手やさかひ川　無外

親しらず子しらず迚、北國一の大難所を心許なしと、見送ろ風雅人は誰ぞ。泊りの歩立一人、關町の歩武者貳人、金澤の騎馬一騎、おびたゞしき行脚の行列、風破見といふ所に着て、一先息を休む。

冷て來る浪や身しらず親しらず　居士

秋風の飛鳥川なり親しらず　無外

上路山　昔山姥の住しと云山つゞき也。

秋風の雲やあげろの山めぐり　居士

駒返し・長はしり・行あたり・落し水など、十三ヶ所を越えて、秋の日の足ホくらき迄に暮かゝりて、越後國青海と云所に宿す。

姫川のすさまじや瀬ののぼり龍　同

明れば廿四日、此川を朝渡りして、糸魚川の町に入て昫竿子を訪ふ、まだ起〳〵の目を擂ながら、まねき入て共に朝手水をつかふ。いわらしなければ商家にして隱者のごとし。其日の興行

大家に住やこゝろの菊つくり　居士

即興

つかの間も忘れぬ夢や鹿の聲　無外

猶今町におもむく。ひだりの方に海上三十里ばかり、佐渡が嶋かすかにみゆ。むかしより遠流の人の行かふ長砂も、此道筋なるべしと思へば心細くて、

鴈啼て流さるゝ身か駕籠の夢　居士

北海の緣りを巡りて行程何十里、入ては砂鉢によせ波を走り、出ては岩根のあら浪をくゞり、胸をひやす事幾たび、それが中に浦めきたる所は、驛舘を備へ、せばき入江は村里連り、出崎〳〵に其堺を仕切たるは、蠣と云貝のかしこげに住分たるに似たらんか。行盡す江北の二十七日、此廣き直江津に出て、陸夜・過角の兩亭に其痞を押。

鳥わたる越後の内に幾世界　居士

八彥・新潟迄行べかりけるを、いまだ秋の半、來〳〵の雪に怖されて、直江津・高田より歸路の思案と成ぬ。

越信濃尻もむすばず秋時雨　無外

即興

稻妻の要はしるや峯の松　居士

涼風に乘じて北海を廻る事百餘里ならん、田里を若葉の比出しが、關川の末枯に驚されて、雪の深からぬ間に木曾路にかゝらんと、高田の卷耳亭を三越路の名殘と定て、三里に灸すえ、頭陀の綻びを繕ふ事になりぬ。

山雀の海にあかれて山こひし　居士

兎行亭

金屛に鵆の歩みや秋の色　同

疝氣・風邪になぶられて、卷耳亭に籠る事しばらく、

煎藥の夢か風ひく鴫の聲　無外

名殘の袖を切て心づよく見歸らず、善光寺の方に趣く。卷耳・蘭風の二子は荒井と云所迄跡をしたふ。殊更此地を北國の巡り納めとして、撰集の沙汰あれば云置く言葉の種多し。

狀に咲け越の千草の花ぞろへ　居士

戸隱し山を右に見て高山をのぼる。

突立る柱杖に涌くや秋の雲　同

關川の嶮難に足を損じて、我哀なる有樣を

草臥の我を笑ふか百舌の聲　無外

善光寺の大門に立て四方をみれば、山丸く取まき、北間遥に十里ばかり、所々茂林の錦・千草の花野、比は寒からず暑からず、取も直さず九品の勝地、まのあたりと拝伏して、

草花の臺は廣し善光寺　居士

攝取不捨

本願にもるゝ葉はなし秋の色　無外

淵明が三徑に松菊を存せるも今さら難しとや、未格何某の庭前は、洲崎のもやうを移し、松はら〳〵として其傍に菊四五本、おのれがまゝの花の咲ぶり、

數〳〵は目ぐるをしとや松に菊　居士

八月十二日すでに旅だゝんとせしを、更科の名月に伴はんといはれて、腰をぬかし侍る。

十日から待や月夜の屋ねつゞき　無外

更科誌

享保六の春、三越路を遊行して、中秋の比信濃の善光寺に至り、未格亭にありて、名月を待事久し。今日や連衆にいざなはれて、五里ばかり行て八幡といへる山里に宿す。晝は姨捨山に登り、十三景をものし、暮に及んで臥窟をよぢのぼりて、姥が石のうへに月見の席をもふけたり。實や昔より花麗の吉野に行人はあれど、哀傷の更科の月に來る人すくなし。此日此時一天に雲なふして、月鏡臺山に居りて、淸光千隈川に移り、明輝田毎に滿れば、偶然として各月宮に入るかとうたがふ。

雲に乘る我か田毎の月の照　居士

更科の月をさらすやちくま川　無外

各此夜句ありといへども長篇爰に略ス。

明ればいざよひ、稻荷と云所にて、善光寺の五子にわかれて、さびしく松本の方に趣く。其道筋、左右の山嶮々赫々として胸をそびかす。

落栗の猿が馬ゞ場や石車　無外

見かへれば越後堺の連山、詫わたす雪

白妙也。能折ふしに寒國を逃出ける物
哉迚、
月も出ていざよひかねつ此寒さ　　居士
たどり〳〵松本の三省亭に至る。此地
は尾の巴雀子が折〻の文通に、各待事
久し。
松本やいざ松茸に笠ぬがむ　　同
正筑亭
町に出る柴や草花の一もやう　　無外
正風自在の世中に、いさゝか邪風の種
こぼれて、人をあやかす類ありと、急
に油斷をおどろかして、松本の惣連中
を示す。
私をはなれてあそべはな薄　　居士
野叟が松本に入ると聞て、仁科の五峯
子は八里を夜通しにはせて、三日の誹
談を聞。正風の門に入るより歸宅の名
殘に、予が破れ笠を乞ふ、默止がたふ
して其裏に書。
笠やらば形見にぬれん秋の雨　　同
湖舟亭
胡粉蒔く秋の色なり飯縄山　　同
松林氏の蟻道子我が行脚を待、正風の
門をひらさ、軒号あらん事をのぞむ。
市中に風雅の閑を甘なふ者すくなし、
よつて芳草園蟻道子と。
口に咲き手に咲かするや草の花　　居士
老衰の遊行、信濃の寒さにこまりて旅
行を急ぐに、松本新古の連衆にしたは
るゝ事離鳥の例に等しく、今日送り馬
の鞭うつ迄に、跡より正筑・太河・遊鳥
の三子が殘を追ふて、八里の贄川に來
る。あるじ五梅子も其別を哀ととゞめ
て、二夜三卷の興とはなしぬ。
御所柿のしぶ〳〵ながら別れけり　　同
是より尾張領と書たる堺杭を見るも、
待人なき身さへ物ゆかしくて、
戻る羽ねつよし燕のさくら澤　　無外

東西の照りや紅葉の國並び　無外

古調亭

彩色の中の住居や紅葉山　居士

仁科の弄兎子、野叟が贇川に至るを聞て、往來三十余里に駒を馳て、夜通しに入來るといへど、予福嶋に趣く迚、草鞋の紐をしめる折から、風雅の厚志を感じて、一時の餘波を惜み、我國にして他日の因みを約す。

日表を見せん深谷の菊の花　同

權現山

金蔓を惜む神あり山の色　同

觀音寺

金(こん)迦羅の杖やつつ立つ菊の花　無外

哀樂筏

幸にしてよろこびざれ
不幸にしてかなしまざれ

秋の霜泣かず笑はず峯の松　居士

二十九日贇川を立て、鳥井峠にかゝる。

馬乘せてゆくや峠の秋の雲　無外

此雨日福嶋の寒さ恰も寒中のごとし。薪富隈の東仙亭に膝をすえて幾日。

福嶋の晝や紅葉の都ぶり　同

岫雲亭

誰がまと木曾の九月の七時雨　居士

夜興

草喰ふて溜息繼ぐや鹿の聲　同

梯にかゝりて祖翁の吟跡を感ず。

かけはしや脇目はふらぬ蔦かづら　無外

寐覺に浦嶋の舊跡あり。

釣竿の眠りさますや散る木の實　同

須原に入て木村氏をあるじとす。

新宅をしづむる香あり菊の花　居士

ほれ人なき木曾の妻籠の女郎花　無外

昔めく下手の妻籠の礎かな　居士

美濃の國千旦林に至る。十年ぶりにして越石氏の洗月亭に入れば、主は野遊びに行れけるよし、草鞋をとき、湯よ水

よとかまびすしく、我家に入がごとし。

留守の間に得たりや庭の栬狩　同

遠山をひたす池あり庭の月　無外

　重陽の盃を此亭に把る。けふや唐には
　高きに登るためし侍れば迚、主を伴ひ
　惣門に東面して、眼ばかりを胞衣が嶽
　にのぼす。

しら菊の九日や雪のえなが嶽　居士

寒やみの庄司が痩や菊ばたけ　無外

　中津川の連衆跡をしたふて千旦林に來
　り、一等に我師の誹談を聞て句を物す。

風流の會座や美つくす菊合　同

　中津川の風人たづぬべかりけるを、其
　本名を忘れて直通りせしを恨る人々に、

其蔓は切れず風雅の蔦かづら　居士

　此道筋の往來折々ながら、大針の邑、
　葉三子は三械路へ書簡を通じ、野老が
　歸路を待の契あれば、只一宿と立寄事
　に成ぬ。

日々の美濃路や汁の菌がり　居士

　北國数百里の旅も、今は一日路に縮ま
　りて、

鵯の一日うけあふ日よりかな　無外

　假初ながら十ヶ月の北遊、嶮難に主と
　なり玉鉢に伴と成、恙なく途屆て、居
　士を名古屋の連衆に引渡し侍る。

野心を封ぜよ窓の菊のはな　同

紀行附錄

山陰道の獨行脚は、正德五乙未の春より其秋に至る。折なふして其道の記匣に反古と成てん。今幸北陸道に並びあしからねば、北國曲の撰者へあつらえ申。

留別辭

　常ならぬ世に、常ならぬ人と生れて、
　つれたらぬ旅好の、常ならぬ庵を我が
　物顏にして、去年一とせは籠り居たり

しが、はや鶯の聲すがれて、野山の躑躅赤み出るより、方角のわきまへもなくうかれて、連中の餞別もそこ〳〵に、此一句を床柱に張りて出ぬ。

鳥の巣に風や長居は恐れあり　居士

彌生十日に旅立すべきを、風邪に惱されて三日を養ふて出ぬ。琵琶橋を打わたりて甚目寺の觀音を拜す。此所にして見送の人〻にわかるゝ聲、梢の嵐とひゞく。

行春に綱をつけてや藤の花　同

其中に十竹・雲芥・里艸の三子は猶別愁やまずや、五里を送り津嶋の未了亭に入れば、予が此比のいたはりを他事なく兩日をいたはる。

華いろ〳〵蝶なぐさめて立せけり

未了・万山・階子の船送りに、道〳〵の興過て桑名に上る事未の刻ばかり、此地もとはず直通りして、四日市淨元菴に入て、共〳〵に粥を燒く。

念佛を夢に見て咲く菫かな

十七日神戸の眞福寺を尋て、十八日雲津の眞學寺に入る。布袋禪師は子共を愛して笑れしが、此禪師は風雅を愛しての笑〻翁なるべし。今禪閣建立の折ふしに來りて、

雉なくや寺の楔をしめる音

村松松林寺に著く。燕説子に逢事幾年ぶりか。

栗柿の無事をよろこぶ木の芽哉

燕子を伴ふて一の瀬に趣く。其日は急雨道を流れて、棚橋法光寺に夜泊す。翌日洪水里にのぼりて、宮川の水上に渡りの舟なし。

春雨に其川わたせ又太郎

一の瀬草風亭にある事久し。けふは鸚鵡石見んとて出る。抑此石、長さ一町ばかり、前に谷をへだて三十間ばかり

しさりて、あるひは樂器を鳴らし諷謠をうたふ。その音律石にひゞく事、猶木聲より明らかにして、正しく岩より其聲の傍あらはるゝがごとし。委くはあふむ石と云先集にみゆ。

かげろふの反魂香や鸚鵡石

草風・梅風に誘はれて、二里の湊、髓柄の紫筍亭に行、半途に船をかざりて迎たり。

もろこしもむかひ合せや華の宿

あるじ向井氏の案内にて嶋々を巡る。まとに名石・老松・獵船の通ひ、彼松嶋の浦にならふべき有さま、十二景を物しておのゝゝ句あり、あふむ石の集に出れば爰に略す。また一の瀬に立歸るとて、のみ坂と云峠にかゝりて、伊勢の南海殘る所なく一目に眺望。

陽炎や須彌の四州は目のほこり

草風・梅風文をなして、風雅の行德を問ふて其返書を乞。

滑稽說

以爲誹諧の時を定めば、春夏は朝四ッ方席に出て暮に歸るべし。秋冬は暮にあつまりて、夜半に放參すべし。夕飯はさめてくるしからず、夜食はあつきに飽かず、誹諧は業作の間暇を見て當に工夫あるべし。其會に望んで深く案ずる事あるまじ。今のはいかいを見るに、家職を破り、勤をないがしろにし、誹諧を肴にはさみ取賣、賣僧の媒とするや。かゝるやからを誹諧の罪人と云なるべし。若つとめて人を此道にあそばせんと思はゞ、己れを固め其かたみをくだきて、法界にちらし散らして、又其固みを戻すべし。元を忘るゝ事なかれ。其忘れざるをもつて誹諧のたばねと云べし。

其もとの規矩はちがはぬ柳かな

梅風亭に會して西岳亭記あり。長篇なれば爰に略す。

雨亭新宅

柑類の花のはやしや鶴の糞

艸風亭藤之宴

たくましき鴻の巣組や若葉時

藤棚の下やいかさまかたき打

今しばしと留られて、あてこともなき長旅に、先急ぎするもおかしく、

もゝ尻のうき名や松の郭公

山田に來て八菊亭に入る。此地は旧友多かりけるに、九人は非にして新しき連衆に交る。

なつかしき古茶に床しき新茶哉

卯月十五日曾北子・柴友子に送られて宮川にわかれ、猶伊勢路の山づたひにかゝれば、今年や凶年の所有て、曼珠沙花と云草の根を掘晒して是を食すとや。不便の賤の有樣也。

痩麥の里のあはれや膀肥(ヒ)餅

伊賀の國下阿波の里の丑寅、高山の麓に往來を見をろす所に、南都大佛草創の手始め彼俊乘坊の作とや。日月霜露經る事幾度ぞ。石座の彫物所々消て、堂の礎ことごとく苔むし、丈六の尊像、御髻・文躰分散して、いまいましきばかりの有樣、昔に似たるひじりもゐまさず、其代の如くの大旦那もなきにやと、泪しきりにこぼれて土壇を巡る。

櫻の實ふむも草鞋の裏かゆし

大和物語にみゆる檞塚といへるは、喰(ホウ)代(シロ)と云里にあり。其孫桃地が黨、今に在て無足人と云へり。

夏犬の舌出すかたやしきみ塚

旧里に入て一族に逢ひ、上野に出て高尾寺を宿坊として、此所の衆中と遊ぶ。

一變化見ばや九年の夏木立

遊藤堂氏英士別館

善盡し美つくす山やほとゝぎす

洞簫銘
其水亭

摺小木は陽也。火吹竹は陰也。汝尺八何を役とするや。されば上下の空なる所を、金剛界・胎藏界として、實相中道を其間にはさむ。いかで猫うつ火ふき竹に比せん。忝くも五ツの穴を地水火風空とし、うきふししげき世の中の過去・現在・未來を、此三節にこめたれば、など鷄を追ふ摺小木の類ならん。すべて天籟・地籟・人籟、風のはこび・息のかよひ、物みな激湍する所に起る。尺八に涎かけるな杜鵑　と云て思ひよこしまなき三字を此時に感ずるのみ。

上野を立日は、嶋が原・大川原を越て笠置に宿す。二階座敷より夜すがら古戰場を見る。

篝焼く影かほたるの笠置川

五月朔日早行

此山に十騎かしこに幟かな

十里の便船、笠置を下して淀堤に着て、日高にあがる。

柴船や只とり山のほとゝぎす

都にありて旧友を巡り、九年の程風雅に忘る人〳〵をすゝめて、

尉殿に鈴まいらせん蔓覆盆子

木のぼりをさせぬはつらき競馬哉

吾仲亭興行

いざ古茶の名殘惜まん五月雨

十日松本に行て、例の正秀老人を主として病後を祝す。

石竹の石のかたさやはたけ主

尙白老人の許にて興行

松杉の宿や扇の明はじめ

松琵・楚江をあるじとし、宰陀は來かゝりに、濱の二階に哥仙をはじめて、湖水の眺望、日は漸山の端に、

さゞ波に耳を洗ふや夏けしき

今日や若狹・丹後・但馬・丹波のかたに趣かんとす。松琵の主船呼びして、十四里の湖水に移れば、朦朧として景色の善悪更に分つべからず。式部が源氏作りしもかゝる折にや有けん。

浮御堂

萍の華と咲けりうき御堂

鰐が崎・小松を過て湖上次第に廣き所に出たり。

涼しさを波にちらすや竹生嶋

塩津・貝津・今津と並ぶ。其今津にあがりて城下の方に杖を引、熊川をわたり、青葉山に後瀬山をながめ添て、小濱の町に入、津田春門子の宅を訪ふ。

吹中にはなたちばなの風白し

何某渡邊日向守宅に遊ぶ。庭は書院の先より百丈の自然山、青巖(巖)嵯峨として天に續く。

雲を呑み雲を吐出す茂りかな

高濱・見妻を越て松の尾の觀音に詣づ、板をたてたるごとくの坂、上り下り三十六丁。

甘い事覆盆子の中の清水哉

一里ばかり行て山の傍に五三人集り居けるを、何事にやと立寄れば、狸のなまくしく、大きさ四五尺程ともみゆるを、大竹三本を以て磔にかけたり。こはいかなる事にやとたづねよれば、此畑主惣六といへる者の子、兄三郎助・妹さよといへるが、六ッと四つになりし兄去年の秋此邊に來り、うせて行方なし。親なげきしづみしが今年又其妹、過つる十日に此畑へ摘物しにまかりしに、ふたゝび歸らず。親かなしみて其邊を見まはしけるに、其畔に大きなる穴あり。此口にさよがはきたる草履かたくみゆ。扨はと推して所の人をかたらひ、岩をはね掘崩し侍るに狸かけ出たり。

策て覺悟しければ打殺して其奥を捜せば、娘が着せし一重、血に染まりてあり。うたがひなしと語りけるにぞ、今迹もかゝる山中には妖怪も有けるよと、矢立を出して記し侍る。一步に千里の迷ひとは此山道なるべし。

渡唐して來たか幾山いく茂り

是より但馬の出石に赴きて、松屋の長兵衛と云人の宅に入る。長途の炎熱老身のなやみ以の外にして、二廻りの湯治に漸く人心地付ぬ。さる事有て但馬の往來日記にとめず。又丹後宮津の方に行、田邊中山を渡り、山枡大夫が屋敷の跡をたづね、由良の湊の美景をながめ、音に聞七曲り八峠の難所にさしかゝり、手ぬぐひの汗をしぼりかねて、やう／＼峯に至り、水一口と思ふ處に、樵の爲にや建捨の小屋に足を休めて、

我が足の下からたつか雲の峯

四方をうち見て汗入る折柄、雷夥しう目前を鳴りわたりて雨盆を傾く。赤土山の谷／＼、赤き川幾筋か流れ出たるに、かたはらに牛牽く人、又跡より六歲ばかりの童走り込て共に晴を待に、日は暮に及びてこゝろぼそきまゝ、山を下りに趣しが、又雷電頻なる中に、宿りせし小童足をはかりに泣來りて、宮津の者也。連てたすけ給へと呼はる。樣子を聞けば三里の由良より捨たる女が跡をしたひ來るよし、あまりの不便に介抱して、麓の栗田といふ所の小家に入て共に宿す。其子の父を問へば、江戶にくだり、母には昨日捨られたるとや。世にはかゝるつらき親もある物かはと、あるじにこしかたを賴みて出ぬ。

植捨て置た早苗の末はいさ

宮津の水陸子は商家に名ある人也。是

にまねかれて會する事日あり。

ぎやう〳〵し鳴や櫓の聲馬の鈴

ある日連衆に案内せられて、久世渡の文殊に詣で、成相の坂中より天の橋立を見る。實に日本三景の一つにして、今更歎美するに所なし。

海涼し鈍染(ニジ)まぬ松の一文字

五日をとゞめられて、又一日は降られて留るなるべし。けふや三里の普甲峠に骨を碎きしも、絶巓より與謝の海の佳景に忽疲れを愈し侍る。すべて此邊山疊〻と十重廿重にかさなり、その中に大江山のみ雲に聳えたり。

また今も夕だち雲の大江山

所の人に案内を聞て鬼が城に行。麓をのぼる事二十町、岩に取付嶮岨を登る所十町斗にして、童子が岩窟にのぞむ。穴口の廣さ一丈四方ばかり、奥深く口ほのくらし。前に平地有て戸びら石迚其廣さ薄さ、板をへぎたるがごとし。すべて人力の及ぶ所にあらず。下りて内宮・外宮と云所あり、天岩戸宮川百二十末社、往昔此地より度會へ御遷座とや。

散る華や古き榊の神ごゝろ

外宮の長官河田豐前守宅に留られて、其夜内宮河田伊賀守共に三吟の樂みなす。是より河守・天津・漆が鼻をこえて、福知山の城下山草子の宅に會す。此地に古風あり、中古の風有、前句付といふいやしき風情あり。其中に五三子の志あるありて、惣連衆に對する事十日ばかり、漸正風に入て、京の文通所を書付て、なごやの通路を定侍る。

風の香を配れ普天の京便り

大江山生野とよまれし里を過、朴野峠の大坂を越て、水原といへる村の小家がちなるを見かへり、十町ばかりも行べきと思ふ折柄、道より十丈斗の岩上

に、吹かば散るべき一字あり。もし仙道士の類にやと見過しがたくてのぼり、さし覗けば、四十斗の色青き僧、旅人か是へとあり。入て共に竹椽に腰うちかけたり。此僧やゝ我顔をまもり居て曰、達磨大師初て梁の武帝にまみえし語を引て、予が旅姿の異相なるを問ひ答ふ。其品長ければ爰に略す。終つて浮草浮木の長咄しに日既にたけたりと、托鉢の米三合を須て粥にものし、即興の絕句を遊られければ、其酬に一句を殘し、又此世の緣あらば逆別れぬ。道中一の樂み是に過ざらめや。

松葉散る戶ざしや爰を何世界

遠部の町に有て、雨に降らるゝ事三日、二三子宿に來りて咄し合へば、我が國に通ふ商人のありて、伴ひ行て馳走にあへるぞ、地獄にも近付なるべし。

なでしこやさいの河原の地藏經

三戶野峠、高卒都婆十六ヶ所の難所に、身は老の坂の今日は、八里を申の刻に着く。

夏草に煩らはぬ身ぞ堅木原

と自讃して洛陽に入る。六月朔日東山双林寺におゐて、見龍子が碑の銘の覆ひの興行に催されて、彼菩提樹の實は葉の裏に有て、塵垢をうけずとや。此石碑も又施主の覆ひに、

菩提樹におほひはじめの木の芽哉

文通につれて難波の芙雀亭に下り、風薰合長町の外屋敷に興行。

草木も人も夢みん夏木だち

生玉閑舍

生玉にたま／＼涼し松の月

奉訪八重僊座

亞親公に召迎られて、南都に駕して走、

水皇臺誌

謹てうてなにのぼれば、茂林の梢をなす

かし、八重の都の町筋も、目の下にひらけたり。玉欄の青竹にかはりたるは、水無月のもふけなるべし。萬木の枝葉諸鳥の羽風にうごきて、たちまち微凉を生ずる氣色あり。長途の暑氣を爰にしてさますべしとは、

硝子の一間にすぼし百合の花

ふたゝび大津に來りて、松琵子に與行。此亭はみづうみにしりぞきたり。

湖の風を帆にして扇かな

朝寐辯

宰陀寸が宅にあそぶ事日あり。面屋をはなれたる三間東南に折けて、庭は生れながらの松はら〳〵として、青苔みどりを敷たり。井筒火とぼしの古び、其銘は千年に消るかしらず、水鉢は我國にみなれざほの瀬戸やきの風流、爰にわたりかしこにうそぶきて、朝寐の目をさます事巳の刻に過たり。かくてあるじの長寐を起さぬも、客がらのもてなしなるべし。

客振や寐て居る顔で朝凉み

箕高亭濱高樓凉の辯有爰に略す。

欄干で颶まば鳰の雲の峯

春は志賀の華にうかれ、秋は石山の月にさまよふ。今湖水の高樓に納凉して、眼を休る事一月。

月華の休む場もあり夕凉

大津松本の凉みにもてなされ、極暑を忘れて歸菴。

あふがれてたつや堺出の鳥の聲

北國曲集六終

北國曲集　卷之七

誹諧歌仙句解　評者月空居士

見脉の取れぬ名殘や玉椿　卷耳

夭々たる花の咲ぶり、大椿の八千歳も昔にあらずとうちながめ居たるに、あへなく散し氣色なるべし。見脉の俗語に變化をあらはし、玉の一字にさかりの皃をみせ、名殘の哀に脆落をもたせて、定なき世のありさまを示すに似たり。

つら〳〵のぼる壁の糸ゆう　藤乃

つら〳〵の響き、發句にこたえて奇なり。つやゝかなる椿、巳の刻ばかりの日影にゆるみ付て、蔕よりくづと拔けたる余情、其位を得たる五脇のひとつとも云べし。

鶯に起ぬ枕をすべらせて　林月

壁に糸遊ののぼるより、鶯を鳴かせて朝寐の人を起し、起ぬ枕を箒の柄にすべらかしたるは、一曲一轉の第三、正風の作者といはん。

御狩の供の十五歳から　栢風

若輩の子共等狩倉の役にあたり、宵はいさみて夜を更し、朝は起かねて只ゆり若の夢中とみゆるぞかし。付かた、かる〴〵として四句目振の位を得たり。

長降もおつ取置て月の照　椿又

第三の枕の人を四句目に移し、情相續きて三句目のはなれむづかしき所を、五月雨の卷狩と、見るから空さへ此時はと疊を、おつ取置ての句作、流行第一、五句目の行儀よろし。

卷揚さする翠簾の鈴虫　杉月

雨長々敷、山際の雲切れあがりぬる夕は、世界も廣く氣もいさみ立て、奥

方の篠高くまきあげ、虫籠の虫に水そゝぎたらんは、目ざむる心地して、明石の卷に雷鳴りやめばと書し俤ならん。

道三を三服呑めば菊のはな　推之

前句の翠簾まきあぐるを、病人の快氣と見て、道三に匕とらせたるは、付肌を得たりと云ん。藥を云ずして聞かせ、菊の一字に利の響をもたせたらんは、正風の一作眼を開く所也。

金にまじはる和光同塵　風埃

乏しからざる人の病氣ならん、名醫を集て核・園に定め、其療治道三に當るなるべし。神佛もたゞ金次第の世と、悟りたる人の付なるべし。

福岡は大腹中になく鳥　水明

神も塵に遊び金も芥にまじはる。紅塵繁華の地に、福岡の城下をよせたるならん。すべて名所を出すに、前句當句に其響なくては出しがたし。此付、福の一字能居りたるかな。

喧嘩の跡に鞘が何本　氷蟲

もろこしちかき福岡の大家中、是等の喧嘩は折〳〵の事迚、鞘を強者に拮奇するさま、大腹中ならずや。

爰も闇よそも闇也五月闇　仮予

目ざすもしらぬ闇の鞘當、ぬきあはせて戰ひしが、くらさは暗し手元は見えず、相引にやしぬらんと、所と人情をすみやかに除きて、三句目の離、名譽のやり句なるべし。

着せると申す野衾の沙汰　三和

蝙蝠の功經たるを野ぶすまといへり。煙を好くから闇夜の松明に寄るとみえたり。時候時刻の起り、變化の一作。

新米は百一升の此時に　心圓

百一升さは凶年の田舍言葉也。しかる時節は往昔も禽獸四方に荒て、人をなやます事多しと記せり。其心をもつて

付出せるとみゆ。

盃かたびらを是はかぎざき　遊竹

米穀はなはだたしなふして、辛き世の中にあたらしき帷子をさきたる事よと、いましめ折檻したる心也　此時にと云前句に、是はかぎざきと、拍子を向はせて付たるはしりの一躰。

有明の雲吹ほどく風もなし　櫻川

此所三句のわたりむづかしき場也。有明もかき曇りて車軸の降べき空に、洩桶よ雨戸よと飛ありきて、かしこの釘にかゝりて、さらりと引さきたるかすりもかゝるし。

嶋に築込む人ばしらとは　和雪

雲一天の月を隠し、其曇りをとくべき風なしとは、清盛政の道をふさぎ、下の苦みをかへりみず、人を活ながら嶋に築入るとや。起し得たる付方ならむ。

散る華につれてかならず渡り神　桃川

世俗に弱みの靈怪といへるがごとく、落花に連て厄神もわたるべし。驕臣國を悩ますに比して付よせたる也。一句の余情前句の向ひ、六躰一かたにして、見入のがるゝ處なし。

雉子啼なる王莽が時　和泉

必たそがれは外に遊べる童部も呼入て、かまか時ぞと怖し侍るは、王莽が時のあやまりにや。わたり神の時分を句はせて移りよし。かやうのやり句を正風の命とする所也。

春雨の加留多法度は平なへし　呑水

寶引かるたのはやりは正月あそびなるに、次第に募つて法度を破るの類にや。名主・宿老より一錢の勝負も致すまじきの觸状をまはすも、春雨の夕昨節よろしく付流したり。

口ゝかはる船の千艘　右柳

諸法度のきびしさは、長崎銚子の口の

大湊を付よせ、一句の器量を求ず、付肌・打越に眼を配りたるも一躰の骨折。

風の香のなまぐさひやら暑ひやら　初汲

一日に千艘入て千艘出るといへる湊は、有像無像の臭氣して、三伏の暑さいやましならん。對食暫餐還不能とて、炎熱を苦む姿より猶甚し。

腰うちかけて季武を待つ　吟水

其場・その時候を轉じて、吹來る風の腥ひと云に、賴光の山入と思ひ付て、鬼が城も程近さに、すへたけが後れたるは、煩らふか草臥かとあやしむ姿も、目ざましき一躰の付かた也。

お內儀に泪もろさは常の事　羽重

人情の骨髓を付たり。四天王の中にさまぐ〳〵の情ありといへど、女房にむつまじく名殘をふかく惜むは末武にかぎるべし。かゝる古人の氣を見ぬく事、中〳〵未練の作者の及ぶまじき所也。

夢を梓によせて聞らん　朝尺

誹諧は付かたの轉じ變るを、面白き味の第一とす。今迄無事なる女房をなき人にして、梓によせるとみえたり。なき人の影を鏡のうらみ草しのぶの葉さへ枯果る世に、と讀たる哀も句中にあり。

あちらから蔓うごかせば長瓠　可中

槌をつるして梓によせれば、口走る物に長瓠を寄せて、塀の後ロより蔓動かし、一座の姥・嫁〻を泣かせたらんも、眞躰只中の句ならんか。

衣張り捨て迯るいも虫　春翠

秋の夕照りに江戸留守の與方なん、慰にとて簇きぬはりの折から、惣領のわるさ、垣越にいも虫を落して、飛あがらせたるも、付句の一興ならんかし。

黑雲にむせぶばかりの晝の月　曉井

洗濯の衣竪横に張渡したるに、乾の方よりしきりに雷の聲をまじえ、　黑天のごとく走り、腰本・女ばらのさはぎ

たてる魂を移して、やり句の本意なるべし。

藥を取て小だけ大嶽　林子

入山採藥白雲深處と云、仙道士の砌、雲に吹ふといふより、高山靈嶽とてんじ付たり。

半麥に菜汁の腹も鳩の聲　莞爾

其人のたのしみ、假にも美衣・美食を思はず。衣は寒からぬを錦とし、食はとぼしからぬを厚味と覺へ、世上の人を目八分に見なしたるさまなり。

質草の根も枯れて行也　推扣

爰は其大隱のたのしみにはあらで、朝三暮四のくるしみ、身の上に請たる轉じ。

雪降てみぞれて三五十二月　鷗白

此前二句、人のうへを轉じ盡して又比と替る也。元より暮の仕廻不都合なるに、雪・霙に降つぶされて、十露盤の宛事ちがふ、三五十二月ならん。

人に乘らふか此大井川　誰也

大井河の水、みぞれまじりにしらけ流れて、渡らば凍え死ぬべき寒さ、いざ川越しの人に乘らふかとは、付やう一句の曲節古みをぬけたる行方。

斯成つて最明寺とはしらま弓　十竹

尤鎌倉を出て程ちかしといへども、かゝる墨衣にやつれたる身を、などや時賴とは川ごしも見知るべき、いざ八十川の肩にのらんとは、初心の屆かぬ付肌なり。

牛の餅も寐しづまる比　不又

旅泊に牛と枕を並べ、夜の衣の蚤・虱に寐苦しき時の觀念、實奇麗なる付方。

獺を生捕にして華の陰　兀山

陽氣の中の陰分に至りて、かならずしも造化の妖怪あるまじきにあらず。小僧・かぶろに化たるをしばりあげたるも、千三ッ咄に似て又おかし。

二葉の獨活の末は大木　除酉

其生捕たるを若輩者と見入れて、獨活はふた葉よりかうばしと付移りたるは、むづかしからぬた揚句の法と知る人なるべし。

百韻首尾

十竹

海山を夢に見て居る蛙かな　十竹
屋ねの窓からあたゝかな空　可中
出代も磨の押木に手馴來て　推之
いつもの聲の油呼なり　扇招
何につけかにつけ秋は秋なれや　汪沖
砂地で取た胡麻の三石　居士
分別は息子の世迚けふの月　巻耳
かんてうらいの杜ゆら〳〵　和雪
水草に鷺立澤とよまれたり　中
舟から拾ひたまふ上人　竹
敷皮に日の出の霜の消なんと　招
細がん首のあぶなかりける　之
鑿の目の筒鳥鳴てきほひ口　士

とほんと明た短夜の朝　沖
二人衆にわかれて鳴に華はなし　雪
身は苦汁のかはる安排　耳

百韻首尾

除西

物種に添て蒔けり南無あみだ　除西
けふの彼岸も落日の雲　常久
苔さま〳〵烏丸殿のもてなしに　曉井
秋の氣色の移さへ銀屛　坂車
船の月市を去る事五十町　居士
夜はきり〳〵す例の連判　三父
ゆで上る溫飩は霜にしらみ合　巻耳
はつと木の葉も追分の風　風野
手柄した今朝の小冠者の物語　久
日ごろ化ひた狸剃ぐなり　酉
飛〳〵に笠取山の一在所　車
いづれの代から社領三石　井
匆躰もおぼろの月の麻袴　父

息あたゝかに急度重引　士
御部屋から薫物焚て時の華　野
卯杖に當る腰のなよ竹　耳

百韻首尾　八十一叟 鵝洞

一天の雲吸ふ山の櫻かな
柴を敷寐の船の糸ゆう　林月
洗濯の二日つぶるゝ出かはりに　吟水
物喰かゝる膳の機織虫　楚山
夜芝居にさそふ相圖の窓の月　水明
桔梗のはなの風にうなづく　居士
橋板に石橋織で境川　卷耳
駕籠から明る青肌着とも　風埃
饅頭の万部も終る有難さ　月
內裏天下のぬるひ風吹　洞
高名をしたる褒美に女房とは　山
こらえ袋の洩る袖の雨　水
頬白の吼ひ華しておぼろ月　士

芋種化してみな蛙なり　明
老の花咲てト部の木工之進　埃
末座ながらも四間の春風　耳

百韻首尾　三和

彼世には笹に賣るべき粽哉
楓もわかき客の雜談　栢風
直晝の馬の陰嚢に汗かきて　卷耳
南に雲のおこる注進　倀予
國〳〵の濁りを鍛ふ名月に　杉月
鴿を餌に呼ぶ聲の秋風　春翠
酒好をもつて熟柿の右大將　居士
屁ひり双紙に增補しにけり　遊竹
横川では嵐小原は梅の雨　風
車輪のごとく空を飛行　和
彥七に九代の末の彥五郎　予
鷄は八聲に双六の妙　耳
閏の月消ても雪の胴明かる　翠

練かぶらせて萎〻も十七　月
神事に何百年の華も咲　竹
朝日に笑ひかゝる生え山　士

百韻首尾　心圃

名聞の彩色はなしけふの月
白木造りの床に白萩　桃川
鴈わたる都の冠者にかしづきて　兀山
有合せたる鉢で洗足　白雲
隣への自由切ぬく雪の穴　調千
博奕僉議の急な夜嵐　巻耳
寸尺もしれず湊はつなぎ船　居士
晝寐の夢の何と将軍　羽重
表具した美人を懸て泣かせばや　川
菊も匂はず窄の錠前　圃
村雲に有明かねてむら烏　雲
乳首に似せて甘草の露　山
向ひてもそふ〱用は申されず　重

縄がくされて釣瓶水底　千
本妻のろくではたゝぬ華の跡　耳
針ある木瓜のさもしかりけり　士

百韻首尾　氷蟲

金山や神は惜まぬ蘂ほり
髭あまさかる八重霧の中　林子
夢に見たちりやたらりに月明て　居士
苔のむす迄五十万石　巻耳
墨付を篭字に虫の喰破り　初汲
義平と申す唐人もあり　池天
片皿にひゞく冬至の杵の音　弓丁
狐の産に雲の夕照り　風鳥
一子細鼈相口のゆふだすき　子
此重忠がだまは喰まひ　蟲
しら波の大磯小磯うはの空　耳
菅の小笠の見やはとがめぬ　士
羽二重を古手に替て忍ぶ摺　天

まだ宵月の比の賓引　汲

御忌遠し初午遠し華遠し　烏

鳥の尾に尾を繼て永き日　丁

百韻首尾　燕説

説法の四十九年や九月盡

明夜の影の風羅万像　風姿

轡虫鳴荷取の馬の一ふしに　居士

人に燒刄をつける冷酒　竹枝

板屋ねに調子そろえて玉霰　翠山

ひきしづめたる琵琶の神妙　宵月

山二つ川をへだてゝにらみあひ　卷耳

余所に知られた柹の鉢卷　雲歩

辻賣の古鉄店に散る笹葉　姿

久居の町のかんこ鳥鳴　説

腥き精進達の寺社參り　枝

火入れに伽羅は戀の燒付　士

風さそふ風流な繪翠簾をさら〳〵と　月

蒔餌にはつと下るむら鳥　山

月華に尋ぬる人の小やかまし　歩

私橋をひけばきさらぎ　耳

百韻首尾　朝尺

佛名や麪類啜る口拍子

夜半の屋根の雪天に滿　卷耳

西國の二十五艘に火の見えて　藤乃

壽永の風に龜もじだんだ　鳧仝

つかまれた現さむれば栗のいが　和泉

七日八日のはあとした月　風六

三枚につけた鶉はしてやられ　不又

利根は空を走る小童　居士

雷りの奕の細口戸の透間　耳

万が稀なる明日の招待　尺

涼風に祈禱の札の二重箱　仝

葵の華のにつこりと咲　乃

立忍ぶ足に痿（シビリ）のきるゝ時　六

から手水して關の明神　泉
寒明て苔む七十五日前　士
月もたゞよふ苗代の水　又

百韻首尾　誰也

借り着して岡見や夢の大納言
落るか降るか極月の星　居士
嵐止む七尾八谷に鐘鳴りて　呑水
和談の濟めば船の穀物　右柳
有明も殘る旅籠の飯の段　此由
長雪隱に萩のはな散る　卷耳
利口なる聲は聞かず青瓢　鷗白
笊に鰻の一本もなし　燕說
吹募る比良のから風日枝下風　士
杖で分入る尼の道行　也
そぎ袖の昔にかへる世の中は　柳
冴たる月も市の名聞　水
何なりとあらば夜鷹の戀たがり　耳

無音に廻る醫者の仕習ひ　由
書て持つ花はきのふの役がはり　說
第一第二籠の黄鳥　白

百韻首尾　卷耳

大雪や八十嶋かけて日の移り
鑵子は煮える峯の冬枯　櫻川
鶴の子を肩や頭にとまらせて　椿又
あげたいろはの跡かたもなし　居士
あどなさのたとへばちらり三日の月　推扣
芙蓉の花の實よしの紙　一志
此秋は迚おいとまの壁訴詔(三)　凍左
手ばやにしまふすゝぎ洗濯　莞爾
其文を見せよといへば流れ川　川
きたなし戀のかへり忠とは　耳
蜂鵰(ママ)の四相を悟る此まなこ　士
虱も涌かず役の小角　又
夏の月虫のこはりに生艾　志

小判を拜む國も有けり　扣
初華に麁服麁食の政事　爾
寒さを消してまはるお降　左

百韻首尾　一秀

何石の欲ははかなし芥子坊主　一秀
入梅はるゝ甘味噌の虫　推之
箆耳の萬事共座に置て來て　湖寂
あがりはなから帯ほどく也　露竹
月懸て殘る暑さの十三日　巻耳
鱗にひかるなま鰯船　玉丈
折くべる萩や薄に酒の間ゝ　燕說
飛鳥井殿を鼻で挨拶　居士
淵は瀬とかはゆがられつ憎まれつ　之
匂ひは假のあなう世の中　秀
野机のまへの筵にさゆる月　竹
三ところ髮の子共三人　寂
白晝につゝきさがひたあがり膳　丈
片目を祈る神田明神　耳

名水に竹の筒賣る華の陰　士
夜明を待て出る鶯　說

國風流首尾七巻とは成ぬ。

享保七壬寅歳瀬暑下弦揮筆旅窓

越後州 山閒舎 巻耳 [中閒舎] [巻耳]

北國曲集大尾

書肆
京都 醒ヶ井通五條上ル町 杉生五郎左衛門
江戸 日本橋南一町目 須原茂兵衛
大阪 高麗橋一町目 芳野屋彌兵衛

北國曲集跋

以爲月空居士の境界、雲水の旅二十餘年、大空を天井と見なし、山野を疊の上と思ひ、世人を親族の如く、万物を朋友とみるから、既に六十余ケ國を巡り、其徒にあそぶ者貳千余人、天地ひらけて後、たはぶれ哥のおこなはるゝ道筋を傳へ、貞德・季吟の古式を興し、芭蕉正風の變化を輝かし、去年の春又燕說禪衲を伴ひ、山〳〵の雪消るより三越路をたどり盡し、漸初雪嶺に置く比、我が廢宅に杖を休む事久し。他日願ふ事有て文を綴つて曰、師や四隅の道の記あり（南海道は二人行脚と号し、尾の湖寂が述作。東國曲は濃洲葉三・水戸訂集、西國曲は勢州草風 梅風 紫筍等が撰所也て）みな其行脚のおさまる國の門子、梓にしるすと見えたり。此國の遊行終る所なれば、何ぞ彫鏤する事を許さざらんや。師点頭して反古を與ふ。さればより〳〵是を校考すといへども、繁多にしてまぎらはしく、今年五月雨の晴間をくりすまして彼地にわたり、燕子と共にものして、

桃舐集（もゝねぶりしふ）
路通撰

桃舐集序

勸進子路通、一箇の桃の實を拾ひて、壽域萬歲の風味をたのしむ。夫よりしてあまさがる常陸の海、しらぬひのつくしの果まで、誹仙の月花にあふれ、今已に洛中に遊ぶ。予も此こゝろざしに因む事としあるのみ。

肥陽　白川長水述

集をもゝねぶりとなづくる事は、九千歲をたもちしそのゝ桃、もろ〱の仙人望て舐れども、東方朔が齡にひとしきをきかず。爰に俳仙桃青翁、又一顆の桃を得て生涯の賞翫とす。其あまりを舐る類ひあまたなれど、信の味をしるものなし。此ごろ肥陽長水、京にのぼりて我と友たり。折ふし每につぶやきあふ事、皆古き翁の俤をしたふなれば、舌に馴、心に染て感動する事有、かれ是思ひあはせて桃舐といはんもむべなり。

路通漫綴書

桃舐集

君が代やあまの羽衣節小袖　二位法印

玄旨の君は道の聖にして、尊きおしへを受つたへ給なり。この句さらに今やうならねど、不思議にのこれるをよろこびて、いさゝか冥加あらん事をねがふのみ。

團もてあふがん人のうしろむき　芭蕉

是は盤齋法師みづから背向の姿をかきて、世の中をうしろになして山里にそむきはてゝや墨のころもで、と侍るを見て、殊勝さにかくいへる也。

むしの音のよはるや我も泣寐入　小野お通

信長の愛妾にて、さかりなる比は岐阜に有。すがたよりこゝろつきまめやかに、女文字うるはしく、言葉殊になさ

けをふくめたり。小町がふたゝび此世に出たりとて、をのづから小野ゝおつうとよぶ、十二段といふ草紙の作者也。そのゝち大薩摩とかやいへるもの、ふしはかせを加へ世に鳴し淨瑠璃のはじめ也。世かはり身おとろへて後、あまとなりて都にすむ。いかなる秋の夜にや口ずさみけむとあはれ也。

酒のふであたゝまりてやかへり花　なには休甫

これは冬の夜いたう酒すゝめられ、機嫌よさにあるじこのみて句をかゝせし也。一生かくれなき道人なり。

名所雑

あさよさを誰まつしまぞ片こゝろ　芭蕉

翁、執心のあまり常に申されし、名所のみ雑の句有たき事也。十七字のうちに季を入、哥枕を用ては いさゝか心ざしをのべがたしと、鼻紙のはしにかゝれし句を、むなしくすてがたくこゝにとゞむなるべし。

工夫　閑吟之俳連

つつくりとものいはぬ日も櫻花　路通
鹿の角なふてまだ初心也　長水
陽炎の野等平等にちらめきて　通
酒の氣でやら何もめんどな　水
次の間の衾をとんとさゝれたり　通
膝押立る冬の夜の月　水
やめられぬ戀は白身に我の折れて　通
しやれが過るとにくまれにけり　水
有し世の小紋の儘にあさ衣　路通
惜いところがくさる竹の子　長水
いつつもの輕薄いひのようわする　通
月かこつけに夜食堀るゝ　仝
幾秋か椽の下藝埒明ぬ　水
きくを作つて香にほれてゐる　仝

妙薬でつよひ疝氣の根をきられ　通
　そこらあたりは法花かたまる　仝
花ざかり本の都は是ならん　水
　黄金のやうな蝶〻の飛フ　仝
三間の町もふさがるはつ稲荷　通
　ちよつと契て緣が行あふ　仝
このごろは文のたよりのつんとない　水
　けふも朝飯を晝前に喰　仝
佛とも神ともしれぬこゝろなり　通
　日和よければ二千里もゆく　仝
あちこちと鐘の相場を狂はする　水
　おしげもないは鯨獵(蠟)燭　仝
惣〱が毛虫の留主と樂こいて　路通
　終死ぬる子は親のさいそく　仝
薄月に奥から口のうそさむく　水
　部屋のきぬたのとをう聞ゆる　仝
小比丘がお寮をまはす盆の中　通
　金剛くはへた犬しかる也　仝
一はへな干鰯俵のほろくさき　水
　水でさつぱと皃あらいけり　仝
花曇り鐘は上野かあさ草か　翁
　はるの翁をうつゝにも見む　執筆

天然

たはらごやなんとおもふて波にうく　長水
　どうやらこやら仕舞フ大際　路通
もどり駕籠のるも乗するも徳とりて　仝
　おかしい方へ岩が出しやばる　水
夏の月ことしは雨も順にふる　仝
　鞠の上手が此町に有　通
ちよつとした事で埒明陰訴詔(訟)　仝
　酔たまぎれに節句請合フ　長水
まはされて臼のやうなるものおもひ　仝
　横堂うつて逆の道者衆　通
大キなるおとこの影に川を越ス　仝

さゝらの段をのぞまれてする　水
むさくさと不性皃なる月の前　仝
盆がすぐれば袷出さるゝ　通
霧ふかい山にはほつと住あかれ　仝
四五百借に哥よむでやる　水
やがて咲花と見る間ぞおもしろき　通
知恩院にて御忌がつとまる　水
ながき日にそばをはなれぬ弟分　通
氣のよい駒を無理所望する　仝
伎にしてゆたかに見せし今年稗　水
夜は常香の晝に一倍　仝
木戸うつて月を詠る金が崎　通
よめもむすめも撰て出されし　仝
古禰宜の幣ふり立て涙ぐむ　水
五三の賽をいたゞいて乞ァ長　水
とやかくとお髭の塵をとりかねて路　通
半分蚊屋の外に身を置ク　仝
ひつやりと手にさはりたる鈴茶碗　水

ざつとあらふてなをすまな板　通
堺から皆買躰に出たゝれ　仝
神樂の音のたえぬ住吉　水
假名でかく菱蕃の通ひもかけて有ル　仝
ひろひつぼねに入かはりけり　通
花咲て利口な人がとろふなる　水
小鮎ながるゝ雑魚も妄雑も　仝

本間丹野が家の舞臺にて

ひら〳〵とあがる扇や雲のみね　芭蕉
青葉ぼちつく夕立の朝　安世
瀬を落す舟を名殘に見送りて　支考
はなれて家を造る原中　空芽
月の前きぬたの拍子のつて來る　吐竜
大かたむしの手をそろへ鳴　丹野
傘をすぼめて戻る秋の道　芽
窻からよぼる人の言傳　翁

さつぱりと物を着替て連(ツレ)を待ッ　世
夜の明るやらしらむ海際(ギハ)　考
いふ事にこゝろをつくるわかれして　野
眞向(マムキ)の風に額をふかるゝ　芽
よう肥たむすこのすはる膝の上　翁
そろ／＼江戸の草臥が來る　通
手ひとつでびたひらなかの恩もきず　仝
ちつとの事に枝節がつく（原本作者名闕、以下準之）
月花を紀の宮にかしこまる
あゝらけうとや猫さかり行　丹野
石塔(シヤクタウ)を見にとて今朝はとう出る　仝
勢丈(セタケ)のびたるせがれ氣づかふ
黒面な中間がよつて不了簡(ケン)
豆ふみ出して高い駕籠借ル
きぬ帯に錢をはさむで穴があく
なじみの町のちかづきもへる
名月の餅に當たる關東早稲　葉文
ことしはいかう渡る安持鳥(アヂラ)　仝

萱葺にしつぽりとふる秋の雨
いつ作つても詩は上手也
女房に只わらわれぬ覺悟して
尻かれ武士の二番ばへ共
土手筋の紫竹は杖にきりたくり　丹野
田のくさどきにはやる富士垢離
蚊のゐずはあるものでない夏の月
酒塩と名をつけてのまるゝ
病ぬいて結句まめなる花盛
どちらへむくも空はのんどり

みじか夜の寢覺に

ほとゝぎす夜明はむさしたばこ盆　法譽
つゆがはりにて白き紫陽草(アヂサイ)　路通
上機をとんと下手氣に織出シて　月尋
包丁とぎに宿をからるゝ　月尋
先しても二目置ても念がない　路通

菊から續く後の名月　全

唐黍のからをたばねて積でのく　月尋

ひたと此秋寺がごそつく　全

堺へも岸の和田へもかただより

十九土用のひどひ照出し

によろ〳〵とわせて娘をなぶらるゝ

わる氣がないで間があふてゆく

一二膳椀がちがふて手がわるひ

分にまはさす伊勢講の銀

霜先や月も角たつ八日ぶき

屎(コエ)舟つけける町のつきぬけ

花による鯛や鯑を持ありく

出替つもる奉公のやど

路通のわかれて京にゆくを送る

麩ばかりも京のを喰(クイ)に夕すゞみ　休計

蛙もそらに高あがりして　路通

があ〳〵と烏が飛ば鳶もまた　全

米さしさいて河岸(カシ)ばたの番　斗

月にさへヒ難いふ也たりひつみ　全

新酒と古酒とまぜてのまるゝ　通

毛の上は先滿(マン)作(サク)と見られけり　全

いもとむすめの緣組の前　斗

かくいひさしてやみぬ。

春

鶯に口きかせけりむめの花　路通

寒菊のうねゆづりけり福壽艸　天滿　幸方

とし毎やすゞなすゞしろ拍子利　ナニハ　休計

鶯や雪折のない竹の枝　豐後　松風

梅がゝや空寐してゐる鼻の先　加州　素蓉

竹の葉や梅の瘦木が咲いづる　大坂　月尋

さく梅を作過たり横たをし　江戸　杉風

木槿咲や三歳駒のはしり競(クラ)　肥後　蛙吟

むまのはなむけするとて

目一盃かげろふはれよ伊駒山　やまと 葉文

海の上にはる〲来ぬる胡蝶哉　久留米 西与

はるの日や鳶の尾ひねるうら表　加州 輕舟

鶯の菜畑にいる夕日かな　阿蘇 惟克

杉菜より小石はみ出す野馬哉　加州 輕元

北嵯峨や梅に垣する女郎むすび　園桃

ちら〲とうそ輕薄な胡蝶かな　知流

青のりや干加減ようていその松　楠烏

夕虹にまた鳴あがる雲雀かな　南甫

野寺

山門の背まばゆし田にしとり　西吟

海老の目をかりて海月も汐干かな　加州 如董

大事けに降出しけり春の雨　譽風

あたらしき事もすくなし春の雨　肥後 琴舟

陣釜の水はくさつてかはづかな　短長

呼にやる人も戻らず朧月　北枝

舟まちして

日ながさや雲にまぎるゝ鳴海がた　枝東

大名のあとゐかはるや花の山　雨青

述懐

藝もなき身のたぐひかや松毟　越中有礒 拾貝

はなのかをよういたはりし微雨哉　不二

まんぢうで人をたづぬる山ざくら　キ角

鳴瀧をこして西山にゆくとて

松老てわかまつはへて嵯峨野哉　路通

飛出て事もありげに蛙かな　加州 孤雲

氣のきれた人にとはゞや春の昏　肥後 元安

花に来てよいすげがさをどこへやら　草部氏 吉近

一夜切よしのゝやまはまつふぐら　竹葉

初ざくらそろはぬ人の歩みかな　松花

すき腹をしますや花の酒くらい　民屋

遅ざくら此ながい日にゆるりくはん　城ヶ 花仙

雛がたにくはつと見せたる櫻かな　仝 櫻雀

はるもはや皆になしけり餅の屑　温故

夏

面白の花のみやこや青葉まで　長水
山みちに紅ふかきあはせ哉　芝柏
から竿に日足いそがし麥こなし　休計
なまぬるふ末摘はなのおとこ哉　如醉
餅種の餘慶うへたぞ檜木笠　羅（めがみ）陽
親と子や尻むけあふてさなへ哥　城　隱山
布引に村肝煎の田うへかな　ヒ　如ケ硯
藻かり舟たんとのせたる螢かな　仝　溪ゴ石
明しらむ鵜舟にむさし笧鍋　仝　琴子
紙燭して蚊をたく雨の夜半哉　仝　素芳
谷風にふきいださるゝほたるかな　入殘
かいくゞる鵜の息ながきよどみ哉　夏井
花散て無下なるさまや坊主芥子　可笑
橋柱折れてほたるのわくよ哉　葉文
つり初に寐て見る晝の蚊帳哉　久留米　惟斗
眞菰までつきつけにけり蒲賣　肥後　印斗

五月雨やうつかとねてのたばね髪　溫故
青梅の實をかたむる夕日哉　（ながさき）乏通
南天のはなや德利の飮あまり　芳弓
山中ややまもゝすもゝ畑五反　加州　旭江
乘物にのるべきとして鵜舟哉　仝　左右
飛彈午も百里出けり五月雨　夕市
ほとゝぎす枕もふまず子もふまず　共角
時鳥まちかねやまや角の方　大坂　契松
子規これも沖（マヽ）のひとつ也　豊後　霞山
さゝゆりに腹さすりゆく鹿の子哉　賴元
むせ〳〵と荊棘の花に照火哉　南甫
傘をたゝむゆふべや時鳥　松水
夕立や布賣瓜賣茄子うり　加州　芦錐
ゆふだちや下主の言葉のあともなし　仝　李艸
こゝろよやあたらし屋ねに一夕立　ノ之
二桶の水うつあとの白雨かな　和嶋
うちくらみ夕立すなり隣村　肥後　江橋

閑居

塵の世をうらはらひにして凉哉　松風(ぶんご)
人しれぬ金の重さや夏の旅　如童
いもくしの顏むづかしきあつさ哉　和嶋
辭世に侍るとて此比きこへし
ほとゝぎす聲置(テイ)てゆくばかりなり　女 げん
むしくりを押ながしけりだんだ雨　小春
六月や風にふかれにふるさとへ　囉ゝ里(哩)

旅行

幸のあせのごひ也すみごろも　僧 使帆
蚤蚊にもやどの名殘よ合歡の花　仝 秋坊
いさゝか勤むべき事有て、江戸におもむく旅のやどりに、ふつゝかなる繪ながら、琵琶をだかへ、馬に乘し女の姿也。彼夷の國にゆきけん人よと哀さに
照(昭)君の繪とみじか夜の旅ねかな　万子
上魂な顏猶あつし土用干　琴松
いとしほの寄あつまりや日傘　枝東

このあつさ女もあるに坊主哉　使帆
あるものゝふの家に、曾我の助成(マヽ)いまはのとき着たりと云。ひたゝれを傳へて祕藏す。千古そのこゝろざしの朽(朽)ぬ事も尊ふとさよ
ひたゝれの蝶はよはらず土用干　栗文
不思善不思惡
雨降て地のかたうなるあつさ哉　通成
神鳴にこたへつめたる御秡哉　雨青

秋

更る夜や薫物姫のうちはもち　乙州
ことし竹も淋しき秋の始哉　路通
はつ秋や小袖だんすの銀の鎰　巴水
かなしさを覺へそめけり一葉舟　周來
星の橋くづれ落るやあさがらす　長水
蜘の巢をひとすぢかけて萩の風　和風

しらゆきの大やかなれや稲のはな　枝東
萩の露こけあつまるや三かの月　通成
初秋のうつり過たる苫屋かな　南市
澁柿の切角つはる木ずゑかな　夕市
むしられて夫でも枯れぬ穂蓼哉　魚素
新蕎麥や所化ちかづきの大キ家　左右
喰ものを案じ出しても夜寒哉　雨青

古風をくやみて

なまなかにはなれぬ柿のしぶみ哉　水翁
山ぎはについと道ありそばの畑　之凍
をどりたる夜をさすられて寐る子哉　柯(くろめ)德
念佛より苦もない人のをどり哉　蛙吟
あさがほや遲かれとかれ花のつる　孤雲
あさがほや時斗の下に寐る小僧　一聲

玉祭る禪僧

僧はたゞしぶとき顏よ玉まつり　葉文
あさからの箸のかるさや無別法　大ツ吐龍

盆の十五夜、人しづまりて三條の大路に出る。牛の車の塵もおさまり、處／＼の軒に灯籠殘りて、四方の空つねならず、橋にイてしばらく心をなぐさむ

望月や盆草臥で人は寐る　路通
送り火や懷(ダイ)てゐるのは忘れぐさ　定方
犬吠て萩の露ちる後夜の風　肥後松月
白晝になきゆく鴈のひとつ哉　加州四睡
大嶋の夜着引かぶる夜寒かな　呂谷
落栗をかぞゆる菴のしまつかな　一柱
獵(蠟)燭はながれて更る夜寒哉　長水
たがためもおもはぬ山の苫ところ　宮川宗信
あさがほもしやばを引ずるかつら哉　あそ南郷僧夢仲
下紅葉切るやすゝどき山刀　加州和風
松茸の香ほそき夜半の山路哉　肥後尼如空
葛花もしらねつゞきの寒さ哉　南甫
ねつそりと好や夜寒の鰥汁　魚素
わたやふく砂ひへわたる宵の月　月尋
山伏の稲の中ゆくゆふべかな　城ケ不旧
ちやゝこちやに伽羅の香となす野分哉　江橋

秋のよや檜垣の水のわかしざめ　使帆

長刀のさやふき落す野分哉　肥後 文通

ものゝふのなれの果見るかゞし哉　笑猿

ほろ〳〵と雨も拍子の砧かな　の と 通應

毛見どきや日昏方よりむな算用　虚程

月ひとつ水も定る最中かな　一舟

名月や股立おろす舟の供　季邑

秋の月梯より上はあらはるゝ　輕舟姨九才 粲

うそ寒き月にたてるや葉鶏頭　渡流

餞別

手〳〵にもつ菊とりかゆる別かな　万子

かれはぎや柚みその釜のくらいさし　從吾

冬

山居のこゝろを

茶をたべにはる〳〵雪のこみち哉　使帆

人がほも見ゆるや闇の雪あかり　かゞ 如此

雪ふりやからすも鷺の遠ながめ　ふんご 路柳

雪ふりて乳母尻すゆる茶の間[illegible]　松風

阿蘇の南郷は都の傳もうとく、國の府にもちかゝらねど、親のおやより住つゞきて、花さく谷、月の出るやまも目なれたれば、たのしみとするにたれり。此たび京師にいたり通子に逢て、わがやまの八景の句を求む。幸、好士の作ありと、貞室・蕉翁の句までひろひて一巻となして送り給ふ。此みちの執心ふかき徳かとよろこびて

一瓢の飲にもあらで

月雪にふりをつけたる山家かな　蛙吟

歳暮

折〳〵の師走わすれや火燵の間　葉文

晦日やはや来年に氣がうつる　路通

桃舐集終

井づゝや庄兵衛板

（校訂者曰、金澤市殿田良作氏の藏本を借覧し、筆寫校合せるものにて、氏の好意を謝す）

笈のわか葉

雲鈴著

序

一卷を袖にして來れる僧、摩詰庵雲鈴の主は、佐渡・越後の國の間に漂泊する事はたとせばかり、月のあら礒に足を洗ひ、雪のたかねに天窓を振て、風雅に富る人なり。ことし凉莵が國に歸るをたすけて、空ものどけき春日山の麓・高田の市鄽を出て、戸隱・さらしなに古人の跡をしたひ、よそ目あやうき木曾のかけはしも難なく、寢覺のそば切に笠を忘れて庐山の雨にぬれつゝ、一歩の功を積り。されば劍に乘り鯉に跨つて、乾坤の外にあそべる人も、今笈を負ふて若葉をくゞり、杖を曳て流を渡るも、はたひとしからんやと此集の名とす。

正德乙未夏五月中浣　　　　蘆本書

笈之若葉

摩詰菴雲鈴選

越路へと杖をとりて、瑞垣の朝日に首途を祈り、立歸る夕、又草鞋ながら廣前に再拜す

外宮

目に淸し淨し千枝の若葉まで　　凉莵

内宮

御鏡のはるかに寒き若葉かな　　雲鈴

川音も只有難し夏木立

なにごとも打忘れて畏る。

神風舘老人凉莵、去年の秋より北國に行脚して、高田の城府の雪にこもり、

おもふさまふるまはれけり越の雪

といふ句の聞えぬれば、その返事に、

木がらしのいつ爰許へ　車僧

ことしの陸(睦)月柏崎にて、ひさしき物がたりに晝夜をわすれ侍る。同行會北は武江にわかれ、此春は木曾路のひとり旅寐せんとあれば、老のたすけともならばやと此行にくみし、旅立日を契り、老人は高田に我は草庵に歸りて、二月二十日あまり留別の句を柱に殘す。

きさらぎや未寒けれど出雲崎

餞別

そくさゐで伊勢の二見よさくら貝　篠話

雲雀たつ空をねらふやぬけ參　盤槐

春の野に出て思案は未早し　泰常

若草やいまだ屆かぬ牛の舌　鶴應

朝〳〵の霞は寒し山づたひ　仙潮

柏崎

十余日此所にありて、旅立出る日は、人〳〵餞の酒呑むと、松原に關をすゆる。

柏崎をば桃の花より狂ひいでて

長井太雅、菅笠を餞す。みれば、

花　簦ハ　行ー脚ノ　甲

此甲ならば、木曾地の淡雪もふせがむと、たのしもしくおもひ、申の刻ばかり出れば、老人重英、鯨波といふ所までおくり來る。太雅・蟠室をはじめ誰かれ追來りて、旅店は下條何某が亭に極む。道の程一里。

此あるじはむかしより、その名つたへたるよし、重英物がたりあり

花の宿や木枕までもむかしめく　雲鈴

青苔はいつの宮笥に見る笥ぞ　重英

伊勢までの人のこゝろぞ花車　郁翁

山笑ふ柳をしたふ名殘かな　季盛

若草を越路にしれよ旅硯　巴山

鶯の音を松風の吹てゆく　園雪

直江津、過角亭にいたる。その内にしらぬ人もあまた見えたり。

うぐひすになかせて聞は何鳥ぞ　雲鈴

めづらしや何から語つく〳〵し　陸夜

行春や木曾路と聞ば又寒し　過角

凉菟の餞別は、市中を隔たる所に席を設けて、おの〱集る四十餘人、まことに賑しきと也。

さくらさく伊勢の料理の折もよし　雲鈴

此ほどのあなたこなたや櫻さく　凉菟

彌生十一日、楚耳亭を出る。今泉橋といふ所まで來る人〱あり。

ふら〱と歸かねてや小田の鴈　凉菟

雲鈴主も此行脚のくみとかや

まだ一羽行鴈見えて何とやら　皎雪

荒井の驛まで來る人〱は、菟行・楚耳・嵩巴・皎雪・神林・鬼七・兵衛、是皆凉菟が徒なり。今宵のあるじは野田何某、庭前を見わたすに殘雪の山一里に遠からず。

暖かな雪をながめて旅寐かな　雲鈴

此宿の名に對して

荒井とは鎌倉にこそ山ざくら　凉菟

有野亭　酒旗をたてゝ、にぎはしき軒也。

つばくらの一さし舞や杉の門　仝

爰をたつ日までは、神林はいまだ殘りて送る。甘泉の主はしばらく此地にすむ人なり。餞別の句あればその返し

おくられて跡や見かへる雉子の聲　雲鈴

人〱にわかれて、是より誠の旅には極りぬ。けふは空のけしき心にまかせず、笠の端のはら〱としければ、

華の雨先首途から降かゝり　雲鈴

關山

笠とれば爰關山や岩つゝじ　凉菟

黑姬山　爰までおそろしき山也。

春の雲黑姬山がついて來る　雲鈴

關川

燒食に味噌ぬりたるを、此國にてけんさいといふ。串にさしたる名目なるべし。是を二つ持出る

けんさゐはとがめじ關の花ざかり　凉菟

燒食に魂いくつさくら狩　雲鈴

野尻

しばらく茶店に休みて、湖水を詠め侍りけるに、此所の名物とてさ

くらうぐゐといふ魚を、主の出し
ければ

酒うけてうぐるひとつもさくらなり　涼莵
湖のけしきはさくらうぐるかな　雲鈴

善光寺　岡田木椊亭

そのまゝあらはす色や春の山　涼莵

如來堂に詣て

生て花に此内陣ぞ有がたき　雲鈴

戸隱山に詣。行程五里、山に山をかさねて、さかしき岩根を傳ひ、半腹にのぼれば、後は飛彈・信濃の國をかぎりて、雪の山まばゆきほどに照わたり、麓は春の半をあらはして、草靑み桃櫻盛也。それより神前にぬかづき奧の院に詣。その道一里、雪はたちまちに脛(ハギ)のうへこして、家はいづこに有共見えず。老人云、されば此御神の爰に立せ給ふ事は有がたき故あるべしと聞ば、信心今さら也。

神〱し戸隱の花の松檜　涼莵
戸がくしの尙奧ふかし雉子の聲　雲鈴

川中島

あなたを見やれば、西條山黑みたり。是こそ古戰場とかや。

そのときの車がゝりや飛雲雀　雲鈴
一備あれにも山のさくらかな　涼莵

姨捨山

けふは曇がちにして定かならぬけしきなるを、のぼりてみれば、雨奇晴好とかやいふも此あたりの事なるべし

姨捨や曇といふは花の事　涼莵
おば捨の山の匂ひやわらびまで　雲鈴
打かへす田毎に見るや笠の影　仝
月花の名をさらしなや我心　涼莵

一本松といふ峠にのぼれば、冠着が嶽は笠の端にならべみゆ。雨に風にあらましくなりて、駒の足は雲を分る心地也。柏崎よりおくりし堅甲の花簦もあやうく、麓にくだり麻績といふ所に泊り、枕引よせてうき世のおもひに

はなりぬ。

淺間温泉　犬飼の御湯とかや、此所にて しはらく旅のつかれに浴す。

夜の花に湯の涌をとや枕もと　凉菟

つゝじ藤匂ふ淺間や湯の烟　雲鈴

善光寺の未格が本より傳したるよしにて、松本の府より遊潮といふ人、つかふべき物どもしたゝめさせ來て、宵の間の物語し、頓て其所にて待べき約束して歸る。

花折てつとにうぐるのかざしかな　遊潮

松本　天神の松原といふ所に、席を設て興行

悠〳〵と松の茂りや神の馬場　凉菟

此松風は都より通ふかとあやしき程也。

春風の爰にも松や南禪寺　雲鈴

宿坊は本立寺に極む。

雲水の便にもとて、此國のはゝき木の枝きりて雲鈴に餞す

はゝき木の枝の茂りや和哥の友　聖人 日觀

留別

うのはなの寺を見歸る夜明かな　雲鈴

百瀬村

萩原氏定茂館にいたる。いせざくら・松が枝の盛いとよし。

松櫻中よき枝の若葉かな　雲鈴

信あれば德あり花の青葉まで　凉菟

櫻澤といふ所を過る。是こそ木曾の麻衣とよみける尾張領とかや

橋こえて見かへる春やさくら澤　凉菟

直江津の過角が餞別に、木曾の寒さを申侍るは此事なるべし

是ひとつちがふ木曾路の袷かな　雲鈴

贄川

此所の時楓は、風雅の聞えあり、まして神道をおろそかにせず、たのもしきあるじ也。

時鳥そなたに鳥居峠あり　凉菟

此亭に芭蕉翁の書賛文臺あり

うの花を見よとや明て二見形　雲鈴

遊甫棄にあそぶ。そこらの風色ひとつ〳〵算ふるにいとまなし、主

の加流老人、山葵と五加木をつみ
來れば、鈴一壺を扣て笑ふ

若葉〱それも壺中の糠味噌も　涼菟

月花にざく〱汁やほとゝぎす　雲鈴

羇路吟

おくられつおくりつ果は木曾の秋
とははせを翁の留別の吟なり。う
つり行夏山の俤をしたひて

見おろしつみあげつ木曾の夏木立　涼菟

梯

かけはしや一方はやまほとゝぎす　涼菟

かけはしや笠のうへ行時鳥　雲鈴

寐覺の里はむかしよりその聞え高く、

谷川の音には夢もむすばじを
ねざめの床と誰が名づくらん

とは、やんごとなき御方の詠じ給ひし所なり。さるを今は門前のそば切の幻術に名ありて、旅行の人の立よるに手がらは見せたり。

そば切に晝の寐覺の若葉かな　雲鈴

妻籠　加納木蔦亭

むつまじき妻籠や木曾の麻衣　涼菟

千旦林　小千宅に舍る。

かうばしき千旦林やほとゝぎす　雲鈴

內津

茶店に雨を晴し侍るに。あるじのおのこ、廻國の御房ならば、うつの山の哥よみたまへといふ。かゝるむかし物がたりに似たる事も、行脚の一德と此句を書てつかはす。

うのはなの夢かうつゝの內津の山　雲鈴

虎溪山

若葉より虎溪の雨はしづか也　仝

名護屋

うき世の塵をはらふと、宗祇法師は
盜賊に侘給ひしとなり。今また老人
に申侍る

侘言で髭そりたまへ祭前　夕道

あつくろし宗祇の旅も髭男　涼菟

東照宮　祭禮を拜し奉る。

落しては來ぬか祭の小唐人　仝

僧大椿に舍りて

うの花の曇ねらふて旅寐かな　雲鈴

十竹閑居

芭蕉翁しのぶ摺の筆、持佛堂のか
たはらにふるびてかゝれり

夏草やいまだうき世にしのぶ摺　雲鈴

ふたりの旅行、たゞうらやましき
のみ

竹の子や角なき所〳〵の物がたり　十竹

素覽の墓所を尋て

蔦も今茂るをみれば先泪　凉菟

鳴海

蝶羽亭につく。是は古翁の笠を休め申されし事度ゝなり
とかや。弟の龜世も、翁にはしかられたりと物がたりあ
り。老人も法屬も心安き舍りにして、しばらく草臥を晴
す。

洒呑て寐たり起たり行ゝ子　雲鈴

此閑居蝸廬亭にのぼりて樂書。

時鳥啼かと山の雯らまで　凉菟

正德五年五月廿一日、同行二人

竹の子の根を堀や海の側ながら　蝶羽
てら〳〵したる夏の有明　雲鈴

此浦より船催して送る

出船の芦の茂りをわかれかな　龜世

留別

此名殘ほし崎に夜の明やすし　凉菟
松風の里をば出て暑さかな　雲鈴

蝶羽・鯉走・一溫の三人は、いせの國まで來る。追手早く
吹出し、その曉川崎の湊につき、終に船中の句なし。羽
子が國に歸る日、

凉しさを分てたがひに別れけり　雲鈴

西行谷興行

此寺は今も無言かほとゝぎす　仝
わか葉の道の谷の一すじ　凉菟
神風をあふげ山田の御田扇　雲鈴

是は神供の御田植に用ると也。蝗を拂ひ、ある

は疾氣を受ず。常は文車のうちに納るとかや。
神代の古風今に明らかなり。

團室興行　其先は八菊

其上に又新しや苔の花　團室
森の茂りの寒ひほど也　雲鈴
乘るからは一日牛の心にて　紀之
後に照ふと暮かゝる月　柴友
ふわ〳〵と柚味噌並べてあふぎたて　賀枝
蔦もそこねず押せば戸が明ク　莵史
ウ
此比は着る空もなき褻と笠　杜莫
清き渚に玉買ふとは　室
ふつとした言葉を戀の橋にかけ　鈴
伽羅皮なれども留てしほらし　之
道具から亭主の心押はかり　友
子を譽ながら鼻かんでやる　枝
さら〳〵と白波立て絶屑　史
やかで節句の菊も天然　莫
三日月に何やら祈る小山伏　室
こちから見ても瀧のひや〳〵　鈴
衾かと取廣げたる花の雲　莫
祖父はけふも畑打に出る　友
二
大佛の鎌倉に今雉子鳴て　枝
物を落せば荷が輕うなる　史
名乘らずに本田と見ゆる供廻　之
擬法を抱て凉む新橋　莫
稻妻の尻から兀て跡がない　鈴
彌助狐の栗に鳴らむ　室
馬醫者の羽織吹るゝ朝の月　友
御門徒寺の宿に似合はぬ　枝
物に飽氣はなけれども欠して　史
若衆の爲に奈良茶致ふ　莫
立ながら火燵にあたるうはの空　室
揚屋に寒き葛籠投出す　鈴
ウ
朔日にうるさがらるゝ鉢坊主　之
戻た左右を先へ走らす　友
北國は弱い〳〵と米の沙汰　枝
網打人の側にうつかり　史

石を切音もあなたに山の花　　鈴
　つゝじを分る道は一すじ　　之

三十餘日此所に逗留して、虱のうさは忘れたり。さらば
待人はなけれど越路へ歸らんといへば、主も此行脚とも
にせんと出たち、けふは神風館にて餞別の盃をかはす。
その中に日吉某ありて、とぶきの扇をひらく。

旅立やまぢかく見えし雲の嶺　　雲鈴
　しばらく南枝にとゞむれども、北
　風をしたふは、かりの舎りにも甲
　乙はみえたり
木末〳〵見かけて蟬の羽かろし　　紀之
此國の園は手にもつかぬやら　　羅白
行雲に螢も乘らば我も又　　仲己
あたまより涼しう成て首途かな　　爲齊
風に乘る姿ぞすゞし雲の袖　　柴友
ねり酒の白根に涼む比もよし　　賀枝
冷水はたしなみたまへ荒乳山　　芦本
さみだれの名殘の雲の鈴鹿山
　古郷遠き旅おし（マヽ）ぞおもふ　　老人 正珍

鹿鈴山

しばらくはうき世にすゞむ鈴鹿山　　雲鈴
先涼し鈴鹿を雲のふみはじめ　　團室

彥根

五老井にいたりて菊阿佛に謁す。心許なき病床の先はつ
ゝがなき事をよろこぶ。

老鶴の蚊屋も壺中の天地也　　雲鈴
罷出て藤馬も蚊屋に凉みかな　　團室

此度選集の物語の事は、病中の障り成べしとさし置て、
彼二ッの祕卷のおぼつかなき所を明し、扨此ほどの時鳥
はと申ければ、

　なつかしや勸學院のほとゝぎす

此句世に古しといふ人あり。雀ならでは外に囀りたる沙
汰なしと大に笑ひ申されしが、ほとゝぎすはなにを囀り
けん、いとなつかしく侍る。

瓜さらし間の渡しやほとゝぎす　　曰良
生れたて佛も聞やほとゝぎす　　越闌
夕立のぬれ聲啼や郭公　　冶天

ほとゝぎすなくや夜鰹はつ鰹　僧　孟遠
ほとゝぎす一聲啼て千團子　呉川
傾城のきせるはたくや門涼ミ　紀逵
凉しさや瓜盜人の丸裸　張會
夕立や尻馬に乘る武藏坊　隨子
塀越にさらし呼けり花葵　木導

孟遠は去年の夏法屬となり、西國の方へ行脚し侍るが、我かたへも文通もあるよし、行違ひぬ。いかなる哀を云來しけむと、むかし住たる四十九軒を詠やりて通る。

此雨唫は十年ばかり先、かり初の事なれば、人にはみすまじきよし申されしを、此集の記念に出しぬ。

松茸は出ぬかと問ふて旅寐かな　雲鈴
　先落つきは初備(カツイ)の食　許六
俳諧の下手を算へて穐の夜に　仝
　田舍の月見袴肩衣　鈴
上草履はいて亭主の咳拂ひ　仝
　乳母にわたして供の行列　六
張立をさつと披て手傘　仝
　捻りを配る鶴の御廣め　鈴
堺町果れば日脚勘へて　仝
　澁谷のやしき六ッの札留　六
すゞ風の股打ぬいて野にかゝり　仝
　尾張を投て戻る道づれ　鈴
かたむいた本願寺派に盆の來て　仝
　内儀の所望踊あつまる　六
月の戸を明て汲出す手桶酒　仝
　ガンドウ打て内はから家　鈴
珠數の實の祈れば積る花の山　六
　ちらとも客の見えぬ日永さ　仝

湖南

月沈軒に至りて我笑士に對す。士云、前途はるばるなれば、別墅喜水亭にしばらく納涼すべきよしにて、湖水を我物にして旅行の安樂爰に極む。

たまたまの扇にのせむ雲の嶺　雲鈴

暮水樓序あり、略之

白雨や比良より雲の出來心　園室

木翁亭

植た手も洗はでや竹の下涼み　仝

三井の門前にて與行

八景をこゝろに涼し竹のおく　雲鈴

園室生の越路に吟行のつゐで、大津の驛にして、とゞまる事數日にして北にむかふ。梶に手をかけて

涼しげに鷗出むかふ舟路かな　尚白

ともなふ人、雲鈴子を見送るとて

虫ほしやさらへえて歸る笈の文

蕉翁のむかしをしたふて、伊勢の涼莵、奥羽の旅を越路よりめぐりて年來の志を果さんと、正德四年の卯花月朔日、湖南の信友に暇乞し、我笑士の餞別の名殘をおしみ、一葉の舟に漂泊し、はる〳〵の有乳・木の目のけはしき峠を、曾北が杖引道〳〵風雅を正し、加陽の龍士に信をかため、それより倶利伽羅につゝがなく名所〳〵を採り、名もすさまじき荒磯をつたひ、

をのが葉に片尻かけて瓢かな

と斷腸の至極をうたひ、越路にとしを明し、衣更の末つかたに老の弱りに津輕外の濱への行程、万山雲を隔、いとつかれたる其氣力にてはいぶかしと、人〳〵のいさめに應じ、古鄉へ歸るべきに極りぬ。されども老の獨旅の覺束なしとて、小者など道のよすがにも哉と、そこらの連中沙汰し侍る事を、つく〳〵此雲鈴子、おもふ一ふしをかため、名も高き老の身のもし道すがらのいたづき、ちからにもならばやと、彼岸ざくらのつぼむころよりうかれそめ、しばらく柏崎に名殘の足をとゞめ、又櫻園よりはね出、戸隱山を心斗に拜み、善光寺に一夜泊のかりね、打あかしたる鐘の聲に老人の句のなきも、さすが五十鈴川の流を汲る人よと殊勝なり。おば捨・更科のむかしをしのび、一句〳〵は此集に書とゞめ侍りぬ。柿の若葉の比には溪流遙にひゞき、木玉にこたふ。左右を詠れば時鳥のとびゆくさま、漲る水に音を添へ、世にためし

なき絶景に興をつくし、いさゝか志をうたひ、木曾路のうさに日數をしのぎ、尾陽に一日つかれを休め、神垣や内外の宮に詣て、團室亭に旅やせをわすれ、また旅心のつき初て、湖南の旧友なつかしきと五月の末、漣に足をあらひ、しばらく名殘をしみたる折〳〵の物がたりに、雲鈴子が實情を感じてとがきをなす。

待花を見捨る庵や人まかせ　竹青堂 正秀

歸るべき道をわすれ、日數ふるほどに、けふは喜水亭に此句をのこして、此ほどの芳情を報ふ。

是からはいづくの軒に猿すべり　雲鈴

（校訂者曰、原本柱に上とあり、或は上下二卷本なるべけれど、他に類本を得ざれば、帝國圖書館藏本のまゝ載せたり。）

その濱ゆふ

嵐雪
朝叟

その濱ゆふ

ことしやよひの半より夏かけて、太神宮ふしぎの示現おはしけるとて、洛中の參宮日ごとに三万にあまり五万にみつ。（國々の奇瑞は說〻繁多にして略之）大津・松もとの船は膳所より御沙汰ありけるが、往來煩はしからず、或は菅笠を配當せられ、團をくばり、所々に接待をかまへられたれば、をのづから道中物忘なし。宮川の岸には、おほやけより奉行ありて、上つ瀨下つせの程よくはかり、兒童のあやまちなき事を制せり。宇治山田の師職の家々にも、心〲の雜餉ありて、たづきなき拔參宮のつかれをたすく。閏四月廿四日・五日ゟ大阪・堺すべて幾(畿)内の男女、笹の葉をたて印を染て、明野新茶屋に糸經はたを經中河原までぬのびき也。ものほしがりの宮すゞめも散錢をせたけず、大悲の神風益和し、前代未聞の大參宮なり。

京大坂やまとなでし子拔參り　朝叟

濱荻やことし塩ぬるあしのうら　仝阿

卯の花や前髪降す中がはら　百里

館すゞし皆國〲のわたり鳥　甫盛

拔たりなあはれ清水の片草鞋　雪中

廿三日、朝子より太々かぐらを執行せらる、御師中田太夫。

廿四日、內外の神拜終りて、猶磯の宮の奥ふかく八十瀨をわたりぬ。塵外五里の山陰にして、森の雫に舍殿(ミアラカ)破れ、寄生としをかさねて、夜のあらしのいぶせげなるに、いとゞかみさびわたらせ玉ふ。

神ませばかつほもすめり山の奥　雪中

伊勢志摩の寄藻かく也宮ばしら　朝叟

五月田に雫をうつすや神の馬　甫盛

常盤木や散かさなりて注連一里　百里

塩喰ぬ鶏の羽輕し青あらし　定重

廿五日、朝熊參詣、方丈ョリ饗應せらる。山伏峠越るとて、

川を跳て峯をむぐるや栗の花　百里

廿六日、太夫殿より囃子興行。

三輪　野々宮　月宮殿

京ヨリ竹宇迎ひの馬はやめて入來。これよりやき山支度、ひたすらにつゞら笈・白かしの棒、飯ごりに網すきかけ、すねよはき剛力も人より遲ク出たち侍りぬ。品川の首途の句、折からよろしとて、

花ひとつこれを荷にして夏衣　雪中

竹宇さが送りして

提重や富樫が袖に靑柚あり　竹ウ

かのゝ松原・とちはらこま、などいへるいぶせき所々を語りて、

かのゝ松市盛に扇もらひけり　左波

廿九日、瀧原の太神宮社參、內宮末社七ヶ所の第一座也。御師　鹿爪金三郎。

長者野のうしも凉むか鹿の爪　全阿

鹿垣と井かきと生や櫻麻　百リ

奧州宇田郡大畑村の女道者同行十五人、北國のけはしきをこえて、猶ふてきに、やき山越せんとて、男あしふんですゝみ行。いまだ其葛藤にはすがりたれど、此とき事理の差別を放下し、をの〳〵異口同音に、南無大悲觀世音ほさちと聲よくうたひ連たり。

桑笑や名とりの老女郷達者　雪中

越前つるがの貧女一人、はかゆかぬみち草に因よりて語るを聞ば、二歲の時守ッがひざより炉炭に落され、つれなきいのちながらへたれど、支離のはづかしきに人にもみ見えず、三十四の春秋を親のもとにやしなはれ侍れども、よろづ世の中のむやくしき時は、たゞ觀音の御名を稱して家をぬけ出、此やき山もはや六たびのぼり侍りぬ。いざ追つき玉へとて、重荷かき負ひ出るを見れば、まこと全手はすりこ木のごとくなれど、手わざこまやかに指ある人には遙まさりぬ。けにも薩埵の方便まし〳〵、千手の血脈をわたさせ玉ふにやと、人々まどひて見る。朝子戲れよりて、千手千眼那箇是正眼と拶しかけられたり。雪中袂をひかへて、

ふだらくや岸うつなみは三熊野の

全阿助音して

なちのお山にひゞく瀧津瀨

五月三日、八鬼山にかゝる。各いまだふみ見ぬさきよりひざふるひ、まなこくるめきぬ。五十町を登ッ三十八町く

だる。虵ぬけとかやいひて、高山のいたゞきより、清水のつたひ落る巖石の上を瀧のぼりに登るに、左右より萱中覆かゝり、蛭の降音笠にひまなく、前後雲霧につゝまれ、同行もわきまへしらず。山伏の腰につけたるほら貝は、かゝる時の作用成べし。澤水のひやゝかなるをいのちなりけりとむすびよりて、また越ゆべきとおもふものひとりもなし。さよの中山・うつの山・すゞか・はこねも爰にくらべば、尋常の平ゝ地にてぞ侍りける。

　ほの明の螢ひとつや南無大悲　　百リ

　眉間迄四十八町鬼あざみ　　全阿

三鬼といふ所より内海一リ船にてわたる。市盛・百リ、舟用意せんとて例の才覺也。きもいりといふ男よび出たるに、醉とろけて侍るほどに、舟長の方へ行たれば、此長また性なく醉たり。茶・たばこなんどもち出る女わらんべ、また〳〵醉しれ、宿老・小あるきとも〳〵舌もつれ眼すはりぬ。けふは所の神いさむる日にて、一村ゆるされ呑侍るとて、家々にうたふ。とかくして舟かりたれど、船頭艫杭をはづし、みさほを流し、ふなばたに倒かゝる。やう〳〵すかし力添て、希有にをかしきふな機嫌、却而つかれを忘れ、こよひは曾禰といふ所の枕に波を聞あかしぬ。

　赤子より嘗はじめけんまつり酒　　朝叟

四日、かつみ葺さとより、猶めづらしき端午にあひぬ。

　すゝき葺をのが心のよもぎには　　百リ

　沖からの日和占ふのぼりかな　　市盛

ちまき一房、全阿袖にし来り、ねぶりかたぶきたるを、

　粽もつさてはうつゝの草むすび　　雪中

五日曾禰太郎が登リ、曾ね二郎を下る。

　片あしは岩に放ってかぶとかな　　雪中

　今日の神はなぶるか山菖蒲　　朝叟

紀の山・きの浦、海に入り江に入る。禹益の水を治て靈物をしるせる海外山表のありさま、ルスン・カボチヤなどいふ遠津島根の人がらは書にのみ見たり。目前に南のゑびすの洞にかくれ、いはほにはしるを鬼にもせよ人にもせよ、心おかるゝ旅寝也。

　蛇いちご半弓提て夫婦づれ　　雪中

二鬼島・はたすか・大どまりを過て、有馬の村にかゝるに、

希異の靈窟アリ。天人降ッて常に供養せる所といふ。おもふに日本記(紀)神代卷に、伊弉冊尊の永くしづまりませる所は、きいのくにくまの丶有馬の村とこそ。土俗此神靈をまつるに、花の時は花をもてまつり、鼓吹幡旗をたて丶歌舞すときこえぬ。彼日の若宮にてぞおはしましける。

風蘭や空にまかする神遊び　仝阿

新宮十二社權現順禮し奉る。

徐福社　あすかの屋しろの左ニアリ。

くろ船に岸うつ波の夏陰や　朝叟

神藏立像權現。

しき浪に蟬も窕(フクロ)しかんのくら　百里

熊野景物　をの〳〵題を得たり。

かみこ　暑き日は喚てさし置紙子哉　朝叟

鰹節　煮取燒〃爰でもお僧愚なり　雪中

(蜜)密柑　几として海と密柑と眞夏哉　百リ

板箕　新麥のめし寄られていたみ入　甫盛

檜笠　夏海の覗く光りやひのき笠　仝阿

みは崎うくひはまのみやにまふで侍る。

たたの山　那智の瀧を拜む。日本第一の飛泉にして、富士に對せる絶景なり。水煙六塵を解除し、樹間のひゞきに梵音をきく。まことに耳根融通の砌なれば、たゞ此瀧の中心を本尊にあがめ、一瞻一禮して轉ス二苦輪一。

照つけてまた丶きもなし瀧の夢　百リ

落込や玉卷葛の瀧明リ　甫盛

箍耳の夏をひしぐや落瀧津　仝阿

暑雲の外瀑に奪はゞ人の色　雪中

いへばえに瀧に骨あり雲の峯　朝叟

太上天王恒仁弘安年中供養ましますの塔婆有。

本宮神樂殿、二十五間四面、毎年四月十五日猿樂有。太夫はよしの丶天の川ヨリ來て勉レ之。舞臺らくがきに黒みて尙殊勝なり。

白河法皇のたてさせ玉ふ石の塔あり。

いづみ式部の石塔　伏拜、本宮ヨリ一里。彼式部、月のさはりとよみたる所といふ。

蚋のさすその跡ながらなつかしき　雪中

是迄に暇とらせん汗ぬぐひ　百里

發心門　ふし拜より一里、これ迄上古本宮の境内也。

　刈ほしを今も敷也御幸道　甫盛

湯峯　温泉三坪有り。湯川より、のなかへ出る。

野中の清水（近江ニ同名アリ）　佐藤秀衡、接木せし古木の櫻有。

　住かねて道まで出るか山清水　雪中

田なべの別當湛増の旧跡、辨慶出生の所也。末孫といふもの岩本氏なり。塗師細工を業とす。所に晴の時は先此一族を上座とし侍るとぞ。

辨慶松

　那智ぐろや松にも汗を磨からし　百里

南部（ミナベ）　此間はまゆふ多し。

しらゝの濱　海ごしに見えたり。

岩代の結松　一もとは枯たり。

きりめの王子　小松原　日高川　道成寺。

　つばなの穗夢にも燃うつゝにも

由良興國寺　當國無双の伽藍、紀州最初の禪林也。開山法燈國師とかや住玉ひたる法宿也。

藤代峠　松には古藤這かゝりたり。

ゆづり葉が嶽はるかに見こさる。鈴木三郎兵衛宅、一ノ王子の鳥居近き所にあり。

　あみ笠は結かためなり五月雨　朝叟

維盛彌助　十津川近き湯のかはのほとり也。除田百五十石、代かはり家くだりたれど、さすがに今も平家也。

　河骨の花一時もさるほどに　雪中

紀の山々に傺情してやう／＼浪花の海近く、みやこの空も心とゞきぬ。ふるさとをはる／＼爰に紀三井寺花の都も近くなるらん、とうたふ。

吹上の濱　和歌の浦、たれ／＼も知れる名所なれば、加多粟嶋に參詣、夜すがら酒のみあかし、獵する船のほとりにて獲レ犢。

らくがき　三十六句

那智山　暑雲の外瀧に奪るゝ人の色　雪中

紀三井寺　はる／＼爰に臭き晝飯　百里

粉河　蠣（アナ）茂味は三番打ておもふらん　朝叟

泉州槇尾　鼻うたからが國のかはりめ　市　盛
藤井寺　藤綱に汲上ゲて見るけさの月　丕　阿
南法華寺　まだ寒からむ北のうぐひす　中
岡寺　春雨は土の佛の膚まで　里
長谷　長い廊下に似たるもの有　叟
南圓堂　皇を人はさがなし是檀那　盛
三室　ちよつと拜する二五十の爪　阿
醍醐　牛を見てうまい物とは聞ながら　中
岩間　よしもがなとて松風の音　里
石山　僧伽梨を輪に切配る山の月　叟
三井寺　都の秋をけつく近みち　盛
新熊野　虫のこゑの乂字をみつる新熊野　阿
清水寺　三年坂で誰もころばず　中
六波羅　共比の花にためたる烏帽子折　里
六角堂　既鶯む寶永のとし　叟
革堂　二霞引ヶし隣を拜むらん　盛
善峯　乙女の姿しばしくらもの　阿
穴生　心には何やかや町三丁め　中
總持寺　治郎の療治高くいやしき　里

勝尾　氷餅末は堀江の水なれど　叟
中山　爰の手形も焰王の判　盛
播州清水　切〻の播磨へ來ても田村丸　阿
法花寺　曾根迠三里松も杖つく　中
書寫　世ヽ中をしよしやむしやにして老に晃　里
成相寺　まだふみも見ず鞆はすつとん　叟
松尾　馬頭にて月を忍んで世間音　盛
竹生島　江戸へ御留守の峯の秋風　阿
長命寺　長命をたばこと讃て露は置く　中
觀音寺　天水場よりなむや代官　里
谷汲　油屋の地獄を示ス足のうら　叟
新宮　札にて舟をわたす身をしれ　盛
本宮　大釜の手水を流す花の波　阿
湯峯　かげろふのぼるゆかた筴摺　同行

五十日の長途難なく大坂へ着いたし候。是より大和路を經て出京の砌、尙可ニ申入ーㇾ。已上

序令丈

朝　叟
雪　中

京寺町　井筒屋庄兵衛板

俳諧

ばせをだらひ

朱拙
有隣

芭蕉盥集序說

芭蕉慕風(ママ)して盥に雨を聞夜かな。と古翁先生のさびしがられしは、陳留の謝肇淛が、凄風苦雨ノ之夜擁ニ寒燈ヲ讀レ書ヲ聞ケバ紙窓ノ外芭蕉淅瀝トノ作スレ聲ヲ亦タ殊ニ有レ致此ノ處會得シ過レバ更無レ不レ堪ニ情景ニといへるを思ひよられて、風雅向上の闕をすさばれけらし。しかも此體は天和時代の流行にして、享保万年の今に尊ぶべき趣にはあらねど、四方に散在せし蕉家の識者も、咸く大虛公子と成りて、僅にのこれる者も、或は老の日景かたぶき、或は與儀をかたるにたらで、しばらく口を箝みぬれば、是を幸にして近來活計をもとめるへら〳〵行脚ども、蕉門と名乘りて蕉門をしらず、叨に祕事の傳授のとて、荒唐の僞言を搆え、海曲山隈をたぶらし、貴族富家に追從して、其位にあらざるを撰集の主にして、鳥なき郷の蝙蝠、鳥虫の間をまぎりて、やゝもすれば鴻鵠に並ばんとす。いと口惜きにあらずや。いまその風姿をみれば、俳諧に似てはいかるにあらず、つるに蕉家の神をうしなふ。於乎亡師いまぞからば、此體段をゆるし給はんや。是花月道中の邪魔にして、へら〳〵行脚の髣髴光景、蕉門をふみたがへて、をのれをあやまち他をそこなひ、識者の眉根をしらませて、我が筋地に墜るにちかし。筑前の國手菊田有隣子、考槃の地ニ一ツ株のばせを(ママ)を植て、深川の昔なつかしまるゝあまり、業餘に此撰をなして、芭蕉盥と外題せられたるは、いま時の邪路をいとはれ、千歳不易の眞を得、一時流行に游泳て舊染の汚を洗ひ、正風日ゝに新ならば、名にあふ隣あらんと思ひよられけんと、其志のめでたさに、おぼえず筆を走らしめて、へら〳〵行脚どもに罵れ、その徒のはつは後生に、蕉家の眼をひらかしめば、我が本意ならんと、口業をおしまざるのみ。

享保万年の八年冬嘉平之日

四野狂夫朱拙謾書

凡例

一古翁及門人、なき人の句は年久しうして、まゝ流行にあらざるも有べけれど、昔日なつかしき心にひかれて、此集に書載(ノセ)せ侍る。見る人あやむる事なかれ。

一守武より已來、師家道統(ダウタウ)の人の吟、書のせ侍るは、その名望(メイバウ)なつかしく、且いまの流行を泉路に見せなはし給へとおもふけるのみ。

一貴人・老少、及婦尼の吟は、先輩もみゆるされたる法なりといへるにすがりて、少しき出入をいはず、此集にとれる所なり。見る人たゞに丈人の看(カン)をなさずんばめでたからむ。

筑前飯塚菊田有隣述

芭蕉先生前句附

ころ〳〵となるは鈍栗(ドングリ)落(オチ)し也
　其鬼見たし蓑虫(ミノムシ)がちゝ　翁

枯はてゝみじかき髪の口惜き
　琵琶つき立て其陰に泣(ナク)　仝

龜山やあらしの山や此山や
　馬上に醉てかゝえられつゝ　仝

宵の間は重なる山の月闇く
　芋掘かえす小男鹿の角　仝

笠敷て嬉しく今朝になしけるよ
　笈(オヒ)かゝえたる小僧煩ふ　翁

冬の砧の涙きはつく
　世の恨みいまだ六位の名によばれ　仝

右の附句は南都歳任子のもとにやどりし給ふ時、みづから前句をなして附給ふ自筆を朱拙におくられし也。

つみけんや茶を木枯の秋ともしらで　芭蕉翁
菖蒲生けり去年の鰯の髑髏
天和年中の吟、世の撰に入たるをしらぬから、爰に出し侍る。

鴻羽が雛佐ゝ木がいけづきほけの花　江戸　嵐蘭
楠が湊川次信が八嶋蕣の花
是も天和比の吟、亡人なつかしさにしるす。

芭蕉盥　春之部

四序花鳥月雪をはじめにして、氣候の前後をいはず。

花

蔦の輪につれてよらばや山ざくら　大津　丈中
此句諸集に出たれど、千歳最上の景状、後生の模範たらんと晋子・去來が薦め常をゆかしめり

と聞けるから、猶書載でつれ〴〵の觀とす。

櫻ちる彌生五日はわすれまじ　江戸　其角

卒都婆小町の賛

花の色はうつゝか夢かなれのはて　京　季吟

尼となり侍りて太秦のほとりに、やどり求めて

華をやる櫻や夢のうき世もの　丹波　すて

子をやしなへる人の許にて

呼接の枝やあびあふ花と花　近江堅田尼　貞津

釣鐘をおづ〳〵のぞく花見哉　正秀娘　みね

内外の宮拜み廻りて

櫻とは見知ながらや神路山　江戸　卜女

すなをなる空になしてやはつ櫻　肥前田代婦　紫白

どこぞから引れたがるも花見哉　豐後日田婦　りん

初瀬寺にて

堺越に花見る所化の天窻哉　美濃大垣　木因

もどりては女子足出す花見かな　伊賀上野　颯聲

髮撫に出るや花見の供の者　仝　雪芝

首だけや岡の華見る鮑とり　尾州 越人

掃除してあと這出んいとざくら　伊賀 半殘

蜜蜂の行衛いづこや花ぐもり　長崎 芦香

重ては市中に生れ山櫻　備州倉鋪 露堂

日で招く幕の物見の櫻哉　日田 柳紅

太平の民手を待身ながら

甕取の道妨ける花見哉　筑前飯塚 有隣

辨當は硯ひとつの花み哉　日田 野紅

吸口は兀七兵衛か山ざくら　飯塚 直丈

花なればこそ雪踏にて山櫻　筑前甘木 桃紅

京染を着せて孫見る櫻哉　筑前[illegible]生 枓三

はつ杓子とつて初客はつ櫻　甘木 朱林

初ざくら初産前の足ならし　日田 李弗

吸ものゝ工夫こまりぬはつ櫻　出羽尾花澤 清風

外足袋の砂をふるふや山ざくら　飯塚 雪格

無常迅速

咲花も老行間日はなかりけり　大津 乙州

神風や伊勢の玉垣拜まむと、とし比荊妻が願ひにまかせ、享保三の年、花老月の上の二日に首途を定め、櫛笥・茶袋のいとなみ、あんたの筒側に、上下四人の世帶を挈り。しかもその形抖擻の身の雲水をまたげるとは、様かはりながらひとしき心の花を家づとに書集むと、白紙を折て矢立を試む

咲初る花や矢立の旅籠帳　日田 鳳岡

昇平の象、野山にみてろ、おぼろ・あけぼのゝ箔つれをみて

三日有天下法度や山ざくら　朱拙

歳首

發句なり芭蕉桃青宿の春　翁

貞享年中の吟、素堂其角と三ツもの有り。

御覧ぜんとさら民の庭竈　越人

赤人の名はつかれたりはつ霞　江戸 史邦
痩坊に重荷かゝるや初がすみ　日田 朱拙
雜煮ぞと引起されし旅寐哉　京 路通

早春

いとけなきものを愛して

正月を出して見せうかかゞみ餅　京 去來

元(日カ)夜はさはる事ありて

正月のいざよひ見ばや餅の黴(カビ)　有隣

病家を訪ひて

正月の皃やふすべる藥鍋　朱拙

若菜

摺子木の謎はとけたる若菜哉　有隣
七種や庄司が谷の抄子舞　大津 正秀

梅

梅が香や通り過れば弓の音　翁
梅咲や長刀で出る山法師　朱拙
梅がゝや精進浴(ユ)衣(カタ)の朝淸め　近江彦根 孟遠
赤ばしる夜は少しなり梅の花　筑前牛隈 知方
紅梅や二階を掃く(マヽ)鉋屑　長崎 路圭
節にあく茶漬の腹や梅の花　有隣
下戸ならばとてこそ梅は咲にけり　尾州 露川
海の日のあがる高根や梅の花　りん

黄鳥

鶯や世を憚からぬ藪出たち　大津 松琵
鶯や墨寒(サヘ)かゝるふくさ紙　鳳岡
鶯や木の子作りの簑と笠　日田 文秋
鶯や伊勢路にかゝる色火繩　日田 只什
蛤や今朝鶯のふた三聲　正秀
鶯に笠の緒つまる峠かな　津川 士明

堅田より粟津へかゝる道中

鶯や山三井寺のいどみあひ　朱拙
鶯やしかも初音のこちら向　伊賀 苔蘇
鶯や蒜(ニンニク)嗅き藪屋しき　豐後玖珠 居中

戯レ鶯といふ題を得て

鶯や甘(クツロギ)過て崩れけり　肥前田代 晩柳

泉岳寺義士の墓參りして

鶯の目はからし酢の涙かな　共角
鶯や渡し二ッに藪ふたつ　日田 也水

柳

應〳〵で人を賺せる柳かな　去來
何事もなしと過行柳哉　越人
尤でうちくらしたる柳哉　美濃大垣 如行
下戸の目にやがてちらつく柳哉　彥根 冶天
參宮の蓑虫も出る柳かな　朱拙
人事をいふて雨ふる柳かな　備前岡山 雲鹿
降雨のこまかにしのぶ柳哉　肥前留卜婦 紫貞
青柳やいつもの兒のふり機嫌　宮嶋遊女 万珠
節客の物音すんで柳かな　日田 宗風
世の中をゆべくにする柳哉　豊前佐田 素川
負ふた子に習ふて渡る柳哉　彥根 越蘭
異見するはり合もなきやなぎ哉　日田 飛洞
垂薦の内にさゝやく柳かな　有隣妻 ひさき
寐いらちの障子に當る柳哉　漆生 嵐之
柳には皷もうたず歌もなし　共角

春雨

魚懸にあたまばかりや春の雨　朱拙
春雨や爐の燼の唐がらし　居中
春雨や鍔懸かゆる鼻あぶら　日田 易倫
室なしの火燵の炭や春の雨　有隣
椽におく砂の道具や春の雨　漆生 至州
掃だめに以壽の紙骨や春の雨　飯塚 舍計
春雨の先は浮世の雀哉　筑前内野 助然

椿

山川に小鮎の覗く椿かな　伊賀 万乎

黄檗にて老和尚に通じて申ける

一棒の下へころりと椿かな　朱拙
春雨に針もてぬかん椿哉　吉原遊女 相(マヽ)州

朧月

うかりける初瀬の通夜や朧月　飯塚 桂夕
江戸留守の枕刀やおぼろ月　朱拙

春雁

歸る雁後陣はいまだ泥まぶれ　正秀

蝕の日をこらえ兼てや歸る雁　日田 斗築

うらやましいぬるときけば鴈のこゑ　宮嶋遊女 通路

燕

家もたぬ燕かさびし顔の樣　大坂 蘭女

縄臍(ナフヘソ)の穴へちら〳〵つばめ哉　京 風國

雉子

聾(ツンボウ)の耳に地震やきじの聲　丈中

足むさし中に包むか雉子の聲　日田婦 りん

鷄のはぐれて立やきじの聲　飯塚 雅伯

口に出る息まだ白し雉子の聲　舍計

横乘に馬士の睡りや雉の聲　相夕

狐入る穴の夜明てきじの聲　飯塚 遊山

腐れ尻かゝえながらや雉子の妻　有隣

胡蝶

莊子の畵贊

世の中よ蝶〳〵とまれかくもあれ　大坂 宗因

宗因は此道の大功、丙の下に立まじと、古翁も
これらの句をゆかしみ給ふとぞ。

眠たがる兒に影ちるこてふ哉　伊賀 蝶伽

午時會場(ヒルトバ)や蝶の黛(マユズミ)重き時　涼生 紫來

紙鳶

鷄の鼻ひるそらやいかのぼり　日田 紫道

いかのぼり町からそしる家中哉　球 馬貞

おもふ方の風力あれいかのぼり　野紅

留與他人樂少年といふ詩の心ばえも、身につみておもひしらるゝ事あれば

糸きれて誰か結ばん紙鳶　正秀

上巳

布子着て夏より暑し桃の花　翁

桃咲や守り袋の置忘れ　有隣

出替

洗濯・煮賣のかゝにも手をあげさせて

出替りや大津伏見の旅籠迯　朱拙

出替りや所帶丸めて小風呂敷　日田 雲里

藤

藤さくや局〳〵の濡(ヌレ)小袖　ひさき

宿借の聖の笈や藤の花　野紅

野遊

春の野に心有人の素兒哉　薗女

生玉の野等にて、奥太(大)和路の富家のおやぢめけるが、おてふともいふべき妾やうの者に、吸口の按摩・座頭・銀借りの手代らしき者を供して、いきほひ猛なるに、万葉集のむかしもまのあたりに思ひよられ侍りて

春の野に成ておてふにふまれたや　朱拙

三月盡

行盡す前な昌の三月菜　伊賀 土芳

不濡山にて

行春や高良の山の鼻先に　甘木 慈竹

行春や海士の產する隱居舩　豐後竹田 盤子

行春や茶色にかせる兒の兒　有隣

行春や遠山鳥の尾先まで　日田 近孚

泉南の藥中間、長崎へ行けるに、船路なれど馬のはなむけして

行盡す春や堺の札中ヶ間　朱拙

手習屋の浪士のとぶきに招かれて

鶯や初登山の樽さかき　朱拙

海道除る町の永(キ)日　盤子

杖つきも奉行の數に春めきて　鳳岡

饂飩(ウドン)の度に板戸引也　馬貞

十六夜に藍の火床をふすらかし　李弗

時雨のやうに當年は露　朱拙

揚(ウ)ヶかけし地形つまして秋もはや　盤子

女房捌(サバ)きにぬける身代　鳳岡

鯨から中ヶ間馳(ハツ)して鰯船　馬貞

何にもふらず二ッ十月　李弗

初瀬芳野御坐一枚の中枕　朱拙

狐だました手柄語らん　盤子

とやを出る崩れ役者に秋の風　鳳岡
盆の四(荘)舞の樂な獵ばら　馬貞
月比は瓦雪隠の落書に　李弗
金山後家の名に立れ皃　朱拙
眞中に和尚とりまく花の陰　盤子
すまし斗の蕗ぎらひにて　鳳岡
名
馬で來る湯治見舞の暖さ　馬貞
猿すきうつす犁殿の皃　李弗
濟鋏る六位の夜這哀れ也　朱拙
簀子を拔て燃る宵闇　盤子
産息を堪えて並ぶうそ寒サ　鳳岡
鵜の聲の活とこぼるゝ　馬貞
夕燒の見事に蕎麥の咲揃ひ　李弗
胡摩(麻)の見かぎる行脚ゆゝしき　朱拙
丹波路の祭はとに丹波曲　盤子
蚤を移りて揮ふ衣〱　鳳岡
小便の流れて早き涙川　馬貞
坐頭迎えにあんた釣らする　李弗

ウ
雨と見る嫁の保養に山屋鋪　朱拙
失たるまゝの窖の鎰　盤子
入札の公義に元手打あけて　鳳岡
節供肴に羽のはえたり　馬貞
誂えの天氣に花の咲たゝえ　李弗
子共倩ふて土筆つまばや　執筆

各七句ヅヽ、執筆一句

芭蕉盥　夏之部

郭公

世のうさの耳助なりほとゝぎす　季吟

東武よりのぼる比

富士にかえて晷待日ぞ郭公　京 湖春
起て見よ此時鳥市兵衛記　其角
時鳥啼かば佛法長吉歟　江戸 嵐雪

おも梶よ明石のとまり時鳥　尾州　荷兮

此句は、野を横に馬引むけよ霍公。の句に同意たりとて、去來の撰にもれしときけど、ちか比の句をしらず、木がらしの荷兮と世にいはれたる名のなつかしさに書載せ侍る。

郭公それで浮世の雲井哉　路通

時鳥殿の御影や七ッ起　美濃　荊口

杜宇へくう蘰も花咲ぬ　土明

時鳥たゞ波渡の灯のありあかし　飯塚　松白

郭公啼や田舍の山刀　桃翁

傘の柄もりもしらで郭公　膳所　洒堂

京よりも晝は伏見のほとゝぎす　大坂　諷竹

夜すがらを撰る曉やほとゝぎす　土芳

雨はら〳〵月よくなして時鳥　朱拙

人を見おくりて

別れ場に狐だますな郭公　土明娘九歳　あきら

むべもいひけん言のはも、俳諧の我等はつらし

田長にて少しよこれりほとゝぎす　有隣

更衣

花の香を衣桁に懸つ衣がえ　大津尼　智月

からし酢の鼻へぬけるや衣がへ　直丈

人影の移る柱やころもがへ　盤子

どべ山に猶山吹やころもがゑ　舍計

米囊花

けしちるや窻にひだるきなえ念佛　鳳岡

馬トッにほろ〳〵散るやけしの花　宮嶋　林南

けしちるや桶の輪かえの膝廻リ　甘木　朱林

けしの花ちるや生絹の水洗ひ　肥後小國　西東

柿花

井溇の簑と笠とや柿の花　紫來

柿の花ちるや野髮の馬の櫛　朱拙

誕生會

灌佛やあとからおがむ母の尻　易倫

彦山にて

灌佛や四月の山のはつ櫻　朱拙

蚊帳　蚊やり火

きつぱりと寐てとる蚊帳の一重哉　膳所 曲翠

學士の許にて二句一時の吟

煎香の蚊やりめでたき机かな　豐後眞玉 松嶺

蚊帳引て丹欒入む相枕　仝 里木

蚊やり火や俤より出る藥屑　正秀

蠅

旅より歸りて

なつかしさ我ならなくに食の蠅　馬貞

梶原が朝起憎し蠅の聲　豐前大橋 元翠

蕎麥切や浮世の蠅の萱中　嵐之

螢

藪陰を尻つよに出る螢かな　加賀 北枝

鳥の寐る藪に火とぼす螢哉　あきら

庚申の皃おそろしき螢哉　ひさき

持よりて放つ螢や椽の先　丈屮

寐て居るか螢の來やう只でなし　土明

尻だすき懸ヶて同じく飛螢　乙州

螢船ちるや夜明の勢田あらし　大津 木節

修羅するか勢田の螢の時の聲　桃三

螢來よといへど荅えぬ思ひ哉　りん

雨蛙

山僧によりて雨祭すめりとて、ホ句得させよといふ人に代りて

ふれ〳〵と珠數もむ音や雨蛙　朱拙

雲少しから雷にあま蛙　有隣

笋

竹の子の一色見たし砂け物　荊口

竹の子や四(住)鄰てもどる大工箱　朱拙

奉納

竹の子やさぐり當たる一雫　漆生 西耘

夏木立　下やみ

柿の木の至り過たる若葉哉　越人

山寺にて

珠數の實に不動の客や若葉時　嵐之

山汐の乞食こつむや木下闇　有隣

下闇や在郷の聟のゆり輸食　豊前田川 其香

漆川の連衆に別るとて

下やみの兒やおの／＼六地藏　馬貞

重五

いでそよと何やらゆかし笹粽　紫白

繪簾を分て覗くやあやめ賣　飯塚雅林妻 いん

莊子をよむ人に申侍る

白魚のたましゐはえてあやめ哉　只什

南京の青地をほめるあやめ哉　有隣

鈴草の幸便に取あやめかな　飯塚 如吟

麥秋

麥がらの白髮めでたき日和哉　正秀

麥秋や佛法兒の鉢坊　日田 巴菴

宿／＼は皆新茶なり麥の穐　彦根 許六

五月雨

城下にあそびて

五月雨や海へ消込む城の鐘　日田 素穹

五月雨や田中にすはる山の潰　飯塚 如此

常燈の油ほそるや五月雨　文秋

早苗

雨おり／＼思ふ事なき早苗哉　翁

溝川に藁火流るゝ早苗哉　飯塚 川柳

春夏の蚕飼の間を植女哉　越蘭

色／＼の田植出立や七小町　露川

食盛に嫁の出立や田植時　許六

茄子

赤みそにあかれにけりな初茄子　北枝

名のよきに最一ッとらん初茄子　伊賀 猿雖

暑

青空に底のぬけたる暑サ哉　越中 浪化

三味線を坐頭へ渡す暑哉　備中玉島 諷水

異見せし人を見送るあつさ哉　嵐之

根ざしする妾の兒のあつさ哉　肥後熊本 輕芦

正秀が釣するを訪ひて

釣竿に見る影もなき暑サ哉　粟津 楚江

行残る友傾城の暑サかな　日田 秋水

青田

罩して蛙のこねる青田哉　有隣

我が物を我が手にほめる青田哉　桃三

白雨

夕立にとびのく月や松の上　丈中

夕立の露いごかせず照日哉　伊賀 巳立

夕立に取逃しけり熊つかひ　孟遠

水鶏

夜あるきに母寐させたる水鶏哉　其角

長崎へ赴く道中

世を海に高飛したる水鶏哉　去來

木魚うつ初夜をまぜくる水鶏哉　斗築

捨子泣とぎれ〳〵や啼水鶏　有隣

楠の木の鳥を見るか鳴水鶏　甘木 龍泉

人のいへばや佐屋ごまり、のあと
なつかしく、我も一夜舍りして老
涙にたえず

草寐の枕の下や啼水鶏　朱拙

蟬

濃州關にて

金鑢のきら〳〵しさよ蟬の聲　有隣

竹青堂の最愛の孫のいたみにこも
りゐらるゝに

耳はゆき鍜冶の鑢や蟬の聲　朱拙

參宮の比

空蟬や佛と申蟬のから　松琵

關東へ行人を見送りて

一しきり蟬のさわぎや相の山　日田 呂道

松風や遠う吹やる蟬の聲　紫道

夏ざしきといふにて

水のやうな發句のほしや夏坐敷　朱拙

唐の繪は鹿茸多し夏坐敷　野紅

解て行水や香需の裏座敷　下總 猿栗

晝皃

晝顏や御油赤坂の砂ほこり　日田 霞程

聟兒に聟ねものうし若比丘尼　飛洞

清泉

あとからも缺脣の覗く清水哉　許六

蝿ちりて馬よく眠る清水哉　堅田 成秀

西國が二十五回に

志手の窪にもる清水かな　朱拙

瓜

首よりて缺喉のかぶる眞瓜哉　飯塚 夜遊

小坊主のやゝと懐とる眞瓜哉　至州

淺瓜やとかく愚癡には染ぬ兒　大坂 芙雀

熟桃

九牛が毛桃の色や稲荷前　江戸 沾徳

王母があとにもなづまず、世は只よねの飯に水無月の鯛があらば、君がめぐみなりけりと、匙一本にほころもおかし

桃喰む男を此方は咲ひ見　有隣

納涼

東武よりのぼりて人々にたいめす

東路の毛髓恥かし床すゞみ　翁

すゞしさやめで度寄りの腹くらべ　李弗

星の影町の夜にあふすゞみ哉　伊賀 非群

無床なる兒でさはがし門すゞみ　日田 霞幅

簾から顔はさみ出すすゞみ哉　飯塚 雅林

大蝦蟇も横平に出るすゞみかな　日田 一峯

酒買に逐手のかゝるすゞみかな　土明

青あらし

まだ花の氣色をやるか青嵐　芙雀

花々のつゝまる音やあをあらし　美濃 千川

花で先一晴してやあを嵐　木因

三句大概出所おなじけれど、千里の文通、前後定がたければ、こゝに書載せ侍る。

雜題

題あらはなるも、類句なきにこゝにあつむ。

なりそめし妹がさゝげの花かづら　江戸 杉風
蝸牛も共に蒸らるゝ新茶哉　有隣
水揚の干鰯見に行園かな　紫來
魚も寐る四月の海の衾かな　如吟
拾はれて行日もあらん蝸牛　伊勢 凉兎
遠浅や蟹の淡ふく雲の峯　只什
祇薗會や桐油明りの人の皃　李弗

有隣

川狩に烏帽子のがれし男かな
　いそけ〳〵と焼酎走らす　相夕
煮ゆる程照ッてはらつく村雨に　舎計
　きろ〳〵鳶の舞ありくなり　雪格
高足の數に暮行空の月　孤雲
　あつさ殘るか川へざんぶり　雅林
うき戀にせかるゝ穂もつる立て　如此
　文破すてゝ余所目うらなふ　有隣
觀音の歌仙をよごす腹あしさ　ひさき
　漁板が拍子に海の夕平　舎計
酒樽の目まはす地下の祇(祇)薗前　雪格
　又もあほうが棒やくらはん　孤雲
弓張の月に垣する遊行道　雅林
　蕎麥のはしりのすきときれたり　如此
露時雨見とれて膝をおどらかし　相夕
　あの橋有て馬のやかまし　ひさき
行先も干鰯をはたく花曇　舎計
　女房のもので春をやらるゝ　雪格
名 肩の瘤寒かえりたる參宮に　川柳
　家とぶきの連歌あつらえ　雅林
おもしろき感に斷たる初雪に　孤雲
　田子の浦からのつと見る富士　如此
どこやらが信使になれば優美にて　有隣
　から雷にちゞむ惣〳〵　相夕
介床といへばみじかき夜半もなし　ひさき
　夏豆腐にはこまりはてたり　舎計
錐立る程も田のなき島はら　雅林

臼の日切も弘法めく顔　有隣

市馬のとろ〳〵もどる冬月に　如此

寐に行鶴も城をあけける　川柳

假初の雨が馬鹿氣に長ふなり　相夕

越中殿を當に米かる　舍計

大切な節供天窻もまだそらで　雪格

夕べ燈けした時は小八ッツ　ひさき

散る花に芳野を出て奈良の宿　孤雲

三月の日の永い事かな　川柳

有隣 四句　相夕 四句　舍汁 五句
雪格 四句　孤雲 四句　雅林 四句
如此 四句　川柳 四句　楸 三句

芭蕉盥 穐之部

月

名乘兒そも〳〵是は秋の月　守武

須磨にて
松陰や月は三五夜中納言　貞室

難波市中
芋は〳〵先月をうる夕哉　宗因

大津ニテ
三井寺の門たゝかばやけふの月　芭蕉

紀路にて
たつか弓箭をつぐ船や三日の月　其角

三日月はちよつと咲ふて入にけり　露川

小野にまかりて
岩はなや爰にも一人月の客　去來

美濃ニテ
身一人の不破と月もる破レ笠　嵐雪

須磨・あかしに三夜を賞して
名月の向ふ棧敷や須磨あかし　越人

見るものと覺えて人の月見かな　尾州 野水

名月や口の酸うなる空もうし　千川

名月や赤の甞中國の中　大津 木志

桐の葉の緣まはしけり月の色　伊賀(狹)秋子

太淸の雨露にあふて白山白藏といふも有がたし

私の月とおもふやけふの山　相夕

月のなるやうに坐敷も晴曇　万乎

化粧なきけはひも寒し月の兒　りん

老景

いざよひの花と穗に出し白髪哉　有隣

陋巷

いざよひやそゞろに藪のうらおもて　朱拙

いざよひや明ずの門の北おもて　只什

田蓑の嶌にて

いざよひや猶蟹の目のよもすがら　園女

大坂北濱にて

十四夜やしたんだつれの明日しらず　嵐之

赤穗より江府に赴くとて

此人數見ずにはてふか後の月　(播)州赤穗亡人 禿峯

義臣四十七人の内、萱野和助の吟なりとて、其ゆかりの人より朱拙におくられたり。

二星

大井川渡らず成て金谷に止泊して

七夕や八十水の河どまり　朱拙

辻君の濱賣そらや天の河　李弗

夜明まで雨ふく中や二ッ星　丈中

拾子する大門くらし星まつり　南部 玄梅

大蝦蟇も出て侍るか星迎え　飯塚 孤雲

七夕はまだ青嗅し唐がらし　有隣

素麵の絈も出來るか星の宿　素鸞

穐風

秋風や藪も畠も不破の關　翁

木因ないざなひて不破の關にまかりて

燒酎にあれにし後は秋の風　朱拙

はつちりと水風呂の輪や秋の風　舍計

川狩の松見にとふや秋の風　川柳

秋風やはじめて水に皺のよる　飯塚 茂門

つくし人を送りて

大佛を下る別れやあきの風　丈中

腫物に帷子すごし秋の風　斗築

秋風や尾をあらしたる坊主鷄　雪格

筑前の相撲取に褒美とらすとて

秋風や西に名を得し金碇(カナイカリ)　去來

いなづま

稻妻やひや〳〵したる忘れ針　李無

いなづまや落て崩るゝ汐頭　尾州 素覽

いなづまや夫憎(オトコニク)みの丑の時　野紅

木槿

裸子の木槿の枝持たるに

花木槿はだか童のかざしかな　翁

たが袖も一さはりづゝ花木槿　紫貞

ふく風に眠うるむ木槿かな　越人

一葉

諛(ヘツラウ)はいやとて柳ちりにけり　共香

人の身まかりけるに

若い名をかゝえながらやちる柳　紫貞

西瓜

尾の露川に別るとて

西瓜一人野分の朝又おかし　江戸 素堂

此わかれ腸つかむ西瓜かな　朱拙

此句露川撰に、ふくべ哉、とあやまられたればかさねて出しぬ。

虫

楢の葉にごそつかれてや虫の聲　有隣

きり〳〵す啼や野鍛冶の火のあかり　共香

秋雁

酒買に行か雨夜の一ッ雁　共角

初の字の有たけうれし雁の聲　有隣

夜寒

うらみの瀧にて

小便してうらみの瀧の夜寒哉　朱拙

旅籠屋に馬の煩ふ夜寒哉　紫來

擣衣

あふみ路を通り侍る比、日野山の

ほとりにて、胡麻といふものに上
の絹とられて

剝れたる身には砧のひゞきかな　翁

賤の女はものつき臼を砧かな　ひさき

わるさする子は畚に置砧哉　如此

薄

老らくの股だけあまるすゝきかな　去來

野蚿行の道をうたがふ薄かな　日田 柳紅

くつさめの行衛や風の花すゝき　倉鋪 蕘里

女郎花

木のまたは何と思ふかをみなへし　風國

故ありて古郷を立出るとて、家婦
がもとへ申おくりぬ

捨行は男の義理ぞをみなへし　美濃 大川

うづら

そら寐に夜はまじりけり啼鶉　備中吉備津 高世

飯塚の驛にて

粟の穂をこぼしてこゝら啼鶉　行脚 惟然

窪たまる水澄きつて鳴うづら　孟遠

老子をよむ人に戯れて

知る者はつかはれ廻るうづらかな　朱拙

所司に出る密夫公事や鳴鶉　路通

茸狩

茸狩や珠数も陽根もうき藏司　朱拙

松茸は無調法にて哀れ也　伊賀 雪芝

紅稲

稲こきや女房またの茶屋おろし　紫來

不易流行はいかゞと、西海の朱拙
兄に申つかはしぬ

安産や紐とき給ふ穂のたぐひ　正秀

九日

小座頭に小袖の出來る九日哉　土芳

百姓の麹花咲九日かな　有隣

糀賭の猿樂まはる九日かな　飛洞

悼去來

いき〳〵と枕に殘る菊の花　曲翠

堅田祥瑞寺にて

朝茶のむ僧靜也菊の花　翁

刀やめて來よ友にせん菊の酒　風國

珠數握る侍殿か菊の華　西耘

うち明ていはぬ寒さや菊の花　紫來

十日、洛にして去來の墓參に

昔我が友よ十日の菊の形　朱拙

九月盡

秋の暮男は泣ぬものなればこそ　翁

秋のくれ思ひ廣げて小さかづき　田川 梅丸

さびしさのどこまで廣く秋の暮　土芳

ない山の富士にならぶや秋の暮　其角

雜題

堅田柳瀨可休亭にて

祖父親孫の榮や柿橘柑　翁

やごなき人の中戸を訪へるに

學問に見給え穗蓼唐がらし　朱拙

李夫人の畵に

若烟中(タバコ)噯(オクビ)に魂(タマ)をかえしけり　有隣

鹿啼や動氣(ドウキ)に入(シ)んで物の色　紫貞

盃は黑きにかえて紅葉狩　江戸 百里

南良にて

白銀の目貫やさしやふぢばかま　酒堂

聞づらる名や誰がすさめ梅もどき　讃州 寸木

しけ〲と目で物いふや萩の客　丈中

蕣はつよし小町がなれのはて　りん

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　翁

下樋の上に蒲萄重なる　酒堂

酒しぼる雫ながらに月暮て　史邦

扇四五十本書なぐりけり　丈中

呉竹に置直したる涼み床　去來

蓮の卷葉のとけかゝる比　野童

笈摺もまだあたらしく懸連て　正秀
遊行の輿をおがむ尊さ　翁
休み日も瘧ふるひの兒よはく　酒堂
溝汲むかざの隣いぶせき　史邦
生乾なる裏打紙をすかしみる　丈中
いつも露もつ萩の下枝　去來
秋立て又一しきり茄子汁　野童
薄緣たゝく僧堂の月　正秀
分別の外を書かるゝ筆のわれ　翁
瘤につられて浮世さりけり　酒堂
散時にならねばちらぬ花の色　史邦
畠をふまるゝ春ぞくるしき　丈中
名 人情常陸の國は寒かえり　去來
産月までも輕きおも影　野童
うき事を辻井に語る隙もなし　正秀
絈買客のかへる衣〳〵　翁
硝子に減際見する藥酒　酒堂
橘咲ばむかし泣るゝ　史邦
中むらに寐所かゆる行脚僧　丈中
明石の城の太鼓打出す　去來
大方はおなじやうなる舟印　野童
力に似せぬ礫かゐなき　正秀
ゆるされて女の中の音頭取　翁
藪くゞられぬ忍び路の月　酒堂
匂ひ水しだるくなりて初嵐　史邦
又も鼬の子鼠おひだす　丈中
手に持しもの見失ふいそがしさ　去來
油揚せぬ菴は痩たり　野童
鶯の花には寐じと高ぶりて　正秀
柳は風のたすけてぞふく　執筆

此卷は布黄将軍成瀬氏の家臣前嶋隨岐の主に撰集を勸られて、丈中子よりおくり置れけるを、朱拙自選あらば入集あれとゆづられけるを、此度乞得て友邦に薦め侍る。

芭蕉盥 冬之部

六出花

雪を從上戸の額いな光り　翁

其角が東武へ歸るに

天龍でたゝかれ給へ雪の暮　越人

相坂や雪の梢の臼の音　正秀

はつ雪や今年植たる桐の木に　野水

初雪を泥にこねたる都哉　楚江

はつ雪を鳴て奢るや江湖僧　野紅

守の殿にめされて

はつ雪の晰かちけり田舍人　貞津

三尺の山はあらしの、とすさばれし茶店に、大津の連衆とあそびて

初雪にあふみの茶店や銀世界　朱拙

はつ雪や牛の初子の釜まいり　相夕

城下夜興

挑燈にかけろふ雪や町通り　有隣

けなりさの沖行舟や雪の花　百里

初雪や船を別るゝ杖の數　路圭

よそ外に思はぬ雪の雀哉　千川

日を荷ふ雪の雀の背中哉　りん

霜

朝霜や聾の門の鉢ひらき　丈中

本福寺生くの僧のあないにて、おば御にあひ奉る悦び、いくそばくぞや。浦嶋が子の御心ほれもまします御盃をいたゞきて

蓬萊にあふみの婆ゝや松の雪　其角

空を飛ぶ子取の駕や霜の花　嵐之

朝霜や女房とられのとぼけ鶏　筑前牛隈 者若

時雨

猫狩の中をませたる時雨哉　冶天

狼の葬の火を掘る時雨哉　相夕

山の端に泣寐入するしぐれ哉　伊勢 八菊

囉ひ乳の挑燈更る時雨哉　紫來

照りかけて遊びあきれし時雨哉　土明

出來す氣もやがてしぼるゝ時雨哉　知才

握(ニギ)るほど時雨よせけり初時雨　長崎 宇鹿

魚飯燒(タク)誰が誠よりはつ時雨　只什

枇杷の花

たのもしき葉の廣がりや枇杷の花　近江 李由

藁(ワラ)の火に晝茶沸(ワカ)すやびはの花　鳳岡

火燵

竹馬を今は杖にもと、西行上人の
吟跡、身につみて哀れさに

乳(チヽ)のふだ事思ひ出す火燵哉　有隣

傾城の添ひよりやすき火燵哉　尾州犬山 随岐

口切

口きりや袴のひだの線蘿蔔(センダイコ)　其角

口切や京銀借りの德意寄(ヨセ)　朱拙

玄猪

うらやさん内義のとめるいのこ哉　豊前椎田 孤靏

婆ゝゐは繁昌筋の玄猪哉　桃紅

冬ごもり

古翁の光りもやう〳〵消て、門人
流行の神を失ひ、連歌の腐りたる
風姿いと口惜など、朱拙子とうな
づきあひて、賓主の情を咲ふ

犢鼻褌(フンドシ)や竿(サホ)にかゝせて冬籠　大津 木節

海道(カイド)から屁(ヘ)をはやすらん冬籠　朱拙

木枯　木葉

木がらしや嘶(イヽナキ)そろふ假厩(カリムマヤ)　越蘭

木枯や材木河岸(ガシ)の大鋸(ノガ)の音　飛洞

凩や梢にきれて琵琶の聲　飯塚 一圓

しのばるゝ人の顏出す落葉哉　紫貞

蝕(ショク)三日たまる木の葉や井戸の蓋(フタ)　有隣

冬の

野火留の具も枯野の嵐哉　土明

追悼に

眼のあかぬ冬野のはらのあらし哉　慈竹

紙衣

人中は我まだ耻る帋子哉　湖春

榾柴の音おもしろき紙子哉　日田僧 何妨

さむさ

萬ン葉に糞(フン)の嘶の寒さ哉　李弗

ふんどしを鼠のかじる寒さ哉　朱拙

山原に舟の咄のさむさ哉　丈中

木〱の葉のさけて碎けて寒ッ哉　菌女

榾の火

寐(ニヨ)とすれば榾(ホダ)の火燃て夜終　伊賀 陽和

盗人か夜遁(ヨバヒ)か榾の火のあかり　木因

榾焚て菲石あぶるやよごれ客　只什

雑題

神の留守能女房を守るべし　嵐雪

若後家の物おそひすと聞て、わりなく哀れしられて

夜討(ヨウチ)よと蒲團そなえてふるひけり　朱拙

冬がれの耳やしなふやあられ釜　斗築

六條講といふ事を聞侍りて

熊野路の鯨嘶や御所越　西耘

火桶ほどの家造りして、徙移などひしめけるに

桶鉢の陰持顔や鵜鶘　朱拙

母にあふ師走もちかし山法師　李門君

此句制題をきかず、師走もちかしとあれば歳暮と見えぬから、しばらく爰にをきぬ。後人正し給へ。

歳尾

甃(クヤ)桶に雨たゝかする師走哉　露沾君

此句露沾公なりとて、或人のおくられぬ。是否をしらず。

本ン箱の子鼠(コテン)はね出す師走哉　孤雲

東武へ下る時

富士の山師走ともなき姿哉　湖春

賣石の今年も如龜(ニヨキ)と師走哉　桃紅

節季候のあたまにそよぐ野山哉　有隣

煤掃や鶏卵(タマゴ)に投(ナゲ)るかしは鶏　宇鹿

魚鳥の心はしらず年わすれ　とす
さびられし昔なつかしみながら、
いれ〱と人にいはるゝ路通が常
ずまひにて、世の中を立まふ。取
捨は人に有て身にあづからじ。た
ゞ目前の年のもちゐ、ひとつを樂
にして肱をまげぬ

魚鳥の候ひしにて年くしれぬ　朱拙
此わすれ流るゝ年の淀ならむ　素堂

此句は此老の作なるを、翁にあやまてる集あるから爰に正し侍る。

萱中茶飯につまむ年の暮　翁

竹青堂即興

棒松の棒であしらふ時雨哉　朱拙
琵琶聞音に木がらしの風　正秀

關東の旅へ瀧口すへられて　丈中
屁の訴訟の嵜婆に濟だり　楚江
山姥で稽古破るゝ宵の月　成秀
穐雷に近年の水　朱拙
薪取て出て産かゝる露なみだ　正秀
大蝦蟇をふんでうき戀　丈中
約束の池鯉鮒泊りに鯰汁　楚江
短冊せがむ筆の摺子木　成秀
旦那なき紫田兵火の傳教寺　朱拙
たゞ蜀魂に夏をしる也　正秀
獨有子もやまにしてほえ中風　丈中
酒の地獄に落られにけり　楚江
名月のひくの山のに年くれて　成秀
淀の泥龜を何と夢見し　朱拙
花はまだ六十山のあかず坊　正秀
日拜乞て雪のむらぎえ　丈中
名
蠻長の瀬渡内過る春風に　楚江
丸にあけ羽の蝶の水船　成秀

何所(ドコ)でやら公卿に成し白盗(スリ)有て　朱拙
一七日斗(バカ)僧都難題　正秀
見する程今年は出來ぬ餓饒牡丹　丈中
初手時鳥後架(ウラ)で聞たり　楚江
黒谷を出て餌くふて二尊院　成秀
主の子つれて盆の養父入　朱拙
赤い猿出た日傘に朝の月　正秀
安房の蚫事に芝居冷し　丈中
夏の御文裏門跡の燃かけて　楚江
南んまみだ佛風移りし　成秀

ウ

辻の戀味噌こえ嗅(カグ)き別れして　朱拙
前垂尻になどはやりけん　正秀
水風呂に居れば隱居の呼使　丈中
連歌めけどもほめてほた餅　楚江
搗きぬ八幡知行に花咲せ　成秀
慶長巳來ぐはらり御春　執筆

竹馬の童あそびも昨日と過、けふとくらして、明日しらぬ老の日影かたぶくまで、何の分辨(ワイダメ)なくわたれる事、伏て思ひ起て歎もかゐなし。たま／＼亡翁の道筋にすがりてすさべども、才頭(カタクチ)にして不易の神ッをしらず、流行に口うごかざれば、なまじゐに老の風興と斁(イト)はれけれど、もとより我が生得なれば、あながちに悔ふべきにもあらず。年比好めるしるしとて、友邦の文通におくられたる蕉家の珠玉(タマ)ども、齊(タヾ)に函(カン)中にひめて紙魚(シギョ)の腸を肥してんも本意なく、責てさは梓人にわたして、しるしらぬ同志の咲資にもなれらば、老耄の又なき幸ならむと、なにはのよしあしをしらず書集め侍る。後遊の賢達(ケンタチ)、此枝折によりて我が宿を訪ひ給へ。筑前飯塚のやぶ藥師、姓は菊田、名は道專、俳号有隣、謹て友邦に告(マウサ)んとしかいふ。于時享保八ッの年癸卯季冬の日也。

享保九甲辰年卯月吉日
皇都書坊　三條通小橋　汲古堂　辻勘重郎開板

野坡吟艸

前編

天地

野坡吟艸集　巻之上　前篇

春之部

長松が親の名で来る御慶かな

噺思無邪三字

事業の戀といふらし戀の春

三日

三日月は夜ゝを見せたることとし哉

屠蘇雑煮かくてあらまし櫻まで

湖上明鷄

元日や八景つぼむ潮（湖カ）の華

下ゝの下も十日の粮を華の春

恵比壽まで屠蘇のさかづき預ヶけり

高砂や雑煮の餅に松の塵

内野に春を迎へて、苔路の稚子を祝す

初としや百の赤子の老ひとつ

定恵方淺茅が庵は月と花

蓬莱や疱あとちかき禮子共

門人楚兒が主せる企山に春をむかへて

元日や我つつ立て峯のたけ

持つたへたる幸の一軸あれば、贄を乞ふて、九十九庵の家珍とす

ほの〲と鴉黒むや窓の春

雪の降る夜は寒くこそあれ

花のちる日はうかれこそすれ

春たつや捨しはすてし世に出たり

借王建一韵以五色賀新年

雪の麦はつ日にひらく黒牡丹

杷木の兎城六十九才にして、元日に身まかりけるを悼

初鷄はあくびのなみだ此なみだ

聖廟遥拝

初手水むすぶや指も梅のはな

嚴嶌明燈

明燈や殊に年立はじめの夜

若水や冬はくすりにむすびしを

古川氏名酒をもてなされけるに、
その一名を探る

わか恵比須宿は嚴や酒のぬし

皆〳〵に咲揃はねどむめの華

寄梅戀

ふり袖のちらと見えけり闇の梅

七草や化粧ひしかけて切割み

飛境院覺龍比丘に謁し、はじめて
持齋を勧む

鶯や茶の葉にそゝぐ畑の背

梅が香をよけて顔打はしら哉

浪花にて不雄子に別るゝ

青海苔の竿のさきなる余波かな

嵐梅亭より鮮香をおくられけるに

魚は鯛すみ家はさぞなむめの花

越後の一字にとはれて

うぐひすや五文字の來る庵の客

梅さくやいつの野分の枝の藁

瓢々房を賀す　此坊常に痩地にし
て歯も落盡したれば、いと古びた
る姿に見え侍る。世に五十の顔の
六十と見ゆるを損なりといえり。
十歳の兒の十二三と見ゆるを德な
りといふ。損德、老若にかはり有
るにや。此論さだめがたし。

としの顔十ヲの德あり若菜摘

若草に初音がましや朝がらす

きら〳〵と棚見込けり梅の花

利錐亭

山家には活火も古し梅のはな

うぐひすや雀さゝやく聲の間

鶯や門は適〳〵豆腐賣

肥前の園邊より秋虎亭に入

抑て見る山の乾きや蕗の華

内野にて木而に別るゝ時、老足互
の病を申合て

膝脚氣やすみ〳〵や柳陰
猶空へ急ぐ柳のすがたかな
　中須賀にて
月は僅雨は皆降るやなぎかな
五人扶持取ッてしだるゝ柳かな
鶯や松で二聲茶で四聲
巻付て筧をつとふかすみかな
　官代何がしの求によりて
梅ふるし或は弓に枝の反り
藪むめやすこの目をする瘦坊主
　兎溪亭
傀儡や舩賃まかす尼がさき
　湘隱軒
手のうちに宮古を知るや海苔拾ひ
目印のつゝじや明日の海苔拾ひ
うぐひすや淀の橋守り起ぬ間に
　生玉にて
穴市を伯父や見られし若菜賣
冬居りの畠迷ひやわかなつみ

苧の屑の付てしだるゝ柳哉
鶯や頭巾かぶりて塀の内
　素水亭
鵙差に守りぶくろや嫁菜つみ
　杏雨亭
うぐゐすやきのふの藪は風ばかり
鶯や梢は鴉置ながら
赤子泣宿は人なし梅の花
うぐひすの月の夜なれや廿日比
　丁部の端山に　祖翁の魂を仰と永
　く此道の榮を祈るのみ
凍道や梅は香もる風羅堂
さかづきと墨に書ぬ妹がむめ
　有浦客船
產聲の地ふね長閑けし有の浦
　善導寺へ趣(赴)く途中の吟
障らずに座頭過行柳かな
むめが香や闇のむすめの足の音
　菊葉の別れおしみて

爐の緣ァのさかづきおもへ冬と春

ほんのりと日のあたりたるやなぎ哉

亂るゝを桴に乘せたる柳かな

うぐひすや柿木までは啼足らず

浪花市中の唫

梅見なり目ざらしは誰が隱し妻

鶯やぬけて行たる藪の穴

歲もはや雨に老たり梅の花

老の坂ひらに薺や跡もどり

うぐひすや朝六ッあくる店の格

酒堂六十の賀

猫の戱きく目も凉しむめのはな

春雨の妻市女を悼

とも泣や共人がらの節小袖

病中

瘦骨を御する梅や夜もすがら

うぐひすや遠ふ泣子に母の耳

太宰府大鳥居のもとにて、天神の御眞筆の大字を奉レ拜て

誰宗三四月　落涙百千行

御なみだのすがたや莟む糸ざくら

内野ゝ山中を越るとて

道草の舌に茶のめをはつざくら

尻かろき旅のたとへや蝶の羽

苗代や二王のやうなあしの跡

なはしろや松を遠日の酒ばやし

野紅亭

湼盤(槃)會や合羽からかさ下駄草履

生玉隆專寺

からくりで老のあゆみやいと櫻

程〻亭

四五年の下葉や屹とはな椿

去年にちる椿の花や雪の上

森亭にて

菜のはなや二人濡行船の雨

春風にむかふつばきのしめりかな

うき床を見よとや落す鹿の角

伊賀土芳亭

山越へて近付顔やはつざくら

南都春日山にて

まだ鹿の爪もかくれずならの麥

畫贊

あらんた(お)東武へ下るを思ひ出て

横文字や富士にちよつ〳〵と歸る鴈

加幡氏の息女にはなれ給へるに

ながくもと見し世や切て紙鳶

京の眞如堂にて

涅槃(ね)會やさくらの里の人の榮(エイ)

顔に來る土餘の浪や飛かはづ

洒堂のもとより初午の句を望來りけるに

はつ午や鍵を啣へて御戸ひらき

天王寺邊りの草庵にて

からし菜は目を摺花の蛙かな

飯塚にて洞棠に答ふ

肉を斷ッ息は尖らじ華つばき

覺龍比丘のもとめによりて

一筋は蝶も道あり和田の原

猫の戀初手からなひて哀なり

ねはん會や草履はかする姿が世話

長野忠右衛門亭

手と足は冬のさかりや初櫻

生玉隆泉寺

いとざくら此繩張はなきとても

越中の沾耳房・九國・中國の行脚に餞別として、門人の一瓶を送る

難波津や梅に巢ぬけの鳥の聲

八幡宮奉納

はつ雷や箱の劒のいなびかり

かげろふや糟に醉たる人のふり

長文あり

苗代や鶴のかためし屋敷取

溝越して手を振る猫の別れ哉

はき掃除してから椿ちりにけり

散り椿あまりもろさに繼で見る

久留米の庄嶋といふ所にて

木がくれつ藪に覆ひつはつざくら

筑前清水にて

水はやし塵は玄鳥（ツバメ）の落すまで

雲刀亭

八重に曳四枚障子や庭つばき

百筋も春は道ありいとざくら

ある時は物の垣にもなるつばき

蛸壺をまつら火入や初ざくら

送惟然房　去年は宮古の花にかしらをならべ、嫁菜・つく〳〵しを摘て語り、今年東武の餘寒はおなじ糸を引はり、うぐひす・雲雀に句をひろふ

菜の花やうき世は去年の秬（きび）のうね

蛙なく田のいなづまや鳶の影

生玉にあそびて

糸ざくら鹿子に結ぶ時もあり

紅梅や月を捨行明がらす

無駄あしを引かぬ櫻や土筆

洒落堂を尋ねて

梅の錠開く咄や合じるし

水淀や盃またん柳かげ

女房は猿のやうなる花見かな

日半路を照れて来るや桃の花

姉いもと供ばいあふて花見かな

洛の東山花盛りなる比

一列ㇾは正月たびの華見かな

佐越亭

はる雨や是もわかれん杉ばしら

飛鳶あやうく動く汐干かな

袖におくおけら小法師も花見かな

おもひ立よし野ゝ人も花見哉

よし野にて

花に来て足かはゆがるよしの山

人〳〵旅亭た取持けるに

持よりて所帯顔なるはな見かな

粟津の國分亭

さくらがり此道ゆけば三井の下

姉者人を殘おほかる花見かな

禪院に杖を休む

養生も水草淸し燒若和布

農家の花一枝所望して

屋根葺の手は猿猴のさくら哉

夫木亭

藤棚や流石に人は寸法師

さま〲の人にもあかぬ櫻かな

蘇紅亭

塩燒も総のけぶりや夕ざくら

同妻につかはすとて

子泣らん母も待らむ花見なら

まつりまであそぶ日なくて花見哉

學文所に遊びて

見臺に晝の灯や赤つゝじ

珠數挽も精進仕事や山櫻

皿山ノ瀑布にて

投入て瀧見がほなり折躑躅

雪解る仙家のさまや梨花の雨

どろ〲はさくら起すや一ッ雷

崎陽の山吹千句 二章

山吹やさくらは座にほとゝぎす

やまぶきや雀すたまる土ほぜり

食のとき皆あつまるや山ざくら

直方にて

青鷽蛬は山くれすみれはら

つゝじ折岡のむすめや田植腰

去年の冬より手を痛み、前後八十日、苦路亭に年籠して、けふや離袖の別れをおしみ、横山といふ所に、おの〲酒宴をもふけ侍る

わすれまじ花鶯に四合扶持

助然もしたはれけるに

若麥のこそぐるあしや立眠り

手盞ながらゆはす文か花のとき

大元櫻花を題して

此貴賤不淨ふれずや山ざくら

三雅亭

瑠璃琥珀玉に香はなし桃の華

肥後の月次

十五夜はさくらにありて朧月

閼迦棚や毛虫のつどふ藤の花

奥へ行あかり借りたし春の雨

元禄亭より竹の句を乞来りしに、主の風流を探りて、頃日東山の遊吟を書て送り侍る

竹林を出るひよろ／＼や山ざくら

夫木亭

八町は藪より明かし花見聲

洛の風之、身延山より東武木曾路行脚の志有よし、はじめての旅人に示す事あり

不二箱根あと見よ薩婆訶山櫻

そなたこそ木ぶりに直る茶つみ哉

旅行に

法度場の垣より内はすみれかな

住よしの汐干

鷸の尾や汐干やすみのかもめ尻

同松原にて

松風や櫻のはなはわすれ艸

夫山亭

白壁に照るや蘇鉄の下つゝじ

土井の隈といふ所にて、助然・夫山に別るゝ

三ッに散る座はひと芝や花すみれ

善導寺にて

さくら花ほとけのしなも九色

彌生の末浪花の大火に、農人橋の假菴を逃除れて

風下のさくら侘しきけぶり先

東武に行人に教ゆ事あり

駿河路でたばこ呑なら茶摘の火

よし野より高野山へ入て

花を見た顔を泣すや奥の院

春雨や茶に延しをく妹がつめ

豊前上野ゝ瀧見んとて、下境川と

いふ所にて
行春や芦屋筏のこぼち家
薬師堂に首途の事などいのりて
花見とはおぼしめすなよ南無やくし
往春や二階の高き家の番
彌生晦日、吉野の勝手明神の邊り
に泊りて
けふ切の春でぞなけれよしの山
ゆくはるや客日繰り出す庵の帳
皆人にたまれと春は暮にけり
孤屋を品川まで送りて
雲かすみ何處まで行も同じ事
つぶすまじ目の入ル時や月と花
笹帽亭に船上りして
半した日も捨ぬや春の磯歩行
行春や榎木見上る川の端
豊後の五鼠は我流れに古くして、
商家の波に隱れしが、今とし予が
草庵に久かたを語りて
幾さくら住し甲斐あり庵の漏
行春や淀の小橋の折レつゝじ
よし野にて
世の中の花はふしぎよ芳野山
生玉の開帳に參りて
實も春急ぐはやつて押合ぬ
夏は此あたりに梅焼をして、實買
ふ家も侍るよし
梅焼や野やきの後も妻籠に
梅徒亭正月かけ物とて、江府英一
蝶書く一軸の讃、元文己未十二月
廿八日御迁化五日前也。世に是を
筆返しの惠比須といふ
酒もなる神であるらしさくら鯛
山中氏冬札を悼
行春や人の上さへ三十日切
出羽の央義が奉加帳に
象潟は牛に眠らん桃の酔
三日艸菴に酒なく、枕をかたぶけ

て
はる雨や行燈の火の須磨の浦

畫讃　寫游所持

久米の仙人のやつし繒を求て、賛望れけるに
しら藤や吹落されて蝶の雲

古翁の像讃　雪刀所持

月はなのほかに用なきおきなかな
花は強あまつてさかな申けり

難波より船出し、兵庫に上る

在郷は大祖父や祖母のもゝの花

淡路嶋にかゝりて

二ッうねりうねりて岩のさくらかな

夕舟亭、愛娘にわかれ給ふを悼

くし箱の紅粉は化なりちりつゝじ

上巳、此嶋に舟かゝりして

姫嶌や壁にもたする搭雛

奈良に行とて

山ざくらあとさき見ても我ばかり
花にいざ茶つみ用意も仕て置ぬ
靜には啼れぬ雉子の調子かな
降客も詠められけり梨のはな

天王寺にて

御修覆はかくらの華也大工寄せ

凡兆阿圭子を悼

行春や知らば斷べき琴の糸
鮎の子は椀に照る日や櫻狩

一樽を携へ、こゝろ〳〵の出立も、さすが難波津の春なれや

仕付等の妻のあと追ふ花見かな

蕉下の古老も年〳〵に隱れ、ことし伊賀の土芳うせ申されけるよし。此次はたれにか當り侍らん

散る花や夢と旅との繼子立
白妙や月の外行さくらの夜
汐干るや海に風なし麥の浪
春さめや手拭笠のはたけ道

岡い松

春雨や鴉みちなき岡のまつ

清水寺の山吹

やまぶきに引さき紙の歌はたぞ

病中唫

病（ヤム）中（ナカ）のはなしに靑む櫻かな

寒山拾得の繪讃

はき捨ん言葉の屑をまつの花

山ぶきや御免〳〵の茶つみ道

勝尾寺に詣ふでゝ

賣料を分るや坊の茶ごしらへ

梅徒家父祐甫老人の像を書せて、孫たりける善四郎へ

月花も錢の入事きらひなり　と讃しけるに、隣書して、

孫を愛し子を敎る道、家業おこたらず。大將自動けば、士卒手いどく足いごとし。名を學ヶ功を立る事、長生無病を第一の術とす。是をたのしめば、衣服調ひ菜の好もなく、其心やすらかなるべし

養生は歩んで鹿茱山ざくら

醫生岡本道一子に病談を得て、短冊乞れ侍る

月華に煩ふ世話はなけれども

布袋の畫賛

月花にむすぶ袋や無盡藏

大津水田正秀墓參

きゆや散るや此三日月を月の花

松下亭

西行も雛の道具かあつめ艸

後藤氏梅徒へ、鳴月坊の文臺をゆづりて

花と實と松は二ッを三日月

夕虹や一字を命月と華

古翁の讃

月花の下戸ならなくに竹のぬし

翁已後旅人なしや月と花

窓あかり櫻の木間や漆かき

冊に書て予に尋ねられける。予竹の色然べきかと答へ侍る。其後又予にも句を乞れけるゆへ

杜鵑そといふ聲は二階から

と此句を吟じ一夢は覺侍り。

元翠悼

はな摘や人は六字を十七字

路堂は出二寮に引籠り、此夏身まかれるよし聞へけるに驚き

ほとゝぎす此たんざくは番位牌

子規かほの出されぬ格子かな

竹の子は醫者のゆるしや更衣

内外の神は予共ごゝろに押合て

何事の又詣ふでたしほとゝぎす

京都に上りて

啼癖になれほとゝぎす宵の内

（宕）愛岩山 二句

清瀧の音や空〳〵時鳥

きよたきや浪におどろき杜鵑

帆柱亭の隱家にて

かくれ家や木綿車にかんこ鳥

啼ば寐てなかぬ寐覺や子規

伊勢太神宮

春夏を内外に拜む若葉かな

三秋亭

ほとゝぎすもとより松は古郷と

備中倉鋪、途中の吟

笠杖を取ればその儘かむこ鳥

平汚にて

麥の穗に來るや雀の夫婦連

六行會月次、林鐘の法席を皐月にとり越して

化なりや聞ぬ一倍ほとゝぎす

かはら町の草庵に二三日ありて

老の目や竹の子の啼く朝雀

中を取ル三ッさかづきや衣がへ

多賀宮參拜

鈴かけや粢（シトギ）清める水の脇

ざゞんざと松は成けり郭公

刃物屋何がしの宅にて

あしもとに春は落ちる若鶏冠木(カヘデ)

熨斗はづす一歩の紙や更衣

ある人はありて淋ししかんこ鳥

卯のはなに冰紛(ヒッ)はし甍の雨

うの花や月のちからを窓明り

彦山十二景

筍を笈の小付けや行者連

文之が京の草室をたづねて

灯をともす隣もなしや花卯木

出羽の芦錐にとはれて

出來麥にあるじもしよし郭公

かすか江の尼寺開帳にまかりて

ぎやう〳〵し口に埃なし縁記說

竹の子や上皮なでる京の市

洛の一之、家を求られしを祝して

見立けり竹の子賣も千代の門

洒堂亭

麥喰ふて麥見る宿や衣がへ

松琵亭

古袷老はしかじや鳥にても

加茂を出ば聞たふりせん時鳥

廟参

ほとゝぎす待齒ちからや艸の莖

人の家をもとめけるに

ほそ長き家やまさきの若かづら

さかづきに芥子人形の田うへ哉

紫陽草やそらに覺ぬはなの雨

端午　二句

小坊主がひやりとさせし菖蒲かな

一雫あやめ見あぐる門はつち

母の影ふみて田うへの女かな

毛雨亭

奉公に手の下りたる田うへかな

竹の子の名殘りや椀に節一ッ

田植うたの跋に

もの喰にまいる田うへの加勢哉

野紅の親父へ申送る

荊咲こゝろも老となりけるか

晉帽亭は住ろかたむかしとかはり、三人の子どもを愛して、風雅にいよ〳〵つのれるを祝す

瀬に替る家や一倍ちどりの巣

段山小路といふ所にて

葺そへて能き虹光(コウバイ)やあやめ艸

鵜ぶね見や蚊にたち歩行蓬原

三河の八橋の跡を尋ねて

百性(姓)のふるき名もありかきつばた

豐前大橋の安樂寺

箒木や揷日消る寺のあめ

櫻木を知つてや付し蝸牛

千とせ川の凉に

鵜の鮎の年貢とらるゝあはれさよ

豐浦の住吉へ參詣せし比、社司山田式部、むかし奉納の詠哥を拜ませ給ふに

年に取ル早苗の員や姫小松

程十亭　端午

御部屋風ふくや幟の臺所

消かねて芦に打るゝ螢かな

さつき廿一二三日は石碑成就し侍ろに、暫く杖を休て

碑や我がよみ初て蟬の聲

同廿五日おの〳〵廟參

塚の銘千代にや千代に苔のはな

五月雨に小鮒を握る子ども哉

戀の蚊遣りといふ事を

産業(スギワヒ)は沖のつま待蚊やりかな

有井湖白　官府へ歸るを馬のはなむけして

さし肩に羽織の風や今年竹

闇夜にもいとゞまたるれ水鷄でも

机上に戯れて

白うるり淸ぬ學者や瓜作り

はな柚には豆腐の香あり老が庵

大足や小あしまじりの苗の道

鹿の子や鞴所出來て青つゞら

時もはや梅に塩するあつさ哉

端午、下の關にて

しら雲の葉と見る空やあやめ草

はじめて娘をもたる人のもとへ申遣す

姫ゆりの小萩がもとぞゆかしけれ

くれなゐの暮のすがたや合歡の花

筑前の文十、芳野行脚の歸帆を芦分橋までおくりて

行船や我は青田の鷺の首

一支亭

庭むめや吹矢を隱す葉の茂り

たんご

九節竹見る窓やあやめ草

悼政豹靈兄

線香を添るも夢かはつなすび

夏海や碁盤の石のかいつぶり

やどり塚にまふでゝ

夏木立實石碑の文字居り

五月雨や土人形のむかひ店

宇治にて

ほたる見や風は茶嗅き懸作り

さみだれや藍して淋し荷ひ賣

艸の塵草のいほりのちまきがら

備後の鞆浦にて

庵室は人わすれせず忘れ草

五月雨や挑灯消しの額の鍍

紫陽花や見込む座舗のかけ刀

六月や沖に煮たる浪の艸

弓張は緣へ抜けり雲の峰

松風を寐覺に聞、水無月に時雨を愛するは茶を好る人也。風雅は百越と号して、苑に一本の竹をうへて千とせの節も流行すべしと、ゝもに一器の茶に遊び、よろしく薫龍舎と名づけ侍る

釜に立龍をつら〱雲の峰
手廻しに朝の間涼し夏念佛
夕すゞみあぶなき石にのぼりけり

利合亭

柚柑子や玉にも替じ下すゞみ
此あたり二三度戻る涼かな

素朝亭

一丈の風のかほりや庭の松

風之が別埜に遊びて

涼しさや水は井を汲む下河原
松陰に人待ふりのすゞみかな
虫ぼしや酒斗り遣る手の代り

三歳の子に失ひける三回忌に

毒を盛る親はなみだのすもゝ哉

行脚の比

しら雲やあふぎをつかふ須磨の浦

哀傷の題にて

夕立や添乳をはなす裏屋の夢

女中のあつまりたる家を見すぐし
とたるとて

のぼりみるゆび先三ッ竹格子

我病中に雪刀の許へ文遣すとて

煩らへば連も捨けり蚤の宿

肥後にて

垣ありて夕顔ありて竜田山

四條の納涼にまかりて

床すゞみ七夕どのやはしの上

小倉にて

蟬の聲絶えては續く岩の道

雨後

包まれて水も延たる蓮かな

古川氏の酒家に若悪比壽といへる
名酒あり。酒百首の詠哥に、此家
の名酒はよみ殘されけるも、後人
にたのしみをゆづるにや

酒涼し百首に洩れて西の宮

未雷亭の隱(寓)居にて

すゞしさやむかしかやうの尉と姥

洛の祇園會に誘はれて

ひか〳〵と暑し物見る額つき

杉脂の手に煩らはしせみの聲

座鋪まで屆かぬ夏の木陰かな

丁巳亭

宿かして馴るれば替る夏蒲團

善導寺の藪の井

藪の井や夏の一合は經のすみ

葛の葉にぬぎ合せけり蟬の衣

ある人の別野(墅)に誘はれて、盡日うちやはらぎ、其夕附日、外のかたをながめやりて

行雲を寐(居て)て見るや夏座鋪

風薫る人の古びや椎ばしら

下のせきにて

晝顔に一露淸し鷺のあと

川の帆や青葉が中の雲の峰

一の谷に船をよせて、此句を以て同行風之にかたる事あり

晝顔は敦盛殿のさかりかな

爪先に入ルや外山の雲のみね

雨の名のいくつ替りて夕すゞみ

無名庵は先師木曾塚の假リ名也。後鳥落庵といふべきなど有りし聞覺へ、惟然坊、此名をよべり。近き比洒堂、無名庵の跡を立べきよしにて、禪家の僧に此庵を起さすべきよし、集をもよふし侍られけれども、半途に身まかれるゆへこれも絕侍る。この号を難波に遷し、此度淺生庵を造り替たる事を幸として、無名庵高津野〻翁とけふよりとなへ侍るのみ

入庵

暑涼し庵はよしともあしくとも

かはら町の市中を出て、高津野にうつりて

裸身に笠着てすゞし菊の苑

禪門を悼て

つゐ隣り蓮の門出や杖入らず

文十が母をいたむ

手ずさみも泣や夏芋の売目鏡

杏雨・皃牧の兩子へ返し

土用にもすみよしならば松のかぜ

枳邑が剃髪に

樂遁は宇治殿さへも渋團扇

苔清水すんのあかりやはつ螢

雲畫亭

佳人の是でとけたり青すゝき

京からの文にもかゝずほとゝぎす

斷橋杜鵑

ほとゝぎす橋掛渡す櫼かしは

茶にかぶる堀江の浪や郭公

艫　着　に　三　郎　嶋　や　沖　鱠

松山やほたる清込朝あらし

竹植や盆にのせたる茶碗酒

野坡吟艸集　巻之下　前編

秋之部

はつ秋や雀よろこぶ雷の跡

盆の月寐たかと門をたゝきけり

畵　讃

朝がほや竹と世を經る種かづら

醫門の粲臨亭　女郎花の題を出されけるに

あさがほや𢮦の重日のをみなへし

子は親に道のたとへや啼うづら

吟友と市中に杖引て

市店や闇の酒宴のほしむかへ

一方は稲にかゝるや星のはし

仙呂亭　山家に下俗あり。市中に風雅の隱あり

朝露や市のおぼえの萩のぬし

人につく蚊の羽はにくし星の橋
難波津や芦の葉に置く天の川
猿芝亭
蚊の羽根や人に渡せるほしのはし
遅流亭
辻うりの鯉一はねや初あらし
母つかふ貧さおもへ魂まつり
十人の風友を艸庵に祭りて
魂まつり皆若衆につかはるゝ
七夕や松風をきく奥の番
日出といふ所にて
たなばたや日出はわりなき疊蚊屋
嵐羽亭
夜伽して能左右聞やきり〴〵す
滄浪亭　花月は風雅の至寶なり。富てもむさぼらず。貧しふしても樂みすくなからず
稲妻や座鋪の跡のしのぶ艸
杏雨亭

藥研押す宿の寐時やきり〴〵す
あさがほや晦日しらぬはなの霜
書　賛
葬やあさな〳〵の月の減
かさゝぎや萩も薄も橋の規矩
石臺を終に根こぎや唐がらし
たなばたや矢瀬は酒待うしむかへ
蚊ばしらやかさゝぎ寐つく天の河
尼ごゝろ是をも撰りぬ唐がらし
あさがほの入相なれや粥の鐘
影つれて一葉ちりけり月の初
曾帽亭
はつ秌や脇差しまる醫者の腰
廿五日
萩すゝき月はほそきが哀れなる
筑前にて
魂待やはしの見付の挑灯屋
篝木は結れて淋し萩の花
万李亭

蘭の香や此はな咲て夜の花

未雷亭

しら萩やまばゆく引て雲の秋

虫曳亭

秌來ぬと音ずる今朝や刻み瓜

いなづまを抑へて凉し暮の雲

猪路亭

定るやむしもはつ音の一葉陰

兎漚亭

鴿吹の實もとおもふはなしかな

青陽堂に名殘を惜しみて

一つゞ、見て減るものや唐がらし

旧庵普請の間は瓦町に住かえて

ゐなづまやなれも淺茅の市茄子

素文亭にありて、亡父楚兒の三周忌の玉祭りの日、笠を取りて

水に酒茶には塩なし魂まつり

李洞亭の老父、急水に死を除れ、其秋靜に終りをとれるよし聞へ侍りて、短册を送る

山川の跡や靈かるたままつり

三雅とともに、裏町の燈籠見に歩行て

貧しさの子を並べけり魂まつり

夕顔やかいまかるほど秋は來る

塚に添ふて年寄る聲や蛩

東國行脚の比

あき風や不破の雀の七ッ起

内野にて

皆光る雨夜のほしや虫の聲

入相や一葉ちりたる鐘の道

深川畫賛　市山所持

芭蕉葉は野分してあり木曾の留守

湖日亭

相蚊帳に秌の咄や片旅籠

木犀の香はたなばたの追風歟

筑前の國へはじめておもむきて

早稲の香や溜めてはこぼす松の風

風五が老父を悼

あみ笠も蟬のもぬけや秋のかぜ

仙下一宿ありけるに、短册おくる
とて

彦星は椿にありて一夜客

玉まつり生りそこないの茄子かな

猪路を送りて

綿は花肌はひとへや關送り

風猪へ送る悼

みのむしはちゝと啼く夜を母の夢

猪路が閑居　閑寂に住といへども、
命をのぶる便りにもあらず。身を
安くしても行事なければ、人の道
にあらず

葉隠くれ(に)見ても朝顔の憂世かな

酔かほや袴着て立萩の淵

七夕や稲の葉のびの隠れ道

亀來亭

青ひさご秋や十とせの種返り

李中亭

一葉とび此嶋よりや四方の烌

秋涼し蘭のもつれの解るほど

冬月十三日玉蔦にて

住歸り老せぬ莚や竹の蔦

船中にて瘧疾をきるとて

一葉散る柳はふねのおこり哉

市之亭

八さくや桂のむこの羽織禮

八朔や上着下着を取て置く

常盤塚

つたかづら常盤御前も松のかげ

礎月亭　さくら・山吹といへば住
る人も花美に聞ゆ。菊・鶏頭と聞
ば隠にならふ。されども今菊花は
色を好み、寸尺を愛する故に、そ
の情を失なへり。唯、鶏頭のみさ
して愛せられるゝ花にもあらず。
又うとまるゝ類にもあらねば、是

唯風人の寄所にして今の俳諧なり。翁、世にいまさばかくや侍らんと主に語りて、此亭を直に鶏頭舎と号し侍る

鶏頭や盆花きらん鰹かき

東雄亭

鴈啼て雲にしるしの旅寐哉

母の日の明かぬほど打きぬたかな

斗圭亭

鹿待や手足に落て軒の月

紗利へ送る餞別

しか聞とおり／＼頭撫て見る

兎城亭

甞酒の顔か門田の鳴子曳

八朔や在所は鯖の刻み物

空からは蕎麦しら雲や渡り鳥

貧はたのしめる事多し

寐どころは方八町に啼うづら

豊後の日田といふ所にて

山伏の火をきりこぼす花野かな

をなじく

はつ鴈や闇の日當の彦の峯

ひら／＼と目をさそひたる薄かな

海苔つくし今宵味はへ月の浦

太宰府にて

御灯や夜るのにしきの木々の花

實椿や立るによはき蜂の針

門人利曾を誄る

直にして曲るすゝきのあはれさよ

晩子亭

あさ露の眞玉かけふとれ青みかん

秋もはや鴈下り揃ふ寒さかな

肥陽の門人三十余人を引て廓外に別るゝ

はげみ羽も風もれ多し老の鴈

ところ／＼淋ふするや鹿の聲

懐楠堂興行

松風やたば粉破らすけふの月

失業病身の人の假初に天窓剃りたるも、外に紛ゝ事なく佛祖につかへて、終に信の道心とやなり侍らむ

優婆塞が鉢の恩しる月見かな

鶏頭舎

妻と寐る鹿や月見の片隣り

我人とあらそひなくて月見かな

金吹亭

藏隱す亭主の侘や竹の蔦

伊勢にて

いせの海士に茶を吸せたる月見哉

鹿なくやどつと浪打聲のあと

秋の野や勢田のから橋渡るとも

名月や火縄もへきる客のふね

八幡宮奉納

守りめも稲に際だつ里の神

菊路亭

はつ鴈や我も下り居の布羽織

待宵はひとつ徳あり夕月夜

兎城亭

稲刈てだまりもの有ッ藪の家

楚兒亭

月待や足らぬ男は稲の番

おの〳〵水邊にもよふす

新月や芝にも迷ふ居り所

名月や艸に撫こむ今年松

大津松本の人とかたりて

名月や明て所の朝ほらけ

蝕なれば

名月や常は蚊帳釣蝕曇り

片照りはもみぢならばや三名月

葉月九日の大風に、草菴を吹破られて

める月やにしき消されて草の原

我上に牽牛澄り中の秋

箱崎に出て

落る日も名月なれや松の雲

待宵の色をたとはゞふゆのむめ

明月や野中の寺の出つ入ッ

餞別

行鴈やいたむ手に引窓障子

浄應寺

捨草やすゝきはねぢて浦の寺

海士が子の鰡(ウルメ)をかえす花野かな

わるいのは佛にきるや鶏頭花

鐘の音や名月くらき山の照り

馬貞・古郷へ歸るを送る　筑紫の春如月より所々吟行して、花鳥のあはれに枕をならべ、今長月末に至りて、備後の福山を離袖の地と定たるもをかし。世にある人はいかなる袂をも裁さき侍るべきを、風雲の人は朝にちぎれ夕に消るも珍しからず。是より東西に吟行し、人をも進むべき事をかたりて、風雅の種一粒を包みて、是かならずうしなふ事なかれと、彼がふところに入るゝもの也

風流は目利して取れふくべ種

福山にて奉納

むら雲や雨は手に來る鱸釣り

紅〻うらや今七寸の菊作り

名月やいつくしまにも掃除人

畫賛

影みたり萩は輪に成る風狂ひ

いくあらし逆毛吹夜や鹿の聲

玉嶌羽黒の社に遊びて

初鴈や西に置く日の羽黒山

名月や俗名は消ぬ庵の主

生玉で暮て日長しけふの月

馬貞と尾道へ越るとき

花蕎麥や足についたる烏の霜

すゝきのみ闇の花野ゝ枝をり草

朝意地や一葉喰切ル鵙の聲

嚴しまにて

三日月や闇に上たる鹿の角

うつらほど芦の動きや暮の雨

夢中に友をさそひ、破籠などたづさへて

我等よしそこら猶よき花野かな

日は西に雨の木ずゑや渡り鳥

堂藏月のあまりを月見かな

火災をいたみて

名月やすご／＼ありく庵の跡

隣家に農夫あり。常に酒を好みよろばひけるに

尉今宵うせものにたつ月の照

門人芦路へ送る短冊

白妙を手柄に月の曇かな

名月や人を定むる五疊敷

明月や家賃の外の坪の内

名月や濡足ぬぐふ一把はら

葉月十六日は滄浪亭の名殘にして、把木の兎城亭へ赴く、同行二人、未雷と我也。石櫃といふ宿、甚右衛門かたに一夜の枕をもふけぬ。此間五里の山中也

十六夜や暫く遠し五里の人

地藏院

いざよゐや眠る間もなき泊り五位

市山が母公をいたむ

いねこぎも茶を呑たびのなみだかな

名月や行燈は梨子を切明り

嚴嶋に旅寐せし事を懐橘堂にかたりて

茶を拾ふ鹿あはれなり市の秋

名月やとらへて過る岡の萩

新月や住も黑めず庵ばしら

名月や茶の香嗅出す數莚

庵調ひはじめて中秋

住馴れし庵は新開地の杭にかゝり、東へ五十歩ばかり引庵するとき

庵差圖月はいづこに置くべきぞ

奉納

いねこぎも木陰つくるや松の下

留別

唐秬をかくれはじめか浦の秌

把木奉納

順(シタガフ)も把伎と書てや稻のはな

題 渡り鳥

はつと來る羽音はすなる花野かな

鏡池秋月

名月も老にけらしなかゞみいけ

けいとうやはたけ一枚後の種

名月は人のなみだの出る夜さか

和泉國信田の森をたづねて

葛の葉のむかしの森は庄屋裏

雲行てちいさき月を詠めかな

十六夜はけにおとなしく曇り皃

今宵ひとり共有明はほとゝぎす

名月や竹の林で飲もあり

めい月や明石ちゞみを宵の晴

名月や我をあやまつ畠ぬし

茶處の賣すそにほふ月見かな

月夜たゞ梅には替る花もあり

住吉社參

名月や蔦の手を出すわだつ海

菊咲てきくの嗅なき花野かな

野分せぬ此名月や三つの草

庵今宵住よしまでや月の間

月の數空見せ顔や天津雁

月清し水より立て五位の聲

花ばかり日は殘りけり鶏頭花

八朔や菌の初穂の唐辛子

南部にて

飛火野や若衆送らん鴫おどし

鴈の觜尖る事なしけふの友

晉竹に三日おくれて

小田につく觜のとほけや後れ鴈

名月の雲は裏見る模様かな

小鳥飛荊の針に蹴爪かな

梅楚亭　仙下ぬしより艸花を送りければ、一種の題を定めて、發句を並べ侍る

秋草や花は五色みつの友

もみ莖の上下にほへ賤が菊

文月廿四日の夜、義仲寺にて夢中に秋の題を取りて

涼しさや風の色さす梅もみぢ

紅葉見や猿つくばいに御所女中

白雲や野山にちりて花すゝき

しら菊や髭ぬきこぼす老が膝

紅は鶏のとさかや菊のはな

三尺の松風寒し後の月

遲水亭

しらぎくやまた齒に冷す生鱸

三芳亭

葛城や夜るのもみぢの俄橋

三原大善寺にて紅葉の題をとりて

紅葉見や火打をうつす染火繩

梅林にて妹ざれを見る

梅もみぢ歸り花さへ升つもり

六梅亭の園に三の盃をならべて

三日月や素を後にやむめもみぢ

霞友の老父八十年の齢を拵て、折〳〵浪花へも發句など聞へ侍るが、けふ初て對面して

大古の粥のあるじや菊作り

事かなと杖にかたぶく菊のりん

菊にかも日の短かさに月夜かな

史曳亭

楊弓に嗜むゆひや〆治かり

しらぎくやお梅內侍のむかし花

筑前都外亭

未ダ紅は旅の日數や庭もみぢ

瓢々坊は二とせぶりに草庵に來り、文月初より葉月末比まで晝夜俳諧を語る。撰集の草稿など賴みて、けふや歸帆の名殘を送る

日和まん綿につれけり老の烁

重陽

虫のつく栗はさもあれ菊の花

菊の老杖から先へこけにけり

四の角いづれの秋に不破の闢

風之を友にして東山高臺寺の紅葉に遊ぶ日

もみぢ見や雲洩るかたのひろひ道

茸狩や毛雪踏すべる鹿のみち

青かりし饅頭の葉やもみぢ狩

木而亭

茸狩や梢を歩行生豆腐

いつくしま明神再拜して、松下亭に旅情を養ふ

烁もはや木の葉折込ム市むしろ

十三夜ふけて亭主の衣配り

后の月ひそかに喰ぬ菊のむし

天は欠たるを道とし、人は足る事をしらず

百なりにおもふ形なし後の月

黒さきにて

しら菊や貝を根に置く海士が宿

馬貞の歸帆を

菊の友橋を送るか難波ぶり

暮かゝる村のわめきや后の月

明半時探る香もあれ十三夜

洛の九十九庵にまかりし比、閏長月十三夜をもてなされて

冬や秋あきの冬しる十三夜

淺士亭

秋草や茶人落つく水の冷

箱崎の松原餅屋長左衞門亭にて秋をおしむ

笹かきや烁一日の世捨人

水に離るゝ魚あり。或人明日は大海入むといふに魚に余命なし。これがはくば一升の水を得むにはしかじ。世事皆術可也

手の水に尾を振る秌の小魚かな

靜さや梅の苔吸ふあきの蜂

和水亭 六十年に余りて、落初し
齒の再生出たるなど物語り侍るを
賀して

噛あはす朝齒も凉し老の秋

万李亭

ゆるゝ葉にとまりたがるや秋雀

生の松原に歩行て

海人の外窗て人見ず松の秌

文十亭 椿の句望まれて

あきの空澄は黒きか庭つばき

浪花の眞田山にて

松一木のくればあきの色もなし

秌もはや日に／＼兀けて山ばたけ

病中の唫

しら菊や影と分べき月もなし

痰膈といふ病に臥て、洒落堂の三
回忌におくり侍る

新米も香を嗅ぐまでや佛並み

ヌ

十三夜雨もつ雲の老が脉

文字が關

あだし野や錦に眠ル平家蟹

日見峠

小童の何處まで行つ秌のくれ

家婦達がちやは／＼いふて秋暮ぬ

かたぶきて蝶のかゞみや菊の輪

生玉にて

遊ぶなら酒振舞んあきのくれ

乘物は菊見なるらん額ィわた

小倉山のもみぢにまかりて

香煎は茶にふる霜か朝もみぢ

遠士老父を悼

灰占もきからや悔むあきの霜

千山子は予が年に近く故人となり
ぬ。今、寒爪は牛ほごなるなかぞ
へて

菊はまたし盛と老のくらべもの

蘇紅入湯を送りて

有馬山一まはりさへきくのはな

河内國交野倉治の瀧のほとりにて、

清正寺の晩鐘

鐘の聲清正寺じやと聞く牀のくれ

備中國に遊びける比、田守と咄て

とし占や菊の花結ふ藁の長々

きくの香や衆徒のかためし二重門

行秋や秋半時の門案山子

松下亭

三月や松にむすべる初木の實

襟に指す僧の扇も菊見かな

素泉亭　はじめて廿日市の連衆に
逢ひ、初心を導とて

殘菊や牀のつもりも廿日市

茸狩や寺の印の假か傘

梅從亭

一色に千種のはなや後の月

佛遍（通カ）寺にて

紅葉ちる山田やありし牀の色

裏の戸を押ゆる棒や秋一ッ

茸狩や袴で町は紛らかす

六野ゝ山へ門人五六輩を伴ひて

たけ狩やのんだ人なき酒五升

綿取や門に待子の丸はだか

松涼し吹綿よごす秋の雨

鮖釣祭りあへはや阿知の里

東方朔は長壽を愛し、猩々は酒を
好るを祝ひて、扇子取ては是が眞
似びをもするとかや

亂菊に遊ぶや鶴のひろひ足

冬之部

此ごろの垣のゆひめやはつ時雨

旅寐せし比

小夜しぐれ隣の臼は挽やみぬ

眞野は二度かた田は今や初時雨

押合て宿は物喰ふはつしぐれ

しぐれうとおもふて咲や枇杷の華

腫物の病ありて、把木より橋田までは、舟にて送るべきよし

足たゝぬ蛭子ふねなき時雨かな

竹田通りを京のかたへ上る

一しぐれ寺内で濟か本國寺

駕籠舁は百の空見るしぐれかな

木ゝの葉も地に有付てしぐれ哉

崎水の五月舍梨里亭 ちかき山〳〵の紅葉に、和泉・河内の冬がれもおもひやられて

時雨るゝや伊駒出し置北の窓

太宰府の町にて

一疵は蓑に音なし初しぐれ

しぐるゝや或〻山寺のひとり僧

撰り當しけふやしぐれの中日和

客あるじ月ほどに待時雨かな

風律亭

竹に來て猶あしはやきしぐれ哉

枯葛の夜るは泣のかはつしぐれ

與行の跡に殘りて

夜しぐれや鳥一啼の枝うつり

しぐるゝやけふはどちらが飛鳥川

高津の草庵にて

歟(カ)の聲のしぐれなりけり軒の暮

松下亭

しぐるゝやうすひ葉にさへ生れ色

茶を呑ば茶ばたけに降る時雨かな

己未十月十二日高津の庵に古翁な祭。此翁此津に病發り給ひぬ。我も今年病ひに臥して、生死の推敲もさだめがたく人に助け起されて

我を呼ぶ聲やうき世の片しぐれ

功偲亭

山茶花や茶とさかづきの客替り

はつ霜や衾に籠る鐘の聲

いつくしまの別れに
廿里は水の歩みの小春かな

可琢亭
花鳥や千どりの花は沖に散り
初雪や隔夜の俗は夜ルの形リ
はつ雪に隣を顔で教へけり

おさなくて後、母をもふけたる人に
母といへ月はむかしの冬ごもり

滄浪亭の閑居を尋て
家解ば建る地出來て冬ごもり

ばせを庵にまかりて
木の葉ちり雪降うへに散木の葉

祖翁十七回忌筑前國にて
口きりや峰のしぐれに谷の水
頭巾から耳とり出すや夜の音
菅かれて喰物淸し鴨の聲
神送り孫達ならぶ撰リ箸

正秀五十才に余り、妻におくれしを悼
三布やあく五布のふとん老の夢
暗に蹈木の葉かはくや神迎へ
はつゆきやきよろりと消て稲荷山

十月十二日懷旧
茶の花や湖水に戻る霧の足

兎白が婦におくれて、送葬の折節時鳥一聲、耳に入と語りければ
ほとゝぎす口明く夢や小六月

雨聲庵にて
灯もうごかで丸しふゆごもり

東然亭
枳ダス(ルビ)の針よけ行道や川千どり
初雪や昨日は拾ふ椎の菓子

松童亭
寒菊や箔色しづむ鷹の鞭

筑前國に遊びける比
寒ぎくや砂に四五遍ン沓の踏
井戸堀は此世の風の寒さかな

家の陰江に入ときや鳴千どり

義仲寺廟參

木がらしや身にはまだ來ぬ日枝の音

冬がれやかゞしのほねも亂れ萩

万支亭に三人の靈魂を三日三夜追善ありけるに、悉皆成佛の心を申侍る

寒菊や橘柑もともに佛色

鼠雨亭

朝霜を綿に見る日やきくの株

悼轄所曲水

鶴界はかるきを悔む霜夜かな

橋擔^{カツ}ぐ麥のしまひやなく千鳥

はちまきを取れば若衆ぞ大根引

きのふは嚴しまに遊び、けふは諷沙を作ひて、廣嶋の風友と語る

つれ汐や鴨も旅寐のまくら替

倉鋪の枳邑を悼　法号を是誰房といへり

是たれとつかむふとんやもぬけ売

人聲の夜半を過るさむさかな

岱水が新宅にて

生壁に墨も青き火燵かな

冬籠りけふは罪なし針大根

ちからなや膝をかゝへてふゆごもり

竹呂が酒家をたゝぶれて

守りて聞さけの涌夜や啼ちどり

大名の參會し給ふを、物のかげよりふたりのぞきて

正客の行儀崩さぬさむさかな

雪月の家をはじめて尋ねける比

はつ雪やほとけの道は垣一重

手づからに蕎麥干す人や冬籠

似夕亭

三日月を見添へては聞鴨の聲

三瀧山に遊びて

松に来て宿に居ぬ日ぞ冬ごもり

瓜寄亭

初しもや梢も老の一トはれ着

　　晴月亭

はつゆきや是を柳のかえり花

木の葉ちるあなたへさらり旅の宿

　　鶴嘯亭

茶の華や水に香もなし里の寺

　　十月十二日

寒ぎくや朽葉をしごく塚の道

　　古翁三十六回のこゝろを

三むかしや泣口すゝむ納豆針

錦の跡ふた足いたし今朝の霜

茶のはなや鯡作なをるながれ水

　　如風亭

まつ風やつばきを閉るはつ氷

木がらしや爪ほり立る松の鴨

　　十月十二日病氣なれば廟參は人に

　　たのみて

けふの日もしれず小春の墓參

　　洛の風之ふたゝび病床を見舞給へ

　　るよしを聞て

初霜や茶苑かやはら朝ぼらけ

　　井筒屋重寛、病中を見廻侍るに

美淋酒のさかもりせばや初みぞれ

　　知柳亭

はつ霜やうかゞひ上ゲし鹿のあし

水底も秋經し色やはつ海鼠

　　貧　窮

沖の寒岸にうねるや鴨の浪

　　祖翁像讃　風之所持

　　往昔深川芭蕉庵にまかりし比、冬

　　籠り又寄添はん此はしら　と承し

　　に、物がたり申せし事の一句と成

　　り侍りしを

冬ごもりけふは其角や參らめ

村すゞめ照るとなか〳〵寒さかな

薄燒く音は夜半か神送り

冬籠り千鳥の筋や一つ窓

　　野趙悼

指を折ル痛はしらず霜ばしら

風哉庵

しぐれせぬ時には雲に鳶一つ

三井寺にて

埋火やからりと當る杖の音

手帚を猿も打ほる今朝の霜

艸庵の留守をうかゞひければ

庵の鎖盗人さむみ耻かくし

此中はしぐれとも立ツ口數かな

流巴亭

小春とは海に有名か帆かけ船

降あてゝ雹それけり枯すゝき

はつ雪や塀直さんといゝくらし

從行亭

葉はしぐれ根は水清し冬の芹

霞友亭

酒にあふ水は茶に猶冬ごもり

酒堂悼

我ひとり食の替出すしぐれ哉

青陽堂の市女老養の給仕を感じて

柴の火は火燵の花や亭主ぶり

雪ぞらや河内の海の鴨の聲

染らねば時雨句はず葱ばたけ

茶人透達を悼

寒ぎくやきのふは床に墳の花

梅從實父の一周忌に

法の聲睡るや鴨も香炉形リ

麦まきや去年を泣日は惣休み

瀨戸田といふ所にて

己が塩やくともしらず鴨の聲

しほ燒は五味のかしらの十夜哉

此法やはなは降らでも初時雨

こがらしは何所を吹やら松の風

大黒の讃

七神の出合もゆるす頭巾かな

廟參

寒菊やけふはほとびて朝雫

嚢曉亡父三回忌

山茶花や法事普請も三年振
黄金は土のほまれや歸り花
己が闇聲は見られて月の鴨
柚味噌ふく風につれけり小夜衛
しぐれ野や吹かれてすごき鷹の艸

船中の唫

喰ふて寐る身の不性さよ浪の鴨
居風呂とけふは見る日や大根曳
鴨なくや名をいゝ當し闇の友

筑前國に太閤君招請の間とておはり。
又、宗旦の間あり

千鳥啼やむかし座鋪の鑓鉋
ふみきつて人は旅せよ今朝の雪

太宰府奉納

夜かぐらや戸の開かたに冬の梅
投ぶしの其跡來るや鉢たゝき

くに女に送るいたみ

素布に氷ルなみだや針の數

兎城、嫁うしなひけるに、孫のかつ
かるなど文に申おこしける返事に

祖父の指嘗るかんろやはつ霞
鷹狩や雀は余所のむめのはな

助然ないたむ

凍る間もあつき涙やいやがうへ

又

なき人の影か四角に疊み夜着
松風や此あかつきの雪のうそ

遊五に別る

新蕎麥や股引がけのうつの山

文朝亭

竿に成る鷹野ゝ供や藪の道
鷹がりや出くすむ殿のおく這入

五十年に近き人の初子を儲けられ
けるを、眞兒と名をつけて

孫も子も分らぬ雪のすゞめかな

杏雨亭

水仙や閨の前を藪に見る

義全庵にて

水仙や庵の會釋に伐へらし

素曉を悼

若いとて追ぬく死出の霜路かな

菅神の繪讃

神歸りむめぞ先咲け正のはな

艸庵を盗人におそはれて

垣穿つ雀ならなくゆきのあと

天滿宮奉納

冬むめやとしも一ト二タ枝の花

霏たうちに降てあれかし宿の雪

ゆきふるや杉は杉にて置ながら

何の顏にゆきは見らるゝ竹格子

雪の朝となりあたりのなつかしや

舍り採祭り初め、六行會を月越し

に立るとて

酒買の跡はとがめじ今朝の雪

蔘田の雪や湖ならぬ田楄の頰かぶり

枯れて又そよぐは雪の尾花かな

城を築て民を撫るに國君の業也。

家を廣くして親屬奴僕を愛するは

庶人の功なり。大小はかはれども

德は一つなるべし

老の富月雪のほれ箱ばしご

風之つくしのかたへおもむけるに

旅ごろも狩の出立やほうづゝみ

肥前大村にて　土人門を高ふせし

事は、車を押入しむ爲也。商家に軒

柱をふとくする事、數艘の舟子集

りて、此あるじの榮を日々に持は

こぶならん

船繫ぐうら門高しはつ鱸

一日は竹の隱者や煤はらひ

いつくしまの諷沙は、海岸二十里

をつたひ、三原まで送り來る名殘

りに

嶋がくれ返し羽强し一つ鷹

斗圭が老父を悼

肩衣は御正忌雛や葬の供

太宰府奉納　願主湖白

すゝはきや梅も御注連の寒替り

一念親　樵徐所持

佛名や一聲鴉夕明り

相傘に虎溪の友や冬の雨

冬淋し障子から出る峯の松

嚴嶋奉納　願主樂

夜神樂や座をせる嶋の年木樵

柴石を拾ふて柴石堂と号し、たのしめる人は馬貞也。實や柳を愛しては五柳先生と呼れ、櫻木をにくみては伐株の僧正と唱らる。されば愛するも惜も古しへ今の風流も亦ゆかし

柴石やそのうへまとふ冬の蔦

倚松亭

はる待や花は梅にて咲とまり

もちつきや元服さする草履とり

しらむめや師走の銀の泥まぶれ

年のくれたがいにこすき錢づかひ

幸なるもうらやむべからず。不幸なるも嘲けるべからず

雉子は迯狸はうたれとしの暮

節分

豆とりて我もこゝろの鬼うたん

沙鷗亭

年としよきにやかえん宿の主

けふに廻るとしの油斷や大呼り

小兒におくれし人に

膝におくものや失ふ年の暮

享保卯八月二日、正秀身まかりけるを遲く聞て、京より申遣す

行かえり大津の日なし年のくれ

うらやましくも月影ばかりて、八重むぐらにもさはらざりけるとや

束はなや梅も經がたきとしの市

集ればニ人のとしを老のくれ

燭持もあやをすかすや衣配り

雪月の六十年は捨つくすり喰

兎白悼

竪にする古きまくらや寒椿

としもはや上む調子や市の聲

市立の狭み頭巾や年の帯

書出しに月見とありて師走哉

老さむみ年の襖のほねしばり

きのふは築地の御門に牛を牽入、けふは町家の得意の庭に蠹を開き、世わたりは賤しけれども、おのづからやさしき事も侍る

寒梅や柴女の土産も汁の恩

遁れけり年の矢向の老の鴨

淀うしや人は京着きとしの暮

市店の梅一穂をもとめて

老浪の飾に追るゝ杖の標

撰り骨をたまはりけへふゆのむめ

佛名やかるい銀撰る妹が指

遊五亭風雅にけはひ模様を好める

ゆへ、我心に叶はず。柴門を閉て連衆に入るゝ事を免さず。古老の門人時〳〵侘けるも默止がたく、ことに予も病身成り、類なき老人なれば、此たび門を開き、草庵の連衆にもとの如く許し入れ侍るものならし

うぐひすやさよの中山冬籠り

濯がれつそゝぐいのちや年忘れ

浪花の大變もしづまりて、そこ〳〵普請の催しも侍る年の暮

芦はらや年の柚木の蜻蛉もち

筑前の一支、浪花の勤番なれば

年の戸の役義がてらや梅のぬし

命さへ洗濯すなりとしわすれ

古筆のつゞくいのちや年の暮

筑紫房　江　棧　書

蕉門二世無名庵高津野ゝ翁の詠吟、一千余句を拾ひ集めて四季四冊となし、門人亡父凡之一集を思ひ立しに、事ならずして身まかりぬ。其志を繼で梓にちりばめむとするに、手爾於葉の紛らはしきと、句帳に墨を引れしとを暫く除きて、今九百卅余吟を顯はす。猶落たるを揚、捨れたるを拾ひて、後篇の望みあり。願くば同好子、志を助けて洩たる句をあたへたまはゞ何の幸如レ之。

九十九庵 文下

寶暦九己卯春

皐都五條西橋詰町
額田正三郎梓

俳諧御傘

十巻

貞徳著

誹諧御傘序

誹諧は面白事ある時、興に乗じていひ出し、人をもよろこばしめ、我もたのしむ道なれば、おさまれる世のこゝろとは是をいふべき也。しかるを山崎の宗鑑、犬筑波を撰しより、連歌をば貴み誹諧をばいやしき道とおもへり。宗鑑が心はさにはあらず。そのかみ二條殿の筑波集、宗祇法師新筑波をあがめ、我身を卑下して付たる名也。筑波とは連歌の事なり、犬蓼・犬櫻・犬神人のやうに、誹諧を犬連歌といふ義にはあらず。抑、はじめは誹諧と連歌のわいだめなし。其中よりやさしき詞のみをつゞけし連歌といひ、俗言を嫌はず作する句を誹諧といふなり。誹諧といふ文字は唐の文より出たり。長歌・短哥・旋頭・混本・誹諧等は哥の一躰の名なり。犬なんどにたとふる事を、紀貫之古今の部立に入給ふべきか。其後の集にわくらはにはあれども、みだりがはしき代には深くかくれて其沙汰なし。今聖代を待えてたれとゞむるとなけれ共、京・田舎の高も、いやしきも、老たるも、若きも、此道といへば耳をそばだてゝ心をよろこばしむ。しかれ共さしあひにまどふ事多て、諍論絶せねば、丸が門弟のために此一帖をあらはすを、位と徳とそなはらざるものは、かやうの書はえらばぬ事なるに、くさきのくさひ事と栂の木のとがむる人もあるべけれど、これは應安の新式を立て、一座一句の物をば二句にさだめ、七句の物をば五句になすやうの事のみにて、わたくしの新法を一つもいださず、誰もしりたる和漢のごくあひはからふものなり。是を此まゝ置侍らば、はらぐろなる人有て、誹諧の新式なんど申事もや侍らん。似ひたる名を付ばやとおもひめぐらすに、心にかなふ名なし。たゞそなた次第と外題にかゝむといへば、かたへの小性すゝみていはく、それはげにもながら、さりきらひの事にあたらねば、あまりにおほぞうにやはべき。丸が曰、げにもひろくて、よりどころなし。汝つけよと申せば、各盞とか、めん〳〵さかづきとかありたしと申所に、それよりもとしおとりの今一人の小性、其ちいさきさかづきよりは、うへさまのおからかさと申度と申。その心はいかにととへば、此一本の有ならば、あめが下にさしあひする人、又と有間敷と申。いづれも丸が付たる名よりはまさりたり。此うへは、はやく神慮にまかすべきとて、花咲の宿の稲荷のほこらのみくじをとれとはからひければ、おさなき子のいふ事を神も納受やし給へけん。おからかさと云に一鬮おりさせ給へけり。御の字さへあるならば、上のおからかさといふ事はしらるべし。されば文字すくなにてきゝもよければ、御傘をこゝろによみて、御さんと名付侍るものならし。

誹諧御傘（一）

伊

いにしへ　連に一座一句の物なれば、誹には二ある也。もし詞によむ大古（太）・上古・中古・往古・古代・古今集などの句も二句の内也。これは皆いにしへと云心に通ずる故也。古跡・古人・古哥・古筆・古物・古酒等の類は、いにしへに折をば嫌はず三句去也。むかしには二句去也。又、いにしへにかよふ大古・上古の古の字と、古跡・古人の類のふるきとよむ古の字の間は三句去也。よく〱見分て去嫌べし。問云、古今集の古の字をば、いにしへとかよはせ、古歌の古の字をば、ふるきとのみかたづくるは何のかはりめぞや。答云、古今の二字は、俊成卿へ此集相傳の時、其後のいにしへ今のことの葉をとよみ給ふ故也。古歌はいにしへの心もあれどふるきうたと云儀つよき故也。唯今爰にかきあらはす外に、無量の古の字付たる事あるべけれど、皆此格をもつて差別あるべし。むかしに折をかゆるとあれば、誹には面を嫌ふ也。

庵　いほ壹、いほり壹、但、いひかへずともいほとばかり二もあり。いほり〱と二つは有べからず。誹には折をかへて、庵号・庵室などゝ詞にいひて今壹あるなり。

礒　二つ、今一、名所にあるべし。

池　たゞ一、名所に一、誹には池二、名所に一、以上三なり。池水などゝ詞によむ句も三句の内也。無熱池・功徳池なども三句の内也。名所の池、一の内也。池の尼・堀池の僧正などゝ人の名字に有は、名所にもならず、水邊にも不嫌、たゞ人倫也。池三句の外也。

命　壹、虫の命などいひて一、誹には壽命・命期・臨命終などころにによみても、人の命の二の内也。命に玉の緒、折を替る也。虫の命には玉のを二句去也。又、戀の命過ては、戀の玉の緒有べからず。命は述懐になるなり。

稲葉　をしねと云替て又有べし。誹には此外にいね一有べし。稲妻はいねに折を嫌といへども稲三の外也。いなびかりは秋にならず、雷の字別に有故に、いねに二句去也。稲妻にはいた光、折を嫌也。美濃のいなば山・稲田姫・稲荷などの躰にならざる稲の字、折を替て又一有べし。これらの句も植物の稲にいひかけたらば稲三の内に成也。稲妻も同。稲にゐ中、付句嫌也。稲中といふ心也。いな負鳥は躰になる也。うへ物の稲、三の内也。此鳥の名、正字は稲の字に非ずといへ共、右のごとく去嫌ふよき也。

伊勢の神　といへば名所なり。あま照神といひては名所に非ず。名神、名所に非ずとは此類なりと、無言抄に出せり。これあやまり也。名所にあらず、左に委し。伊勢の神と壹、あまてる神と又一、折をかへて有べし。誹諧にも天照神とあらば、もはや天照太神とは有べからず、參宮とは有べし。伊勢といふ國の名ありとも折をかへ、いせ物語、又、人の名の伊勢守・いせの御・いせ海老・いせあみ笠・

いせ天目の類の內、出がちに今壹有べし。いせの字、一座に二句の外有べからず。

いつきの宮　過て齋宮有べからず。折をかへて賀茂の齋院とは有べし。竹の宮とあらば齋宮と有べからず。賀茂のいつきの宮とあらば、もはや齋院不レ可レ有。齋宮をも齋院をも共もに、いつきの宮と讀たり。いせと賀茂とまぎれぬやうにすべし。いせの竹の宮と一、賀茂のいつきの宮と、此外に折をかへて齋宮・齋院と辭（ママ）と讀て、出がちに今一有也。但、いつきの宮と賀茂の事に出たらば、齋院とは有べからず。いせのいつきの宮・竹の宮と、いづれにても一あらん後には、齋宮とも齋王ともすべからず。又、いつきの宮とばかり有て、伊勢共賀茂共しれずば、折をかへて齋院・齋宮・齋王の內今一有べし。又、いせのいつきの宮・竹の宮・齋宮・齋王と有折には、あまてる御神有べからず。たゞすの宮・ありす川のいつきの宮など有折には、賀茂の神・分雷の神などゝ有べからず。又、竹の宮・齋王・齋宮などゝ賀茂の明神は、各別の事なれば付てもくるしからず。かやうの事くはしく分別して指合をばくるべし。萬事にわたる儀也。

岩　岩一、巖一、石一、折をかへ二あり。誹には今一、辭によみて靑岩・碧岩など有。但、いは／＼と二もあり、いはほとは二有べからず。石もせきと辭に讀て有なり。但、石／＼と二も有べし。もし岩石などあらば、もはやいしとも岩とも有べからず。石甕・石持も石二のうち也。鐵炮の石火矢（矢）も石二の內也。石藏の類は岩三の內なり。草の名の岩なし・岩たけは岩三の外也。されども岩には面をかへ、石には七句、眞砂には二句去也。草にても岩ほなでしこなどは、まとの岩になる也。人の名の岩千代等はまとの岩也。岩くす舟も同前。石屛も石二の內也。石竹、石二の外也。されども石には面をかへ、岩には七句去べし。砂には二句去也。石楠花同前。藥の名の磁石・寒水石・蘆甘石等皆石二の內なり。石ずへ、石二の外なり。乍レ去石には折をかへ、岩には面をかふべき也。居所に三句、すゆるといふには二句也。岩屋は岩三の外也。但、岩には折をきらひ、石には面をかふべし。居所に二句。屋の字には三句也。眞砂・白砂は岩石等に七句去也　いはかげは居所にあらず。但、句躰によるべし。岩木は人の心にたとへても、たかき植物也。草には二句也　石淸水、岩のはざまより出る淸水也。石の字をこゝにてはいはと讀也。故に石には折をきらはず、面ばかりを嫌也。石淸水は先は八幡の御事也。名所也。逢坂の關にも有。名所にても、たゞにても一座に一句也。淸水と斗は、折をかへて今一句有也。淸水は結ぶとたければ、何も夏にあらず。岩橋、これも哥には石の字を書ても、いは橋と讀也。連哥・誹諧にはいし橋といふ句のあれば、岩橋の時は石の字をかゝぬ物也。これ執筆の古實也。いは橋一あらば、いし橋有べからず。岩橋は山類にあらず、水邊也。かづらきの岩はしは山類也、水邊にあらず。岩ふね、たゞ一、是も岩三の內也、神祇也。非水邊。舟の字には五句去たり。あまの岩くす舟と

いふもおなじ事也。

放生　神祇也。八月十五夜の八幡の祭也。秋也。放生川にて有故に水邊なり。生類に二句嫌也。生をはなつといふ句、放生會のことならば折をかへても、放生會とも、放生川とも有べからず。もし放生會といふ句あらば、折をかへてたゞ生たる物をはなつといふ句は有べし。連の一句の物をば、誹に二句有物とばかり心得て、不覺の誹諧の座上、かやうの尤事を必二句有と申さんは淺ましき事也。他准レ之、放生川とばかりは非レ秋、非レ夜分、たゞ名所に過る也。生類にもきらふべからず。

家風　是は家々の所作の代々傳はる事たるにより、まとの風にはあらず。されば居所に二句、風躰にも二句去也。風躰と申は嵐・木枯・野分等也。風と云字には三句去也。家といふ字には面を嫌ふ也。

家　連には云かへて四句の物也　折に一づゝ有。誹には譬によみてする句も有物なれば、面をかへて以上五句有と知べし。

家づと　みやげの事也。居所に二句去べし。土産といふ字あれ共家五の内也。

家を出る　尺（釋）敎也。家といふ字には面を嫌ふ也。出家と譬に讀句あらば、もはや家を出るといふ句は有べからず。出家といふ時は居所に嫌はず。

いはひぬしのみと　又、天兒屋根命何も春日四柱の宮所の内の名也。

入相　入の字・あふの字二句去也。晩鐘と書ゆへ也。夕時分たるにより、夕の字・暮の字に嫌なり。

いづく　二折をかふべし。いづこ・いづちといひかへて一づゝ有也。以上四也。これは七句去也。誹にはいづこ・いづち・いづれの内、今一そへて以上五句の物とす。いづく・いづこ・いづち・いつ・なに・なぞ・など・いかに・いかゞ・いかん・なんぞ、如レ此いひかへては皆二句去也。又、いひかへずして、何と何、なぞとなぞの類は字去也。又、いかゞといかゞ、なんぞとなんぞ等の三文字つゞきたる詞は、連に面を嫌へば誹には七句去べし。

いつしか　一句の物也。誹には二句すべし。早晩とかけ共、なに・なぞ等の右の詞に二句去也。

いかゞせん　五かな也。始の五もじにはいかにせんとをく、終の句にはいかゞせんと置事常の習也。此とまり百韵に一の物也。誹には上下の句たけを替て二有べし。句の中には折をかへて連哥にも有なれば、誹にも今一くるしからず。いかにせん、上の五もじに一の物也。誹にはたけをかへて、いかにせん共など七かなにして以上二句すべし。これも中の句には今一も有也。いづれも折をかふべし。かやうに申ゆへば、いかにせん・いかゞせん、いひかへて誹には有やうに聞えゆ。左にはあらず。連にいかにせんと始の五もじに一、いかゞせんとをはりの五もじに一、以上二あれば、誹にはいづれ成とも、出勝に折をかへて三有べきといふ事也。

いく　幾の字をかくゆへに、なに・なぞ・いづく・いづら等に付句ばかり嫌なり。打越は不レ苦。

いくか　日次の日に二句去也。たゞの月日の字にはきらはず。

いかに・いかど　連に五句なれば誹には三句去也。

僞にまと　二句去也。連に僞は一座一句なり、誹には二句也　虚言と譬にいひても二句の内也。いづれも折をかふべし。

生死　に命、二句去也。これはいき死とつゞきたる詞は云に不レ及、いくると云にも、しぬるといふにも二句去也。又、いくるといふに死ぬると云詞も二句去べし。

いくるにうまるゝ　二句去也。しぬるに、うまるゝ・いくるも二句也。

稲妻　秋也、夜分也。天像には不レ嫌、植物にもきらはず。妻の字には面を嫌。軒のつま・衣のつまなどには、句よりて二句去也。つま羽こ・つまはじき・つまきり・つま木等には一切不レ嫌レ之。つまの字をかけ共、稲づまは人倫にあらず。女・婬等の文字にもきらはず。稲妻過て誹には、紋のいなづま今一有べし。これも季をば持なり。夜分にあらず。いなづまといなびかりとは折をかふべし。

いなびかり　雑也。非二夜分一。雷に面を嫌べし、天像にきらはず。光の字には面を可レ嫌。いなびかり過て雷電有べからず。

衣裳の色の花木　不レ可レ爲二植物一。但、依て其、色に可レ有二其季一。是は衣裳に櫻重・柳のきぬ・やまぶき・ぶどう色など有も、季をば持て植物にはたらずといふ儀也。しからば新式に不レ載とも縫薄の紋すりに、きぬの忍ぶ草も植物にはあらず。遠山鳥のかり衣も生類にあらずと、かたく式目を守べきもの也。無言抄をみれば、繪にかく草木の下に季をもつ故に、植物に二句嫌といふ說いはれず、うへ物にあらずと委しるして、又、衣裳の草木の下には、季をもつ故に二句嫌ふべしとかゝれたり。首尾相違せり。これ興山の私には有べからず。紹巴・呂叱の覺ちがへ成べし。すでに近代の宗匠宗養句に、うちこしによもぎふを置て、やま吹色の衣をくるしからずとて付られ侍れば、新式をかたく用ゐが能也。近代二句嫌といふ說は誤　至極と知べし　忍ぶずり植物にあらずといひて、秋萩のはなすり衣も植物にはあらぬといふ人有べし。それは植物也。野を分て誠の萩にてする衣也、又、催馬樂に、あづまやのまやのあまりのあまそゝぎ、とある哥の詞をとりてする句は、居所にもならず、ふり物にも嫌まじきといふ人有べし。たとへば、あづまやにうたふやうなるあまそゝぎ、といふ句ならば、居所には嫌べからず、降物にはなる也。今ふる雨をみていひたる句なるゆへ也。兎角句躰によつてよろづのさり嫌は替物也。一概にして不レ可レ論。あらそひをやめんための法度たれば、合点なき人の前にては道理をもつよくことはらぬが、式目の心に叶たる人成べし。

稲莚　植物也。莚をしきたるやうに、稲の面の平〻と有を申す。さるによりて夜分居所にあらず。誹には三句のむしろの内也　又、和哥には田舍をさして、いなむしろとよめる哥もあり。稲莚川ぞひ柳とよめるも有。柳のなびきたるが、いな莚のやうなるといふ事也。それならば烁にならず、春成べし。田舍をさしていふならば、烁には成て植物には二句嫌べし。

和歌にはいな莚は旅になるたり。連誹にはさやうの差別不レ入ゆへか、新式に稲莚植物也とばかり載たるうへは、殊に成ると心得らるべし。

いさり　夜分也・水邊也。魚をとらんとて火をたく事也。火に七句去也。それもいさり火とすれば火五の内也、面を嫌。詩に漁火と作れり。いさり火過て、折をかへて漁火有べし。川にはあらず、海邊にてする也。船にてもたく也。然ども陸にてもたくゆへに舟付て不レ苦。あまのしわざなれば海人不レ付。

いろ鳥　秋也。色々わたる小鳥をいふ。

いとけなき　幼稚とかく故に、無の字付てもくるしからず。

いはけなき　いひわけなしといふ事なるにより、無の字付句嫌也。

犬　連に一あれば、誹には唐犬などゝ聲に云て今一有べし。こま犬も二の内也。日よみの戌は折をかへて今一有也。以上三。

衣裳とく　三句去也。

いみさす　神祇也。神祭の前に松・竹・榊などをさすを云也。夏成べし。

出る日　朝、時分に非ず。但、打越にも朝、時分あらば斟酌すべし。付てはくるしからず。

いとゆふ　昔は生類に二句嫌、今はきらはず。遊糸と書也。詩に野馬と作もいとゆふの事也。いとゆふ過て、遊糸とか野馬とか有べし、春也。

生田　といふ句に森と付て、又、森の名所隠題にも不レ可レ付レ之。以上新式、誹にもこれに同じ。

泉　夏也。水と付べからず。和泉國は非二水邊一。黄なるいづみ、黄泉といひて土中の事也。水邊にあらず、夏にもたらず。後生の事也。

色　といふ句に、うつろふなどゝうらかれめきたる事あしゝ。又、紅葉・錦の類嫌なり。無言抄かくのごとし。丸、おもへらく、色によるべし、野山の色などのあかき心持有には斟酌有べし。水・波の色、雪・霜の色など、赤き心なきには付ても不レ苦。

板間　居所に二句嫌也。居所の詞いらでたゞ板間とばかりもする也。

市　市一、名所に一、誹には山市晴嵐などゝ聲によむ市、折をかへて今一有也。以上三也。

いとけなき　に早苗など付事不レ可レ然。何の上にも如レ此の類可二分別一事也。以上無言抄。此條無理也。いとけなきはわらはべの事なるを、草木の早苗にとりなして付を、何とて同意と可レ思哉。句躰によつて少も苦かるべからず。

いもせ　人倫也、戀也。誹には妹せ過て、名所の妹の山・せの山、或はいもせ山などゝも折をかへて今一有べし。それも戀の句ならば有べからず。いもせと夫婦、めをとたゞといふ句に折を去べし。又、いもせにいもがりなどのいもの字、無言抄に面を嫌といへり。誹には折を嫌べし。いもの字、一座に句躰をかへて三の外は有べからず。いもにいもうとは面を嫌べし。

いやしき身　述懐にあらず。

今　に、けふ、付句もくるしからず。こん日と聲によまば、今の字に二句去べし。同字別吟といひながら、近きに近邊など

も二句さらでは不レ叶事也。春日に春とは大にかはりめ有レ之、能々可レ有二分別一。

いふ　にかたる・戀すてふなどのてふの字二句去也。

礒菜つむ　えぐつむ・薺つむ、皆春也。

稲荷祭　四月上卯日也。

泉殿　夏也。たゞ泉も夏也。

路

樓　居所也。連に一の物なれば、誹にはたけをかへて今一あるべし。

籠　囚の籠、居所也。囚とは科人を入て置所也。百官に囚獄司とは、此所をつかさどる官人也。籠者と囚といふ句は折を去べし。籠居といふ詞は二色あり。一は籠者の事也。今一は科人ならねども、養生などして籠るといふ詞也。これは囚には付てもくるしからず。參籠といふ詞は、宮寺に七日・二七日など籠る事なり。是等も囚に不レ嫌。籠の字と讀によりこもるといふ詞は二句去べし。かご又花がたみ・ふせごなどいふよみ聲には、同字なれどもろうには嫌べからず。但、籠居のかごに鳥籠などは付て嫌べき歟。句躰を聞分、差別して去可レ嫌也。

葉

櫨　秋也。連哥には一座一句なれば誹には二句すべし。上句・下句とたけをかへずとも不レ苦。但、露・風・色・散・紅葉などの文字、さきの句にあらば、後の句には結び用る事なかれ。

春雪　過て花の雪今一、連にも有也。誹には勿論也。

春雨　さめといふ、百韵に一也。誹諧には春雨・村雨・こさめ、出がちに折をかへて、さめと二あるとしるべし。

春寒　さえかへると詞をかへてもたゞ一也。誹には餘寒・春寒と聲に云て今一、折をかへて有。春のさゆるも此二の内也。

春風　連哥には春風〳〵と二、又、春の風と、のゝ字を入ても二句の中なり。但、のゝ字を不レ入して二あれ共、のゝ字を入て二句はすべからざる由也。誹諧には春風二、春の風折をかへて一、以上三句すべし。もし、しゆんぷうと聲によむ共、三句のうちなるべし。

はなし　上句・下句各一づゝ、誹諧には上句・下句いづれにても今一くはへて以上三句すべし。とまりの事也。

春月　たゞ一、有明一、三日月一、新式にかくのごとく云替て一座三句のもの也。誹には朧月・春月など聲に讀て今一くはへ、一座四句なり。夏冬同前。秋月は八おもてながら、有てもくるしからず。只今爰に沙汰するは春夏冬の月の事也。新式をかく見わけぬ人は、四季共に三日月・有明一づゝ有と心うるなり。さにはあらず。連にも一座に三日月一、有明二と定られたり。誹には秌の三日月壹過て、他の季の三ヶ月今一ある也。有明壹過て、出勝に他の季の有明今二ある也。それも秌の有明二出たらば、もはや他の季の有明二はならず、たゞ一句成べし。

春と春　五句去也。問云、誹諧は和漢のごとく去嫌と云しに、何とて同季を七

句は嫌給はぬぞや。答云、是不レ私、玄旨法印・紹巴法橋などの誹諧に、季を五句去になされしを聞ならひて昔より仕るに、近年宗祇の獨吟の誹諧を見侍れば、皆五句去にして有なり。先師たちのせられしも定て此故にてありつるやと、いよ／＼殊勝に思はれ侍。

花　一座四句の物なれば、誹諧には五句すべき事なれ共、誹にも四句する也。其故は和漢にも四句なればかくのごとし。去嫌の大法、誹諧は和漢に准ずる故也。作レ去誹諧には花洛・落花など聲にいひて、花と面をかへて今一すべき事なりといへども、正花五あれば花の句賞翫にならざるにより、聲によみたる句も花四本の內なり。

花に櫻　は付侍る。されども前句の正花櫻めきたる句躰ならば、同意に成間無用に侍　櫻に花をばかたく付べからず。連哥には櫻と花と面をきらひ、誹諧には七句隔る也。

花紅葉　正花なれども雜也。

花の雲　正花也、植物なり、聳物也。花の雲可二分別一物の所に入たり。花を雲と見たるも、雲を花と見たるも、共に花の雲といふにより、植物・そびき物兩方に嫌が尤なれば、誹にも新式のごとく用也。

花の瀧　正花也。新式のごとく植物に三句、山類・水邊にも三句嫌が能なり。新式には兩方に嫌と有を、無言抄に花のちる躰をいへば、是は植物のかたばかりなり、たしかに受二師說一もの也と書り。是又あらめなる義なり。さやうに申さば、花の雲も花の、雲に似たると云義ばかり也。花の波も浪に似たるといふ義ばかりなるに、それをば兩方にきらふといひて、なんぞこの花の瀧ばかりを水邊に嫌まじきと被レ申に哉、尤愚なる說也。新式に混合すべき物をば兩方に嫌レ之、不二混合一ものをば兩方に不レ嫌レ之とかけるは、月雪・月の霜に夏の詞入ては降物たるべからずと出せり。是にて分別有べし。惣別此花の波・花の瀧等は六ヶ敷物なれば、新式にも可二分別一物と一ヶ條立て書置し也。昔と近代との嫌ひやうに誤侍れば、今委糺明して記し置侍る。花の瀧と云は、瀧のごとくの落花をも、又、花のちり交て落る瀧をも、又、花の中に落る瀧をも申詞なり。山櫻咲初しより久堅の雲井にみゆる瀧の白糸。是等は落花の心少もなきに、花のちるを花の瀧といふと一篇に心得たるはあしき也。しからばなんぞ可二分別一所にいたさるべきぞや、兎角依二句躰一也。

花の波　正花也。水邊に三句也。但、可レ依二句躰一。波の花は非二正花一、白浪のはなに似たるをいふなり、植物にあらず。

花の雪　正花也。植物に三句、ふり物に非ず。雪の花、植物にあらず、ふり物也。

鳩ふく　秌也。鳩の字には折を嫌。生類に二句、ふくの字に三句、風躰に二句去也。鳩ふくといふ事說々有レ之。

春風　只一、春の風一、但、不レ及二言替一。のもじを入て二はなし。しゆんぷうと聲に云ていま一ある也。

春の日　といふ句にながき心あらば、其折に永き日・をそき日すべからず。

橋姫　非二人倫一、非二神祇一、水邊也。名所也。宇治にかぎる故也。姫三の內也。

花を結ぶ句　に野山を分るといひても旅にあらず。たとひ旅といふ字入ともならず。但、たびにて花を見る躰ならば旅也。

花　發句・脇・第三まではすべし。四句めより前八句の間にはせぬ事也。又、初折の花下句にてもくるしからず。又、獨吟なれば十三句め定座(じやうざ)までやらね共、發句・脇・第三の外八句の内せぬ事といふ法度も無レ之。いづくにてもくるしからず。

花ぶさ　と斗も正花に成なり。

花のちる　に櫻のちるは折を嫌。誹には梅・櫻・紅葉・木葉等のちるは面を嫌ふ。霰(あられ)・霜などのちるは三句去也。

花のちる　に葉のおつるわろし。日影・月などのおつるは付てもくるしからず。

花のちるかげは影也　といふ説あし。花のかげも散かげも、みな陰の字也。漢には花影などいへり。

花のふゞき　春也、植物也、風躰也。ふり物にあらず。

花の都(みやこ)　正花也、植物なり。連哥には春の季に用ゆれ共、句躰によつて雑たるべし。花洛・中花など聲に云ては彌雑也。同じ共時は正花ながら植物に二句なり。同じことながら花の都といへば、植物に三句也。惣別正花になる程の物をば皆春に用べき義なれども、連歌・誹諧をするには、花の所に雑の句ほしき時ある故に、道理をまげて雑をば雑にする也。能々分別有べし。

花やか　無言抄に、花にはなやかといふ詞、二句嫌といふ説あしゝ、折を嫌ふべし。然ばはなやかといふ詞、正花たるべし但、可レ依レ句かといへり。花やかといふ詞のきらひやう、新式になければ定がたし。無言の説のごとくなれば、正花に落着して春になり、植物に二句嫌べき也。はなやかといふ詞は、なにの上にも付ていへば、正花に成まじきと存れど、花々しといふ詞とひとつ心なれば、正花になるといへるも一義侍り。乍レ去榮の字あれば、花の字には二句去也。花々しは一字なければ、花の字に三句去べし。此二の詞は雑たるべけれ共、新式の心の花に准じて春に可レ用歟。しからば依ニ句躰ニ正花にも成べし。

はなぐし　これは花の字なれば、梅の花・菊の花の類には三句去べし。植物には二句去べし。正花にも成べし。

花のすがた　花の顔・花のよそひ、則、木の花の上に申ならば植物也、正花也、春也。たとひ花にたとへて人のうへに申共、正花也、春也。植物には二句去べし。戀にもなるべし。丸云、花の姿、正花には成べし、春には成べからず。花の姿・花の顔・花嫁(よめ)・花聟(むこ)・花のゑん等、人のいふまゝに春たるべきよしを所々に書付侍れ共、新式の詞の花、にせ物の花を春にあらずと定たる心をよく〳〵察すれば、正花にはなる共春にはなるべからず。問云、似物の花、春にならずば花の姿・花聟等も皆にせ物なれば、春にならずといふは聞え侍れ共、正花を持べき道理なし如何。答云、似物の花といふは、雪の花・波の花等の事也。花の姿・花のゑんの類もにせ物とはいはず。同じやうなる事ながら、よく吟味すればかはりめ侍り。

花衣・花の袂・花の袖(そで)　正花也。植物

には二句也、衣類也。これらは紅花にてそめたれば雑なるべけれど、只あかきをみて春の花にたとへたる也。詩に花容などゝ作て、花見に来る人を花の袖などゝうたにもよむ事あり。それはまとの木のはななり。またいつにてもまれに来る人を、花の袖・花の友などゝいふ事有、これは雑なれ共、べに染などの花にもあらず、誠の花にたとへたるもの也、然共花見る時の友といふ心、花にまじはる袖といふ心もあれば、句躰によりての差別も難て定がたきにより、連哥ごとく花の袖・花の袂・花衣・花の友などの類、みな正花にも春にも用べき也。此内花の友、人倫也。花を友とすれば人倫にあらず。又、更衣の哥をみるに、花衣を春のものによめり。されば花の袖等皆春に治定す。

花のあるじ・花のぬし　人倫也。花をあるじ・花をぬし、人倫にあらず。

花の宿　居所也。花を宿とするは非二居所一。花の隣、居所也、花を憐(隣)、居所にあらず。

花畠　正花也、植物也、春也、こまかにせんさくすれば種々の理窟侍れ共、此分にて實が能也。

花のおどり　花やかなる盆のおどりをいふといへども、花見てをどる事もつねの事なれば、せんさくむづかし。正花になるうへは春也。植物に二句たるべし。

花のぼうし　正花に非ず、植物にあらず、尺教也、衣類にうち越を嫌なり。花の字には三句去也。あをく染たる物なり。

花籠　正花也、植物也、春也。茶の湯の花入にもあり。又、僧の樒を入と有。それにも時々の草木の花をもいるゝ故に、籠の名なれ共春にも植物にも用る也、句躰によりて尺教たるべし。

花がたみ　同前。

花皿　春也、正花也、植物也、尺教也、花皿に樒付べからず、花籠には付べし。それも尺教の花籠ならば不レ可レ付。

花野　非二正花一、秋の草花也、薄・萩など同意也、不レ可レ付。

花園　正花也、春也。園とばかりは居所。植物に二句去也。(原本衍文)花の字そひたれば三句去也、花の字そひたれば三句去也、又、花ぞのといふ名所もあり。依二句躰一正花にも植物にもなるべからず。名所の花園は萩花也云々。花園院などは雑也、植物にもあらず。春詞いらずば正花に成べからず。非二居所一、非二人倫一。

花車　正花也、春也。花見車の事也。

花軍　正花也、春也、是は玄宗と楊貴妃と立別、花にて打あひあそばれし事と云へり。

花山　名所也、唐にもこの名あり、句躰によつて可レ為レ春。咲匂ふなどゝもなき句を正花に用ひん事は無理也、たとへば柳が浦といひても、櫻嶋といひても、植物にも春にもならざるがごとし。連哥にはいかにあやまらると、誹諧には正直に去嫌べき也、他は准レ之、問云、花の都は花洛の名なるに、うちまかせて正花に用ひ、はな山はくわ山をやはらげていふに、春の詞いらねば正花にならざるかはりめいかん、答云、花洛は名所にあらず。花山は名所たる故也、よくよく分別有べし。花山院も名所也。院の御所幷公家の御名にもあれ、山類にもならず、正花を

もゝたず、名所にもきらはず、名神非ニ名所類一也。

花の香　袖の香・人がなどに、連哥には折々嫌、誹諧には面を嫌べし。

花の匂ふ　といふに、袖の香・うつり香・人かなどは、誹諧には七句去べし。

花びら　僧衆の帋にて、まろくして、行道の時ちらさるゝをいふ。又、正月の餅に菱花びらとてあり、これはこれに（原本衍文）春に成也。正花にも成也。僧のちらすは正花にはなれ共、春にならずと知べし、とかく句躰によるべき也。又、まとの花のえうなも花びらと云事あり。

花に吉野つくる事嫌也　よし野に花は不ㇾ苦。萩に宮城野、紅葉に龍田、月に更級、同前。問云、所の名物を付が同意ならば、淀に鯉、近江の海に鮒なども付まじきにや。答云、近頃能不審也。此事に新式にものせず。いづれの宗匠の定ともきかねどもふかき心あり。此かはりめを存たる人は、おそらくは稀成べし。其子細を長くしければ爰にしるさず。たゞ右にあげたる花に吉野・紅葉に立田・月に打捨、是等ばかりをつけぬと心得給べし。此外は付合に少もくるしからず。昔よりはさたなき事ながら、白山といふには雪を付べからず、雪に白山をも付べからず。同じ雪の名所ながら、富士は雪に付ても、雪を付てもくるしからず。是等にて自余の事を分別有べし。

花子の狂言　花也、雑也、人倫也。

花田　正花にあらず。露草のはなにてそめたるを花田色といふ也。されども花田の帯など常にする物なれば、秋にはならず、雑也。植物にも衣類にもあらず。

餅花　正花也、冬也。植物に二句也。

花よめ・花聟　戀也、雑也、正花を持也。人倫也。植物に非ず、春に非ず。

花かいらぎ　正花を持也。春にはあらず、植物にあらず。

はなかみ　是は花の字にあらず。植物にもきらはず。但、花の字にしたる句躰ならば春なり。正花にも成べし。植物にも二句去べし。

はな皮　花の字に非ず、馬の鼻に當る皮なり。

花入・花瓶　正花を持也。道具の名なれ共、專花の用なれば、春にも植物にも成也。

花眞壺　花の繪あるつぼをいふといへり。しからば繪にかく花に准じて植物にはならず、春の季をばもつ也。尤正花たるべし。正花たる上は植物にも二句は去べき歟。但、新式の旨を守らば植物には嫌べからず。

花うつぼ　雑也。正花にもする也。うへものにあらず。

花丁子　非ニ正花ニ、春にあらず。花といふ字あれども植物に少もきらはず。

茶のはな香　茶にも花はさけ共、其花をばいはず。是は茶のかさの花やかなるを申ゆへに正花をも持也。されど雑也。植物にきらはず。

花筏　花の散かゝりたる筏也。正花也、春也。植物也。

ともしびの花　正花を持也。春にあらず、植物にあらず、夜分也。

花火　正花を持也。春に非ず、烁の由

也。夜分也。植物にきらはず。

花がつを　正花を持也。春にあらず、生類にあらず。うへものに嫌べからず。

作り花　正花也、雑也。植物に二句去べし。

綺にある花　正花を持也。植ものにあらず。春也。

花かづら　春也、植物也、正花也。

花ぬり　漆の事也。雑也。正花をば持也。植物にあらず。

花がた　小鼓にあり。正花にはなれども季はもたず、植物にならず。

花をふらす　正花也、植物也。法花經の四種の花をふらすも、いつとはなけれど春に成也。それもまんだらげ・まんじゆさけなどゝ名をさしたる句は正花にならず、春にもならず。植物に二句也。尺致なり。ひだのたくみが花ふらす、是も雑成べけれども正花になり、春に成也。植物にも成也。又、よのつねの振舞などの出來たるをほめて、花をふらすといふも同前也。詞の花をふらすは春にならず、正花にもならず、うへ物にもあらず。似物の花と同じ。

花の宴　正花也、春也、植物也。又、花のえんとて戀の詞あり、是も正花也、植物にあらず、雑也。みめよき夫婦の事也。

葉字　草の葉・竹の葉等可隔五句也。如此新式に一座四句の物の所に出せり。はいかいには、えうと聲によむ句もまじりて、一座に五句ある也。この葉と出すは木の葉の事也。若葉・青葉・一葉・わくら葉・落葉・もみぢ葉等の事也。しかるを新式をかく心得ざりし連哥師達、此葉を取ちがへて柳の葉・桐の葉など名木の葉は別と心得て、一葉・落葉などに面を嫌といひ出せり。それを近代不審して、折を嫌が能といふ説を用來れり。されども名のある木の葉をいふとはたしかに知ざるゆへにか、無言抄にも此四の葉は名をさゝぬ木の葉と出して、其跡におち葉・松の葉等を、おもてばかり嫌ふはわろし、折を嫌ふべき事也としるせり。はや此文章の内に誤りあり。落葉とは名をさゝぬ四の内ならずや。然を松の葉とひとつに混じて出せり。是にてよく新式の文言をしられざる心は顯れ侍り。新式に葉の字四と定しは、名をさしてもさゝずしても樹木の葉の事なり。さるによりて草の葉・竹の葉等は五句去也と出せり。よく〳〵分別有べし。此木の葉に竹の葉・草の葉・雲の葉（雲の端といふ時は少々きらはず。）・言の葉・門葉等は誹諧には三句去也。詞は付てもくるしからず、言の葉は嫌ふ也　哥の事也。てにをはのはもじと三句去べし。舞などの出は・入は幷くれは・あやは・ときは・かきは、葉の字にあらざれば付てもくるしからず。又櫛かたにえうの入たるなどあるは、はの字に三句さす也。葉守の神も一座五句の内也。雑也。一葉散は秌也、木の葉ちる・おち葉は冬也。作去色の字をそゆれば秌也。ときは木の落葉は夏也、松竹のおち葉は雑也。それも色の字あれば秋也。葉の字、紅葉三句去べし。

春の宮　春宮坊の事也。東宮とも書也。とうぐうと聲にいふ句は雑也　春の宮といふ句は春に成也。

橋　只一、名所一、梯一、浮橋一、裏に御階一、以上五句の物とす。夢の浮橋と

あれば、もはやたゞのうき橋なし。この外に誹諧には、舟橋・はしがゝり、又、烏鵲橋・通天橋など聲によびて出勝に以上六句也。連哥にはたゞの橋を二句せねども、聲に讀には誹諧には二もする也。梯もこれに同じ、名所の橋も同上。御階・玉階・階下など同上。橋姫もたゞの橋の外にあり。但、宇治にかぎれば名所の橋の內也。聲に讀ても和に讀ても、出勝なれば六の外には不レ可レ有。御階可レ爲二各別一かと有ながら、五句の內に新式に書つらねたれば誹にも六の內にすべし。乍レ去連には橋のうらにあれば、誹には七句去べし。玉階・二階・のぼりはし・はこはしなどの類、皆六句の內なり。

濱庇　もとは居所に打越を嫌、今は三句去也

はかなき　只一、戀に一、誹には此外に今一有て、以上三句の物とす。

初瀨寺　山に有ゆへに山類也。はつせの鐘も同前。はつせとばかりは非二山類一とするせり。小泊瀨・はつせ路同前。

初草　春なり。

芭蕉　秌也。連に一句の物なれば、誹には二句すべき道理ながら、いかにしても尤物なれば耳に立べし。折をかへて奏者草と今一有べし。不レ然ば心ばせをばなど立入てすべし。それも秌の季をば持べし。但、季をもたぬ句躰ならば、奏者草過てもくるしからず。季をもたぬ句とは、植物の芭蕉の噂ならぬ戀の句などの事也。ばせを布・ばせをの扇等も二句の內也。

初鳥狩　初鷹も秋也。鳥屋出の鷹を始てつかふ事也。鳥屋出の鷹とは、夏より羽のぬけたるが鳥屋にこめてかひ、羽の出そろひたるを、盆の聖靈の箸をともして、よるとやより出すにより、はし鷹と申といへり。鷹がりは冬也。さるにより初鳥がりを秌とす。小鷹がり、秌也。

初嵐　秌也。はつかぜは雜也。

初塩　秋也。伍子胥が死靈、八月十五夜に風波をおこす事也。

原　松原・篠原等、替物可レ隔二五句一。新式に可レ隔二五句一物の所に如レ此あるを其後の宗匠衆・此文の心を心得がたくや思はれけん、或は折を嫌原、或は面を嫌原、或はばらと濁、原と淸、わらとつかふかはりめ有など、むづかしくさたしおかれ侍り。これ皆むさとしたる義也。只新式の心は、原の字は五句去といふ事ばかり也。さるにより誹には淸濁のかはりめもとがめず、原の字は三句去と知べし。げんと聲によみても、又、料帋の杉原、墨の名のかひ原すみなど有も、天原も海原も野原も松原も、皆字去にせらるべき也。敢以連の嫌やうを用給べからず。又、原に野二句去といふは、麓の原などの事成べし。それも句躰によりて少もくるしかるべからす。麓の原といふはすそのゝことなれば、初心はいさしらず、少心得たる人は付事有べからず。されば兼て制するも無益の事歟。麓の原に野の字嫌と斗法度を立たらば、野分・小野の道風・野相公・野心・野人・高野・吉野など、少も同意にならぬ句を付さすまじき歟。近比いはれざる法度也。誹諧の人はさのみ連の嫌やうをば信用せらるべからず。

蓮　水邊也、夏也。れんと聲に讀ても同前、荷葉も同前。大液の芙蓉も同前　蓮

の實も同前　秋といふ人あり、不レ用レ之。
余の與草のみにかはりて、花と共に蓮は實を結ぶもの也。又、蓮肉と名付て藥種につかふやうなる句躰ならば、水邊にあらず、植物にあらず、夏にあらず、雜也。蓮の實の飛は秋也。又、妙法蓮花とつゞけたる詞ならば、夏にあらず、水邊にあらず、植物にあらず、たゞ尺敎ばかり也。寺の名・人の名に有蓮の字も雜也。名所の蓮臺野・藥の名の相府蓮、同レ之。蓮華王、臺の名也。同前。はちすと一過て、れんげとか荷葉とか又壹有べし　植ものにあらぬ寺の名・人の名などは此外に一有也。但植物にあらずとも、れんげと二字つゞきたらば耳に立べし。以上三句の物なり。

端山　に山の端、折を嫌べきかといへり。山の端に軒端も嫌也。以上無言抄。新式にはたき事也。端ははしといふ事也。連には四ほど有と見えたり。誹には五有べし。山のはに軒端・笠のは等面を嫌べき也。端山とは折を嫌べき也。はとはしとは七句さるべし。はしといふ詞も連に四ほどありと見えたり。誹には五有べし。はしと〲は面を嫌べし。

柱　新式に居所のさたなきを、今連に居所に嫌といへり。若柱立・家居がましき句躰ならば、打越をも嫌べきか。たゞ柱とばかりは居所にあらず。材木・杣木など同じ事也。

端居　居所に二句なり。

はて　と云詞に、つゐに・をはりなど付てもくるしからず。

はるか　かすか・のどか・ゆたかなどのかもじ、すこしもきらはず。

はるか　連に二句ほどあれば、誹には三句も有べし。かすかも同前。

はつ・はじめ　など連に二づゝ有といへり。誹には三づゝ有べし。しよと聲によまば此外にも有べし。初と〲・始と〲折を嫌べし。初と始とは裏面に有べし。是等は尤文字ならぬ故、新式にのせぬ事なれば、其座のさばき次第にせらるべき也。

はるゝ　紹巴云、雨・月・雲などいひかへ、五句去也　誹には三句去べし。恨・無實などのはるゝも同前。尤かろき文字ながら、雨はるゝと二句は有べからず。他准レ之。

謀　はかるにも言にも二句嫌べし。事の字には付句を嫌べき也。はかり言といふ詞なが〲しければ、連に一句の物なれど、ぼう計・謀略など聲に讀て今一有べし。折をかふる也。

ばかり　三字かなにてはなけれ共面を嫌、誹には七句去べし。はかる・はからふ・謀などには皆二句去也。はかりのはもじ、濁るも淸も同じ嫌やう也。物をかくる秤・米をはかるなどには、ばかりといふてにをはの詞二句去也。人をはかる・人をたばかるなど、だしぬくやうなる句躰ならば、はかりごとに面を嫌。たゞ人の心をゝしはかるなど推量の字なれば、謀に二句嫌也。

はや　といふ詞に、はも・やも一向不レ嫌レ之。以上無言。但、菅家の御哥に、かへり見しはやと有は、早の字にあらず、者やと書也。これははや花はちり、はや月は出、などいふはやには少もきらはず。此無言に、はにも、やにもきらはぬはやといへ

るは、もし此はやの事歟、心得がたし。はやくといふはやは、早の字に三句去也。又、あればや・なければやなどのはもじ、濁たるばやは各別の事也。

はとば　にごれば二句嫌ふ也。がもじ・ぞもじ・でもじ・じもじ同前。

濱　二、今一は名所たるべし。碁のはまは水邊に非ず。

はぶく　二色あり。一はものを省略する事也。則省の字也。又壹は鳥の羽ぶく、風躰に二句、吹の字に三句去也。鳥の羽吹過て羽といふ字又有也。誹には羽の字三あり。鳥羽・音羽・出羽等の生類ならぬ羽は此外に亦有べし。乍去羽の字多くなき物なれば面をば可嫌歟。

腹赤贄　元日にある事也。肥後國宇土郡長濱よりたてまつる鱒を腹赤といふ也。景行の御時より事をこり、節會になる事は聖武よりと聞ゆ。

初鳥　春也。元日の朝のには鳥の鳴をいふ。元日を鷄旦ともいふ也。しかれば朝時分にも成べし。寅の刻鳴初る鳥也。寅の刻は曉なれば、夜分は勿論の事なり。

はた打　春也。

花しづめの祭　春也。

花に若葉　を結ぶは夏也。青葉なれば春也。

春ぞへだゝる　春過し春ならぬ春にあはぬや、これら皆春の季なり。

萩の戸・萩殿　秋也。清涼殿の北にあり。萩を植て置給ふ所なり。

濱荻　芦の事なれ共、荻と云名に付て秋也、水邊也。

柞　秋也。ちるも秋也。柞山・柞杜、名所は雑也。はゝそ原は名所と見えず。たゞはゝそのおほき所をいへば秋に成なり。

初霜　冬也。露を結ては秋也。

初雪見参　桓武の御時、初雪のふりたる時、群臣内裏へまいりたる事例に成て、此事ありしと也。又、一條院の時、初雪ならね共淡雪ふりぬれば、瀧口などまいりて、藤壺にて雪山をつくる事始れりと云々。

春をとなり　春ちかき・はるを待などみな冬也。

仁

庭　一、皇居・寺等に一、以上二なり。誹には此外にたゞの庭なり共、寺・皇居の庭なり共今一、聲によみて以上三有也。皆折を替べし。庭のをしへは各別と新式にあれば庭三の外、庭のをしへ共、庭訓の往來共今一、折をかへて有也。是は居所にあらず。寺・皇居の庭も居所をばのがるゝ也。連哥には庭に砌折を嫌ひ侍れ共、新式に見えぬ義なれば誹には更に不嫌侍り。誹に庭と面をかゆべき物は、千栽・坪の内・關寺・藤壺等同也。源氏きりつぼの巻に淑景舍をつぼ・千栽とも云也。又、法のには・市のには・軍のには、是等は庭のにはにはあらず。まりのには、是に依て何躰庭の字の庭三の内になる也。以上いづれもていのにはに面を嫌也。ぢやうと聲によむ時は少も不嫌。庭とこ、かへ字あれ共不用。庭帶・庭たづみ、是等のたぐひ皆庭三の内也。には鳥、庭の字に二句去也。居所にはあらず。庭たゝき、鶺鴒と書也。庭

三の内也。洞庭とはからの湖の名也。庭には付てもくるしからず。乍レ去庭と聲に讀句には面を嫌也。

庭火　神樂の名也、夜分也、冬也。わらはべの霜月にするおほたけと折をかふべし。おほたけは夜分にあらず。季は多也。神祇にも成也。おほたけにたく火は折を嫌べし。庭火は庭のにはに折を嫌也。燎火とかけ共、庭のにはの內に用るゆへ、場の字とのかはりめ、嫌ひやう先にいふがごとし。但、植物の心なければ前栽とはきらはず、庭火は居所にもあらざる也。

庭のつき山　連哥のごとく山類に二句きらふ也。

にはたづみ　庭のたまり水也。居所に二句。水の字にも二句と無言抄にあり。にはたづみとよむ文字ある故といふやうなるきらひやうなるべけれど、憲法の道理ならばていの庭の內也。當坐のたまりたる水なればば水邊にはあらざれども、水の字には字去成べし　居所にもなる也。

場　ていの庭と文字も心も替ゆへ今別所に書也。ていの庭と面を嫌也。それもていと聲に讀時は更に嫌はず。ていとぢやうと共に聲によむ時はいよ〳〵不レ嫌。ぢやうと場の字は聲によみても、よみに讀ても、おなじ折に有べからず。さて此ぢやうの場は、一坐ににはと一、ばと一、以上二有也。誹には聲に讀て又一有べし。人家のかまどのまへをにはといへる事、たとへば庭たなもとを走下女など云には也。是も場のには三句の內也。所は居所になる也。場・町、居所なり。的ば・相撲のば秋也・鷹ば冬也・狩ば同前・軍ば・合戰ば・鑓ば・馬ば・ばゞ・柳のばゞ名所也・櫻のばゞ同前・法のには尺敎也・談義のには同前・市のには・鞠のには佐句勢庭のにはに成也・をどりの庭秋也・道場尺敎也。

鷄　壹。夜鳥一、異名一、夜鳥も鷄也。異名引合二可レ然云〻。誹諧には此外に聲に讀て鷄旦・鷄鳴・草鷄・鷄卵等の類、出がちに今一あれば以上三也。鷄は夜分なり。わかれのとり、繇也。くだかけ、異名也　無言抄に鷄、近代用捨の詞とかけり。これあさましき說なり。古哥におほく讀て、うつくしき名也。末代の風俗むかしにかはるゆへに、いやしき詞をよき詞と思ひ、よき詞をいやしきとおもへり。古哥にある詞の嫌ふときらはぬと、哥道不ニ相傳一の人の了簡は更に用べからず。又、鷄舌、香沉の名也。鷄足山、尺敎也。鷄頭花・鷄頭實、みづぶきの事也。是等は鷄の字・くだかけに面を嫌ひていづくも有也。にはとりとなくて、よどり・あけつげ鳥などの異名には二句去也。又、鷄合は夜分にあらず。三月三日に有故に春に成といふ說あり。たしか成節會にあらず、平家物語にも三月ならでせし事あり。禮記にも此事あり。京はらはべはいつもする事なれば雜にして置べき歟。とり毛の鑓・とり毛の馬よろひ、鷄の毛にてする事なれば、には鳥・夜鳥・くだかけ等に折を嫌べし。夜分にも生類にもあらず、とり甲此類歟。去ながら三句の外也。

贄　生類に二句去也。贄と申は內裏又神社などへ、生ながらたてまつるを申といふ義もあり。告朔の羊のごとし。腹赤の贄と申は春也。景行の御時より始れる節會也。其外春日の若宮へは狐・狸を奉り諏訪

の明神へ臨をそなふるは皆神祇に成也。其句〳〵によりて季のせんさく有べし。

鳰（にほ）　雑也。浮巣（うきす）も雑也。誹には鳰一、かいつぶり一、以上二句也。にほのうみは字ゐ別也。付てもくるしからず。もし鳥の名にいひかけたらば生類に二句去也。鳰鳥と折をかへて二句の内にもちゆる也。

にほのうみ　みづうみの惣名ながら、名所集に近江の名所に入故に、名所に三句嫌ふ由無言抄に見えたり。名所集といふ本、いまだ不レ知ながらさもや侍らん。

匂（にほふ）　に香、面を嫌。連に如レ此なれば誹には七句去べし。かうと聲にいひても、かほるといひても同前也。

にせ物の花　ある面には櫻嫌也。無言如レ此、誹には七句去べき也。

似物の類　は折を嫌ものも面をかへて有べし。たとへば雪折を嫌といへ共、卯（う）の花の雪などいへば、うらに有心也。他准レ之。誹には七句去也。

錦（にしき）　に紅葉付べからず。錦も赤色をほめていへば花・紅葉嫌也。以上無言抄、新式に無レ之。これ近代の宗匠の偏案（へんあん）也。かやうにきらはゞ付合は有べからず。白に雪、黒に烏（からす）、青に水・草木、黄なるに山吹（やまぶき）、紫に藤・杜若（かきつばた）の類、皆同意なるべき歟。錦、草木にあらず、なんぞ花・紅葉を嫌べき。べになどにもみぢをつけぬは、べにを紅花（こう）・紅粉（ふん）とかけば尤也。朱丹（しゆたん）など少色のかはりめあれども、あかきといふ色とくれなゐと云色と、ひとつやうの事なれば、紅葉を用捨するは付手の心得也。それも句躰によりて少も同意になるべからず。まして錦に紅葉を付ぬと云道理は、更になきかと存れば、誹には同意にならざるやうに句躰を吟味して、花・紅葉等を錦の付合にせらるべき也。殊に花などは猶くるしからざる付合也。よく〳〵了簡せらるべし。

にとまり　まに〳〵ととむる事は、一向これをきらはず。

にとまり　にだにといふ詞きらはず。折あひなどにくるしからず。

にてとまり　二句去なり。とまりにかぎらず二句嫌也。

にてとまりの上に置字の事　をば・も・から・ぬ・に・は、此字なり。

保

本哥を取事　連哥のごとく、堀川院の兩度の百首の作者意をとるべきにや。答云、誹諧には其法度なし。人の耳に有哥なれば、當世の小哥までも本哥に取用也。

牡丹（ぼたん）　夏也　一座一句也。誹には、ふかみ草・となり草・名とり草・廿日草等の異名を今一すべし。牡丹皮と有は雑也。植物にもあらず。牡丹一過てふかみ草等の異名出たらば、ぼたんひあるべからず。又、衣裳（いしやう）・韈皮（たび）などの緒（を）にぼたんといふ物あり。是は花のすがたを似せたる物也。繪に有花に准（じゆん）じて植物にはならねども、季をもつべき歟。但、各別（かくべつ）のものゝかりそめの名なれば、季を持べからず、雑にして置べし。是等一座二句の内也。

郭公（ほとゝぎす）　連哥には郭公一、程（ほど）時過るとかくして今一あり。誹諧には此外に、或はくはつこう・杜鵑（とけん）・子規（しき）・或はしでのたをさ・うなひこ・くぎら・ときの鳥などの異名に（い）して以上三句有べし。いづれにも折をか

ゆるなり。郭公、花に結ても夏也。鶯に結ても同前。

螢(ほたる) 夜分也、水邊にあらず。誹諧には二句すべし。但、一句はけいくわとかゆべし。かへずしてほたる〳〵と二句もくるしからず。とかく一坐二句の物と知べし。火には不レ嫌也。ほかげといふときは、ほの字に二句去也。但、付句ばかり可レ嫌レ之。螢はのこるとしても夏也。

ほやつくる 秋也。信濃のみさ山まつり、七月廿日薄にて作るかり屋の事也 居所也、神事也。いくつも作也。植物也。

星月夜 秋也。月の字に三句去也、日に二句也。但、名所の名ならば句躰によつて秋にもあらず、夜分にもあらず。

星をとなふる 春也、天象也、夜分也、朝時分也。四方拜(しはうはい)の事なり。年中行事にくはし。

星(ほし) 月日ともに三句去也、日次の日・月次の月には二句也 連に三句の物は誹に二句なれば、まことの月日にも二句なり。

ほだ 冬也、夜分也。

ほそ江 とばかり、名所にあらず。つたのほそ江は名所なり。

ほのみえて などのほのといふ詞、百韵に二ばかり也。誹には耳にもたゝずかろき字なれば、ほの〴〵一、ほのか一、ほのと計は二、いづれも折をかへて以上四有べし。

佛の別(ほとけのわかれ) 二月十五日也。涅槃(ねはん)とばかりも春也。

扁

へ文字 野邊・山邊・都邊・芦邊・磯邊などに、あたり・ほとり二句去也。

へて 年をへてなどいふ詞に、糸をへてなどいふ詞、一折を嫌ふべき歟。同字かの故なり。

登

虎(とら) 千句にさへたゞ一の物なれば、いかに俳諧なりとも一座に二は有まじき道理ながら、連と誹とのかはりめ、たゞかやうの物に付て有也。連に出ぬ事を專と用る道なれば、まことの虎の外、寅(とら)の年(とし)、寅の日・寅の時・くらまの初虎、人の名のお虎・大磯のとら御前・虎ものこま・とら藥師・虎の尾の櫻などの獸(けだもの)ならぬ虎今一有べし。虎の皮・虎豹(ひやう)をふむ・龍虎梅竹・虎肉(こにく)・虎膽(たん)などの類は、生類の虎一の內なり。

床 夜分也、居所也、鳥獸の床も夜分也。但、非二夜分一といふ說有、無用。これは居所にはあらず。連哥には居所の床と鳥獸の床と二あれども、誹諧には居所の床一、鳥に一、けだ物に一、以上一座に三句すべし。玉床(ぎよくしやう)と聲によみても三句の內也。居所也。聲によむ時は、とこ共ゆか共いひかゆべきやうなければ、夜分をばのがるゝ也。又、文の上書に玉床下(ぎよくしやうか)・吟床下などあるは、居所に二句也。是も夜分にはあらず、皆三句の內也。又、座敷のゆかの間(ま)・床疊(とこだたみ)・床の花・床の懸物(かけもの)・床柱・床えんなどは、人の寢(ね)所にあらざれば夜分にならざるべし 然ども皆三句の內也。筏の床、水邊也、居所、夜分にあらず。但、句躰によるべし、床三の內也。網代の床、水邊也、夜分なり。居所に二句、冬也、生類に二句也。床三の內也。髮ゆひの床、居

所也、夜分にあらず、床三の内也。疊の床、居所也、夜分にあらず。これはたゝみをのせてさす床なり。又、疊の面をつけぬわら引をも疊の床と云歟。これも床三の内也。又、とことはといふ詞を、ぬるとこにとりなしても三の内也。とこよ・とこやみ・とこ夏等は床の字にあらず、常の字をかけば各別の事也。病者などのとこつめの痛みといふも床三の内也。居所に二句也、夜分也。床の山・床の浦などの名所の床は、床の字に面をかへて又あるなり。これも居所になるやうに仕立たる句ならば、一座三句の内なるべし。亦、とことゆかとは折をかへて有べき也。又字はおなじけれども、夜分にならざるゆへ、とこ三句の外也。殊に御ゆかしきな(は)どに居所にもあらざる故、とこには二句去べし。ゆかには折を嫌べし。妹とわがぬる床夏の花、といひかけても、人の床一の内也。居所には二句、夜分にも二句さるべし。只とこ夏とばかりは字も別なる故に、床に付てもくるしからず。

ともしび　只一、釣の灯一、法の灯一、誹諧には此外に常灯・ゝ明・灯臺・灯心・行燈など聲にいひて今一有也。以上四也。燈は夜分也。ひをともすといふも灯と同じ。法の燈とは、其寺の佛法をきえぬやうに相續する僧をほめて法燈といへり。又、佛前にともす常燈・十二燈・千燈・万燈をも、のりの灯といへり、句躰によるなり。僧のほつとうも燈の字にひかれて夜分と連哥にはいへど、理よはければ誹諧のほつとうは夜分にあらず、常燈も非ニ夜分。其外灯心・灯臺・千灯・万灯皆夜分也。大方火は夜分なれども、たくとすれば夜分にあらず。長檠・短檠は灯の字不レ入故に四の外也。されど共灯に面を嫌。燭臺・手燭は四の内也。蠟燭、四の内也。皆夜分也。燭の字、ともしびと讀故也。

ともし　夏の夜、鹿をとる事也。ともしび三の外也。照射と書也。ともしびの裏に有べし。されども火の字を句中に結び入たらば、燈三句の内成べし。ほぐし、同前也。

鳥　たゞ一、春鳥一、小鳥・村鳥等の間に一、鳥獣といひて一、狩場の鳥・うきねの鳥・夜鳥等は各別の事なり、右新式に一座四句の物の嫌やう也。此四の鳥は無名の鳥也。誹諧には此外に、鳥類・花鳥などゝ聲に讀ても一座五句也、年ゝ表面の鳥春なれば、聲によむ春鳥たらず。又、聲によむも讀によむも共に面を嫌也。新式に、狩場の鳥と申は雉子也、うきねの鳥は水鳥也、夜鳥は鷄なり。鳥とはあれども是等は皆名鳥なるにより、各別の事也とはしるせり。鳥といふ句に、雉・鴨・くだかけなどの一切の名鳥付てもくるしからず。又、ひよ鳥・かほ鳥・いろ鳥などいふ鳥の字は、無名の鳥に五句去なれば、誹諧には三句去べし。鳥居は非ニ生類一。華表とかけば、鳥の字にも居の字にも二句去也。とりとりの聲といふも取の字には三句、鳥の字には二句去也。鳥獣とは禽獣とかけば二句可レ嫌事ながら、子細有てこれは三句嫌也。鳥にかほ鳥は面を嫌べきよし、無言抄にあれ共誤也。名鳥の通にして置べし。宿鳥五句の内也。夜分也。たゞ鳥のぬる・ねぶるなども同前。水鳥のねる・眠は夜分にはあらず。鳥のあと、無名の鳥也。鳥四

内也。作レ去文字の異名なれば、生類にうち越を斗を嫌也。鳥窠禪師など申も、無名の鳥五の内也。されども人の名なればば生類にきらはず、鳥目も上に同じ。五句の内なれども、錢の事なれば生類にあらず、されば共生類二句つゞきて、三句めには斟酌有べき歟。それは作者の心得次第也。他の句ならば難ずべからずといへり。

戸字　とぼそ・關戸・谷戸などの間に折をかゆべし。新式如レ此四句の物とす。誹諧には五ッ　戸の字辭によみても五句の物と知べし。無言抄云、天の戸は居所にあらず、各別の事也。これは誤也。居所にあらざるを戸の内にあらずといはゞ、室の戸も居所にあらず、それをも四の外にすべきや。所詮天の戸も誹には五の内也。とざし、鎖字あれば戸四の外と連哥になせり。しかも居所に二句と侍り、是誤也。別の字ありとて戸の外にするならば、新式の戸の字の下に樞・關戸・谷戸と出せり。とぼそ・とびら・とざし、此三は同じやうの物なるに、とざし斗を四句の外になし、居所にも二句去といへるは、後人の誤なるべし。屋の字にむまやは、驛の字あればかろく嫌ふとはかはりて、戸にとざしを別の物に心得るは、新式の心を知ざるゆへ歟。誹諧にはとざしも五の戸の内、居所にもありやうに嫌べきなり。水戸・川戸・瀬戸等は、門の字又泊の字をも書ゆへに五の戸の外也。戸の字に二句去べし。無言抄、戸に妻・戸さしなどいづれも面を嫌と云々。これ大なる誤也。すでに新式をみれば打越を嫌べき物の内、窓に戸と入たり。誹には新式の定のごとく、戸に窓・かど・せと・宿等皆うち越を嫌べし。とざしは右に注レ之五内になれば打越を嫌ものにはあらず。問て云、居所三句去なるに窓に戸、打越を嫌とは心得られず。答テ云、居所三句をつゞけてする物なれば、うち越におり合の度々ある事也。其上天の戸・江戸・水戸など、居所にあらざる戸の字も有物也。岩戸・天岩戸は神祇也、非二居所一。作レ去戸の字五の内也。關の岩かどは戸の字にあらざる故不レ嫌レ之。戸をあくるに夜のあくる付句嫌レ之云々。戸をたゝく・戸をさす・とざす・戸をひらく・戸をとづる・戸をたつる・戸を引・戸を上る、皆夜分にあらず。上戸・中戸・下戸、これは秦の阿房宮たかきゆへ、酒のまでは其御殿におる事ならざるによりて、上のとびらの内に番する酒のみをさして上戸といふといへり。然共日本へわたりたる書の内に此事見えずといへり。道春法印は唐によく酒のむものをば大壺といふと物の本に有。上戸といふ文字はいまだ見あたらずといへり。よしそれはともあれかくもあれ、昔より日本にいひ付た詞なれば、酒呑人を上戸、よき比のむ人を中戸、えのまぬものを下戸といふ詞は誹諧にも可レ用也。戸の字はあれ共五の内にあらず、居所にもあらず。戸の字に付てもくるしかるべからず。但、門戸などゝ辭に讀、戸の字には三句嫌べき也　戸部尚書は辨官の唐名也。居所にもあらず、戸五の内にもあらず。戸の字に付てもくるしからず。千戸・万戸、これは戸五の内也、居所也。民家をさしていふ也。

鳥と鳥との鳴の字　　連に面を嫌へば誹には七句去也。假へば鶴のなくに鳫の

なくといふ類也。

鳥のなく　に鐘のなる・なるこなど付句を嫌と連にあり、誹も同じ。

鳥の羽風　風躰也。風躰に三句去也。鳥の羽ふくは二句也。鳥の羽たゝきなどは非㆓風躰㆒。

鳥の巣　鳥の古巣・鳥のさえづり、皆春也。

蓬屋（とまや）　居所に三句、とまふきは二句也。惣別芦も篠もふくとすれば二句也、非㆓水邊㆒。苫ふく舟などいふにふり物あしゝ。

鳥屋鷹（とやたか）　夏也。鷹のとやは雜也。可ㇾ依㆓句躰㆒。鳥屋出の鷹は秋也。初鷹同前。

豐明節會（とよのあかり）　非㆓夜分㆒。明の字に三句也。冬也。霜月の中辰日也。五節の舞、此時あり。又、日本紀に宴の字をとよのあかりとよめば、句躰によりいづれの節會をもとよのあかりといへば、冬にならぬ句も有べし。乍ㇾ去大法は豐明の節會、霜月を本とす。卽位有て御代の始の冬のとよのあかりは、大嘗會と云也。毎年行るゝは新嘗會と云、にゐなめのまつりと讀也。當年のよねを始て大神宮へそなへ奉れる故なり。又、誹に節會とばかりするは雜也。豐明の節會とするは冬也。おせちとばかりするは春也。これは天下の地下人、正月に親類ども振舞を申付たる俗言なれば、不ㇾ及㆓是非㆒春に用る。

とよの御かり　冬也。

とよのみそぎ　夏にあらず、冬也。神祇也。大嘗會の時ある御禊の名なり。

年内立春　冬也。哥の題には春部に出せり。

遠きに近き　付てもくるしからず。又、かやうのきもじ同前。

遠きにおち・はるか　遠き〳〵は連に五句、誹には三句去也。

年　二、とせ一、ことしも年一の内なり。誹にはねんとか、さいとか聲によみて今一あり。以上四句の物とす。

年こゆる　などゝいふに、春はきてなど付る事同意也。

年くれて　といふに、春ちかき・春の隣同意也。としの改には改年と書故に勿論春也。二とせ・三とせ・四とせ・五とせ迄も、あらたまるといふ字そへば、皆當年の事に成て春になる也。但、句躰によるべし。

遠里小野（とをさとをの）　攝州の名所也。居所に二句嫌ふ

とのゐもる　といふことは夜分也。居所に二句歟。

友　たゞ一、鳥獸などに一、月花を友などは、人倫のともに折をかゆると云說あれば又一あるか。誹には人倫にても月花にても、なにゝても友といふ字、折に一づゝ、ゆうとほうと聲によむ共、此四の内也。

とも綱　友の字にあらず。舟のともに付る綱なり。又、さきに付るをはへ綱といふ、哥には見えず。友舟は友の字也。

泊船（とまりぶね）　夜分にあらず。留の字には三句去也。

とまり　いづくのとまりと名所をさせば水邊なり。たゞとまりとばかり、旅の句に舟なくば水邊にあらず。船をとむる、もとより夜分にあらず。哥の題に旅泊と

あるは、とまり／＼の事、水邊也・夜分也。旅泊の題にては、とまり舟とよみておほく置れしかば、連に夜分にあらずといへるはおぼつかなし。いかりなどをおろし、晝もひよりわろければ舟をとむるゆへ歟。うたがはしく侍れども、かやうのせんさくは六ケ敷義なれば、誹も連にひとしく侍り。

訪 に、とふといふ字去べからずと無言抄にあり。これ非也。訪といふに二あり。ひとつは友達などの宿へをとづるゝをいふ、訪の字也。今一は無人をとぶらふ也。これは弔の字なり。唐には死人の宿には枝のさきに弓を付て門に置と也。いづれも聞の字には二句去也。

とゞむる に關など付事あしゝとあり。これ非也。句躰によりて少も不レ苦。

鳥のかへる 春なり。三月の末に諸鳥の古巣にかへる事也 たゞ日の暮にねぐらにかへる鳥などの句は春にならず。

とこよの花 橘也。夏也。後鳥羽院の御哥に、かりかへるとこよの花のいかなれや、とあそばされしは橘にあらず。これは春の花也。鴈のかへる所を、とこよといへば也。

年木きる 冬也。

年のながるゝ・行暮 みな冬也。

誹諧御傘（二）

遲

塵 一の外、ちりの世など又有べし。誹諧には此外に微塵・紫塵・ゝ勞などゝ辭に讀て今一有べし。

千鳥 冬也、水邊也。鴈をむすびては秋也。霧・露を結ても同前。

千早振 千の字に五句ばかり可レ嫌。早の字・振の字共に二句ばかり可レ嫌かといへりと無言抄にあり。是は哥道の大事、神祕の詞にて、たやすく知人世上に無レ之間、おぼつかながらるゝも尤也。千の字は一文字の所に申ごとく數字なれば、誹には面をかへて有也。字去の說は用給べからず。早の字・振の字は二句づゝ可レ嫌かといへるはしらざる故也 付てもくるしからず。

千種 名草付べからず。たゞ草に名草

はくるしからず。無言にかくのごとく侍れども、千種に名草も更にくるしかるべからず。かならず付ぬといふ古法は無之事也。千種、無言抄に秋なりといへり。淺茅の事と思へるか。それにても色の字の字そはずば雜也。千草といふ草はなし。但、秌の草を百草とも千草共云也。又、春霞色のちくさなどいへるは、霞の色のさま／＼なるをいへり。是は草の字に非ず、種の字を書也。種の字にても草の字にても、くもじを濁て讀べし。

千里　とばかりは居所にあらず。

路　と路との間七句去といふ事にいはれず、只五句去也。無言抄にかくのごとく侍るは誤也。すでに宗砌法師の七句さる物を、哥に竹田の舟路とよめる。こは新式になしとても、なにのうたがひかあらんや。此宗砌は連歌道には人丸にたとへて、宗祇のあがめをかれし人也。しかれば連には七句、誹には五句去也。

路と道との間　連には五句去なれど誹には三句去也。但、山路・舟路などに、文の道などいふ行步にあらぬ道、二句嫌也。又、淡路・雲路などいふ行步にならぬ路に、行步の道二句嫌也と無言抄にあり雲路を淡路とひとつに心得られたる說誤也。新式に淡路に道こそ打越を嫌とあれ、雲路のさたなし。雲路、人間こそかよはね、天人・鳥・風・月・日などの行通事に、哥にも雲のかよひぢなどよめれば、行步の道に同じ事也。能々分別有べし。

路　に若地・眞砂地、一向不嫌之。但、路の心に用たらん句ならば、付侍らん事用捨有べし。

ちまた　に道、二句去也。

散　の字、誹には三句去也。但、花のちるに紅葉・木の葉等のちる、連に折を嫌へば誹には面を嫌なり。

茅　の字、新式にさたなし。無言に一座一句の物のやうにのせらる、信用にたらず。誹には折に一づゝ有也。茅屋と聲に讀ても四内なり。

契　にたのむる、句躰によりて同意に成也。たのむとばかりは不苦。

利

りちのしらべ　秋也。然ば呂の聲春に成べき道理なれど、その沙汰なければ呂の字は雜にして置也。

りうたん　りんだうの事也。秋也。思ひ草、說說多けれど、定家の御說にりんだうとあれば折を嫌べし。

怒

ぬとぬ　但、不のぬ大切の間、打越までは不可嫌之由被定之。新式に、かくいへるは不のぬ事也。ふのぬといふは、しらぬ・思はぬなどの類也。今は付句ばかり嫌之。又、をはむぬと申は、しりぬと思ひぬ等の類也。をはんぬと／＼とは二句去也。不のぬとをはんぬとは更に嫌はず。但、表前句のこしに、たとへば思ひもよらぬと有に、付句に世のうき事は知はてぬとゝめたる句は、折あひ間にきゆへに付ぬ事になれり。新式に大切といふ詞に、稀なるといふ義にはあらず。いくらもいはではかなはぬ文字なれば、重寶なる字といふ事也。

ぬらん　つらんなどのとまり、連に一座一句・誹には折をかへて三句も有也。とまりならねばかやうの三字かな、連に面をきらへば誹には七句去也。

ぬし　非二人倫一。あるじといへば人倫也と無言抄にあり。是新式の心をしらざる近代の人の誤也。ぬしもあるじも皆人倫也、文字もかはらず。誹に主従・主君といひても人倫也。新式に花をあるじ・月をあるじと云は、人倫にあらずといへるにてよく聞えたる事也。あるじは人倫、ぬしは人倫にあらずといふ詞は、新式に是なし。新式を讀人も新式の心をよくしらぬゆへに、如レ此の謬説まゝこれあり。淺間敷事歟。たとへば、家あるじといふと、家ぬしといふと、かはりめありや。もしぬしを人倫にあらずといはゞ、家ぬし人倫をのがるべきや。能〻分別有べし。

ぬる　に伏二句去也。かたしきは不レ嫌といへり。丸今案レ之を、蝶鳥のぬる・ふすなどには、かたしく苦からじ。人のぬる・ふすと云に、袖をかたしく・枕をかたぶくる・枕してなどゝは同意也。尤二句嫌べし。前句の句躰によるべきなり。

ぬるゝ　の字、連に二あり。誹にはぬれ物をかへて三句すべし。

ぬるゝ　に袖・もすそのそぼつ、連に面を嫌へば、誹には七句去也　雨そぼふるなどは少もきらはず。

ぬるゝ袖　戀也。涙に二句去といへども、戀の句のつゞき五句の内にはせぬことなり。

布さらす　水邊に非ず。雪にも日にも曝す故也。

ぬるとぬる　ぬれ〳〵・ぬるとぬれ、みな二句さりなり。

ぬらん　とまり、連に二あれば　誹には折をかへ句のたけをかへて三有べし。とまりならば連に面をきらへば、誹には七句去べし。

留

るゝ　の詞二句去也。しぐるゝ・日のくるゝ・物をくるゝ・しるゝ・しらるゝ・たるゝ・間るゝなどの類、皆二句去也。

る　とまり二句去也。こぼれる・かよへるなど、句のとまりに有事也。

るらん　殘るらん・歸るらん類也。ぬらん・つらんなどの三字、かんなにはかはりて見渡しにもくるしからず。殘る・歸るは、その字に付て只二句去のらんとまり也。るらんとまりといふ事はこれなし。

遠

女郎花　只一。誹諧には女らうくわと聲にいひて折をかへ、今一句有べし。いづれも女の字には折を可レ嫌歟。又、男なへしといふ草花あり、これも女郎花二句の内なるべし。

鬼　新式に一座一句の所に出せりといへ共、百韻連哥にはせず、千句に一句の物也。連哥には尤きを嫌故也。誹諧は是に異也。けやけき物を宗とすれば、百韻に鬼とも鬼神とも一句ありて折をかへ、鬼ゆり・鬼あざみなど今一有べし。鬼は生類にもあらず。鬼神といひて神祇にもあらず。又、盃をはじむるに鬼のみといふ事あり。是は鬼の字にあらず、小児と書よし、

小笠原の家にいへり。さも侍なん。小兒と書とて人倫には嫌べからず。鬼やらびも二の內也。いづれも折をかふべき也。

女

をうなといひても只一也。千句に一句の物なれば、誹とても二は有べからず。女房・女性などと聲にいひても有べからず。乙女・女のわらはなど同字なれ共、めといひては女に面を嫌べし。女郎花は人倫ならねば折をかへて有べし。惣別女を百韻連哥にせぬは、哥・連歌には俗に聞る詞を忌故也。誹諧には哥・連歌の心持と裏面のどくかはりて、態いやしき事をも耳に立事をも用ゆる習ひなれば、女鬼のたぐひはおほく有度義ながら、めづらしからざればおかしからず。人を興に入ておかしがらせん爲の狂句なれば、かやうにたゞ一句の物に定るがよきなり。多はおもしかるべからず。め松・めねこ・めんどりの類、人倫にあらざれば女にも女性にも七句去べし。めの字はおほくつかひたき文字なれば、折に一づゝ有と心得らるべし。

遲日 此外永日有べからず。誹諧には永き日と一、遲日と壹、一座二句也。永日・長日と聲に讀ても二句の內なるべし。をそく出る日といひてもおそき日に成也。春也。もとより遲入日も同前。

岡 只一、名所に一。誹諧には岡二、名所の岡壹、以上三也。繪書の金岡・ゝ邊六彌太なども三のうち也。さりながら人の名字なれば山類にはきらはず。

小野 只一、名所に一。誹諧には名所の小野一も、又名所の小野一ありてたゞの小野二もあり。折をかへて三有物也。小野紙も此內成べし。小野ゝゝの奥も山類にあらず。

をち 一で 誹諧にはをちかた・遠かた・遠近、みな折をかへて一座三句の物也。此三の內、をちは二もあり、遠近も遠かたもながくつゞきたるは、いづれも一句づゝ有也。又、聲にゑんきんとあらば、をちこち有べからず。ゑんばうとあらば、をちかた有べからず。いづれにてもをち三句の內也。又、おち・遠き・ゑんと讀やうかはれど、同じ文字ながらたがひに二句づゝ嫌ㇾ之。遠きと〳〵は三句去也。又、ゑんと聲に讀てはいくつも有也。但、遠に遠かた・をちこち一づゝの物なれば、誹にはゑんきん・ゑんばう又有べし。遠きにはるか二句去也。

音 聲・ひゞき・物のね・物のなる等、いづれも打越を嫌なり。

をとづれ 信の一字をもかくゆへにひゞきにはきらはず。音の字には一句嫌也。物のねにはきらはず、聲といふ字にも同前。

音羽川・音無瀧 等の名所の句に、聲・ひゞききらはず。ねの字には付句嫌べし、同字なるゆへなり。それも音といふ字を風・波などを結入て用に立たる句ならば、聲・ひゞき・物のね等に二句さすべき也。

小田かへす 春也、非水邊。先土をすき返して後に水を入る也。田を作るは雜也。歸るの字に二句也。田をすくとばかりも、ほると有ても、かへすと同じ事たれば春たるべし。

遲櫻 春にをくれてさくとしても春也。

小忌衣 神祇也。冬也。大嘗會の時き

る事也。大忌衣といふ衣も此時に用と云ゝ。

小舟　連には小舟一過てはあま小舟もなしといへり。誹には小舟二、あまをぶねも此内也。小しう・小せんなどいひても此内也。を舟二過てこぶねとあり。こぶねとは二なし。

をとを　三句去也。をと小三句去也。をとこ付事嫌也。猶こ文字に斂ㇾ之。

をしね　植物に三句去也。

親に子　二句去也。父・母・姉も、たらちね・たらちをにも同前。見はきらはず。これらは人の親と子の事也。親に筍・めうがの子等は付てもくるしからざるか。但、親といふ文字の内に子の字をかゝへたれば、草木・鳥獣の子成とも親といふ字には付てはあしかるべし。うち越は嫌ふべからざる歟。

をだまき　賤のをだまきとよめる・皮(ママ)緒を卷かためたるへそなり。又、狭衣にたつをだまきとよめるは、枯木の事なりといへり

をろか　述懐にあらず。

鴛・鴨　等に涼しきと結ては秋也と無言抄にあり。これおぼつかなし。かやうの冬の物にも、すゞしき・暑の詞を添れば夏に成也。やゝ寒・夜寒・ひやゝか・冷し・身にしむたどの詞を加へば秋に成べし。

和

若菜　たゞ一にて侍れ共、誹には折をかへて菜の字今一有べし。菜つみは春也。菜の花も春也。蕪菜は冬也。菜とばかりは雑也。干菜、雑也。菜たね・菜畠・菜雑事・菜食・菜汁、皆雑也。つまみ菜、秋也菜のくゝ立は春也。磯菜は海草をもいふ。年ㇾ去つむとすれば春也。菜籠は雑也。いづれにても一座に菜の字二と可ㇾ心得。但、野菜・汁さい・調菜など誹によみては、折をかへて今一有べし。其ゆへは、さいと誹によめば春にもあらず、うへものにもあらず、青菜の事とも聞えず。汁さいのたぐひ、別の物なれば菜二の外に今一有也。され共文字同じければ折をかへてよし。

別恋　二。誹諧には三あり。離別など譯に云ても戀なれば三の内也。きぬ〴〵もわかるゝ戀なれども、別の文字いらずば三句の外なり。

別に歸　戀の心は同事也。これ新式の文章也。新式に可ㇾ嫌二打越一物の所にかくのごとし。爰は人の見まがふ所也。戀の別と戀の歸とは、打越を嫌といふ事にてはあらず。それは戀の別といふ句に戀の歸るといふ句は、連に紹巴などは面を嫌はれしと也。然ば誹には七句去べし。今新式にうち越嫌ふといふは、たゞの別に戀の歸ると云句の事也。もし戀ならでたゞの別に歸といふ字付ても不ㇾ苦。能〻可ㇾ有二分別一。

別にきぬ〴〵　連に面を嫌。誹には七句去也。是は戀の別也。旅のわかれに戀のきぬ〴〵は二句去也。

別に分の字　付句可ㇾ嫌歟。依二句躰一つけてもくるしからず。

別に餞　嫌ㇾ之と無言抄に見えたり。餞別と書て馬のはなむけと讀は、旅の別には依二句躰一付事したしかるべし。旅な

らぬ戀の別・雲鳥・春秋の別などに少も嫌べからず。

鷲峯　新式云、可レ爲二山類の躰一。但、鷲嶺・鶴林等山類・植物に元は不レ嫌レ之、用二此旨一を可レ然云々、以上。此條知人まれなるべし。ふかき子細有て如レ此しるしをかるゝうへは、末代迄も山類にあらずと心得らるべし。

わすれ草　雑也。花を結ては夏也。此草不相傳の人曾て不レ知故、無言抄等に忘の字に二句去などかけり、僻事也。それは萱草とかけば二句と思へる故也。萱草の異名を忘憂草と有ゆへ忘れ草と和訓したれば、忘の字に二句嫌と思へる、いはれなき事也。此萱草の藥性、人の憂をよくなをすにより、獨ある母などの居らるゝ所には植置、繪にも書て、もろこしの人は賞也。是花の咲わすれ草也、萱草の事也。又、軒に生る忘れ草は別の物也。忍ぶ草を忘草といふ說も有。さるにより忘草と忍草とは、一草二名と心得たる古人もあり、又、別々といふ說もあり。伊勢物語のこは忍ぶ也とよめる哥の時、眞實の差別は口傳する也。しかれば軒に生る忘れ草と萱草とは各別也。軒に生る忘草には花さかず、雑也。萱草も花を結ねば雑也。二種異なりといへども、忘草といふ句二句は有べからず。忘草と有て折をかへ、萱草と今一句するなり。それも花を結たる忘草ならば可レ有二斟酌一歟。但、連に一句の物は誹に二あれば、少もくるしかるべからず。忍草といふ句に軒の忘草は折を嫌べし。花の咲忘ぐさ、或忘憂草、或は萱草などは付てもくるしかるべからず。

忘字　連に五句去、誹には三句去也。わすれと三字つゞきても、三かたにてはあるべからず。

若葉　春・夏有二兩說一。加レ花者爲レ春、然而夏季大切之間可レ爲二夏一云々。此新式の文章をみれば、花を結はぬ句は皆夏といふ義也。是は木の若葉也。草の若葉は春になる也。

我君　といひても人倫にあらず、平人のいふべき詞にあらず。無言抄の此說をそらくは非也。日本に生を受たるものは、卒土の濱の王臣にあらずといふ事なしと申本文あれば、いかなる山賤・浦人も我君と天子をあがめ申に、何の科か有べき。我君は千代にやちよにとよめる古今の哥をもつて連歌・誹諧にいたずに、凡下のはゞかるべき子細はゆめ〳〵無レ之事也。

和田の原　海に折を嫌、誹には面を嫌べし。田の字付てもくるしからず。原の字は三句去なり。

わたし船　旅也。川舟は旅にあらね共淀の川舟は旅也。川邊の渡し舟なども旅也。

わさ田　はやわせ共に秋也。うへもの也、植とあらば夏也。

わすれがたみ　これは忘れがたきといふかへ詞なるにより、難の字に三句也。又、戀のかたみにいひかけたる句ならば、難の字に二句嫌也。

若水　立春也、元日にはあらず。

わかあゆ　春也。

わかめ　春也。かるは夏也。

わか草　春也。

わか紫　春也。紫とばかりは雜也。

わか葉　草のわか葉は春也。夏の季を持草も秋の季をもつ草も、わか葉とすれば皆春になる也

わか楓　夏也。靑楓もおなじ。

若竹　夏也。

わた　冬也。衣類の沙汰無レ之といへどもうち越を嫌べき歟。綿にとしたらば三句去べし。綿ぼうしは衣類にはなるべからず、冬には成べし。菊のきせわたは秋也。綿と腸このわた、付句嫌べし。綿やとあらば雜なるべし、居所也。木綿も冬也。綿打は人倫なり。冬の用意にうつものなれば秋なるべし。き綿・畠などに有躰ならば植物也。花は夏也。木わたのさねは雜也。わたと、もめんは付てもくるしからず。唐わたと、もめんはきらはずも。問云、綿にももめん同字なるに、付てもくるしからずとは如何。答云、𧮧の綿に似たりとて木わたは類に成也。木わたを又糸によりをりいへ共、もめんと名づくれば綿とは各別の物となり侍る。春日に春といふ字付てもくるしからざる類と知べし。

加

哉の字　韵にゆする事發句の外、ねがひかなとて今一あり。懷帋をかへてと新式にみゆ。はいかいにも連歌のごとし。とまりならでは哉の文字二句去成べし。

杜若　連歌には一句なれば誹には二句すべし。和哥の題には春の物なれ共、連歌と誹諧には夏に成なり。惣別かやうの一座二句の物は句躰をかへ、上句下句をかへ、折をかへてする也。但、一はかきつばた、一はとじやくと聲にすべし。皃よばななど異名も二の內也。折をかふべし。水邊なり。

顏鳥　春也。いろ〳〵の說あれ共、たゞうつくしき鳥と心得てすべし。連哥には一座一句の物なれば、誹諧には二句すべき儀ながら、聲によむべきやうなければ、たゞ一句にて置べし。又、皃よ鳥といふ物有。かほ鳥とおなじ鳥成ともいへり、又、別共いへり。哥學して知給ふべし。不レ知人は誹諧にも御無用也。

隱家　述懷也。誹諧には二句する也。乍レ去一は隱居・隱遁・隱者など〻聲によみて有べし。隱家は居所に二句なれど、隱者・隱遁などは居所に不レ成、隱居は成也。隱家に家、連に面を嫌へば誹には七句去べし。山家・貧家・〻中・家內などいふには面を嫌べし。釜の蓋置のかくれかは居所にあらず。是も一座二句の內也。かくれ家に世をいとふ・身を捨るなど付事同意也。

鴈　春一、秋一、殘鴈春秋の中に有べし。誹には春秋の內、がんと聲に讀たる句今一入て以上四の物とす。殘鴈とは、秋越路に殘てわたらぬをも、春かへり殘るをも云也。哥の題には殘花を夏に出せども連誹には春に成也。殘がんも、渡りのこるかりも、秋になりかへりのこる鴈も春に成也。哥には多わたる鴈も有と申侍り。皆句躰により去嫌べし。かり〳〵とは二有。かりがね〳〵とは二なし。かりがねの聲などは重言になる故せぬ事也。鴈字・鴈書皆秋也。鴈塔、秋にならず、尺敎也。生類にもならず。これは四の外也。鴈陳(陣)、秋也、生類也。繪に書たる鴈は生類にあらず。

句躰によりて春秋の季をばもつなり。腹まだら・ひしくひ・くゞい・大かりがね、みな一類なれば四の内にす。尤折を嫌也。鴈四過て後はとばかりの聲など、名をかくしても有べからず。かりのふる郷越路に折を嫌ふ。居所にはあらずといへ共ど(ママ)も古郷三の内也。又、古哥にかるのこ共、かりの子ともよめるは鴈にはあらず、鴨の事と云也。鴈に千鳥を結ては秋なり。

垣

二。神垣・いがき・玉がき・みづがき、皆二の内成べし。みづがきは端籬とかけば、まがきに折を嫌べき歟。され共垣とよめば二の内成べし。誹には垣・かきほ・垣根などいひかへて三すべし。但、かきとばかりも三すべし。垣ほく・垣ねくなどは間にくかるべし。垣と籬、面をかゆべし。垣と虎落は七句去べし。垣・まきにかこふは七句也。かこふは居所に二句也　岫をかこふも居所に二句、草木を霧霞のかこふは居所にもあらず、垣・籬に二句去也。舟・碁・将棊・かるた、人の人をかこふもみな同前。かいまみをふしかいもとなどは、垣の字をかけ共四の外也。垣に面を嫌、籬に七句去也。垣・籬にかこむも二句去也。圍の字也。

神

一。神代一、名神一、以上三とあれども、誹諧には此外に明神・天神・斎神など云聲に讀て今一、以上四あり。又、名神非ニ名所ニと新式に有。これに付て異論侍れど、住吉の神・春日神などは名所に嫌べしと、近年連歌には相定らる。甚無理也。誹諧には新式のごとく、春日の神・住吉の神と有とも名所に少も嫌べからず。天みつ神・そこつゝをの神等を名神非ニ名所ニとは書べきいはれなし、紹巴などの誤也。猶口傳有て連に近代二句物となせども、新式に三句の所にあれば、誹に其旨を守て四句の物とす。

神　に神樂など面を嫌へば、誹には七句去也。

神　に、なる神如レ連二句去也。誹に雷電などゝいふは付てもくるしからず。

神　に、かみさびてといふ詞、面を嫌也。神祇にはあらず。これ無言抄の説也。かみさぶるとは上久と書ゆへに、神祇にはあらずといふ儀歟。近比あらめなる説也。句躰による事也。古宅・名所・深山・池・瀧などのたゞ物さびしき所をいふ句ならば、誹には付てもくるしからず。宮・社頭・祭の過たるあとなどをかみさびといはゞ、まことの神の文字になりて、一座三句の内になる也。誹には四の内なるべし。問云、うみにます神は龍王の事なれば、神の外に猶有よし申は如何。答云、新式に一座三句の物に神一・神代一・名神一と出せるは、神の字に付てのさた也。海にます神・龍神・海神などいふも、誹には四の内にする也。龍王・龍宮などあらば少もとがめず、神祇にあらざる故也。又、新式に名神と三句の内に出せるは、春日の神・住吉の神など云句の事也。神の字つけず、上つゝを・中つゝを・そこつゝを・あまのこやねなどゝいふは、神祇にはなれども四の外にいくつもある也。それもそこつゝをの神たど、神の字付たらば皆四の内也。近代の説甚誤れるによりて今くはしく爰に記もの也。

狩

鷹がり一、小鷹がり一、獣に一。誹諧には此外に巡狩、かりの使の事也。獵師・鷹匠など出がちに今一有べし。折をかへて以上四句也。かりとばかりは冬也。四季に文字かはりて狩はあるなれど、狩場・かり人など皆冬也。ねらひがりは夏也、けだものがり也。狩に櫻がり・紅葉が

り・きそひがりなど折を嫌とあれば、誹諧には面を嫌べし。此櫻がり・紅葉がりは鳥獸をかるにはあらず、たゞ花・紅葉を尋ぬる事なれば狩四の外也。されども花見・紅葉見に事よせて、鳥獸をかるやうに仕立たる句ならば面を嫌べし。さなくば文字も心もかはれば二句嫌べき義也。あやまりを聞つけたる耳には不審あるべき也。但、其座の宗匠の二句はあまりにちかきと思はれば、ともかくもはからひ給べきなり。丸はたゞ道理のをす所を眞直に書付る耳也。又、かり衣・かりぎぬを、かり枕とおなじかりその心なれば、狩に一句きらはずと無言抄に書り。是あやまり也。かりころも・かりぎぬは、根本職業の裝束にはあらず。公家衆のかり場或は御旅出立、或はかりそめなる所へ御心やすくめすものなれば、かりそめの心あれ共狩の字をかくうへは、たとひ旅の句なり共かり枕・かり臥などゝ同じごとく心得て嫌べからずとある儀は無理也。これも狩の字には面を嫌べき也。かり枕・かり臥（原本衍文）は、かりそめのかりの字也。（かりゝの字也。）かりころも・かりぎぬは狩場の狩の字也。根本かりばへきるやうに、したてたる着物なるゆへ也。春冬の狩は大鷹を用ゆ。夏の狩といふは或はともし、或はかのこなどをとる事也。是ねらひがり也。秋の小鷹は鷂にて、小鳥・鶉などをとる事也。初鳥狩は隼をつかひて大鷹の冬の狩なれど、秋よりつかひそむるによりて初鳥狩と名づけて秋に成也。秋の狩も一なれば、小鷹狩過て初鳥がり有べからず。又、狩とばかり有ても大鷹の狩なれば、春冬の鷹狩はもはやせぬ也。然ば新式のごとく大鷹の狩春冬に一句、夏の獸狩一句、秋の小鷹に一句、以上三句也。誹諧にはこの外に、連歌にえせぬ聲によむ文字、先に申ごとく田獵・巡狩等、四季にてゝ雜にても今一句有レ之、一座に四句ある物迄はいづれ折をかふるもの也。

狩　に雉子・鷹をつけてもくるしからず。但、句躰によるべし。かり場に眞柴・秋の田など付事はわるし、聲も相違せりなど無言抄に制せられたり。これ近比無理也。聲の相違したるをも、とりなしの付やうには更にきらはず。能とりなしにても句作りあしければわろき句なり。かりばを、葉をかるととりなさんに、なにの科か侍るべき、更にはゞかり給ふべからず。

鐘　只一。入相一、尺敎一、異名一、新式の沙汰はむづかし。誹諧には鐘一、入相・晩鐘共おなじ事なれば、此内出がちに一、鳧の鐘一、鳧氏の人の作りそめたるにより鳧の鐘といふ也。今僧の經を讀時打ならす磬の事也。これ尺敎のかね也。もし磬をうつといふ句あらば、もはや鳧の鐘有べからず。十二調子の中に鳧鐘と有も此字也。乍レ去調子の鳧鐘とあらば、かものかねあるべからず。鯨の聲一。これ連哥に鐘の異名といふもの也。くじらの聲共すべし。水邊・生類にあらず、夜分也。たゞ鐘と同じ。いづれも折をかへて以上四句有べし。新式目に四句の物なれども、近代連哥に三句仕と申ゆへば、誹諧には四句する也。鯨の聲となくば、其かはりめにたゞの鐘二有べし。

鐘かすむ　夜分にあらず、春也。中比よりかねかすむ、晩鐘の事と心得て指合のくりやうよろしからず。これは入相にかぎらず、晝の間のかねをいふにより、

新式にも夜分にあらずと斗出して夕時分のさたなし。此かすむ、めに見る霞にあらず。聲の春は長閑にてかすむと云事也。夜は陰分たれば、春とてもかねの聲かすまぬ物也。夕時分に打越を嫌のさた用べからず。無言抄の説あしし。鐘に金・しろがね・あかゞね・くろがね等は二句去也。金・銀・銅・鐵など聲によみては付てもくるしからず。耳・かねのなるなどあれば、かねに而を嫌ふ。夜分にあらず、四の外也。念佛のかね・鳧の鐘と同じく尺教の鐘也。四の内也。鉦鼓とあらば、つりがねに付てもくるしからず。めがね二句去たり。ゆひがね同前。針がね同前、頸がね同前。大工のかね同前、歯に付るかね同前。おはぐろは付てもくるしからず。かた色・かな火箸・かなしやくしなど、かなといひかゆるも皆二句也。六月の異名に林鐘とあるを、いつの頃よりやらん、鍾の字を鐘にまがへて林のかねと連哥にもする人有。大なる誤とぞ、物知れる人の申されし。

霞　におぼろ・二句きらふなり。

霞の衣　衣類にあらず。衣の字には五句也

霞の網　水邊にあらず。かすみのあみに似たるといふ事也

霞　そびき物に二句去也。

霞の谷　山城の名所也。不吉の所なれば、むさとはとりあつかふべからず。

霞の海　そびき物なり、非二水邊一。

霞の洞　仙境を云也。院の御所をも申なり。句によりて差別有べし。共に春に成也。

霞に霧　を結ても春也。

影に陰　打越を嫌。陰のかげにもとしたかくれ句躰によつて二句去也。影のかげにはきらはず。

陰のかげ　といふは山かげ・木かげ等のはたらかぬ陰也。影のかげといふは、月日のかげ・人かげ等の動く影也。夕かげと云は晩景と書也。文字かはれども陰のにも影のかげにも二句去也。もとしたには嫌べからず。夏かげと云も景の字也。人の名の景清・景時等の景には、もとしたかくれ付てもくるしからず。陰のかげに岩根・垣根二句去也。木草の根にはきらはず。

かた見　に見る、二句去也。形にも二句なり。記念と書てもかたみと讀ゆへ也。ながめは一切不レ嫌レ之。

かたみ・花がたみ　などいふには見るの字、更にきらはず。

かたみに袖をしぼる　などゝいふかたみは、たがひ也。是も同前。

かたき心に用る詞　に、とひがたみ・いひがたみ、これも同前。

楓　秋也。青としても同前。紅葉に折を嫌とあれば、誹には而を嫌べき也。

河音の雨　水邊也。降物に二句　雨には七句去也。

懸樋　水邊也。懸の字に二句　筧の字ある故なり。

葛城　山となけれども山類也。

春日祭　二月上申日也　十一月にあれ共、初の祭を正とする故に春也。

春日　にいく日などのかもじ三句去也。春字・日の字はきらはず。

神祭　夏也。大方神事は四月に多ければかくのごとし。神の名をさして申祭は、其所々にしたがひて其季に成也。

萱ぶき・かやが軒　は植物にあらず。

秋にもなるまじき道理ながら、かやうの名草は秋の季大切なるゆへ、秋に用るがよきなり。しかればうへものにも二句嫌べし。材木・薪に成てうへものにならず、季をもたぬ物あり。又、かやうに季を持てうへ物になすものあり。是よき宗匠のはからひに有也。無相傳の人の合點ゆかぬ事也。かるかや、秋也。かやと折を去べし。

枯野　冬也　くだら野といふも冬野の名なり。冬野・枯野に折を嫌也。枯野の露、秋也。かれのの露氷るといひ、雪などむすびたらば冬成べし。露にかぎらず、枯野に虫・霧・色など結入ても秋也。

枯野　植物に二句嫌べし。くだら野は露をむすびても冬也。

柏　雑也。ならのはとも、たゞならがしは共いふ。この手がしは・あからがしは皆雑也。玉柏二種あり。柏木をほめて玉柏といひ、今一種は藻にうづもるゝ玉がしはなど讀るは石の事也。水のかしはといふは柏の葉也。水にうけて占をする事也三角がしは・御綱がしは、種々のよみあり。柏手といふは植物にあらず、膳部の事也。主膳正をかしはでとよめり。柏木といふは衛門・左衛門の異名也。これは植物に二句嫌べし。かしはめん鳥など云は、うへ物に有べからず。柏崎、名所也　植物にあらず。かやうに種々のかしはあれば、云かへて誹には四句も有べき歟。松柏とつゞけて唐の文字にもつかへば、松の字とおなじく連には七句、誹には五句、誹には五句去にもすべき事ながら、柏は松より尤故に古人七句と不定。連に一座二句ほど有歟、いまだ其沙汰をきかずゆへども、誹にははしりまひて用にたつ字なれば、折に一づゝ有べき歟。猶其時分の宗匠次第にせらるべき事也。柏ちるは夏也。無言抄に秋と有は僻事歟。かやうの常盤木の散は夏也。新式に柏は雑也とあり。宗祇のもしほ草に、ときは木にあらずとかけり。何の書より見出されけるにや、おぼつかなし。既に論語に歳寒然後知松柏後彫也と有。霜・雪をもいとはず、春まで葉の残て有やうに哥にも讀り紅葉するものとは見えぬを、ちるは秋といひ、ときは木にあらずといふは皆僻事歟。能知れる人に尋しるべし。若古歌などに秋ちるとよみたらば、いかに唐の文にあり共秋にすべし。すでに欵冬は醫書にはふきの事なれ共、日本の詩歌には山吹に落着して、順があやまり、たゞさる例あり。今此國の人の申柏は、初秋に紅葉してちるものといへり。此注につきて無言抄などにしるされたると見えたり。乍レ去古歌に無レ之は、からの文を正說に用らるべきもの也。

かげろふ　新式に雑とあれば雑也。此名に說々有也。一には陽炎とて、春の日のあたゝかにさす時、甍のうへなどにちらくと眼にさへぎる物をいふ。又、春草をもいふといへり。古今に、今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成にし物を。とよめるは陽炎也。さるによりて連にもゆるとすれば春也。また蜻蛉をよめる哥もあり。これはとんぼうといふ虫也、生類也。此虫を秋津といふ也　日本を秋津嶋となづくる事は、東國南北へひろく西國南北へすぼく、たとへば此虫のかしらを良へ向て、尾を坤へなしたるやうなる國なれば秋津嶋と申也　さるによりて東方と書り。蜻蛉も秋津もとん方も皆か

げろうの名なれば雑也。此虫をかげろふといふは、とんぼうは羽うすくて羽つかひかろくはやく、一所に少ちら〳〵と有かと思へば、其まゝ飛さりて其かたち人の目に見えず、陽炎のごとくはかなくきゆるによりて、有かなかに、かげろふと哥にも讀つゞけ侍り。かげろふのいしと申は、蜻蜓はよく岩ほのかたにとまるもの也。又、石火とて石よりうち出(いだす)火の光のはかなきたとへにする物あれば、とり合てかげろふの石の火の光とも、いひつゞけたる詞はあり。又、和州に秋津野・かげろふの小野と申名所は、一所二名也。東野と申名所も同じ野といへり。別所と云說あれ共、是もとうばうといふ名を思ひ合すれば一所とみえたり。しかれば名所の時は生類にもあらず。但、かげろふの小野にもゆるといふ詞を結ば春成べし。飛の字・羽・翅など入たらば、秋津野もかげろふの小野も生類に二句去べし。さてかげろふと壹、秋津・とんぼうの間に壹折をかへて名所の名、蜻蜓と聲に讀て又可レ有歟。但、かげろふと秋津とあらば、もはや蜻蜓は有べからず。名所の名ばかりは可レ有歟。それもかげろふとあらば秋津野とかへ、秋津とあらばかげろふの小野といひかへてすべし。おなじやうには然べからざる歟。其座の宗匠はからはるべきもの也。

鷗　雑也。水鳥は皆冬になれ共、此鳥・鳰・都鳥など冬にならざるいはれは、哥道の秘事なるゆへに爰にしるさず。新式に雑にせられたるにて、昔の連哥師は哥學の至たる事を察らるべし。かもめ、連に一なれば誹には今一、かもめしり又白鷗などゝ聲によみて有べし。もし人の名などにあらば面を嫌べき也。それは水邊・生類にならず。

蚊遣火　夜分也。蚊遣火過て蚊火又有べし。かひ屋は別の事也。

神樂　冬也。夜分也。連に一句の物なれば、誹には里神樂・山神樂・夏神樂など今一有べし。夏神樂は夏の季也。水邊也。夜分にはあらず云々。猶此外に星うたふ・きり〳〵すうたふなど、折をかへて神樂の名今一有べし。是も夜分也。神の字にかくらといふ詞七句去也。神樂岡なども二の內なり。

かすが　に春の字・日の字つけてくるしからず。

冠　連に一句、誹には加冠・冠者の君・太郎冠者などと聲に讀て今一句有也。冠に仰をかふむる・利生をかふむるなどの字は、付句ばかりをはゞかるべし。頭巾をかぶる・衾をかぶるなどは二句嫌べき歟。門のかぶきは冠木とかけば三句去べし。かぶきの小哥などは付てもくるしからず。冠は衣類にあらず。冠にゑぼし・綿ぼうし・ときん・頭巾の類付てはくるしからず。うちこしはきらふべし。みな衣類にあらず。

神樂の名の萩　准レ縮。但、秋の季には不レ可レ用レ之。神の方を可レ爲レ本。以上新式。縮にかける草木はうへものにならず。然ば此うたひ物のきり〳〵す、生類にはならぬと云事也。縮にかく草木季を持といへば、此きり〳〵すも秋に成べき義ながら、神樂の名なれば冬になる也。連にも萩ひとつすぎて、きり〳〵すうたふと今一有也。誹には聲によみて以上三句の物と知べし。神樂はいづれも夜分也。

かすむるといふ詞　非ニ霞字一。但、こ

とばのつゞきやうにて可ㇾ嫌、雜物歟。霞の心に可ㇾ用者春の季を持べき也。新式如ㇾ此侍るうへは、かすむるも春の季にすべし。殊に春の季大切なる時は重寶に成也。たとへば宵柏子の句に、いく重物いひかすむらん　とあり。いくえといふにてあへしらひて春に用られし也。これ新式の文言によくあひかなひ侍り。かやうならで、下として上をかすめ・文をかきかすめ・物をいひかすむるなどは掠の字なれば、はひきにもきらはず、春にもならずと知べし。無言に文など書かすむるも春也とあり。是新式の旨にたがふ。此義を用べからず。

頭の雪　ふり物にあらず、冬にあらず、述懷也。白髮の事也。

蛙に川の字　付てもくるしからず。かはせみ・かはうそは河の字に二句去也。

寒風　寒に入・大かん・小かん・寒中・かんざらし・寒天・寒月・寒林等の類冬也。寒山冬也。但、寒山寺・寒山拾得などの名所・人名、藥の寒水石などは冬にあらず、雜也。寒暑、雜也。中寒冬也。冬寒に當られて當座にわづらふ病の名也。傷寒冬寒を感して春煩をいへば冬にあらざる也。しからば春季たるかと存處に夏・秋もわづらふ瘟病・疫病などをも傷寒といへば雜也。素問に夫熱病者皆傷寒と有と醫家に申侍る。かやうの冬にならざる寒の字、さむき・さゆるに三句去べし。寒の字には面を嫌ふべき歟。他准ㇾ之。

顧　みるにも、かへるにも二句去也。

凪と〱　三句去なり。

葛城　とばかりも山類也。

上といふ字に　うへと云詞、二句嫌べし。のばる・あがるには其沙汰なし。じやうと聲に讀時は二句嫌也。

龜井　名所也、水邊也。天王寺にあれば尺教也。生類にはあらず。

河舟　旅にあらず。淀の川舟斗旅也。海船もつなぐと云は旅にならず。又、小舟・釣舟等たびにあらず。

貝　虫類也。生たる貝は水邊なり、生類也。貝がら・目のくすり貝・ふく貝・かひおほひ等の類にもきらはず。水邊にもあらず。

かたをなみ　これは赤人の哥に、しほみちくればかたをなみ、と有を悪く心得て、和哥のうらにはめなみはうたず、お波はかりが立所あり、などいふものあり、誤也。但、鶴の行方なきといひかけたる斗也。波にいひかけぬ時のかたをなみには水邊の心なし。方の字にも、なきと云字にも三句去也。

門　に戸・窓・鎖・とばりなど其間いづれも面を嫌説不ㇾ用。新式に窓に戸、打越を嫌の説を可ㇾ用也。

門　に由良の門・なるとの類五句嫌といへども、たゞ同じ面を可ㇾ嫌かといへり。是無言抄の説也。なると・ゆらのと・せと等門の字をかけば、面を嫌といふ義尤也。誹には七句去べし。せと・なるとに戸・窓・とぼそ・戸ざしの類、付句ばかり可ㇾ嫌歟。せと・なるとなどの間は同じ折を可ㇾ嫌歟。

門　一座にいくつといふ事新式に無ㇾ之。誹には折に一づゝ有べし。四門といふ事あれば也。もんと聲にいひても此四の內なるべし。居所にあらざるもんの字も同前。かどでは別に首途とかく故に四の外也。連のごとく門に面を可ㇾ嫌歟、居所にはあらず。連に一句の物なれば誹に句の

たけが臺は、門いでなどゝかへて二有べし。かどいでといふ時は居所に二句去べし。門四のうち成べし。居所の心なき天台の有門答などゝいふ門の字には、旅のかど出二句可レ嫌。但、句躰によるべきなり。

かし鳥　秋といふ說あれ共、秋里へわたる小鳥の類にはあらず。山中はいつもなくといへば雜にして置べし。樫にきらはずといふ說有。正字いまだ不レ知、鸐の字をかくともいへり。よく知たる人に尋ね、指合をば定給べし。

かり田　植物に打越を嫌ふべし。

かるの字　連に一つあれば誹には二有なり。草かりは此外也。草をかるとすれば二つの內也。

かれ木　植物也、冬にはあらず。枯木と今一有。をだまき、かれ木の異名也。

かれ草　植物也。冬也。折をかへて又有べし。

かりね　かりぶし・かりそめ等の假の字、同面を嫌也。

かり物・かし物　等のかりの字、一座に三句有べし。しやくと聲にいひても三句の內也。かり初のかると、かり物のかると二句去也。但、宿をかりそめなどいひかけたらば、借の字三の內成べし。かりね・かり枕には尤面を嫌也。

卯　過て又鳥の子とあり。連に如レ此なれば、誹には鷄卯など聲に讀て以上三句有也。

かさゝぎの橋　生類にきらはぬがよき也。霜など結入て句躰による事ながら、元來七夕の古事なれば秋也。

髮と鬚　とに眉の霜などの類付べからず、これ無言抄の說也。髮・鬢・眉皆毛なれば付まじきとにや。目に眼、耳にひく、手足に指、々に爪などは同意なるべし。眉・髮等の類は別々の物なるにより、句の仕立かはりたらば付て少も苦しかるべからず。たゞ句の仕立やうによる也。理不盡に付べからずと定がたし。

風　に野分・嵐・木枯一切の風の異名皆五句去也　誹には三句去也。松のひゞき・萩の聲・竹草のそよぐ・さはぐ・鳥のはぶくみた風に二句去也。

かざし　花・木草の枝などを折かざすをいふ。かんざしとは替るなり。かんざしとは髮にさす女の道具也。かざしには二句嫌べし。かざしの錦は踏哥に有事也、春にたつ也。衣類にはあらず。

かたへ　三種あり。あふの浦にかたへさしおほひ、とよめるは片枝也。かたへ凉き風とよめるは、二有物を分て一方をいふなり。かたへの人といふは、かたはらの人を云也。しかるを方の字にきらはずと無言に有、誤也　二句去べし。猶不審に思はるゝ人あらば、顯註密勘を見らるべき也。

方　に片付てもくるしからず。かたはらも嫌はず、此無言抄の說。あらめ也。片・方、文字は別なれども、よみも心もひとつ也　物の一對あるを分ては、かた一方といはずや。有無に付句は嫌べし。句躰によりて二句去成べし。方の字にきらはぬかたは、たとへば一片の煙・片時の間・板の物のかたいろなどいふは、方の字に心遠し。付てもくるしかるべからず。

かたより・かたわけ　片の字也。片の字に三句。方の字には付句嫌之。

かたはら　にかたしくなどの片といふ字、二句嫌也。以上無言。丸おもへら

く、書をあらはすは大事也。たゞ今此書にもあやまり多かるべし。後にはみゆる物なれ共、その作者になりては誤ともおぼえぬ物なり。相互の凡夫のしわざなれば、みる人そしり給べからず。このかたはらにかたしく二句としるされたる先條に、方の字に片字付てもくるしからず、かたはらもきらはずとかゝれ侍り。先後相違せり。袖をかたしくは片の字ならずや。さるほどに片の字と、傍の字と、方の字と少もきらはぬといふは、あらめなる說なり。

片敷　袖・男根・松がね、たにゝてもかたしくといふ詞は夜分也。ぬる・ふす、同意也。嫌はぬと無言にいだせり、信用すべからず。

かたへ　に方の字・傍の字、野邊・山邊の邊の字、みな二句去也。片字は付句嫌也。

がもじ　たが爲など云詞に、落葉が上などのがもじ、二句嫌べし。

歸る。返す　二句去也。たとへば雁のかへるに、田をかへす等の事也。

かたるといふ詞　一、此外にかたらふとは又あるべし。無言かくのごとし。新式にはなき事也。誹にはかたらふ一、物語一、友とかたる・平家かたるなど又一、以上三なり。佛語・古語・論語などの聲にいふは、字去にていくつも有也。かたる・かたらふに、聲によむ語の字は二句去べし。

かゝる。かくる。かけて　いひかへねども、誹には字去なり。

かな　發句の外にねがひかなとて、かもじを濁て今一句する也。句のとめならねばいくつも有也。連誹共に同じ。

難　にがて、面を嫌說わるし。かたきと〱がて〱かたきとがて、ともに皆三句去也。是等新式になき指合也。かやうのかろき文字を、折をきらひ面を嫌へば、連誹ともに仕にくきもの也。大かたけやけきものをば古人えり出して、一座に何句の物と顯しはべる。新式にもれたる文字共は、皆かろき字去の物と心得たるが能也。

かなしき　連に二句あれば、誹には三句すべし。悲歎・悲涙など聲によみても此三の內也。慈悲・悲田院などは此外成べし。

いかに。ひやゝかに　など二字つゞくは付句斗嫌が能也。にもじをつけず、ひやゝかといふに、いかばかり・いかほどなどいふかもじは少もくるしからず。

かもじ　うたがひのか、二句去也。それかあらぬか・雪か花かの類也。

かさね字　むら〱・數々などいふ詞、付句も折あひもきらはず、かやうの重点の詞、折をかへ句のたけをかへて二づゝ有也。

かへるさ　といふ詞、人倫の上にての事成べし。鳥・雲などにてにあはず。如此の分別かんよう也。以上無言。此條近代の連歌師の祕事がましく思ひていはれたるを、上人げにもと思ひてかけると見えたり。それは連歌に道のかへるさ・袖のかへるなど人のうへにのみ聞付て、異物のうへにはに、あはぬ詞とふと思ひよりて、初心の人にいひきかせたる事也。これ大なる僻案也。哥道のひろき詞のもてあつかひをしられざる故なり。なんぞ歸るといふ詞にさもじをそへたるとて、人のうへのみにもちゆべき。かへるさのさもじは能吟味して見られ候へ、さまと云下略也。鹿のかへるさま・雲、鳥の歸るさまといはんに、なにの科(とが)か有べき。さをしか

の鳴ているさの山のは共、月のいるさの山共よみ、雲鳥のとぶさ共よめるは、皆さまにあらずや。鳥なき山のかふもりとて、名人のなき世に上手の名をとりて、かやうのひが事をいはるれども、ひが事としるものなければ、それを正意と心得て、かやうの書物にまでゆへ〳〵しく書留て、後生をまどはす事淺ましく覺侍れば、去嫌の用に不レ立義ながら、今爰に改め侍る。これも又誤成べし。

賀茂祭　四月中酉日なり。

かものみあれ　同前。

風かほる　夏也。

甲斐の駒引　八月十七日也。穗坂の駒也

上野の駒引　八月廿八日、五十疋ひかるゝ也。

川の紅葉　などしても秋たるべし。冬になるべきといふはいかゞといへり。以上無言。丸が云、紅葉かげの水にうつる躰ならば秋成べし。うきてながるゝ躰ならば、落葉の事なれば冬に成べき也。只句躰に隨べし。

かつ〳〵かるゝ葛の葉　などいひても冬也。かつ落葉するには替るべし。

誹諧御傘（三）

夜

呼子鳥　古今の大事なれば、傳受せざる人はむさとせぬ事なりと、近代連歌師に制するげにや。誹諧には傳受せずとも、正躰をしらずとも、春の暮かたになく鳥也と心得てすべし。其子細は、むかし連哥師はこれを不レ憚すでに宗養は三十九歳にして死去あれば古今未レ傳の人也。獨吟にも、鳴てかへれば又よぶこ鳥、といふ句あり。その上和哥の題に、よぶこどり常に出せり。更に憚事にあらざる也。大事の春の景物を人にさせぬは、道をせばむる道理あり。呼子鳥　連哥に一座一句なれ共、春の季も大切なれば二句もすべし。但、世上の人大事に思ひ付たる鳥なれば、誹にも壹句にて還べし。

代　君が代壹、神代壹　誹諧には此外に、だいと聲によみて以上三句あり。だいの代と申は、天神七代・地神五代・君が代・古の代〻の御門の事也。君が代と御字とは折をかゆべし。世上の世間のせの字のよと連歌には五句去なれば、誹諧には三句去べし。せのよと申は、うき世・後の世・世をそむくなどゝ申世也能〻分別して去嫌給べし。又、代物・代官・手代・名代などは、かはるといふ讀にて、よといふ心なければ、だいのよにも世のよにも更に不レ嫌。神代・御代など聲にいひたる句には、たいの字に面を嫌べき歟。又、ちよよろづよといふ詞は千代萬代共かけば、だいの代也。ちよよろづ代と過ては千萬万歳共有べからず。古歌などに千世万世と世上のせの字をかき、からの文書などにも子孫の代〻をしるす、百世万世とかける事も侍れ共、なし出しにはだいの字のかたつよければ、去きらひにはちよよろづよは代のよに相定べし。古今の序のよは十つぎといへるも、眞名序には十代とかけり。又さやうにのみあるかと思へば、秦始皇二代めをば二世の太子とかき、晋王質七代めの孫にあふは七世の孫とかけるもあれば、だいとせと分明には分ちがたし。先達も此事むづかしさにやらん、くはしく書分ておかるゝ物をい

まだ見ず、しかりとて度々誹諧に出來るさしあひなれば、此度人の不審をはらし侍べし。若、聲に七世の孫などゝしたらん句をば、世の字の方へなすべし。よみによみてなゝよとあらば、だいのよに相定べし。三よ・七よ・十よ・百よ・千よ・万よ等の數字の付たるよをば、文書にはせのよを書たる例もあれ共、誹諧の去嫌には皆代のよになすべし。よの政は世の字也。よのつぎめ・よをつぐ・よのかはりめなどは代のよ也。牢人などのよに出る世の字也よき時よ・あしき時よにあふ事などゝは、時代とかけばだいのよ也。佛のよ・彌勒のよ、神代にかはりて、佛在世と申せば、世のよに成候。親のよ・師匠のよ・子のよ・弟子のよなどは、だいのよに成候。おさまれる世も、よを治るも、亂たるよも、よをみだすも、皆世のよになり候。昔のよ・いにしへのよは、せのよ也。むかし・いにしへのよゝの帝などは、だいのよ也。かやうの事いくらも有共、右の分やうを分別して去嫌給べき也。

世　たゞ一。是は平世のよと連哥師の申世也。たゞ世とも云なり。たとへば、よは春たれや・世にはやり物、誹諧なれば當世・々上などゝ中世なり。尺敎の世と申は、前の世・後の世・佛の世・ぜんせ・ごせ・佛在世等をいふ。述懐の世は、うき世・よをそむく・世をすつる等の事也。戀の世はかくるゝことなし。新式には平世の世一、述懐の世二、尺敎の世一、以上四を皆折をかへてする也。戀の世は一、いづれの折にてもうらにする也　以上五句の物也。誹諧にはいづれの世なり共、聲によみて加增して以上六也。皆面をかゆる也。此内戀のよは五の世に七句去也。もし平世のよを聲に讀て二するならば、やはらげて平世のよ一句も有べからず。述懐の世、聲に讀てするならば、やはらげて世といふ句へらすべし。尺敎の世も戀のよも皆同前也。よみと聲と出がちなれば、六句の外は有べからず　代のよに連哥に五句嫌なれば、誹諧には三句へだてゝすべし。世中は世間とも書故に、中といふ字に二句去といへり　世中のなかにちうといふ字をば、付句ばかり擇べき也。

よすて人　桑門と書によりて捨レ世に可レ嫌二同面一。但、可レ嫌二同折一歟と新式に有レ之。誹にはたゞ面を可レ嫌也　桑門と聲によまば、世を捨るに七句去べし。其時は捨と云字・人といふ字には少もきらふべからず。よすて人といふ時は世の字に面をきらひ、捨字・人の字に二句去也。是愚意に叶ぬ義ながら新式の字を守るものなり。桑門と聲によみても述懐也・人倫也。聲によむ時、述懐の世の字の數の外也。よすてびとゝよむ時は述懐の世の内成べし。愚意に不レ叶とは爰也。世をすて人も世すて人も同じ事なるに、桑門と別に文字あればとて、述懐のすつる世に面を可レ嫌かとのせらる。され共おぼつかなく思はれ候つるやらん、但、折を可レ嫌かとあり。然ば連にも面斗を嫌はわろしといふ心にて折をきらはるれば、誹にも此旨に准じて七句去とは書たれども、聲に讀、桑門は、すつる世に面を嫌ひ、よすて人と云時は折を嫌はるべき也。

よはひの三そぢ。四十　とは三十年・四十年と書也。又、年の字をかゝねどもみそぢ・よそぢと讀也。是に年の字は二去と連にいへり。

よはひ　に老、二句さり也。但、句躰によるべし云々。

夜さむ　秋也。夜さむき・寒き夜・よを寒み・夜のさむき、皆冬也。

蓬　さしもぐさ、させもともいふ、皆同草也。もぐさもおなじ物ながら、ほしたる蓬をもみて灸に用時の句躰ならば、植物になるべからず。さしもぐさ・させもが露などは植物也。蓬生はあれたる所をいへば植物ながら、居所に二句去也。無言抄に蓬生等の生の字、折を嫌て一座二句の物とせり。淺茅生・蓬生・葎生、此三種は皆あれたる所の義にて、しかもながき詞なれば、三句までは聞にくかるべし。芝生・園生・壬生・苧生・蒲生など生の字を、ふと讀て更に耳にもたゝぬ字なるを、一座二句といはるゝは曲なき歟。誹には折をかへ、蓬生・淺茅生・葎生の内出勝に二有て、其外の芝生・園生の類は出勝に又二有て、以上四の物と誹には定らるべし。蓬生の宿、植物也、居所也。蓬が杣、ひきゝ植物なり、山類にあらず。蓬が嶋、蓬萊也、山類也、水邊也。植物に二句也。蓬餅、うへ物に二句也。春也。三月三日に世にもてはやす故也。蓬團子、雜也。是も植物に二句去也。百韵に蓬とも蓬生共蓬が嶋共いひて二、其外に異名一、蓬壺・蓬萊など辭にいひて今一、以上四句有べし。皆折をかふる也。から蓬は別の草也。蓬といふ句には折を嫌、もぐさ・させも・蓬萊などは三句去べし。茵蔯と書也。

宵　雜也。夕時分にあらず、夜分也。夜の字に五句連にきらへば、誹には三句去べき義ながら二句嫌べき也。夜の字と〳〵三句也。よひは文字別にあり、こよひと宵とは折をきらふ。今夜共今宵とも書也。又、よひの字は新式に其沙汰なけれども、連に宵とこよひと一座二句の物とせり。誹にはよひ二、こよひ・こんや・今宵・前宵・昨宵などの内、出がちに今一有べし。しかれば以上三也。

夜の更る　初夜より五更迄の事也。後夜よりあくるまでは夜ふかきと云也。新式に夜更るは時分にあらずとかけり。是は夕時分・朝時分に不レ嫌といふ儀なるべし。

横川　水邊にあらず、名所なり。

齢　の三そぢ・四そぢ等に年の字、但、數の七十・八十は不レ可レ嫌レ之。これ新式のうち越をきらふ物の所に有文章也。それ新式は博學の名匠達の多くよりあひて年久敷穿鑿なされ、限なき連哥の指合を、かやうに一目に見ゆるやうにえらみをかれし故に、今其力をもつて此抄出なども骨おらず書出顯すもの也と、一段〳〵に感涙をながし侍る。此一ヶ條は龍のつまづきとや云べからん、又、愚意の不レ及にやあらん、更に合点仕がたし。三そぢ・四そぢといふには年の字を一句きらひ、みそ・よそといふ時は不レ嫌レ之といへり。ぢの字に年の文字あるかといろ〳〵尋れ共、年・稔・歳・季、是等のとしの字にも、ぢの聲無レ之。おそらくは古人の誤たるべし。つく〴〵と分別するに、古今集などの哥の詞書に四十賀・五十賀などゝあるを、よみくせによそぢの賀・いそぢの賀などゝ讀を、人の年の數をいふ時は四十年・五十年といふと心得て、後〻の人よめる哥連哥の懷帋などに、四十とせ・いそとせなどいふ詞に四十年・五十年と書習侍を、なに心なく人の齢の時は、よそぢ・いそぢといふ時も年の字をそゆる物と心得て、年の字を書加は僻事といふ心不レ付侍しと見えたり。それはよそとせ餘り・いそとせあ

まりなどゝいふ時こそ年の字をばかけ、よそぢ・いそぢの時は書べき義なしと、誰も今までおもひよられざると見えたり。人のよはひの四十・五十を、よそぢ・いそぢといふは文字の字也。たとへば人の八十八になるをば、米年といふがごとし。米の字は八十八と分てみれば、我年は米の字といふ心につかひ付たる詞也。そのごとく四十になる人は四十の文字になり、五十になる人は五十の文字になると云心也。然ばしの字をかくべきを、其心得がたかりしゆへに、ぢの字を先書誤れり。其證跡には万葉・古今・後撰等の古集、伊勢物語・源氏物語等にもいまだ尋ねば有かもしらねども、有まじきやうに思はれ侍る。是は古今の序に三十一字の文字を、みそもじあまり一もじと書るよりおこりて、やがて其集の賀の哥の言葉書に、四そぢの賀・七そぢの賀など年の字をから字有を、よその賀・七その賀とは聞にくきゆへに、よそぢの賀・七そぢの賀といふ名目は始れるを、人のよはひの時は必そぢと云と後人心得て、よそ・いそといふと、よそぢ・いそぢと云とかはりめ有と思へり。すでに此新式の時分にさへ不紀事なれば、天下の誤となれり。すでに往事をばとがめずと孔子もの給へば、古誤をばそのまゝ置も道なれども、又誤をたゞさゞれば道の害になる事をば、千歳以前の事なりとも改が能也。これらはあらためざれば、いはれぬ指合にあひて能句のならぬさまたげになれば、自今以後誹には年の字に嫌べからず。ぢの字も、じ文字に改て、文字の字に三句去べし。但、此丸が今按に非道と思はん人は制するに不及、博覧の人、丸が管見をあさましく思はるべけれども、道のためになるべきかと愚意の恥をしるもの也。

夜と夜と　三句去也。

よし野　非山類、吉野の奥も同之。

夜の明　に戸をあくる、付句斗嫌之。

（マヽ）曙にも同前。

夜を待月　夕時分にも夜分にもあらず。

夜の明　に月の残る、句躰にはよるべけれど、同意と心得て付べからず。

夜はといふ事　たゞ夜といふ事也。又、夜はんといふ事に用る句もあり。その時ははの字の讀やうかはる故に、定家も羽と云字をわきに付置給へり。常にははの字をわと讀也　連にはよは二あり、誹にはよは二の外、夜羽と戌とも、夜中・やはんとなりとも今一有也。

よとゝも　二種あり。一は常住の事也、世の字を書べし。一はよもすがらの事也。夜の字を書也。折をかへて一づゝ有べし。以上二なり。

よこ雲　夜分也。東にかぎらずと見えたり。月の行衛になどよめるもありと云ゝ。

吉野の國栖　人倫也。

よはひ　に老、二句嫌。但、句躰によるべし。鳥・木などの老には少もくるしからず。よはひに玉のを・命などもきらはず。

よそ　たゞ一、戀に一、誹には二、戀に一、以上三有也。

よそめ　に見る、二句さり也。目さますなどのめには、見るきらはず。

よもし　下知は二句嫌也。せよ・見よの類也。よなといふも同じ。

吉田まつり　四月中の子日也。

節折　神祇官、十二月晦日御贖物をた

てまつり、節折の命婦といふもの有、あらたへのこたへとて二度たてまつるにや、是は神代より始る神服の心にや。以上年年行事。

多

躰用は連歌のごとく可レ嫌歟　答云、誹諧には水邊・山類共に以躰用の沙汰あるべからず。

橘　たゞ一、夏也。立の字にも花の字にも一向きらはず。花橘とは盧橘とかけば、是にも花の字は嫌まじき儀ながら、花をほめてむかしのものなづけたれば、花橘と云時は花の字に二句嫌べし。惣別九種の柑類をなしなべ、橘ともはな橘とも哥道には申也。さくとか匂ひとかなくば夏にはなるべからず。其故は天智天皇の御哥に、橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜をけとましときはの木、共侍り。此道理は有ながら花を賞翫して橘とよび出ゆへに、咲・匂の詞そはでも皆夏になる也。連には一座壹句の物なれども、橘氏は又有べきかと後人さたせり。誹には橘とか花たちばなとか一過て、橘氏或は盧橘などゝ聲にいひて今一有べし。此外にだい〱・きこく・からたち・きんかん・雲州橘・久年母・蜜柑等、橘の事ながら花はいはず、其實を指て申せば夏にもならず、秋か冬かになりて別々のやうの物なれば、此内折をかへて橘二の外に今一句有べきか。連にさへ橘の外に橘氏をそゆる説あれば、誹には三句有べし。藥種の名の陳皮・橘皮・枳殻・枳實・青皮等植物にもならず、季をももたず、藥種の名になりて別段の物なれば、其沙汰に及まじき義ながら、此内にも橘皮一種は橘の字むづかしければ、右三句の内成べし。

旅の字　二、誹には三句有也。りよと聲に讀ても三句の内也。はたごとは旅籠と書共三句の外也。乍レ去旅の字におなじ面を嫌。神の御旅所、三句の内也。さりながら旅にはあらず、神祇也。此度はぬさもとりあへずなど、度の字いひかけたる旅の字は三句の外なれとも、旅といふ字の有面にはすべからず。りよと聲に讀たる句には七句さるべし。併、旅の字にいひかけぬこのたびは、正字度の字なれば付てもくるしからず。旅鳩といふも三句の内也。乍レ去たびにはあらず。但、可レ依二句躰一。此世・後世を旅といふ句は、たびにはならずといへ共一座三句の内也　旅の古郷、面八句の内にもくるしからず。別の古郷は面にせざる也。旅の句は三句去也。

玉の緒　二。壹つは戀たるべし。命のかへ詞なれば述懐になる也。誹には命ならぬ玉のを、折をかへ今一あり。箱・袋などの緒をほめていふ玉の緒、又、古哥にあふ事は玉のをばかりなど讀るは少の心也。又、玉のを柳といふは、糸柳をほめて云。又、女のうみつむぐ緒を、玉のをといふこともあり。是等は述懐にもあらず、命にもあらざる故此内を一、玉のを過て誹にはする也。是等は命には少もきらはず。虫の命には勿論の事也。玉の緒といふ詞は折を替也。まとの玉のをと命とは同じ折にならず。命と聲に讀ても同前。壽福・壽量品・福祿壽などといふ句、命と玉のをにおなじ面を嫌也。壽の字をばいのちながしと讀ゆへなり。命ならぬ玉の緒には付てもくるしからず。玉の緒は玉しゐの緒といふ事なれば、たましゐ・

魂魄には面を嫌也。玉石の玉には二句去也。又、いのちならぬ玉のをには、たましゐ二句去也。

瀧

壹、名所に一、瀧津瀬一、花の瀧・涙の瀧は此外なるべし。誹諧には瀑布と今一有。瀧に折を嫌也。にせ物の瀧は瀑布に面斗を嫌也。瀑布は瀧四の内也 唐の詩には山から落る瀧には、瀧の字をばからず、瀑布と書也。日本には誤て瀧の字を書也。此字の心は水の長く流るゝ躰、瀧の地上にはいありくがどくなるを書と見えたり。さるによりて山より落るたきに此字を一向用るは正義にあらず。たきの正字は瀑布と書がよけれ共、いにしへより瀧の字を此國にかきつけならひ侍れば、結句瀑布と云字をたきとは和訓せざる也。さるによりて瀧津瀬といへば川の瀨になるゆへに、上には淵瀨なき故に山類にならざる也。惣別瀧は山類也、水邊也。瀧津とも云也。但、瀧津瀨と瀨の字をそふれば山類をのがるゝ也。瀧川と川瀧も山類にあらず。花の瀧は落花を云。但、依二句躰一水邊・山類也。新式に南方に嫌と云〻。涙の瀧、戀也、水邊にあらず。

瀧に水のたぎる、同意也。付べからず。みなぎるは不レ苦。

玉の字　似物・襃美の詞、此内也。

新式一座四句物の文言也。爰に玉とさすは、或は夜光の玉、或は干珠・滿珠等の寶の玉の事也。似物の玉とは露の玉・涙の玉・あられの玉の類、襃美の玉とは玉松・玉柳・玉椿などの類也。是皆四の内也。誹諧には珠玉・金玉・〻床・寶珠など〻聲によみて、何句あり共五句の中と心得べし。無言抄にあら玉の年は玉にあらず、あらたまるといふ事なりと記せり。大なる誤なり。みがゝぬ玉をあら玉といふ、其玉をば砥にてとぐ故に年の枕詞にしそめし也。枕詞といへどもをのづからあらたまる心有ゆへ、後〻はあら玉の春ともつゞけ、又、年共、春ともつゞけずして、あら玉とばかり云て春の季をもち、年のかへ詞に成也。貫之の哥にこれあり。たとへばあし引とばかりいひて山になる類也。乍レ去根本を尋れば正眞の玉なり、あらたむるといふはそへたる儀也。然ばあら玉も五の玉の内と心得べき也。魂は玉に二句去也。我玉のをといへば玉に三句。木玉・舟玉・石のすだまなどは、玉の字をかりて書たれば、たましゐの事なれ共、これらの類も玉の字に三句去べし。玉のを同前。此玉のをといふに、しな〴〵かはりめあり。命を玉のをと云は、たましゐのにてつなぎたるやうに長きも有、みじかきもあり、きるゝも有によりて命のかへ詞也。又、手箱・卷物などに付たる紐をも云也。是は襃美の玉也。思ひの玉のをは數珠のを也。これは水精なればまことの玉なり。玉のを柳は襃美の玉也。又、古哥にあふ事は玉のをばかり讀るは、たゞしばしの間をいふ。しかれば面へはあらはれねども、命の玉のをゝたとへていふ義なれば玉の字にはあらず。人間の命はみじかき物なれば、少の間のたとへに云也。壽命に人の玉のをば連歌に折をきらへば、誹諧には面を嫌也。虫の命には命の玉のを二句嫌と無言抄にあれ共、命は虫けらも人間同じ事なれば、命の玉のをは面を嫌べし。襃美の玉のを・數珠の玉のをなどは命に付てもくるしからず。命とは各別の物也。かやうの差別、師傳を

受ざる人はあやまる事也。玉かづら、數種あり。女をさしていふ。又、女の髪をもいふ。又、髮すくなき女のおほひかつらをいふ。又、正眞の玉を髮にかざりたるをも云。玉のかんざしと同じ。又、うつくしき草のかつらをもいふ。句躰によつて分別有べし。いづれも褒美のの玉也。玉がしはゝ石也、植物にあらず。もにうへもるゝなどゝすれば水邊也。又、柏木をほめて玉がしはといはゞ植物也。共に玉の內也。玉の井・玉の階・玉殿・玉の床・玉の戸・玉の輿・玉簾・玉のさかづき・玉の軸・玉手箱、これらは褒美の玉ながら、まことの玉にてかざりたる事を申せば眞寶の玉也。玉はゝき、褒美の玉也。眼玉・筋の玉、似物の玉也。佛像の玉眼などは眞の玉也。貝の玉、眞珠とてまことの玉也。如意珠・寶珠など文字かはりたれ共五の玉の內也。衣の玉、たとへながら似物にも褒美にもあらず、まことの玉に用也。たまさか・たま〳〵・給る等の詞を、玉の透句(秀)にしたらば珠玉に二句嫌べき也。句躰によりて五の玉の內にも成べし。其座をさばく人能ゝ吟味あるべし。玉躰・玉依姫・玉藻前、かやうの人の名褒美也　玉屋・玉すり、是等は眞の玉也　玉人、褒美の玉也。玉ゆら　玲瓏とかけばまとの玉也。やうらくは玉といはれ共玉なれば、眞の玉に七句去也、玉五の外也。たましゐ・木玉などに付てもくるしからず。玉子、かいことといふ字を玉子ともよめども似物の玉の內也。ふり〳〵の玉・藍玉・こむにやくの玉・うしのたま・藥玉・匂ひの玉、皆似物なり。年玉もゆらしな玉、似物也。しづたまき、玉の字にあらず、手卷と書也。玉章・褒美也。玉兎、月の名也、褒美也。玉だすき、褒美、玉の帶、眞の玉也。

田の庵　居所に二句也。田をもる時ばかり作てをる庵なれば秋になる也。植物にも二句也。門田は居所に三句也。門の前の田也。苗代垣・田畠の垣は居所に二句なり。

田の字　色の字・穗の字・鳴子・ひたもる・かゞし・そうづ・鹿をゝふなどの詞入ば、皆植物に二句去て秋也。たゞ田に鹿のなく、又は狩をする・鳫がねなど結ても植物にはならず。田にくろ・あぜなどは付べからず、同意に成也。田の字に苗代・そうづ・早苗・稻・畔・畦・畑・はたけ二句去也。たなつ物に田の字きらはず。田鶴にもきらはず。但、鶴の字をたづとよめ共、田のつる共かけば、付句ははゞかるべきなり。たなつものは、田の字各別也。田をかへす、立春也。田草とる、夏也。霜にかるゝも秋也。

田の字　生田・田上・浮田の杜等の類、田の字に三句さり也。それも色付・うふる・かるなどゝいはゞ、秋の季をも持、田の字に五句去べし。

たのむの鳫　田の面の鳫、又、頼の狩と兩說あれども、田の字には五句去也。生田・立田等の名も、田の字は皆連に五句去ば、誹諧に三句去べし。たゞの田は連哥に七句なれば、誹諧には五句去也。

立田　に立の字、二句嫌と無言にのせられたれども、付てもくるしからず。其いはれは昔此所へ龍の落たる故に龍田と申なれば、立の字のこゝろはいさゝかもなし。哥書にかんな書とて、立といふよみをかりて、なに心なく書付たるを物しら

ぬ後人、立の字を正字と心得てきらふとはいふなるべし。むさとしたる説也。生類の隨の字には折を嫌べき也。

種蒔 植物に二句也、春也。いねの種の事也。粟・黍・麥・大豆の類の種まくは、農人に尋て其季を定べし。なにの種と草の名あらば、眞の植物になる也。

竹 連に七句去なれば、誹に五句去也、草木に二句也、さゝ・しのに三句去也、ちいろ有かけといふも、竹の事なれば五句去也。

竹 にすゝ竹、三句嫌と無言に有、誤也。誹には五句、但、すゝとばかりあらば二句去べし。

竹の宮 神祇也、名所也。植物にあらず。竹の字にも嫌べからず。齊宮と書也。但、彼所に竹の有やうに讀たる哥あれば、竹の字には依二句躰一二句さるべし。

竹の林 竹林精舍は天竺の名所也。唐の七賢が籠し竹林寺も名所也。共に竹の有所なれば竹に五句去也。

竹田の里　竹川 等、連に五句とあれば誹には二句去也。植物に嫌はず。但、依二句躰一て植物にもなり、五句嫌べき也。

竹簀子 竹のあみ戸・竹はゝき・さゝく竹等如レ此かれたる竹は、竹の字には五句嫌へ共植ものにあらず。竹垣は植竹を其まゝゆひ立たるとあれば植物也。

竹 に糸竹・笛竹、五句去也。植物にあらず。但、笛竹といふ植物の竹あり、句躰にて差別すべし。

竹の字 ちくと聲によみても竹に五句去也。

誰がれ に夕の字、うち越を嫌ふ。朝には不レ嫌。此新式の詞をおもへば、たそがれ、まとの夕時分にては無レ之歟。然ば暮の字にもうち越たるべし。夕時分と朝時分と付てはくるしからざれども、一句隔ては嫌習なるにより、まとの夕時分にあらざる旨をあらはさん爲に、朝には不レ嫌レ之と新式に出せる歟、能〻分別すべし。

たそがれ に誰の字、二句と無言抄に見えたり。是又心得られず。たそがれといふは黃昏、人の顏形分明ならざる時をなづけたるもの也。誰といふ字正字也。其故にあれはたれ時共つかふ詞也。さあらばあれはたれ時といふ句をも誰と云字に二句嫌べき歟、近頃無理なる嫌やう也。たゞ當流にはたれの字に三句嫌也。問云、たそがれ、まとの夕時分にあらずといふ事如何　答云、一切のことに輕重あり。たそがれ、晩景の人顏見えぬ比の名なれども、其日〳〵の晩に反て、あきらかにくもらぬ晩もあり、又、人の眼によりて、いかに暮ても人皃をよく見分るものもあり、又さまでくれはてねども、曇る日などは、はやく人まどひをする事もあれば、晩景の事ながら、或は入日・夕月・附日・入相・薄暮・黃昏・西の刻・夕部・夕暮などゝ落着して、つよき夕時分にはあらず。たゞうそくらき時を、ふといひそめたる詞なれば、夕時分に治定せざる詞かと存なり。されば末代の初心思ひ迷べければ、新式に朝には不レ嫌レ之と釋せるもの也。此段筆にものべがたし、たゞ以心可レ有二了簡一。もしたそがれ、まとの夕時分ならば、夕の字・暮の字に三句去べきを、打越を嫌所に載たるをもつて分別あるべし。

たそがれ に夕顏の夕の字付てはいかゞと無言抄に侍り。大成誤也、少も不レ

苦、夕立同前。

たそがれ　人倫にあらずといへり。人倫にうち越を嫌べし。

たれ松虫　などいふ詞、戀にならず。なれもまつてふむしなどいはゞ戀也。松の字、連には七句、誹には五句。かやうに人を待といひかけたる句は三句去也。うへものにはならず。

たどる　に尋ぬる、二句去也。但、道などたどるは尋心也。思ひにたどる、學びにたどるなどには尋心なければ嫌べからずといへども、差別六ヶ敷故、近代はうち越をゝしなべて嫌になれり。上手の同意にならぬやうにこしらへて出す句有べし、少もとがむべからず。其故はよく此詞を吟味すれば、尋とは各別のもの也。たど〳〵しと申も、たどろ〳〵と云も、たどると同じ詞也。道にてもあれ、物の義理にてもあれ、少おぼつかなき時、さきへすゝみかぬる心まよひの躰をたどるといへば、まどふ・まよふなどにこそは付句をも嫌べけれ。尋といふはよく知たる所へとふも尋といひ、又忘れたろ事を人に問をも尋と云。むかひにあひてなくていふ詞にあらず。たどるは、我心ひとつにあやしくおもふ心なれば、付てもくるしからぬ義ながら、古人新式に打越を嫌べきものゝ所に出したがら、但可レ依レ句とあれば其文を不レ改、誹には嫌ときらはぬと差別有べし。花にても里にても道にても讀物にても、尋侘たるといふ句にはたどるに嫌べし。たゞ去年みし花を又尋ぬ、久しくとはぬ宿・里を尋るといふ句には、更に嫌べからず。道にても讀ものにても、おぼつかなき事を尋わびたる句、こゝろならずば尋といふばかりに、是非なくたどると云詞可レ嫌といふ定は不レ用レ之。

玉章　詞、二句去也とあれ共少もいはれぬ義なれば、誹には付てもくるしからず。新式にも可レ嫌二打越一物の所に、玉章に詞・依二句躰一不レ憚レ之と侍り。

垂氷　水邊にあらず、雫の氷たる也、ひのためし・氷室などに面を嫌也。

薪　薪の字有ゆへに木に二句也。木をこるとよむ時も二句也。燒の字には面をきらひ、やくには五句去也。非二植物一、非二山類一、無言抄に薪に空だき、五句嫌とあり。しからば誹には三句去べき歟。丸おもへらく、燒の字は火の事ならではつかはぬもじ也。さあれば火をたくといふ句・一座に一句、しほなどやくといひて又一句、其外にはたくかなといふ句皆折をかへて有べきに、薪にたくが五句とあるはおぼつかなし。たゞ始の說のごとく面を嫌べき歟。それも燒香など讃に讀句ならば、三句去にても宜かるべきか。

たく火　夜分にあらず、篝の火にたくの字を入れば夜分をのがるゝ也。又、たくといふ字なけれ共莽火・もしほび等はたくびなるにより、夜分にならずといへり。

立田姫　秋也、非二神祇一、是を名所に成と、近代定て無言抄などにも載られたり。名神非二名所一の說の誤より出たり。不レ可レ用。さほ姫とおなじく名所にはあらざる也　只秋の色を染いだす造化の神の名也。天下の烁をつかさどるもの也　又、万葉には春にもよめり。されば句躰に依て春にも成べし。連に一句の物也。尤物なれば誹にも二句は用がたし。別の姫は今二あり

鷹　大鷹がりは冬也。たか狩とばかりも

鷹とばかりも皆冬也　小鷹は秋也　小鷹とは、はい鷹・つみ・悦哉・くゝさし・はこのり等をいふ也。皆秋也。朝鷹がりは春也。かりばの事、とさけび・小田のかり・つめぬ・すだつ鳥・をしへ草・おゝ草・かり杖・せこなは、如レ此のかり詞皆冬也。鷹のとやごめは夏也。とや出しは秋なり。

鷹に狩　付句不レ嫌レ之。但、聞すへ鳥・はのすこのり共よめり、小鷹の事也。つかれの鳥などはきらふ。

民のかまど　居所に不レ嫌レ之。

龍　非二生類一。千句にさへ一の物なれば、誹諧にても二はあるまじき義ながら、誹には世俗の尤事を事に用にたつる事なれば、折をかへて今一すべし。其今一ある龍に差別あり。龍宮・龍王・龍女・龍虎・天龍・龍頭鷁首等の類は、誹によみても龍の外にすべからず。誹に讀てすべき事は、龍脳・龍膽・龍骨・龍樹菩薩・龍華・龍馬・龍眼肉、天子の龍顔・龍骨車、是等はたつ一の外に有べし。又、讀によみても、ひよみのたつ・方角のたつみ、人の名のおたつ、名所の辰の市・龍の口などの内はくるしからず。作レ去誹によみたる事一出たらば、此讀によみたるたつも有べからず。とにかくにもたつは一座二句と知るべし。但、龍は子細有て水邊にもあらざる也。但、龍宮は水邊也。問云、千句にさへたゞ一句ある龍を、誹によみても百韵に二あるとは如何。答云、千句にたゞ一句有子細は別の事に非ず。連歌は和歌をみじかくなしたるばかりにて、哥とおなじ道なればやさしき事を好て、少も耳に立、龍女・鬼・虎などをば百韵にはせぬ也。そのやさしき哥・連歌はさる事にて、狂哥・誹諧にはいやしくこはぐしけれ共、たゞ闇よりおかしく成て、人のゐんきん・休屈を忘れ、ざれ・悦事を專にする道なれば、連歌にきらふ物をば悉とり出し、一座にいくらもすべき道理ながら、それもあまりおほくは人の耳おどろかしがたし。おどろかさねばおかしからず。其うへ千句に一句のものと、あまねく人の存たる物なれば、たゞ二とは定也。此味をば座敷にかまはぬ人は合点參まじき歟。

七夕　牽牛・織女なとに月日二句去なり。

七夕　夜分に三句嫌べし。あまの川のあふせ・年の渡りなども、天象に二句嫌かといへり。七夕に天の川、三句嫌也。紅葉橋・鵲の橋・願糸の類折を嫌也。

七夕　連に一句なれば、誹には七夕と誹に讀て今一有べし。これ二あらば、ひこぼし・牛引ぼしのたぐひもはや有べからず。

七夕の衣　衣類にあらずといへども、衣の字には五句去也。

田蓑の嶋　山類にあらず、水邊也　田には五句去也。みのには面を嫌、衣類にも降物にも不レ嫌。

嵩　誹に三あり、一は名所たるべし。

谷　三あり、此内一は名所たるべし。

高野山　弘法以前よりの名なれば、尺教にあらず。高野聖・高野へはしる・高野かみそりなど云は尺教也。かみそりといふ斗は尺教にあらず。高野将・高野墨・高野笠などは尺教にあらず。

高根　岩根・垣根など五句、誹には三句去也。高根、連に一あれば誹には二有べし。但、其内一は名所たるべき也。丸おもへらく、高根・富士の根・つくばね等のねは木のねにあらず、みねといふ上略の

詞也。よみをかりて根の字をかき付たるにより正字と思へり。問云、草木のねはしたにあるを、山の根をうへに有やうに思ふは尤僻事也。然にみねといふ詞のをこりは、いかやうなる義ぞや。答云、峯は高により下にある山のねを見るといふ事也。しかれば峯にこそかきね・岩ねをも嫌べけれ、高根・富士のねなどを、草木の根に嫌事は大なる謬也。根本は山のねもとを知といふ事に付たれ共、峯と一轉して來たるを、又上略して高き峯をたかねと云とて、山の峯をねといふとおもふは、書付たる文字を見て其道理をしらぬ哥人、さしあひを定る時、根の字かと思ひし故也。此理明なれ共二三百年以來わきまへずして嫌付たれば、我等が云とてげにもと思ふ人有べからざるまゝ、其分にしてをき侍る。さやうの事哥書に多侍り。もろ／＼の道にも此類あるべしと思ひやられ侍る。淺ましき事也。

高砂の松　山類也、名所ばかり也。山類にあらずといふ説あしゝ。無言如ㇾ此。高砂といふは山の異名也。たれをかも知人にせん高砂の松もむかしの、と讀し哥などは山類也。又、古今序に住吉・高砂の松も相生のやう（缺文）におぼゆとあり。住吉の對に書たれば播州高砂の松也。しかるに播磨高砂の浦には山なし。さるによりて浦の字・波の字など水邊の句躰なれば、名所ばかりになりて山類にならず、水邊の句躰ならず。たゞ高砂の松とばかりいへる句を、古今の序を證據にして山類にあらずといふは惡説也。とかく句躰による也。よく／＼了見有べし。

谷の戸　戸の字に面を嫌。戸五の內也、山類也、非ニ居所一。但、依ニ句躰一居所に二句去也。

袂　に手、二句嫌べし。袖にはきらはず、袖に衣手はきらふ也、付べからず。

たへにたえ　付ても不ㇾ苦。絕の字はちゞみえをかき、堪の字はよこへをかく也。

立　にさきだつ、二句嫌べし。たゝずむも同前也。無言抄如ㇾ此。これは文書に、先の一字をさきだつとよませたればかくいへる歟。それは文書の法にてさやうに点を付れ共、所によりての事也。押たてゝさきだつとよむ字にはあらず。されば誹には立の字にさきだつは三句去也。たゝずむは二句去也。たゝずむといふ字別に有故也。彳、此字也。

たゞの字　二句去也。かやうの文字は字去にする法なるを、此たゞの字ばかりを二句去といふは、是は無ニ正躰一詞の字也。唯・但・徒・祇（祗）、是等の文字を皆たゞとよみて、てにをはのやうなる言葉なれば字去にはせぬ也。惣別字去とは連に五句、誹は三句去を云。字去とは同字を去事也。

たより　連に二あり、誹には三あり。びんぎ聲にいひて此外にあり。びんとたよりと折か面を嫌べし。たとへば、松をたよりに住ひとつ庵　などゝいふ句には、旅のびんぎ・便風の類字去成べし。かぜのたよりも、たまさかになるなどゝいふ句には、便宜等の聲によむも折を嫌也。

たつぎ　きの字を濁也。たよりと同詞也。字も同じ便の字也。たよりはけやけき詞なれば、たより三の內に一句有也。聲に讀時のびんの字とのきらひやう先に同じ。

たつき　木もじを淸也　立木と書也。そ

ばのたつ木にゐる鳩とよめるも、古今の遠近のたつきもしらぬと讀るもこれ也。然を顯昭・定家も便字を顯注密勘に書給ふ。いぶかしくこそ侍れ。西行はそばの立木とよめり。此遠近の哥を本哥とせらるゝと見えたり。斷木の説もちいず、猶口傳に有之。立木は植もの也。連誹共に一座に一句あるべし。折をかへて、たつをたまきと又有べし。たより・たつき・便の字などは付てもくるしからず。

たのむといふ詞　五あり。此内戀の句二三句有べし。

玉まく葛　夏也。

誹諧御傘（四）

禮

例ならぬに例にたがふ　煩の事也。辟によむ詞ながら連にもする也。俳誹言にも成也。連に一あれば、違例・不例などゝいひかへて二有べき歟。病・煩などにはおなじ面を可嫌也。傷寒・中風など申病の名には三句去べし。

れもじ　しれ・とれ・かくれなどの下知の時は二句去也。

禮　二有べし。らいと又一有べし。禮拜・慇禮などゝ二あらば、れいと一有べし。れい・らい、いひかへ折をかへ以上三あり。

れいの音　尺教也。すゞ虫などのすゞの字には折を嫌也。すゞか山・五十鈴川、又、風鈴、色々によみかへても折に一づゝ有べし。

れんげ　夏也、水邊也、猶、はちすの所に載侍る。

連哥師　人倫也。連哥、人倫にあらず。

曆　こよみと連に一あれば今一辟によみて以上二有也。年号の名も二の内なり。

療治　療養、出がちに一あるなり。

料帋　かみと折をかふべし。杉原・鳥の子などの帋の名には五句去也。

獵師　人倫也、かり人也、多にはあらず。獵師とあらば獵船とも有べからず。生類に打越を嫌也。

歴々　といふ詞、たゞ一句有なり。

靈昭女　人倫也、尺教也。たゞし、悟たるといふにてこそあれ、尺教にはなるべからざる歟。

曾

空　折に一づゝなり。空は半天と書故に裏に空つ、そらど・そらめなどの間に一、連にはかやうにかはりめを立て以上六あり。誹にはくうの字・虚の字いくらもまじへて、文字のかはりめを穿鑿せず、出がちに空の字以上七ある也。そらに中空、誹には七句去也。そらに久方・雲井・天の字など二句去也。中空といふ折ばかりは連に嫌付たる事なれば、誹に七句とはい

ふなり。空海・空也等の人の名は空にはあらず、むなしきといふ心也。そらにむなしき、付てもくるしからず。そらだのめなどのやうなる空はたゞ一有。誹にはさやうの差別を存れば、むづかしくなるにより、そらといふ詞なれば皆面をかへて七有と知べし。

外面　居所也。誹には二有、そとの字は昔よりさたなし。内の字・中の字の類なれば字去なるべき歟。外山・御簾のとなども、そとゝいふ上略の同字なれば三句去べし。ほかは吟かはれば二句去べし。聲に讀ても同前也。面の字は連に面を嫌へば、誹には七句去べし。それも、めんと聲に讀ても同じ事也。

園　植物に二句、園生もおなじ事也。何も居所にあらず。連哥には一座二句あれば、誹には茶苑・神泉苑・祇園など、聲に讀て以上三句有べし。聲によむ句二句あらば、和に讀て一句有べし。

袖袂　衣手などの露・霜・雨水などにぬるゝといふに、泪きらふべからず。依レ句躰レ袖のぬるゝ・袖の露などは泪に二句去也。

袖の雨　涙の事也、戀也。泪の字には二句也、ふり物にも二句也。但又、まとの雨にひぢ笠・袖笠などいふ事もあれば、涙にも不レ嫌、戀にもあらず、降物也。句躰をよく聞分給ふべし。

袖の香　戀也。たゞ香などは依二句躰一戀にあらず。せうかうと聲によむ句は不レ及レ申、只香をたく句躰ならば戀にあらず。

袖の露　是も涙の事也。涙の字に二句去べし、戀也、ふり物に二句也、秌也。涙心ならで野山の露袖にをく句躰ならば、降物に二句、涙の字には付ても不レ苦。秌也。

袖ゆく水　水邊にあらず。泪に二句去也。

袖と袖　三句去也。

杣木　山類也、植物也。杣人は木を伐賤をいふ、山類にあらず。杣とは材木になる木也。植物たるまじきやうの義たがら、きらざる前の生木をもいへば、うへ物になるなり。

其曉　夜分にあらず。彌勒の出世の時をいふ、尺教なり。

岨　連に二あれば、誹には三あり。

そうづ　田をもる物也、秌也、植物に二句嫌、人倫にあらず。山田もるそうづの身こそ悲しけれ、と云古今の哥をよく相傳なき人は、かゞしをそうづといふと思へり。桜にて水を田にいるゝ物なり、そうは、そゆる也、づは、水なり。大事の秘説なれ共爰にしるす。水邊になる也　それを玄賓僧都のわが身になぞらへて讀給ひし也。又、僧官の僧都とは各別の事なり。付てもくるしからず。乍レ去出家の僧都によそへて、田をもるやうにしたてたる句ならば、もはやまとの僧都とは有べからず。

その字　てにをはのその字、濁る時は二句嫌也。はがてしの類、濁る時は皆二句去也。

そふ・そゆる　皆三句去也。

聳物　連に三句なれば、誹には二句去なり。松の煙・竹の烟・水のけぶりなどは、連に聳物と打越を嫌ふ。差別有レ之と

いへ共誹には、連に三句の物をば二句嫌故に、二句さり・三句去のかはりめこれなし。おもきそびき物も、かろき聳物も嫌やう同前也。

津

躑躅　木也。連歌に一座一句の物なれば、誹諧には二句有べし。但、今一句は折をかへて、てきちよくとすべし。其外につじがはな又有べし。つじが花もつゝじが花といふことを中略したる名なれども、あかきかたびらの名に成たれば春の季にならず。かたびらにひかれて夏の句に成なり。されどもてきちよくには折をかふべし。つじが花、植物にきらはず、花の字には三句去也。かたびらの名なれば衣類に成也。

鶴　連歌につるとたづとたゞ二句なれば誹諧には此外二、玄鶴などゝ聲讀にて以上三句。折をかへて有べし。諸鳥の巣は春、水鳥の巣は夏なれど、鶴の巣は雜也。あるひはつるが岡、或はつるくひの瓢簟・(簞)或は人の名の鶴なども三句の内なり。若又、弓のつる・つるなべ・つるべ等の別のものを、翅・鳴・聲などゝ入て鶴になしてするとも、みな三句の内なるべし。

鶴の林　ならぶ林ともいふ。いづれ成共一座一句出がちに有也。但、日本の双林寺の句躰ならば、鶴の林と折をかへて又有べし。これは山類也。名所也。天竺の鶴の林・ならぶ林の句躰は、山類にも植物にもならざるよし、新式目に有レ之。委、わしのみねの下に註す。鶴と云字には折を去べし、生類にあらず。林といふ字にも折を去べしと云々。

月と月　五句去也。聲に讀てもおなじ。但、月次の月には三句去べし。

月次の月　とは水月(水無)・文月・はつき・長月・菊月・神無月・霜月等なり。夜分にあらず。天象には打越を嫌べき也　無言抄云、神無月に有明付てはすべしなどいふ說あしゝ、五句嫌といへり。丸云、此神無月といへるは、月次の月といふとなり。月次の月の名多内に、ふと神無月をひとつ取出せる文言、先きこえず。月次の月に有明五句といへる事、一切心得がたし。上人の思ひまどひ成べし　月次の月に有明、天象なれば打越をば嫌べし。日・星はうち越をばきらへ共、付てはくるしからず。有明は月の名なればうち越をも嫌ひ、付事もならず。たゞ二句去にして置べし。

月次の月　に、きさらぎ・やよひ・梢の秌・しはすなどの月の異名、如二連歌一二句去也。此異名も年月・〻日などには嫌はず。又、五月雨は月の字あれ共　月の字に少も不レ嫌。

月　に彌生・衣更着の類付ても不レ苦。月に月次の月の字、連に五句なれば、誹には三句去べし。

月に日次の日　日に月次の月、打越を嫌べし。

月・日・星　如レ此光物三句、誹には二句づゝ嫌べし。

月の雪・月の霜　夏の詞入ては不レ可二降物一、是新式の文言也。新式の可二分別一物のうちに、はなの波・花の瀧等の兩方へ嫌類にあげて置ながら、此月の霜・雪ばかりに、夏の季ならば降物にあらずと筆を加らるゝに付て知ぬ。秌にても同じ事

也。夏・秌は雪のふらぬときなれば、月の影の雪に似たるといふばかりにて、降物にならずと云へり。しからば夏・秌の句にてあらずば、たとひ月の影の霜・雪にまがひたる句なり共、冬に成て又ふり物に二句嫌ふべき也。夏・秌の句ならば降物には不レ嫌。霜の字には三句、雪の字には七句。但、月の移たるまとの雪ならば、此沙汰に不レ及、降物也。又、霜は秋も降物なれば、月の霜は雪にかはりて、句躰により秌の句なれば降物に成也。月の霜とばかりは冬也。

月の秋　夜るなり。花の春とし、植物になるとおなじ。

けふの月　夜をまつ月。入相にむすぶ月。日に結ぶ月。三日月の出る、夕月夜等、皆夜分にあらず。

月の宿　露・水などに結ばねば、月をみる宿の事也、居所也。

月をあるじ　非二人倫一、月のあるじは人倫なり。

月の友　人倫也。但、句躰によるべし。月を友、人倫にあらず。

月　を玉の兎とも玉兎共誹には仕ゆ。秌也。まとの月也。

月影とつゞきたる詞　おなじ折にはわろし。折をかへては今一もすべし。されども五もじなどにつゞけては目に立ゆ。置所を替てすべし。月に影を結たる句、折をかへ今一句有べし。

月のでしほ　塩に七句去べし。句によつて水邊也。月のみち・かけと、塩の滿・干と同じ事なれば、月の出る時、さす塩を月のでしほと云也。是水邊の句也。又、月の出さまを、でしほといふ事有。それは入の字を書故に、連歌には其時塩に面を嫌也。まとの出塩なれば折を嫌ゆへ、誹諧には其時は面を嫌べし。又、月ならで、舞のてしほ・太夫の出しほなどは、塩の字に二句嫌べし。曾水邊にきらはず。

月草　露草の事也。影・光など添て仕立たる句たれば、天象になりてその面の月を持ゆへ、折面をかへても月の字に五句嫌也。たゞ草の名ならば三句去成べし。

月の桂の花　たゞ桂の花としても秋也。以上無言。これ新式に見えぬ事也。月の桂の事は聖教より出、又唐の詩文にも有レ之。春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲らん、と貫之のよめるうへは、春にこそすべけれ。一切の實のなる木の花は春花の咲也。秋花さきては次第不レ叶。詩には月を桂の一字にてもたせ、光を花と作共見えたれど、桂の實とも種とも有と見えたり。皆寓言めきたる義ながら、桂の字にたよりて詩人の諺にするを、哥仙の詠哥をすてをき、詩の法を哥道に用む事はいかゞと思はれ侍る。他の事はともあれ、月の桂ばかりは、花をば貫之の哥を證哥にし、春とし、桂は實の三五の秌と詩にも侍れば、實をば秌に定度もの也。但、秌きても月の桂のみやはなる光を花とおらすばかりに、と云哥もあれば、所レ好に隨べし。

月　に、をばすて・さらしな付べからず。花に吉野、紅葉に立田の類也。

月の桂の花紅葉　うへものならず。乍レ去植もの二句つゞきたる三句めには、くるしからずといへどもすべからず。植物にあらざるゆへ、一句へだゝらば憚べからず。

月にいのる　戀也、神祇にあらず。

月のさやけき　秋也。月さえては冬也。

月見る　に、又月をながむるなどいふ句は、同折もくるしからず。

月のぼる　ニ、舟のぼる、連哥には五句とあり、誹には三句去べし。

月の氷　冬也。たゞさやかなる事也。水邊にあらず。但、氷に移たる月の句躰ならば可レ爲二水邊一。

津の國のなにはの思はず　とは名聞に不レ思と云事なり。津の國のなにはの事とは、何やかやと云事也。然ば名所に二句去也。難波津過て今一、連にもあれば誹には勿論也。誹にはなんばの京など聲に讀て今一も有べし。皆折をかふる也。但、おなじやうに、なには〱とよむには、誹なりとも三句までは有べからず。三句の内一は聲なるべし。

つ文字　津國・大津・難波津の類、字去成べし。天津・興津等はきらはぬといふ說わろし、同字也。いづれも三句づゝ去べし。

爪木　薪の事也。植物にあらず、山類にもあらず。薪と折をきらひ、木の字には三句。この字に二句。妻といふ字をかけ共不レ正字故、妻に嫌べからず。乍レ去物のはしをつまといふつま木も、木のはし、はづれの火に燒よきをいふなれば、少心かよふ故に妻といふ字をかくなれば、二句去べき也　又、爪と云字をもかけば、爪といふ字にも二句去也。根本つまむ木といふ事を、なづけてつま木といふ。然ばつまむと云詞には面を嫌べきなり。但、此道理は有ながら、うち聞、つまむ心なし。殊にいろ〱に書付たる文字あれば、つまむの字にも二句也。

蔦蘿　株也。連に一あれば、誹には今一有べし。つたは常に有物なれども、株になるは紅葉の見事なる故也。しかれば野山の色・紅葉などいふ句に付侍らば、依レ句躰一同意成べし。もしつたの葉のしげるなどいふ夏の句ならば付ても不レ苦。此說尤ながら前句の木の紅葉に、楓を付こそしたしく侍れ。蔦・葛などの草の名をとり出、紅葉の付合にせん事くるしかるべからず。たとへば春の花の句に、梅・もゝ・藤の類を付におなじ。それも紅葉に付るつた・葛の色の見事なるやうに仕立たる句ならば同意成べし。とかく句躰によるべき也。

露霜・露時雨　株也。但、かやうにいひつゞけねども、霜・時雨に露を結ば株也。さむきの字入ても露の字あれば秋也。又、露の字有とも雪・氷の文字あれば冬也。露と〱とは三句也。余のふり物には二句也。

つかさめし　秋也。八月十一日に京官の除目とて、都に御座ある公家衆の官位をさたさるゝ事也。

椿　雜也。花を結ては春也。たとひ花の字なくとも、花の心ある句躰ならば春に成べし。連に一句の物なれば、誹には二有べし。猶、椿市・椿餅は此外に有べし。椿の油・椿のあくなどは二句のうちたるべし。

露更て　夜分也。深の字に二句嫌。新式に時分にあらずとは、朝時分・夕時分にあらずといふ事歟。たゞ夜のふけたる露のさまなり。露のすゞしき夏也。

つれなき　に、なきの字付ても不レ苦。つれもなき同前。

釣　に舟付てくるしからず。海人同前。

繼尾の鷹　春也。白尾の鷹とおなじ。

翅　鳥羽田・はがい山などの羽の字、名所なれば二句嫌也。鵜の羽・鷹の羽・正月のはねをつく・羽箒など羽の字は五句去べき也。翅といふ字は句躰をかへて二有べし。

常の字　四あれば、誹には面をかへて五有べし。辭によみても五の內也。

常の燈　夜分にあらず、尺敎也。

つなぎ船　旅にあらず。つなぐといふ字入たる舟の句は・梶をたえなど云ても同前。

つなぐ　四有べし。つなぐにつらぬく、付句可レ憚。錢などつなぐに、つらぬくの字は二句嫌べし。それも貫之等の人の名ならば付てもくるしからず。

つらぬく　二句有べし。つらぬき、物をかゆべし。くわんとよみて今一有なり。

つなの字　誹には三あるべし。きづなは此外なり。されども折をばきらふ也。

つかふる　主君・親・師道・佛神などかへて三句する也。宮づかへはたゞ一也。此外也。

つかふる　連に一あれば、誹には二有也。宮づかへは折をかへ、此外に今一あり、官と書也。つかふると、つかはすと、つかひと三のかはりめあり。文字も別〻なれば相互に二句去也。

つかはす　遣の字也。此守をやるともをくるともよむ故に、つかはすにやる・をくる・皆二句去也。つかはすは折をかへて二有べき歟。遣唐使は此外也。但、折をかふべし。

つかひ　人倫也。但、花や鳥をつかひとする句躰ならば人倫にあらず。ある說に犬をも使にせし事あれば、人倫には成まじきといふ人あり。誤也、用べからず。花鳥の使は戀のつかひ也、人倫也。古今の序には哥をもて花鳥のつかひとすとあるも、根本人の使ある上にいひたる事也。それも哥を使とすると有句ならば、人倫をのがるべし。使たゞ一、戀に一、誹には折をかへて勅使・〻者など辭によみて今一ある也。兵法つかひ・鷹つかひなどは、仕の字か遣の字か、いまだ不二決一。是等は使三句の外成べし。つかひの字には二句嫌べし。仕字・遣字には面を去べき歟。能〻分別せらるべし。

妻に妹　おなじやうなる句躰ならば面を嫌べし、いづれも戀也。わか草のつま・軒の妻などには付てもくるしからず。

つれ〳〵にさびしき　連に面なれば、誹には七句去べき義ながら、連のごく面を嫌が能也。

つれなき　連に二句あり、誹には三句すべし。その內一句は戀なるべし。

つれもなき　ともの字を入ても難面といふ詞也。もは、やすめ字也。無の字は付てもくるしからずといへり。難面とかく故也。

つらさ　折をかへて三句すべし。三ながら戀にても不レ苦。うきに打越をきらふ。

つて　連に二あり、誹に三有、戀と旅とにいる詞也。三ながら戀も旅も不レ可レ然、とりまぜて折をかゆべし。ことつても此內也。つては使にかはり、人倫にはあらず。

つゝとまり　誹には折をかへて三あり。
つゝと〳〵とは二句去也。

月日　とつゞきたる詞は　秋也。依二句躰一べし。月日の影・光など秋也。過る月日などの月並の月日は秋にならず。

儺名　なやらふ・鬼やらひ共いふ、十二月晦日の夜也。慶雲年中よりはじまる。民多病しゆへ也。大とねり、四日ある厄鬼をつとむ。桃の弓・あしの矢をはげてこれを追ふことなり。

禰

閨　たゞ一也。夜分也。誹諧には二有べし。ねの字、ぬるの字・屋の字に面を嫌へ共、誹諧には七句去也。閨とねぶる・まどろむ、連に面を嫌へば、誹に七句去べし。丸云、此さりやうあらめに侍る。ねぶるは、ねの字そへばさも有べし。まどろむに嫌べからず。閨は屋臺の一名也。まどろむをきらはゞ、臥の字・かたしく袖の字・枕してなども皆面をかゆべき歟。連にはともあれ、誹にはしゐてうち越の外は嫌べからず。深閨などゝ聲に讀ても閨二の内也。

寢字　新式に一座四句の物なれば、誹諧にはしんと聲によみて以上五句すべし。旅ね・かり寢・獨ね・ね覺・ねどころ・ねをき・ねいり花・ねごき人などの類也。是等にぬるといふ詞は連哥に面をきらへば、誹諧には七句去也。閨・眠・朝いも七句去也。人のねるに蝶鳥ぬる・ねるは七句去べし。又、鳥のぬるに蝶のぬるなどは面を嫌ふべき也。蝶鳥のねる・ぬるもおほくはあるべからず、生類をかへて二有べし。それもねる・ぬる・ふす・ねぶるなど詞を替てすべき也。寢の字、五の外なり。ねの惣別ねるとぬるとおなじ詞ながら、ねの字四の外に、ぬるは表にありと連歌に定たれば、是非に及ざる次第也。ねる・ぬるに臥は二句去とあり。かやうにありとて、伏見など云事をば嫌べからず。起る・さむるも二句去とあり。乍レ去たをるゝ物のをきあがりなどゝいふ句　酒のさむる・あつさのさむる・興さめてなどいふ詞は少もきらふべからず。一切の指合、句躰による事也、一槩に論ずべからず。ねざめに夢二句去也。ねざめの詞わびしき心あれば、面八句の中はせぬ事の様に無言抄にあれども、はいかいには其儀斟酌すべからず。わびしき詞なり共、目出度やうにしなせば愁にあらず。よき詞なり共、あしくしなせば不祝儀になる也。大方は句躰による也。しゐて詞にはよるべからず。蝶のぬる・ねるは夜分にあらず、鳥のぬるは夜分也。水鳥はねるもねぶるも非二夜分一。

子日　春也。正月初子の日、野に出て小松を引事也。又、圓融院の御時は二月に被レ成しとあり。新式に松に子日、打越を嫌と有。然に心敬・宗祇は松に子日を付られ侍るを、其以後の宗匠不審して、近代松に子日を付させず侍る。是新式の比の衆に智恵のをとりたる故也。心敬・宗祇も子日に松をばつけず、うち越に子日を置ては、常のうへものをもきらはれしと見えたり。なに心もなき松に子日はよき付合也。これを付ずと申、子日といふに松と付るは用付になり、同意に成也。かやうの差別あきらかに制する宗匠かつてなければ、連歌も今はくらやみと見えたり。丸か門弟は松に子日を付てもくるしから

ず。子日に松をつけぬ事也。子日は植物に二句去也。付る事はよけれ共、松に子日は打越を嫌と099に覚給べし。圓融院二月の子日を人皆あやしみ思へり。土佐日記にも二月に子日翫たれば、昔は正月にかぎらずと見えたり。是は唐の文に出たる事也。無言抄に祇公の松に被付たる子日の句を引出し不審して、今比は付がたきよしをのせられたり。尤誤也。是を信用すべからず。問云、松に子日、同意にならずば若菜に正月七日、涅槃に二月十五日、桃に三月三日、菖蒲に端午、名月に八月十五夜・九月十三夜、菊に重陽などをも可付歟。答云、愚なる問事也。それ松は常磐の物にて松とばかりいふ時、少も子日の心生ぜず。若菜ハ、初春に生じてその名を聞より、はや正月七日の心、万人むねにきざせり。それも若菜といはずして菜とばかり云句には、七日付ても くるしからず。涅槃と云事聞より、二月十五日の事おもはぬ人や侍るべき。又、桃は松・杉のごとくなる木にあらず。春のみ花咲て三月の節供にもてはやす物也。然どもそれは句躰によりて、或は桃園或は桃色などいふ句あらば、三月三日付ても同意になるべからず。あやめに端午同前也。それも或は菖蒲谷・菖蒲酢・あやめの前などには、五月五日端午なども付てよろしかるべし。名月に八月十五夜つけんと思ふものは、三歳の嬰児も有べからず。それも名月となくて月と斗いふ句には、秋の半とつけんに何のとがゝ有べき。菊に九月九日・重陽など付る事は、句躰によつてしたしくたる也。菊のさけ・菊の水などには、同意まではなけれ共したしく侍り。前句の菊、重陽の事思ひがけぬやうの菊なれば、上手はしたしく聞ぬやうに付なして、などか過ざらん。松も小松になど、子日の心聞よりうかむやうの句躰などは、子日付べからず、古人の松に付たる句共をみて覚智せらるべし。疎にいり細にいり分別せずして一篇に心得て、先達の法をもどき、さりきらひを當代改られし事、不便の事也。餘のあさましさにながながしく書侍ものならし。

願の糸　秋也。七夕に手向の糸也。竹竿の上にかくるなり。

猫　たゞ壺、手飼のとら・こまなど折をかへて今一有べし。猫または有べからず。

ねらひがり　夏也。獣がりの事也。

根　に、もと・した・かげを嫌あり、きらはぬあり。草木の出より下にかくれて有根・矢のね・人の心根・瘡腫の根などは不嫌。岩根・垣根などに、花のもと・山の陰・山の隠などいふ字二句きらふ也。但、句によりて本の字・かげの字も嫌べからず。下の字も同じ、隠も同じ。元字・景字・影字、是等は少もきらはず。

根字　岩根・垣ねに、このもと・木のま・山もと・山かげ・山がくれ、これらの類二句去なり。天が下・したこがれ・清水がもと・月のもと・夕かげ・日かげなどにはきらはず。又、岩ね・垣ね・木のね・こゝろね等の間は、誹には面を嫌なり。

奈

なるこ　一、誹には田のなるこならで別のなるこ今一有也。なること申は、田による猪・鹿・諸鳥を驚す物也。さるにより て秋に成也。稲を守る故に植物に二句也。別のなること申は、田のなることを似せて、

民家の簾などにかけ置也。句躰に依てこれは雑也。うちまかせては、なることばかりしても田のなるこの事なれば、秌也。花の枝などに付る鳴子は、鳥を驚さむ爲也。しかれば花のなるこには鳥をつくべからず。田の鳴子には猪・鹿を追んためなれば、猪・鹿・鳥等を付べからず。なるになるこになるの字は三句去也。なるになくは二句也。なる神一字あれ共、これに(もカ)なるに二句也。人のなくは文字別にある故、付句ばかり嫌レ之。子の字は誹に一座五句なれば同面を嫌。それも段子・扇子、人の名の子昂等の聲に讀は、付てもくるしからず。もとより子日・子の時など同字なれども、同字別吟の法度にて少もきらはず。

成にけり　とまりにあらば、又中に置べきやうにすべき也。又、上句のとまりにありて、下句などのとまりには有べき歟。連に二句の物なれば、誹には三句有べし。

ながめ　二、哥をながむるは、目にてみる事にあらざるにより此外にあり。誹にはながめ三、哥をながむる一、折をかへてゑいと聲によみて今一有也。此二はながめ三の外也。詠と聲にいふ時は、見るにも・目路にもきらはず。見るにながめ、一句嫌へ共、哥をながむるには不レ嫌。詠に目きらはず、目路には嫌。目に嫌ふめと、きらはぬ目あり。たとへば目のかすむ・目のくらむ・目のまふ・めを煩ふ・うき目にあふ・うれしきめにあふなどの類と、木のめ・籠のめ・つぎめ・とぢめなどの物をみぬ目は、ながめにきらはぬ目なれども、さやうにこまかに是非をわくる宗匠はなきものなれば、かへりていさかひの基たる故に、ながめに目の字は嫌べからずと相定るもの也。如レ此相定とも、目路を嫌ふといふときは、分別して其作者には成給べからず。又、ながめに形見きらはず。され共とり出て見るやうの句躰ならば二句嫌べし。哥のながめにはこれをも嫌べからず。

苗代　春也、非二水邊一也　植物に二句去也。誹に苗代を城の字にいひかけたる句たらば居所に二句也。纔といひかけたらば、なはに折を嫌べし。苗と云字にも折を嫌也。人の子孫を苗裔と聲に讀時は、苗にもなはしろにも三句嫌也。問云、苗裔は植物にもあらず、春にもあらざる上、同字別吟なれば三句嫌事如何。答云、同字別吟とは、連歌に春日にはるひの類をいへり。誹には文字を聲に讀と、よみによむとおなじ嫌やうにせざれば道ゆかぬ事多により、如レ此嫌ふが能也。又、それも事によりて嫌ぬも侍り。よく〳〵了簡有べし。たとへば南無などゝいふ字は、無といふにも少も不レ嫌、付てもくるしからず。今夜・明夜などは、今の字にも夜の字にも明の字にも、讀と同じ心にきらはでは不レ叶也。苗裔の苗の字、植物にもなり春にも成なれば、同折を可レ嫌義ながら、少も其理なきによりて、字さりとはいふ也。他ハ准レ之。

涙　に袖の露、二句去也。但、戀・哀傷・述懐の涙、心ならでたゞ露の袖袂に置たるばかりの句なれば不レ嫌。

なくに泪　二句去也。但、鳥獸のなくには嫌はず、人のなく事也。文字かはる故也。

泪の露　ふり物也、秌也。ふり物に二句。涙の雨をば降物にあらずとし、泪の

露をばふり物と定たる新式の心殊勝也。露は涙の雨は身に覺て泪ばかりの事也。露は物思ひ袖にいつ置共なく結故に、空よりふるとかはりめなし。古歌にも秋やくる露やまがふと讀、又、露は袖に物思ふときはとあれば、尤混合の道理に相當り侍る。泪の雨は降物にあらず、泪の時雨は冬の季になる故に、ふりものに嫌と見えたり。

涙の時雨　雨の間に一有。冬の季の間降物に打越可レ嫌レ之。冬時雨すぎては可レ憚レ之。新式かくのごとく、誹には秋・冬の時雨過て今一、涙の時雨有べき歟。連には涙の雨とか時雨とか一座に一あり。誹には二ながら出てもくるしからず。

涙　に袖の月など二句嫌。袖にやどる・袖にうつる月などは猶以嫌レ之。

泪のかすむ　春也、發句物也。

涙川　非二水邊一、爲二名所一者可レ嫌二水邊一也。如レ此有は、たゞ涙の川に似たるといふ心ばかりにて、名所にならぬ泪川といふ詞一種有と思べし。よく〳〵句躰を見はからはるべし。乍レ去名所の泪川と同折には有べからず。涙川は伊勢の名所なり。

泪と〳〵　連に七句、誹には五句さり也。

涙なく　に鳥のなくは不レ嫌。但、なれもなくなどゝすれば二句嫌也。

泣　に鳥・虫・獸のなくは二句也。人の泣は泣の字也。生類のなくは、啼・鳴など文字かはる故也。たくと斗いふ句は人のなくになれり。戀也。是は一座に二句あり、一は戀ならず。

なる　に鳥獸のなく、同字なる故二句さり也。但、付句斗を嫌べし。なくの字は、なき物かはれば字去也。なるの字も、なり物かはれば同前。

鳥のなく　に田鶴の聲などは、同面もくるしからずと無言にかけり。同じ面も不レ苦とは、五句も七句も嫌事にや。なかねば聲はせぬ物なれば、なくとひとしきといふ心歟。左様に吟味せば、蟬のなくと云に虫の聲もきらひ、駒のいばふに鹿の音もきらふべきか、あまりこまか過たる穿鑿也。新式に見えぬ義なれば信用すべからず。なくになる、聲に音・をと・ひゞき、是等はたがひに二句去也。鳥と〳〵・虫と〳〵、獸と〳〵・又、生類かはりても、なくと聲と二句去の物は二句さり、三句去の物は三句さへさらば、なくと聲とのとがめはしゐて入ざる義也。さたなくして置べし。田鶴の聲といふも、なかねばきこえぬ物なれば、鳥の鳴に面をこそ嫌まじけれ。六七句は嫌べきといへるは、聲と鳴とはさまできらはねども、心がなくと等しきとの吟味か。それならば、いかなる鳥か雨にきてなく。といふ句に、よな〳〵の月につれなき時鳥。と宗祇の付られしも、下心あしきといふべき歟。此つれなきは、なかぬと云心なり。さればなくといふ字には、同意と申べきにや。あまり巨細なるも、かへりて誹諧しにくく成て詮なき事也。よく〳〵分別すべし。

歎木によそへたらば　植物に二句去也。新式曰如レ此。但此分にては埓あかぬ事也。なげきの枝・なげきの本・なげきのしげるなどは植物に嫌也。なげきこる・きる・つむ・たく・ひらふなどは植物にあらず。

なごり　戀に一、花などに一、誹には旅にても何のうへにても今一句有て、以上三句の物とす。名の殘るは折をかへて又有べし。なごりは余波とも書ゆへ、名にも殘にも二句嫌べし。

名　たゞ一、戀に一、草木等に有。誹には聲に讀て今一あり、以上四也。皆折をかふる也。名に名のりは面を嫌也。是は四の外也。名をなのるとすれば四の內也。名とり川・名護屋など名所にいふ時は名四の外也　名の字には七句去べし。名香・名所・名物・名水の類、名四の內なるべし。名号・名利も同前。

無の字　は字去也。なきに、すくなき・なかれ・あつさ・はなつ・かひもなみ路などのいひかくる詞、みな二句去也。

無にはかなき　付句ばかり嫌レ之。これは、はかとばかりいひてすまぬ詞なれば、無の字におほくきらはずといへり。丸思へらく、すくなきも、すくと斗いひて其心聞えねども二句去也。殊に別に少の字あり。はかなきは無墓と無計ともかけば、無の字すくなきよりはつよし。是も二句去べき義也。作レ去新式に可レ嫌二打越一物の所に作レ入、はかなきといふ下に付句嫌レ之、打越不レ苦の由被レ定れば、今更改べからず、此分にしてをかるべき也。

無に三句去の類　あぢきなし・あやなし・おぼつかなし・かひなし・あかなく・行方もなみ、なきをなみといひかへたるばかり也。それも水の波にいひかけたらば無に二句去也。

無　に、おほつなき・つたなき・いときなき・つれなき、付てもくるしからず。連に如レ此。委細に詞のをこりを糺さば、皆無の字の義ありといへども、指合は一もすくなきが一座のためによき物なれば、古人其分別にて、かやうにきらはぬ物にさだめおかれ侍るならし。

無にあらず　句によりて付てもくるしからずといへり。不レ有、又非共書也。それならずなどいふ詞も、あらずと心はひとし。あらずに付句嫌べき歟。あらずに二義あり。人けもあらず・日數もあらずなどいふは無の字の義也。これらは付句嫌べき也。烏は鵜にあらず、猿は人にあらずなとゝ云は、別の物といふ義にちかくて、なきの字には遠し、付ても苦からず。

也と也・なるとなる・なれとなれ
皆二句去也。

なり　といふに二あり。一には、なりけり、是は也の字也。又一にはなりにけり、是は成の字也。此成の字は三句去也、也の字は文字たゞしくあれども、上に躰なければいはれぬ付字なれば、てにをはなるゆへに、也と／＼は先にいふがごとく二句去也。たとへば春也・秌なりと申類也。されば文字かはる故に也の字のなり、成の字のなりとは一切きらはず、よく聞分て去嫌べし。

也　に、なれ・なれや・なる・ならし・ならん等、なの字一字こそおなじけれ、したの付字かはりたる詞なれば、皆付句ばかりを嫌也。

なれや・ならし・ならん　三つかななれば連に面を嫌、誹には七句去也。句のとまりには一座に二句あり、誹には三句有也。

ならん　に二あり。たとへば、雨ならんといふは、てにをは也。雨とならんといふは、成の字なり。

成の字　に二あり。かりなる宿などいふは、てにをは也。雨となり雲となるは、成の字也。

也　といふは、てにをはなれ共、也の字一字あるゆへ成の字に不レ嫌、一字有といへども根本はてにをはなるにより、なる・

ならん・なれ等に付句嫌レ之。

なりにけり　一座に二あり、誹には三有べし。五かななるゆへ、連にとまりにはたゞ一あり、誹には句のたけをかへて二あるべし。

なみ〳〵　三句也。

波の花　水邊に可レ嫌レ之、植物に不レ可レ嫌レ之。以上新式如レ此。波の花・雪の花は正花にならず。但、波に落花のある句躰なれば春也、植物也、正花也。波の雪、冬也。降物・水邊兩方に嫌と新式に有レ之上は不レ及二沙汰一。

難波（なには）　郡の名也、非二水邊一。難波わたりも、あたりと云事也、水邊にあらず。難波寺（でら）、天王寺の事也、水邊にあらず。難波人、水邊にあらず。難波津・なには江、水邊也。難波に波の字不レ嫌。なにはのうらみわび・なには津の哥・難波津のことの葉などは、水邊に打越をきらふなり。津の國のなにはの事などは、よしあしとつゞけたり共水邊には嫌べからず、名所には打越を嫌と新式に見えたり。

ながれ木　植物にあらず。新式かくのごとく成に、無言抄に流人などよそへても植物に二句嫌べし、但、可レ依レ句とあり。此文章（ぶんしやう）の書誤歟、一圓に聞えず。ながれ木、柱（はしら）・又枯木（かれき）・くち木などの水にながるゝを云也、植物の心なし。水邊には成也。流人（いんやう）の異名ならば水邊にもあらず、もとよりうへ物にもきらふべからず。

なるかみ　神祇にあらず、連に一句也。誹には折をかへ、らいと聲に讀て今一有べし。水指（さし）の名に雷盆（らいぼん）などいふ句は、なるかみのうらにあり。聲に讀雷電などには折を嫌べし。なるかみあらば、いかづちとも、かみなり共有べからず。なるかみに神の字、むかしは不レ嫌といへども、うち越をきらふべし。なるの字には三句去べし。なくといふも、なると云も同字ながら、なくには二句嫌也。

何字（なにのじ）に幾字　付句嫌レ之。打越不レ嫌レ之。

夏と夏　五句去也。

夏月　春の月と同前。三日月・あり明といひかへて以上四つあり。いひかへずして夏の月とばかりは、四迄はなるべからず。たとへば、夏の三日月・夏のあり明いでずして夏月と申は、みじか夜・涼き・明（あけ）やすき・あつき・卯花・橘・時鳥などを結び入たる句を申也。かやうの句躰二句有也。げつと聲にいひても此二の内也。

夏の夜　と云句に短心あらば、其折にみじか夜有べからず。

渚（なぎさ）　二、今一、名所に有レ之。

なか神　中神（なかがみ）・長神（ながかみ）同前。一夜めぐりの神共いふ也。天一神の御事也。神四の内也、名神也、神祇也。かたゝがへの時の御神也。

波の露　秋也、降物也。波の雫（しづく）に雜也。

波枕（なみまくら）　舟ならでもする事也、句によるべけれど、大かた旅になる也、夜分也。

波　三句去也、水邊也。尾花の波・藤波（ふぢなみ）等水邊にあらずといへども、波の字には字去也。

なみ木　並（なみ）木とかく故、ならぶの字に三句去也。但、ならぶ林は双林（さうりん）とかけば二句去也。それも聲にそうりんじなどゝあらば、付句斗嫌べき也。日次・月次・なみ〳〵の人等は次第の次の字也。なみ木といふ時、次の字をも書故二句嫌也。

流（ながれ）　連に二あり、誹には三あり。流水と聲に讀も二の内也。皆折を嫌也。流人・流罪・流轉此外也。もしながれ木と和語に讀句ならば三句の内成べし。左遷の事ならば水邊にもあらず。ながるゝ木の事ならば水邊也。藝能の一流は三の外也。ながれといふ詞に是等は七句去たり。水邊にはあらず。

なこその關　山類也。

なでしこ　たゞ一、異名に一、誹には三有也。なでしこ・石のたけ・床夏、是等皆折をかふべし。

なぐさめ草　うへものにあらず。草の字には三句さりなり。

中にうち　二句嫌べし。中に世のなかも二句嫌といへり。世間とかくゆへといへり。世中とかくは正字にあらず、かんな書といふ物也。中に大内も二句也。内裏・禁裏といふ時は中に付ても不レ苦。うちといふには三句嫌なり。

中戀（なか）　過て、たかだちと有べし。誹にはなかふどゝ今一句有也。もし媒介とあらば、なかふど・中立の内に一は除べし、二迄は不レ可レ有レ之。

媒（なかだち）　人倫也。中の字・立の字に二句去也。媒の一字あるゆへなり。但、いもせの中・我中などの戀の句の中ならば、媒に連に折を嫌へば、誹には面をきらふ也。

ながらへ　存命とかく也。命とは二句嫌べし、存には嫌べからず。ながきの字に二句去也。述懐になる也。

なをざり　等閑と書也。猶の字・去の字に一切不レ嫌。なをざり過て、等閑と聲によみて今一有べし。

ならふ　といふに數種あり。一は、師匠に物を習也。又、人を待ならふなど也。これは馴心あり。さるによりてなるゝに二句去也。馴と〳〵とは連に面をきらへば・誹には七句去也。又 世のならひなどは心かはれ共、物習同字をかけば、なるゝ・ならすには二句去べし。地をならすなどは、なだらかにするといふ心なれば、馴にも習にもかつて嫌べからず。をどりをならすは、地をならすにも物になるゝにも皆心通ずるゆへ、いづれにも二句去べし。其内に地をならすには、おなじやうなる唱なれば・同折には耳に立べし。折をかへて一句づゝすべし。此詞は謎なる字もなし、別〻かとおもへば心かよひ、心通かとおもへば又其義かはれり。兎角いづれも句躰によりて去嫌べき也。兼て差別分がたく侍。

なびく　誹にはなびき物かへて三あるべし。たなびくは二有べし。たな引物かゆべし。なびくにたなびく、連に面をきらへば誹には七句去べき義ながら、連のごとく面を嫌て然べき歟。

ながら　乍の字一字あれば、三つかなに嫌べからず、字去成べし。乍レ去ながき詞なれば、五句去にしかるべき歟。無言抄の面を嫌說はいはれざる也。三かな、連に面を嫌へば誹には七句去也。

なもじ　に二句嫌あり。それは物なおもひそ・人なとがめそ、など下知のなもじ也。又、つきせじな・かはらじな、の類も二句去也。

ない鳥かり　春也。鳴鳥と書。

梨の花（なし）　春也。實は秋也梨の木と斗は雜也。

内侍所の御神樂（ないしのみかぐら）　十二月十一日也。臨時の御神樂は炑の末にあり。惣じて神樂は夜分也。

誹諧御傘（五）

羅

らしとらし　らんとらん・らしとらんも皆二句去也。

らん　たん等のかはりたる一字ばねは、とまりには二句去也。とまりならねば付てもくるしからず。

らん　に、おらん・とらん・しらんなどの一字ばねは少もきらはず。らもじ、上の文字へ付たるゆへなり。くらん・見らん・すらんなどの類は二字ばねとて、らん・らしに嫌也。よく／＼吟じ分らるべしかへらん・とゞまらんなどの類は、上の字一付たるやうにもあり、また、らんの字にもこゝろへられて、了簡六ケ敷ゆへ座ごとに諍論たゆべからざるの間、おらん・とらん・しらんなどの一字ばねも、らの字の付たる分は、らん・らしに付るをきらふ、尤可ㇾ然義なり。こん・またん・きかん等のら文字なきを、一字ばねとはおもはるべきなり。付てもくるしからざるは此類としらるべし。

らるゝ　ざらん・ならし・ぬらし・つらし、いづれも三かなとて面を嫌ふ。誹には七句さり也。

らに　閙の事也。らんといふよみを、かんなにはかくのごとく書也。盆をぼにと書、牽牛子をけにこしと書類なり。らに過て、ふぢばかま又有べし、しらんなどゝは有べからず。一座二句の物也。

亂世・亂後　など一過て、世のみだれなどゝ今一有べし。亂碁過て碁とは有べし、亂れ碁とは有べからず。

亂舞　と過て、はやしと又有べし。はやしとは拍子ともかけど正字は囃の一字あれば、亂舞の囃といふ句に拍子といふ詞は付てもくるしからず。手拍子・足拍子・拍子木・口拍子・どひやうし・白拍子等の類、さらにはやしの心なし。亂舞のはやしに拍子の字を書は、あて字にて侍るゆへなり。

無

虫　松虫・鈴虫各一づゝ懐紙を替て用べし。此虫といふは妖の虫の事たり。蛬・機織はたはたむし共 此二色の虫も妖の虫なれば虫・松虫・鈴虫、三の虫の内に有なり。是新式の一座に一句づゝの物に定たる義なり。しかるを近年連歌に妖の虫一の外、松虫・鈴虫二の内に蛬・機織の内に又せらるゝなり。蛬・機織三の虫のうらに有と云々。連に一句の物は誹に二有とばかり心得たる師匠は、虫も二、松虫も二、鈴虫も二、蛬・機織も二づゝあるべきやうに思ふべき也。さやうに数おほく同事を出は聞よかるべき歟。尤く此事成さはき成べし。心得やすき様に連歌と引かへ、新式のごとく虫と一、松虫一、鈴虫一、以上三有べし 其内に蛬・つゞりさせ・筆つむし、或は蟋蟀などの内一、機織・はた／＼・はたをるむしといひかへにても一、是まで連歌新式の昔の定のごとし。誹諧には此外にいとゞ・こうろぎ・いたご・箸虫のごとき妖の虫の名今一、出勝にあるべし。是も三虫の内にあるべし。又、日ぐらしも秋のむしなれ共 此類の虫にはあらず。惣別は連にうらにある物は誹にはあらず。

七句去にすれども、是は連のごとく面を嫌が能なり。此外の季をもたぬ玉虫・夏虫・みのむし・もにすむ虫・腹の虫などの虫の字、各〻面を嫌べき也。虫の字つかむぬしには皆三句去べし。

虫・鳥・獸　の間互に誹には二句去也。

昔　只一、誹諧には二句すべし。往昔など辭にいひても、折をかへて二句の内なり。昔にいにしへ、連に折なれば誹には面を去べし。昔にふるとなどは打越を嫌也。

村雨　村の字に二句、急雨と書故也。誹には村雨二也。急雨と辭にかへても二句の内也。連には雨に面を嫌ふ。誹には七句去也。もし謡の松風村雨などといひても、村雨二の内也。彼蜑の名ならば降物には嫌べからず。

むらがる　村の字に二句。但、それは居所の村。草・木・雲・霧・霞・煙・竹・雪・霜などの村は、村の字成ゆへに二句嫌也。むら鳥むら烏・むら山などは村の字にはあらず。是は群の字なれば、むらがるに折を嫌ふべし。むらがるに、群集・群行など辭にいひても折を嫌べし。村の字に草むら、是等は別の文字ある故に三句去也。草の村に村竹・村雲の類は皆字去也。紹巴云、杉村・松の村立・村紅葉など、たかき植物の村は面をきらふ也。高き植物とは樹木の事也　木の村、誹には七句去也。かやうに村は種〻のかはりめあれば、よく聞分て去嫌べき也。

莚　居所にあらず、夜分也。誹諧には二有、さむしろも此内也　法の莚は居所に非ず、夜分にあらず。草莚は草の平〻と有所をいへば植物也。敷とせねば夜分にあらず。苔莚はうへ物也。草莚・苔莚しくといへば夜分也。哥・酒の莚、詩の莚・たかむしろ竹にこそりたる莚也。かやうの名の有莚二、外に出がちに折をかへ今一有べし、以上三有也。この外會席などゝ辭にいひても三の内也。いづれも折をかゆべし。むしろ田などいふ名所は此外に有べし。

梅　只壹、紅梅一、冬木一、青梅一、紅葉一。青梅・紅葉などは自然の事なるべし。新式一座五句物の所にかくのごとく有を、此自然といふ義理をとりちがへて、無言抄又新式の抄などに梅は四有べし、折を嫌とかけり。是偏事也、四句の物ならば新式になんぞ五句の物の所にいでんや。誹諧には或は梅ぼし・梅づけ・梅や・梅ぞめ・に梅・梅つぼ・梅宮、或は梅林・大海和尚・塩梅などゝ辭に讀て、いづれなり共出がちに以上六句有と知べし。しかればいづれも梅の字は面ばかりを嫌なり。梅雨、五月雨の名といへども六の内成べし。

村　居所に二句也。是はをちの一むらなどゝいふ人家の村也。只、雲の一村・むら鳥・村草の類、少も居所にあらず。

埋木　植物に打越を嫌べし　但、花や紅葉を結ては三句さるべし。

馬　一、駒一、折をかへてあり、鶴・たづの類なりと、新式の一座一句の物の所にあり。馬と駒と同物也、誹には名馬・落馬など辭に讀て、馬・駒二の外に今一有べし。所詮新式を見るに、昔は馬か駒か一座に一句ありしを、後には馬一・駒一、その外に心の馬・ひまゆく駒は各別の物なれば、馬・駒二の外に心の馬・かひまゆく駒か今一有べきといふ文言也、しかれば連に以上三と見えたり。誹には下馬・落馬・馬書・馬借・牛馬・馬鹿・馬頭觀音・馬面・馬

糞など、聲によめる今一句有て一座に四句の物とす。また馬藺・馬塊が原・牛頭馬頭・馬鞭草・馬齒莧、硯の名の馬蹄、人の名の馬相如・鞍馬寺、又讀によみても馬の内侍・日よみの午・將碁の馬・扇を折る馬・馬蒜などは、馬に七句去べし、駒には三句去べし。是等は少も生類の馬にちかき物にあらず、各別の物なれば也。連にひま行駒・心の馬等をゆるすにてしるべし。又、三味線の駒・伊駒山・駒が嶽、猫の名・人名の駒。これらは駒には面をきらひ、馬には三句去べき也。かくのごとく去嫌をさだめんために輕重をたゞすといへども、これらも出がちに四句の内とす。又、むまや路驛路といふこも　むまやの長驛長といふこも　馬・駒に七句、馬のはなむけ、馬・駒に七句、是は餞別とかけば生類に二句なり。但、せん別と聲によむ時は、馬・駒にも生類にも不レ嫌・付てもくるしからず。

まぐさ　草の字に二句、馬・駒に折を嫌といふ說あれ共、秣の一字あれば、むまやに准じて馬・駒に面を嫌の說可レ然歟。然ば誹には七句さるべし。

まくし　生類に二句、馬櫛と書なり。馬・駒と折をきらふなり。

繪馬　又、繪に書たる馬、生類にはあらず。馬・駒に折を嫌ふなり。馬形の障子、禁中にあれば居所にあらず、生類にあらず、馬・駒には折を嫌ふ。

馬場。むま場　生類に二句、馬・駒に面をきらふなり。

馬子・むまかた　馬借の事也、人倫也。生類に二句、馬・駒に折を可レ嫌。この外いかほどもあるべし。又、このきらひやうも十分にはあらずながら、先筆にまかせて書侍る。とかく重も輕も、よみにいひても聲にいひても取合、馬・駒一座に四の外有べからず。右の内馬鹿の詞・草の名の馬蘭の類は馬の字に三句去にて、四の外にいくらもあるべき義ながら、さやうに相定たらば人の評論たゆべからざるにより、先かくのごとく了簡する物なり。理をやぶる法度はあれ共、法度をやぶる理はなしと、世の諺に申もかやうの事成べし。尚其座の宗匠分別して、貴人又珍客の句には見のがしにしても置るべき也。

室の八嶋　に二種あり。一は名所、一は人家のかまどをいふ。いづれも山類・水邊にあらず。

葎　雜なり。葎の宿　植物也、居所なり。葎生・八重葎などいひかへて誹に二句有べし。葎生、居所に二句也。

無常　述懐・懐旧　引合て三句可レ用レ之、以上新式の文言也。此義理合点仕にくきゆへに、是より奥にある句數の所をみれば、夏・冬・旅・神祇・尺教・述懐　懐旧・無常在二此内一云々　以レ之知レ之ばうたがひなきか。此夏・冬等は一句にても捨、三句迄はつゞけてくるしからずといふ事也。しかれば無常・述懐・懐旧、哥にも別々の物なれば、連誹にも別々とこゝろふべし。無常も述懐も懐旧も夏・冬のごとく一句にても捨、三句迄もつゞけてくるしからずと知べき也。無常一句・述懐一句・懐旧一句引合て三句せよといふ義は不レ可レ用。無言抄に述懐・懐旧・無常・哀場(傷)等の間、いづれも五句嫌也。大方こゝろ同前なるゆへなり。此文言を案ずるに、述懐に懐旧・無常、哀場に述懐・懐旧・無常、相互にいづれも五句嫌ふと思へり。是あやまり也。述懐と〳〵五句、懐旧と〳〵五句、皆か

くのごとくきらふが能也。述懐に無常をきらひ、無常に懐旧を五句きらへといふは無說也。述に五句の物は誹には三句去べし。

室の戸 居所にあらず、尺教也。出家の庵室也 寺に折を嫌説わろし、付ても くるしからず。有漏・無漏は各別の事也。少もくるしからず。室の八嶋・三室山等は室の字に折を嫌べし。(麹)麪室も同前。尺教の室・庵室など過て御室の御所今一あるべし。それ二過たらば、居所の名なれ共、もはやみむろと三室山などは折をかへても有べからず。播磨の室・室津などは又あるべし。いづれにても室の字は折に一づゝあるべし。

むろの木 は植物なり。室の字には少もきらはず。

室のはやわせ しれぬ事なりといへり。名所にはあらざるべし。是も室の字なれば折をば嫌べきたり。室といふは、をくてのたねをひたす所をいふ。しかるにはやわせと古哥に讀入たるにより、しれぬ事とはいふ也。丸おもへらく、おくての中にはやくみのるをいふか。上中下・初中後など三段にたつる物にも、一段の上に又上中下・初中後のあるゆへなり。さだめて稲にもさやうのわかち有にや、田夫にくはしくたづぬべき事なり。

むばら 木也。雑也。花を結ては夏也。茨木、津の國の名所也。植物にあらず。むばら二の外に又あるなり。

むさゝび 夜分なり、けだ物なり。述に一句の物なれば、誹には曉題たんど躄にいひて今一有べし。

胸の霧 戀也、烌也。聳物に打越を嫌也。降物に付てもくるしからず。

むねのけぶり 戀也。聳物に打越を嫌ふ。

胸 にこゝろ、句躰によりて二句嫌なり。但、むねのやくる・こがるゝ、むねのわろき、胸のきり・けぶり、胸のおもひ・胸の月、胸のつよき・よはき、胸のおどるなどにこそ二句嫌べけれ。鳩むね・むなすだれ・むねたゝき・むねのちぶさなどいふ句には、心付てくるしからず。

むつご 夜分也・戀たり。誹には折をかへて二有べし。

迎 向・むかひの山など二句嫌ふ。はなむけなどは、付句ばかりをきらふべきなり。

むちうつ 一字あるゆへに打の字に二句嫌。一字ありといへ共、むちには折を嫌なり。

むまるゝ に、いくるの詞。二句去也。生と躄によみて、むまるゝこゝろにあらずば是も二句去なり、長生殿などの類なり。生をうくるなどいはゞ、うまるゝに折を嫌なり。

むつの花 雪也。雪五の内也。植物にあらず、正花にあらず、ふり物也、冬也。六の花とあらば、躄に讀て六花ともあるべからず。

紫の花 烌也。若紫は春也。花となければども、色ふかきなどいふ句躰も花の事ならば烌也。只紫の草は雑なり。草にあらざる繪の具の紫・々の袖・紫衣などは、色ふかきとしても雑なり。

武藏の駒引 八月廿日也。

宇

鶯　只一、物の名にうぐひすとかくして今一、連にあり。誹には此外に、黄鸝・金衣鳥・鶯宿梅・春鶯囀或は名所の鶯の瀧等の内一有べし。百千鳥を鶯の異名として折をかゆるといふ説、ひが事なり。不レ可レ用。但、慈鎮の御哥に鶯の題にて百千鳥とあそばせり。とかくかやうのあらそひの有事は、正説傳受せざらん人はし給ふべからず、鶯、郭公に結ては夏也。

うらみ・うらむ　いひかへすとも戀の句に二。誹には戀にても述懐にてもあれ今一、うらむ・うらみ・遺恨など折をかへて以上三あり。うらみにかこつ共に戀ならば面をきらふとあり。誹には七句去べし。戀の句にあらずば、うらみにかこつ二句嫌也。

浮嶋が原　名所也、山類・水邊にあらず。只浮嶋とばかりは山類・水邊也。是は非居所。

うき　に、つらき・かなしき二句、無言抄に愁も二句とあり、新式に見えぬ事也。用べからず。

うき世　浮世と書ゆへに、うき・物うき・かなしき・つらきに二句去なり。

うきといふ詞　は連に字去なれば、誹には三句去なり。

うき　に物うき、憂の字あるゆへに二句去なり。

哥　に、しきしまの道、誹に面を嫌。道となくて日本の惣名に敷嶋と斗は不レ嫌。難波津の道・あさか山の道・風雅のみちなども哥に面をきらふなり。

哥　に言の葉と、新式に打越を嫌ふべき内に出せり。是は詞の事なるべし。言の葉と、の文字をいるれば、言の葉の道といふ詞に聞ひとしければ、それを六ケ敷おもひて哥に言の葉と書たる物也。の文字を入ても詞とおなじきことのは侍れ共、哥の心さへなくば哥に嫌べからず。又、道といふ字をそへれ共、言の葉の道といふにおなじき言の葉は、連に哥と折を嫌へば、誹には面を嫌べし。言の葉の道はいふに不レ及義也。所詮哥に詞は不レ嫌。道となく共、の文字を入て言の葉といふは、打越を嫌と心得べし。それも哥の言の葉にはあらず、只詞を言の葉といひたることのはの事也。句心、哥の心ならば面を嫌ふ。

宇治の川嶋　まきの嶋の事也。非山類。惣別の川嶋・池の中嶋等、山類にあらざるなり。丸、新式を見るに、昔、川嶋は山類なるにより、宇治の川嶋は山類にあらずとかけり。その小書に肖柏の凡川嶋同レ之と今案あるにより、すべて川嶋は山類にきらはぬと見えたり。

裏枯　秌也。草葉のそと色付てかるゝ事なり。うらがれとばかりはせず、薗・野邊・原・庭などの文字を入なり。植物に二句也。草の名・草の字あらば植物に三句なり。連に裏枯過て秌草の句にかるゝといふ字、もはやせざれば誹には今一有べし。それも裏枯とつゞけたる詞はならず、草のかるゝ・枯野などは冬也。野のうらがるゝ、秌の句ある折には、かれ野すべからず。冬野はくるしからず。草葉のうらがるゝといふ句のある折には、冬枯の草不レ可レ有。冬草とばかりは不レ苦。木のかるゝは草のかるゝに面を嫌べきか。人めのかるゝなどは、離の字をかけば枯の字に二句去也。

うらがなし・うらさびしき　のうらの字は、かゝる詞の字なれば三句去なるべし。このうらの字には別に口傳あり。此うらの字、水邊の浦といふ字には付てもくるしからず。乍レ去難波のうらかなしなどいひかけたらば嫌ふなり。

うらやまし　うらやむといふ字別に有ゆへに、浦の名にも山の字にも少もきらはず。それも名所の浦山に秀句にしたらば嫌ふべき也。うらやまし・うらさびしきなどのうらには、子細有て二句きらふ也。是も口傳有レ之。又、我身をうらといふ詞あり、是はうらさびしなどのうらにも、うらやむにもきらはず、をれがといふ事也。さるによりて、をのれに折をきらふ。うらもをのれも人倫なり。但、伊勢物がたりに、みるめなき我みをうらとしらねばや、と讀たるは別也。それは恨と云詞に水邊のうらをかけてよみたる詞也。

鶉衣　動物にあらずと新式に筆を加へて、しかも秌の部に入たり。只俳人の短き着物をいふ。然ども秌の季もつゆへに生類に二句去なり。

浮木　植物にあらず、水邊也。誹には折をかへ、聲に讀て浮木とあるべし。經文の浮木の龜のなど、たとへにいへる句ならば水邊に嫌べからず。たへ成共、龜は生類になる也　浮木はうへ物にあらず。

うきねの鳥　多也。水鳥の事也。水鳥は晝も波の上によくぬる物也。故に夜分にあらず。惣別鳥のぬるは夜分にあらずと無言抄に侍れ共、それはいはれず。新式目にも夜分にあらざる物の内に、うきねの鳥とばかり出したるにて、余の鳥のぬるは夜分としるべし。

鶉の床　夜分にあらず。新式を見るに夜分にあらざる物の所に、うづらの床とばかり出せり。此道理を了簡するに、余の鳥とかはりてさらに空をとびかけらず、ひるも草の中にのみあるにより、此とりばかりを床としても夜分にあらずとさだめたると見えたり。しかれば諸鳥の床はみな夜分とするべし。また無言抄をみれば、うづらのとこ、夜分にあらずといふ下に、けだ物の床同前と侍り。是は新式にみへぬさし合なれば皆夜分と定度侍る。

卯の花　木也、うつ木と計しても夏なり。卯の花過て卯花くたし有べし。四月の雨の名也。降物なり。植物に二句也、花の字には三句なり。

兎　只一、誹には月の兎・玉兎とも、兎の毛の筆・兎口等の内に今一有べし。兎角といふ詞、兎には付てもくるしからず。兎も角もとは、聲をかりてかけども、少も兎の心なし。とにかくに・とてもかくても・ともかふもなどいふ同じ詞の心なり。三教指皈に兎角云とあるを正字と世の人思へり、是は各別の事也。万葉にはとにかくにといふ事をば左右とかけり。とかくの正字別にあり　當世しる人有べからず、口傳　又　支干の卯、文字はかはれ共折をかゆる法度なれば、折をかへて兎二の外に、卯の年・卯月・卯日・卯時などの間に今一有也。支干の卯に卯杖・うつ木も折をかゆるなり。卯杖、正月の卯の日にきる杖なり。卯花は卯月に咲ゆへにうつ木といふなり。又、中うつぼ成によりうつ木と云説是有。此二の内卯杖は支干の卯に同ずるなり、卯花は木の名に落着するゆへ、兎の字に遠ければ兎のうら

にあるべき歟。かほどの輕重はたゞさでもくるしからず。さる間、兒若衆・貴人・大人などの御句にあらば面計をきらひ、叉みのがしにもするを能宗匠と云なり。一槩に指合をばくらぬ事也、能々分別すべし。

浦と浦　三句去なり。浦と浦の名所同前。

占　うらかた・うらやさん・辻うら・卜部氏・此内折をかへて二有べし。うらなひ・うらかたは大かた戀なり、句躰による事也、少も神祇にはあらざる也。二の内一は戀なるべし。

うろくづ　生類に打越を嫌なり。うろこに折を去べし。うろくづ・うろこ過て、或は魚鱗・廻鱗など聲によみて叉一あるべし。

植田　植物に打越を嫌　かり田同前。

植　と云字、草木いづれの上にて成共只一なり。誹には二あり。善根をうゆるといふ句も草木に打越をきらふなり。

うつり・うつる　といふ詞は、うつりやうさまぐ\あるを、しわけて指合をくれば六ヶ敷成侍るゆへ、同じ心成共かはりたる心成とも、只うつるの字は面に一づゝと心得たまふべし。うつるとうつろふは三句去と心得給ふべし。うつろふと云詞はながき文字なれば、折をきらひて誹には一座に三句有べし。三句ながら同じ心の句躰は不可然。其内一は心をかへたるうつろひやうの句を可被用也。うつり・うつろふの詞の心のかはりと申は、たとへば、月日のうつると、月日の水にうつると、花の色のうつると、人の心のうつりかはるうつると、かやうのかはりめおほく侍る故に、右のごとく相定もの也。うつろふも同前。

うつり香　袖共枕共なくてはいかゞといへり。何成共移物可有、無言かくのごとし。月などは露か水かうつり物なくて、月のうつるとはいひがたかるべし。戀の君がうつり香は、かならず袖枕にかぎるべからず、髮にも身にも肌にもうつる物也。延喜の帝の御夢想にて、高野大師の入定の所へ御衣を贈られしに、觀賢は大師の御姿を拜し奉られしに、弟子の淳祐はえみたてまつらざるにより觀賢、淳祐が手をとり、大師の御膝をさぐらせければ、その御うつり香にて淳祐が掌一生かふばしかりしといへり。さればうつり香は袖・枕にはかぎるべからず。此いましめ、あさはかなる連哥師の教と丸は存ル。但いかん。うつり香は戀の詞也。君が身の匂ひの我身にうつりたるをいふ也。袖・枕よりも肌にとまる心が本成べし。然ば肌共身共いはず共、我身のはだへにうつりたる心あきらけきにより、移物ならでも申さるべき詞也。能々分別有べし。

うすき　の字、折に一づゝなれば、誹には面をかへて五有なり。

うす物　薄五の内也。物の字には字去也。うすぎぬの事なり、衣類なり。

埋火　夜分也、冬也。うづむの字、連にさたなし。誹には折に一づゝ有べし。埋木・うもるゝも此四の内也。

上　の字、誹には五有なり。うはもかみも上と聲に讀ても五の内なり、皆面を嫌ふ。

うぶや　産所也。生屋共かく故に居所に二句去也。屋の字には、誹には七句去也。

うたゝ寢　夜分なり。

うちわたす　行歩なりと無言にあり。人打わたす遠かた人といふ類は行歩也。人のありきわたるといふ心なればなり。又、うちわたす遠山のはなどは見渡す心也、行歩にあらず、打渡す橋などはもとより行歩の心なし　それも橋の上をうちわたしぬる駒などあらば行歩なり。能〻聞分て指合をばくるべきなり。

打渡す。打かすむの類　かろきてにをはの打の字は二句去也。面八句の内にありても二三ありてもくるしからず。衣をうつ・波のうつなどは連に五句、誹には三句去なり。此打は面八句の内に二はならぬ也。てにをはのうつとは是も二句さるたり。

卯杖　五尺三寸、正月卯日に献ずる也。君よりも下さるゝ也　持統天皇より始る。

鵜川　夏也。鵜つかふ事也。はなれ鵜は雑也。人につかはれぬ鵜の事也。夜川たつなどは鵜つかふ事也。名所の横川の事にあらず。

うら盆　玉祭也　盂蘭は梵語なり。ふぢばかまとは付てもくるしからず。若らんの花など辭に讀句あらば三句去べし。

宇治の花園　秋なり、草花也。

爲

猪　只一、誹には二、此外に名所の猪名野・人の名の猪・ひよみの亥・方角の乾、亥の子などは、折さへかはらば今一有べし。連哥の一座一句の猪と文字は同じけれ共生類にも不レ嫌、各別の物におもひなさるれば更にくるしからず。連哥のやさしきを本とする故に、ふす猪としてもいかり猪としても、けやけき物に聞ゆるによりて一座一句の物とす。誹諧の時はゐのしゝといひても、けやけき物と思はねば更に制すべき事にあらず。連歌につかはぬ詞を宗と取出してもてあつかふ道なれば、さし合の嫌ひやう連歌と大きにかはるなり。此旨をわきまへざる宗匠は、連歌に一座一句の物を二句の外にせよとゆるすは、曲事など笑ふ人も侍るべけれ共、それは愚成事にて侍る。

居の字　字去也。雲井・藁のゐる・鹿のゐる・端居等の類也。ゐるに灸をすゆる・鷹をすゆる・をるなど同字なれば二句去なり。又、鷹を一もとゝいふ時、居の字を書事あれ共少も不レ嫌、もとの字あまた有故也。又、石ずへは付ても苦からず、礎の字ある故なり。辭に讀て隠居・居所なども二句也。辭によみても居士などの居の字は、ゐる・すゆる・をるにきらはず。

井の字　新式にさたなし。井づゝ・井のもと・寺井・板井・石井などいひかへて二、龜井の水・大井・あがたのゐどなどの名所に又二、以上四句有べし。いづれも折をかゆべし。易の井の卦も四句の内也。皆折を去べし。井の字にゐせき、是を不レ嫌と連歌にいへり　井堰と文字に書とみゆるに、いかなる事ぞと不審し侍れば尤道理也。文字に書は假名書とて、辭をかりて書付たると見えたり。井せきと云物をみれば、大き成籠に石を入たり。しかれば石にて水をせく故の名也。向後いろはのい文字を書て、ためゐをば書まじき事也。しからば石に面をきらひ、岩に七句去べき也。問云、定家の假名づかひに、ためゐの所に井せきと書て、堰此兩字を出せり、いかん。答云、定家の假名

づかひと申せ共定家の作にはあらず。始め河内守親行へ拾遺愚草の清書を御たのみありし時、大形に書集てつかはされしを、後〻書添てそれを定家の假名遣と申也。たとひ定家卿の所作也共道理に違はゞ不レ可レ用。乍レ去此書は代〻の明哲吟味して書載られたれば、子細なくてはためゐの所にのせをかるべからずと思案するに、そのかみ見たる書物の内に、何れの帝の御宇やらん、日本に用水のために始てほられし河を大井川となづくと侍し。されば井せきもその大井川をせくと云心か。石積はいづくにもあるかと存れども 大井川かはらぬゐせきなどよめる外には、石關の哥えおもひ出さず侍れば、若さやうのいはれ有事にても有べし。たとひためゐを書事誤と云共、古人の書をかれし事なれば、定家卿の假名づかひにまかせて假名にはためゐを書、井づゝのゐには字去に嫌ひて可レ然也。 ながるゝ水を井のもとゝは心得られぬ事ながら、既大井川の因縁をきけば其ノ疑ひもはれ侍る。連歌に井の字にきらはぬといふ說は不レ可レ用。此石積のゐは井づゝの心なければ、井四の内成べし。

守宮 生類也、水邊也。故に井の字に二句去也。井のもとに住物也。人家の壁にもあれ共、それには血もなし。され共ゐもりと付たる名は井のもとの義にあらず、妹を守と云義歟。連にもゐに折を嫌へば誹には面をきらふべし。守宮のしるしは戀也。是も定家卿の假名づかひに、ためゐの所に入たれば、井のもとにある物と云義とや。おそらくは其儀は誤成べし。然共古人の定し事なれば、ゐ文字に二句嫌也。井三の外也。

韻の字 新式に載たるは、大旨時雨と夕暮と朝夕としらゆふと、かやうの句のとまりをきらひたれ共、今はきらはぬとことはられたり。今きらふ韻の字はかなとまり、發句の外ねがひかな今一の外せず。けりといふ詞、只は二句去なれども、とまりには折を嫌ふ。誹には面を嫌也 谷の字、連に二ばかり韻にありといへば、誹には折をかへて三もある也。里・山・道・水・浪の字の類は、同じ面にありても不レ嫌なり。とまり連に四、誹には面をかへて五、比とまり同前。つゝとまり、上の句にはせぬ事也。連には二句、誹には折をかへて三ある也。らん・らし・にての類は、とまりにありても二句去也。してとまり、連に四あれば、誹には面をかへて五あり。下の句のてとまり、ならひしらぬ人はせぬ事也。誹にも一座に二句也。にとまりにまに〱、是を不レ嫌。

射場はじめ 十月十五日に弓場殿へ天子の出御ありて弓を御覽ずる事也。此射場始なければ來春の賭弓なし。賭弓なき年は其秌の相撲もなしといへり。

農

法 佛法の外に法令の法有べし。佛法の法過ては法の師不レ可レ然と云〻、以上新式。誹には法師今一有也。法師・法印・法眼・法橋などゝ醫に讀ても三句の内也。法令の法とは法度を云也。

野邊 一、誹には三有也。三の内一は名所などにいひつゞけて猶可レ然歟。

野山の色付 あかく成事也、秌也。植物に一句也。青色・みどりの色・雲の色などは、野山に結びても秌にならず。みど

りの山・野邊のみどり、炑にあらねども植物に打越を嫌ふ也。又、枯野も色の字そへば秋に成也。枯野と斗は冬なり。是も植物に打越嫌ふ。松・杉のかはらぬ色などいふ句は、みどりの色のときは成をいへども、連のならひにて炑に成と也。かはるといふ字そはずば、炑にはなしがたき歟、句躰によるべき也。

野の色　植物に打越をきらふ。但、句躰による也。

野に原（原本闕字）　二句去也。されども田面の原・あさぢが原・よもぎが原・竹原・石原・川原等の主付たる文字上にあるは、野原にあらざる故不レ嫌。あしたの原・飛火の原・片岡の原・龍の原、是等の原は野原に成故嫌ふ。右の嫌やう無言抄に有レ之。原に野を二句去と定たる事、新式には見えざる歟。され共原にしたしき野ならば、其作者の心得に有べし。必、原に野を二句去とばかりは定がたし。

野原　と云句、誹に一座に二句有あり、折をかゆべし。また武藏野の原・鳥邊野など中も折をかへて二句有也。野原とは面をかゆべし。

野にのら　三句。是は野原の中略の詞也。一座に一句有べし。野ばらとは折を去べし。野の字・原の字、惣別字去也。聲に讀ても同じ嫌やう也。のらをのはらと、祕事ながら書あらはし侍る。

野もせ　道もせ・庭もせ、皆一座に一句づゝの物也、折をかへてすべし。野もせばみ・庭もせばみといふ心なり。面の字には不レ嫌。狹といふ字、所せきのせ文字などに面を嫌べし。せばきといふ同字なれ共、若狹國には不レ嫌。狹衣・狹莚には二句嫌べき也。

野山をやく　春也。植物に打越を嫌也。

野山のしげる　夏也。植物に二句也。

野　に田を付事、指合にはあらねども、似合ぬ事とて紹巴は嫌ひ給ひし也。其心を試侍れば、野には田はなき物也。田に成べき地をば皆田にほるなれば、田に野は似付ぬ故に、付合にせぬとやらん申されしと也。今此事をあんずるに、田にほり殘したる所に野もあり、野中に新田をひらくもあり。人の名字に野田といふもあれば、野山に田は似つかぬものにあらざれば、前句によりて付べきもの也。道理をたゞさず、名をとりたる人のいはれし事をむさと信ずれば、付ぬ事のやうに愚成者は思ふべければ爰に書付侍る。

野分　炑也、七八月に吹大風なり。暴風とも書故に野の字・分の字に二句去也。時雨を付は時節ちがひてあしゝ。

野の宮　嵯峨にあり、賀茂にもあり、皆神祇也、名所也。何れにても出がちに一座に一句也。野ゝ宮の別、炑也。御祓も炑也。野人・野亭・山野・野鳥・野鹿・野草・野遊・野火・野木、是等は野の字に三句去也。野馬、付句嫌なり、遊糸の事也。野馬臺は同じ事ながら詩の名也。是は野の心少もなければ付てもくるしからず。野心・野干、同前。野僧・野心などゝ同じくいやしきこゝろながら、野に有僧と云心もあれば、野人と同じく野の字に三句去べし。

軒　二。軒端といひては一、誹には軒端と二もあり、折をかへて軒の字以上三有べし。笠の軒・乘物の軒、軒と聲に讀も

此三の内也。又、花軒と云詞あり。是は軒にはきらはず、花車といふ事也。車とよます時は、かんの聲也。軒、かんの聲也　軒とよむ時は、けんの聲也。同字ながらよみやうかはれば、文字の聲もかはる事也。花軒は居所にあらず。軒三句の外也。

軒の玉水　水邊・降物にあらず。軒のしたゝり・軒のしづく、ふり物か忍ぶ草などか、むすばではいひがたきよし無言抄に侍り、大き成誤也。軒のしたゝり・雫も玉水も皆同じ事也。ふかき檜皮などの朽たるより、雨ふらね共雫のおつるを興じて、古人降物にも水邊にもあらずと定めたるを、玉水としたゝりをばとがめずして、雫ばかりを只はなつまじきと思はれし心浅さよ。いふにたらず、論ずるにたらず。

軒の菖蒲、端午にふきたる菖蒲なり。植物、水邊也。軒にひさし、同じ物と無言抄に侍る。別也。乍レ去ひさしは軒に有物なれば、付てはしたしかるべし。

野あそび　春にあらず、新式如レ此。

問云、誹に野遊と聲にいひて今一、折をかへこれ有べしや。答云、尤然るべし。聲にいはず共野に遊ぶと云事、句躰かはらば一座に二句侍べし。又、あふみのや・初瀬のやなどの文字、野にあらず、只てにをはの文字なり。

長閑ニ　しづか、二句嫌、寒なども同じく二句嫌、無言かくのごとし。長閑にしづか・あたゝかなどは二句嫌よし。寒に二句嫌と云事近代の誤かと存ず。新式の打越を嫌べき物の所にあげたる説を用らるべし。あ文字の所にくはしく書付侍る。

長閑　連に二、うらゝ一、以上三あり。誹にはうらゝか・のどむるなど少いひかへて、出勝に四有べし、いづれも折を嫌べし。

のぼる　に上の字二句嫌、うへ・かみとも同じ。但、のぼるの字、上の字にかぎらず、書かへおほくあれば、句躰によりて些もきらふべからず。たとへば、のぼると云前句に、主上・上人・上野・上總の類は、付てもくるしかるべからざるか。

残る　かゝる・させる、この類三假名にきらふ也。

賭弓　正月也。

のぼり梁　春也。若鮎ののぼるやな也。

残暑　秋也。

残菊　秋也。九月九日以後の菊を云也。哥詞にて冬残菊とも出せり。

荷前使　十二月也。十陵・八墓へみてぐらをそなへ給ふ使なり　吉日をえらばるゝ也。荷前の箱といふも此時の物なり。

越

老　只一、鳥・木などに一、誹には此外にらうと聲によみて以上三有。老は述懐の詞たり　老の句、四十にたらぬ人はかたくせぬ事也。但、老ノ鶯・老木・不老門・老子經などは曾て述懐の心なし。此老の字は若き人も憚べからず。

老　に、しらが。白髮・頭の雪等、連に面を嫌へば誹には七句也。

老　に昔付てもくるしからず、打越にはきらふ。述懐三句つゞかぬ故なり。

老ニ　わかき、付てもくるしからず、打越をば嫌べし。但、句躰によるべし。

老　に鏡の影をなげく・鏡の波・鏡の雪、

連に五句なれば誹には三句なり。丸おもへらく、老にしらかみ・頭の雪をば面を嫌といひて、鏡の波・雪・鏡のかげを歎等は五句去と無言抄に出せるは不審なり。鏡のかげをなげくは、句躰によりて老の事ならず。戀などの句ならば更にきらはぬも有べけれど、波・雪は老の皃のしは、頭の髮の白き事也。是も誹には七句去べし。但、是等は人の身の上の老の字に嫌事也。鳥・木などの老には、依ㇼ句躰ニ付てもくるしからず。又、醉によむ不老門・五老の峯などの老の字には、白髮・頭の雪を七句迄は嫌べからず、二句嫌べきなり。又、醉に讀ても老人・老後などには、讀によむ時と同く七句去なり。老槐・老木等の述懷にならざる老の字には、打越をばきらふ共、人のしらがなどは付てもくるしかるべからず。とかく句躰によるべき也。

老に齢　二句去也。新式に句躰によりて嫌べからずとあるは、人の噂ならぬ老木・老鶴の類の事なり。誹には人の老二、鳥・木の上に一、以上三也。老人・老翁等も人の老の内に成なり。不老門・老子經などは述懷にならざる間、三の外に一有べし。それも折をば嫌べき也。

翁に老　二句去也。此小書に付句共に嫌ㇾ之と新式にあるは、人の不審する詞也。是は打越を嫌物の所に出せり。打越を嫌ふ物に付てはくるしからざる物も有によりてかく註せり。さるによりて二句去と云と、打越を嫌と云と、同じ事ながら差別あるとはかやうの事也。是は不審なる嫌やうながら、理窟を申せば事ながくなる故、連のごくにして置侍る。又、人の上ならぬ老木・老の鶯などは述懷にならず。釣の翁・炭うる翁、述懷にあらず。

親に子　不ㇾ可ㇾ付、二句去也。但、人倫の親にかいこ・竹の子等は付てもくるしからず。おや子とつゞけても人倫也。述懷なり。親と斗、子と斗は述懷に非ず。

おもひしに　上句などのとまりにあらば、又中に置べきやうにすべき也。下の句ににとまりはせず。兼載の連歌に、泪は袖に露は袂に、と千句にせられしと也。以上誹諧には折をかへて三句すべし。問云、連歌に只千句に一句のにとまりの下の句を、百韵の誹諧には仕間敷にや。答云、下の句のにとまり、必千句に一句と定たる義にはあらず。下の句ににとゝむれば、和歌の下句に成て一句すはらぬにより、昔よりをのづから人のせぬ事成を、一句の理りたつやうに兼載の千句に一句せられしは、上手の手柄なり。右の句のやうにさいとむる人あらば、百韻に上下をかへ、思ひしにと云詞は誹には三句あるべきなり。

面影　只一、戀也。月・花などに一、以上二句の物也。誹には何のおもかげ成とも今一、三句あるべし。面影に影の字・陰の字・面の字皆二句去なり、俤の字別に有故也。

落葉　一、松の落葉一、柳ちるなど一、以上三也。誹には落葉と醉に讀一折をかへ、以上四也。木の葉ちるも同事也。ちるとなくて木の葉といへど、枝に付てちらぬ句躰ならば雜たるべし。但、木の葉天狗・木の葉猿・木の葉衣皆冬也。色と云字入れば秌也。柳・桐・柞・楸ちるは秌也　皆初秋に一葉づゝちる故に、是等の木の名をさゝね共、只一葉ちるといひて秌に成也。又、松・竹の落葉は雜也。ときは木の落葉は夏也。又、落葉に常盤木の

ちる・松の葉の散、連には折を嫌とあれば誹には面を可嫌義ながら、何の木の葉のちるも四の内たれば折を嫌べし。又、花のちる、萩・荻・竹・篠等の散に落の字に少も不可嫌。但、草にても竹にても、落葉とあらば四の内なるべし。

落葉の宮　は女三の姉君也。皇女なれば人倫にも不嫌。冬にあらず、植物にあらずといへども四の内成べし。

荻　新式に一座三句の物にて、その定めいまだ分明ならざる間、爰に誹諧の法度を合点ゆきやすきやうに申べし。荻一、他の季に一、伊勢の濱荻一、此外に、てき花と聲に讀て今一有べし。荻の字いづれも折をかゆるなり。荻の焼原・荻の下萌・荻の若葉は春なり、しげるは夏也、かるゝは冬也。乍去穂と云字・色の字そへば秋也。伊勢の濱荻は芦の異名なれば雑なり。穂の字・色の字そひて秋の句成共、秋の荻の外にくるしからず。各別の物たれば也。又、荻を風躰に二句嫌事は依句躰也。荻の聲そよぐ・秋をしらするなど云句は風躰に二句也。荻の下萌・荻の焼原・荻の枯葉などには風を付てもよきなり。たとへば松にもたえず風あれ共、風躰に嫌はざるがごとし。はま荻、芦に面をきらふとあれば七句可去きながら、但鐵芦の事なれば誹にも面を嫌べきなり。又、荻野と人の名字に有は雑也。植物にあらず。名字は人倫にあらず、され共荻四の内也。

おもひ　に火、打越を嫌と新式に有は、喩ばきへぬおもひなどゝ、火をかりたる時の事也。戀の字も病の字も火をかた取時は同前。火の字をからぬおもひには、たとひ戀の句成共努ゝ不可嫌。

おもひ草　暮秋の物なり、植物也。一座一句也。誹には戀ならずして今一句有べし。

思ひの煙　戀の煙、そびき物に二句也。煙の字は誹に五句なり。

おもふどち　人倫にあらず。

思ひやる　相像と書は、思の字・遣の字に二句去也。一座に二句の物なり。誹には三句も可有。

思ふ　におぼゆる、付にもくるしからず。思の字、連に五句、誹に三句去也。乍去おもふと〳〵・おもひと〳〵、かやうの三字を連に面を嫌ば、誹には七句去也。またたとひ三字つゞきても、心詞などいふはたらかぬ文字は其沙汰なし。

おぼゆる　におもほゆる・おぼつかなき、二句去也。

おまし　みまし共云、居所也。夜分にあらず。御座と書て、おまし・みまし・みくらともよめり。しかれば此内いひかへて三有べし。其外に御座・座敷など聲にいひて今一あるべし。おはしますも御座とかけども、さ御座あるといふ詞と成て居所にもあらず。乍去おましに、おはします・御座あるの詞は七句去べし。座の字は心もかはりたれば、二句斗にてよろしかるべけれど、御の字そへば如此。おまし・みまし等に座敷折をかゆべし。座配・車座等の人のゐなをる座は、座敷とあらばもはやあるべからず。居所の座の外に薛寶の紙の座・銀座、又、金物の座・懸金のつぼの座、又、人の身の瘡の座などの内に座の字一あるべし。又、座禪・座主の房・座頭の坊・四座の太夫等の内に座の字一有べし。いづれも折をかゆる時、品をかへて聲によむ座は四ありと可知。居所の坐の外の座の字は、おまし・みましなどには付

こもくるしからざる歟。但、座禪など丶いふ句は野山にても座して禪の工夫する事なれば、居所のおましなどには付句可レ憚レ之歟。とかく可レ依二句躰一。座禪も座禪まめも共に居所にあらず。

帶 連に沙汰なけれど、二句斗ありといへば、誹には折をかへ品をかへて三句有べし。猶此外に懸物の風帶などの人の腰にまとはぬ物に、たいと聲に讀句は帶三の外に二もあるべし。され共面はかゆべき歟。帶、いづれも衣類にあらず。又、雨をおび、露を帶るなど云詞は、文字も別にかくやうあり。又、帶の字を書事もあれば帶には同じ面を可レ嫌歟。又、此おぶるといふ詞は、おひ物をかへて二句可レ有。

男 只一、桂男などいひて一、新式に如レ有。此一座二句の物とす。誹には、なんと聲に讀て今一あるべし。男山なども三句の内也。又、さつお・ますらお・たはれおの類、おといひて三句有べし。男には面を嫌と無言などにあれば、誹には七句可レ去事なれ共、誹にも面を嫌べき事也。男松・男猫・小男鹿の類、皆お三の内也。たとおとは折をかゆべきなり。鳥のおん鳥、文字別なれ共おん鳥とせば、お三の内なり。それも鳥の事ならで物の劣り勝りを云時、文字に雌雄とかき、佛の十号に世雄と申やうに、聲に讀時は生類にも不レ嫌、おの字にも不レ嫌、おの字三の内にもあらざるべし。但、おん鳥と云句あらば面を可レ嫌也。

沖 二、今一は名所たるべし。

尾上 連に名所をそへて二あれば、誹には三句すべき義ながら、少けやけき物なれば、連のごとく二句あるべし。名所の尾上も二句の内なり。

尾上 に峯嫌也。尾の字・上の字に二句嫌ふと無言にあり、無理歟。同字なれば三句さるべし。

大井川 ゐせき、嫌也、以上無言。紹巴の五百ヶ條には、井にゐせき不レ嫌と出せり。さるによりて、ゐの字の所にくはしく註レ之。

奥山 一座に一、山のおくなどは又可レ有。誹には奥山、置所をかへて二有也。置所とは、始の五文字・終の五文字か同じやうにせぬといふ事也。

奥といふ字 折に一づゝなり。此外心のおくなど是あるべし。此類際限なき故に太綱を上る物也。誹には奥といひて四、奥義など聲にいひて今一、裏に有也。心の奥も奥四の内也。無言の説きこへず。陸の奥も四の内也。同じ事ながらみちのおくとすれば四の外也。裏に有也。もし、みちのおくとあらば、もはやみちのおくあるべからず。

おばな に尾の字・花の字、共に五句嫌。此類は大略二句の物なれ共、かくのごとくきらひ來也。但、尾に不レ嫌といふ説あり。可レ用レ之。以上無言の説なり。此尾に不レ嫌といへるは、定家の假名づかひに、おばなの下に薄・小花・莫花・尾花、かやうに種々の文字を付たるをみて云事成べし。是は哥道の秘事なれ共爰に申べし。人丸の御哥に、小男鹿のいる野の薄はつ尾花、とあるを昔の人もしばらく不審して、薄と尾花と二物かとおもひて、色々に文字を付置たり。二物にはあらず、薄の事也。惣別薄は見事成物なるに、ながき穗のはなやかに出たるを愛して、此いつくしき花をいつしか妹が手枕

にせんと讀給ひし也　薄の穗の獸の尾のやうにながき故、尾花とはなづくる也。是正説也。藁芝・小花などゝ先書たれども、尾花と終に假名遣にもかゝれ侍る。しかれば尾の字に嫌門數と云説は非なり。尾の字にも花の字にも三句去べきなり。

おくて田　植物に二句可ㇾ嫌。をしねは式に植物に五句嫌べし、以上無言。をしねとは遲き稻と云事也。おくて田とは田地に付たる詞と心得、をしねときらひやうを替られたり。更に別の物にあらず。わせ・おくてとは早稻・晩稻とかきて、をしねと同じ事也。田は付字也。おくてと云三字が、おしねとかはらぬ稻の名也。誹にはをしねも、おくて田も植物に三句づゝ去べし。

起　夜分也。ぬる・ねるに同意なり。ぬる・ねるにおくるの詞二句去べし。ぬる・ねる・おくるの詞は、蝶・鳥・草・木・獸も人のも同じ嫌やう也。乍ㇾ去夜分に成とならぬと可ㇾ有。

おぼろげ　と云詞、春にあらず。月を結てははるたるべし。

大原の祭　二月上卯日也。

大神祭　四月上卯日也。三輪の御事也。

具

熊　連に一句なり。誹には熊の皮・熊の胆・熊手などの類に今一有也。御熊野・熊谷・熊井・熊坂・今熊・朝熊・熊鷹などの熊の字、折をさへかへたらば熊二の外に尙有べし。問云、日ぐらし・皃・鳥などは連歌のごとく、一座一句にさだめ、此熊などを二句の外尙もあるやうに定給事は如何。答云、連はやさしき事を專にして、けやけき事をいとふ故に、熊・虎などをば希に用也。誹は世俗の事を皆用に立るを專と仕故に、連にけやけき物をもちひねば、誹諧つまりて仕にくき物也。さるによりて一句の物を二句は云に不ㇾ及、三句も四句も用也。一句の物を二句に定め、二句の物を三句より外にはせぬ事などゝ斗一やうに心えては、廣大成指合をさばく事はならぬ道なり。

車　一、法の車一、水車一、輦一、三句の内にあるべし。水車は自然の事にや。新式に自然の事とかけるは、連歌にまれに出る物と云義なり。然とて四句せよと云義にはあらず。連に三句の物、誹に四句すれば、誹には水車を入て以上四句有也。龍骨車（小車の事なり）・力車（荷をはこぶ車也）・四馬の車（貴人の乗車也）・羊鹿牛車（法の車也）・大白牛車（同前）・火車（尺数）也・石車（小石のくゞるゝをいふ）・柴車（つかねたる柴を川よりこかすをいふなり）・土車・ろくろの車・糸綿の車・山鉾とけいの車・帶車・風車、風躰なり。雨の車軸をながす・車舟・車坂、名所の車やどり、是等皆四の内也。將棊の馬の香車は四の外也、車に面を去べし。小車の花、四の外也、但、面を嫌、まとの小車と云句には折を去べし。車海老四の外也、面を嫌也。

草花　過て花の草の庵・花の草まくら、各々詞をかへてすべし。以上新式一座三句の物の文章成を、肯柏の今案に二句の物となせり。誹にはもとのごとく三句すべし。草花と聲に讀ても三の内なるべし。

曇る　只一、月・鏡などに又一有べし。誹には指の打曇、人の目・心などのくもる、今一有べし。瞿曇（尺尊の御名也）・憂曇花等の聲によむには付てもくるしからず。

雲と雲　誹には三句去也。うんと聲に讀ても同じ。雲に曇、二句去也。聳物にも二句。

雲井庭　大内の事也。そびき物に二句去なり。

雲の上人　殿上人の事也、人倫なり。聳物には二句去也。

雲井　句によりて内裏にかぎらず空の事を云也。是は聳物なり。霧・霞等に三句なれ共、誹には二句也。空・天の原・半天などに同意なり。打越を嫌べし。句躰によつて大内事ならば、空・半天・天の原などに同意にならざる也。能々分別すべし。雲の上も雲井と同じ。依レ句去嫌べし　居所にあらず。

草刈　一字ある故に草の字に二句。人倫なり。植物に二句。草をかるとすれば植物に三句、草にも三句。人倫にはあらず。草かり一、草をかると連には二あり。誹には此外に牧童、芻樵と折をかへて今一有べし。乍レ去牧童は草刈の異名也。牛飼童の事なれば、あげまきとも哥によむ。草刈に面を嫌べし。草をかると云には二句斗嫌べきなり。すふぜうは草刈の唐名也。草かり・草をかる、折をかゆべし。刈の字、連に沙汰なし。柴・芦・眞薦・菖蒲・稲など、刈物をかへて折に一づゝ有べき歟。草かりとは面を去べし。草を刈とせば刈の内なり。

草の庵　わらやなどの事なれば植物にもあらず。草の庵過て草の戸共、草ぶき共連にせず。誹には草の戸・草ぶき共今一有べし。若又、草の戸・草ぶきなどゝ一あらば、草の庵共、草あん共出がちに今一有べし。草あんと過て草のいほりなどはあるべからず。とかくいひかへて二句の物と知べし。草の庵・草の戸、只いやしき家也、述懐にあらず。草の字には三句去也。花の草の庵、居所なり。植物に二句なり。わらや・わらぶきは、草のいほり・草の戸などに折を嫌ふべきか。草の枕も同前。草を枕とする時も植物にあらず。たゞにすれば植物に成也。花の草枕、うへ物に二句なり。草と云は、わらの事也。

草莚　植物也。敷とすれば夜分也、非レ旅。草の莚・草を莚、皆同じ事也。

草の原　野にきらはず。

草花　秌也。連に三句の物なり、前に註レ之。是は野花の事也。草の字いらずして野の花又野花などあり共、誹には三句の内也。然に哥の題に野花留火と云事、春の部にも秌の部にも有レ之、依二句躰一春秌の分別すべし。

草花　と云句に、荻・薄・女郎花・蘭・槿・小車・桔梗・りうたん・眞葛等付べからず。同意也。菊は秌菊ながらくるしからず。

草　に野邊の千種など、種の字をもかけど、それは誤也。草正字なれば三句嫌也。花・紅葉の千種には嫌はず。二句嫌と云説あしゝ。種の字をかけば少も草の心なし。花・もみぢのちぐさ、千種とかけ共、雑の字のくさ〴〵には二句嫌也。

草村　叢の字別にある故に、草の字にも村の字にも二句去なり。

草瘡・草藥　植物にはあらず。草の字には三句去也。面草も同じ。つらくさはつらくせと云事なれば不レ嫌。

草双子　つれ〴〵草、是等うへ物にあらず。草の字には字去也。くすしの本草植物にあらず。草の字には三句去也。文

字の直草行、植物にあらず。草には三句、文の草案同前。病の歯くさ、是は歯のくさしと云事なれば、草に不レ嫌。哥の六くさ・種の字のくさには三句、草の字のくさには[illegible]て不レ嫌　植物にあらぬくさ〲と云詞　雜の字なり　草の字に是を不レ嫌。但可レ依二句躰一。みくさと云三種有。たき物の名のみくさ、種の字也、草に不レ嫌。みくさかりふくとよめるは薄の名也。植物に二句、草の字に三句なり。水草をみくさといふ時は植物なり、種の字にはあらず。草に三句去也。水邊也。

くらきに暮　二句去なり。夕の字には不レ嫌。墨は付句を嫌、やみは二句去也。丸がいはく、空などのくらきには依二句躰一可レ嫌。智惠のくらき・家の内のくらきなどには、やみ不レ可レ嫌。

くらきと云詞　夜分也。作レ去雨くらき・雲くらき・木の下くらき・家の内くらき・目くらきなどは夜分にあらず。

くらす　と云にかはりめあり。思ひくらすなどは夕時分也、暮の字に三句なり、かきくらす心・泪にくれて・昊〲などは夕時分にあらず。暮の字に二句去也。

山類なり。一座一句の物なり。

草枯に花の残る　炼也。枯野にも同じ。惣別名草のかるゝは冬なれ共、花の字・色の字・露などむすべば炼なり。荻・芦もかるゝといへば穂の字あれば炼也。

水鶏　水邊なり、夏なり、夜分也。連には一句の物なれば、誹には二句すべし。句のたけをかへて可レ然也。

沓　衣類にあらず。はき物の類に二句去べし、誹には沓二、其外折をかへ馬の沓又有べし。くつのこを打たるやうのなど云句も沓二の内也。哥の沓冠も同前。足の沓・ざうり・わらんぢ・踏皮・きやはん等の足ならで用に立ざる物は付べからず。舟に櫓械とて同意に成也。

朽木　と云句に杣と付て、又仙の名所不レ可レ用、新式如レ此。是は万にわたるこゝろ持也。朽木の杣斗にかぎらず、木枯と云句に森と付れば、前句の木枯則名所の木枯の森に成故也。又、名所ならぬ句にも此類多し。たとへば弓を落と云前句に判官と付て、又、八嶋軍の心を付べからず。打越はなに心なき弓を、八嶋にて義經の落されたる弓に付なしたれば、弓流しの弓に成たるに、三句めには橋渡しの判官か、塩谷の判官かの事に付かへたるが能也。連誹共によき師匠にならはぬ人、毎度此やりやうをあやまる事也。是此道の第一の大事也。

國の名と國の名　可レ隔二三句一、誹には二句去也。

國の名と名所　可レ嫌二打越一、以上新式。誹も同前。國の名と名所つけてはくるしからず、打越をば嫌たり。二句去の物は付事わろし。それをば二句去と書也。打越をきらふも二句去ながら、付てはくるしからざる物を打越を嫌とは書也。問云、國の名に國の名は付事あしき歟。答云、付てもくるしからず。爰に國の名をば二句去とし、名所をば打越を嫌と書事は、連には國と〲の三句去を、誹には二句去となすによりて二句去と記レ之。國と名所は連に打越を嫌とかける新式の文法を、そのまゝ書故にかはりめあるやうなれ共、誹には國と國・〻と名所も皆二句去也。

國の海　名所也。新式にかくのごとくあるはたとへば、いせのうみ・伊豆の海・近江の海など云は皆名所になる也。國の名

にも名所にも三句去と云事也。誹には二句づゝ去也。

くれ竹のふしみ　植物と成也。草木に二句。竹とは五句也。

櫛　誹には二ある也　馬櫛此外にあるべし。

暮　三句去也　夕の字には二句、春秌の暮ろ・老の暮・年の暮・夕時分に二句なり。暮に夕立も二句去なり。くるゝ夜と云詞、時分也。夜分にあらず。

くらき　ばかりいふては夜分なりと無言に有。是新式の説にあらず、不ㇾ可ㇾ用。くらきよりくらき道にとよめるも冥途の事也　但、かやうのくらきにやみ、同意成べし。生死長夜の闇と、佛も冥途を闇の夜にたとへ給へば也。くらきと云詞ばかり識の夜分に成べき道理なし。かきくらし・かきくれて、暮にあらずといへり。然れども暮の字に二句嫌也。是無言の説也。げにと思はれながらよく思案すれば、此詞夕時分にはあらざる程に、朝時分には不ㇾ可ㇾ嫌。夕時分には二句嫌べし。暮の字には同字かとおぼゆれば三句可ㇾ去也。かきくろまかすと云事かと存ずれども、只暮の字正字成べし。かきくらしはかひくれてといふ事也。されども時の間にも云事なれば、夕時分にはあらず。乍ㇾ去、依 句昧ㇾ夕時分にも成べき也。よく〳〵分別すべし。

蜘手　橋ならでもよめり、虫類にあらず。蛛の字には折を嫌べし、手には面をきらひ、手枕・手輿などには七句去べし。

蛛　一、蜘蛛と一、蛛手一、以上三あるべし。蜘蛸・蛛舞も此内也。又蛛となくてさゝがにとばかりも三の内成べし。

くだす　に、したなどの字、二句嫌也。但、誹に下知・宣下など云句は、くだす事なれば、是には三句嫌べきなり。

灌佛　四月八日也。佛誕生（脱）の義式ある也。

くす玉　五色の糸にて作る物也。夏なり。

梔の花　夏也。梔染は衣裳の色也、雜也。梔とばかりも雜也　薬種の名同前。

雲の峯　夏也。六月照日の時分に、白雲の容にたかき峯のやうにかさなるをいふ也。山類にはあらざるべし。

くづれやな・くだりやな　春秌たり。

朽葉　冬なり。色の字入ば秌なり。

誹諧御傘（六）

屋

欵冬　只一、誹には欵冬の瀬・欵冬色の衣・又はくわんどうと聲に讀て、此内折をかへて今一有べし。山の字・吹の字にも不ㇾ嫌、付てもくるしからず、春也。ひきゝ植物なり　又、蛙に欵冬と付てもくるしからず。蕐の名に欵冬と云は蕗のとうの事也。蕐の名ならば、やまぶきに是も付てくるしからず。根本欵冬の字をやまぶきと讀は日本のあやまりたり。され共上代よりの義なれば、今更あらためずしてをく也。

宿　只一、旅に一、やどり、此名にあり。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又あり。此新式の文章を案ずるに、一座二句の物に出しながら四句あるやうに聞ゆ。是は宿とやどりと別にして、二句づゝあると云事成べし。然ば誹には宿二の外に、

しゆくと聲に讀て今一有也。宿にやどり、速に折を嫌へば、誹には面を嫌也。月・露・鳥などのやどりは、宿に七句去也。やどりには折を嫌なり。

やどり　一、鳥・露に又一、新式如レ此。やどりも二句也。誹には此外に辰宿・二十八宿の類今一あり。宿二、やどり二、しゆくも二あり。何の宿にても、やどりにても差別をたゞさず、宿・やどりの裏に聲に讀て宿の字有也。しゆくと〳〵は折をかゆべし。しゆくの事、しもじの所に尙有。

屋の字　芦屋・苫屋などの類也、四也。誹には町屋・酒屋、又はおくと聲に讀てもすれば一座五句に成也。馬屋は別に厩の字有故、屋に七句去也。宿・屋とり・屋ねには五句去也。家には三句去也。

柳　只一、靑柳一、秋・冬の間に一、誹には此外に柳箱或は楊柳觀音・柳下恵・柳營・柳文、或は柳樽・柳が浦・柳の水などの間に一あり、以上四の物也。是等は皆雜也。植物にあらず。但、此内柳の水は名所にあらず、只柳の陰にある水をいふ也。故に春也・植物也・水邊也。乍レ去村井春長軒所司代の時、三條西洞院川の邊に淸水出たるを、柳を植られしより所の名に申せば、名所に准じて植物に二句嫌べき也、春にはあらざるべし。問云、春長は信長公の臣下、天正の比の所司代也。能因が哥枕にも名寄にも不レ入事を、名所にもちひん事如何。答云、誹には小哥・かぶきの類をさへ付合に用ゆ。其上片田舍の侍にもあらず、京都の所司代なり。又、昔より同じ西洞院通の末に柳の水とてありし。其水とひとしきとて付られたる名也。あまねく人の知たる事なれば、名所にすまじき道理これなき歟。但、其座の宗匠次第たるべし。當世の詞に物を柳にやると云事、又、柳髮と云事、皆植物也、春也。柳四の内也。又、やうじと云事、楊枝・楊齒とも書と申せば、柳の字に付句斗を嫌也。植物にも春にもあらず。此比柳樽と云句を、糸とも、みどり共いろえずして春をもたする事不レ可レ然。柳に雪を結ても春也。柳ちるは初秋なり。惣別名木のちるは秋也、名草のかるゝは冬也。

藪　植物に二句去也。只草木の多き所を云也。園と同じやうなる物也。其内に園は一所うちかこみてあるを云、藪はひろき・せばき、しどろに傍爾もなきをいふ。今世上に竹原を藪と申は誤なり。園には竹を付てもくるしからざるまゝ、藪にも付べき道理ながら、うち聞同意成べければ、かまへて〳〵付給ふべからず。かやうの事時代にしたがふならひなれば、人の心にそむかぬが能なり。万に渡る事也　竹には二句去也。連哥に一座一句なり。誹には藪殿・藪くすし・藪入・やぶにらみ・藪力・藪疊等の内今一句有べし。以上二句也　藪じらみ、鶴虱と云草の異名也。是も同前。

箭　一、年の矢一、速に二あれば、誹には、矢はぎ・矢立・矢莢・矢筈などの類の誹言、今一、折をかへてある也。

山城のとばぬ　と云詞、名所に打越を嫌也。速に此言葉過て鳥羽と今一あれば、誹には折をかへて鳥羽院・鳥羽殿など今一もあるなり。伊勢の鳥羽も三の内なり。鳥羽、生類にあらず。若鳥の羽と云句あらば鳥羽の字、面を嫌べし、翅は不レ可レ嫌。山城のとばぬなど耳にたゝざ

れば、羽の字に三句嫌也。

山姫　雑也。山類也。山祇と書て和名に山つみと讀也。山姫の事也。山の神をいふ。され共神祇にあらず。

山賤　山類にあらず。山字に三句これを嫌べし、人倫也。やまびと、山類にも人倫にもあらず。仙人と書故に山の字に二句、人には三句去也。丸、昔山賤は何とて山類をのがるゝと人に問侍れば、山賤は手足あるものなれば、山斗にはゐぬ故といはれしほどに、さあらば浦人も水邊にあらざるかと申せば、閉口せり。かほどの義たれ共正理を知人すくなし。是は只心なきいやしきものを、賤・山賤といひおとしめたる詞に成故に、山の字はあれども山類にならぬと見えたり。里にすめ共賤をば皆山賤と云也。やまびとは仙人とかけば山類に非ず。仙人は必山にのみすまぬ故也。それも山に住人をさして仙人ならぬやまびとならば山類に成也。句躰にて聞分べし。万事細に理非をたゞさぬ宗匠は、なきに劣り侍るべし。

山かづら　曉の雲の事也。夜分たり、聳物也、山類なり。又、まきもくのあなしの山の山人と人も見るかに山かつらせり。是は古今集の神あそびの哥也。曉の雲にはあらず。山人の頭に草のかつらをまとひたるやうに、神樂乙女のうつくしきかざしをほめたる哥也。今猿樂のかづらの能と申、かづら帶と云物を額にあて、うしろに結びさぐる由來を、今春太夫、誰にたづねても知人是なしと不審有しと、觀世庄次郎かたられしほどに、右の古哥を取出して是成べしと申聞侍し。されば此山かづらは、山賤の頭にしたる句躰のかつらならば植物成べし、夜分にはあらざるべし。山類には成べき歟。但、山賤、山類にあらざれば、此山かづらも山類をのがるべき也。

山と山　三句去也。山路とばかりは旅にあらず。

山鳥　山類にあらず。山の字に三句嫌。雑なり。

山の色　植物に打越を嫌也。秌也。但、句躰によるべし。

山と山の名所　同前と新式にあり。山の名所とあるは山の字不レ付とも、たとへば、富士・淺間・大びえなどゝいふ事也。それにも又差別あり、賀茂・春日などは賀茂山・春日山とはいへど、山斗にはかぎらず、野も里も有。郡などの類は山類にならず。

山の滴・山の雫　ふり物にきらはず。

山科の宮　山類にあらず。山科と斗も同前か。

山の端　に峯・嶽・高根・尾上、無言抄には五句嫌也。紹巴のかゝれし五百ヶ條には、山の端に嶺、面を嫌とあり。是更に聞えぬ事也。山の端といふは、ひきゝも高きも、ひらきもながき山にても、その山のはしをいふ也。峯とは別してぬき出て高所を云なり。文字にも山の下に鋒と云字の作りを書たり。鋒を立たるごとくさきのとがりたる姿也　山の端に面迄は嫌がたし。無言に五句去とあれば、誹には三句去べし。乍レ去山の端に峯・嶽・尾上、何れも似たる事なれば互に不レ可レ付。それも句心各別ならば、上手は付ても苦しからず。定たる指合にはあらず。打越をば嫌べきか。

山下・山もと　などに夕かげなどは景の字也。二句嫌と無言抄にかけり　誤也。

一切不レ嫌レ之。

山ぎは　など云には、いづれのかげも不レ嫌レ之。

山かげ　とありて、又、山ふかきかげなど〻折をかへて又有べし。誹には山かげと二有て山のかげ猶有、以上三也。

山のにしき　紅葉の事也。誹には紅葉に面をきらふ。

山の色　野の色・草の色も紅葉する事ながら紅葉に面をきらへば、誹には七句去也

山柴（しば）　などしては植物なり。但、句によるべきかといへり。かる・はこぶ・になふ・ほす・たく・こるなどあれば、うへ物にあらず。からぬさきにも柴の立枝（たちえ）、そよぐ山柴、など〻哥に侍るは皆うへ物也。

山里　と云句に、柴の戸・柴の庵の類・同じ事也。不レ可レ付レ之。

山　にうらやましきと云詞、付句もくるしからず。浦の字にも同前。

社　にみやつこなど付事不レ可レ然といへり。是無言の説也。宮津子と書かとおもへる歟、さにはあらず。大友のとものみやつことよめるは、大伴氏の人の下人を云なり。御奴（みやつこ）と書が能也、宮の字にはあらず。然ば付ても不レ苦。

八幡（はた）　と云句、名所也。又、八幡の御利生などあらば、神の御名にも成べし。八まんと云句過て名所のやはた、折をかへて又有べし。ばはんとは盜人（ぬすびと）の名なり。八幡と書といへ共、八まん過て又有べし。やはたにはすこしもきらはず。

八重　と云詞、連に一あれば、誹には二有べし。重の字、連に面を嫌へば誹には七句去也。重の字にかさなると云詞、又ぢうと聲に讀句は三句去也。字は同じ事ながら、おもしと云時は付てもくるしからず。

闇　にくらき、同面を嫌べし。無言抄に、く文字の所を見れば、くらきにやみ二句と有て、今又爰に面を嫌と出せり。前後相違せり。惣別くらきにやみを嫌事、句躰による也。道のくらき・窓のくらきなど、世界のくらきにはやみ同意なり。右に申ごとく、家のくらき・木の下くらき・智惠のくらきといふは皆異の事也、なんぞ闇にきらはんや。乍レ去此無言抄の面を嫌といへるは、くらき夕・くらき曉・月日の出ぬ闇はくらき・くらき夜の窓などは、闇と同じ句躰なれば面を嫌とかゝれたる物歟。智惠のくらき・箱の内のくらきなどには、闇付てもくるしかるべからず。如レ此道理をわかたず、一句嫌とさだめん事は合点ゆかざる事也。目のくらき・心のくらきなどに、やみは各別の物なれば、上手は付ても同意にはなるまじき物にて侍る。よく〱差別有べし。此内に木の下くらきなどは、木の下やみ共いへば二句可レ嫌也。闇・くらき夜、誹には七句さるべし。

彌生　に夏ちかし、みな月に秋ちかしなど付事同意に成もの也。同意にさへ聞えずば、指合にはあらず。

やよひ山　名所にあらず、たゞ春の山と云事也。

や文字　折合を嫌。うたがひのやは二句去なり。疑のや文字・か文字有句は、てとまり・にとまりならぬ物也。

やけ野　山をやく・原をやく・畑（はた）燒・荻のやけ原・草をやくなど皆春也。

魚梁（やな）うつ　夏也。

満

松と松　五句去也。但、人をまつといふ事を面にして、木の松を裏にかくしたる句あらば、松の字に二句なり。

松風　松の風といひかへて二、但、の文字不レ入しても二あるべし。の文字をいれては二不レ可レ有、連にかくのごとし。誹には、せう風と聲にいひて今一、以上三也。謡にある舞の名の松風も三の内也。

松風の時雨　冬の季を持故に降物に二句可レ嫌。松風の時雨、似せ物成に冬になる事如何と存ずれ共、新式に泪の時雨を冬と定たれば此分也　涙は常にしぐるゝをいへば、人の不審すべき義ながら深心有べし。泪の雨をば降物に不レ嫌、時雨をば冬になしてふり物にもきらふは、古人の心はかりがたしと可レ知。此道理ながくしければ爰にしるさず。

松風の雨　雨に面、誹には七句去也。降物に二句嫌ふなり。

松の聲　同ひゞき、風躰に二句去なり。

松の緑　雜也。緑立は春也。若緑同前。或説に緑そふも春とあれど、道理あたらず。そふと云は、只緑の色のふかくなるを云也。立と云は、あたらしき緑の出生する事也。各別の義なり、不レ可二信用一。

松の花　百年に一度づゝ咲物なり。初春なり、正花にはあらず。

松の煙　そびき物に二句去なり。

松蕈・松虫　松の字に三句さるなり。

松嶋・松崎・松浦山　等の名所は松の字に三句去也。植物にあらず。松山・末の松山等は名所たりといへども、松の字に五句去也。其所に松有故なり。

松嶋　山類にもひきたらざるのよし。然而都にあらざる上は、山類・水邊たるべきのよし、近年定らるゝと云々、以上新式。

松の門　居所也、植物にあらず。但、松の有門の句躰ならば可レ為二植物一。松の木柱、植物にあらず。依二句躰一可レ為二居所一。松垣、居所也。松の生木をする事もあれば、柴垣とはかはりて句によりて可レ為二植物一。ともしの松・續松・名所の松室・松が崎の類、以上非二植物一、正月の松嘲うへ物に二句。人の名に云松、うへものにあらず。衣裳の紋の松竹も繪に書松も同前。香の名の松根も同前。正月の門松は、根なくして薪のやう成物なれども木の植物なり。子の日の松と同じ。

松膠　植物にあらず、松かさはうへ物なり。問云、やにとかさとの不同如何。答云、膠は薬のために取用もの也、かさは生木にあるを専に興じていへば植物に成なり。松の葉も松の落葉も植物也、たとひ焼としても同前なり。一説にたくは植物にあらずといへり。ほしからしてたくは私也。木のもとにて寄葉をもたけば、紅葉をたくとひとしく植物になるべし。盧次に松葉をまくも赤葉なれ共、其志は松を愛してする事なれば、植物になる也。但、かやうの巨細成去嫌は其時の宗匠次第にすべし。松むしり、春也、鳥の名也、植物にはあらず。松露・松子、松の實をいふ。干からしして菓子にするものなれども、根本はうふる物なれば植物也。

籬　誹には二、霧・霞の籬・まがきが嶋・東籬など聲に云て今一有也、以上三つ也。

待戀　二、誹には三。是は待と云字を入たる句の事なり。松虫・松風にいひかけても三句の内也。待の字さへいらずば、待戀の句いくつもあるべし。連に待の字いらねども待戀の心あらば、二の外に今一あるやうにさたせり。尤ながらそれにては諍論起る事也。とはれぬのこぬの・音づれぬなどの類也、不レ可レ制。

秣(まくさ)　植物にも生類にも草の字にも二句嫌也。馬の字に連に面を嫌へば誹には七句なり。

枕　五句去の所に委し。枕香のこがのわたり、東國の名所にあり。こがるゝといはむために枕香と五文字に置也。然共此時は夜分にあらず、枕の字には誹に五句也。

槇　には木の字を不レ嫌。眞木柱・眞木の戸には木の字五句可レ嫌。（眞木の故也。）以上新式。槇・柿・柊等のきの字の付たる木に、木の字を嫌事は努ゝなけれども、まきといふに二色有。木篇に眞の字を書は、槇立山・槇の葉などゝ云時のまきなり、植物也。木の字に不レ嫌。又、眞木と二字に書は、眞木の屋・眞木の戸と云時のまき也、植物にあらず。木の字にも眞の字にも三句嫌、眞木と二字にかくときは、よき材木をほむると葉也。

まさき　に木の字、二句去也。柳・柊などには不レ嫌。柾(まさき)に嫌事は、まさとばかりも木の名を云によりて也と云ゝ。柾は草也、色共かはる共なけれ共、つたと同じく秋に成べし。是に草と木と兩説とりぐ\にて、冷泉殿と宗祇法師とあらそはれけるに、後撰の哥又俊頼の深山落葉の題にて、日くるればあふ人もなし柾ちる、とよめるうへはとて木の部に相定らるゝといへり。丸つくぐ\と思案するに、草なるべし。右の哥も根本神樂の哥に、太山には霰ふるらしと山なる柾のかづら色付にけり。是を本哥にしてよめると見えたり。葛を略して柾木と斗よめるに、なにの疑か侍るべき。絡石(らくせき)と云事有、石にまとふとよめり。和名にそれをまさきのかづらとも、定家葛共假名を付たり。其葉丸く、枝のさきぐ\に根を生ずると本草にあるにより、それならば此草は柾といふ木の葉によく似たり。此柾と云木は常夏となづけて色のかはらぬもの也、それを定家共いへり。是はかづらにあらず、只ときは木なり。是に兩種あり　一種は木かとおもへばふとき葛にて、さきぐ\に根を生じて人家の壁にとり付て有也。是をも定家共柾とも常夏とも云也　右に云絡石是也。乍レ去地下に有故か紅葉するとは見えず。山路・岩ほの上などにては紅葉するにてこそ侍らめ。但、今一種は哥によむ柾のかづらは絡石にあらずして、うつくしく色付かづらのある歟、山家のものに尋度事也。ある人の云、田舍にまさきと云に、め木・お木あり。め木は枝ほそく、かづら也といへり。しかれば俊頼の落葉によめる柾と斗は木の事歟。まさきのかづらと云時は草か。又、此説も右に云絡石の事と見えたり。葉も椿よりはちいさく丸きといへり。それなれば常夏也、紅葉する物にあらず。とかく哥によめる柾は、別に紅葉する草の有と見えたり。いかに大成木なり共、かづらと云類は草に成也。乍レ去藤を木に讀たる古哥あり。これは本草に木の部・草の部兩方に兼用故といへり。其類多し。されば柾

も藤の類に双方にくるしかるべからざる歟。尙後世の君子をまつ。但、木篇の文字を草といはんも如何なれば、柾といふ時は木の類たるべし。又、かづらとよめるを木といはんも如何なれば、まさきのかづらと云時は草にして然べしと存ず。髄成說いまだ不レ出間は、此定に誹にはし給ふべきか。

鞠のには 庭の心ならば一の外如何と新式に有。是は連に庭一、過て鞠の庭共なければなり。誹には今一あり。惣別四ほんかゝりを植て見る物なれば、庭の字本にて居所にも可レ嫌也。但、昔住吉の松原などにても、又當時座敷にても、けるに鞠たり。場の字の心あるにより新式にかやう故、場の字の心あるにより新式にかやうに載たり。誹にはまりばとなくば、皆庭のにはにすべし。庭と場の嫌やうは、にの字所にくはしく侍る。

窓に戸 二句去也。近代面をきらふ。或は五句嫌とさたせり。勅を受たる新式をもどき侍るほどの義ならば、其道理をことはるべきに、なにのいはれなく去嫌事誹には不レ可レ用。委は、と文字の所に記し侍る。

眞薦 水邊也、植物也、雜也。刈は夏也。或は編たる薦、或は薦僧などは、水邊にも植物にもあらず。

眉の霜 述懷也。冬にあらず、降物にあらず。眉いくつといふ沙汰、連になし。誹にはかはりて三可レ有。山眉・柳の眉・蠶の眉・へつゝいの眉・ゝ作り、草の名の眉作、皆三の内なり。草の名の眉作あらば實の眉作不レ可レ有。眉間も三の内なり。眉間尺と云人の名は三の外、眉と面をかへて又あるべし。

また寢・まどろむ 皆夜分なり。

まどろむ 夜分なり。

まこと に事、付てもくるしからず。

まじ 誹には二なり、誹には三有べし。折を嫌也、とまりならずば二句去なり。あらじに嫌はず。

松尾祭 四月上申日也。

氣

今日 二、誹にはこん日と聲によみて今一、折をかへて以上三也。

けふ に昨日・明日、二句去也。今日に今の字不レ嫌。但、誹に聲に讀てこん日とあらば、今の字に二句きらふべき也。

今朝 に今不レ嫌。但、誹にこん朝といはゞ今の字に二句。てうの字は、あしたに折、あさに七句去也。

けふのこよひ 夜分にあらず。惣別けふの字入ば、夜分の物も皆のがるゝなり。

煙 とけぶり、何の煙にても誹には五句去也。煙に、たく火・塩やく・炭やく・かやり・ふすぶる・もくさたくなど不レ付、同意に成なり。柴は直にもゆふ物なれば付てもくるしからず。松・竹等の煙には、火のうはさ付てもくるしからず。松・竹・柳・水草・眉目・本のけぶりなどの似物のけぶりには、雲・霧・霞、又和漢にせらるゝ靄の字等のそびき物打越を嫌也。付てはくるしからず。又、何のけぶり共なくする煙は、無名の煙とて夢想や祈禱の會にいむ事なり。是無常の煙なり。又、漢の方に煙雨中などあるは、無名の煙にあらず、雨の曇たる躰也。是はまとの聳物になりて雲・霞に三句去なれ共、誹には二句なり。思の煙・胸の煙・戀のけぶり

等、絳物に二句去なり。油煙の墨・絳物に付てもくるしからず、煙の字には五句去也。ゆゑんとばかりあらば、絳物に二句嫌べし。それも墨の事にしたてたるゆゑんならば絳物に不レ嫌。

毛をかふる鷹　夏也。諸鳥も同前。

獸とけた　三句去也。

獸かり　夏なり。

けり・けらし・けき　等のけもじ、二句去なり。

けり　誹には五あり、面を嫌なり。

けらし　三假名ゆへ面を嫌。誹には七句去たり。とまりには誹に三あり、折を替べし。連にけらしは、らんに不レ嫌といへり、是誤なり。二句嫌べし。らもじの所に委。

けらし　は、らしにも、らんにも不レ嫌と連歌にいへり。そのゆへをとふに、けりといふ詞のかはりと申されし也。丸つく〲と分別するに、古哥に櫻花さきにけらしなとあるを見て、さきにけりと義理を付られたる註おほし。その註のあやまりをしられざる故なり。その註は皆連哥師の註なり。哥讀の註にはけりにあらず、咲にけんと云を優長に句をのべて、けらしとつかひたる也。けるらしといふ事なるを、いやしければ、るもじをのぞきてけらしとつゞけたるばかりなり、けりと落着したる詞にはあらず。けらしもうたがひのらしなり。これ正理なり。向後らし・らんにきらはぬといふ説は信用せらるべからず。これ數十年の誤を只今たゞし侍る。かやうのあやまり近代の説におほく是あり。二三百年以前の人達の説をやぶるやうなれ共、五百年・千年さきの古人のこゝろにさへあはゞ、速に惡説をばすつるよきなり。人くらべをばし給ふべからず、たゞ理のなす所を哥道の正義と思はるべし。唐の儒書の古註・新註に同じ。

はるけし・しづけし　やうのながき詞は、連に折をきらへば誹には面を嫌なり。

下知の詞　二句去也。

婦

故郷　只古郷とばかり申はゐ故郷とて、ふるき都の跡、又都ならでも昔の里をいふなり。名所の古郷は奈良・志賀・難波・吉野の類なり。此二の内一、此外に旅の古里一、以上一座に二句あり。誹にはゐふるさと一、名所に一、旅に一、以上三句有也。古郷と聲に讀ても此三句の内成べし。名所の古郷過て、ふるき都あれ共折を替也。旅の古郷に都は面を嫌也。ふるき都も嫌といふ説は不レ用 旅は田舍の人もする事なれば面々の國を古さとゝさせ共、先は都の人田舍へ下りて都を古郷とさすが本なれば、都を嫌は尤也。古き都と云は平安城にあらず、昔都なりし所を、名をさしても名をさゝずしてもいへば、旅の古郷にてあるべきいはれなし。此故に一向不レ嫌。ゐ古郷に都、不レ嫌。ゐ古郷過て、里ふりて共不レ可レ有。誹には今一あり。名所の古郷に都・九重・京の字など面を嫌。月の都・龍の都などにはいづれの古郷も不レ嫌。古郷は一座三句の物なれども皆替てする也。同古郷をば二せぬ也。同古郷とは、ゐ古郷と〱・名所と〱・旅と〱の事也。

皇居の古郷　と申は、奈良・志賀・難波などの古郷也。是は居所に二句去也

里の字には誹には三句去べし。

古　と云字は連に折を嫌とあれば、誹には面をかゆべし。しかも聲に讀て出がちに以上一座に五ありと可ㇾ知。先に如ㇾ申いにしへには二句也。昔には依二句躰一一切不ㇾ嫌。但、ふることなどの類には、むかし二句嫌なり。年をふる・月をふるなどは文字別なれ共、依二句躰一二句嫌事も可ㇾ有。古郷は面八句の内には誹にもせず。但、旅の古郷はくるしからず。

藤　只一、藤原一、季をかへて一、但、季をかへて又可ㇾ有事無用にやと云々。新式如ㇾ此故に連に他の季の藤なくして、春の藤と藤原氏と近来二句の物とす。誹には他の季の藤・つゞら藤・藤つぼ・藤[illegible]・藤こふ・藤衣・藤布・藤身などの内今一ありて三句の物也。又　とうと聲に讀藤にも不ㇾ同あり。藤大納言・藤宰相・近藤・後藤などの人の名は、藤原氏の内に成也。藤原都も藤原氏の中なり。藤四郎・藤三郎も同前なり。藤原氏と出勝也。聲も讀も一座三句の物也。皆折をかゆべき歟。藤原氏・藤原の都、藤也　藤は草也。古歌に木に用たる事あれ共、連誹には惣別かづらは草に用也。又、物をまくとうと云物あり。藤の字をかけ共藤に面を嫌ひて、植物にもあらず、春にもあらず、藤三の外也。

文　戀に一、旅に一、文學(ぶんがく)に一、玉章三句の内なり。誹には戀にても旅にても文學にても三の外に今一、(二、說た)ぶんと聲に讀て有也。皆折をかゆる也。新式に文學とあるは、たとへばからの文をまなぶ・文の卷〱など有事也。玉章と云は戀に成と人おもへり、さにはあらず。玉はほめたる詞也、づさは文章の事也。しかれば文のかへ詞也。戀の文一あらば戀の玉章なし。旅の文一過たらば旅の玉章あるべからず。文學の文過たらば文學の玉章有べからず。文三の外に今一可ㇾ有分少々、廻文・文章・文言・文者・文學・文武・案文・經文・起請文・願文・諷誦文・證文・文書・文臺(だい)・文車・遣文・文箱・文道・文才・文筆・文集・かやうの類也。又、文の字に五句嫌べき分、文明・文安・天文の類、(是等は年号也。)公文所、琳(りん)、(是は晉人の名也。茶器に文琳といふ是、是も此字をかくなり。)天文博士(てんもんはかせ)、(官也、非二人倫一。)文珠(殊)(菩薩の稱(依二句躰一人倫、居所也)名也。非二人倫一。)文盲(もんまう)、(是は蚊蝱(もんもう)にかけば文に二句也。)文學坊、(高雄の僧)也。和漢聯句の法度に僧と仙人をば非二人倫一といへども、誹にはかやうの出家を非二人倫一とゆるせば、沙彌・喝食に法師原・坊主・野伏・山伏・入道等までも皆沙門の内なれば、諍論出來故に僧の字斗を人倫にせぬ也。新式人倫にあらぬ僧と出せるは、凡僧にあらず、文珠・普賢・觀音・勢至の類を申也。佛法僧を三寶と号す、此僧の事也。僧の字付ても、小僧・惡僧・芋ほり僧・貧(ひん)僧の類は皆人倫なり。僧正・僧都などは官名なれば人倫にあらず。但、達磨を始め卅八祖、其外諸宗の開山、亦開山にあらず共大師号・國師号・菩薩号などをかぶりたる出家は不ㇾ可ㇾ入二人倫一。是新式の本意と知給ふべし。いかに名高き僧なり共、大師号・國師号をかぶらざる僧は、人倫にきらひ給ふべき也。いづれの文にても、文の字に付がたき物は墨・筆・硯是也。但、繪筆・墨繪などは付てもくるしからず。又、年号・人の名などのぶんの字には、墨・筆・硯少もくるしからず。いづれの文と書たるは、戀・

旅・書籍の事を申侍也。文學の文にまなびの字不可付。それも別の藝能を學ぶとせばくるしからず。戀・旅の文筆の跡・水くきのあと・鳥の跡・手習能書の類、不可付。戀・旅の文、玉章に紙・捻・折紙などは面を可嫌也。文書の文に草子・繪草子はくるしからず。學の窓・翰林學士・講尺書籍・卷物、面を可嫌。戀・旅の文、玉章にはすこしもきらはず。又、連歌には筆の跡・鳥の跡・水くきなども、此文の三句の内也といへる人あり、是誤也。句躰によりて各別の義也。誹には文四の外に仕て更にくるしからず。戀の文過て、たとへば君がかたみの水くきのあと、など戀の文の句ならば折をかへて可有文と云字入ぬ故なり。只手跡の見事成事などをほめたる句ならば、戀・旅・學の文と裏面にありても少もくるしからざるべし。よく／＼共座をさばかん人は、かやうの事各別可有もの也。又、文に文月五句去とあり、是は誤也。文の字けやけき故に、新式に一座三句の物になせり。惣別文月といふ事、七夕に天下の文書をさらすゆへなれば、文學の文に同じ。然共七月の異名になれば、ふ月といひても、文月といひても、文の心せられず。併文の字に七句去べし。星に手向る文月の空などゝ云句ならば、學文の文過て不可有、文四の内に成也。もし又文書の心なき文とばかりたらば、水くき・玉章・筆の字等すこしもくるしからず。

筆　只一、誹には、ひつ共がう共聲によむ句を、折をかへ今一句有也。筆試春也。

筆の跡　に鳥の跡、折を嫌ふ。誹には墨跡・筆跡などゝかへて三句有也。連に折をきらふ句をば、誹には裏に有といへども、是は一座に只三句ありて、けやけき句なれば何も折をかへて用べきなり。鳥の跡と云も文字の心ならずば只字去の跡なり。立行鳥の跡などの句なり、筆の跡に折を嫌はざる也。

ふゞき　雪吹と書也。雪に七句、風躰に三句、花の雪吹とは春也。雪に花の雪吹二句ばかり可嫌歟。降と云字には面、吹の字に三句也。餘の降物にも三句也。ふゞきとは、ふりふくと云詞の略なり。雪ふり風ふくなり。

降の字　連には折に一づゝたれば、誹には面に一づゝなり。問云、一座四句の物をば一句まさりにて五句有を、是は一倍になせるは如何。答云、かやうのかろき字はおほくあれば誹諧仕よきゆへに、態如此輕重をしらず、法度を定るは愚盲師のする事也。但、同じ降物ならば折を嫌ふべき也。

富士　と斗も山類也。富士川、山類にあらず。

ふかみ草　廿日草共、たとり草とも、ちよみ草共云、皆牡丹の名也。詩には春の部なれ共、夏の景物少故に連誹には夏になす也。新式に一座一句の物なれば、誹には牡丹一、和名に一、折をかへて以上二句也。一説に芍藥をぼたんと心得る事あしゝ、各別の草なり。付てもくるしからず。

深き浅き　此き文字嫌事此類是多し、不可然。付句にも不嫌。ふかきにみ山のみの字、打越を嫌なり。ふかき野・植物にきらはず。

船　誹には五句去也。旅也。但、舟と斗は旅にあらず。旅に不ㇾ成(なる)分、川舟。但、渡川舟は西海を行人の用なれば旅なり。つなぐ・かへる・とむる・さす等の詞を入れば非ㇾ旅。とまり舟も旅にあらず。渡し舟、連に旅なりといへり。渡海の心持にていへる也。大略渡し舟と云は、橋のなき川に木こり・草かりも往来する事なれば旅にあらず。無言抄等に渡し舟旅なりとしるせるは、新式を見そこなひたると見えたり。新式に云海路の渡舟は旅也 依ㇾ句不ㇾ可ㇾ為ㇾ旅也云々。芦わけ小船・すて小舟おぼろ舟・たなゝし小船・うつほ舟・是等非ㇾ旅、酒舟・馬舟、不ㇾ及ㇾ云。左近舟、非ㇾ旅としるせり。これは商賣の人ならねば云成べし。さやうに心得侍らば、業平などの東下も旅にあらざるべきか。流(る)人の舟は遠國へゆくなれ(ば、脱カ)海路の船なり。もつとも旅なるべし。龍頭鷁(げき)首は天子の船也、旅にあらず。御座舟は貴人の舟也、貴人も海上を渡らせ給へば旅なるべし。池の舟・釣舟・花いけの舟・あまぶね・いさり舟・米舟・もかり舟・柴舟の類、皆旅にあらず。小船、舟の大小か。海にもあればいかにちいさきとても、さす・つなぐなどなくば旅なるべし。たゞし句躰によるべし。さほさすふねは、さす舟なれば旅にならず。詩などに舟に棹さすと、海上の舟にも作るは櫓械(ろかい)の事をいへり。哥には川舟の竹ざほにてさすをいへり。作ㇾ去棹のうたといふは、竹ざほにかぎらず、海上の船頭の舟哥をもいふと見えたり。連誹にはさほにてさす舟・棹のうたにては旅にすべからず。舟哥とあらば旅にすべき義也。古人のよく／＼分て置ざるかやうの指合は、只其座の宗匠にまかすべき物也。

船の字　天磐(いは)舟・天河舟等可ㇾ隔㆓五句㆒、不ㇾ可ㇾ為㆓水邊㆒。舟岡山・御舟山等舟の字に三句きらふべし。

冬の月　春・夏・冬一づゝ連に三句の物なれば、誹には四句あり。冬月斗四句はあらず、其内に三日月・有明を加れば四ありと云事也。冬の月とは、さむき・さゆる・時雨・霰・落葉等に結び入たる月也。三日月・有明たくては、冬季の月は折をかへて只二句ありと知べし。寒月など譬に云ても此二句の内なり。

冬枯の野山　等に植物、打越を嫌ふ也。

冬と冬　五句去なり。

麓(ふもと)　二の物なれば誹には三有べし。一は名所たるべし。山もとに面を嫌ば、誹には七句去べし。

ふるき衾(ふすま)**・古き枕**　共に戀也。哀傷の心あれども戀のかたに引る也。しかれば哀傷など打越には用捨あるべき歟。右無言抄の説也。是を戀と定る事、長恨哥の語ゆへなるべし。貴妃の事を數句(なげく)躰ならば戀なるべし。一天下の死人の枕衾を、なんぞ戀とさだめんや、只哀傷也 もし戀の句たらぬ所にあらば、前句にひかれて戀なるべし。又、古枕・古衾、戀を付たらば、其時句に引れて戀に成べき也。只うちまかせては哀傷ばかりなり、可ㇾ依㆓句躰㆒。かやうの事なり。衾、夜分也、冬也、露を結ぶは秌也、冬と云説不ㇾ用。

ふしづけ　冬也、水邊なり。生類には打越を嫌、柴㆓面を可ㇾ嫌　日本記(紀)に柴と書てふしとよめる。然ば折をも可嫌歟。

誹には面を嫌なり。

吹と〳〵　字去也。無言に面を嫌ふなど丶侍る、失念歟。笛をふく、風躰には不レ嫌。但、吹と云字・風と云字は二句去也。

ふくろふ　夜分なり。

更の字　夜分也、折を嫌、誹には面を嫌。月のふくる有て夜の更と以上二、連にあれば、誹には深更など丶聲にいひて三有べし。これらは夜分の更也。秌ふくる・人の年のふくるなど丶、三の外に尙有べし。更の字、句躰をかへよみをかへ五有と可レ知。更に深き、二句去也。ふかきに深谷・み山・み雪等のみの字、貳句去也。更の字にみの字をも嫌やうに無言にあれども、それは誤也。少もくるしからず。鶏のふける・あそびにふけるは文字別也。夜のふかきは更とはかはりめ有也。更るは宵より曉迄を云也。夜のふかきは曉より明方までを、詩に深更と二字ながら書時は、宵より曉までのふくる事を云なり。

道ゆきぶり　など觸の字にあらず、振の字の心か。

冬の更衣　十月朔日也。

佛名　十二月十九日より廿一日迄三ヶ日有事なり。

古

木枯　連に一句の物は誹に二なれども、かやうの永き名は耳に立物なれば、名所の木枯の森と二句すべき事也。木枯に木の字二句去也。木の間・木かげなどのこといひても同前。こずへは梢の字別にあれば、付句ばかりを嫌と云〻。風躰に三句去也。無言抄に木にも枯にも折を嫌と云は書誤歟。木のかる丶には折を嫌と云事成べし。誹には木枯に木のかる丶・枯木・古木などは面を嫌也。枯と云字斗には三句去也。それも人めのかる丶・夜かれなどには二句去なり。其時は離の字を書故也。木枯は冬なり。秌の句にもあるは秌よりも吹ゆへなり。

戀しき　こひしくともいひかへて又一あり。誹にはいひかへずして二、此ほかに戀慕と聲に今一、以上三也。戀の句ならでは戀といふ句、連にも今一有といへば、誹には二あるべき乍レ義、連のごとく戀の句三の外に今一可レ有也。戀の字以上一座に四句あり、皆折を替べし。若戀の句ならぬ戀の字二出たらば、戀三句の内一へらすべし。鳥・獸の戀も此四の内なり。

戀ノ山　戀が山のごとく積てたかきと云心也。故に新式にも山類にあらざる所に入たり。併出羽の名所に戀の山とて有。依句躰ニ名所たらば山類に成也。され共戀の山、句躰どち共わけがたき物ならば、作者次第にすべし。作者も落着しかねはべらば、宗匠只戀のたとへになして山類にきらはぬが能なり、是古實也。是新式の心を知たる宗匠のさばきにて侍る。とかく指合はすくなきやうにはからふをよしとす、他准レ之。

戀の句と〳〵　三句去也。

梢　只一、花共松共いひかへて一、梢の秌此内に可レ有。以上新式。誹には梢の秌二句外にするなり。九月の異名なり。さるによりてうへ物に二句去也。梢に末の字・木の字二句去なり。但、末の字結

び人たる何ならば折を嫌べし。ほずえも梢なり、三の内なり。枝付てもくるしからず。

木の葉の雨　植物なり、冬なり。降物に三句、雨には七句去也。無言抄等をみれば、降物には兎角嫌まじきとあれ共、新式に分別すべき物の所に、雨方に可レ嫌よし分明なり。吾等も木の葉の音の雨ににたるとばかり思はれ侍れ共、古き詩哥に雨のふるを木の葉かと聞たる作意もあれば、兎角雨方へ嫌物の内にいるゝと見えたり 其故は月の雪霜を、夏の句なれば降物にきらはずと新式に註せるうへは、註のなき分は皆雨方へ嫌といふが、まとの新式の見やうとおもはるべし。近代のさたは、心あさき栄の機には入べけれど皆誤なり。誹には新式を可レ裁レ用。

木の葉衣　植物にも衣類にも共に三句、冬なり。

心の花　春なり、正花なり。うへ物に二句なり。

詞の花　似物の花。春にならず、正花にならず。開云、心の花・詞の花、何のかはりめありて嫌やう別なるぞ。答云、人の心も春はうき立やうなれば、心の花は正花になるなり。詞の花はたゞ辯舌よき人の常に、はなやかにかざりてものいふ詞をいへば、正花にならざる也。無言抄云、詞の花春にならずといへども、今京都に春に用也。一所にはかくのごとくありて、又一所には春にあらずとかけり。前後相違せり。新式に春にあらずとあれば、何の穿鑿に不レ可レ及。

九重　こゝのかさね共居所にあらず、名所にあらず、都の異名也。連に都に折を嫌ば、誹には面を嫌なり。九重・こゝのかさねの内に一ありて、折をかへ九重(きうてう)・鳳城・九重の天と今一あるなり。九文字は面に一づゝ、この内和に讀て二、以上八也。重の字の事、ゑと〱は七句なり。ゑにかさなると云字は三句去也。文字は同じけれ共、ゑにおもしと云字は付てもくるしからず。かさぬると〱とは面を嫌也。かさぬるにおもしと云詞、付てもくるしからず。ゑとかさぬるとに重箱など聲によむ時は三句去べし。てう・おうなど聲によむ時も、おもしと云心ならば、ゑにもかさなるにも少も不レ嫌。

詞　一、ことの葉一、ことのはの道と此外にあるべし。以上新式。ことばに葉の字不レ嫌。ことのはと云も、詞と云事也。されど是は葉の字に三句きらふ。又、ことのはの道とはの哥事也。是も葉の字にきらふ。ことのはの道と詞と云字は面ばかりを嫌なり。詞花、哥の事ならば、ことの葉の道に折を去べし、詞に花をさかするなどゝいひて哥の事にあらずば、ことの葉の道に面ばかりを嫌べし。詞の花、哥の事にあらずとも、詞花集などゝは其折に不レ可レ有。種〻六ケ敷けれ共詞二、ことの葉一、此外にことの葉の道、以上四也。詞花・詞林などゝ聲にいひても此内也。ことばのはやしことばの花、非植物。皆詩と哥との事なれば、ことの葉の道に折を可レ嫌。哥の道にあらぬ詞と云字には面を可レ嫌。それもかねこと・わびこと・むつ言等のことゝばかりあるには五句可レ去。よく〱吟わけて、爰にのせずとも去嫌可レ給。

氷　一、たるひ・つらゝの間に一、月の氷・泪の氷などいひて一、雪・霜の氷など

に一、氷室は此外なるべし。新式如レ此。一座四句也。誹にはひようと聲にいひて今一句、裏に有也。たるひ・つらゝ・うすらひ、いづれも出がちに一句あるなり。うすらひもたるひも、ひと讀により氷室に面を嫌也。氷室を四の氷の外と新式に見えたるに、近代連哥に氷に折をきらふと申は無理なり。しからば氷室の出たる會には、氷一座三句の物に成也　さるによつて誹には、うすらひ・たるひ等に氷室、面を嫌也。氷には氷室七句去也。氷のひまとくる・ながるゝ、皆春なり。残氷・非春。薄氷・薄なり行氷・氷もくだくるも皆冬なり。

氷餅・氷砂糖・氷こんにやく　雜也。

但、依レ句躰ニ可レ爲レ冬。氷五句の内也。氷様　春也。氷室　夏也。氷魚　冬也。薄氷をふむは冬也。ふむがごとしは雜也。氷のごとく成釼も雜也。皆五句の内なり。氷室・氷様　同類なり、出がちに有べし。氷魚・うすらひ・たるひ、如レ此ひとよむ類、冬に成て五の内也。氷には同じ折を嫌也。此内氷室・氷様は冬にならざるにより氷に七句也。氷魚・氷の雨、冬成により氷に折を去べし。但、氷の雨は夏もふる物なれば依レ句躰ニ季を定べし。所詮こほりといひても、ひといひても、皆折をかへてすべし。誹にひようと聲に讀氷斗を一句裏に用て、以上五句と知べし。此段むづかしき間吟可レ申。氷とは冬にても春にても只一句。たるひ・つらゝ・うすらひ・氷魚等の内只一、月の氷・泪の氷などの水邊にあらざる氷只一、是も冬也。霜・雪・露・滴・風氷・嵐の氷、人の手足のこほるなどに一、皆冬也。水邊にあらず。霜・雪のこりかたまるも、文字はかはれ共氷と同じ。人の詞・泪・學文などのとゞこほるは、滯の字なれば冬にあらず。依レ句躰ニ冬に成時、霜・雪の氷の類にて別にすべからず。只四の外に誹には、ひようの字を裏に用て以上五句也。氷室・氷様は此外なり。是も出がちに一句するなり。氷に七句去、ひには面を嫌也。ひようには七句成べし。凝と云字、氷に二句。ひには不レ嫌。紅蓮・大ぐれんの氷とは寒地獄の名也。是も五の内なり。尺数なり、雜也

心の松・心の杉　共にうへ物に二句去

也。心の松とは、色のかはらで・みさほなる事也。又、待の字の心もあり。心の杉は直成事なり。又、数寄と云心也　さるによりて好色の事に讀たる哥おほし　戀にも成なり、可レ依二句躰一。

ことわざ　詞・いふわざ、打越を嫌なり。

いふわざと申は、語・いふてふ・申告る・さゝやく・よぶ・惡口、如レ此くちにて云わざ也。諺といふ詞に嫌ふ事也。諺と云字一字ある故に、言の字にもわざの字にも二句嫌なり。

かねこと・むつごと・侘こと　これらは言の字也。

かごは種々の義あり。かこつけど・たより・かこつ・ちかひなど、句によりて心かはる故兼て定がたし。古ことは何によりて言の字あれ共、先は古事と書て言の字にあらず、よくよく差別可レ有。事の字と言の字とは付てもくるしからず。

ことわりに言の字　一切不レ嫌。

ことぶきは祝字・壽の字など一字かけ共、祝言ともかけば言の字に二句嫌也。曲事は事の字なり。あだことは依二句躰一言の

字なり。又、事の字をかく句もあり、よくく差別すべし。たはむれごと・たはことは言の字なり。ざれごとは依二句躰一事の字を書ともあるべし。人ごと・火ごとなどは言の字にあらず。かりことは依二句躰一事の字をも書也。くりことは言の字、いたづらごとは事の字也。かやうの詞、濱の眞砂也、能〻分別有べし。

比　と韻にとむる事、折に一づ〻也　誹には面斗を嫌て、以上比とまりの句五句と知べし。比は五句去、誹には三句　比と折と時と此三字は句によりて二句去也。たとへば物おもふ比と云句のあるに、花の咲時・咲折など〻云句の事也。是は新式にものせず、近代の人のいひ初たる義と見えたり。同意なれば付ては作者に成て斟酌すべし。かほどの事は上手の付べき事にあらず。文字各別の物なるを、二句去に定はいはれぬ義なり。他のせん時少もとがめたまふべからず。

比　に日來・年來・近來のころ・二句去と無言にもあり。さやうに申ば、このごろは頭（とう）の字、さいつごろは近曾（きんそ）とかけば是等も皆二句去にすべき歟。丸つらく、かへの字ある事を古人の二句去に定し事は深心あり。たとへば村草・草のむらなど〻云と　くさむらと云は心かはれり。村草・草のむらくは草一種にかぎる也。くさむらと云は、短き木も篠もひとつに打交（まじり）て草のしげりたる所を云により、幸（さいはひ）唐の文字にも叢（さう）の字別にあれば、草は五句の物なれ共二句と定しなり。朝日と云字は旭（きよく）の字別にあれ共、朝の字にも日の字にも、ありやうにきらひて二句去にはせぬ也。古人此正字をしらぬにはあらじ。何と吟味しても、朝日はあしたの日なれば少も其沙汰せず。是を思へば年ごろ・日ごろのころも別の事なきころなれば、新式にのせぬ上は替字ありとても、比と云字に三句づ〻去べし。但、此上の道理をぞんぜん人は、ともかくもはからひ給ふべき也。

心の月　雜也。非二夜分一、尺教也。誹には月の字に五句なり。是にて面の月をもたせてもくるしからず。

心の闇　非二夜分一、戀にもならず。親の子を思ふ心をいへり。又戀の哥にもあり。とかく愚痴の心をいへば、述懐になるべき物也。されども古人其（沙）沙汰なければ其分にて置べし。

心の友　依二句躰一非二人倫一。年〻去心友・面友と云て二あり。面友と云はおもてむきの知人なり。心友といふは眞實の友をいふと儒道にあれば、人倫になる事うたがひなし　此事しらざるゆへに連歌師、人倫にあらずとおもへり。但、ながむれば空も心の友なれや、など云句は人倫なるべからず。

戀草　非二植物一、只戀の事也。但、しげる・かる〻・末葉など〻云字を結びたる句は、植物に二句去べし。

衣と衣　五句去也。

衣川・衣手の森　衣の字に三句去也。衣類にもあらず。衣の棚（たな）は名所たるといへども、衣の字に五句也、衣類也。

苫莚　植物也。しくとすれば夜分也。居所にあらず。

苫の扉（とぼそ）・苫の庵　植物なり、居所也。

苔衣・苔袂　非二植物一、衣の色の青を云也。黒を墨染といふに同じ。苔衣・苔袂・墨染の袖・墨衣等、述懐にはなりて尺教にはならざるよし新式に見えたり。

意の馬。心の猿　共に非二生類一。二ながら人の心の移りやすくて靜ならざる事なり。

こゝろば　心の字にも葉の字にも誹には三句去也。此詞たしかに知人なし、師傳をうくべし。心葉と書也、植物にはあらず。

こゝむる。こゝろざし　皆一字づゝ有故心の字に二句嫌なり。心ばせは別に字なし。心に三句去也。

木玉　木の字・玉の字共に誹には三句去也　非二植物一。山びこ・あまびこ、皆木玉の事也、折を去べし。たましゐには表を嫌べし。魂魄と聲にいひても同前。靈の字も同前。但、靈山などには少もくるしからず。

此殿　居所也。うたひ物ならば居所にあらず。

鉤簾　に小の字不レ嫌。小の字を書事あしゝ。鉤簾と書也。つりばりと云字には三句去べし。つると云字には付てもくるしからず。つりばりとつると文字かはるゆへ也。

越路　名所に二句嫌なり。越ノ海といへば三句去なり。

越路　にこゆると云詞二句嫌ふ。東・筑紫も打越を嫌ふ也。

戀草　植物にあらず。茂・枯るなど言葉を添れば植物に二句也。

去年・今年　一句づゝあり。誹にはきよねん・去歳・こんねん・當年・新年・改年などゝ聲によみて一座に二句づゝあり。

今年　に今日・今と云字共に不レ嫌レ之。

子　誹には五ある也、皆面を去也、子とばかりあれば人倫なり。親と子とは述懐なり。それも親類のことを親子衆など云句は非二述懐一。子の字斗も非二述懐一、孤・王子・卵・竹の子、これらの文字別に一字づゝあれ共子五の内なり。利銭の子も五の内なり。人の子と兒と七句去べし、竹の子・鳥の子などには付句を嫌べし　金子・銀子・賣子等には付てもくるしからず。子に小文字付てもくるしからず。扇子・金子と云類は子五外なり。すと〳〵の間は三句去也。子の年・子の日などよみ替りては、子にも兒にも付てもくるしからず。

小鷹狩　鶉狩共云、然共鶉に小鷹付てもくるしからず、其いはれは鶉斗を取にあらず、別の鳥をも取ゆへ也。秋也。つみ・ゑつさい・さしば・くち、是等皆小鷹の名なり。

こゝかしこ・爰元　などに此字・是字の類共に二句嫌也。誹には只付句斗を嫌はるべし。

こそとまり　千句にも二斗といへり。誹には一座に一有也、千句ならば三有べし。

小松引・松引　春也、子日の事なり。

こち　東風と書、春也。

木の下闇　夏也、夜分にあらず。

小鳥渡る　秌也。小鳥と斗は雑也。色鳥と云も秌也、小鳥どもの事也。

江

江　連に二、誹には三、此内一は名所た

るべし。

えびぞめ　ぶとうの熟したる色なり。蒲萄をばえびかづらといへり。

えにし　など云詞、百韻に只一なり。誹には緣邊・緣者など戀の句に今一あり。えにしと折をかゆる也。戀ならぬ緣の字は、えにしに三句去也。それも居所のぬれえん、人の名の永緣など云時は少もきらはぬなり。付てもくるしからず。

えびす　一、人倫也。悪ごと折を嫌ふ。誹に讀て今一、東夷・北狄・南蠻・西戎、此四の内一有べし。此内にも南蠻は國の名になりて、蠻の字、えびすとはよめ共人倫にならず。

えぞ　只一、人倫なり。連にも一句はあれば誹には二あるべき義ながら、誹にも一すべし。此外に東夷と可レ有。乍レ去東えびすあらば、もはや東夷は不レ可レ有。又　七月の異名を夷則と云。是はえびすに字去成べし

傳

寺　尺教也、非居。所連に名所と只二あれば、誹には寺一、名所に一、其外に名所成共辭にいひて寺号有べし。以上三也。手習子の寺も尺教にはあらざれ共寺三の内也。是は居所に二句去也。寺の場・寺の軒端等誹非居所。打越には用捨すべきやうに無言抄に見えたり。是よはき心持也。さやうにこゝろうれば、寺の世俗をはなれて、渟き道理を失に似たり。いか成居所の詞有とも、寺の句ならば少も非居所と心得てするが、佛法をあがむる作者の本意なり。少もくるしからず。古人本意を辨知して、宮寺も人の住所なれども居所にならずと相定たる心は、人界・佛界・神道、別各のおもひをなさしめんため也。此さかひ、愚成人は合点ゆかざるもの也。又、無言に寺の打越に鐘をすべからずとあり。是もさやうにいひをしゆれば未練・初心の人は氣味わろく、あやぶみて付度句をえ付ぬ故に、連誹すくみて會もおぞく成なり。釣鐘は元來尺教より出たれ共、在鄕にも又城廓にも社頭にも、用心のため時をしらんためつり置ゆへに、新式にも尺教の具に不レ入　然ば尺教にはあらざると、つよくおもひすましてすれば、連誹くつろぎて興出來もの也　指合は當座の諍論をやめんがためとあれば、たとひ定りたるさし合なり共少々の事はきらはぬがよきを、近代尺教に入ざる事を斟酌するが古實なりなどゝおもふ人は、大に愚成さたと知べし。

手洗水　水邊也。手水・御手洗等に折をきらふ。たらひには面を嫌べきか。たらひとは手洗と云詞より出たる名なり。

てにはの字　相合を不レ可レ付之。新式諸本皆如レ此。丸思案するに、相の字は折の字を書誤て侍る歟。折合と云は、たとへば前句の下句の半に、花をみんとて山に入なりと云句には、てとまりの上句を不レ付。又、前句の上句に、烌の夜の明はつるまで月を見て、と云句に、泪にくれてなどゝ腰の折相にて文字をすべからずと云義也。ての字にかぎらず、は文字・に文字・はね字皆同前。但又、てにをはならざるさて・まで・はて・いで・すてなどの一字ある詞は、てとまりに不レ嫌。それも出て・捨てなどゝ、て文字を付たるは嫌也。無言抄にとてと云詞をきらは

ぬ内に出せり、是誤也。定て丸が見たる本の書ちがへなるべし。又、してと云字は而の字一字あれども、てにをはに成也。かやうの事互細にしらぬ宗匠は、俳事おほく有ぬべき道也。

朝庭・**我朝**・**朝覲**。**行幸**・**朝拜**。**小朝拜**・**朝恩**　これら朝時分にあらず、あさに付てもくるしからず。今朝・明朝などには三句去也。かやうの朝の字は、百敷・大内・大宮の類には面をきらふ也。

手の字　折に一づゝたるべし。誹には面をかへて五ある也。聲に讀て手跡・手裏・手中なども五の内也。又　上手・下手も同字ながら、支躰の心なければ手に付てもくるしからず。同じ事ながら、うは手・した手とよめば手五の内也。蚊屋のつりて・蕨手なども皆五の内なり。手に袖はくるしからず、袂は二句嫌也。

手　に手枕など連に面を嫌へば、誹には七句去べし。

てふ　と云詞に、いふ二句去也。てふとは、といふと云詞のかへ也。しかれば云には二句去なれども、といふと云詞には折を可ﾚ去。といへばと云も同じ詞ながら、それはてふに二句去なり。虫の蝶にあらず、戀すてふなどの類也　連に百韵に二あり、誹には三も有べし。それも五文字に同じやうには置べからず。但、二句はくるしからず、三句めは置所をかゆべきなり。

てとまり　下句にする事、千句にも只一なり。其上習ひ是あり。誹にも一座に一句あるべし。下句のにとまりも同前。

誹諧御傘（七）

阿

雨　二、誹には、雨中・雨天など聲に讀て折をかへ、以上三也。

さめ　只一、誹には小雨・春雨、村雨などいひかへて二ある也。若、急雨、聲によむ句あらば、村雨とあるべからず、急雨とありても二の内なり。きうぅと聲によむ時は村の字にきらはず。

あま　只一、誹には二あるなり、あまは雨の外なり。雨とあまは面を嫌ふ。あめ・あまなどに、さめは七句去也。

松風の雨　木の葉の雨・川音の雨・涙の雨、これらは似せ物なり。雨の外今二、誹にはある也。降物には二句嫌也　似せ物ながら雨とあまとの面を嫌ふ也。さめとは七句去也。ながめふるも同前なり。あめとあらば雨三の内也。

五月雨の雨　夕立の雨・村雨の雨、是等は降物なれ共雨三の外也。かやうに名の付たる雨は、雨の字には三句、異なる降物には二句さるなり。

あま雲　依二句躰一降物にあらず、天雲也。

閼伽結ぶ　水邊也、尺教也、夜分也。閼伽は梵語也。水の字に飜譯すれば、水に閼伽もあかに水も同意也、不レ可レ付と紹巴今案せらる。亡父永種難じて云　飜譯して同意に成文字と、ならぬ文字とあるなり。たとへば、摩訶といふ字は、大文字に飜すれば別の心なければ同意になるべし、釋迦といふ梵字は能仁と飜すれど、佛の御名に成て別に聞ゆれば、能の字にも仁の字にも嫌ひがたし。迦葉と云梵語は龜の字に飜したりとて、迦葉尊者を水邊にも生類にも可レ嫌かといへり。其上宗祇以來宗養迄もよく知てやらん、しらずでやらん、付きたられし事なれば、紹巴の說用給ふべからず。ある人　閼伽即水なるを、あかの水と云は重言と云ゝ、是誤なり。閼伽といへば釋教になり、水と斗いへば釋教にならず、大き成替りめ有を辨へざる故也。たとへば、社頭にみづかきと云垣は、水は一切のけがれをきよむる故の名也と、日本記にもありし。則、水とよめ共神社の垣に定て、神祇になれば瑞籬とも書故水邊にきらはず、此根元をしらざる故に、水の字に付ても去嫌の沙汰なし。よく／＼分別すれば水邊にはきらはずとも、水の字には二句去べし。閼伽の水は讀聲替りて既に尺教に片付たれば、水つけて同意成べき謂なし、閼伽の水といひて重言成べき義もなし　閼伽に水と云事也。手洗水をば手水水といはずや、萬かやうの差別分明に我と合点ゆかぬ人にはことはりても詮なし、くわしく申さずとも智惠あらんはさとりしらるべし。

雨・露・霜・雪・霰　如二降物一、誹には二句宛去なり。

嵐　近年三句の物とす、是新式の詞なり。誹には嵐三句すべし。山市の晴嵐など聲にいひても三句の內なり。又、嵐山は所の名なれば、面をかへて三句の外に有べし。吹・はげしきなどの詞を入て、風躰にしたてたる句ならば、一座三句の內成べし。其時は折を可レ嫌。風躰の句にあらずば風の字二句、吹の字・松の音響・荻の聲・扇等の風體の詞にはすこしも嫌ふべからず。

朝の月　只一、朝の字入ずして朝時分の月今一、速に是有よし無言にあり。誹には朝の字入ても二句可レ有。乍レ去一つ朝ならば今一は今朝と可レ有。此外に、月の明殘る・東雲の月・追出しの鐘に結たる月などの朝の字・今朝の字入ざる月、今一もある也。いづれも折を替也。夕月同前。

秋寒　良寒・夜寒など、詞をかへても只一、誹にはかんと聲にいひて今一有べき義ながら、秋の詞にかんと聲に云べき事なきかと存ずれば、夜寒・朝寒・肌寒などの詞をかへて二有べし。秌の月さゆるは、さやか成義にて字に別にあれ共、秌のさゆるといふ句あらば、秌の月のさゆる共不レ可レ有。共故は秌の詞ならでは、さゆる月は寒月に成也。秌の詞入て月のさゆるといはゞさやか成義にて、秌のさゆる外に可レ有事ながら、秌も寒き氣有故に月影の寒き方にもなれば、さやか成と寒きと打紛れてしれぬ物成により、秋のさ

ゆると云詞過ては、烁の月成共、月さゆるとはあるべからずといふ事也。

曉　只一、誹には二、其曉一、折を替て以上三句有也。げうと聲に云ても三句の內也。其曉は夜分にあらず、只敎也。只曉は時分にもあくるにも二句嫌也。時分とは朝時分・夕時分なり。又、事の次手に申侍る。其曉過ては彌勒の出世・龍花下生などあるべからず。

烁風　只一、烁の風一、但、いひかゆるに不ㇾ及、近代ニ用ㇾ之、烁の風、〻とはあるべからず、誹には、しう風と聲に讀て以上三。

烁の夜　　と云句、ながき心あらば、永き夜と云詞、其折には不ㇾ可ㇾ有。

あさぼらけ　新式に非二夜分一所に載られたり。既に朝の字ある詞を、何の疑ありてか、非二夜分一とことはられたるにや。其時代に不審したるものおほくありけるにや、二條殿の御老耄ありてや、尤おぼつかなし。ぼらけは開の字也、ひらくと云事也。はひふへほの五音相通の故也。花などのひらくるごとく夜の明る躰なり。

逢戀　二、誹には三あり。星逢は此外可ㇾ成。

有明　連に二あれば、誹には季をかへて三すべし。たきもの〻名の有明・蠟燭の有明、皆三句の內也。燒物の時は夜分に不ㇾ嫌、有明に有の字二句連に嫌故は、晨明と正字を書故也。明の字には五句とあれば、誹には三句去也。有明にあす不ㇾ可ㇾ付、けさ・あしたは不ㇾ嫌。有明の殘るは夜分也、入は非二夜分一。有明に月次の月は二句去べし、夜分の月には五句去也。され共月を持故に同じ面にはせず、日と星には二句去也。

明過る　明はつる・明はたれ、皆夜分にあらず。朝時分・夕時分には二句なり。明も過ず・あかしもはてず・明はなれず、是等は夜分也。夜の明とばかりも夜分也。しかれば無言抄に明はなれずといひて、夜分にあらずとかけり。是は明はなれと云詞夜分にあらざれば、はなる〻といふ字さへそへば、もはや夜分にあらずと心うる義なり。それならば新式にさやうに書べきを只明果て・明過てと斗のせてをけるはありやうの義也。明の字夜分をのがれさうなる字なれ共、それは夜分に付て有詞なれば夜分なり。はなる〻・はつる・過るといへば、夜分をのがる〻道理を立て置たるに、はなる〻と云字さへそへば夜分をのがる〻と云は道理ならず。はなる〻と、はなれぬと云は裏面の相違なれば、只ありやうにはなる〻とか、はつるとかあらば夜分にあらざるべし。はなれず・果ず・過ずとあらば夜分と心得べき也。尙後生の君子にまかせ侍る人の不審すべき義あり。永き日をながからぬといひては春になり、みじかからぬ夜といひても夏になり、ながからぬ夜も烁になり、つながぬ舟は旅にあらずといふは、つながぬ舟は旅になるまじきか。是もつなぎ船同前なれば、明果るを明果ぬといふも、共に夜分をのがる〻義は疑ひなしとおもふ人有べし。是あらめなるわけやうなり。先なが〻らぬ日といひても春に成は、永日・長夜と云句が春・秋の季を持たる詞なる故に、其內にてともかくも句作りをかへたるにこそあれ、永日といふに

かはりめなし。短夜・永夜同前。又、つなぎ舟と云句旅にあらずと定たる上に、つながぬ舟といひても旅にならぬは理也。今此明果ると明果ぬと云は、詞にて定たるさし合にあらず、只心にて定たる去嫌やうなり。たとへば、物をぬすみたるといふと、ぬすまぬと云とやうのかはりめなり。物をぬすみたるものと、ぬすまぬものとをひとつの罪にをこなはん哉、よく／＼こゝろをこまかに分て此かはりめを分別可レ有。又問云、しからば春過て・秋過てと云ても、春に成・冬になるは如何。答云、それは三月盡・九月盡の日もいはるゝ詞也。必ず夏きたり、冬來りて云詞にあらず。春三月・冬三月の長き日數のたちたるうはさなれば、一夜の明過る・明過ぬと云には大きにかはる事也。よく／＼分別あるべし。

明に曙　新式に打越可レ嫌物の所にかく出せり。是は曙と云字一字ある故に、明の字に打越を嫌と云事なり。あけぼのも明の字も皆夜分也。乍レ去朝時分・夕時分には二句嫌べし。明過て・明離れ・明果てては夜分にあらず、夜分にあらずといへ共、明の字は朝時分・夕時分には打越を嫌といへり。

明暮　に朝時分・夕時分・夜分共にきらはず。あけの字に朝の字、暮の字に夕の字、ともに二句さるべし。

あくるにあす　二句去なり。

朝夕　に暮の字、二句去也。是も時分にあらざる事、あけ・くれのどし。

あけぐれ　といひて、夜の明方に一度くらく成事あり、是夜分也。朝時分に二句、夕時分には不レ嫌。此時は、く文字をにごるなり。明の字には三句、暮の字には不レ嫌。くらきにくれも二句と侍れど、それは依二句躰一事也。くらきと暮と文字別也。殊にあけぐれは暮の字に可レ嫌道理少もなし。此外に昨朝・明朝・毎朝などゝ聲に讀かへて、出がちに以上五也。いづれも面を嫌べし。けさ・あしたには七句去べし。

あした　一、けさ一、二あれば、誹には早旦・明旦・今旦・今朝等の内今一加て三句ある也。是はたがひに折を嫌なり。あさの字には七句去也。

天の字　折に一づゝありて、四句の物なれども、誹にはてんと聲に讀て、あめ・あまに面を去、以上一座五句の物也。あめ・あま・てん、いづれも面を嫌也　天にあまの川　銀河とかけば面をきらふか、五句去かなどゝ連歌に定めかねられ侍る　さやうの書替の文字を替て去嫌はゞ、えさらぬ事のみ出來て、指合諍論たゆべからず。天の川にかぎりて、いかやうなる出やあり共四の外とはいひがたし。誹にはたゞしく五句の内に入べき也。七夕の事なれば夜分也、天上の事なれば水邊にはあらず。たとひ水・波・舟・橋を結びても非二水邊一。河内の天河ならば夜分にあらず、水邊也。それも七夕の心ある句ならば夜分なるべし。それとても水邊はのがるべからず。あめ・あま・てん等の字に空は二句さると新式に侍り。誹諧には此條あらめなれば差別を存なり。たとへば、あめはるゝ空・風渡る二月の空・おもひやる空などゝ云には二句去べし。半天・大空・そらのおそれ・みそらみそら・そらはすみ地ににごるなどゝ申そらは、皆空の字よりも天の字にちかし。誹にはよく／＼吟味して、かやうの空には面こそきらはずとも、

せめて五句は嫌べしと思ひ侍る。されどもをろか成、丸が定べき事にあらざれば、其座の宗匠次第にし侍べし。又、空は天の字・辭に讀ても二句去也。但、天智天皇・天目などの天には付てはくるしからず。天人、天下るなどの空の事をいひたる天の字には空皆二句也。

あられはしり　春也。霰には折を嫌。降物には踏哥・十六日女踏哥なり。公叓根元・年中行事等にくはし。

曙　誹には一座二句あり。曙雲など辭にいひても二句の内也。夜分也。朝時分にも成也。曙にほの〴〵・ほのかなど二句嫌也。

朝日山　時分にきらはず、天象にきらはず、句躰によるべし。

芦　水邊也、植物也、雜也。芦火、非㆓水邊㆒、夜分也、非㆓植物㆒。穗に出る・冬枯・下萠などの詞をいるれば、植物・水邊に二句也。芦の穗綿も躰なり。

芦田鶴　水邊にも植物にもあらず。句も是躰による也。

芦鴨　水邊也、冬也、植物にはあらず。是も句躰によりて植物に二句也。あし田鶴・あし鴨、哥道大事の祕傳あり。連にかやうにいひかへて芦の字一座に三句あり。誹には、ろと辭に讀て今一句すべし。皆折を替て以上四句の物也。又、名所の芦屋は別の叓なりと連に申せば、誹にも四の外に面をかへて今一句あるべきか。但、芦の字を植物に用たる句ならば、芦四の外には不ㇾ可ㇾ有。

溫日与長閑　日のあたゝかといはずとも可ㇾ爲ㇾ春。二句也。新式如ㇾ此。

青に緑　二句去也。

青丹吉　青の字・吉の字二句去也。但、三句去に然べし。此詞、哥道の大祕事にて、たしかにしらざるによりて、をづ〳〵二句とはいへると見えたり。

淡路　山路・家路等の行歩の路文字、連に五句なれば、誹に三句去也。道の字は二句去也。又、道の字も行歩にあらざる中道實相・道家・道具などの辭にいふ時は付てもくるしからず。但、辭によまずとも、行歩のだうの字なりとも淡路には不ㇾ可ㇾ嫌。同字別吟、少もみちの心なし。淡路と云名は、あゝわがはぢと云詞をこりなり。

あはぢ嶋・淡路嶋山　国の名なれば山類にならず、非水邊。

あらまし　に有の字、新式の今案に不ㇾ嫌ㇾ之とあるを、肖柏の説にたしして近代は二句嫌なり。丸おもへらく、あらましと云字荒増と書を、荒の字むづかしき故に讀をかりて、有の字を消息などに古筆の書ならはせるを見て、近代の人有の字の心あるやうに思はるゝか。あらまし・あらますと云は、有の字の心はなし。荒の字の心にていひ出したる詞也。古き狀文に有猿などゝ書たるも是あり。是は讀るをかりて書事是にかぎらず、有の字を書とて有にきらはゞ、猿の字もますに嫌べきか。さるをばましら・ませなど云に付て、何心なく筆者の書たる事也。後にいたりて念比にすべき事を、先あら〳〵といひ催し、次第に其事を增進せんと云詞なり。しかれば有の字の心は曾て無ㇾ之。丸は肖柏の今案に心を合侍れば、付てもくるしかるべからずと存ずる也。尚此外

に有の字の道理あらば二句嫌はるべし、道理なくば不レ可レ嫌。

東路　に東屋・四阿と書て文字はかはれども、連にも誹にも折をかゆる也。あづまの字東屋とかへても、連に二句の內にするとみえたり。誹にはあづまからげなど云言葉、今一入て三句あるべき歟。又、あづまにひがし、折を嫌ふべし。ひがしと〳〵もおりを可レ嫌。誹に東國・關東・坂東など聲よみて、あづまにもひがしにも折を嫌べし。ひがしの文字、聲に讀てもおほくはあるべからず。あづま・ひがし・とう、讀聲取合四句ほどあるべきか。あづま〳〵・ひがし〳〵・とう〳〵と六までは不レ可レ有。此內二はいづれ成共かへべきなり。是誹のきらひやう也。又、東大寺・東方朔・東堂などの字は、ひがしに二句嫌べし。あづまや・あづま遊び等の和語には付てもくるしからず。それも又、あづま方などゝ云句のあらんあたりに東方朔とあらんは、人の耳目にさはるべければ、其みわたしをば斟酌すべし。但、指合にあらざれば五句斗隔て不レ可レ苦。

あづま　に甑路・筑紫相互に打越を嫌べし。名所とも二句去也。いづれも付てはくるしからず。

跡　字去也。但、古跡の類は連に折を去、誹には面を去也。是は居所の跡の事也。古き筆のあとなどは字去のあと也。

霰　只一、霰はしり一、霰松原一、此外に餅のあられ又あり、皆折をかゆるなり。あられ地の錦・霰釜・餅のあられ皆雜なり。

網代　冬也　水邊也、生類に打越を嫌。網代うつは、あじろ木を拵る事也。冬氷魚を取つき用意也。秌に成也　あみには連に折をきらへば、誹には面を嫌也。しろの字は月代・苗代等に折を嫌也。編には網を三句きらへば、網代には二句嫌べし。網代屛風・網代の輿・網代車、水邊にあらず、非レ冬、生類にもきらはず、實の網代に折をかへて出がちに今一有べし。網代の床、居所に二句也。

明石　郡の名なれ共水邊也　赤の字に面を嫌、明の字にはかつてきらはず。其故は石の字を書とも、いの字を略して、しと斗いへば耳にもたゝず。又、名所の名なれば少も石の心なし。されども赤き石のある所故に付たる名なれば、石の字おもき故に面とはいふなり。岩には七句、眞砂には五句去べし。但、以二道理一かやうに可レ嫌義ながら、少も石のたぐひに聞えねば石の字に斗嫌て、岩・いはほ・礎には五句。眞砂には二句去て可レ然なり。あまりこまか成穿鑿は誹諧しにくゝ成て、座の興すくなきもの也。明石の岡、水邊にあらず、山類也。

淺間　山となけれども山類なり。

縣召　春也、正月十一日除目の事也。

鮎　夏也。若鮎は春也。さび鮎・おち鮎は秌也。鮎の子は春也。干鮎・々の鮨等は雜なり。連に二あり。げにも誹には季をかへ折をかへ三可レ有。うるか、鮎のわたの名也。雜也、鮎と折を去也。

秋去衣　秌也、七夕の具なり。朗詠の詩に去衣曳レ浪をとあり、是成べし。年のわたりも七夕の事也。

扇　夏也、納涼なり。風躰に嫌と云說は不レ用。昔のごく風によき付合なり。それも納涼の風ならば同意に成也。扇は夏の

季を持によりて風躰に嫌と近代申せ共、扇は五德をそなへて五明共申せば、風に同意ならず。風も又常に吹ば夏の物にあらず、可レ嫌無レ謂。五德をそなへたる事を古人知たれ共、夏の景物すくなきによりて夏の物にしたる斗也。又、扇を置は秌也、但、句躰と新式にあれ共、句躰を聞わくる宗匠末代に是なき故諍論出來安き間、置と云字さへ句中にあれば、皆秌にするがよきなり。又、扇は一座に何句の物と云沙汰新式に見えず。故に誹には扇一、かはほり一、是扇の異名なり。扇子・五明などと聲にいひて又一、以上折をかへて三あるべし。若かはほり異名ならば扇二もあるべし。扇網も二の內也。惣別月などにたとふる扇は、しろくまろき團の事也。末ひろがり、ちうけ・觀世折・箱入の扇・御影堂の類が皆かはほり也。かはほりは蝙蝠の羽をにせたる物なり。扇の名の時は生類にあらず。乍レ去蝙蝠と云句あらば此名の扇あるべからず。へんぷくてうと聲にあらば、折をかへてかはほりの扇あるべし。班女が閨の扇などは皆團也。さるにより扇に團、折をきらふ。扇二あり共團扇とは又ある也。團扇と過て・うちは共又ある也。しかればうちは丶二句の物也 扇は三句の物なり。扇と團、根本ひとつ成故に折をきらふといへども、扇三の外に團二あれば面を嫌べし。團も夏也、納涼なり、風躰にきらはず。置とすれば秌也。但、置扇あらば置團不レ可レ有打の字・輪の字付句嫌レ之團扇と聲に云時は付てくるしからず。

朝寒　秋也。さむき朝・さむきあした・朝氣さむし・今朝さむし等いづれも冬也。

淡雪　たまりもあへずきゆる故にあは雪と云。さればあは雪は消としても冬也。初雪・はつ霜・霰・みぞれの消と皆冬也。はだれ雪も同前といへり、まだら雪と云心・薄太禮ともかけり。是をあは雪・初雪に准じて、消るを春にならずと無言抄にかけり、其義あたらず。それならばうす雪も同じ事也。うす雪・はだれ雪等は、消とせば春たるべし。

淺茅　雜也。淺茅生は居所に二句なり。是も植物也。ちぐさ二種あり。一は茅草、一は千種とかけり。茅の字をかくはわろし、千種よし。千草とも書也。是に二の心あり。千草とかくは万の草を指也。千種と書は草にあらず。春霞色のちぐさにとよめるは色と云事なり。秌のちぐさなどは植物也。茅がや、萱にはあらず、只茅を云と申。又の說にちがやと云物別にあり云〻。是も雜なり。又、茅とかやとを云ともいへり。しかればちがやは秋成べし。ちまきも粽と書也、非二植物一。端午に用故夏に成也。根本茅の葉をもつて卷初たる故、何にてまくをもちまきと云也。しかれば茅の字には三句可レ嫌歟。誹にはちまき一、ちまき柱一。ちまき柱はくひ物にあらず。されども耳にたつ故折をば嫌也。のちまきのをくれてなど、粽をかくして今一句あるべし。茅の輪・植物也、夏也。御秡に陰陽師拵て人に超さするなり。ち花、春也、植物なり。つばなと同じ。茅の字種〻にいひかへて、折に一づゝあるべし。新式に其さだめなき上、尤物にはあらず、切〻用にたつかろき字なれば、誹には四句の物とす。

槿　に朝の字、昔は不レ嫌といへども、新式に不二庶幾一のよしあれば二句嫌がよき

也。しからば兒の字同前。あしたのかほにとりなしたる句には、あくるの字にも可レ嫌よし連に沙汰あり、申に不レ及。只とりなさずとも、朝の字に二句嫌上は可ニ用捨一。問云、槿に花の字きらはぬに、槿朝の字不ニ庶幾一の差別如何。答云、槿は花なき時も一切の柑類を其名していひ、槿は咲たるあした花に向てのみ云名なれば、二句嫌事尤なりとしるべし。

海士小舟泊瀨山　舟の字に付て水邊に可レ嫌レ之。新式如レ此なれば海士小船はつかの月と云枕詞も水邊に可レ嫌也。

東遊　神社にて有事なれば神祇になる也。

溫　日のあたゝかなるは可レ隔レ春云々、新式に如レ此のするは、只あたゝかなるといふばかりに雜也と云心を、無言抄にあたゝかと云詞はをしなべて春に成といへり。近比無理成沙汰也。綿・衾・人のはだへ、飮物・くひ物などにあたゝかなると云詞は不斷有事成を、春に定ム事いはれず。新式に日の暖なると書たるにて能分別すれば、世上の暖氣なるを春と定たる物也。しかれば天氣・空・風・水・世上・野山などのあたゝか成は春たるべし。人の懷・寢所・幃中・洪茶・肌・手足・足袋・ゆかけなどの溫は雜たるべき事顯然なり。連にはともかくもさばかれゆへ、誹には新式の古法可レ用者歟。あたゝむるも同前、酒をあたゝむるは殊也。溫なる日と長閑と二句去也。新式の打越をきらふべき物の所に、溫日に長閑、涼に冷、寒に冷、身にしむに寒、如レ此有ば、昔は其相似たる氣の詞と〳〵をのみ打越をきらふとみゆ。今は溫日に長閑ばかりをきらふにあらず、暑・涼・冷・身にしむ・すさまし、何れも二句去と連誹共に見えたり。新式の定を背はいはれずといひながら、數十年相互に嫌なれたれば、相似たる斗を嫌事ならぬやうに成來り侍る。さるによりてその分にして誹にも置侍り。只其座の宗匠次第に沙汰せらるべきか。丸つく〴〵と分別するに、近代の說は無理也。新式の定のごとく溫日に長閑ばかりを二句嫌ひて、暑・寒・涼等の詞をばきらはぬが能也。近に淺き・淺に深きなどの類也。寒・涼・熱・溫・四季の氣のかはり、面々各々の事なるを、混雜して嫌はんならば、春と云に秋・冬と云字も皆可レ嫌か。新式のならひやうは同意をいましめたる也。日の溫なると長閑なると同意なり、寒き・涼しきに身にしむ・ひやゝかなるも皆同意也。長閑なるに暑き・寒き・涼き等の類に各々の物也　きらふといへばこそうるさけれ、此道理を辨知してみれば更にくるしからず。是等の內にも涼しきに暑と付れば、同意のやうにおもはるれど更に同意にあらず。涼しきと云に夏を忘るゝなどあるこそ同意には侍れ。涼に暑は裏表の詞也。譬ば黑に白・夜に晝・長に短等の類なり、但、可レ依ニ句躰一。々々さへかはらば付てくるしかるべからず。涼に冷は少かよひておぼゆ。すさまじきに寒・身にしむ等は、涼しさの深成て別の氣になりたれば、同意にはならざるべし。よく分別すべし。只式目の旨をまもりて、末代の君子にわらはれぬ樣にたしなむべき事也。

あるじ　ぬし、人倫なり。無言抄にぬしは非ニ人倫一とかけり。花をあるじ・月をあるじ、人倫にあらず。花を友・月を友、同前　花のあるじ・月の友、依ニ句躰一

可レ爲二人倫一。花の友・月の友と云は、花見・月見の町の友を云也、人倫なり。あるじに有の字二句去也。

秋の田

新式に打越を嫌ふ物の中に秌の田とばかり書て打越を嫌へと治定してをけるを、近代植物に不レ嫌とさたして、無言などにも非二植物一と書れたり。其心を推量するに、新式に秌田の事、田に鴈・鹿と加ては植物に一向不レ可レ嫌レ之、鹿追などあらば可レ嫌レ之と有。此文章の心を取違へたると見えたり。新式の心は田は雜なり、秌の田とはなくて秌の季になる鴈・鹿などを、田と結び入ては植物にならずと云事也。それも鹿を追などあらば植物也と云文章也。秌の田とはなけれど、鹿・鴈など入れば季は秌の田也。此に書は秌の田と云句に鴈・鹿を結入にも植物にあらずと云義理にはあらず、よく〳〵見わけ給ふべし。

朝月日(あさづくひ)

夕月日、月日に各々嫌レ之。但朝の日・夕の日と用燉の説もありと云々。朝附日と書レ之、新式如レ此。古哥書に附の字を書たる見て、月にはあらず、朝の日・夕の日と云説を、わかき世の人誠と思ひて無言抄等に月に不レ嫌と書たり。新式の小書はよく正説を知たる上に書付て置たれ共、其知たる證據には月日に夕に嫌レ之と本文にあり。此附の字を書事は、譬(たとへ)に万葉集にしらぬひのつくしと云に白縫とかけるがごとし。縫の字に心なし。附の字も同レ之。朝月日と云は朝日の出たるむかひに月の殘たるをいふ。さるによりて朝月日ならびの岡など枕詞におけるも、月日の二並(ならび)ておはすると云事也。夕月日も同レ之。しかれば誹には朝月日・夕月日、月の字にも日の字にも三句嫌べき也。朝月日・夕月日皆秋になりて南の月を持也。是正説也。疑ひ給べからず。

秋と秌

五句去也。

菖蒲(あやめ)

水邊なり。軒の菖蒲もかつらの菖蒲の枕も簾の菖蒲の輿も皆水邊なり。人の名のあやめのまへは非二水邊一。

淺間(あさま)

とばかりも山類也。

あら玉の年

春也。

天磐櫲船(あまのいはくすぶね)

只岩舟とも同じ事なり、神代にありし舟也。説々多し。水邊にはあらず、神祇に成べし。船の字には五句去也。

天河のあふ瀬

夜分也、戀にあらず。舟を結びても非二水邊一、七夕の事也。又、河内の名所に天の川有、是は水邊也、非二夜分一。句躰をよく〳〵可二聞分一也。銀河と書共天の字のきらひやうなり。若銀河と辭に讀句あらば天の字には不レ嫌、銀と云字には嫌べきなり。名所の時は銀の字をば書べからず。

近江の海

名所也。國の名にもきらふ。物別國の海いつも同前に、國の名にも名所にも誹には二句づゝ去也。

粟津(あはづ)の原

粟津の森・粟津の里・皆水邊にあらず。問云、粟津と斗は水邊歟。答云、勿論水邊也。又問、しかれば大津も水邊歟。答云、同前。津の字海に付たる文字なれば如レ此。乍レ去美濃の石津・奥州の會津(あひづ)などは郡の名にして、しかも海邊にあらねば水邊にきらはざる也。

逢坂(あふさか)

山類也。關も山にあれば山類也。無言に相・合・逢と書故に逢の字に三句去と侍り。丸分別するに、忍熊(をしくま)王の軍に此所にて讀あひたる故に逢坂と云と日本記に

あれば、相の字には二句去べし。合・逢の二字には三句去べき也。

烌の葉　もみぢの心也。きの葉といひかくる故に木の字に二句嫌也。

秋の涼しき　に秋のあつさなど句躰かはらば、同じ面にもくるしかるべからず。似たるやう成字ならば折無用の事か。

海士のたぐなは　火に燒にあらず、縄をたくると云事也。ぐ文字にごるべし。

消息　有にも様にも二句嫌ふべし。以上無言。是は新式になき事なり。消息を正字かと思ひて、有の字・様の字を二句とはたせり。有様、正字なり、六條の宮の御名の伊勢物語に見えたり。消息はかりに義をもたて書替に書たる文字也。蔡を草の字・村の字に二句嫌にはかはるべし。それは蔡の字正字也　和語に正字と當座の義をもつて書たる類多し。あまり多ければ一一爰にしるさず、分別あらん人は能合点有べし。小智は菩提のさまたげとて、蝙蝠なる宗匠のともすれば誤事也。書替の字を正字に用ひば、喩ば萬葉に金風と書て烌風とよみ、十六聲と書て鹿の聲とよむ間、烌風を烌の字に二句嫌ひ、鹿を生類に二句嫌はんや。正字と書替の字のかはりをしらざるは、曾てしらぬ人におとれり。

あたり　に、ほとり、野人・山邊・邊土・近邊など、互に二句つゞきらふ也。

間　に、ひま・すきま・木のまなど類、二句嫌べし。けんと聲に讀ては、あいだにも、まにも三句嫌よし、同字なる故なり。あひも同じ、あはひも同じ。又、同字ながら、あはひと／＼・あいだと／＼は七句去べし。永き詞にて耳に立故也。木の間・すきまのまの字も同字ながら、あいだ・あはひなどには二句去也、讀替る故なり。問云、けんも讀かはるに何とて三句去也。答云、讀と／＼かはるは二句去也。聲は一切のよみは字心通故に三句去をよしと云也。又、文字によりて聲と讀と二句去にするもある也。一偏にかゝはるべからず。かやうの段にいたりては、此道廣き故に以心傳心の人ならでは合点ゆくべからず。右に申所のひまは間の字、ひま共讀ながら隙の字、別にあれば、依句躰あいだ・あはひ・けんなどには付てくるしからぬ事あるべし。垣のひま・雲のひまなどはすきまの事なれば、あいだ・あはひ・木のま等に二句去也。此あいだ、ひまの入など云句は字も心も別なれば、かならずきらふとは定むべからず。

海士　人倫也、水邊なり。

白馬の節會　正月七日也。

朝鷹かり　朝かり共する也。みな春なり。

汗　無言抄に夏の部に出せり、新式には是なし、汗は夏にかぎらず、病にも又耻をかきても、おもき物をもちても、あつぎをしても、湯茶呑ても、常に人のながす物なり。或說に汗と斗は雜なり、汗ほすとすれば夏と申されし。今思へば是もうきたる說なり。惣別病の名は寒暑の外は季をもたず。其故は、傷寒と云病は冬寒をかんじて春おこるといへり。さあらば春かと思へば春起は温病といひ、夏も烌も名はかはれども、大熱病者皆傷寒と素問にあれば季を定めがたし。鶴亂は夏多けれども他の季にも是あり。しかれば寒

氣・中寒などの外は冬にならず。暑氣の外は熱氣といひても夏になるべからず。是等さへ夏にならざるに、汗斗をなんぞ夏にせんや。其季に多き物を季をもたせば咳氣などをも秌にせんや。ひゞ・あかゞり、他の季に無レ之故冬とするなり。此外いくらの病者ありとも、此わかちを分別して其季を可レ被レ定者なり。

秌の宮　后の御事也、秌の季を持也。

秋より後　としても秌也、四季共に同じ。

ありなしの日　村上天皇御國忌也。御國忌とは天子の御忌月の御名日を云也　五月廿五日也　此日大内に政なし。又急用あれば行はるゝ事もあるによりて、此名あり。夏の季を持也

霰消る　霜消る、冬なり。

誹諧御傘（八）

左

五月雨　一、梅の雨一、一座二句の物に出せり。誹には五月雨一、さ月の雨とか、さみだれの雨とか今一、此外に梅の雨とか、ばいうとか聲にいひて以上三句すべし。其故はさみだれと申も、さ月雨と申もながき詞にて耳にたち侍れば、いかに懐帋をかへても聞にくかるべき歟。但、五月雨二あらば、上の句・下の句に作りかゆべし。其外に梅の雨か、ばいうか今一加て以上三句有べし。

猿　只一、ましら一、非二山類一には猿と今一か、また猿猴と聲（聲にか）いひてか、猿丸太夫・申樂・ひよみの申・人の猿眼・木の子の猿すべり・猿とりいばら・猿轡・瓜の名の申けなし・猿澤の池・人の猿手をかくと云事・猿の腰かけ、出がちに今一ある（等）也。庚申は猿に二句去也。それも申侍・かのえさるなど讀によめば一座三句の内なり、生類にはあらず。

さびしき　いひかへて又一と新式に有レ之。是はさびしき・さびしくといひかゆる事也。さびしきと神さびてと折をかゆべし。誹にはいひかへず共さびしき二、物さび・神さびなどの間に一、以上三也。つれ〴〵はさびしきの替詞なれ共、三の外に有也。連に面をかへてとあれば、誹にはさびしきに七句去べき事なれ共、連のごく面を去べき也。徒然の詞も連には一座一句なれども、誹には徒然草と云詞今一あるべし。又、徒然・寂寞・閑寂など云詞、つれ〴〵にもさびしきにも面を替て今一、出勝にあるべきか。それあらばつれ〴〵ぐさはあるべからず。翁さびと云詞はざれと云詞なるにより、物さび・神さびの外に又あるべきなれども、基俊の哥にさびしき事にもよまれたれば、是も三句の内成べし。さびしき・つれ〴〵に戀を付事いはれず。戀は物をおもへば、さびしからざる物とて近代そしり、無言抄などにも其義を載られ侍る。是誤也。哥合に其沙汰ありしを、俊成卿いはれぬ

事也と判じ給ひしに、宗長句などには見来りけるを、先學の人今案と見えたり、信用すべからず。太刀・刀・水のさび・さび鮎などは各別の事なれば、付てもくるしからず。

櫻　只一、遲櫻・山櫻などに一、紅葉に一、遲櫻・山櫻ならで只櫻と二ありてもくるしからず。誹には此外に櫻の字一ありて以上四也。

家櫻　春也、植物也、居所也。

いぬ櫻　春也、植物也。是は櫻に似たる木にて花もさかず、又、さけ共ちいさき花にていやしき木也と云々。然るを犬筑波にも、くゝりしていざみにゆかん犬櫻などゝまとの櫻のやうに用られたり、誤か、覺束なし。但、俊賴の哥に、山陰にやせさらばへる犬櫻追はなたれて引人もなし。如レ此あれば誹言にはあらざるべけれ共、連哥に終に聞ざる物なれば誹言に成べし。

櫻人　櫻田可レ爲二植物一、新式如レ此。櫻人は謠物の名也。兼て新式の定のごくならば春の季をば持共、總にある草木に准じて植物にはあらざるべきを、此櫻人・櫻田を植物なりと記せる子細ありと知べし。不審なり共誹には其分にすべし。無言抄には植物に二句とあれ共、既に新式に植物なりと記せる上は、余の僻案とかはりて植物に三句。春にも成べき也。無言抄にはうたひものゝ名に落着して人倫にあらずとかけり。新式の植物なりと尺せる上は、人倫にも嫌べき也。此櫻人・櫻田に付ては種々の云を侍れば、わざと爰にのせず。

櫻田　春也、たかき植物也。田には字去なり。

櫻町中納言・櫻の馬場・櫻の宮　などの名所は雜也、植物に二句去也。

櫻戸　春也、植物也、居所なり。

櫻鯛　櫻の比あるによりて春なり。植物にあらざるの説よし。櫻貝も同前。

櫻麻　夏也。をとつゞけたるは植物にあらず、雜なり。

櫻の盤　雜なり、植物にあらず。

櫻子　人倫也、雜なり。是は櫻川と云能に有わらはの名なり、植物にあらず。

櫻川　雜也、水邊なり、名所也、植物にあらず。

櫻井　名所也、人の氏にもあり。名所の時は水邊也、植物にあらず。人の名字の時は水邊にあらず。問云、櫻町・櫻の馬場は植物に二句さして、櫻川・櫻井を植物に不レ嫌とは如何。答云、櫻町は根本名所にあらず、平家に見えたるごとく、櫻を好て植られたる中納言の名也。さすが名所のやうになりたり。櫻の馬場も天正の比かとよ、信長公馬揃をし給ひし跡に櫻を植たまふ時よりの名なれば、花のたき時も申によりおのづから名所になりて、さすが櫻もすてがたきにより、二句とは定るものなり。櫻川は常陸の古き名所なれば、いか成因緣にて付たる義を不レ知、風土記を見ざるついだ殘多侍る。櫻井・同前。又問、櫻の宮は如何。答、是は聖廟の末社の名也。定て梅はとび櫻はかるゝとあそばされし神木をあがめたる名成べし。北野衆に問給べし。

櫻がさね　春也。

寒櫻　冬也。さゆるも同じ。連にさむきとさゆると云替て二句あり、冬の事也、誹に

は此外にかんと聲にいひて今一あり。しかれば冬にさむき・さゆる・かんと以上三也。さむき・さゆる・かん、此三の物いひかへても、同季は同じ折に有べからず。いひかへぬれば他の季は裏にある也。たとへば春さむきと云句のある裏には、春のさゆる共、春寒共不レ可レ有。秋・冬のさゆるは可レ有、かんの字同前。秌さむきと云裏には、他の季にてもさむきとは不レ可レ有。春の寒歸、又、春かんなどゝある也。冬さむきと云句の裏には、冬のさゆる・かんのうちなどゝ聲に讀ても同季なる故に是を嫌。秌のさゆる・秌の月のさゆる・春のさへかへる・春かんなどゝあるなり。季をかへてさむきと云字は、連のごとく折を嫌也。さゆると云詞も、かんと聲に讀ても同前なり。さむき〳〵・さゆる〳〵・かん〳〵、三色ながら同折にはあらず。さむき・さゆる・かん、皆季をかへ面を替てありと知べし。面をかへても同季はならず侍る。

さゆる　冬に一、他の季に一と定て連に二句あれば、誹には三句あるべし。さやかなる心のさゆるなりとも三句の内成べし。か様の稀に出る文字を、月の句などに二度結びいれんは聞にくき事成べし。

さむき　に身にしむ・溫熱・長閑・すさまし・ひやゝか・夏なき・夏を忘るゝ・納涼・炎天・扇置・團置・清水を結ぶ・泉にのぞむ・ひゆる・つめたき・酒をあたゝむる・火にあたる・ほだたく・日なた・北向・鳥肌たつ・こゞゆる・雪やけ・霜腫、かやうのたぐひ、さむきにかぎらず互に打越を嫌べし。此一ヶ條は新式の旨を見そこなひて、新式以後の連誹のさばきやう也。丸が今案、右あの字の部のあたゝかなると云詞の下にくはしく註レ之。

篠の庵　植物にあらず。是は篠を切てふく故也、居所也。

さゝ枕　植物なり、夜分なり、旅にあらず。

さゝめ　篠に似たる草なり。篠の字に三句。

篠としの　同面を嫌べし。新式かくのごとく、誹には七句去べき也。すゞも同じ物也。山伏の袈裟のすゞかけも篠の字を書也。しかれば此三色同躰異名なり。竹と五句去なれば、誹には三句去也。乍レ去すゞ竹・さゝ竹などあらば竹に五句去べし。問云、さゝ・しの・すゞ一座に何句あるべきぞや。答云、新式にいくつと云さたなけれ共、しのとさゝと同じ面を嫌と載たれば、さゝもしのも折に一づゝあるべき物とみえたり。しからば誹には面に一づゝありて、しのとさゝとの間のきらひやうは七句去べき也。又、すゞは耳に立物なれば、誹にもすゞと一、すゞのしのや、袈裟の名のすゞかけなどいひかへて三句有べき歟。是もさゝとしのとの間は七句去べし。此三色、誹には木にも草にも二句去たり。

さゝら　篠には二句嫌。しの・すゝ竹にはきらひがたし。非二植物一、人數也。又、骨座のけづりくづの物をあらふさゝらは釋教にはならず。まとのさゝら過て今一あるべし。是もさゝには二句可レ嫌。しの・すゝ竹等にはきらひがたし。但、竹の類なれば付句ははゞかるべきか。

里神樂　神祇也、夜分也、非二居所一。里の字には三句去也。一說に秌の季、一說に居所に二句去。此二說おぼつかなし。

非二名所一云物の内に新式目是ある上は、その旨を守らるべき也。一句去の說不レ用レ之。

催馬樂等の名の草木　非二植物一。されど其草木によりて季をもつ也。たとへば梅がえうとふ・青柳うたふの類、春になれども植物にはならず。以レ是思へバ是櫻人うとふ、非二植物一。人の字人倫にならず。必催馬樂にかぎらず、一切の舞・謡の名の草木は植物にはあらず、季をば持也。鷺・子規等の諸鳥・生類、皆季をば持て生類にはならず。問云、然らば催馬樂の伊勢の海・難波津のる、水邊にならざる歟。答云、新式に草木の季をば持て植物にあらぬ事、繪にかける草木に准ると有上は、伊勢の海とあり共水邊には成べからずと知べし。但、神樂にいたりては、きり〲すうとふとあり共蟲にもならず、生類にもならず、冬になる也。一切の神樂は皆冬の季たる故也。然ども夏神樂は夏河邊にてすれば夏也。水邊にもなる也。如レ此指合のくりやう濱の眞砂のごとくなれば、新式にも只大綱をあげて網目をしるさず、末代の宗匠無智無學にしては是非にまどふべきもの也。

佐保姫の衣　非二衣類一新式に如レ此載たる上は衣類にあらざるべし。然るにさほ姫を名所にきらふと云說、近年京にいひ出したるを是非の讃談する人たければ、田舎迄もそれにしたがふと見えて、無言抄などにも名所に成べしとかゝれたり。これは新式に名神非二名所一と云義理をとりそこなひて、春日の神・住吉の神などを紹巴の時より名所にせらるゝより、かやうの僻出來歟。古人の心は神は其形なくいづくにも現じ給へば、勸請申所に影向なりて國々に社これあり。されば只神の御名にてこそ侍れ、名所に成べき道理なしと、神道をよく心得て定たる式目也。紹巴の申されしは、名神とはたとへば住吉の神の御名のうはつゝを・中つゝを・底つゝをなど云事成べしと推量せられし也。是はあたらぬ義理なり。それは名所と思ふべき人の疑ひなきを、なにとて新式に名神非二名所一と可レ申ぞや。佐保姫・立田姫と申は、唐には造化の神と名て春秋の花紅葉を作り出す神也。しかるを日本には春の造化の神をばさほひめといひ、秋のをば立田姫となづくる也。され共神祇にはせぬなり。佐保姫と申名ばかりにて其姿なければ、姫と云より姿のあるやうに句を作りて、衣とは哥にも讀共實躰なき故に衣類にさへきらはぬ物を、なんぞ名所にきらふべきや。丸が愚成心にさへ誤と存間、智惠あらん人は定て後生に笑るべきとこそ思ひ侍れ。佐保と云を、佐保の山姫と云義を正說とぞんぜらるゝか、春の神をさほと云は其義にて無レ之、口傳別に有レ之。

さ夜　さをしか等に小松・小篠の小字、付句をきらふ、打越不レ嫌レ之。

さと〱　連に五句、誹に三句、をと〱同前。をしかは男の字也。さにもをにも不レ嫌。さをしかも男鹿なり。さの字こそ小の字なれ、をの字は小の字にあらず。

鷺　非二水邊一、雜也。鷺過て白鷺と讀て又あるべし。和哥にしら鳥とよめるも鷺なれば、折を替て又あるべし。誹にはく鳥と云句はしら鳥に各別なれ共、白の字に七句去べし。また青鷺・五位鷺等

しらさぎ二折を可レ去。かさゝぎは鳥の事なれば鷺に三句可レ去。但、源氏の宇治の巻に、しらさぎをかさゝぎと云事もあれば可レ依二句躰一なり。

盃のひかり　など月によそへたらば、月に二句可レ嫌レ之。然ば可レ爲レ秋。以上新式。是にて面の月を持也。夜分也。天象に二句也。酒三の内なり。

坂　二、今一、名所にあり。とさか、非二山類一。各別の物なれば付てもくるしからず。をひの坂、山類にあらず、述懐なり。年レ去坂三の内なり。但、丹波の老の坂は山類也。非二述懐一。千年の坂も山類にあらず、述懐にあらずといへども坂三の内也。春の坂、同前、春の季を持也。

櫻の宮　風の宮、伊勢の末社なり、名所にあらず。

咲　と云字、連に四ほどありと申せば誹には五有べし。それも木草の花の名を替てある事也。正花には二句有べからず。花の咲に門戸をひらくなどの開の字は二句去也。其故は花のさくと云時は、發の字・咲の字・開の字などを書故也。花のひらくと云時に、門・戸・扉・文等の開とは面を嫌べき歟。ひらくと云詞、尤物なれば新式には見えね共、折に一ほどあるべき詞也と思はるゝ故也。

早苗　夏也、植物なり、水邊にあらず。

澤　只一、名所に一。誹には澤二、名所に一、以上三也。山澤など聲に讀ても三の内也。又、澤山は山澤と同字ながら物の多事を云詞なれば、山類にも水邊にも少もきらはず、澤三の外也。されども山の字・澤の字三句づゝ去也。

さ山　は山の心也。小の字に付句ばかり嫌べし。

さゝ波や大津の宮　など枕詞なりとも水邊なり。

さゞれ石　さゞれ荻・さゝ栗、いづれも小の字に二句きらふなり。

さ夜ふかき　に、あくる・あけぬなどゝいふ事付れば同意に成也。但、句躰によるべし。

指の字　戸・月・日・塩・船等皆二句去と無言にいへり。更に心得がたし。只三句づゝきらふべき也。

里のあま　阿波の名所なり。水邊なり、非二居所一、非二人倫一。但、塩焼・汲など詞を加へたる句ならば人倫に成べし。人倫になりても名所には嫌べき也。又、いづくの里の海士ならしなど云句は名所にあらず。かやうの差別万事にわたるべき也。

酒　過て霞汲・竹葉醉をすゝむる、又、盃など此内にあるべし。かくのごとくひかゆる類、大略二なり。誹には此外に、しゆと聲に讀、なさけをくむ・醉狂・あられ・みぞれなどによそへ今一ありて、一座に三度酒の句はあるなり。あはもり・せうちう等の異名も此内と知べし。皆折を嫌べし。

五月二　有明、五句嫌。以上无言。此文章心得がたし。卯月・長月・霜月等も相かはる事なきを、さ月とよび出して有明を五句嫌べきいはれなし。さ月、面の月をもたず、夜分にも天象にもあらず、有明にきらふべき道理なし。有明月の異名なれば、かやうの月次の月には二句の外は

嫌べからず。

さむる　に閨などの沙汰二句嫌べし。さむ

無言抄に如ㇾ此有事更に心得がたし。さむると云詞は躰のなき物也。夢か目か酔かさむる物なければいはれぬ詞なるに、ふとさむるに二句嫌とは落字か、定て目か夢かの事成べし。閨、居所の名なれど夜分たるにより、ね文字に付て、めをさます・夢をさますなどに二句嫌とは云成べし。

目のさむる　に見る、嫌べからず、

無言に有。みるに目・眼、聞に耳、口にものいふ・呑・くふわざ、手にもつ・とらゆる・擒、足にありく・行・踏・香はく・けるなど、皆したしき事にて付がたき義なるを、ふるき懐紙などにも付たる例あり。新式に沙汰なき事なれば古人吟味せず付来と覚侍る。但、みると云に覗・觀・察のかはりめあり。必目にかぎらず、心にて見る事あり。聞も耳にかぎらず、鼻のきくと云事も、口のきくと云事も、手足のきくと云事も、拍子のきくと云事もあれば、目に見の字・耳に聞の字を昔より不ㇾ嫌と、後生に疑ひをなすべし。丸つく〴〵と案に、目にみるの字も、耳に聞の字も、嫌ときらはぬとの差別有べし。人の心をみる・毒薬をなめてみるやうの目にてみぬ・みるの字ならば、付てもくるしかるべからず。口をきく・香を聞・手足のきく・目のきくなどの耳にてきかぬ聞の字ならば、耳に付てもくるしかるべからず。目にてみるたぐひのみるの字は、眼目に不ㇾ可ㇾ付。耳にてきく類の聞の字は、耳に不ㇾ可ㇾ付。此條よく〳〵分別せらるべき事也。無言抄にかけるがごとく、目のさむるに見る、不ㇾ可ㇾ嫌とあるは少あらめなる書やうか。是も目のさむるは物をみる目にあらずと云心なれば、惣別は目にみるを嫌が能と見えたり。作ㇾ去さますめにもみるはむづかし。又、夢をみるなどにも目を付ばしたしく覚へ侍る。只向後は目にみるも、みるに目も各別の日、各別のみ様ならずば皆同意になして付事無用と相定たく侍る。耳に聞も同前。

さ文字　つれなさ・戀しさなどの類、

二句嫌ふべし。

さもあらばあれ　と云句に有の字二句嫌、さもあらばあれ、任他と書故也。

さは　など云詞、百韻に二句斗あるべしと無言抄に侍り、是は上人きゝちがひ給歟。更に耳に立詞にもあらず。いかほどもせではかなはぬてにをはの詞也。連にはともあれ、誹には二句去にすべきなり。

さらの字　ことさらは故の字を書故に、殊字にも更の字にも二句嫌といへり。事の字には不ㇾ嫌。但是も付句ばかりは嫌べき歟。殊更と云詞、何なり共いひたてゝ、其中に別してぬき出てかはりたる事を云詞也。故の字をうちまかせてことさらと讀字にてはなけれども、唐の文章の内にやはらげて詞を付る時、所によりてかるがゆへ共、此ゆへとも、ことさら共、かんなを付たる斗也。しかればこの字・更の字にも、異の字にも、殊の字にも、少づゝおもさ・かるさのかはりめはあれども心は通故なり。

され　春され・秋され・冬され・夕され、是ばかりにて夏され・朝されと云事は哥にもあるべからず。是は口傳の詞にて書あらはす事ならず。只春なれば・秋なれ

ばと云詞と心えよと、哥書の註に先達も書をかれしなり。惣別哥書の註はつかひ太刀とて、直實の義をばあらはさぬ法なり。是をあらはせば道淺くなりて破る故にかくのごとし。上人道を祕するにあらず、祕してつたえんがためなりとはかやうの事共也。誠の執心あらば師説を受らるべきものなり。他の道は不知、此道ばかりは自見ならぬ事也。

さばへなす神　蠅のごとく悪神の多を云也。夏なり、神祇なり、生類也。

さび鮎　おちあゆ、皆秋なり。

殘菊(さんぎく)の宴　十月五日に重陽のごとく詩作酒宴あり。

幾

蛬(きりぎりす)　秋也。誹ニハ二句すべし。蟋蟀(しつそつ)と漢にいひかへても二の内なるべし。但、連歌に蛬一の外に、きりぎりすうたふと神樂の名を今一句するとあれば、誹には蟋蟀(しつそつ)と以上三句有べし。若又、筆つ虫・させてふ虫などきりぎりすの異名等も三の内也。

きのふ　只一、昨日・けふとつゞけても一なり。誹にはきのふ一、折をかへて昨日と又一あるべし。若昨日と二あらば、さく日と聲にも不可有。さく日斗も同じ。

昨日の鐘　けふのかね、共に晩鐘也。入相に折を嫌ふ。もとより夕時分ニ成也。

砧　只一、誹には擣衣(たうい)今一有べし。前の砧の句に、音・聲・響・打など云字結びたらば、後の句には共字を結ぶべからず。擣衣と必聲によまずして、衣うつとも砧の外にある也。砧に衣類、二句きらふ。きぬの字には三句たるべし、板の字に五句嫌と無言抄に有。砧とはきぬの板と云心にて付たる名かと思へり。さにはあらず、きぬたゝくと中下略の詞也。板にあらざる證據は、きぬたの字は石篇に書也。さるにより當流には板を付にもくるしからず。

きぬぎぬ　戀也、夜分なり。別れのかへ詞也。新式に非。衣類ニ物の所に出して、小書にころもの字には打越を可嫌かといへり。然るを近代は連に衣類に二句嫌。是は夫婦曉起わかるゝ時、をのがめんめんの衣裳をとりきるより、別れの異名と見えたり。然れ共別の名に定りたる上なれば、もはや衣類にはなるまじき義と治定して、衣類にあらずと古人の沙汰しおかれし事なれば、誹には式目を守りて衣類には不可嫌。乍去衣類の二句つゞきたらん三句めには斟酌有べし。打越をきらふ事はあるべからず。衣の字には、きぬと同字なれば二句嫌事尤也。連には一座一句の物なれども、誹には花などのある事を、きぬぎぬと哥によみたれば、戀にならぬきぬぎぬ今一句あるべし。別れの字にも、戀ならば七句去べし。戀ならぬ別には二句去べし。戀ならぬきぬぎぬも別の詞は同前。花のきぬぎぬは定家御哥にも、曉庭落花(げうていらくくわ)と云題にてよみ給ひたれば、戀にはならずと夜分にはなるべきか。答云、その心持にてこそあらめ、無言抄にも花のきぬぎぬも夜分なりと明せり。丸おもへらく、花のきぬぎぬとよめる哥、此定家の御哥よりさきに不可有。きぬぎぬは別のかへ詞なるにより、題の曉の文字より若衣の上に花の散たるを、又、風のよそへちらするをよみ給ひた

れば、その哥は夜分なれど花のきぬ〴〵と云詞一できたるを根本にして花の散を連誹に、曉の心なくてする句共をば夜分といひがたし。其御哥は𣘺川の百首にあり。それをみ給ひたらば合点(がつてん)あるべし。

岸(きし) 一、名所に一、彼岸(かのきし)一、誹には只の岸二、名所に一、彼岸一、以上四なり。ひがんとあらば、彼きし共、はるかの岸ともあるべからず。かの岸は尺教の義なれば水邊にあらず。又、春秋に二度ある故に雜也。ひがんをば時正と申なり。夜晝の長さ同じき故也。ひがんと時正とは折を嫌也。時正には岸の字付ても不ㇾ苦。

木こり 樵夫(せうふ)と書ゆへに木の字に二句去也。人倫なり。

木と木 三句去也。きとこと讀かはりて、一方植物にあらずば二句去なり。木と草、二句去也。

木をきる こるとしても植物にあらず。

木に燒木 薪の字を書故に二句去也。薪に木こりも二句去也。

木に几帳(きちやう) 二句去と云は、偏事(ひがごと)也。几帳と書故なり。木の字をかくは草子・物語に、かんな書とて、文字の聲をかりて筆者の書よき字なれば、何心なく昔より書ならはしたる斗也。木の字の心はなきなり。

木曾 木の字二句去。岐岨(きそ)共書故也。

木曾路 山類にあらず、木曾とばかりは山類也。木曾路は、木曾へゆく道は、別の國よりもつゞきてある故に山類をのがるゝ也。それも木曾の山路などいはゞ、木曾山の中にある道なれば山類也。他准ㇾ之

清見寺(きよみでら) 水邊也。清見が關同前。

きじ 一、きゞす一、折をかへ野鷄一、以上三句皆春也。かりばの雉子は冬也。聲・鳴・音をたつるなど云詞入ば春也。春はよひに雉子のなく所を開置、未明にゆきてとるを、鳴鳥狩共、開すへ鳥共、朝鷹かり共云也。かりばのとりと斗いへども雉子の事なり。雉三の外ながら折をばかゆべし。

桐 秌也、初秌にちる物なり。連にさのみもてあつかはぬ物にて、一座に二句ある懷帋をいまだ見ず侍れども、誹にはおほく用にたつもの也。秌の桐一過て梧桐(ごとう)と折をかへて又一有べし。此外にきりつぼ・きりがやつ・桐火桶・桐の箱等の秌にもたらず植物にもならざる桐、折をかへて今一有べし、以上三句の物と知べし。但、桐つぼ・きりがやつは雜なれども、植物には二句去也。

北祭(きたまつり) 冬也、賀茂の臨時の祭なり。霜月下酉の日なり。寛平元年にはじまる。

狐(きつね) 只一、誹にはきつと斗も、こつね・きつに野狐・小狐の太刀・狐色・野子(干)・稲荷(いなり)・命婦(みやうぶ)等の折をかへて今一有べし。狐川は狐の字にあらずといへり。しかれば付てもくるしかるべからず、よくたづぬべし。

居所と居所 三句去也。

君 人倫也、戀也、依ㇾ句躰ㇾ大君ならば非ㇾ人倫。大君とは天子の御事也。もとより戀にもならざるなり。大君とする句も、君が代とするも皆帝御事なり。戀にあらずして君とさすは、面々の主君をさすなり。是は人倫なり。友をも客をも君と云事あり。是も人倫也。和漢に王の名、人倫に

あらず。その人倫にならぬ王は帝王斗也。天下をもたれぬ覇王の名は人倫なり。誹にも君と云句をよく聞分て去嫌べき也。

菊の花　たくと云は、菊花香と云合せ焼物の名なり。梅花香と云も有。植物に二句也。それ〴〵の季を持べきなり。

菊　連に一あれば、誹には二有べし　夏菊も此内也。衣裝の菊とぢも菊花香も此うちなり。人の名の菊池・菊王丸、鳥の名の菊いたゞき、刀の菊一文字、雍の名の菊めい石・菊川等は植物にも秌にもあらず。作ㇾ去折をかへて今一有也。菊のきせ綿・秋なり。

霧の海　降物・聳物なり、水邊にあらず。

霧の籬　降物・聳物・居所いづれも二句去也。頃には同面をきらふ。

霧間　と一ありて又、霧のひまなどゝあるべし。誹には霧間と二ありて霧のひまと今一、以上三たり。

霧の香　といふは霧に匂ひの有物也。聳物也、ふり物にも嫌、霧のかといひて別にたきものあるにはあらず。霧不斷の香をたきと詩にも作るは只秋の霧の事也。

きさらぎ　に月次の月、二句嫌べし。彌生にも同前。以上無言。此月次の月と云は・む月・さ月・文月などゝ云月の事也。月日のはやく暮てなど云も月次の月なり。さやうの月の字には付てもくるしからず、無言の書やうあらめなる間、つ文字の處に書たれども又爰にしろし侍る。

きさらぎ　に衣、二句きらふべし。

き文字　しらざりき・いはざりきの類なり、二句去也。遠きに近き・深き・淺きなどのき文字、付てもくるしからず。おもひきやなんど云きやの詞、誹には一座に二あり、置所をかへてすべし。

曲水宴　三月三日に有也。

祇園會　六月七日なり。

乞巧奠　七夕をまつることなり。

北野祭　八月四日なり。

きり原の駒　信濃の名所也、秋なり。

きぬくばり　冬也。衣類なり。正月の小袖を師走にくばる事。

遊

夕暮　只一、誹には夕間暮と今一有べし。聲に讀て夕陽・薄暮等も二句の内なり。夕暮に折を可ㇾ嫌歟。黄昏・晩景は夕暮に同じ心ながら、文字別なれば二句の外也。されども夕暮と夕ま暮とは面を可ㇾ嫌也。又、夕ま暮のまの字、休め字なれば間の字・眞の字に不ㇾ嫌。

夕暮　と云に明ぼのなど付てはくるしからず、打越にはあしゝ。打越を嫌と二句去と同じ事の内に、物によりてかはりめありとは是等の類なり。

夕卩　連に二、誹には三あるなり。夕とばかりは折に一づゝあれば、一座四句物也。誹にはせきと聲に讀句・出勝にして五句の物也。夕卩は連にも夕の字の裏にあれば、誹には夕と夕卩とは七句去也。夕と夕と面を梓也。夕卩と夕卩とは折也。夕と夕卩と取合連には以上六あり、誹には八有たり。聲に讀て、二句・三句あらば、よみに讀ゆふの字・夕卩の字をへらすべし。聲に讀ても讀によみても都合一座に八ありと可ㇾ知。夕と夕とは面を嫌ふ。ゆふに夕卩・聲によむせきの字は皆七句へだつと知べし。夕字に暮・晩景・た

そがれなど皆三句去也。乍レ去大暮とて春・秌のくるゝ・薮暮・老の暮などは二句嫌也

夕立　夏也。只一、夕時分にはあらず、只雨の名なれど夕の字・立の字には三句づゝ去べし。暮の字に二句嫌と云はわろし。但、誹には夕だつ雲・夕だつ風などゝ今一句。折をかへにある也。其時は夕の字八の内にいりて夕時分になるにより、暮に三句嫌。朝時分に打越を嫌。ふり物にも二句。白雨と書事は天滿森、由己法橋、山谷が詩にあると申されしかば、丸が執筆の時書始し文字なり。正字なれば夕の字・立の字に二句可レ嫌義ながら、新式に其沙汰なければ、昔のごとく三句可レ去也　惣別かやうの文字あたらしく見出したりとて、懷紙短冊にはかゝぬ事也。歌道不相傳の人珍しき文字をとりあつかふ物なり。古人のかゝれし哥書を御覧ゆへ、ほとゝぎすなどにも郭公と云文字ならで、子規共・牡(杜)鵑共不レ可レ有と、中院入道殿丸に被レ仰聞レ侍し。尤殊勝の御教なり。

夕立　に雲を付て打越に電・雷不レ可レ然と新式にあり。

夕立の雨　は雨三の外なり。雨と云字にも三句去也。時雨の雨同じ。

夕立　に蜩などを結て夏と無言にあり。丸案ずるに、夕立は六月・七月の哥にもよめり。蜩は秌の哥にのみよみて夏にはいまだ聞ず。しかれば夕立のかたかろくて、日ぐらしのかたおもければ秋になるべきか。

夕月　夕時分の月の事也。夕の字入たる月の外、暮る月影など連にも二あれば、誹には句躰をかへ三有べし。たそがれ・入相など皆夕時分也。いづれも折をかゆべし。

夕月夜　夜の字はあれども非夜分、夕の月也。

夕づくひ　是は入日の事なり。月の字にあらず。されば夕月夜と取まぎらかすべからず。此說非なり。正說はあ文字の所にくはしく記レ之。

夕づゝ　辰星と云星の名なり、天象也。昔は夏になる、今は雜也。星には面を可レ嫌　月と日には二句去也。

夕は山　名所にあらず、夕下の端山なり。

夕は川　肥後の名所なる故に暮の字に不レ嫌。但、句躰によるべし。

夕がほ　夏也。暮の字に不レ嫌。無言抄には二句嫌とあり、あやまり也。打越にも付てもくるしからず。若夕時分に仕立たる句ならば、朝時分にも夕時分にもきらふべし。夕の字八の外也。夕の字に三句。但句躰によるべし。夕皃の實は秋也。瓢簞とは折をかゆべし　惣別瓢とばかりよし。簞とは籠の變也。顏囘が瓢と簞と二色を持、瓢にて水をのみ、簞に食物を入たる故、へうたんと云つゞけてひとつの物のやうに人心得侍る。乍レ誤本より天下に云付たる事なれば其分にして置べし。此へうたん、句躰によりて秋になるべし。只は雜也。ふくべ共ひさご共申、此名の内出がちに折をかへて以上二有べし　夕皃の宿は植物なり、居所也。花となくても夏也。實の字あれば秌也。

夕やみ　宵闇と云事也。夕の字の外也。夕の字には三句、暮の字には二句、夜分也。朝時分にも夕時分にもきらはず、宵のには面をきらふ也。

ゆふはらへ　夏也、水邊なり、神祇也、夕時分也。

夕ま暮　このまの字の正字、師傳の祕事也。おそらくは當代傳たる人あるべからず。

ゆふつけ鳥　神祇にあらず、夜分なり、只鷄の事也。四闕の外にもよめり。

雪　連に春の雪を入ても一座四句の物とす。誹にはせつと聲に云ても以上五句すべし。新式に此雪の穿鑿、昔と中比と當世と說く不同にてむづかしき間、知やすきやうに誹には正理を爰に書付侍るゝに、世物の雪とは、花の雪・波の雪・頭の雪等なり。是は五句の外也、其故は新式にも似物の雪は各別の事なりと云〻。まことの雪に誹には七句去べし。氷に氷室、面を嫌也。水邊也、納涼也。富士の雪、連に近年常の雪のごとく消を春とし、初雪迄を冬とするは、近代の宗匠万葉の哥を知ながら和哥不二相傳一故に万葉集をあがめず、先達をあなどるあさましき義也。誹には万葉の哥を用て、富士の雪は雜なり、消も初雪も皆夏にするなり。富士のねにふりつむ雪は六月の望の日きえて其夜ふるなり。と侍る上は、今みる人の目に相違する共、上代の哥を用る此道の本意なり。既に延喜の比も富士の煙はたゝざれども、歌には煙のたつやうによむと古今の序に侍らずや。世間公事沙汰の批判にさへ、古歌を證跡にせし事多し。まして連誹に万葉の歌を不レ用事あるべきや。宗祇・宗長時分には富士の雪を雜にせられしを、近代赤人の田子の浦の歌を新古今の冬の部に入たれば、定家・家隆の時万葉の歌をば不レ被レ用と推量して、冬にあらため定といへり。是和歌撰者の心持を不レ知故歟。しら玉かなにぞと人のとひしとき露と答てきえなましものをゝ業平のよめるは伊勢物語に、鬼はや一口にくひてけりと、二條后を死人と思ひてよめるやうにかけるところ殊勝なればとて、新古今の哀傷の部に入らる。此集を連歌の去嫌の證となさば、此歌も哀傷の歌なり、戀の部に入ざれば戀の歌にあらずといはんや。倘種〻の習ひ、撰集にはある事と承り侍る。新古今の部立を信じて、万葉の望の日きえてその夜ふるなりと、たゞしく讀たる歌を虛言にすべき道理はいさゝかあるべからず。誹には宗祇・宗長の見立を信じて消と初雪は夏にし、只富士の雪は雜にするなり。若又此外に分明なる義理あらばしたがはるべし。愚案の及ぶところかくのごとし。

雪　に、ふゞき・みぞれ、連には面をきらふ、誹には七句去也。雪に霰は近代不レ付と申せ共、是非義なる故に誹には付て少もくるしからず。そのつけざる義は、丸雪と書てあられと讀ゆへ也といへり。小智は菩提のさまたげとはかやうの事にや。万葉には水鳥と書て鵜とよめり。しからば鵜に鳥をもつけまじきにや。万葉書には種〻の心得あれば、文字を見て一遍に道理を定むべからず。

雪の花　ふり物也、植物にあらず。六の花・不香花、かやうの雪の異名皆五句の内なり。

雪間 雪のひま・雪の絶る・殘る雪・皆春也。雪のなごり・雪の雫・冬のよし云人あれ共わろし。雪の名殘と云も殘雪の類也、雫と云も雪げの水と同じ。雪汁も春也。冬も雪汁はありといへども、大法春ならでは消ぬものに定りたれば雫も汁も皆春也。その故は雪のひまも雪の消事も冬にあれ共、皆春に定たる上はうたがふべからず。

雪の山 二色あり。一には雪をあつめて作りたる山なり。雪まろげの類也、是は降物也、冬也。非二山類一。二には天竺の雪山也。句躰によりて聞こゆる也 是も非二山類一、降物には嫌レ之。冬にも成なり。つくれる雪の山と折をかへて雪山はあるべし。

夢 に幼、二句去也、寢ざめ・目のさむるなども二句なり、連には七句去也。誹には五句嫌べし。夢、夜分なりといへども、うつゝの字を結べは夜分にあらざる也。

夢 とばかり有句は大方戀に成也 依二句躰一也 春秋の夢は戀にもならず、夜分にもあらず。此春秋の夢と云は、夢のごとく過行義也。往事如レ夢と詩にあると同じ事也、春秋にかぎらず年・月・日・時の過行をたとへて云夢ならば、夜分にあらずと云事也。春の夜の夢・秋の夜の夢などゝ云まことの夢は皆夜分也。句躰による事也。夢中間(問)答・夢想國師など申も夜分にあらず、夢の字には五句去也。

夢の世 夢のごとくなどの詞、夜分にあらず。

ゆめ〳〵 夢に二句、夜分にあらず。

弓に矢 弓張月(ゆみはり)・年の矢等此類にあらず、但、可レ替レ折と、新式目の打越をきらふ物の所に出せり。弓と矢に打越きらへと云事也。あとの小書は弓張月と云に年の矢と云句は打越をきらふ物にはあらず、折をきらへと云事也。しかればたゞの弓に年の矢も二句也、年の矢にたゞの弓も二句なり。折をきらふと云は、月の弓と年の矢との事ばかり也。誹には弓張月と年の矢も面ばかりをきらふべきなり。惣別弓の字はたゞの弓と月の弓と連に二あれば、誹にはきうと聲に讀句今一有て以上三の物とす。

ゆか 非二夜分一。とことすれば夜分也。

ゆくゑ に行の字・末の字を二句嫌といふ事は、向後と書てゆくゑとよむ故也。是は身のゆくゑ・世のゆくゑなどの足にてありかぬゆくゑなり。道のゆくゑなどは向後の文字にあらざるゆへ、行の字・末の字に三句嫌也。

ゆく にゆきゝ・ゆきかへる、二句去と云は、往來・往還と行の字ならで書故なりといへり。

行末・行衛 二づゝあるべし。誹にはゆくゑ三、行末二有べし。ゆくゑとゆくすゑとは連に同面を嫌へば、誹には七句去べし。ゆくゑと〳〵、折を嫌。行末と〳〵と折を嫌ふなり。

誹諧御傘（九）

免

名神　非₂名所₁、新式如レ此あるは、たとへば春日の神・住吉の神など申は名所にあらずと云事なり。其故は、奈良の京におはさねども、いづくの國にても勸進申其御名を奉レ唱とき、春日大明神と申により名所にはあらず、只神の御名になると云事にて、かくかゝれ侍るを、近代其義をわきまへずして名所になると云なり。さあらば何を名神と云ぞととへば、住吉をば上つゝを・そこつゝをなど云を申と答られ侍る。是大きなるあやまり也。底つゝをなどゝ云を非₂名所₁と云義あるべからず。連にはともあれ、誹には神の御名を名所にはきらはるまじき事肝要なり。但し、それも社とか神垣とか宮ゐとか云句ならば名所にきらふべきなり。句躰によらずして名所に成と云もならぬと云も皆無理也　とかく式目のこゝろは神の異名をいふにあらず。春日・住吉・北野など名所の名をばさせども、神の御名成故に名所にあらずと定たる物也。おそれおほき申事ながら、たとへば山賤といへば山の字はありながら、賤の身の名になれば山類にきらはぬやうの事成べし。

和布（め）　雜也。若和布は春也。めをかるは夏也。

名所と〳〵　誹には二句去。

名所の春日　に春の字・日の字付てもくるしからずと新式にあれば、一切の同字別吟は嫌ふべからず。但、幾日のか文字には三句去べし。

名木の散　は秋也、名草のかるゝは冬也。

目　只一、よそめ・うきめの間に木のめ、此外にあるべし。誹には人のめ二、もくと聲によみても此内なるべし。うきめ・よそめの內、又、木の目・魚鳥のめ・山椒のめ・髪（かみ）などのつぎめ・いくつめ・疊のめ、かやうの類多ある故に、連のやうに差別すれば誹はつまりてでならぬもの也。所詮よそめもうきめも、人の上に云目の字は折に一づゝ以上四あるべし。その外に人の上ならで用るめの字は、人の目には七句去て、面に一づゝありと心得べし。然ば人の噂のめ四、其外のめは八ありと知べき也。凡新式にのらぬ指合、數すくなく出せばけやけき物のやうに思はれ、多く出せばかろく覺て誹しよく侍れは、あら〳〵かくこそ申ゆへ、座（其）座の宗匠次第にはからひ給ふべし。少の誤ありてもくるしからぬ事也。

めく　色めく・ほのめくの詞、折に一づゝなり。誹には一座に五あれば面を嫌ふべし。

めるめり　は也と云詞の心か、二句去たり。しかしながら、なりには不レ嫌。とまりには面をきらふべし。但、折をもきらふべき也。めりどまり、耳にたつとまりなれば、誹には一座に三あるべし。

見

砌　不レ可レ爲₂居所₁。新式にはかくのみありて庭の沙汰なし。昔も砌の池・砌の

松など云句あれば、庭のやうにおもひなす人あるによりて不レ可レ爲二居所一とかゝれし物也。山の砌・池の砌・階の砌・宿の砌は、只其あたりを云詞なるを、新式以後の宗匠、庭の替詞のやうにいはれしを、其門人信用して新式をそむき居所に二句去となすか。其時・其刻などゝいふ言葉の類にも其砌とは云也。更に非二居所一、又庭の替詞にあらず、連に一あれば誹には二あるべし。居所にも庭にも嫌ふべからず。砌下花房などゝ詩にも作り、階砌と字註に侍れば庭のやうにもおもはるれど、たしかに庭のかへ字と云本文なければ、新式にも見えぬ說を用て折を去がたし。蘭などは砌より庭に似たる物なれ共、付てもくるしからず。少も指合は句の邪魔なれば、正文を見ざる間は庭と砌と別〳〵の物とおもはるべし。新式に不レ可レ爲二居所一とのせられたるは、庭とかはりたる心をみせたり。庭は人家の物なり、砌は人家にかぎらざる物と云心也。然を其後庭の替字と心得て居所に嫌ふ事、其不レ可レ然。それも新式に誤りたる義疏ならば尤也。其證跡もたきに新式をもどくは勅定をそむくになれば、證文出來ざる間は誹には新式を可レ用かと存事なり。但、可レ隨二所好一。

湊　只一、名所に一、誹には二、名所に一、以上三なり。春秋の湊と此三の内也。水の字に不レ嫌。

峯　名所たりといふ共、二の中たるべし、只嶺二も有、誹には嶺二、名所一、又名所に二、只峯一もあり。としてもかくしても折をかへて一座に三ある也。秦嶺・々上・嶺松などゝ聲にいひても三の内也。壬生忠峯など人の名にある峯は山類にもかゝざるゆへ、嶺と云字には面斗を可レ嫌也。嶺に高根・富士の根・甲斐がね等連に折をきらへ共、誹には面をきらふべし。尾上・遠山・嵩・高砂・山のは等を、峯に折を嫌ふ說・面をきらふ說、連にまち〳〵也。誹には高根等を嫌ひて別の字を不レ嫌、山のたかき所は峯とひとしきものと了簡する斗にて嫌ひそめしと見えたり。愚成說なり。山のたかき所にも面〻各〻のかはりめあるにより、文字を別〻作り置り。句躰さへかはらば付てもくるしからず。高根・かいね・富士のね等はみねと同じ吟なるにより、是をきらふ物なり。

三日月　連には一座一句なれども、誹には他の季に今一あるべし。三日月の出る、非二夜分一。丸云、しからば入は夜分たるべし。三日月と斗は夜分なり。三日月の出るを晩と思へる人あり、非也。夜明て出るたり。しかれども朝時分の沙汰なし。出るとあり共可レ非二夜分一。三日月に日を付事嫌はず。

都　一、名所に一、旅に一、新式一座三句の所に如レ此あれども、近代は都とは只二句有レ之と無言抄にも見えたり。誹には都一、名所に一、旅に一、此外にひなの都・鬮の都・月の都・龍の都、（月宮殿と出たらば月の都あるべす、）龍宮城と出たらば龍の都不レ可レ有。南都とあらば奈良の都不レ可レ有。京都・都鄙・上京・下京・旧都・遷都・新京・平安城・洛陽・洛中・洛外・下洛・東京・西京、如レ此の類今一有也、以上四あれば皆折をかゆる也。九重（九重城とあらば九重不レ可レ有。）都に面を嫌。大宮・禁中・大裏・百敷・雲井の庭・大内山・仙洞・院の御所・みどりの洞・霞の（一字闕）・箱屋の山などは、都・九重に七句去べし。此内にも和に讀と漢に讀とのかはりめ侍

る。たとへば月の都・龍の都といふは都に折を嫌ふ。月宮・龍宮など聲にいへば別の物のやうにきこゆる間、付てくるしからず。國の都・ひなの都も折をきらへども、國府・々中などゝ申せば、都に付ても不ㇾ苦。かやうの差別其座の宗匠次第に可ㇾ被ㇾ致者也。京・都・洛の三字は都四の内なれば、聲に讀ても互に折を可ㇾ嫌ㇾ之。

都　に古郷、二句嫌と云。あらめ成義也。都只の都と只の故郷とは少も不ㇾ可ㇾ嫌。都に旅の古郷は面を嫌とあれば、誹には七句可ㇾ去。都に古賀の古郷・奈良の古郷などは折を嫌とあれども、誹には面を可ㇾ嫌なり。都、名所に不ㇾ嫌

都鳥　水邊なり　都に面を嫌とあれば、誹には七句去べき事ながら、都の字けやけき物なれば誹には折を替て四の内にする也。文字に付て折を嫌といへば、大宮人・九重・古郷等には少も不ㇾ可ㇾ嫌。これ憲法の深賾なり。又、都鳥を冬也。無言にあり。此抄は高野木食興山上人、紹巴に聞てせられしゆへに、指合の奥義を極めたまはず、水鳥なれば冬と思はれたりと見えたり。冬になる水鳥・ならぬ水鳥、差別するは子細ある事也。かもめ・鵜・鴛鳥・鷺などは雜也。大事の師説ある故ㇾにしるさず。

宮　内・神祇に二、皇居に二、但、此内一づゝは名所たるべし。宮づかへは裏に一あり。誹には中宮・斎宮・宮殿・上宮・太子・宮中・後宮などゝ聲に讀、面を替て今一あれば以上五句也。高津宮・吉野宮・難波宮、是等は皇居也・名所也。高圓の尾上の宮、皇居の宮も神にあがめてあれば神祇なり。皇居・神祇、混亂多き間、誹には神祇にても皇居にても名所の宮二・非名所宮二・聲にきうと讀宮一、以上五句となすべし。[illegible]宮。又三宮腰の中將・宮の宮等は非神祇、非名所、皆人倫也　皇居の宮の二句の内に一句有也。宮居、非皇居所ニ宮の字に都二句去也。きうと聲讀時は付ても不ㇾ苦。又、族の宮・おみやなど皆一句なり。都に宮付句嫌ㇾ之。但、京都などゝ聲にある時は付ても不ㇾ苦。人の名にみやちよ・みやなどゝ云は宮内の内也。宮雀、神祇也。宮に住雀をも云、又、物もらひをも云、依ㇾ句嫌ㇾ生類にあらず、宮五の内なり。

簑　に笠・打越を嫌ふ。間六、雨に簑・笠付ける。簑云、笠は日にも、人に忍ぶにもきる故、降物に付ても不ㇾ苦。簑はふり物に不ㇾ付と云々、降物に付ても不ㇾ苦。簑は降物に不ㇾ付と云、私云、然らば簑は降物に打越を可ㇾ嫌也。但、ふり物ならぬ雨には付てもくるしからず。

三字假名　同じ面を嫌。誹には七句可ㇾ去。其三字假名と云に、嫌ふと不ㇾ嫌と差別あり。不ㇾ嫌三字假名、心・泪・衣・枕、かやうにいひかゆるやうなる文字なり。嫌三字かへり〳〵・かへる〳〵・くるゝ〳〵・くれて〳〵・あくる〳〵・あけて〳〵・すつる〳〵・すてて〳〵・ゆかん〳〵・ゆけど〳〵・おもひ〳〵・おもふ〳〵、如此三字の通ふをいひかへぬは嫌也　然におもひ・おもふばかりをうつくしき詞とて近代不ㇾ嫌　是私成義也　誹にはよき詞・あしき言葉なし。多くの詞の中におもふと云詞一を嫌ふ法度に、きらはぬと云べき無ㇾ義、只可ㇾ嫌也。丸よく〳〵了簡するに、新式に三字假名といへるは、右に沙汰するかへる・おもふ・こゝろ・ながら等

の事にはあらず。是等ならばかんなとは不レ可レ云、三字假名といへるは、てにをはの事成べし たとへば、山はたゞ・水はたゞ・山は猶・水はなを、或は、我身〳〵・をのが〳〵・これも〳〵・それは〳〵・誰か〳〵などやうの三字つゞくを云成べし。おもふ・かへるなどは文字一字の上なれば、心さすかなとのいひかへられぬ三字と同じ事にて、かへる〳〵とありても、おもふ〳〵とありても、少も嫌ふと云事にてはあらざるべし。我身と云我も一字なれ共、わが身と、がの字が入て三文字になれば、聞にくゝ耳にたつ也。我と云斗は字去、身と云斗も字去なれど、我身とおもじを入ては一字にはしがたし。かやうの詞を三字かなと古人は定たるを近代誤て、ばかり・ながら・こゝろなどのいひかへられぬ詞にてはあらず、かへる・おもふなどは、かへり共おもひとも云かゆる字なれば、是を三字かなとさたし来れると見えたり。向後誹には努〳〵是をば不レ可レ嫌。只てにをはの詞のそひて三字つゞくを三字假名とは可レ云嫌レ也。玉ほこのみち・山かげ、此みちと三字つゞくを三字とおもふはわろし、の文字は上へ付たる文字也。但又、客はなを、山はなを・人はたゞ・君はたゞ、かやうのは、たゞ・はなをとつゞく三字をば嫌つけ侍る 是もの道をきらはぬならば、は文字は上へ付たれば嫌ふまじき事也、他准レ之。

み狩・み階　箏のみ文字、折に一、おまし・お前などゝ云かへては裏・面にありと連にいへり。誹はよろづの俗語をつかふ故に、御の字などをさやうにすくなく定ては百韵調りがたし。をん・おゝん・ぎよ・ご・み・お、此六に云替て五句去に定めたるが能也。同よみならば両をかゆべき也。

み吉野・み熊野　三の文字をも書なれば、御の字には二句去也。問云、三文字正字ならばなんぞ御の字に二句嫌や。答云、吉野は皇居なるゆへ御の字をももちゆ、熊野は權現をあがめて御の字をも昔より書なれ侍る故也。

みぞれ　雪に七句、雨に五句。問云、五句の物は三句なるに、此みぞれと雨とを何故三句にせざるや、答云、余のかろき露・霜等は三句去、雨は重き故、連と同じく五句去也。

南祭　春也。石清水臨時の祭也。三月中辰の日なり。

身にしむ　秋也。連に二あれば、誹には三あり。身の字、人倫になる也。温・涼・ひやゝか・すさまじ・ひゆる・かんずる・熱する等に皆二句去也。

御階　禁中の玉階が本成により、御の字を加故に御はしと許は皇居たる故に居所不レ嫌。御の字なくして、きざはし・二階・三階などは居所也。玉はしも居所也。玉の字はほめたる詞なれば、いづくにても見事なるきざはしと云義なれば、御階とはかはるべし。御階一過て折をかへ、きざはしあるべきか。但、句躰同じかるべし。聲に讀ては今一有べし それも同折には不レ可レ然歟。

水と〳〵　三句。水のぬるむ、春也。清水ぬるむも春也。問云、結ぶ清水のぬるむと云句は春か夏か。答云、春也。その故は水むすぶは雜、清水むすぶは夏也。水ぬるむは春也 今結ぶ清水のぬるむは、

去年の夏つめたかりし清水の、この春ぬるむといふ事也。かのつらゆきの袖ひぢての哥心にてかく(右カ)らすべし。

御祓　に、はらふ、付てもくるしからず。水邊なり、夏なり。なごしのはらひ・あらにこはらひ、皆同事也。

海松　夏也。みるめなかりのなどいひても夏なり。

みつぎ物　無言に云、御の字不レ嫌と云説如何、然ば二句か五句か二五句に治定すべし。以上此不レ嫌と云は、調の一字をみつぎと讀と云義か、御の字をそへてかける物多し。みつぎと申詞に付て吟味すれば御字正字也。酒をみきなどゝ云にはかはるべし。酒は三寸と書が正字也。寒時呑レ之ば風寒入の身を三寸よけて吹と云より名たり。されども御器共書くあれば、御の字を付る斗嫌ふべし。みつぎ物とは大裏へ捧物を申せば、ありやうに御の字にきらはではかなはざる義かと存侍る。但、其座の宗匠次第になさるべきもの也。

道とく　三句也。

三嶋(しま)　豫州・豆州兩國にあり、共に山類にあらず。但、豫州のは水邊也、豆州は水邊にあらず。

汀(みぎは)　二、今一は名所なり。

みてぐら　幣也。御の字に不レ嫌。丸つら〱幣をみてぐらと讀に子細有べしと存ず。御の字に付句は可レ嫌歟。幣は神の乘移りてまします御座(くら)也。社檀(しやだん)と同じ手にとる神のみくらと云事也。手は神(かん)主(ぬし)の手成に、みてとはいひがたしとおもふ人侍るべし。是はさにあらず。手に取神座(みくら)と云事なれども、あがめて御の字を上に付たる也。此義をわきまへず、只幣をみてぐらと申と計心得て、御の字に不レ嫌といへり。尤新式に朝児に朝と云字付てもくるしからざる物の内に入ながら、付支不レ庶幾レと書り。以レ之思レ之ば、みてぐらも御の字には付句をきらひて可レ然歟。

みかど　帝と書故御の字付ても不レ苦。作レ去御門ともかけば二句去と云義もあり。無言には門に面を可レ嫌かといへり。是いはれず。帝の正字ある上に御門と書は、かした書とて字の讀をかりて書定斗なり。衰末に大裏のおほき門戸の内にまします故に天子をみかどゝなづけ奉れども、もはや天子の御名になり定て後は、門戸の心うせて更に居所の義なし。殊に帝の字をみかどゝ定し上は、何の御の字・門の字にさすべけんや。既に橘を花の字に少も不レ嫌。是も始は花を賞翫(しやうくわん)して付たる木の名なれども、橘と云字を正字に定たれば、花をきらはぬやうに新式に見えたり。それのみならずかやうのたぐひ多侍り。此道理にて、みかどに門の字も二句去にして可レ然かと存る物也。再往案レ之、御字にも門の字にも一向不レ可レ嫌付ても不レ苦。若是をきらはゞ、さし合多く成事侍り。其故は、宮と云名は御座と云義より付たり、都と云はみやたちこもり給ふ故也。然共宮に御の字・屋の字少も不レ嫌。連誹共に去嫌ものゝ多きはさまたげになれば、大形の事はきらはぬやうに定たるがよく侍るべきなり。

みことのり　勅とも詔とも書故に御の字に二句去也。さあらば詞にも法にも皆二句去可レ成。

みこ　神子と書故に一切の御の字に不レ嫌。一説に二句去と無言などにみえたり。丸おもへらく、是連歌師のそこつたるきらひやうか。神子と書は神社にある神楽みこ、又、口をよせするみこにこそ此神の字をかけ、天子の御子には神の字をかゝず。然ば連にするはこれたかの御子のたぐひをこそもちゆれ。みこ・かんなぎ・てるひの神子の類をばもちひざるに、みこと書は御の字にきらふ、きらはぬととりさたせらるゝ事無二覚束一こそ供れ。誹には此二色のみこ、何も句に作れば其句〳〵のみこのかはりめを聞わけて可二去嫌一也。神社のみこを神子と云は御の字の心なし。御の字は付ても不レ苦、是は上略の詞也。かみの子と云義也。か文字を一字略したる物也。天子の御子はあがめていふ義なれば御の字也。尊の字・命の字をみことゝ讀も、根本御の字に付句を可レ嫌也。みことゝ斗云時は七句可レ嫌くわしくは右に侍り。

みき　三寸、又、御器と書て、御器と書に御土器と可レ書か。土の字を中略して書歟　又、御盃と云を中略して云歟。三寸と書が理りつよければ、御の字にはみき付句を可レ嫌也。三木とかけるは文字の聲をかりて書斗也。又、馬のみき・よきもとも三寸・四寸と書。此時は酒とはかはりて御の字に付ても不レ苦。酒の三寸、御の字二句嫌ふと無言にあるは誤か、只付句斗嫌ひて可レ然なり。

御幸　に行の字、二句さりたり。

みたけ　みかきが原・藤代のみ坂、皆御の字也。

見なれぬ山　みなれぬ浦・ならはぬ山などいひては旅也。但、句によるべしと云々。

水　に、みくさ・みかくれて・みこもり・みしぶなど許三句去也　汀・みなぎるは二句去也。みなぎはゝ三句嫌ふ。

みづくきのあと　に寫し繪・筆・文、何れも、但むづかしらんかと無言にあり。此内水莖とは書物の事、筆の異名なり。文字の事なるに、筆・文など不レ可レ付、同意なり。寫し繪は不レ苦。文の字も戀・旅の文字・折紙、筆をとりて書様にはなくて・物の本の古文眞寶・文撰・文學者等の類は不苦。いづれも依二句躰一事也。

道　に夢路・戀路などの路は二句なり。山路などの歩路には五句、誹には三句・玉ぼこ・ふまだ・つゞらをり等、道にも路にも二句去也。九折也。哥の道などの行歩ならぬに野路・山路の路は二句去也。

霙　に雪、面を嫌ふ。但、誹には七句可レ隔。雨は五句去也

みどり子　に緑の字不レ嫌　或説に折を嫌といへり。兩釋共にあしゝ。折迄を可レ嫌もいかゞ、付事もいかゞ、然らば面を可レ嫌歟　以上無言。右の文段哥學にうとき書やう也　小兒をみどりことも付たるいはれ、何さ色をみどりと云詞の起り、各別也　哥道の秘事なれば爰にあらはさず、付ても不レ苦と云説を可レ用也。

身はふりて　など云詞、非二述懐一、但、句躰によるべき也

身はしづかなる　などに胡蝶のねぶるなど云躰不レ似合。身なと可レ云ほどのものにあらず　以上無言　此條は去嫌にもあらず、近代連歌師の古實に秘する

事を末食上人の同宿ひて、謡燕のあまりに非義とはしらで爰に書付たまふと存により、いらぬ事ながら丸がおもはくを記し侍る。蝶は小虫なれば身とはいひがたしとや、あさましき沙汰也。大身を現ずれば虚空にみち、小身を現ずれば芥子に入と云事古語にも侍り。生死をはなれぬ群類には、金翅鳥のごとき大身も、蚊のまつげに巣をくふ有情も侍り。人の目にちいさき虫とて、身命の二字を付がたしと申べけんや。古歌には非情の草木の花をさへ身と讀たる事侍りき。俊成の御哥にもありたるとぞんず。相かまへてかやうのかたおちたる古實を用給ふべからず。

みる　に、こゝろみ・人のかたみ・かへりみなど皆二句去也。見るに打渡す、二句嫌と醬にいへり。但、橋うち渡すなど云は不嫌 無言如此 是は打わたす渡方人にと云哥の五文字、打見わたすと云心と申に付て云とみえたり。げにもらしき義ながら二句まで可レ嫌事にあらず。さやうに穿鑿せば、打むかふなどにもみる心ありて二句可レ嫌歟。若付句などの句躰同意定ならば斟酌すべし。指合とは不可定。

遠み・近み　などの、み文字二句去なり。

御薪　正月十五日、百官ことごとく薪を奉る事あり。

水口まつる　春也、苗代にまつる事也

三冬つき春はくれ共　とは古哥詞也春に成也

みさ山まつり　七月廿七日也。みさ山かりも此時の事也。はやつくるも此まつり也。

水かけ草　秋也。天河に多よめり。兩義あり。一には水影草、一には水懸草也。是は稲なりと云々。みかき様の哥にて、川に讀たる哥をおかし、稲とは思ひか。證なる古き證哥出ざるほどは不レ可レ用。

籰虫　雑也。たくとすれば秋也。籰に折をきらふ也。

志

時雨　秋に一、冬に一、初時雨としても・月に結びても冬也。木の葉の時雨・川音の時雨・草の時雨、青冬也。露の時雨は秋・時雨・霧・冬、霧の雨の時雨は夏。連哥には一座に二句。誹には季をかへて三句可有。時雨に時の字・暮の字付ても不レ苦。誹には時雨に降物二句去也。雨の類には三句去也。

塩　只一、焼に一、潮一、以上三也。誹には塩噌などゝ醬にいひて今一あるべし。但、醬によまず共、焼塩・塩浜・塩魚等の間に一、以上四也。朝しほ・夕しほ・塩満・塩干・もしほ、只一の内也。塩木・塩釜・塩やく・たるゝ・はこぶ・汲などやくしほの内也　潮は塩海の事也。連には三色にわかちて一づゝするなり。誹には潮をのけて残る二色の塩、いづれ成とも折をかへて二句も可レ有　但去嫌の字四の外は不レ可レ有。衣のしほたるゝなどは水邊にもあらず、別の事なれば塩の字に二句可レ嫌義なり　され共塩をたるゝと云詞には、しほたるゝと申詞折を可レ嫌。文字多くて耳に立故也　しほるゝは二句。一入・二入・ぬしほなどは、文字かはれば付ても不レ苦。又、しほらしき・目もとのしほ・折節のしほあひなど云詞は、塩の字

をふかく兼たる詞なれば塩に面を可ㇾ嫌也。作ㇾ去塩四の外也。塩やきは人倫・水邊、塩をやくは非二人倫一、水邊ばかり也。焼塩・壺塩・塩魚・塩鳥・汁菜のしほめなどは非二水邊一。塩の小路・小塩山などは塩の字に面を嫌也。藥の名の塩胆・南塩等は躰に讀といへども味、塩に異ならざるにより付たる名なれば塩に面を嫌ふ、塩四の外也　塩梅などは塩四句の内なれば同折を可ㇾ嫌也　物のあんばいと云も塩梅と書故に嫌ふ同前。塩屋四の内也。連に近代居所に二句といへども、誹には貫式のごとく不ㇾ嫌。居所屋の字はありながら塩焼用斗に搆たる也。たとへば雜場を火屋と云に同じ。居住の心なし。又、眞の町に塩屋と家名を云句躰たらば居所なり。

鹿

一、かのこ一、すゞか一、誹にはろくと聲に讀て今一、以上四也。鹿角、雜也。鹿野園、雜也　尺教也。居所也。但、鹿の園とすれば俳句躰・猿にも生類にもなり鹿四の内也。又、鷲の山・鶴のはやし、名所にあらざるよしの説を用る側ならば、鹿野園も佛所なれば名所あらざるべし。鹿頭外道、人倫也、非二尺教一。鹿毛の馬・しかの皮・しかの毛筆皆雜なり、非二生類一。かせぎ、鹿の異名也、秋也。又、山のかせぎと枯木を云事もあり、是は雜也。すかる、烁也。かのこ、夏なり、聲としても夏也。かをさして、雜也。躑高が古事也。手鹿・藥くひの鹿、此二も雜也。或はしかすかの聲、或はいつしかなく、などゝかくしても秋也。生類には二句。鹿四の内也。鈴鹿・鹿嶋等の名所の名は四の外也、生類にもあらず　作ㇾ去鹿の字には面を可ㇾ嫌か。甞踏鹿などゝ秋也

下もえ

春也。下萠と斗はせぬ事也。野か原か園山か庭か、是等の文字を入てするなり。植物に二句去也。雪の下萠・霜の下萠も同前也、春也。植物に二句、草木の名あらばもとより植物に三句。火の下萠は各別の變也。近代の説かくのごとし。丸がいはく、貫式に下萠と斗出して植物に打越を嫌とあるは、野か原を不ㇾ入しても下萠と云詞春に成と云にふかき心有。草やらん木やらん、何の差別もなく春にあを〳〵生出る物のあるを興じて、下萠と云詞出來たると見えたり。野か原かに限とおもふは末世の小智の分別か。いづくも大地をはなれたる所なければ、道の傍・岩のはざま・壁のくづれ・山岸・海川の邊にも下萠は可ㇾ有ものなるに、野か原かなくてはいはれまじきと云説は、かへりて愚成説なれば、誹には貫式のごとく下萠と斗もすべき事と相定侍者也。此説疑給ふべからず。

下草

下荻・下紅葉等の詞、上に山か森か木々などの文字そはですべからざるよし、無言抄にあれども、なくてもくるしからざる也。此下の字、口傳無ㇾ之人は不審あるも尤也。とかく自見の哥學あさましく侍る。

したの字

連に折を嫌とあれば、誹には面を可ㇾ嫌。げと聲に讀ても一座に五也。しもといひても此内成べし。問云、しからばしもとは只一句可ㇾ有歟。答云、したと五ありても、しもと五有ても、げと聲に五ありても、出勝に一座に三色の内五句ありと可ㇾ知。裾野・下野とかけ共五の外也。もすそ・衣の裾は、すそ野に折

を嫌、下の字にすそ野・衣のすそ三句去なり。もすそは襟の一字ある故に二句去也。

下紐　衣類也。したの帯と折を可レ嫌。紐の字、折を替て三あるべし。下紐過て名所の下紐の関又可レ有。かやうの衣類にあらざるひもゝ三句の内なり。但、下紐と過て下紐の関・花の下紐等、ながくつゞきて三までは有べからず。下紐は夜分也、下の帯は非夜分、紹巴の説なり。

した待　心の内に人をまつ事也、戀なり。

しのぶうらみわび　誹には名所にも水邊にも二句去なり。此詞過て信夫山・しのぶの岡などゝ連にもあれば、誹には勿論也。乍レ去しのぶの浦とは不レ可レ有。かやうの名所の嫌やうは連には誹もかはる事なし。されどもしのぶずりなど今一有也。それも三句ながら戀ならば不レ可レ有。又、忍草・軒のしのぶなどは、名所の信夫とは文字各別なれば不レ可レ嫌。但、しのぶずりは名所のしのぶの里よりおる絹ながら、忍草を紋にすりたれば同折に不レ可レ有。惣別しのぶと云詞に品〳〵かはれり。一には何心なき名所の信夫、一は物をかくししのぶ心、一は物に堪忍する心、是佛法の忍辱の衣をきるなどゝ云類也。又一は昔古をしとふを、しのぶとも云なり。是等のかはりめをよく吟味して指合をば可レ去嫌もの也。

しのぶのやまず戀しき　などゝ云も同前。山類に二句。名所のしのぶは信夫とかけり。しのぶをなくてしのぶの郡などゝ云句には、忍草・忍戀・軒のしのぶ等は少も不レ苦。一しのぶずりは大略は戀のしのぶになれば、忍戀に面を嫌也。

しのぶ摺　奥州信夫郡にてすりたる絹なれば植物にあらず。但、古哥をみれば紋にも忍草をするにより、みだるゝ戀のたとへによめり。此故にしのぶ摺を忍草に折を嫌と連にあれば、誹には面を可レ嫌事ながら、折を無言抄にしのぶずりの類株なりといへり。然べからず。新式にも忍草株也とこそ侍れ、しのぶずりとはなし。忍草、忍の字に面嫌。

忍ぶの字　戀に二、只二、以上四、連にあり。誹には忍辱の衣・堪忍などゝ譬に讀て一座に五可レ有。

しのび車　戀也。戀にあらざるの説不用。忍の字五の内也。但、可レ依二句躰一也。

し文字　過古のし、二句なり。過古のしとは、過し・ありし等也。むかふし二句。むかふしとは、ちかし・遠し・等の類也。過古のしと、むかふしとは付ても不レ苦。

しとまり　清濁かはりても二句去なり。句の腰に折合ても付句嫌レ之。たとへば、ふかゝりし・淺かりしなどゝすむと、しらじ・よもあらじなどゝにごる事也。とまりにあれば、過古のしと向ふし共聞にくき故打越を嫌也

しのゝめ　に朝・今朝二句去也。夕時分には不レ嫌。右新式に決定せるを近代鈍底連歌師、しのゝめに夕時分嫌はせねども、作者には底がたしと註せり。是先達の心を不レ知、道理をわきまへぬ故也。少もはゞかるべからず。

しのゝめ　に日の字一句。又、さゝ不レ可レ付。しのとは面を可レ嫌。しの・すゞ・し

のに物思ふたどとは少も不レ苦。しのゝめとは明がたの名なり、夜分也、朝時分にあらず。故に朝旦に打越を嫌と釋せり。少も夕時分に可レ嫌いはれ無レ之

知　に、しるべ・しるし二句去也　しるの字は字去也。しるべ・しるしの兩字は、連に一座一句づゝの物なれば、誹には二句づゝあるべし。

しる　に、いちじるし・みをしるし但、みをつくし、とる虫のしるし、蟲也。是等の詞、しるに二句去也。

しるかれや　と云詞、無言抄に二句去の所に出せり、是誤也。是は知の字也。三句去べし。

物のしるし　に、それとはしるしなど云句、字別なれば三字假名にきらはず。

しきしまの道　に嫌、連に折たり、誹には面也　道の字をきらねば不嫌、しきしまと斗は日本の名なり　嶋三の外也　但、道といはず、しき嶋の國とあらば三の内也。

しら髪　述懐也。若無故に白髪又は髪の色のかはるたとへある句は、懐にかた付て述懐にならず。老に白かみは、常の述懐に許りて連に面を嫌とあれば、誹には七句可レ去。

しまき　冬也。ふり物に二句、風躰に三句なり、是をふゞきと同じやうに心得て雪と面を嫌は誤也。しまきとは時雨に風のそひたるを云也　雪のそふをば、ゆきしまきと云。是ふゞきとにたる物也　ふゞきは雪と風とばかり、雪しまきは時雨と雪とかぜと三色也　みぞれは雪と雨と二色まじるをいふ也。されば しまきは時雨に折を可レ嫌、雪には不レ可レ嫌。雪しまきとあらば三色に嫌也。よく〳〵分別すべし。

志賀　都の名也、水邊にあらず。松の字あれば水邊也。一松・汀にある故也。

嶋　無言抄云、嶋過て千嶋・八十嶋たどひてもあるべからず。此文言をみれば、嶋は一座に一句の物の樣に聞え侍り。又無言抄の岡の下に嶋一、名所に一と出せり。しかれば誹には嶋二、名所に一、以上三句の物と相定らるべし。扨、山類・水邊にきらふ嶋と、きらはぬ嶋あり。たとへば川嶋・池の中嶋やうのちいさき嶋は、水邊斗にきらひて山類にあらず。淡路嶋・えぞが嶋・琉球の嶋等の國の名は、大にても山類・水邊にあらず　又、國の名にあらざれども浮嶋が原・雀が嶋・室の嶋、山類・水邊にあらず、田蓑の嶋は水邊斗にて山類にあらず。浮嶋、是はうきしまが原にはあらず、只うきたる嶋也。松嶋・小嶋の類、其所山なるによりて山類・水邊兩方にきらふ、嶋と云斗も山類・水邊ながら、茶入のしま物・嶋もめん・しき嶋のみち・しまの小袖などは、山類にもあらず。三嶋、兩所にあり、攝州のは水邊ばかりにて山類にもあらず。

白尾鷹　鶴尾の鷹とも云、同事也。春に成たり。春鷹をつかふ時、政頼、尾さきを鶴のきみしらずと云白羽にて續かへたる事あり。其心は鷹の心にそのが尾の白きを殘雪と見て、深山へいぬる心なからしめんとの謀なり。

志賀の山越　昔は春也、今は非レ春。花を結び入ては非旅。

芍藥　夏也。若、藥種の名にいはゞ雜也。花とたくとも藥種の心にならざる句體ならば、花の名に成て夏になる也。是を比

上にあやまりて、ふかみ草・廿日草共云とて牡丹に混亂せり。何の書にも管見未レ知。梶原性善が万安方等をみるに、ゑびす藥と付たり、然ば芍藥と一折をかへ、ゑびす藥と又あるべし。牡丹には芍藥付て不レ苦、但、廿日草・ふかみ草等の和名は芍藥をも云と世上に心得たれば、是等の和名に芍藥と付事は諍論出來て無レ詮侍れば用捨すべき也。折など嫌と云事をば不レ可レ用歟。宗碩の說草決明を和名にえびす草と云といへり、又說に、芍藥を廿日草と云は、咲しよりちりはつるまで見しほどに花のもとにて廿日へにけり。此哥より云といへり。慥成出書いまだしらず。惣別櫻等の花も三七日有物と申せば、芍藥にかぎりて廿日草と云べきいはれなし。はつか草とよめる證哥見ざらんほどは難ニ信用ニ。

清水　雜也。結ぶといへば夏なり、せくも夏なり。只水を汲は雜也、只水を結ぶも汲と同事にて雜也。清水結ぶなどにすゞしき二句嫌。清水とある面に淸き水嫌也、折を嫌共いへり。誹には面を嫌也。清水にきよきと云字、付句斗嫌レ之。しみづに名所の清水寺は三句去也。きよ水といひても三句。清水寺にきよきと云一字も三句。せいすい寺・きよ水、山類也。水邊にはあらず。

柴戸　柴屋・柴の庵・柴垣、何れも非ニ植物ニ、居所也。惣別・柴・薪、植物にあらざれ共、ゆへありがましく新式に柴戸と書たるによりて今爰にしるす。柴の庵・柴の戸・柴垣・柴橋などの類過て、柴とる・柴はこぶ・柴燒など云柴は又あるべし。薪にするとせぬとのかはりめある也。連にかはりたる柴二句あれば、誹には句躰をかへて三句有也。古哥に冬柴の立枝など植物になる柴有。それは柴にとるべき雜木の大木にあらざるを云也。山柴・なら柴・下柴・々の小枝などいふ句は、皆植物成べし。

しをり　道のしるべに草木の枝を折かけて置事也、非ニ植物ニ。道と山路などの路文字に二句嫌也、ありく道にあらぬ法の道などは付ても不レ苦、路も又同じ。淡路などには少も不レ嫌。

述懷。只教之詞爲ニ一句ニ之時者、可レ付ニ釋敎ニ事也　以上新式の語也。此嫌やうは、たとへば昔・古などは述懷の詞なれども、出し候はむかしにてなどゝ云句は、只敎に斗嫌て述懷には不レ可レ嫌と云事也　但、うき世をば出ていりなんのりの道　などゝ云句は、述懷にも只敎にも成也。いかに新式にありとても依ニ句躰ニ事也、一概にして不レ可レ嫌、述懷とく三句也。

雫・したゝり　新式に山の滴・軒の雫、非ニ降物ニと侍るを近代愚成宗匠、ふり物か否の類を不レ入一句たるがたきよしをいへり・此義不レ可レ用　山には不レ及、中、古き寺社の檜皮の軒には、中不レ斷をつる所多かるべし。古人の智惠をもどくは淺ましき事に侍る。雫・滴・連誹共に折を可レ嫌。雫に雫のしたゝり、折を嫌。誹には面なり。木々の雫・軒の雫・降物にあらず。

宿　一座二句の物也。いろ〳〵のかはりめあり。宿所、居所なり。文の上昔の御宿所も同前　旅宿・池田の宿・鏡の宿皆同前。宿老、人倫也。老人の事なれば句によりて述懷也　又、町方には年老ならねども町の宿老とてあり、述懷にならず、

居所にたらず、友と同宿してと云句は非人倫、居所斗也。寺方の同宿、人倫也、尺教也。居所に不嫌。宿坊非居所、非人倫、尺教なり。宿食・煩の名也、非居所。宿業（中折に）居所あらず、可嫌尺教。宿運・居所にも尺教にもあらず。宿世・同前。辰宿・廿八宿・宿曜師・宿也。是等は星の事なり、非居所。何れなり共出勝に一座に二句なり。

してとまり 連に折に一づゝ四あり。誹には面をかへて五可有。

時分と〳〵 打越を可嫌 朝時分・夕時分事也 夕ぐれと時の類也。朝時分と〳〵・夕時分と〳〵、五句去也。誹には三句去也

霜 冬也。きゆるとしても冬也。余の降物に二句去也。

神祇と〳〵・釋教と〳〵 皆三句去也。

しろきと〳〵 しら〳〵と皆折を嫌。しろきとしらとは面を嫌。無言に如此。式目には見えず。此分たればしろき、折に一づゝしらと云て、又折に一づゝ以上八ありと見えたり。しからば誹にはひや〳〵など聲によみて、出がちに以上九可有 さあらばしろきと〳〵は面をかへ、しらと〳〵共面をかへ、しろ・しら・はくなどいひかへて七句可去。はくと〳〵も面をかゆべき也。白佛言世尊・薇白などゝある時は申と讀により、しろきにもしらにも少も不苦。春日にはるの日の類也。白の字、九の外也。佛の眉間白毫は九の内也。李白・白樂天等の人の名は、しろきにもしらにも。申と云時のはくの字にも、三句去て九の外也。

嶋 嶋津殿など人の名になる嶋も。嶋三の外也。もとより山類・水邊にもあらず。作に去嶋の字には面を嫌也。又、嶋田髷治などは人の名といへど、嶋田と云所にて打により其名をいへば、名所の嶋になり、嶋の内也。嶋木綿も唐・日本の外の嶋國より出始たる故に、今世に織とも嶋三の内なり。嶋津嶋も鳥の名になりたれ共、嶋の事なれば水邊をのがれざるにより嶋三の内也

樒のきりは きり樒を摘など尺教也 植物也 雑也 しきみたくも同前。併、燒とすれば非植物、樒と斗は非尺教。云説もあれど只釋教たるべし。花もさかず、別の用によび出すべき木の名にあらず。作に去樒が原など云句は、名所なれば、尺教たるべからず しきみの花と云句は雜なり、正花にたらず、只尺教たるべし

椎しひ 紅葉せぬ木なれども、實故其名をもてあつかふ木なれば椎と斗も秌也 實も葉も柴も秌也

しげみ 野か原か山か、いづれも所なくては只はいかゞと也。草木を加へては同前。以上無言。猶異義たし。しげる、同前。是近年の新義也。古連歌にしげみとばかりしたる句、まゝ多侍り。是ひが事にあらず。木草のしげき所を云也。みさにはあらず。茂きみどりと云心なり。心に聞によりて、其疑をなしたる物也。文字をこにをはのふかみ・あさみなどの苑藪と云に同じ。野山ならでも申さるゝ詞也。雜なり。植物に二句也。又、茂ると斗もする也 是は夏になり、作に同支しげるとばかりはいはれず。野山・草木の文字をそへねども、しげりと斗し立たる古人の連歌あるなり。是も植物に二

句也。當世座敷のしげるなど云は、夏になるべからず。非二植物一、只築呂の心ばかり也。言葉のしげりなどあらば夏に成て植物に二句。但、ことばともなくば夏に不レ可レ成。其故は詞の花、春にあらず、詞の花もとあれば春にたるたり。かやうの事を一字の大事とは申侍る。

しげき野山　などに植物、二句嫌也。但、露しげき野などいはゞ植物にきらはず、

かたしくなどの敷　百韻に只一、以上無言。是新式の非二言葉一、近代(衍文)の近代の了簡(れうけん)と見えたり。かやうのかろき字を一座一句の物とせば、誹諧しにくかるべし。しきたへ・かたしく・折敷・打敷・おしき・百敷・々嶋・敷衾(ふすま)・敷皮(しきがは)・莚(むしろ)・疊(たゝみ)を敷・座敷・かやうの詞少づゝ心はかはれ共、皆下にして道理有。しきやうかはらずとも字去にして可レ然者也。又、是にしかん・しくものもなしなど云詞は、如の字をかけば別の心ながら、少は敷の字に通心も句によりてあるものなれば、敷の字には二句去べし。如の字のしくは尤き物なれば、

折をかへて一座に二句可レ有。連に一座に一句あるべしといへるは、此如の字の事成べし。返々敷の字をば字去にしてをかるべし(き)也。

戀しき・わびしき　などのしき、二句嫌也。以上無言抄。是は敷の字にあらず、戀しきはこひしと云事也。侘しきはわびしと云事也。敷の字をもかけども正字にあらず、只てにをはなり。又、是にまぎれものあり。座しきと云は敷の字也。人をまちかねて、床に御座をしきて待事より起りたる詞也。よく〳〵分別あるべし。是はかたしくなどに可レ去二五句一也。てにをはのこひしき・わびしきとは可レ去二二句一也。もの〳〵しき・にが〳〵しき・をかしき・うれしき・かなしき・よろしき・くせ〳〵しき・たげかしき・いま〳〵しき・よろこばしき・うら山しき・さびしきは、皆てにをは也。

しばし　如レ此の言葉、大形百韻に二斗あるべし。誹には三あり。

しばらく　二あるべし。暫(ざん)時と聲によみて今一あり。しばし・しばらくに面を

嫌也。

しゞま　物いはぬ事也。

しらかさね　四月朔日の更衣時の衣を云なり。

鴫　秌なり。物がなしきのこゑたゞいひても秌也。

誹諧御傘（十）

衛

繪にかく草木　依二其の物一可レ有二其季一。此新式の心は繪にかける草木は植物にはならず、季をば持といふ義也。季をもたば、植物にも二句去べしといふ人あれば、古人其儀をも心得ながらとかく植物にせざるか、よき道理有て相定もの也。花の繪ならば春、紅葉の繪ならば秌の季と知べし。他准レ之。

衛門尉　右衛門かみと書て右の字はよまず、官なれば人倫にあらず。

恵比須　西宮明神の御事也。福神なれば神祇たりといへども、面八句の内にもくるしからず、夷狄のゑびすとは各別なれば付にもくるしからず。

ゑの木　雜也、ゑの實は秌也。すべてかやうの木の實は皆秌なり。

比

氷室　夏也、水邊也、一座一句也。氷にも、つらゝにも、ひようと聲に讀にも雪にも七句去べし。うすらひ・たるひ等には、ひといふ唱おなじければ面を嫌べき也。句躰をかへ折をかへて一坐二句有べし。惣別氷室は四月朔日より九月盡まで獻ずる物なれ共、六月一日を肝要と用故に、夏の季に相定る義也。ひのためしは氷室と折を嫌なり。元日にある事也。ひむろの雪も夏也。

檜原　たゞ一、誹諧には此外に折をかへ、檜木・檜物師・檜皮ぶき・檜垣などゝ今一有べし。老檜などゝ聲にいひても二の内成べし。檜のくま川など、名所にある檜の字は二の外成べし。

日ぐらし　秌也。一座一句の物也。文字も別に虫のなりも聲もかはりたれども、根本蟬と同類なれば蟬とは連のごく、誹にも折を嫌が能也。日ぐらし立入て今一句連にも侍れば、誹には蟪蛄と聲にいひて以上三句有べし。皆折をかふる也。

ひた　秋也。稻の鳥にならするゆへに植物に二句なり。一座一句の物なれども、誹諧には二句あり。引の字に三句、板の字にも同前、無言抄に田を結びては植物に二句とあり、誤也。なることかはりて秌の田ならでは、ひたといふ事これなし。

姫　連哥に二、誹諧には姫松・姫瓜などの人倫にあらぬ姫今一あり、但、はし姫・さほ姫・立田姫等も人倫にあらず。然ば人倫の沙汰をばせずして、たゞたに姫成とも一坐に三句折をかへて有べき也。

ひとり　壹、戀に一、月・松などに一、誹諧には此ほかに獨歩・獨吟・孤獨・獨身・獨樂園・獨臥など聲によみて今一有べし、以上四也。藥の名の獨活・佛具の獨鈷、四の外也。ひとりといふ詞には付てもくるしからず、獨吟・獨身などゝ聲によむ獨の字には字去成べし。惣別ひとりは人倫也。一文字にひとり、二句去也。一文字獨の字、聲にいふときは付てもくるしからず、ひとりにひとへきぬ・ひとへにひとしきなどの詞は二句去也。それもどくと聲によむ時は嫌はず、月ひとり・松ひとりなどは人倫にあらず。獨に一人とはおなじ折を嫌ふ、獨円の内也。ふたりに二人・みたりに三人、皆同前。但、月獨・松ひとりなど云には一人二句去也。ど

くと讀に讀ても人倫也。

一文字　に、ひとへぎぬを二句去と有。是はひとへ衣とかくゆへ成べし。ころもにも二句とあり、皆誤也。いかに單の字有とても、一重とかく方つよければ、一文字に三句嫌ふべきなり。但にと云詞も午ニ同字ニ、それはかろければ二句可嫌

火　四句の物也。誹には聲に讀句も相交て五句の物とす。面を嫌べし。篝火・狐火は五句の外也。實の火に七句去也。燈は新式に一座三句の所に別にあるを、無言抄に火四の内にたるとあり、是誤也。誹には五の火と灯とは七句去べし。ほかげなどいふ句を、別の事と心うるはあしゝ、火とほと同音なれば火五の内なり。思ひ・戀・病などゝかくしたる火は、火の字・燈の字には二句去。光といふ字、句躰によつて火の字・日の字に付句嫌也。それも光と聲によむ時は不嫌之。又、火とも、ほとゝぎすなくこ、紙燭・長燭・雪燭・螢燭・蝋燭・續松・薪・油つぎ・たく・やく・こがす・ふすぶる・くゆらかす・けぶる・けぶり・けぶたき・あぶる・いろ・湯をわかす・物を煮等の火の噂は、火の字・燈の字に皆二句去也。それも篝火・狐火などのまことの火にあらざるには、付てもくるしからず、たゞ火影と云にも猶不可爲夜分と新式に有。其は火に影の見えぬ物也。夜になりてひかれども、たくといへば夜分にあらずとことはられたるを、無言抄には火四の下に、ふと火の影見ゆるとしても夜分にあらずと載たり。たもじの所に委入とはあれ共、初心の人見あやまりて、たく火の影のみゆるとすれば、夜分にあらずとこゝろうべき事も侍べし、是はたく火の事也　但・衞士が焼火は夜分也、番所のたく火も夜分也。火は無別夜分也。たくは夜分にあらず。篝火・狐火などは似物たるにより火・燈に七句去べし。龍灯は夜分也。燈籠草、燈心とかはりて夜分にあらず、乍去燈の字あらん折をば嫌べき歟。緋櫻・緋桃・緋のはかまなどは、あかき色なれば火の字をもかくといへど、正字ゝ、れなゐの緋色なれば、火の字に付ても苦からずといへど、なにとやら聲相似たるやうなれば、二句さりてよかるべき歟。句躰によるべき也。

日　誹には日に月・星二句なり。いなづまにはきらはず、日と〳〵字去也。日次の日と申は、春の日・夏の日・秋の日・冬日・永日・遲日・あつき日・さむき日・くるゝ日・く數・日をえらぶ・よき日・あしき日・月日・三月・子日。誹諧には、丑の日・寅の日・頭・辰日・翔日・吉日・惡日・雨日・冬日・あすの日・佛の日、此等の日を申也。月・星などには二句去也、朝日・夕日・朝附日・夕附日・出る日・入日・日のかたぶく・日の曇り・くもる日も、日の影・日のさす・日のひかり・うつる日・てる日・くでりも。てる日の暮しとは、天子崩御を申也、乍去大象也　哀傷也、不吉の詞なれば、むさとはせぬ事也。はるゝ日・さやかなる日・長閑たる日、かやうに只今日に景氣をみる句作りの日は、日次・月次の日にあらざるゆへ、月・星等の天像に三句去也　但、誹にはこれも二句なり。一段むづかしき差別なれば、事くどけれどいづくも書顯もの也。

日に晝　つけてもくるしからず。但、句躰によるべし。

日の字　に、いくか・昨日・けふ・あす・不可嫌。なとゝひ・一昨日・昨日・今日・明日

など〻辭にいへば日に三句去也。いくか・けふ・あすの類、日次の日には二句きらふ也。天象にはきらはず。

ひみす　虫類也。うぐろもちの一名といへり。是もひぐらしに准じて、付てもくるしからずと可レ申事ながら、蜩とはかはりて別の字たし。日を見ずとかけば、日にも見にも字去なるべし。天象には嫌べからず。

ひかげのかづら　日影の魚・日かげ草。天象にはあらず、日の字には字去也。

日傭　手間とりの名也、日次の日也。天象には不レ嫌。人倫なり。

日の本・日光山　日の字には字去、天象にはきらはず。

光の影といふ詞　文字に光陰と書也、光は晝、陰は夜の事也。さるによりて光の影といふに、夜・ひる又、月・日など〻いふ事二句去也。但、月にても日にても一字あらんは不レ可レ憚レ之、夜・晝又同。ひかりの影といふ詞に、朝な・夕な・明し・くらす、心ひとしきま〻うちこしをきらふべき歟。句躰によるべし。

光の字　月・日・星に一、花・雪等に一、光陰に壹、以上三句の物也。誹には今一、くはうと聲に讀て以上四也　いづれも折をかふる也。ひかりとばかりいふは日の事になる也。是も四の内也。天像に二句嫌　若又、くはうと聲によむ二あらば、よみによむひかり一へらすべし　萬如レ此。

久堅　久の字・方の字・空の字・半天、是等に二句去也。丸云、かたの字にては、方とも堅とも書かゆる文字あれ、ひさの字は久字ばかりなれば、久しきと云詞には折をも去べき歟。其故は、久といふは尤字也。はるか・かすか・始・をはり等の文字、皆連に一坐二句の物也。久しきも思レ之ばおほくは有まじきもの歟。但、新式に見えぬ指合ならば、其坐の宗匠次第にしにことがむべからず。

平野祭　四月上申日也。攝津國の平野のあたりにあり、仁徳をいはゐたてまつる。源氏・平氏・高階氏・大江氏等の祖神也。

楸　梀なり、剏梀にもるもの也。一座に一句なれば　誹には季をかへて二句有べし。

日陰の糸　神祇也、冬の日かげのかづら共云也。青糸を以て作るとみえたり、一説、賀茂の臨時の祭の時かざしにする也。葵かづらの事也云〻。

紐　衣類也、夜分也、下紐といひても同前。無言抄かくのごとし。丸おもへらく、紐はきものに付てあるものなれば、衣類の儀は尤也。下紐は下のはかまとて、肌に着たる袴紐也　それを人にあふ夜はとく物なれば、夜分といふも尤也。しかるを紐といふ句を、下紐同前也とて、夜分に嫌ふ事心得られず、それもつれなくて下紐をとかぬのなどいはゞ、句躰によつてこそ下紐同前なるべけれ。たゞひもとばかりに、道服にも踏皮にもゆかけにも箱にも經にも有ものなるに、わけきこえぬ書やう也。かやうのひもは衣にならず。問云、紐は衣類也、帶は衣類にあらずとは差別如何。答云、帶は衣裳にぬひつけず、衣裳の外に纒をもすれば、衣類にあらぬ事尤也。しからば帶と紐との嫌やう如何侍べき。文字も唱も別の物なれば、付てもくるしかるまじき道理なれ共、帶・紐とて人の身をまとふ一具の物なれば三句嫌べき也　問云、しからば下

紐と下の帶となにとて折を嫌ぞや、下帶とははだ着をしむる帶也。戀の句に用時は下紐と同じ心に句作も有もの也。又、産婦の腹をしめに濯をもいへり。又、男のだうさきをも申也。だうさきとははだ帶の事也。犢鼻褌ともいふ、是をとく・結ぶなどいはゞ帶も夜分にて、しかも戀なるべし。産婦の下帶は戀にたりて夜分にあらず、男の下帶も七夕に手向るやうの句躰ならば、夜分にはなりて戀にはなるべからず。いづれも衣類にてはあらざるべく、連とかはりて誹にはいろ／＼むづかしき差別あれば、能々道理をたゞしてまぎらひ有べし。紐も經箱等につけたるは衣類にあらず、下紐の關は名所也。是も衣類にあらず。しかしながら紐の字には面を嫌べし、下紐といふ句には折を去べき也。紐と云字は句躰かへて三有べし。關の名も海草に經の紐といふも三の外成べし。

平秋の句　に戀の秌の句付に、又、平秌の句不レ可レ付レ之、他准レ之。是新式の詞也。平秌とは戀の句にてなき秌の句の事也。

ひもろぎ　日本紀に神籬とかけり、説々多し。さりながら神供と心得たまふべし。

君とひと　といふ詞は、君臣と書ゆへに人の字に二句さる也。

ひとの國　他國とかくゆへに人の字に二句去也、人倫にあらずといへり。

一葉ちる　に桐・柳・楸・柞など付るは同意也。初秌に是等の木の葉落初る故なり。一葉衣も一葉とばかりも初秌也。

一葉のふね　旅也。非レ旅といふ説あし〻、以上無言。これは新式の和漢の篇に、一葉の舟・舟ニ一也如レ此之類旅也とあるを見て、和に用る一葉の舟、旅と定られたると見えたり。耳をとりて鼻をかむと同じ。漢に旅と定たるは、旅人の宿も不レ定、遠國を徘徊するをたとへていへる詞也。和に一葉の船といふは、一葉のなり、舟に似たりといふばかりにて、旅の心少もなし。新式の心を不レ知して、又はかりを悟しに旅也と註せるは淺智のなす所也。連にはともあれ、誹には旅に嫌べからず。和と漢との差別有レ之事也。さやうに文のまく嫌はゞ、歸の字も漢に旅になると有とて、和に歸と云詞を旅に用む哉、よく／＼分別あるべし。

一夏　とばかりは非レ尺敎、こもるなどあらば尺敎也。

一村　居所の心過て竹の一村など又有べし、誹には折をかへて、一村と聲によむ句、今一あるなり。

一文字　連に面に一づゝあれば、誹には聲によみても、よみに讀ても七句去にすべし。余の數字は連に四あれば、誹には聲に、よみても、よみによみても一座に五ツ、の物也。新式に一文字と、よの數也との多少を定に相かはる子細を、くはしくかゝれたる其文章をえしらで、無言抄にあしく註せられたり。不レ入義なれば委にしるさず。

ひたやこもり　ひたすら家に籠也。されば共伏隱とかけば居所に二句去也。

ひろふかひなき　などに生類二句嫌。しかれば水邊にも二句嫌也。

雛　ひいなともいふ、鳥の名も同じ文字也。しかれば折をかへて誹には二句有也。

又、田舎をひなともいふ。ひなの都・ひなの別・ひな人・あまさかるひなともよめり。これは人形のひなにも鳥のひなにも少もきらはず。是等のひな、連に一句あれば二句有べし。又ひな男と云は、うつくしきいさきひなのやうなる男をいへば、人形のひな過ては有べからざる歟。但、連にひいなあれば誹にはひなと一、ひいなと一、以上三句すべし。鳥のひなは此外也。鳥のひなも連に一あれば、誹には二あるべき歟。丸おもへらく、人形のひな・鳥のひな・田舎をいふひな、皆各別ながら、いづれも二句づゝあらば六句のひな、耳にたちてかしかましかるべし、さやうの事は有まじければ、若六句迄出る句あらば、作者になりて用捨有べき義也。作去連に一句の物は誹に二句する習なれば、法度をやぶる理はなきことはりにまかせ、兼て制すべき事にあらず。

ひやゝか　初秋の事なり、暮秋にはかなはず。

ひゆる　ひや〱　などのことに、ひやゝかとおなじ冷の字也、秋なり。

ひこばへ　たにの草にても春になるなり。

廣瀬龍田まつり　四月四日なり、和州にあり、水と風との難を祈る神也。

日よしまつり　四月中の申日也。

ひと夜酒　夏也。夜分にはあらず。夜の字二句嫌也、醴の字を書故也。あま酒ともよめばあま酒も夏也。六月朔より七月卅日まで日録に奉ると、公事根元にあり。

氷魚　冬なり。あじろにてとる魚也。

毛

物を　如此置所をかへて二句也　新式一坐二句の物の所に出せり。物をといふ三字かなは、面をかへていくつも有を、此置所をかへてとかけるは、上句・下句のとまりの事なるべし。近代は一句すはらぬゆへ、をどまりせねばさたして入ざる儀なり。

もなし　誹諧には三句。下句の内壹句と二句と出かたに折を替。以上三あり、とまりの事なり。

紅葉　たゞ一、楓・櫻などに一、草の紅葉一、もみぢの橋は此外可レ成歟。連歌に以上三なり、誹諧にはこうようと折をかへて以上四也。紅葉の橋、連哥に三の外とあれど、誹諧には四の内成べし。季を持ゆへ也。紅葉に色の字二句去とあれど、松・竹・苔・霜の赤からぬ色などは付てもくるしからず。戀の袖の露・雫・涙などの色は二句去也。又、紅葉ある面に一葉・落葉・木のはなどに嫌レ之　その葉は紅葉に二句、ことばはくるしからず。又、紅の字も二句去也。又、紅葉に野山の色・草の色づくなど、連歌に面を嫌へば、誹諧には七句去べし。紅葉かつちるは秋也。ちりそむるは冬也。又、紅葉に二句嫌色とは忍ぶ戀の色に出る、袖の色・泪の色・ゑゝる色・恥るいろ・猿の尻・顔の色等のあかき色の事也。人の顔の色などもしろき・青はきらはず、袖・絹の色も赤き心にあらずばきらはず、花の色も五色にあれば、木の名をもつて分べし。花の色とはかりある句は赤き色に成也　袖の色も紅涙の色に成也。色好の色もあかき色に成也、皆紅葉に二句去也。此次第に人のうた

がひをはらすべし。紅葉にあかき色を嫌はゞ、墨染のあたりに鵜や烏をもきらひ、白の字に霜・雪をも嫌べき事なれども、あかき色の外、四色は其沙汰なし。付てもくるしからず。しかれば色とばかりいふ内に、あかき心ある也。あかきいろはうつくしき物たるによつて、花の色とばかりいふも、色を好といふも、根本あかき色よりをこると知べし　然ば紅葉の色に紅粉・朱・丹等も嫌べし。されども、くろきと云に墨・烏の類、しろきといふに霜・雪の類、黄なると云にやまぶき・女郎花の類、青といふにみどりの字は嫌へども、松・竹・苔・草の類は少もきらはず、結句付合にする也。かやうのわかちがたき事、連哥・誹諧にはまゝ有事なれば、末代の人諍論すべからず、あさましき事也。始に申ごとく、たとひ無理なりとも、其座の宗匠次第にして嗔意をおこさず、やはらかにおももち有を此道の達人とすべし。この式目の去嫌も無理と思はん人には、無理にしてをかるべき也。聲をからして理を立んとし給べからず。紅葉に楓、連に折を嫌へば、誹には面を嫌べし。

紅葉の朽る　などしても秋也。

紅葉のちりて物を染る　新式冬に成也。

紅葉の橋　爲ニ天河事ニ間不レ可レ爲ニ植物一、依レ句可ニ二句一也、以上新式。此文をみそこなひて、色々むづかしくさたし、これは季をばもて共、うへ物にはならずといふ事也。されども下界の紅葉によそへたるやうの句ならば、植物に二句きらへといふ義也。さるによりて句躰によるとはかゝれたるもの歟。依ニ句躰ニといふ理もなく季をもてば、うへものに二句きらふと云説あしく侍る。

物思ひ　といふは襟と書ゆへに、物の字に二句去也。物を思ふなどゝ、てにをはの字入ば、物の字に三句去也。その字・やの字などを不レ入して、もの思ふと云句、物おもひと同じかるべし。

物うき　懶と書ゆへ、物の字にも、うきの字にも二句去也。物ごうきなどゝ、かんなそはれば三句去也。

物のけ　戀也。物のけ過て物のけしき共有べからず。氣ちがひ・物につかれ・物ぐるひなどは戀にならず、されども物のけとは折を去べし。

文字あまりの事　可ニ相双ニ條如何、及ニ打越ニ可レ有ニ斟酌ニ歟、凡無用文字不レ可レ然の由見ニ和哥抄一、これ新式嫌ニ打越一物の所に入たる文也。文字余に文字余を付はくるしからず、うちこしにあるはわるしといふ文章也。然は二句去也。無用の文字あまりとあるは、あまさでよきを態あますを云。里はあれて・名残あれや・名にしおはゞ、などの類はくるしかるべからず。これとても打越に嫌也。ならべては不レ苦。乍レ去三句まではせぬ事也。

鴫　秋也、鴫の草葉も秋也。連に鴫一あれば、誹には二有べし。鴫の草ぐきもしげるいへろ夏なり。

百敷　非ニ居所一、名所にあらず、内裏の事也、大内・大宮・雲井の庭・禁中などゝ申内裡の物名には、おなじ折を嫌べし。いかに禁中の事にても御門の名・御殿の名などは付てもくるしからず。連に一句の物は誹に二ありといふ乍ニ大法一、百敷などは誹にも二句はならざる也。百の字には

折をかふべし。連に百の字は一坐四句、誹には面をかへ、際によみても讀によみても三ある也。數の字には三句去也。しかれば百數一過て百官と有べし。それも折をなかにへだてゝ有べし。初折に百數とあらば、二の折にはすべからざる也。百數とは百官の衆の御坐を數ならぶるといふ事也。

求子　神社にて有事なれば神祇なり。神樂の名といふ說あれ共、深窓秘抄の神樂の部、求子・東遊などは見えず。源氏の註、去まうで・陽白殿の賀茂詣などに有と申せば、夜分にも冬にもあらず。するが舞とおなじ。

もろこし　過て、から國と又有べし、以上新式。誹には此外に唐・震旦・漢朝など今壹有べし。から國過て、から衣・からかさ・からなでしこなどのからの字は、折に一づゝ有べし。もろこしにから國は折を嫌。國の名ならでからと斗は面をきらふべきなり。

藻の花　夏也。塩海のもにはあらず。

森　たゞ一、名所に壹、誹にはたゞ森とばかり成とも名所に成共、今壹かへて以上三也。此外に大森の彥七・上林などの人の名のもりも此三の內也。又鯨をつくもり・安藝毛利などは、文字もかはればさしあひにあらず。露しん〳〵などいふ詞、森といふ字をしんとかけども、森と付てもくるしからず、うへものにもならず。又、森羅万像といふ事あり。是は植ものにはならねども、森には面を嫌べき也。

最上川　にのぼれば下るといふ詞付べからず、最上にのぼるといふ事二句嫌也。

もしほ草　うへ物也、水邊也。但、手跡の事に用る時は水邊には二句。植物にもなる也。無言抄には植物に成べからずといへり。これは文字をもしほ草といふかとおもへり。さるにはあらず、かくといふ枕詞也。たとへば、あし引のやまず戀しきなどつゞけたりとも、山類をばのがれがたし。

もくづ　うへものに二句也。

もののふ　人倫也。誹には武者・武家・武藝・武具・武篇（邊）・武略等の內、折をかへ今一有べし。

物いふ　に詞・言の字も二句さり也。中・のたまふ・口たゝく・語の類同前。

物のね　とばかり、近年管絃の事をいへり。證哥いまだしらず。

文字　に草子嫌也。誹には連哥に出ぬ書物なども、草子に准じて可レ嫌レ之歟。

もよほす　連にては耳にたつゆへ二ばかりといへり、誹にては更に耳にもたゝざれば、いくつも有べけれど、連に一ある物は二つ、二有物は三と定れば三あるべき也。催促と際によむ時は、今一ありて以上四有べし。

百千鳥　此もゝ千どりの事は、古今集の三鳥の中にて秘傳ある事也。連に春の季に定てをかるゝ、尤おもしろし。もゝ千の鳥といふは、さえづるとなくば春になるべからざる歟。この道理明なれば、こゝにしるさまほしけれども。こと〴〵しく長く申さねばならぬ事にて侍まゝ、閣レ筆もの也。

望月駒　八月廿三日信濃望月といふ所より牽る御馬也。貫之の今やひくらんの哥を不相傳なる人は、十五日に駒迎は限ると思へり。かやうの鼻のさきなる不審

をもたゞさず、哥學を自見して哥人と思へり、推量にては成ぬ事多かるべし。

藻に住むし　雑也、水邊なり。

勢

蟬　たゞ一、誹には二有べし。蟬と空蟬といひかへれ共くるしからず。蟬ゝ共有べし。但、文字多ければ空蟬〱とはあるべからず。此外に人の名の蟬丸・蟬哥の翁・源氏空蟬・笛の名の蟬なれ・蟬娟たる兩鬢等も蟬二の内成べし。蟪蛄も蟬也、夏也、蟬二の内也。

蟬に日晩　折を嫌へば、誹には面ばかりを嫌べき義ながら、かやうの一座に二句・三句の外はなき尤物は、誹にも折を去が能なり。

關　たゞ壹、名所に一、戀・文・春・秋をとむる内に壹、以上三也。誹諧には此外に關東など聲に讀て今一有べし。からの函谷關・陽關なども此内成べし。四の關は皆折を嫌也。關とばかりは旅にあらず、居所にあらず、關をこゆるなどは旅也。關屋・關の戸は居所に二句去べし。ゐせき・水をせく・戀の關・春秋をとむる關・うり物をせく・詞をせくなどは居所にあらず。泪をせく・水をせく・氣をせく・しはぶきをせくなど一座に二句也 關白は外也。ゐせきも此二句の内也。四の關には面を嫌也。但、くわんと聲に讀句には二句去也。關白殿はせきに付ても不レ苦。但、くわんと聲に讀句には字去成べし。山にある關は山に嫌レ之、浦に有關は浦に嫌也。

雪山　天竺の名所也。山類にならず、雑也。句躰に依て冬也。丸思へらく、山類成べし。若、雪山ノ童子とあらば、山類にあらずと云事を聞誤て、山類にあらずと言ル歟。

節分　冬也。

せまる・せむる　あひにたる詞ながら文字かはるゆへ、すこしも去きらはず。せまる・せばきは二句去也。

せんといふ詞　に、するといふ詞二句去也。するとく・せんとくも同じ。

壽

鈴虫　秋也。誹諧には二句有べし。

すゞこさす　春の鷹詞也　すゞのたらぬやうにこをさすとなり。

すゞしき　連哥には色々むづかしく侍れ共、誹諧には夏に壹、秋に一、納涼と聲にいひては壹、折をかへ以上三也。又無實をはらし、役をすましなどして、心の涼しきといふ句も此三の内也。それも季をばもつなり。すゞしきに、ひやゝか・すさまじ、二句去也。又、涼しき三過て、夏しらぬ・あつさわするゝなどの納涼の詞、すゞしきの裏に又有也。すゞしき道、極樂の名なれども三の内なり。季を持也。

薄　一、尾花一、すぐろ、又、ほやつくるなどの間に一、以上三也。誹諧には薄二ありて以上四也。公家の名のすゝき殿もこの内なり、されど人名なれば雑也。なひとかほのめくなどいろえては秋也。すぐろはやけ野ゝ跡に生出る黒き薄也。ほや作るは信州諏訪の祭にすゝきにて作るゆへ也　秋也、神祇也、植もの也　居所也。門のほそさ薄ほどなど云も此内成べし。薄ちるも秋也、かるゝは冬也。

栖　誹諧には一坐二句すべし。住の字に

は二句・家には三句・隱家・山家など、かといふには五句去也。すみかと云字一字ある故也。居所に二句なり。

栖　草ぶき等の句にも、軒・庭・垣などのつゞき居所の詞いりては、誹に三句去也。とぼそといふ字などは居所に二句の物なれば、草ぶき・栖の句に結び入ても居所に二句去也。

住居　是も一座に二句有べし。居所には二句去也。住の字にも居の字にも三句づゝ去べし。栖と住居とは嫌べき事ならねど、相似たる詞なれば面をかへて用べし。差別すむとばかりも、ゐるとばかりも有句は居所にあらず。

すと〳〵　二句去也。しらず・きかずの類なり。にごるすもじの事也。

捨の字　字去也。すつるにすたるゝは癈共かけば二句去也。よすて人・桑門とかけば、是も捨の字に二句。人にも二句也。人倫也。

身を捨るに世を捨る時　は、捨折を嫌也。連には折なれば、誹には面ばかりを去べきなれども、身を捨るも世を捨るも同躰の句なれば、おなじ折に聞にくき故也。此外子を捨る・家をすつる・寶をすつるなどゝいふ句も、述懐ならば世を捨る・身を捨るの捨の字に皆折を去べし。述懐ならずば三句去也。

須磨　郡の名なれども水邊也。須磨の上野は非水邊。

硯水　水邊にあらず。硯、連に一あれば、誹には硯屛、又、名所の硯海など云て今一有べし。硯の字つらねども、松陰・しゆびんせきなどの名の硯に折をきらふべし。名所の硯海には面ばかりをかふべき歟。

鈴鹿路　山類にあらず、鈴鹿の關同前。鈴鹿とばかりも郡の名なれば山類にならず。すゞの字・鹿の字には字去成べけれど、鈴の字は尤文字なれば同じ面を嫌ふべき也。鹿の字は字去なるべし。又、女鹿の名の鈴鹿と名所の鈴鹿は各別なれ共、文字も打きゝも同じ様なれば、折を嫌べき也。

炭やき　冬也。炭と斗も冬也。炭竈は山類也。炭やきは山類にあらず、人倫也。炭の字は連に其定未レ聞、誹には炭とばかり一、すみがま・炭焼の内に又壺、土炭など譬にいひて今一、いづれも折をかへて三有べし。硯のすみ・眉ずみ・墨衣・から墨等には二句去べし。それも墨跡・墨足などゝ譬によみたる句ならば、付てもくるしからず。

巣　春也。古巣もおなじ。水鳥の巣は夏也。鶴の巣・鷹の巣は雜也。蛛のす・蜂のすも雜也。巣の字は鳥・虫の名をかへて一坐に三句すべし。

磨磨の御秡　春也。巳の日のはらへ同じ。

須磨のながめ　源氏より出たる詞也。昔は夏也。新式に不レ當二其儀一とあれば今は雜也。

相撲　秋也。ことり使といふつかひの字、使也。番の字にあらず、かもじ濁べからず。内裏にて七月の下旬に有事也。

すさまじき　すごき心の句も秋に用べし。冷しき連に二あれば、誹には冷然など譬にいひて三句すべし。冷泉院・冷泉町などは、すさまじきと云（衍）ふに三句去べし、季を不レ持ゆへに三のほか也、水邊

にもあらず。

簾　居所也。連にたゞ一句、誹には釣簾・玉だれ・伊予簾・御簾、又、簾中などゝ聲に讀て以上二也。たれこめてといふ詞は、簾の類に五句隔て有べし。ぬきす・すのこなど簾に二句去べし。

杉の窓　居所也。植物にたらず。連に杉壹。心の杉と以上二句あれば、誹には此外に杉の箱・あや杉・すぎ重箱等の內、以上折をかへて三句すべし。氏の名の杉原はうへ物にあらず、杉針・杉折敷・杉箸・杉楊枝・杉の灰、皆同前。杉障子同前。但、居所也　是等も杉三の內也。問云、松・杉といひにおなじやうなる木を、松は七句去にて杉をば一座に二句の物と定はいかん。答云　新式に其沙汰なしといへども、杉の句は連哥の時、耳に松よりは立故に後〻の宗匠達かやうに相定たれば、誹にも其分にして置なり。

菅笠　植物にあらず、菅簑同前。連にはいくつありとも新式に見えず。誹には菅一、菅笠・菅簑・菅蓆・菅筵などの內に一、此外に菅原氏或は菅家とも、或菅大神とも今一折をかへて以上三有べし。是等も植物にあらず。又、氏ならで菅原や伏見などあるも三の內也。是も名所なれば植物にあらず、名所・氏にあらずして菅原とばかりは植物也。うへ物の菅一過て、うへものゝ菅原有べからず。菅、水邊にあらず。

末の松山　奥州の名所也。植物・山類也。末の松とばかり云ても山類也。問云、松が崎・松浦などは名所ばかりにて、植物にあらざるかはりめ如何。答云、松が崎・松浦はその所に松ありともみえず、たゞ昔よりの名ばかり也。讃岐の松山・末の松山は松あるによりて植物也。一切の名所に此嫌やうをもつて、分別有べきもの也。

すその　山類にあらず。作レ去麓に二句嫌と云說あり。新式云、すそ野、山類なくてもすべし。此文の心を案ずれば、必山のすそにある野をいふにかぎらず、野のすそといふ心も有也、末野と同じかるべし。作レ去山のふもとにあるをもいひ、又、野のすそにあるをもいへば、麓に二句といふも其理有レ之。俳、新式になきさしあひなれば、句躰によりて嫌べし。すそと末とは二句去也。下の字には下野とかくゆへに三句去也。これはすその斗の事也。すそわけ・衣のすそ・もすその類・下もじには二句去也。すそと〳〵とは折を去べし。國の名の下野は、すそのと同字なれども、かすがに春の日のごとく付にも不レ苦。しかしながら下とすそとよみ聲等しければ、すその(薪)野には二句嫌べし、末野には少も嫌べからず。

水邊と水邊　三句去也。

淵　二　今壹は名所たるべし。眞砂・いさご砂には七句去也。

住吉の神　名所也。水邊也。うはつゝをなどいひては名所にあらず、以上無言の誤の說也。名所にあらざれば水邊にもならず、是新式の名神非名所といふ正義也。うたがひ給べからず。

駿河の海　などに國の名二句嫌也。名所の方本たるゆへに名所に三句嫌べし。近江の海・いせのうみなどいづれも同じ。誹には國にも名所にも皆二句去也。

罌といふ字　連に一、誹には二。罌とまゆずみと折を嫌ふ。まゆずみと一過

て翠黛(すいたい)の山など今一句有也。まゆずみといふ時は黒に折を嫌。青黛の山など聲に讀句は、すみの字におもてをきらふなり。

すらん　なにをかすらんなどいふ詞は三字かた也。くらすらん・出すらんなどは、上の字に付たるす(衍)もじなれば三字かなにあらず。只らん(らん)の二字かなになる也。よく唱へ分べし。

すぐるゝ　に、まさる、二句去也。共に勝(せう)の字なれば也。ますは益(えき)の字なれば、すぐるゝにきらはず。但、人よりも藝(げい)能のますなどは、まさると同じ勝の字也。去年よりも今年は藝能(げいのう)のますといふ時は、同じやうの事なれど、増(ぞう)の字・益の字也。よく〳〵吟味有べし。

末つむ花　夏也、べにの花也。人の名を六句ならば雜也、植物にあらず。

諏訪(すは)まつり　一とせに七十五度有故に雜也。

酢(す)　只一、作る酢ならで今一、折をかへて有べし。すばなし・すかたひ・す鑓(やり)・すこひたる・すはだ・すがみこなどのすもじは酢にきらはず、文字もたしかならず、素(そ)の字を書といふ説も有也。かやうのすもじは面に一ツ、有べき歟。かろき詞の助字(たすけ)と見えたり。

万治貳己亥年
仲秋吉辰
洛陽寺町誓願寺前
安田十兵衛開板

増補はなひ草

立圃説

増補はなひ草は世間流布の本にあやまり有事をなげきて、親重入道立圃、後にあらため置れたる證本を以て根ざしとし、貞徳老人の御傘を或説と号して書加ぬ。頃日世に大全、或は綱目など云あり。古来の本に有事をはぶき。さしていらざる事を我このむかたにしたがひて、書のせたるゆへ、あやまり尤すくなからず。よつて其正しきを拾ひ、うたがはしきを捨て、少も愚意をまじへず、古哲の式法に任せ初心の便とするもの也。

延寳六戊午年初春吉辰

増補はなひ草

(い)

一岩船　水邊にあらず、天津神駕し給ふ舟也。舟の字には五句嫌。

一伊勢の神　名所也。いせ櫻・いせ莚・いせ白粉の類、いづれにても出がちに一たるべし。あまてる神としては名所にあらず。

一今宮　名所にあらず。

一いのる神　戀也。佛をいのるは戀にあらず。但、句躰によるべし。山伏のいのり同前。

一いつきの宮　名所也　いせの齋宮か加茂の齋院か両所の事也。

一いけるをはなつ　水邊也。生類に二句也。神祇也。八月十五夜八幡の祭也。

一いみさす　神祇也。神祭などに榊をさす事也。いみ竹又同じ。

一岩　一座に二、いはほ一、岩屋一、か様の四の物は折をかへて也。岩と巖によみても岩二の内也　岩に石、面をきらふ也。

一岩垣　居所にあらず。石だゝみ同前。

一岩茸　うへ物也。岩木同前。

一石　四也。温石・礎石などはうらに有べし。碁・双六等の石は四の外也。石・岩に眞砂七句嫌。

一石火矢　鉄炮に折をかへて有べし。

一池　只二、名所二。池に廣澤同意也。

一池田炭　炉にをくとしても名所也。

一池の尼　堀池の僧正等は、名所にも水邊にも非ず。

一礒　只二、名所に二、或説に名所に一、以上三と云。

一市　只二、名所に二、市の棚・市の見せ・市の場、居所にあらず。

一家　四也。折を嫌也。器財の家、虫の家等はうらに有べし。四の内折に一づゝ也。

一家を出る　尺教也、居所にあらず。家の字には面を嫌。或説に家を出るは居所に可嫌か、出家としては居所に嫌べからずと云り。

一家づと　居所ニ二句也。土蓬といふ字あれ共、家五のうち也。

一家の風　居所にも風躰にも二句嫌。風といふ字に三句也。家の子に面をきらふ。

一家の子　家来の人をいふ、人倫也。居所ニ打こしきらふ也。

一庵　四也、此内いほり有べし。或説ニいほ二、いほり一、庵号・庵室の内にて一有べし。

一板間　名所に二句也。板の字四有べし。板まくら神祇也。

一一門一類　あつまるとしても、人倫にあらず。

一一騎當千　馬に七句きらふ也。

一一文字　八也。一村、一時雨などゝかはりたるは又八也。よみ聲にいひ替たる間七句也　七句嫌と云は、同じ面のうち也。面かはりては三句きらふ也。他准之。

一いなびかり　雜也。夜分にあらず。なる神に面を嫌。光の字にも同前。

一いなづま　秋也。妻の字に面をきらふ。

一醫者　鑄物師・楼士・妹、人倫也。

一妹に妻　面をきらふ。戀也。

一いとけなき　人倫にあらず。無の字に付てもくるしからず。幼稚とかく故也。

一いびき　夜分也。

一いとまの文・いたづらたる・いひなづけ、いづれも戀也。

一いさり火　夜分也。いなづま同前。

一入逢　入の字、相の字共ニ二句嫌。夕・晩・暮の字ニも二句。晩鐘と書故也。鐘四の内也。

一生死　述懷也。生るゝ・いのちともニ二句嫌也。

一いつはりにまこと　二句きらふ。

一いさかふにあらそひ　二句嫌。

一今にけふ　同前。或説ニ付ても不苦と云り。

一いくかに日なみの日　二句きらふ。

一幾に何の字　付句を嫌、打越には不嫌。

一いふにかたる・てふと云詞　いづれも二句嫌。

一いつ・いづく・いづら・何・なぞ・などいかゞ　此間みな二句きらふ也。

一いづく　四、いづこ二、いづち二、いづく四の間は折を嫌べし。いづくにいづちは面を嫌也。

一いにしへ　二、昔に七句嫌、古の字に二句也。大古・上古・中古・往古・古代・古今集等も二の内也。みないにしへといふ心に通ずる故也。

一命　二、鳥、けだものゝ命又二、折をかへて有べし、命に玉のを折をかゆる、虫の命に玉のを二句去也。戀の命すぎて戀の玉のを有べからず。命、述懷也。

一いくさ　一、花軍一、花軍は春也、正花也。

一いつまで草　雜也。

一いりまめの類　うへ物にあらず。

一いりこ　水邊にあらず。

一犬　一、ゑのころ一、犬箱一、戌一、何も折を嫌也。

一糸　しなをかへて四也。但、似せものゝ糸はうらにあるべし。

一いつしか　只一、早晩とかけ共、何の字に二句也。

一いかゞせん　此五かなの留り、百韵に

一也。或說上の句下の句にかはりて二も有べしと云。

ろ

一廬路に庭　面を嫌也。露路とも書(かく)也。
一炉に香炉・風炉　折をきらふ也。
一六親　人倫にあらず、
一六尺　は人倫也。
一樓(らう)　二。居所の躰也。

は

一橋　只二。名所に二。賓同前。或說に橋一、名所に一、梯一、浮橋一、又、うらに御階(みはし)・烏鵲(うじやく)橋などの内に二、以上六也と云り。
一橋にのぼりはし・御階・梯(かけはし)・夢のうき橋等　七句きらふ也。
一橋姫　人倫にあらず、神祇也。名所也。
一柱　一、居所にあらず、但、句躰によるべし。帆ばしら・橋柱、いひかへて四あるべし。鼻ばしらは各別の事也。
一場の字　四也、にはとよみかへて又二も可有。
一馬場に馬　七句きらふ也。
一は山に山の端　折を嫌、軒端は面を嫌・川ばた・道ばたは七句嫌。はの字五ばかり有べし。端(はし)と云て又五も有べし。面を可嫌。
一葉守の神　うへ物にきらふ也。雑也。
一葉　高きうへ物の間は面を嫌、草、竹にかはりては三句去也。或說に草のは、竹のは、葉に五句去也。葉四、又、ようと讀にて一、以上五也、葉守の神も五のうち也と云り。
一葉に言のは　三句嫌。ことばと云てはきらはず。
一名をさゝぬ木の葉　四也。松のは・杉のは等にうらにあるべし。
一端居　居所に二句きらふ。
一花　四也。花に櫻七句嫌。花の句・櫻めかざる句には付てもくるしからず。櫻に花は付べからず。
一花火　夜分也。正花也。火花・夜分に非ず。同正花也。いづれもうへ物に二句也。
一花もみぢ　正花也、雑也。
一花のちるに　梅さくらのちる折を嫌也。露、あられのちるは三句さる也。
一花の瀧・花の浪　水邊にあらず。但、花のちる躰たくば水邊に嫌べし。
一花がつほ　水邊にあらず。うへ物には二句也。或說に正花を持也。非生類に、うへ物に嫌べからず。
一花のふゞき　ふり物にあらず、うへ物なり。花の雪も同前。
一花の雲　うへ物・そびき物共にきらふ也。
一花の香に袖の香　面をきらふ也。
一花の匂ひに袖の香・人香　は七句嫌。
一はなやか　正花也。うへ物に二句也。
一花をあるじ　人倫に非ず。花のあるじは人倫也。花の宿・月の宿、共に居所也。
一花に吉野　付る事を嫌。よしのに花は付る也。萩に宮城野・もみぢ・立田・茶・宇治、酒に奈良、いづれも同じたぐひ也。
一花　若ばにむすびては夏也。甯ばにむすびては春也。
一花野にすゝき　付る事を嫌。
一花の姿・花の袖正花也。うへ物に二句也。

一花ごろも　正花也。うへ物に二句也。

一花皿　正花也。しきみは常の事也。式法はその時〳〵の花をたむくる物也。

一花をむすぶ　句に野山を分るとしても旅にあらず。

一花の都　正花也

一花むこ　正花也、戀也。うへ物に二句也。

一春の日　二、永日一、遲日一、此分面をかへて有べし。春の日二の間は折をきらふ也。永日過て日はながしなどゝ又可有歟。

一春風　二、春に風むすびて又有べし。或說春風一、春の風一、聲によみて一。

一春の日といふ句に　ながき心あらば、その折にながき日・おそき日有べからず。

一春の宮　春宮の御事也。聲にいひては雜也。春の宮と云ては春にたる也。東宮とも書也。

一初の字　四也。しよと云かへて又四也。初心・初學など面を嫌也。そめてとよみかへては三句さる也。

一始　の字四也。

一はまぐり貝　藥など入るやうなる句作ならば水邊にあらず。此類おほし。

一箒　一、はゝき星又あるべし。

一蓮　一、はすのめし一、はす切はな又有べし。

一鼻　一、はながみ又有べし。鼻に、匂ふ・かぐなど付る事嫌也。はなそげ、戀也。

一はだの帶　衣類に非ず、戀也。はかま・衣類也。

一はだをふるゝ　戀也。

一針　物ぬふ針・たつる針・はりがね、かやうにかはりてあるべし。

一鳩　一、山鳩色のきぬ・はとむね・はとの杖、はと酒などの內に又一有べし。鳩ふく、秋也。はとの字に折をきらふ。

一伯樂・ばくちうち・番匠　人倫也。

一法師　坊主・鉢たゝきみた人倫也。尺敎也

一はかなき　只二、戀に二、或說に以上三也と云り。

一はかなきにむなしき　付句をきらふ

一謀　はかるにも、言にも一句嫌。謀・謀計・謀略などゝいひかへて二。

一晴る　ふり物と降物とならば折を嫌。或說に雨・月・雲など云かへては五句去也。うらみ・無實などのはるゝも同前也。雨はるゝと二はあるべからず。

一旅籠　旅也。旅の字に面をきらふ也。

一濱びさし　もとは居所に打こし嫌、今は三句去也。

一初霜　冬也。露とむすびては秋也。

一芭蕉　一、奏者草・ばせをなどゝ又有べし。

一はや　と云詞に、もはやと云詞少もきらはず。

一原と云字　三句去也　原に野二句也。

（に）

一贄　神祇也　生類に二句也。はらかの贄といふは春也、非神祇。禁裏へはらかの魚を奏る事也。又、もずのはやにえなどは各別の事也。

一庭火　神祇也、冬也　庭に面を嫌。夜分也。神樂の名也。御火燒に折を嫌べし。

一庭　只二、寺に一、皇居に一、庭のを

しへに、各別也。うらに有べし。庭訓の事
也。
一庭に砌（みぎり）　坪の内面を嫌、庭に場、七
句きらふ也。
一庭のつき山　山類に非ず。山類に二
句去べし。
一鶏　一、夜鳥一、別の鳥一、いづれも
夜分也。但、何鶏によりて非夜分に。別の
鳥、戀也。くだかけ、異名也。
一尼公　一、あま一、比丘尼一。
一人形　人倫に嫌はず。
一にごりたる　同字の間二句きらふ也。
は・か・そ・す・て、かやうの字也。
一にぎやか　賑ひ、か様の詞、二ばかり
有べし。
一にぐるなどゝ云詞　人と鳥・けだも
の替りて二也。
一にほひに香　七句きらふ。
一錦に紅葉　付べからず。但、同意になら
ざるやうに句を作り付べし。
一にとまりの下の句　二ばかり有べし。
に留り。まに〳〵と留ることきらはず。
に留りにだにと云詞不嫌、にて留りは二
句きらふ也。
一西　二、西方・西海などゝ云かへて又
二、か様に云替にも、四有物のぶんは折
をきらふ也。
一煮（に）たる魚　水邊にあらず。生類に打こ
し嫌也。鳥も同前。にたる竹の子、うへ
物に二句也　これは季をもつゆへ也。
一にほの海　名所に二句きらふ。
一場　一、ばと云て一、ぢやうと聲にて
一、以上三也。庭の字に面をきらふ。て
い。ぢやうと聲にてよめば少もきらはず。

（ほ）

一星　一、北斗一、たなばた一、星佛一、
此間折を嫌。的の星・星月夜等はうらに
あるべし。
一洞（ほら）　二。堀二、堀にほる面を嫌也。ほ
り物は二句也。
一穂　四也　ほや作る、秋也、神祇也。薄
のほにて作る家也。しなのゝすはの神事
にある事也。
一佛　只二、念佛・佛師・佛具・佛法・
佛道・佛神などの内に又二、いづれも折
を嫌也。
一佛に・如來・菩薩　ともに面をきらふ
也。
一法眼にまなこ　付てもくるしからず。
一布袋　只数也。非人倫に。袋に付る事嫌。
一牡丹　ふかみ草・廿日草・てるは草・
よろひ草、此等の内出がちに二有べし。
一螢　夜分也、非水邊に。折をかへて二也。
一郭公　鶯をむすびても夏也。杜鵑（とけん）・子
規（しき）・杜宇（とう）・くはつこう、などゝ云かへて
以上三也。
一ほだ　夜分也。冬也。
一ほし瓜　ほしかぶらの類、うへ物にき
らはず。
一ほとりに　野べ・山邊二句きらふ也。
一ほゆると云詞　鳥・けだものにかは
りて二也。
一ほのみえてのほの　四ばかりあるべ
し。
一ほるゝ　戀に一、老に一。
一帽子（ぼうし）にゐぼし　折をきらふ也。
一細江　名所にあらず。つたのほそ江は
名所也。

（へ）

一經の字　四也。月日をへての類也。

一邊の字　四也。邊土は此外也。邊土、居所に二句也。

一平家にいゑ　二句きらふ也。

一下手　一也。手に七句嫌、下手に下戸・したも七句也。

一部屋　酒べや・鷹べや、かやうのものは二ばかりあるべし。

一瓢箪　腰にさげたる心躰、すみ取などにしたてたらば、うへ物に少もきらふべからず。

一紅粉　口につくるたどゝいはゞ戀也。

一べに丹・紅葉　いづれも二句きらふ。

（と）

一豐の明　夜分に非ず、明の字に三句嫌也。十一月中の辰の日也。五節のまい此時に有。

一年　四也。とせ二、いづれも年に面を嫌也。年德もれんも年四のうち也。

一年にとしより　七句嫌、年より人倫也。

一戸　六也。此外とざし・とぼそ有べし。

一戸に窓　門・とざし七句嫌、天の戸は非二居所一。

一戸に上戸・下戸　二句嫌、とざし・居所に二句也。

一戸をあくるに夜の明る　二句也。

一戸をたゝく・戸をさす　共に夜分にあらず。

一笘や　居所也。非二水邊一。舟の笘ぶき又有べし。笘ひく舟にふり物あしゝ。

一とのゐもる　夜分也。笘ぶき・居所に二句也。

一殿　町殿と上﨟・殿御等の內に又二、誰殿と名を云つゞけたるも此內也、折をかゆべし、宮殿・殿上と聲によみて又四也。とのとでんとの間はうら面に有べし。

一床　夜分也。座禪の床・座敷の床・簗（やな）等の床、鳥獸の床、いづれも夜分にあらず。か樣に替たる床の間七句嫌也。

一床にゆかしき　二句きらふ。

一木賊に木の字　少もきらはず。

一虎　一、寅一、虎毛の猫又あるべし。

一鳥　只二、春の鳥一、秋に一、小鳥一、村鳥・狩ばの鳥一、酉一、いづれも面をかへて有べし。或說に鳥只一、春に一、小鳥・村鳥等の內に一、鳥獸と云つゞけて一、狩ばの鳥・うきねの鳥・夜鳥等は各別也。

一鳥甲・鳥帶　生類にきらはず。

一鳥居　鳥の字・居の字共二句嫌。

一友　二、人倫也。伴ひ二、鳥獸の友又二、ほうゆうと聲によみても四の內也。

一伽・供・伴ひ　人倫にあらず。

一とまり舟　非二夜分一。留の字には三句也。

一とも し火　一、法の灯一、灯籠・灯心等又可レ有。

一ともし　夏也、夜分也　夜に鹿をとる事也。

（ち）

一千早振（ちはやぶる）　千の字に三句也。早の字・振の字に二句きらふ也。

一千の字　四也。せんと聲によみて又四也。

一千里　非二居所一、一、路と道三句嫌也。文の道などの行步（ぎやうぶ）にあらぬ道の字は二句也。

一路　に苔地・眞砂地少もきらはず。
一散　花・雪などに咎りては二句去也。花・紅葉の散は面を嫌。散の字は字去也。
一ちり〻ちりの世・ちり取も　二の內也。
一兒　一、兒文珠（殊）・兒ざくら等の內に又一有べし。兒に子、面をきらふ也。
一茶　うへ物にあらず、つむはうへもの也。
一茶　只一、ちやつぼ・ちやせんなどの內に一、茶や一、いづれも折をかへて有べし。ちや染・ちやせんがみ等はうらにあり。但、ちやせんとちやせんがみ、出がちに一たるべし。
一ちぎり　に、ちかひ・やくそく二句嫌也。
一ちぎり　戀に二、只二、ちは戀の詞也。
一中風　に風、二句きらふ也。

(り)

一龍　龍神・龍宮。
一龍神　水邊也、神祇也。
一龍宮　水邊也、神祇にあらず。
一龍虎の龍　水邊にあらず。
一里　一里・二里の里の心、居所にあらず。
一りうたん　りんだうの事也。思草に折を嫌、秋也。
一りんき　戀也。
一律のしらべ　秋也。

(ぬ)

一ぬさ　ぬかづく神祇也。
一沼（ぬま）　二。
一ぬし　非二人倫一、或說には人倫也。あるじも人倫也。
一塗師（ぬし）　人倫也。ぬしやとつゞきては人倫に非ず。
一ぬるゝ　水にぬれてなどの間　折をきらふ。或說にぬるゝ句躰をかへて三也と云り、
一ぬるのてにをは　二句嫌。
一ぬるにふす　二句嫌。
一ぬる・ぬれ・ぬらし　かやうにかはりたる、てには付句を嫌也。
一罪ぬ〳〵とのぬの間　二句也。ふのぬは付句を嫌。
一縫（ぬひ）の小袖　に物ぬふ、折を嫌也。

(る)

一とはるゝ　ながるゝ、かやうの詞二句去也。
一るとまり　二句嫌。こぼれる・かよへる・いかれるなどのてにはのかな同じ。

(を)

一岡　只二、名所に二。或說には以上二也と云り。小野同前。をのゝ小町も四の內なるべし。
一遠近（をちこち）　二、をちとばかり二、或說にをちこち一、をちかた一、をちとばかりは二も可レ有と云。
一遠近　に遠き・ちかきともに二句嫌也。
一遲き日（おそき）　一、又、日はおそくと云かへて一、はるの日に面をきらふ也。
一小舟　一、海士小舟一、小せん一、ちいさき舟。小と小三句去也。小とこは二句嫌。小とさは付句を嫌。
一音　に、こゑ・ひゞき、二句嫌。音におとづれも同前。
一女郎花　に女、少も不嫌。或說には女の字に折を嫌。

一躍　秋也。只一、生類のをどり、胸のをどるは又有べし。
一をこなひ　一、をこなふ、又あるべし。
一をし　人倫　非ず。
一をしね　をくてゐいねの事也　うへ物に二句嫌。
一女　をなご・女房・下女・め、此内出がちニ四也。
一女にいもと・むすめ・よめ　面をきらふ也。
一乙女子　小忌衣・神祇也。

（わ）

一我　古　王・天子・すべらぎ・大君、折を嫌なり。人倫の外也。
一王に、もろこしの王の名・龍王・十王面を嫌也。
一王に明王・四天王　などは三句去也。
一和哥に和琴　折をきらふ也。
一わかれ　只二、戀ニ二、戀の別ニきぬ〴〵、七句嫌、旅のわかれにきぬ〴〵、二句嫌、わかれ・歸二句嫌。或說ニ別の戀三、きぬ〴〵は三の外也。わかれにはなむけ、二句嫌。
一我　わらべ、人倫也。
一わろきニよき　二句嫌也。
一わたし舟　川邊の渡し舟、何れも旅也。
一若葉　一、草ニ一、若木一、若菜一、何も折を嫌、人のわかき、面をきらふ也。
一若衆　戀也。若君・若武者・老若・若僧、此間折をきらふ也。
一わきざしに刀・太刀　面をきらふ也。
一わに口　生類ニ不レ嫌、わにの口としては生類ニ三句也。
一わたまし　居所に二句也。
一わらびなは　うへ物にあらず。季をもたせたらばうへ物になるべし。
一わさ田　うへ物に二句也。
一わすれ草　雜也　くわんざうの事也。花をむすびては夏也。忘の字に二句也。
一わすれがたみ　難の字に二句也。
一綿　に、もめん、二句嫌。わたご、衣類也、冬也。

（か）

一神　只二、名の神一、名所の神一、或說ニ神四の内、一は明神などゝ聲に云て有べしと云。
一神に神樂・神主・神事　等面を嫌也。或說ニ神に神樂などは七句去と云り。
一神にかみなり　二句嫌。或說ニは付ても不レ苦。
一神にかみさびて　といふ詞、七句嫌。
一神佛　とつゞきては神祇、尺敎共ニ二句也。
一神樂　夜分也、冬也。或說ニ神樂一、里神樂一、山かぐら・夏神樂等の内に今一、以上三也。
一春日　春の字・日の字共ニ少も不レ嫌、幾日ニハ嫌。
一卵　一、鳥の子一、ひよこ又有べし。子の字ニ卵、七句嫌。
一門　四也。もんと云て又二有べし。或說もんと云ても以上四也。かとで、首途と書故ニ四の外也。但、かどで一、かどいで一。かどでニ門、面を嫌。かどいでと云時は門四の内也と云り。
一門に二王門・山門・門番　等面を嫌。
一門に戸・窓・首途　七句嫌。
一かとでに出の字　二句也。非ニ居所ニ門立、戀也。

一垣　四也・まがき・瑞籬・かきほ、此内出がちニ折〻替て四也、或説ニ垣三也　垣ニ籬、句〻嫌。
一垣にかこふ・霧の籬　七句嫌。かこふ居所ニ二句也。
一上　八也。うへとよみかへて又八也。此分面に一づゝ也。じやうといひて又四也。此四の間は折〻嫌べし。かみ・うへ・じやう此間七句嫌也。
一狩　鷹狩二・獣狩二、川がり一、此内出がちニ四也。櫻がり・紅葉がり・茸狩はうらに有べし。
一鷹　春ニ二、秋ニ二、鷹に千鳥むすびても秋也。又、かりがねさむしとしても秋也。
一蚊帳　夜分也。蚊遣火過て又蚊火有べし。
一鐘　只二　入逢一、尺教ニ一、異名ニ一はうらにあるべし。鐘夜分也。鐘鑄は夜分あらず。
一看経　尺教也。経に面をきらふ也。
一數字　二三より十迄は面〻嫌也。譬とよみ替りても面ニ一づゝ也。百千万等は折〻嫌也。
一頭の雪　冬にあらず。降物にあらず。述懐也。
一霞に朧　二句嫌　雲か霞かのうたがひの間・二句嫌
一影　景・陰、此間二句也。
一陰にもと・した・かくれ・招　二句嫌也。
一風に野分・こがらし　など共に三句嫌。松のひゞき・荻のこゑなどは二句嫌也。
一風に鳥の羽吹　二句嫌　風ニ風炉・風鈴も二句也。
一から　二、たう二、此間折〻嫌、唐ニもろこし面〻嫌也。
一笠　からかさ・梅の花笠・かさ松、か樣に替りて四もあるべし。いづれも折を嫌。
一笠にふり物　不レ嫌。
一かゝると云詞　三句去也。
一合戰　一、たゝかひ一、軍には面をきらふべし。
一かにと云詞　二句嫌。たとへばいかにと云ニ、ひやゝかに・靑やかに・はるかに、如レ此の類の間也。
一偕老同穴　戀の詞也。
一かぶきた夫　戀也
一かざしのわた　春也・夜分也。
一かけはし　只一　名所に一
一刈田　うへ物に二句也　田をかる、芦をかるなどゝ云かへて四あるべし。或説ニ刈と云字替りて二也。草かりは別に文字ある故二の外也。草をかるは二のうち也と云り。
一かりふし　かりや、如レ此の間面〻嫌。
一かよふ　戀に一、只二て又、風・水などのかよふ面をかへてあるべし。
一河音の雨　ふり物にあらず、水邊也。
一川のもみぢ　冬にあらず、秋也。
一かこ　舟人也　人倫也。
一鰹ぶし・から鮭の類　非水邊ニ、生類ニ打越嫌べし
一敵　人倫ニ非ず。使人倫きらはぬに同事也。
一哥仙　人倫にあらず、名をいはゞ人倫也。
一鍛冶　壁ぬり・かみゆひ・强盗・海賊・かねたゝき、いづれも人倫也。かぢやと

しては人倫にあらず。他これになぞらへ可ㇾ知。

一かち栗　うへ物に非ず。

一買の字　四也。

一刀　太刀・長刀・小刀、此間折を嫌也。鑓は打こし嫌べし。菖蒲刀はうらにあるべきか。

一かたへに、ほとり・野邊　などの邊の字二句嫌。

一かたみ　に見の字、二句嫌也。

一かへり見るに、かへる・見る　ともに二句也。

一返(かへす)　歸、此間二句也。歸に行もどる、二句嫌也。

一雖に過がて・いねがて　七句きらふ也。

一かなしき　二ばかり可ㇾ有歟、或は句躰をかへて三也。

一篝(かゞり)に火　二句嫌。

一かみこ　衣類也、冬也。

一かうもり　夜分也。

一かし鳥　樫ノ字ニ付句嫌。

一かげろふ　雜也。かげろふのもゆるは春なり、むしの心にしては秋也。

一杜若　只一、かほよ花と又有べし。

一かくれ家　只一、居所に打こしを嫌。

一かはらぬ色や松の一もと　などゝいふ句は秋也。色といふ字入ては、いづれも秋になる也。

一枯野　冬也。露・虫をむすびては秋也。うへ物に打こしを嫌。冬野・かれ野、折をきらふ。

一冠(かむり)　只一、譬にて今一、門の冠(かぶ)木は三句去也。

一傍(かたへ)に、かたしく　などの片の字、二句嫌。

一片敷　岩根・衣、いづれをかたしくと云ても夜分也。

一霞に霧　をむすびても春になる也。

一かたるなどゝ云詞の類　四ばかり有べし。或説ニかたる一、かたらふ一、物がたり一、友とかたる・平家かたるなどの内に一、以上二也。佛語・論語などの譬に云は字去也。いくつも有べし。

(よ)

一代　只二、神代二。或説ニ君が代一、神代一、又譬ニよみて一、以上三也。代に世、三句嫌也。

一世　只二、述懐ニ二、佛の世二、戀の世二、浮世・遁世は述懐也。世間・世の人は平世也。前世・後世は佛世也、何も面を嫌。平世と〳〵の間は折を嫌、述懐・佛世・同前。或説ニたゞ世、述懐の世、佛世、戀・かれこれニ云かへて六、尤面を嫌。

一夜をまつ月　時分にも夜分にもあらず。

一夜のふくる　時分ニ非ず。夜更ニにはとり嫌。

一夜半　二、宵二。或説ニ宵二、こよひ・今宵・前宵・昨宵などの内又一あるべし。

一宵　時分にあらず。夜の字に三句也。

一よこ雲　夜分也。夜ばひ・よめ戀也。

一よそ戀ニ　二、只二、或説ニ只二、戀ニ一也。

一よそ目に見る　二句嫌。只目さますなどには見の字はきらはず。

一蓬(よもぎふ)ニ　居所ニ二句也。蓬と斗は居所ニ不ㇾ嫌。

一齢(よはひ)に老　二句嫌、但句躰によるべし。

一よぶこ鳥　春也。傳受の物也。

一大黒　神祇也。か様の類は一座ニ一句たるべし。
一高根　嶽・峯、此間面を嫌。岩根ニ垣根・三句嫌。
一高根　二、嶽二、或は嵩二、名所ニ一、以上三也。
一高の字　八也。かうといふても八の内也。
一高きに名所の高まど・高間　は三句也。
一谷　只二、名所ニ二、或説ニ谷只二、名所ニ一也。
一谷戸　居所　二句也。戸八の内也。谷の戸ニ戸は七句嫌。
一瀧　只二、名所ニ二、花の瀧・瀧石等うらに有べし。
一瀧　山類也。瀧津瀬・瀧津川は山類ニあらず。
一堂　二、名所二、寺に七句きらふ。
一塔　只一、名所ニ一、石塔又あるべし。
一棚　いひかへて二ばかりあるべし。
一龍　一、たつみの方・辰の日などの内又一有べし。

一七夕　夜分也。月日ニ二句也。夕の字、時分にも不嫌。
一七夕に天の川　二句嫌・或説ニ三句嫌。たなばた一、七夕と聲にて一、折をかへてあるべし。
一竹の宮　神祇也、名所也。うへ物にあらず。
一竹ニ　絃・管二句嫌、さゝ、しの三句也。
一竹ニ竹田の里　三句嫌、竹と〳〵は五句嫌。
一竹ニ左義長　二句嫌、爆竹とも書也。
一竹ニちいろあるかげ　としても三句嫌。竹ノ事なれば也。
一竹ニ糸竹　五句嫌、すゝだけ三句嫌。
一竹の子笠　雑也。季をもたせたらばうへ物ニ二句也。
一竹馬　生類に嫌はず。馬には面をきらふ。
一玉　八也。或説ニ四也。聲に云かへて又一、以上五也。
一玉ニこだま　數珠七句嫌。或説　木玉は三句去也。
一玉のをニ命　面を嫌、虫の命などは二句嫌。或説　玉のを常に二、戀ニ一、命の外に又一。

一玉章ニことば　二句也。
一玉ニたましゐ　二句嫌。
一田ニくろ　あぜなどやうなる物二句嫌也。
一田ニ鹿　をむすびてもうへ物にあらず、山の鹿追と云てはうへ物ニ二句也。かゞし・ひだなど皆をふ類也。田ニ苗代・早苗・畑、いづれも二句嫌也。
一田ニゐなか　少も不レ嫌。田鶴も同前。
鶴・云字一字をめよめば也
一田の庵　居所ニあらず。田を作るは雜也。田を返す・田をすくは春也。田ニたのむの鴈と云ても五句嫌。
一立田ニ立の字　二句也。田は三句嫌也。
一立田姫　名所ニあらず。但、打こしニハ用捨すべし。
一旅の字　四也。或説ニハ聲に云ても以上三也。
一旅の古郷　は面八句の内ニもすべし。只ふる郷は嫌也。
一薪に燒　面を嫌也。木は二句去也。

一薪に樵夫(きこり)　二句嫌也。
一燒火　夜分に非ず。芦火　もしほ火、皆燒火也。或說に燒と云詞二ばかり折をかへて有べし。
一たくにたき物　七句嫌。たき物に物二句嫌。戀也。
一たくかの煙　(夜分にあらず薫物の事也)燒火の影、非に夜分にも。或說に火と云字にたくと云詞を結ては夜分をのがるゝ也。
一民のかまど　居所にあらず。民、人倫也。
一たいまつに火　二句嫌。
一たすきに手　二句嫌。
一稲(いね)まく　うへ物に二句也。
一橘花　少もきらはず。
一立に　さきだつ・たゝずむ二句嫌也。
一たそがれ　誰の字・夕時分共に二句嫌、たそがれに夕兒不嫌。夕がほにたそがれは嫌也。
一たゞといふ詞　の間、二句きらふ也。
一たのむ　戀に二、只に二、或說に頼の字五也。内、戀に二三句有べし　頼の取やり・だきあふ、戀也。
一給る　たまひてなどの詞二有べし。

一短册に哥　面をきらふ。
一丹に紅葉　二句嫌。
一たく脊に火　二句嫌。
一大文字　四也。おほと云て又四也。大と大、折を嫌。大石・大天狗・大木・大氣等の事也。
一大とおほ　云かへては面を嫌。大に大和國付てもくるしからず。
一太鼓　一、太刀一。
一代官・大工　人倫にあらず。太夫、人倫也。
一鷹匠　人倫也。
一たるひに氷室　面を嫌。
一鷹　只に二、名を云て二、季をかへて四也。
一たもとに手　二句嫌。袖に手は少もきらはず。
一たつぎ(立木共書也)　便と同詞也。便の字三の内也。
一高砂の松　山類也。名所也。
一尋(たづぬる)にたどる　二句嫌。

（れ）

一連哥に歌　折を嫌也。
一れん臺にすだれ　面を嫌也。
一令(れい)人　人倫也。
一獵師　人倫也。
一連理の中　れんぼ、戀也。
一かたれ　とまれ・きたれなどゝ云詞みな二句也。
一例ならぬ　例にたがふ類の事也。違(い)例・不例などに云かへて二有べし。病・煩なとには面を嫌。
一禮　一、禮拜・葬(さう)禮・祭(さい)禮などゝ云て又一有べし。
一暦(れき)　一、こよみとよみて又一、暦(れき)々と云詞は只一也。

（そ）

一其曉(そのあかつき)　夜分にあらず、尺教也彌勒出世の事也。
一岨(そば)　二也。或說に連哥に二なれば三也と云り。
一外面(そとも)　二、面の字に七句嫌、外の字は三句去也。
一園(その)　園生共にうへ物に二句也。或說に園只二、茶ゑん等祇園などの内に又一有べし。

一空　八也。此外ニ半天(なかぞら)有べし。空ニ半天七句嫌。
一空ニ天　久かた・雲井等いづれも二句也。
一虚言(そらごと)　そらうそ・そらいびき、か様の類折をかへて四有べし。虚言　空、七句嫌。
一袖のぬるゝ　涙の心あらば涙ニ二句。袖の字、字去也。
一袖をひく　袖の香・そひね、皆戀也。
一そゝくあまり　降物ニ二句也。
一そよぐニ風　二句嫌。
一そうづ　なること、うへ物ニ二句。人倫ニあらず、秋也。
一聳物(そびき)ニ松・竹・草・水　などのけぶり、胸の霧・思ひの煙、皆打越嫌也。
一祖師の名　人倫ニあらず。
一僧　人倫也。俗、人倫ニ非ず。僧俗とつゞきては非ニ人倫ニ。
一奏者　人倫也　奏者所は人倫ニあらず。
一存の字　二ばかり有べし。存命・所存、存念等也。

㋡

一月　面ニ一づゝ也。月と月の間五句也。
一春夏冬共　一季ニ三迄も有べし。有明一、此内ニ有てもよし。秋の有明一、三ヶ月は四季の間ニ一也。三か月と有明と同季にてもよし。但、八ながら秋にても不レ苦、名残のうらニは、大かたなき故七也。
一月ニ日　二句也。日次の日も同前。月の障(さはり)戀也。月次也。
一月ニきさらぎ・やよひ・五月雨・師走　少も不レ嫌。
一月ニ正月・月迫　二句嫌。月なみの月、三句嫌也。
一月次の月ニきさらぎ・彌生・五月雨・師走　二句嫌。正月・月迫は三句嫌。菊月・神無月等ハ五句嫌
一月ニ朔日・二日・きのふ・けふ　少もきらはず。
一月の雪・霜　兩方ニ嫌也。夏の詞入ては降物不レ嫌。
一けふの月　夜を待月・三かの出る夕月夜・入逢に結たる月・日に結たる月・いづれも夜分ニ非ず。
一月をあるじ・月を友　人倫にあらず。
一月に影　をむすびて二、日影同前。
一月待　おがむなどは神祇也。月よみの神、名所也。
一月草露草の事也　月の字　五句也。ほん月　月也。
一津　只二、名所ニ二。或説ニ津の國・大津・難波津の類・字去也。天津・興津等は津にきらはずと云説あれ共わろし。同字なれば是も二句去べし。
一つくづくし　筆ニ付るは嫌也。大概(がい)筆の事ニ一句を云たつる故也。但、筆の心なき句作ならば土の字・筆の字共ニ少も不レ嫌。天花菜共書也。
一鶴　一、たづ一、但、鶴は句躰ニよりて二も有べし。鶴の巣、雑也。鶴の林うへ物嫌。
一翅(つばさ)ニ鳥羽田　二句嫌、或説　翅、句躰をかへて二也。
一常(つね)の灯　夜分ニ非ず、常の字五也。内一は雲
一露ふけて　といひても夜分也。ニよみにあるべし
一つれづれに、さびしき　七句きらふ也。
一つゝとまり　四也。とまりならずば二句去也。

一筑紫ニむらさき　少もきらはず。
一辻立・辻占　戀也。辻、色々ニ云かへて四あるべし。
一妻　一、つま戸一、妻子などゝ嗟ニ云て又有べし。
一妻ニ手かけ　うはなり、面ヲ嫌、妹ハうらニ有べし。
一つはりやみ・つけざしの盃　みな戀也。
一つて　只二、戀に一、たびニ一。
一使・つんぼ　非人倫ニ（厩犬などの使させし事もあれは也。）或説　使只二、戀ニ一、又、鷹つかひ・兵法つかひなどのうちニ一あるべし。
一つはもの・つるさし　人倫也。
一壺　器財ニして三、椎壺・桐つぼ等は此外也。
一椿　雜也。花を結びては春也。發句ニハたゞも春ニ用る也。或説ニ椿二也。
一蔦蘿　二也。秋也。つたのはのしげるなどは夏也。
一つま木　うへ物ニあらず。薪に折ヲ嫌。木の字に三句。妻の字ニ三句也。
一つれなき　只二、戀ニ一。
一つなぐ　かれこれ云かへて四也。
一つかふる　二、宮づかひ、折ヲかへて又有べし。
一つなの字　三、きづなは三の外也。何も折ヲ嫌。

㋧

一禰宜　神祇也　人倫也。
一念者　戀也。人倫也。
一子日　一、子の年又有べし。子日、うへ物ニ二句嫌。松に打こしヲ嫌。或説　付てはくるしからずと云。
一鼠　一、夜分也。鼠火・鼠戸・鼠茸、かく様ニ替ては四も可有。鼠戸・鼠火・生類に嫌はず、鼠戸、居所ニあらず戸八の内也。
一寢の字　四也。ぬる・ねぶる・朝ゐ、などはうらニ有べし。鳥・獸のねるは七句嫌。或説ニしんと聲ニ云て一、以上五也。蝶鳥のぬる、又外ニ二有べし。
一寢　鳥ニ一、虫ニ一、獸ニ一。ねぶる同前。
一ねぶる・寐に起臥　共ニ二句嫌　ね物語嫌也。
一閨ニ寢の字　七句嫌。或説ニ閨二也。
一岩根　垣ねの根、八也。
一音聲　ひゞき、二句嫌。
一猫　一、手がひのとら・こまなど云かへて又一有べし。
一ねらひがり　夏也。獸がりの事也。

㋤

一難波ニ波　不嫌。波の露、降物也。波、字去也。
一渚　二　灘二。或説ニ渚三、内一名所ニあり。
一藤波　尾花の波、水邊不嫌。波の字ニは三句也。
一ながれ　二、ながるゝ二。或は流の字、折ヲかへて三也。
一苗代　春也。うへ物　打こし嫌也。
一なみだ　戀也。五句去也　涙の雨、降物ニあらず。
一涙の露　秋也、降物ニ嫌也。涙の時雨、冬也、降物ニ三句也。
一涙ニ袖の露　何時によりて二句嫌也。
一涙のかすむ　としてもそびき物也
一涙ニ人のなく　二句嫌。人のなくニ鳥のなく二句嫌。

一なるかみ　非ニ神祇ニ、神の字ニ二句嫌。或説ニなる神二、内一は、らいと辭に云て有べし。
一ながめ　四也。ながむるも此内也。詠ニみる嫌。
一なぐさみ　二ツ有べし。慰草・うへ物にあらず。
一中天　一、中の字ニ二句嫌。
一名の字　只二、戀ニ二、いづれも人の事に云て也。畏物・草木等の名はうらにあるべし。
一名殘　名の字・殘共ニ二句嫌也。連哥ニ二句の物は四たれ共、其中にも輕重有べければ、よく分別して用捨すべし。か様の詞は連哥のごとく一ツ有て然べし。或説ニは三也と云り。
一中にうち　二句嫌也。世のなか同前。
一中を云　戀也。中戀ニ二、中たち云かへて二。
一中立　人倫也。中の字・立共ニ二句嫌。
一長枕・長かもじ　戀也。
一なびく　戀の詞也。なびき物かへて三也。たなびく二有べし。

一永き日　一、長き夜一、但、日はながしなどゝ云かへて又あるべき歟。
一なるゝニ待ならふ　二句、なるゝニならす、七句嫌。
一なびくニたなびく　七句嫌。
一習　四也。習禮、うらニ有べし。
一也どまり　八也。
一成と也　なるにならん、付句を嫌。
一なるとなる・なりとなり・なれとなれ　か様の間二句也。
一ならしどまりニならん　七句嫌也。
一なれや・ならし・ならん　とまりニは面をかへて八づゝ也。或說ニなれや・ならし・ならんのみつかな、七句去也。句のとまりニは百韻ニ三づゝ也。
一なりにけり　などゝつゞきたる詞、四也。或はか様の五ッかなの留り、句のたけをかへて二有べし。
一かはらじなのな　二句嫌也。
一なき・むなしき　二句嫌。はかなき、付句を嫌。
一なき・おほけなき・つたなき・いとけなき・つれなき　何も付句も不ㇾ嫌、あぢきなきは三句嫌。おぼつかなき・かいなきの類は五句也。
一人の名　人倫也。但、刀のめいは作者の名なれども人倫にならず。
一撫子　二、石竹など異名を云て又二。
一波の花　波を花にたとへたる句作りには、正花にもあらず、春にもあらず。花のちりかゝる心ならば正花也、春也。

（ら）

一老若　人倫ニあらず。郎等・老翁、人倫也。
一牢人　述懐也。
一勞瘵　戀也。
一蠟燭　夜分也。但、句躰によるべし。
一らし・らん・らめ　此間二句嫌。けらしは少も不ㇾ嫌。
一らるゝ・さらん・ならし　などつゞきたる三かなは七句嫌。らんニおらん・ちらん、此類は付句を嫌。
一らに（直の事也）　ふらにふま、又可ㇾ有。しらん不ㇾ可ㇾ有ㇾ二也。
一亂世・亂碁　など過て世の亂又一有べし。

む

一むすぶの神　戀也。
一室の戸　尺教也。非レ居所ニ・打こしニは用捨すべき也。寺ニは七句嫌。或説ニ室の戸二也、室の字四也。
一村　居所二句也。村の字ニむら雨二句也。
一昔　二、述懷也。いにしへに面を嫌。
一むばら　木也、雜也。花をむすびては夏也。
一梅　一、紅梅一、冬木の梅一、青梅一、若木の梅一、紅葉ニ一、此内出がちニ四也。梅の雨はうらに可レ有。或説ニ連式ニ五の物なれば六ッ可レ有と云。
一梅漬・梅干　うへ物にあらず、雜也。
一葎の宿　うへ物也。雜也。或説ニ葎一、八重葎一也。
一莚　二、法の莚一、帆莚一。或説ニ莚二、この外名有莚一、以上三也。莚、夜分也。法の莚・寄莚・たか莚・むしろ敷・帆むしろ等は夜分あらず。
一馬　二　駒二、馬ニ駒、折を嫌、馬ニ驛・馬のはなむけ・馬場・七句嫌。馬ニ將棊の馬・午、七句嫌。馬ニ鞍馬山も同前也。鞍の字そひたる故也。但馬國・有馬山等は三句嫌。
一馬ニ鞍・鐙　等七句嫌。馬の打こしニ車・舟嫌。
一馬おひ　人倫也。驛路・馬場・生類きらはず。
一虫　只二。松虫・鈴虫・玉虫・みの虫等の内ニ二、何れも折を嫌。蛬・促織等の名の虫、又四裏ニ有べし。
一むさゝび　獸也、夜分也、雜也、鴟鵂と譬ニ云テ又一。
一むちうつ　に打の字、二句也。
一迎ニ向　向二句嫌。
一六の花　雪ニ七句嫌、雪五の内也、うへ物ニあらず。
一むすこにむすめ　面をきらふ也。
一むこ　戀ニあらず。むこ入としては戀也。
一むこね　戀也、夜分ニ非ず。
一むつごと　戀也、夜分也、
一夢想・靈夢　神祇也、戀にあらず。
一麥飯の類　うへ物にあらず。
一胸の霧　秋也、むねたゝき、人倫也。
一胸ニ心　二句嫌。
一埋木　うへ物ニ二句也。
一むらがるニ村の字　二句也。群一、群集一。
一昔ニふる事　古道具などの類嫌。

う

一海　二、名所ニ二、海うなばら・和田の原、面を嫌。
一薄の字　八也。薄墨・薄紙の類也。或説ニ五也。
一鶯　二。或説鶯一、物の名ニ云て一、金衣鳥・黄鸝・春鶯囀或は鶯の瀧等の内ニ一有べし。
一鵜卄　夜分也。か様の物は一也。鵜飼ニ舟、付句を嫌。
一うろくづ　生類ニ二句也。或は鱗一、角鱗と譬ニ云て又一。
一牛　一、丑一。
一植田　かり田共ニうへ物ニ二句也。
一植の字　木草ニ替りて二也。植字の板木又有べし。

一うつるニうつろふ　二句嫌、或説ニ三句去也。

一うら　戀也、占(うらたい)又有べし。うらやさん・うらの算、人倫ニ非ず。うらかたは人倫也、いづれも戀也。

一哥　二、敷嶋の道一、ことはの道一、以上四也。連哥も此内也。哥ニ言の葉不レ嫌。但、ことはの道・言のはをつらぬるなどゝいはゞ折を嫌べし。

一哥ニ小哥　面を嫌、哥ニ短册七句嫌。

一哥ニ謠　七句嫌。小哥ニ謠同前。

一謠ニうたふ　折を嫌、謠ニ能、面をきらふ。

一うたひニ鷄のうたふ　面をきらふ也。

一上ニのぼる・あがる　二句嫌、上の字、よみかへて六ばかり有べし。

一寳の字　四也。

一うづみ火　夜分也、冬也。埋の字四也。

一うき世　憂の字ニ二句也。或説ニ浮の字字去也。

一うき世ぐるひ　述懐にあらず、戀の世ニなるべし。

一うきニ物うき・かなしき・うれへ・つらき　何も二句嫌。

一うぶや　居所ニ二句也。生居共書故ニ家の字ニ七句嫌。

一うまるゝ子　述懐ニならず。

一うらやまし　浦の字・山の字共ニきらはず。或説ニうらの字は三句去也。

一恨(うらみ)ニかこつ　二句嫌。恨、四はがり有べし。或説ニ戀・述懐ニ替て三也。内一ハ遺恨(いこん)などゝ聲ニて有べし。

一うたゝね　夜分也。

一うかるゝニうき　不レ嫌。

一うちなびく　打かすむの打の字、二句嫌也。杖にて打などは各別の義也。

一うそニ・まこと　二句嫌。

一うらゝ　一、長閑ニ折を嫌。

一うかれめ・うはなり　人倫なり。戀なり。

一うでニ手　七句嫌。うで香(かう)たく、尺教也。

一うつぼニ矢　も、弓も面をきらふ也。

一うら枯　秋也。草葉そと色付て、かるゝ事也。植物ニ二句也、

一浮木　植物ニあらず、浮木一、又ふぼくと聲ニ一也。

一うきねの鳥　非ニ夜分一、惣じて鳥のぬるさた、皆夜分ニあらず。うきねの鳥、冬也、水鳥の事也。

一うづらの床　夜分ニあらず、けだ物の床同前。

一鶉衣　みじかき衣也　季をもつ故　生類ニ二句嫌。

ゐ

一居の字　面をかへて八也。或説ニ居の字三句去也。きよとよみかへては二句去也。

一井　只二、名所ニ二、雲井と都の事にしても端居などには三句也。雲のゐる心あるか。

一宮守(いもり)のしるし　戀也。井ニ二句也。守ニは面を嫌也。

一猪　只一、雜也。或説ニ二、名所の猪名野等、亥又有べし。

の

二法　佛法・法の師・法問、か樣ニ云かへて四、法度は此外也。或説ニ法一、ほうと聲て一、又佛法の外、法令・法度の法有べし。以上三也。

一野ニ原　二句也。あしたの原の類也。或説ニ篠原・田の面の原などはきらはず。野の字・原の字共みな字去也。
一野べ　二。野原ニ一。或説ニ野べ三、内一は名所しかるべし。
一野を焼　春也。うへ物ニ二句也
一野の花　正花ニならず、秋也。
一野の色・野山茂る　うへ物ニ二句也。
一野ゝ宮　さがニ有、かもニあり、神祇也、名所也。いづれにても出がちニ一也。
一野分　風躰ニ三句、野の字・分の字共ニ二句嫌。
一後の字　面をかへて六迄も有べし。
一野遊　句作りかへて二也。
一軒　四也。或説ニ軒二、のきば一、以上三也。
一軒のあやめ　水邊也、うへ物也。軒ニひさし、同じ事也
一のどか　二。しづか二句嫌。或説ニ長閑二、うらゝ一、又うらゝかなどゝ少かへて一、以上四也。
一春と云事　四也。生類のうへにては面をかへて又有べし。

一のろふ　戀也ニ一、能一、藝能と云て又有べし。
一能のわき　同つれ、非ニ人倫ニ、して太夫は人倫。
一軒の玉水・軒の雫　ふり物ニも水邊ニも非ず。
一のもせ　道もせ・庭もせ、皆一座ニ一づゝ也。野もせばみ・庭もせばみといふ心也

一沖　只二、名所ニ二。或説ニ沖二、名所一、以上三也。
一奥山　一、山のおく一、奥の字六也。或説ニ四也。みちのおくとすれば四の外也、心のおくは四の内也。
一尾上ニ尾の字　上の字、共ニ二句嫌。峯ニ七句嫌。或説ニ尾上二、うち一は名所ニあるべし。
一老　二、鳥獣ニ一、木ニ一、人の老二の閒に折を嫌也。
一老ニよはひ　二句嫌、述懐也。老ニおさなき二句也。
一親　述懐ニもちひず。親子二句嫌、親子とつゞけても人倫也。
一男　云かへて四ばかり有べし。或説ニ三也。内一は、なんと聲にすべし。又、ますらを・たはれをの類、おといひて三有べし。男ニを、七句嫌。
一鬼　一、鬼神一、鬼ニ鬼百合・鬼瓦、折を嫌也。か様のけやけき物は似せ物ニても折を嫌べし。
一落葉　二、名木の落葉二、落は冬也。
一荻　一、季をかへて又二も有べし。或説ニ荻一、他の季ニ一、いせの濱荻等の内ニ一、又、にき花と聲ニ云て一有べし。荻、風躰ニ二句嫌也。
一おばな　尾の字・花の字共ニ二句嫌、或説ニ三句也。
一おくて田　うへ物ニ二句也。或説ニは三句去也。
一思ふどち　おさあひ、非ニ人倫ニ。
一思草　秋也。うへ物也。
一おもひやる　思の字・遣の字共、二句嫌。或説ニおもひやるの詞一座ニ三也。
一おぼゆるニおぼつかなき　二句嫌。
一思の煙　そびき物ニ二句也。或説ニおもふと／＼・おもひと／＼、七句去也。

一面影　只一、戀ニ一。面の字・影の字共ニ二句也

一おきる　夜分也、起るニ一切寢のさたあしき也。

一御座　居所也。みまし又同前也。云かへて以上三也。

一御とく　折を嫌。おとく・ごとく此間七句也。おん四、み四、ご四也。御ニ呉服二句嫌。

一大の字　四也。大雨、大海などの類也。か樣の大の字ニ大原・大津三句嫌。大工・大名も同前。

一大とだい　面を嫌也。だい又四也。

一折・比・時　同じ心に用たらば二句嫌。

一おがむ　神佛・月日などの事ニ云かへて二有べし。おがみらちは又有べし。おかむニ拜殿・禮拜・拜見等面を嫌べし。

一親　一、ゑぼしおや一、生類ニ又有べし。

一おさななじみ　戀也　非ニ人倫ニ。

一帶のいはひ　戀也。

一おぼろげ　春にあらず、月をむすべば春也　おぼろ月夜ニ霞二句也。

一大井川ニいせき嫌。

(く)

一國の名と國の名　名所、此間二句也。國の字四也。ここと云ニ又四也。國とこく、面を嫌。

一國ニ雍州・和州、七句嫌也。

一黑の字　四也。

一雲の上人　或説ニ人倫也　雲ゐの庭、そびき物ニ打越嫌。

一雲　くもゐ　二句嫌也。雲の字三句去也。

一朽木　うへもの也。但句躰によるべし。

一草の庵　非ニ述懷ニ、うへ物ニあらず。草の戸ニ折を嫌。

一草枕　非植物ニ、旅也　草むしろ、うへ物也、夜分也。

一草の原　野ニ不レ嫌、草千種三句嫌也。

一草ニくたびれ　少も不レ嫌、草ぶきのとぼそ、居所ニ二句也。

一草村　うへ物二句也　草の字・村の字にも二句嫌也。

一草かり　人倫也。植物ニ打越嫌。草かるは人倫にあらず、うへもの也。

一草花ニ萩さく　薄ほニ出るなどみな同事也。或説　草花一、花の草庵一、花の草枕一、云かへて三也。

一花瓶　雜也。花の字には三句嫌也。花がめとしては正花也。うへものニ嫌也。

一くらげ　月ニ少も不レ嫌。

一くし柿　うへ物ニあらず。

一くし鮑　生類ニ不レ嫌。

一くちなし染　夏也。

一櫛　二、くしげ・櫛拂などの內、又一、御櫛は此外也。

一車　只二、法の車一、水車一、手車、色々ニ云かへて出がちニ四也。車ゑび・車座等はうらに有べし。

一水雞　夏也、夜分也、水邊也。

一くるゝ夜　時分也、非ニ夜分ニ　暮はてゝ非ニ夜分ニ。

一暮ニ夕　三句嫌・朝夕とつゞきては二句也。夕立も二句也。暮ニ晩・たそがれ時・三句嫌也。

一暮ニかきくらし　かきくれてなど二句也。

一春秋の暮、夕時分　二句嫌也。

一くらきニ闇　七句嫌、夜分也。木の下

くらきは非ニ夜分一。或説ニくらきニ暮ニ闇は二句也。夕の字はきらはず。
一くだすニ下の字　二句嫌。
一物をくふ　四也。生類のくふは面を替て又二有べし。
一口ニ吸(すふ)・くふ　など、二句嫌。口ニくちびる.面を嫌也。
一口　人の上ニ云て四也。水口・口切・切口・戸口などの口は三句去也。口切壺は茶をむすばでは云がたし。
一藏　一、土藏一、文庫(ぶんこ)又有べし。何れも非ニ居所一。
一位　一、諸藝の位など又あるべし。
一官位　人倫ニあらず。但、句の仕立ニよるべし。殿文字そひては人倫也。
一官家(くはんけ)の号　よきにもあしきにも云出すべからず。飛鳥井の宿などゝ云句ニまりを付るは不レ苦。
一公家　公卿とも人倫ニあらず。
一沓(くつ)ニ足　二句嫌　木履(ぼくり)は折を嫌。
一くすし　人倫也。くも舞、生類ニきらはず。花の瀧・雲の波、水邊ならざる類也。

蜘手・熊手、同前也。或説 蜘一、蜘蛛(ちちう)と聲ニ一、蜘手一、云替て三也。
一くちなは　雜也。穴より出るは春也。穴へ入は秋也。
一くどく・口すふ　戀也。
一久米の仙人の通を失ひた事　戀の故事也。
一曇の字　月のくもる・鏡のくもる・空のくもる・心のくもるなど云かへて三有べし。
一岫(くき)　山類也。一座一句のもの也。

㊧

一社　二、宮ニ面を嫌。
一山かつら　曉の雲の事也。夜分也、そびき物也。
一山姥(うば)　山姫、雜也。人倫ニあらず。
一山陰　むすびて二、山した・山もとなどニ夕かげは景の字なれ共二句嫌。山陰一、山ふかき陰などゝ云かへて又一也。或説ニは又、山のかげと一有べし、以上三也。山の雫(しづく)、非ニ降物一。山の錦、紅葉ニ面を嫌。

一山の色　うへ物ニ二句也　山の色・もみぢ七句嫌。
一山ニたくさんと云詞　二句嫌。山のはニ軒端・面を嫌
一山里ニしばの戸　柴の庵、同事也。
一山もとニ下萠(もえ)　二句嫌。山柴、植物也。山ニ浦山數不レ嫌。
一八重霞　菊垣・塩路など替て四也。幾(いく)重・一重はうらニ有べし。或説ニ八重と云詞一座ニ二也。重の字は七句嫌、重の字ニかさなると云詞一也。ぢうと聲ニよみては三句去也、又おもしとよむ時は同字ながら各別也。
一柳　青柳・柳樽・柳腰・柳がうやく、此内出がちニ二、夏の柳一、秋ニ一、冬ニ一、何れも折をかへて四也。柳樽、柳腰は、うらニ有べき物なれ共、季を持ゆへ折を嫌也。柳ごし、戀也。
一柳ニ雪　をむすびても春也。
一藪(やぶ)　只一、藪椿又可レ有。藪、うへ物ニも竹ニも二句嫌。
一宿　二、旅ニ一、戀ニ一、折を嫌、やどりはうらニ有べし。鳥のやどり・露のやど

りは七句へだてゝ同じ面にも有べし。
一彌生山(やよひ) 非ニ名所ニ春也。
一屋形 一、屋形舟又有べし。屋ニ馬屋、
二句嫌。
一屋の字の事 東屋・板屋・苫屋(とま)、か様
の屋の字、面をかへて八也。茶屋・酒屋・絹
屋・糸屋等の様なる職(しよく)に付たる屋又四也。
東屋と茶屋の間七句隔て同面にも不レ嫌。
或説ニ屋・色ゝニ云かへて五也。内一はお
くと聲ニて可レ有、屋ニ馬屋七句、宿・やど
り・やねニ五句 家ニは三句嫌也。
一矢 いひかへて二也。としの矢又有べし。
一矢ニ弓 面を嫌也。年の矢も同前。
一流鏑馬(やぶさめ) 神祇也。馬・駒ニ七句嫌。弓ニ
二句嫌。
一鑓(やり)ニ太刀・長刀 打こし嫌也。
一鑓 一、鑓梆、鑓鉋(かんな)等の内ニ一、鑓を
とがい又有べし。
一うたがひのやの間 二句也。折合も
嫌。うたがひのやにては、に共て共とまら
ず。
一やもめ 人倫也。
一闇(やみ)ニくらき 七句嫌。
一欵冬(やまぶき) 一、山吹色の衣一、くわんとう
と聲ニ云て又一有べし。蕗(ふき)ニ欵冬と付ても
不苦。山の字ニ不嫌。

(ま)

一松ニ子日 二句嫌、松の門・松垣、うへ物ニ
あらず。
一松風 二、松ニ風むすびて又二、松風
の時雨、冬也、降物ニ二句也。
一松の煙 竹・草・水などの煙、そびき物ニ
二句也。
一松の聲 松のひゞきニ風躰二句也。松ニ
海松(みる)等不レ嫌。
一松のみどり 同落葉、雜也。みどり
立・若緑は春也。
一松茸 うへ物也 松の字ニ五句也 松
葉たく、うへものにあらず。
一眞(まこと)の字 八也。
一待の字 八也 此内戀ニ二有べし。
一槇ニ木の字 不レ嫌、槇の戸ニ木の字三句
嫌。槇のやは五句也。槇は良材たる故也。
一秣(まぐさ) 牛類・うへ物・草の字共ニ一句、馬ニ
は七句嫌也。
一鞠 一、手まり一。
一町 居所ニ非ず、町屋は居所也。
一京の町〳〵の名 名所同事也。
一窓 二、窓ニ戸七句嫌。面かはれば五句
也と云。或説ニ窓ニ戸二句きらふといへり。
一籬(まがき) 一、霧の籬一、折を替て可レ有。籬ニ
垣、七句嫌。
一枕 またね・まどろむ、夜分也。枕草子
戀也。書物の名ならば戀ニあらず。
一ますらを 人倫也。男に七句嫌也。
一孫ニ子・彥(ひこ) 面を嫌。
一盲目(もう) 人倫ニあらず。
一まなこニ目 面を嫌、まつげ・またゝ
き・まかぶら、何も目ニ七句嫌。眉(まゆ)ニ目・まな
こ二句嫌也。
一眉の霜 雜也、ふり物ニあらず。或説ニ
眉の霜、述懐也。眉の字いひかへて三也。
一まねニ似の字 二句嫌。
一舞まひ 人倫也。
一舞 一、まふ一、しゝまひ・舞鶴、か様ニ
云かへて四も有べし。舞ニまはる、二句嫌
也。
一參る 神佛ニ詣り二 只參り・まいるは
四ばかり有べし。

一前の字　面をかへて八也。ぜんと云かへては七句去也。
一前にまへだれ　二句嫌。まへわたり・丸びたい、戀也。
一丸き　四也。名所の丸山、うらに可レ有。丸きに圓座七句嫌。
一中の字　二ばかりで有き歟。或は四も有べしと云。
一祭　一、所をさして一、神事一、會一、折を嫌ふ。星まつり、玉祭はうらにあるべし。
一ましとか詞　留りに二也。平句の中に内は二句去也。

㋘

一けふ　二、今朝二、けふにあす・きのふ二句嫌也。
一けふに今の字　不レ嫌。今朝に今も同前。
一けふのこよひ　非に夜分に、けふといへば夜の詞入ても夜分に非ず。
一下知（げち）の詞の間　二句也。たとへばきけと云句に見よなどといふ類也。
一煙に柴・薪　二句嫌、或説に柴は打こしも不レ嫌と云。
一けだものに物の字　二句也。生類も同前。獸狩、夏也。
一けりにさむけき・しづけきのけもじ二句嫌。けらし、同前。
一けり留り　八也。或説に五也。
一下にくだる　二句也。
一下戸　人倫にあらず。
一検校（けんげう）　盲目の事に云たらば座頭、勾當（こうたう）に折を嫌べし。めくらには面を嫌也。めくらの句作ならずば尺教になるべし。
一傾城　うかれめ・遊君、何も折を可レ嫌、人倫也。戀也。
一けはふ　けんしやぶり・けしやう文、何も戀の詞也。
一けんぞく　人倫にあらず。
一袈裟（けさ）　衣類也。尺教也。
一稽古（けいこ）　一、習に二句也。
一景　只一。
一けしと云詞　たとへば春けし・露けしなどのけし・けき・と云とば二句きらふ也。

㋙

一古郷　只二、旅・名所に二、古郷に郷、二句嫌也。
一古郷にふりてと云詞　七句嫌也。
一古寺の庭　居所に非ず、然ども打こしには用捨すべし。古寺の軒又有べし。
一古の字　八也。面を嫌。或説に聲によみて以上五也。古きにいにしへ二句嫌。又、ふるどなどの類には昔も二句也。
一古き衾（ふすま）・古枕　戀也哀傷（あいしやう）也。ふすま夜分也。座禪衾、非夜分に。衾にふすま・障子、折を嫌。
一舟　五句去也。旅也。河舟・つなぎ舟・芦分舟・小舟・釣舟・とまり舟〔分旅にあらず〕、淀の川舟は旅也。
一舟にいかだ　嫌。舟の打越に橋・馬・車・乘物の類用捨すべし。舟岡山・御舟山などは五句也。天の川は水邊ならね共舟の字に七句去也。
一麓（ふもと）　二、山もとに七句嫌、或説に麓三也。内一は名所にあるべし。
一生（ふ）　蓬生・淺茅生（あさぢふ）などの生の字、折を嫌。
一冬がれの野山　うへ物に二句也。冬がれのあしび、冬がれのあしや、共にうへ物に打こしを嫌。
一ふしづけに柴　二句嫌。

一ふかきニみ山　二句嫌。
一雪吹ニ風　三句嫌、降物二句也。雪は七句嫌。降の字・吹共ニ三句也。或說ニ降の字ニは面を嫌也。
一ふくろ　と斗も夜分也。ふくろニく、面を嫌・夜の更・深更、時分ニ非ず。或說ニ更の字夜ニ云て三、又秋更・人の年ふくる類二有べし。
一ふくるニふかき　二句嫌。
一更の字　面を嫌也。
一ふす　夜分也。ふすニくたびれ不レ嫌。
一文　戀ニ一、旅ニ一、文字一・文學一、狀一、何も折を嫌。玉章はうらニ有べし。玉章は戀ニしても不レ苦。然れば戀の文二也。或說ニ、戀ニ一、旅ニ一、文學一、玉章三の內也。旅ニても戀ニても三の外・もんと聲によみて又一有べし。
一文ニ庫・文臺　面を嫌、或說ニ折を嫌。
一筆　一、はぐろ筆一、筆道又有べし。或說ニ筆一、ひつとも・がうとも聲ニて又一有べし。
一筆ニ墨跡・繪・書物　みな二句嫌也。
一ふりつゞみ　振の字ニ二句嫌。

一笛　一、しやうの笛一、しゝ笛一、のどぶえはうらニ有べし。
一鞭　馬・鷹ニかはりて二。
一風呂ニ風　不レ嫌・風鈴・風流みな二句嫌。
一ふろ　一、風爐一、ぬし屋のふろ一。
一舞臺ニ舞　面を嫌　振舞一　ふるまふ又有べし。
一葺　芦ぶき・こけらぶきの類四也。屋ねをふく・あやめふくはうらニ可レ有。芦ぶき・さゝぶき居所ニ二句也。
一藤　二、藤綱又有べし。或說ニ、藤只一、藤原一、季を替て又有べし。藤は草の類也。藤なみ非ニ水邊ニ。
一藤原　と斗は雜也。藤つぼ・梨つぼも同前。
一ふくろふ　夜分也、雜也。
一牡丹　云かへて只二也。
一武士　人倫也。武者・武邊・武具、折を嫌。
一奉行　ふたり、人倫にあらず。
一二心・ふり心　戀也。
一ふとん　冬也、夜分也。

一降の字　六也。
一吹と／＼　字去也。笛を吹・風躰ニ不レ嫌。但、吹と云字、風の字ニは二句也。

(こ)

一權現　神祇也。
一心ニ試・こゝろざし　此間二句也。
一心の月　尺敎也。非ニ夜分ニ。心ニは三句也。月ニは五句也。
一心の杉　うへ物ニあらず、好色の事を云。又、すぐなる心ニも云也。うへ物の打こしニは用捨すべし。
一心の花　正花也。うへ物ニ二句也。
一心の松　うへ物ニあらず、待の字の心ニ用ゆる。
一心の馬・心の猿　ともニ生類ニあらず。
一心のやみ　夜分ニあらず、愚癡の心を云。
一心の友　非ニ人倫ニ、句躰ニよるべし。
一子　二也。鳥獸の子二也。卵・蠶の類又一。
一子ニ生類の子　七句嫌　竹の子は三句嫌。或說ニ、竹の子・かいこなどは付句を嫌・金子・童子は付句も不レ苦。

一子をはらむ・子もち　述懐ニあらず、戀也。
一子ニむすこ・わこ・兒・孫　面を嫌。
一古筆・屏風　などの古の字、面八句の内にも不レ苦。
一聲　鳥と鳥、獣と獣とは面を嫌也。
一木の葉の雨・木のはの時雨　ふり物ニあらず。
一木の葉衣　うへ物・衣類ともニ三句嫌。
一木の葉ちるニ冬山・あさき　など同意也。
一木玉ニ木の字　玉の字ともニ三句也。
一梢　四也。木の字・末の字共ニ二句也。こずゑの秋・末の秋の事也。うへ物ニ二句也。木末ニ枝、不レ嫌。
一木枯　只一、うへ物ニ非ず。こがらしあらす・野分等の風躰、云かへても三句也。荻の聲などは二句嫌。
一木がらしニ葉のかるゝ　折を嫌。
一衣　五句去也。霞の衣・七夕の衣・衣類ニあらず。
一苔衣　述懐也、非ニ植物一ニ。苔の袂、非ニ植物一ニ非ニ尺教一ニ。
一苔莚　うへ物也、非ニ夜分一ニ。敷むしろとしては夜分也。
一苔猿　うへ物ニ非ず。苔戸・苔の庭、うへ物也、居所也。
一木の葉猿・木の葉天狗　うへ物ニ二句也。
一詞のはやし　うへ物ニ非ず。
一言のはニいふ　二句嫌。
一詞　二、ことのは又有べし。言のはの道は此外也。
一詞の花　似せ物の花、何れも非ニ正花一ニ、然れ共木の花ニは面を嫌。詞ノ葉の字きらはず。
一小と小　三句去也。いひかへては二句也。
一氷　二、うすらひ一、氷柱一、たるひ一、氷二の間、折を嫌。うすらひ・たるひも同前。或説ニ氷五也。内一はひようと聲可レ有、氷室は五の外也。
一氷ニ月・涙・雪・霜・露・砂糖　などの氷るは面を嫌也。
一去年　二、ことし二。去年ニけふ・今共ニ不レ嫌。
一比の字　平句ニては三句去也。とまりニは面をかへて八也。比ニ年來・日來二句嫌。
一比・折・時　此間いづれも二句也。
一此殿　居所也。此殿うたふは居所ニあらず。
一後家・後室　人倫ニあらず、居所ニあらず。
一こつじき　人倫也、述懐也。
一ごぜ　人倫也。
一爰かしこニ此・是の字　共ニ二句嫌。或説ニ付句斗を嫌。
一米　うへ物ニ不レ嫌。
一胡蝶　鈎簾ニ小の字不レ嫌。
一昆布　ぐふ心あらば水邊ニあらず。
一こゞり鮒　水邊ニあらず。氷ニ七句嫌。
一こたつニ火　七句嫌。爐は折を嫌。
一戀の字　四也。戀草も此内也。こふるはうらニあるべし。
一戀草　非ニ植物一ニ。但、かるゝ・しげるなどゝは植物ニ二句也。
一戀の句　春秋の平句ニ戀の春秋の句付て、又平句の春秋の句付べからず。同季にて戀の句をはさむ事を嫌也。

一戀の山　羽州の名所也。されども古しへより名所にもちゐ來らず、戀のつもりたる事也。
一九重　こゝのかさね、名所にあらず、都の異名也。都に面を嫌。二の内出がらに
一、又、九重城(ちうじやう)・きうこうの天などゝ一有べし。九文字八也。内二へことよみて有べし。重の字の事、ゑとゝは七句、ゑにかさなるは三句也。ゑにおもしは付ても不ㇾ苦。かさぬるとゝは面を嫌。いづれも聲によむ時は三句去也。
一こし地にこゆる　と云詞二句也。あづまなど云句も二句。名所も二句也。
一この葉草に葉の字　草の字、共に三句也。
一ことわざに詞・海士のしわざ　二句也。諺と書也。
一斷(ことわり)にかねこと　不ㇾ嫌、ことぶきに事の字不ㇾ嫌。祝言とかく也
一小鷹狩　秋也。櫻がり。紅葉は匪の字かけ共面を嫌。
一ここ留り　一座に一也と綱目にあり。

(に)

一江　只二、名所に二、住の江・三嶋江の類也。

一椽(えん)　居所に二句也。
一えびらに矢　面を嫌也
一緣をむすぶ　戀也。緣邊・えん組・えんの結などの内に二斗可ㇾ有。或說に戀ならぬ緣の字は、えにしに三句去也。
一えびす　人倫也。夷一、東夷・北狄・南蠻・西戎、此内に一有べし。南蠻は國の名になりて非に人倫に。

(て)

一天竺　名所にあらず。但、打こしを嫌べし。
一天子・帝王　人倫の外也。
一天水　水邊に非ず。
一天狗　神祇にあらず。但、打こしに嫌べし。
一天の字　四也。天下・天井・天守等也。あ文字の所にくはし〻。
一天に空　三句嫌。半天(なかぞら)は七句嫌。
一天に天王寺　天台山等、三句嫌。
一手の字　八也。面を嫌。或說には五也。
一手に上手・下手　七句嫌。或說には同字ながら支躰(したい)の心なければ付ても不ㇾ苦、同事ながら、うは手・した手とよめば手五の内也。

一手にたまくら・手折　七句嫌。
一手にたもと・たすき　二句嫌。手にもつにぎるなどゝ付る事嫌也。但、句躰よるべき歟。
一手かけ　人倫也。手をしむる、戀也。
一てつくり　調布(てつくり)也。衣類にあらず。
一躰の字　四也。
一て留り　下の句には二斗有べし。或說に連哥に千句にも一なれば、俳には一座に一有べし。下の句のに留同前也。て留りと〱、すみにごりのかはりなく二句也。てにはの字、折合を嫌。
一敵(てき)　人倫にあらず。
一亭主(ていしゆ)　人倫也。
一鉄砲に火　二句嫌。
一寺の打こしに鐘　を嫌。
一寺　只二、寺号は四有べし。或說に寺只一、名所に一、何れにても聲にて寺号一、以上三也。尺教也。手習子の寺は尺教ならねど三の内也。寺非に居所に。
一寺に金剛峯寺(こんがうぶ)・南禪寺　等面を嫌。但三井寺・はつせ寺などゝよみに云ては折を嫌。寺号は名所に打こし嫌。寺・室・堂・坊等七句嫌也。いづれも居所にあらず。

(あ)

一天の川ニ舟　むすびても非ニ水邊一ニ、名所の天の川は水邊也。天の川のあふせニ舟を結ても又非ニ水邊一、秋也、夜分ニ三句也。

一天　四也。てんと云て又四也。あめ・あまニてん面を嫌。或説ニ連哥ニ四なれば俳ニは、てんと讀ニて今一有。以上五也。あめニ空二句嫌。

一閼伽むすぶ　夜分也、尺教也。

一あづま　二、あづまニひがし面を嫌也。

一あづまやニ東　七句嫌。

一あづま遊び　神祇也。

一朝の字　八也。朝ニあした・けさ、一、早旦・明旦・今朝、七句嫌ニ或説ニあした・けさ、一、早旦・明旦・今旦、こんてうと讀ニよみて出がらニ又一也。

一朝ぼらけ　時分也。

一朝の月　一、けさの月又有べし。

一朝ニ朝兒　二句嫌。槿とも書。

一曉　一、其曉一、或説ニ曉三也、其曉も三の內也。

一あかつき　時分にもあくろにも二句也。

一朝夕ニ暮の字　三句也　或説ニ二句也。

一有明　秋ニ一、他の季ニ一、有の字ニ二句嫌。明の字ニ三句也。或説ニ季をかへて三也。有明ニあす嫌。

一有明の入　としては非ニ夜分一ニ、有明ニ月次の月五句嫌

一明過る・明はてゝ・明はなれ　何も非ニ夜分一ニ、明はなれずとしても夜分ニあらず。

一あらましニ有の字　二句也。

一ありさま　有の字・さまの字共ニ二句也。

一あくるニ明る　二句嫌。朝の字・しらむなど云詞も二句也。

一明闇・あけぼの　何れも夜分也。あけぐれと、くもじにごれば夜分也、くもじすみては、夜分にも時分ニもあらずと綱目ニあり。

一明暮ニ夕の字　二句、明の字・暮の字共ニ三句嫌。

一あけぼの　一、朝・夕共ニ二句也。ほのと云詞も二句也。

一東路ニ東屋　折を嫌。或説ニあづまと云詞三也。あづまや・東からげの類ニ云かへて也。

一青ニみどり　二句嫌。

一青の字　四也。

一赤の字　四也。赤ニ紅葉・丹・朱共ニ二句嫌。

一赤葉ニもみぢ　面を嫌。

一秋の葉　もみぢの心也、木の字ニ二句嫌。

一秋風　二、秋に風むすびて又一、或説ニ二有べし。秋の風〳〵とは二有べからず。

一跡の字　三句去也。古跡ニ云たらば折を替て四有べし。

一雨　四也。春雨一、村雨一、時雨二秋冬ニ、夕立一、ながめ一、五月雨一、あまり一、雨雲の類一、雨四の間は折を嫌。或説ニ雨二　又、雨天などゝ讀ニて一有べし。名の付たる雨は雨の字ニ三句去也。

一雨ニ春雨・村雨・あま・ながめ　何も面を嫌。時雨・夕立・五月雨三句嫌。雨ニさめ、七句嫌。雨のうらニ似せ物の雨有べし。

一嵐　二。或説ニ三也。嵐山は所の名なれば三の外也。

一あたゝか　一、長閑・寒、如レ此の間二句也。

一あつきニ凉しき　二句嫌。

一あだぼれ　戀の詞也。

一あられ・霰釜・霰斷　季を持故折を嫌。霰釜、ふり物ニ二句也。或説ニ霰只一、霰走一、霰松原一、此外ニ餅の霰又有、皆折を嫌

あられ地の錦・霰釜・餅の霰、みな雑也。
一あそぶ　二、あそび二、遊山一、うらニ有べし。
一あきなひ　一、あき人一。
一芦　一、あし火一、芦鴨一、芦屋一、何も折を嫌。或説ニ芦の字四也。内一、ふと辭ニて有べし。名所のあしやは四の外也。芦、水邊也。
一芦や・あし火　共ニ水邊・うへ物ニあらず。芦田鶴、うへ物・水邊ニ不レ嫌、冬がれのなどゝいはゞうへ物・水邊也。芦鴨、水邊也、うへ物ニあらず。
一麻衣　うへ物ニあらず。
一綀　色々ニ云かへて四也。
一あみ　と斗は水邊也。鳥とるやうニ仕立たらば水邊にあらず。
一網代　二、あみニ面を嫌、代ニは二句也。網代打、秋也。
一あみニ編心　三句嫌。あじろの床、居所ニ二句也。
一あぶりたる魚　非二水邊一、生類ニ打越嫌、鳥も又同じ。
一あづきもち・あはもち　うへ物ニあらず。
一浅茅生　居所ニ二句也、或説ニ茅の字云かへて四也。
一足　二、すね又有べし、足ニすね、折を嫌。
一足ニふむ　ける・足袋・くつ　何も皆二句也。
一人の足ニ鳥獣の足　面を嫌、道具の足は七句嫌。
一尼・あるじ・あに・あね・蜑　皆人倫也。
一あふ坂　山類也　逢の字ニ二句也。
一淡路ニ道　二句嫌。
一あやめ　水邊也、軒のあやめとしても水邊ニ二句也。
一あやめの枕　夜分也。うへ物也。あそびもの、戀也。但、句躰ニよるべし。
一秋の田　鴈・鹿をむすびてもうへ物ニあらず、鹿を追ふなどゝあらばうへ物ニ二句也。
一秋さむき　やゝ寒き・夜さむ・はださむ・あさ寒など秋寒きと云詞二斗も有べし。
一霰のきゆる　冬也。
一あるじニ有の字　二句嫌。
一あらたま・あらがね　共ニ荒の字ニ二句也。
㋚
一里神樂　非二居所一、禁中の外をいふ也。
一坂　只二、名所ニ二。或説ニ以上三也。
一澤　只二、名所ニ二。或説ニ以上三也。
一在郷　居所也。
一棧敷　居所ニあらず。
一散米・散錢　神祇也。
一催馬樂　うたふと斗は雑也。
一寒　冬ニ一、春ニ一、秋ニ一。或説ニ寒一、さゆる一、又、かんと辭ニ一有べし。云かへても同季ニ同折ニはあるべからず。
一さゆる　季をかへて二。或説ニ季をかへて三也。
一寒きニさゆる　面を嫌也。
一さゞれ石ニ小の字　二句嫌。さゞれ石へ小石の事也。
一左の字　四也。官ニ一、無左右などゝ云て一、ひだりと云て二。右の字も同前也。
一櫻　一、遲櫻一、紅葉ニ一、夏の櫻一、此分折を嫌。櫻鯛・櫻兒なども春の櫻二の内也。

一櫻人　うたひ物也、うへ物ニ二句・非ニ人倫ニ、或説ニ季を持也、うへ物ニ三句嫌、人倫ニも可レ嫌也。
一櫻田　み山ざくらの事也、うへもの也、春也。
一咲といふ字　四也。或説ニ五、正花ニは二有べからず、草木の名をかへてする事也。
一さゝのいほり　非ニ植物ニ、さゝとしのとの間七句嫌。
一さゝ　と、すゝとの間、面を嫌。さゝ・すゝ・しの皆草の類也。さゝニ竹三句嫌、しの同前也。或説ニしのもさゝも八づゝ也。
一山升　くふ心あらばうへ物ニ不レ嫌。山升の粉・山升のかは・塩山升、みた食物也。
一盃のひかり　としても月ニもちゆる也。日ニ二句也、夜分也。或説ニ酒三のうちの也と云り。
一酒　只二、霞くむ・三木・諸白、此内出がちニ四也。臺の物・上戸・下戸・酔・樽、か様の噂、うらニ又四也。或説ニ只一、しゆと讀ニ一、又霞くむ・竹葉・ゑいをすゝむる・霰・霙などの名をよそへたる等の内ニ一、かれ是云かへて以上二也。
一酒の酔　人倫也。酒ニえふとすれば人倫ニ非ず。
一雑兵　雑職、非ニ人倫ニ。
一侍・算をき・猿まはし・猿樂・座頭・山賊　いづれも人倫也。
一座頭ニごぜ・めくら　折を嫌。
一猿　一、ゑんこう一、ましら一、申一、かうしんとしては猿のうらニ有べし。かうしん過て申の年・申の時などの内ニ一、又有べし。
一さゝめご・さらるゝ　いづれも戀の詞也。
一ゆの字　二斗有べし。
一さほ姫　非ニ神祇ニ。
一寒ニ身にしむ・冷しき・あたゝか・あつき・のどか　何れも二句嫌。
一さと小　付句を嫌。
一五月雨　一、梅の雨一、又、五月の雨とか、さみだれの雨とか出がちニ一、ばいうと讀ニよみても三の内也。
一さびしき　二、物さび・神さびなどの間ニ一、以上三也。つれ／＼はさびしきのかへ詞なれ共三の外也。さびしきニ面を嫌。徒然のとはつれ／＼草今一有べし。又、とぜん・寂寞・閑寂などゝ云詞、つれ／＼ニも淋しきニも面を替て、今一可レ有歟。
一さゝら　一、尺教也。又、物あらふさゝら有、笹ニ二句。しのゝすゝ竹、不レ嫌、うへ物ニあらず。
一され　春され・秋され・夕され・冬され、是ばかりニて、夏され・朝されと云と、哥にも有べからず、口傳の詞也。只春なれはと云詞と心得てよし。

(き)

一祇園會の山　同舟、山類・水邊ニあらず。
一起請　神祇也。
一行人　尺教也。おこなひ、面を嫌。
一君　二、大君也　非ニ人倫ニ。此二の間は折を嫌。戀の君又二、人倫也。此間も折を嫌。若君・姫君、うらニ有べし。きん達は七句嫌。戀の君、二の外ニ又遊君有べし。
一錦字詩　戀也。
一禁中　内裏・大内・雲井の庭、何れも折をかへて有べし。
一黄の字　四也。

一京都　九重・洛中、いづれも面をかへて有べし。

一岸　只二、名所ニ二、彼岸(ひがん)はうらニ有べし。或説ニひがんも四の内也と云り。

一北　二、北斗・北面などゝ云かへて又二、よみ聲ニかはりても折を嫌。

一きのふ　只二。

一金銀　共ニ一づゝ也。こがね・しろがねは折を替て又有べし。

一金ニ金紗(しや)　金屛等面を嫌。銀又同じ。

一金ばくニ金屛　折を嫌也。銀又同じ。

一きやら　沈(ちん)香・折を嫌。

一經　一、名の經一、經かたびらなど又有べし。

一砧(きぬた)　一、衣打又有べし。砧ニ衣類ニ二句也、板ニ三句也。或説ニ板付(つけ)ても不レ苦、きぬの字ニは三句去べし。

一きぬ〴〵　夜分也。衣類ニ二句。或説ニ戀也。只一、又花のちるもきぬ〴〵と哥ニよみたれば、戀ならぬ句ニ今一有、別の字、戀の心あらば七句也。

一きさらぎニ月次の月　衣共ニ二句也。

一しらざりき・なかりき　如レ此のきの間二句也。

一きつね　夜分也。か樣の物二は有まじき事也。或説ニ聲ニ云て、又一有べし。名所のきつね河は狐の字ニあらずと云り。然らば付ても不レ苦。

一菊　云かへて二。或説ニ鳥の菊いたゞき・菊めい石・菊川等は、うへ物ニも秋ニも非ず。乍レ去折をかへて二の外ニ今一有、菊のきせわた、秋也。

一菊のかるゝ　冬也。花か色かをむすべば秋也。

一菊月　うへ物ニ二句也。菊の淵、水邊也。

一樵夫(きこり)　人倫也、非ニ植物ニ。木の字・薪等ニ二句嫌。

一霧の海　霞の海・空の海、いづれも非ニ水邊ニ。

一霧の籬(まがき)　居所ニ二句、垣ニ七句也。霧、そびき物也。ふり物ニ打こし嫌。霧間一、霧のひま又有べし。

一客人　一、客殿一、珍客・正客・客僧・ひん客も二の内也。

一木曾ニ木の字　二句嫌。

一騎(き)の字　生類ニきらはず、馬ニは七句嫌、馬ニ乘るには折を嫌。

一弓馬の道　馬・弓共ニ面を嫌。生類ニは少も不レ嫌。

一聞ニ耳　二句嫌。口きゝ・耳きゝ・目きゝ・手きゝ・心きゝ・鼻きゝ、此間みな二句也。

一木と木(こ)　よみ替て一方うへ物にてなくば二句去也。

一几帳(きちやう)ニ木　二句嫌。或説ニ少も不レ嫌、木の字の心なき也。

一木ゝの雫　ふり物ニきらはず。

一きり〴〵す　一、蛬うたふと又一有べし。或説ニ蟋蟀(しつそ)と漢ニ云て一、以上三也。筆つ虫・させにふ虫なども三のうち也

一きやと云詞　只一。心は、さりしといふとば也。

一きりの香　霧にも香ニも臥ニも嫌也。

一桐　秋也、只一、梧桐(ごとう)と聲ニて一、此外・きりつぼ・桐がやつ・桐火桶・桐の箱等の秋ニもうへ物ニもならぬ桐今一、以上三也。いづれも折を嫌。

一きぬくばり　冬也、衣類也。正月の

小袖を師走くばる事也。

㋴

一ゆふたゝみ　神祇也。きりたるしでのたゝみたるやうにみゆるを云也。

一ゆふばらへ　神祇也、水邊也。

一夕の字　八也。ゆふべ二。或説に夕の字五、内一はせきと嶭にて有べし。夕卩二、此間折を嫌、以上八也。嶭によみては七句去也。

一夕立　一、夏也、白雨共書也。夕だつ雲など又有べし。

一夕立に夕の字　三句嫌、暮の字・立の字共に二句也。

一夕たつ　は、夕の字・立の字共に式に嫌也。

一白雨の雨　は、本雨の外也。白雨正字なれ共嫌やうは、むかしの如くすべし。

一夕まぐれ　眞の字・間の字にきらはず。

一ゆふつけ鳥　神祇に非ず、夜分也。たゞ鶏の事也。

一夕月　非夜分に、折を替て、たそがれ月又有べし。

一夕卩に春秋の暮・年の暮・老の暮　何も二句也。

一夕に日ぐらし　日影共に不レ嫌。日ぐらしの嶭は二句也。

一夕闇　夕の字の外也。夕の字に三句、暮の字には二句。或説に宵の字に面を嫌。

一夕がほの宿　うへ物也。或説に花となくても夏也。ひやうたん・ひさき・ふくべの内出がちに以上二有べし。夕がほの夕の字、八の外也。

一雪　八也。似せ物の雪は七句隔てゝ同面にも不レ苦。にせ物とは月の雪・花の雪の類也。或説に五也、内一はせつと嶭にて有べし。にせ物の雪は各別たり。ふじの雪は雜也。消ても初雪も夏也、万葉集にそのさた有。

一雪にみぞれ・あられ・ふゞき　何れも七句嫌。

一雪の花　うへ物にあらず、ふり物也。

一弓　云かへて二、或説に三也内一はきうと嶭によみて有べし。何れも折を嫌。弓にゆがけ・矢共に二句嫌、ゆがけに手、二句也。弓にゆん手、七句嫌也。

一床　夜分にあらず、とこは夜分也。

一夢　戀也、五句去也、春か秋かの文字入ては戀になりがたし。夢うつゝとつゞきては非に夜分に。

一夢にうつゝ・ねざめ・さむる　など何も二句嫌。

一夢の世　非夜分に。但、みる・さむる、などゝいはゞ、句躰によりて夜分になるべきか。

一夢に閨・ねぶる・まどろむ　など皆七句也。

一ゆめ〳〵　夜分にあらず、夢には二句嫌。

一行に向後・歸る・ゆきゝ　二句嫌。

一行末　一、行衞一。或説に行衞三、行末二、ゆく末に行衞七句、行衞と〳〵・行末と〳〵は折を嫌。

一行衞に末　二句嫌、行末に行衞、面を嫌。

一遊山　山類にあらず、遊女に七句嫌。

一遊君に戀の君　折を嫌。指をきる・ゆぐ□也。

一湯　云かへて四也。湯女、戀也、人倫也。湯起請、神祇也。

一夕は山　名所にあらず、只夕の山の事也。

(め)

一名所と名所　二句也。
一目ニなみだ　二句嫌。
一目　人のめニいひて四也。此間折を嫌。
一目ニ牛類の目　面を嫌。あみのめ・木の目・さいのめ・うすのめ、か様のめは三句去也。或説ニ人の目ニ七句去、鳥・獣・木・山丼・さいめ等は面ニ一づゝ。
一めくらニ目　面を嫌。
一めのさむるニ見る　不レ嫌
一目をひく・めもとのしほ　戀也。めをといさかひ、人倫也。戀也。
一眠(めん)藏ニ寢　七句嫌。
一めくと云詞　いろめく・ほのめくなどの類、折ニ一ツ、有べし。

(み)

一巳の日の祓　神祇也。水邊也。巳の年は折を替て又有べし。
一御(み)秡(そぎ)　水邊也、神祇也
一みこニ神　七句嫌。
一帝(みかど)ニ御の字　二句也。門は七句嫌。勅(みことのり)ニ神子・三木などの御の字二句也。
一御幸(みゆき)ニ行の字　二句也。
一みてぐら　幣(へい)の事也。御の字ニ不レ嫌。
一みつぎ物　御の字ニ三句也。
一宮　只二、名所ニ二、皇居の宮二、若宮・姫宮、面を替て又有べし。或説ニ四也。神祇ニ二、皇居ニ二、内一は名所たるべし。宮づかへはうらニ一有べし。高津の宮・吉の宮・なにはの宮、此等は皇居也。名所也。若宮、姫宮は皇居の宮二の内也。
一宮ニみやづかへ・みやこ　七句嫌。
一都ニ皇居の古郷・旅の古郷　七句嫌、只古郷は二句きらふ也。
一都　只二、名所ニ二。或説ニ一、名所ニ一、旅ニ一、此外ひなの都。久邇(に)の都・月の都有べし。月宮殿とあらば月の都あるべからず、龍宮城出たらば龍の都不レ可レ有。南都・京都・都鄙・上下京・旧都・遷都・平安城・洛陽・洛外、か様の類今一有、以上四也。折を嫌。九重城あらば九重有べからず、都・面を嫌。京・都・洛の三字は、辟ニ云かへても都四の内也。
一都鳥　冬也、水邊也。都　面を嫌。
一三ヶ月の出る　非ニ夜分ニ、入るは夜分也。三か月、日を付ても不レ苦、或説 季をかへて二有べし。
一峯　只二、名所ニ二、或説ニ三也。内一は名所也。忠峯など人の名あるは非ニ山類ニ故。峯　面斗を嫌。
一汀(みぎは)　只一、名所ニ一、汀　水二句也。或説ニ二、名所ニ一。
一湊(みなと)　汀同前。或説ニ二、名所ニ一有べし。湊ニ水不レ嫌。
一水ニみくさ・みかくれ・みしぶ　など三句也。
一水ニみなぎる　二句也。水の字三句去、水けぶりニそびき物二句也。水鳥、水の字あれ共躰用の外也。
一砌　居所ニ二句也。或説ニ一、渋の砌又有べし、非ニ居所ニ。
一道ニ夢路・戀路　など二句也。或説ニ道の字三句去也。道ニ玉ぼこ・ちまた・つゞらをり、何れも二句也。
一霙(みぞれ)ニ雪　七句嫌。雨は三句也。或説ニ雨は五句嫌、露・霜等のかろきふり物は三句也
一みぞれ酒　ふり物ニ二句也、季をもつ

故也。
一蓑ニ笠　二句嫌。或説ニ雨ニ笠付ても不レ苦、日にも、人ニ忍ぶニもきる物也。蓑は打こしを嫌。降物ニあらぬ雨ニは付ても不レ苦。又、みのむし雜也。みのニ折を嫌。
一見るニこゝろみ・かたみ・かへりみ　いづれも二句也。目も二句嫌。遠み・さむみなども二句也。
一みなみ　二、なんといひかへて又二。
一身にしむ　二、人倫也。或説ニ云かへて三也。
一みじか夜　二。明やすき夜一、夏の夜一。但、夏に夜をむすびて又一有べし。
一耳　耳かきなどゝ云替て又も有べき歟。絹のみゝ・針のみゝ・獸の耳は又可レ有。耳ニ頭、二句嫌。
一見めニ目　七句嫌。
一見めのよしあし　戀也。
一御階　非ニ居所ニ。きざはし、折を替て有べし。但、句躰ニよるべし。讃ニよみて又一有べし。
一みくまの・三吉野　なとニ御の字、二句嫌。
一みどりニ緑(緑カ)の字　七句嫌。或説ニみどりニみどり子、付てもくるしからず。
一身はふりてと云詞　非ニ述懷ニ。
一三十・四十　年の字ニ二句也。
一峯ニ高根　七句嫌。尾上・遠山にも又同じ。或説　高根・ふじの根等は面を嫌也。

し

一白木綿・しめ縄　神祇也。
一白の字　八也。面ニ一づゝ也。はくと云替て又四。しろきとはくとの間、七句嫌、はく四の間は折を嫌。連哥ニはしろ・しらの替り有共、はいかいニは其差別なし。或説ニしろ・しら・はく、出がらニ以上九也。しろと〳〵・しらと〳〵は面を嫌。しろ・しら・はくと云替ては七句去也　李白・白樂天の類は、はくニも三句也。九の外也。
一嶋　只二、名所二。或説ニ三、内一は名所也　水邊也、山類也　川嶋・池の中嶋等の小き嶋は、水邊斗にて山類ニ非ず。淡路・ゑぞ等の國の名は大ニても山類・水邊ニ非ず。又、國名ならねど浮嶋が原・蓬が嶋・寶の嶋、水邊・山類ニ非ず。此類又おほし。
一數嶋の道　哥　折を嫌。嶋と云字ニも同じ。
一淸水　雜也。むすぶ・せく夏也。納涼ニ二句嫌。或説ニ淸き水、面を嫌。淸きの字、付句斗をきらふ。淸水寺は三句嫌、淸と〳〵も三句去也。
一霜月　ふり物ニ二句也。霜のきゆるは冬也。
一塩　二、燒塩二。折を替て有べし。うしほ・塩魚の類、塩山升などはうらニ可レ有。塩がま・もしほの煙・塩くむの類、皆やく塩也。
一塩ニ目もとのしほ・しほらし・月の出しほ共ニ七句嫌。或説ニ目もとのしほ・しほらし・しほあひなどゝ云詞、面を嫌。しほたるゝなとは二句也。
一塩山升　水邊うへ物ニ非ず。魚又同じ。
一塩屋　居所ニ二句也　塩やき人倫也。
一塩木こる山路　山類・水邊共ニ嫌。
一しのぶ摺　非ニ植物ニ、戀のしのぶと

云字　折を嫌。
一しのぶ　四也。忍草、秋也。うらニ有。
或說ニ忍五也。
一しのび車　戀也 装束せぬくるまの事也。しのぶ・うらみ侘と云詞、水邊ニ打こしを嫌、名所ニ三句也。或說ニ名所・水邊とも二句也。
一しをり　非ニ植物ニ、道ニ二句嫌也。しをりと云は道のしるべニ草木の枝を折かけて置事也。
一柴　一、柴垣一、柴人一、柴橋一。或說ニ色ゝニ替て三也。椎柴うへ物也・秋也。
椎と斗も秋也。
一柴とる・柴かる　非ニ植物ニ。柴の庵・柴の戸、非ニ述懐ニ
一茂るニしげき　植物のうへならば七句嫌べし。
一敷　四也。莚敷・かたしくの類也。戀しき・侘しきなどの敷の字二句嫌。或說ニかたしく・これにしかん・しく物もなしなどの詞は二有べし。外の敷の字は三句去也。
一知ニしるべ・しるし　いづれも二句也。
知の字は字去也。
一時分　朝と夕、替ては二句也。朝と〳〵の時分は三句也。
一し留り　はたらきたるしの間は二句嫌。むつまじ・はづかし・おらましなどのはたらかぬし文字はきらはず。
一過去のし と〳〵　折合打こしを嫌。
現在のし同事也。過去と云は、きゝし・いひし・過しの類也。むかふしとは、遠し・近し・宵しの類也。現在のしにて、哉共・に共・て共不ㇾ留。
一雫ニしたゞり　面を嫌。降物・松苔・山岩、か様の物むすばでは、只雫とばかりはならざる也。
一時雨　二、似物の時雨、又可ㇾ有。時雨ニ時の字付ても不ㇾ苦。
一菖蒲刀・菖蒲皮　うへ物 水邊共ニ不ㇾ嫌。か様の物も季をもたせては、うへ物ニ二句嫌べし。
一精進　神祇也。但、句躰ニよるべし。
一燭臺ニ火　七句嫌。
一将棊ニ碁　面を嫌。
一尺八ニ笛　面を嫌。
一上戶　非ニ人倫ニ、戶ニ二句嫌。
一下の字　四也。げと云かへて又四。或說ニしたと云ヶ四、しもとか、げとか云かへて又一、以上五也。下野は別ニ字あれば五の外也。下ニ三句嫌
一下紐　衣類也、戀也、夜分也。或說ニ下の帶ニ折を嫌、紐の字三有べし。衣類ニあらざる紐も三の內也。
一下帶　衣類ニ非ず、戀也。
一下もえ　うへ物ニ二句也
一下ニ下戶・下手　七句嫌。
一珠數　尺敎也。
一白拍子　人倫也、戀也。遊女ニ折を嫌べし。
一尻をつめる・しなせぶり　戀也。
一婢ニ傾城　付ても不ㇾ苦。
一臣下・衆徒・衆生　人倫ニあらず。
一使者・してほしきせ・賤・下部　何も人倫也。
一しうとニ姑　折を嫌。よめは二句也。
おやニ子の嫌やう同前也。
一出家　尺敎也、非ニ人倫ニ。出家おち、戀也。
一して留り　八也。或說ニ面をかへて五也

一しのゝめニ朝　一句嫌。日の字ニも二句也。

一しらが　述懐也。しらが糸、又有べし。

一鹿　二、かのこ一、すがる一。しかなくはうらニ有べし。或説ニ四也。かせぎ、鹿の異名也

一鹿の園（佛の法を說給ふ所くやをんの事也）　雑也。或説ニ鹿の園とすれば、句躰ニより秋ニも生類ニも成也。鹿四の内也。

一師匠・主・從者（じうしや）　人倫也。者・師・衆・士・匠、此文字の付たるは大方人倫也。主從とつゞきては人倫のうはさニなる也

一芍藥　一、ゑびす草と又一有べし。芍藥の異名也。

ゑ

一恵美酒　神祇也。水邊也。或説ニ四の宮の御神の事也。福神なれば神祇なれ共面八句の内ニも不レ苦。夷狄のゑびすとは各別の事也。

一繪馬　生類ニあらず、馬面を嫌也。

一繪　一、繪にかく草木、うへ物あらず。花や紅葉などの様成ものにて、季をもたせたらばうへ物ニ二句也。生類も同前也。

一衣紋（ゑもん）つくろふ　衣類也。或説ニ衛門・尉官なれば非ニ人倫ニ。

一穢多（ゑた）　人倫也。

一醉　一、酒のゑひ一、舟ニゑふ一、魚ニゑふ一有べし、何も此間折を嫌。

一ゑび　海老の字・老の字共ニ不レ嫌。

一ゑのみ　秋也。大方木の實は秋也。

ひ

一ひたち帯　神祇也、戀也。ひもろぎ、神祇也。神供の事也。

一東　二、關東・坂東といひかへて又二。

一仙（ひと）の國　人の字ニ二句嫌。或説人倫ニあらず。

一姫　只一、さよ姫・はし姫などゝ名をさして一、山姫・姫瓜などの類又二、いづれも折を替て有べし。或説ニ二。人倫ニあらざる姫、又一、以上三也。

一ひとり　人倫也。只一、戀ニ一、月ニ一、松ニ一、花ひとりなどゝ云は非ニ人倫ニ。獨と斗よむ獨の字には字去也。

一ひとり・ひとへ物　などニ一文字、二句嫌。等（ひとし）と同。

一美女の名　戀也、但、句躰ニよるべし。

一ひよくのかたらひ　戀也。

一ひじりの代　非ニ人倫ニ、只聖と斗は人倫也。

一百姓　人倫ニあらず。

一百の字　二也。

一貧者（ひんしや）・びんぼう　共ニ述懐也。

一一夏こもる　只數也。或説ニ夏と斗は只數ニあらず。

一一村・一時雨　などの一文字八也。或説ニ一村、居所の心過て竹の一村などゝ有べし。又、いつそんと聲ニて今一有べし。

一日次の日ニいくか　二句嫌。日次の日と云は暮ニ日、さむき日・くもる日などの事也。日ニひる、不レ嫌。

一日ニきのふ・けふ・いくか　付ても不レ苦。或説ニ一昨日・今日などゝ聲ニよみては日ニ三句嫌。

一日ニ月次の月　打こしを嫌。年月・長月など月なみの月也。月影・月の色などは三句嫌。

一日待　神祇也、夜分也。

一日のさすニ門をさす・塩さす・舟さす

皆二句也。
一日ぐらし　只一、日にも晩にも不レ嫌。但、つゞけ様によるべし。或説に日ぐらしと立入て今一、又、蟪蛄と聲にて一、以上三也。文字も、なりも、聲も別の物なれ共、連哥のごとく蟬に折を嫌べし、蟬と同類也。
一ひかり　月・日・電・雪・目・紅粉・神・佛、かやうに色々替りて面をかへて八斗有べし。或説に月・星に一、花・雪に一、光陰に一、又、くはうと聲にて一、以上三也。光と斗は日の事に成也。天象に二句也。
一人の名　唐・やまとの草紙にのせざるは云出すべからず。謡・舞に作り入たる程の人は用べし。道々の名を得たる人なり共、近代の家・同名・名字不レ可レ云。
一屛風に風　二句嫌。
一火　八也。狐・螢の火は七句嫌。或説に五也。内一は聲にて有べし。狐・螢火は五の外也。火に灯七句去也。
一火に薪・柴煙　二句嫌。火燒屋・神祇也。
一久かたに空・中天・久の字・方の字　皆二句嫌。或説に連哥に二句の物也。久しきには折を嫌べき歟。久と云は尤字也。

はるか・かすか・始終等の文字、みた連哥に一座二句のもの也。
一氷室にうすらひ・たるひ　折を嫌、雪は七句嫌。或説に夏也、水邊也。氷・つらゝ、ひようと聲によみても七句嫌、うすらひ・たるひは面を嫌、句躰をかへ折をかへ二有べし。氷様には折を嫌也。
一ひくと引　木・弓・琴・牛・茶、如レ此替りたる間二句也。
一ひやゝか　二、或説に初秋也。ひゆる・ひやゝ、皆同字也。
一ひえ飯・ひや酒　雑也。
一ひさき　秋也。只二。
一ひだ　秋也。うへ物に二句也。只二。引の字・板の字に三句嫌。たること替て秋の田ならでひだと云事なし。
一火花をちらす　など云とは正花也。
一雛の遊び　生類に不レ嫌。或説にひな一、ひいな一也。鳥のひなも同字也。是も二也。ひなの都・ひなの旅は各別也。是又二有べし。
一ひれふる　衣類也。
一檜原　只一、檜垣又有べし。檜の字は二の外なるべし。
一一葉舟　旅也。或説に旅に非ず。一葉の身、旅也、舟の事也。

(も)

一森　只二、名所に二。或説に只二成共、名所にたり共以上三也。
一守の字　四也。
一紅葉　一、兒の紅葉一、梅に一、櫻に一。もみぢの橋は外也、天の川の事也。是はうへ物に非ず。紅葉に折を嫌、楓・木の葉は面を嫌、野山の色は七句嫌。
一もみぢ・色々の葉　二句嫌、松の色・雪の色は不レ嫌。或説に色の替らぬ・あかき・心なき色は紅葉に少も不レ嫌、紅葉にとば不嫌、
一鵙の立ぐき　うへ物也、秋也。茂るとしては夏也、かるゝは冬也。或説にもず二也。
一藻にすむ虫　雑也、水鳥也(邊カ)
一最上川にのぼると云詞　二句也。
一もくづ　うへ物にあらず。或説にうへ物に二句也。

一文字あまりの句作り　二句嫌也。

一物思ひ　物の字・思の字共ニ二句嫌、襟と書也。物を思ふと、をもじ入ては三句也。

一物の氣・もゝをつく　戀の詞也。但、可レ寄ニ句躰ニ。

一物ぐるひ　人倫也。物にくるふは人倫ニあらず。

一目代　人倫ニ非ず。

一百敷　一、百の字四也。

一門跡　尺教也。人倫ニ不レ嫌。

一ものいひニ詞　二句嫌。

一もしほ草　うへ物也。手跡の事云なしたらばうへ物ニ非ず、かくと云まくら詞也。

一百千鳥ニうぐひす　折を嫌。

一もよほす　事かはりては四も有べし。

一もなし　上の句・下の句の留りニ各一づゝ也。或說ニ上下の句ニかへて三也。

一ものを　などゝいふとまり、二ばかり有べし。

一ものゝふ　一、武家・武者・武邊等の內、又一也。

一もろこし　過て、から國と又有べし。此外に唐・震旦・漢朝などゝ聲ニて今一有べし。國ならぬからの字は折ニ一づゝ有べし、から國ニ面を嫌。

㋝

一關　只二、名所ニ二。人目の關はうらニ有べし。或說ニ關四の內、くはんと聲ニよみて有べし。せきとばかりは居所、旅ニあらず。

一關ニ井もき　七句也。せくと云詞一也。或說ニ水をせく・氣をせく等の內ニ二也。井せきも二ノ內也。

一關屋　戸、居所ニ二句也。關守・船頭・施主・人倫也。

一瀨　句作かへて四也。

一誓文の類　戀也。

一仙人　非ニ人倫ニ、非ニ山類ニ、山の字ニ二句、人の字　三句也。

一勢ぞろえ・大勢　ともニ人倫ニあらず。

一雪山　天竺の名所也、雜也、山類也。雪山の童子などゝいはゞ非ニ山類ニ。

一蟬　只一、日ぐらしニ折を嫌。或說ニ二也。內一は、うつせみとすべし。

一せんと云詞ニすると云詞の間　二句也。

㋜

一諏訪祭　雜也。年中ニ七十五度有ゆへ也。

一住吉の神　名所也、水邊也。或說ニ水邊・名所ニあらず。名神非ニ名所ニと云事新式の正義也。

一冷し　二、涼し、夏ニ二、秋ニ二。

一簾　二、みす一、釣簾一。或說ニ一釣簾・玉すだれ・みす、又、簾中などの內ニ一、以上二也。

一洲と砂　七句嫌、或說ニ洲二、名所ニ一。

一酢　只一。作らぬす、又一有べし。

一住所　非ニ居所ニ。

一栖　二、すま居二、居所ニ二句也。栖ニ住の字二句、家ニは三句、栖と住居とは面を嫌べし。

一墨染・墨筆・墨繪・すみつぼ　か樣ニ替りては四も有べし。眉ずみ過て翠黛の山などゝ今一有べし。墨ニ面を嫌。

一墨染の袖　述懷也。

一すゞかけ　衣類也。
一すがたみ　と云詞同鏡、戀也。
一すぐるゝニまさる　二句嫌也。
一すその末の字・もすそ　二句也。或説下野と書故ニ下の字ニ三句也。すそと〳〵は折を嫌べし。非山類ニ。
一鮨　生類・水邊共ニ不嫌。ふなずしなどゝいはゞ生類ニ打こし可嫌。
一李ニすくも虫　折を嫌。
一末の松　名所也、うへ物也、山類也。奥州ニ有。
一杉　一、心の杉又有べし。或説ニ杉の箱・杉重・あや杉等の內ニ一、以上三也。杉の窓、うへ物ニあらず。杉村、居所ニきらはす。
一菅　非水邊ニ。或説ニ只一。すげ笠・菅みの・すがこも・菅莚等の內ニ一、此外ニ菅原氏・菅家などゝ今一、以上三也。
一捨る世ニ桑門（よすて人）　折を嫌。
一捨の字　三句去也。身を捨ニ世を捨るは面を嫌。
一涼しきニ冷じき　二句、冷じきニさむき二句也。身にしむニひやゝか七句嫌。

一薄　只一、尾花一、すぐろ、ほやなどゝ云に二も有べし。
一炭　一、すみがま一、だんと聲ニよみて一、以上三也。炭やき人倫也。非山類ニ。冬也。炭をやく・すみがま山類也。炭と斗は非山類ニ。
一巣　諸鳥のす、春也。或説ニ水鳥の巣、夏也。鶴・鷹・くも・はちのすは雜也。色ゝニ替て三也。
一鈴鹿の關・すゞか路　非山類ニかもじニは字去也。鈴の字はけやけき文字なれば面を嫌べし。
一鈴虫　二、秋也。
一硯　一、名所の硯の海又有べし。
一相撲　秋也。ことり使と云事、七月下旬ニ內裏ニ有也
一末つむ花　夏也。べにの花也。人の名をいふ句ならば雜也　うへ物非ず。
一すばなし　すはだ・すがみこ等のす文字面ニ一づゝ有べし。素の字かくと云説あり。

○人倫ニなる分

醫師・鑄物師　かやうニ師の字付たるは大方人倫也・六尺・花の主・伯樂・番匠・ばくちうち・ばんた・はとのかひ・年寄・盜賊・夜盜・山賊・我・童・草刈・かこ（舟人也）・鍛冶（かぢやは非人倫）・鐘扣・笠張・鷹匠・太夫・伶人・ごぜ・兵・亭主・お內儀・身に入（兒・はだ・手足・腰、いづれも人倫不嫌）・月の主・月花の友・尼・兒・あね・乳・穢多・民・關守・船頭・施主・吉野の國栖・僧・奏者・郎等・馬子・馬追・老翁・おねたゝき・武士・やもめ・ひとり・手ひき・算おき・侍・猿まはし・猿樂・座頭・ぼしきせ・使者・能のして・下部・賤・獅子舞・雜職。

○非ニ人倫ニ分

六親・人形・をし・つんぼ・大工・盲目・代官・月を友・花を友・花を主・百姓・酒ニ醉（酒のよひは人倫也）・ぬしや（かやうにやもじ入ては何も非ニ人倫ニ）・目代・目付・大勢・伽・伴ひ・留主居・てき・かたき・老若・俗・思ふどち・公家・公卿・歩・けんぞく・奉行・ふたり・雜兵・臣下・衆徒・衆生。

○夜分の詞

日待・神樂・明がた・よひ・ふくる・ふくろふ・七夕・稲妻・闇・あけぼの・横雲・曉・くらき・あけぐれ・露ふけて・いさり火・うづみ火・花火・床・らうそく・灯・まどろむ・有明殘る・又ね・ねや・枕・ふとん・ふすま・ふす・

をくる・ぬる・きぬ〲・むつど・下紐・うたゝね・いびき・にだ・ともし・かやり火・狐・むさゝび・かざしの綿・別の鳥・苔莚・あかむすぶ・かたしく・庭鳥・草莚・ほたる・くれはてゝ・山かつら・とのゐもる・かうもり・くゐな・ひも・蚊帳・うきね・かね　そのまゝしろゝ夜分は今こゝは書付るにおよばず。

○戀の詞　祈る神・二世の契・ひよくの中・夫婦・目をひく・連理の中・ちぎり・下紐・だきあふ・ね物語・帶のいはひ・ころしぶり・むつど・占・夜ばひ・尻をつめる・長枕・袖をひく・偕老同穴・さゝやく・ふりのよき・瓜をはなす・見めのよしあし・あだぼれ・ふるき衾・しなせぶり・情ぶり・下帶・錦字詩・云なづけ・たき物・額の取やり・子もち・ゆびを切・手をしむる・くどき事・らうさい・夢・胸をやく・しんき・けはふ・すがたみ・同鏡・古枕・むすぶの神・子をはらむ・めもとのしほ・けいせい・誓言・物の氣・中戀・いたづら立る・愛染祈る・うかれめ・そひね・もゝつく・かひな引・はなそげ・柳ごし・中立・仲人・よめ入・むこ入・待上臈・ロべに・爪べに・むこれ・長かもじ・袖の香・たしなみ・けしやう・辻占・匂ひ袋・匂ひの玉・だてする・ロすふ・戀風・戀やせ・ほるゝ・妹・妻・よめ・戀やみ・千話・れんぼ・門立・辻立・目まぜ・あいづ・約束・雪の肌・すそ引・百のこび・尻めづかひ・肌の善惡・つはりやみ・戀草・月の隙・めぐるひ・女がたき・主有人・思人・男狂ひ・きぬ〲・老女房・枕香炉・文ね・のろふ・若後家・うす中・中ど・ふり心・二心・戀の重荷・手かけ・二度びつくり・うはなり・怨念・あさはなだ・莚しき・つき物・りべつ・かこつけ・りんき・さられ・白拍子・垣間見・あだじ心・いもりのしるし・付ざしの盃・出家落・坊主落シ・丸びたい・新枕・枕をかはす・脇あけ・若衆・ふり袖・おとし文・あふぎの別れ・女夫いさかひ・落あふ・なびく・面影したふ・玉章・けしやう文・亂れがみ・そひぶし・千束の文・空燒・まろびあひ・男にくみ・なまめく・うらみ・つらき・僞り・待宵の君・子をおろす・むねの火・やもめ住・をさなゝじみ・云さくる・子持くさき・なげのなさけ・名に立・枕繪・よそめ・あだ人・ふかさるゝ・そねみ・部や住・かた思ひ・曉の別・たのむ使・いとまの文・湯女・人めの關・かぶき太夫・ゆぐ・眉墨・緣結ぶ・ついぢを忍ぶ・さねこん・美女の名　何れも句作によるべし

○居所躰の分　門・脊戸・窓・戸・障子・蔀・格子・屋・玄關・家・屋ね・庵・宅・里・屋形・城・宿・棟・甍・瓦・軒・垣・壁・床・築地・亭・二階・書院・棚・廣間・欄干・樓・天井・座敷・臺所・隣・風呂・湯殿・廊下・厠

○居所用の分　庭・外面・簾・坪の內・疊・廬路・垂布・暖簾・

○山類躰の分　山・峯・嶽・岡・洞・岨・坂・谷・嶋・岫・尾上・高根・ふもと。

○山類用の分　瀧・杣木・梯・炭竈。

○山類の分　山梨の類・山鳥の類・山姫・山ニある關・相坂の關・山莊・足柄の關・山人・白川の關・浮嶋が原・久米路橋・小塩・瀧川・葛城の岩橋・富士・淺間・九折・小嶋・松嶋・畑・泊瀬・泊瀬の鐘・泊瀬寺。

○非ニ山類ニ分　鷲峯・雪山・山賤・山

鳥・猿・嶋國・山科の宮・富士川・淡路嶋・立田川・薪・木曾路・川嶋・宇治の川嶋・鈴鹿川・三輪が崎・吉野・吉野の奥・小野・小野の奥・岩橋・杣人・小塩の野べ・炭焼・立山の奥・小初瀬・三嶋伊豆・初瀬路・瀧つ川・高砂の松・爪木・氷室・すそ野。

○水邊躰の分　海・浦・濱・堤・汐・湊・渚・嶋・沖・岸・沼・汀・川・淵・池・瀬・洲・瀧・泉・井・溝・津・崎。

○水邊用の分　水・清水・淡・閼伽・塩・氷室・波・うしほ・氷。

○水邊躰用の分　浮木・塩屋・舟・流・蛙・塩焼・氷魚・魚・筏・網・釣瓶・下樋・釣垂・筧・浮桶・蛸壺・海人・萍の類・和布の類・

○水邊の類　住吉神・浦にある關・はし姫・しがの松・三輪が崎・須磨・難波津・清見寺・松が崎・明石・三嶋攝津・松嶋・小嶋・御秡・つらゝ・田井・月の出しほ。

○非二水邊一分　難波寺・しが・住吉・大井・すまの上野・明石の岡・松浦姫・粟津が原・天の浮橋・涙川・三瀬川・高津の宮・夢の浮橋・白川の關・軒の玉水・月の氷・布さらす・室の八島・詞の海・田の筧・苫屋・苗代・横川・小田の梯・硯水・手水・霞のうみ・鴫・菅・佐野の渡。

○句數の事　春秋は三句より五句迄もつゞくべし。夏冬・神祇・釋教・旅・述懐・山類・水邊・居所・夜分等は一句ても不レ苦、三句迄もつゞくべし。

一戀は二句より五句までもつゞくべし。

一人倫・衣類・聳物・降物・生類・國の名・名所・食物・藝能・植物・時分等は一句にても二句にてもよし。

○可レ隔二二句一物　一月・日・星、如此天象の間也。

一降物とふり物の間・雨・露・霜・雪・霰などの類也。

一聳物とそびき物の間・かすみ・霧・雲の類也。

一名所と名所・國の名と國の名。

一人倫と人倫・人の名と人の名。

一木と草・草木と竹。

一魚と鳥・虫と獸。

○可レ隔二三句一物　一同字・日と日・風と風・雲と雲・野と野・山と山両峯・ふもとなど皆山類也・波と〱・水と〱・浦と〱、水邊三句去也。木と〱・草と〱・鳥と〱・獸と〱・道と〱・夜と〱夜分三句去也・戀の句と〱・旅の句と〱・居所と〱・虫と〱・暮と〱・述懐と〱・神祇と〱・尺教と〱・衣類と〱・原と〱。

○可レ隔二五句一物　一月・田・煙・季・夢・竹・枕・衣・舟・涙・松松何何松と付ては三句也。何も同前也。五句去は三句也。三句のものは二句去也。

○面八句の事　一發句・連哥におなじ。

一脇同前也。てにはの字留りを嫌也。發句の心をよくうけ、時節たがはず、はなれぬ様にする也。

一第三、て留りか、はね字なるべし。に留り・もなし留りはまれ成事也。脇にしたしからぬ様にすべし。是迄はつとさし出たる事も不レ苦。　四句めよりはかろ〱敷やうにせらるべし。

古人の名・神祇・尺教・戀・無常・述懐・同字・哀傷・宮殿の名。此分嫌也。親子のさた。述懐に用ひざる故八句の内にもきらはず。

○**發句の切字**　一哉・けり・たり・めり・や・ぞ・し・じ・き・ぬ・つ・む・か・なぞ・いさ・たに・いづく・いづこ・いづれ・いかで・など・いく・さぞ・こそ・たれ・を・もなし・もがた・はなし・下知（いでよ・何せゝまで　ふけ・みよ。こぼれ・ちらせ・かすめ・め・月ニなけ・ふくな）以上連哥のごとく成べき歟。此外大まはし・三段切・二字切などゝ云事あれ共、習有て只はせぬ事也。ぬもふのぬはきれず、畢ぬはきる也。しも過去はきれず、現在・未來のしは切字也。

○**賦物の事**　一定りたる文字もあらざれば、五ケなどゝいふ事もなし。發句ニしたがひ何にても興ある字を取也。たとへば山櫻と云發句ニ犬の字取べからず。犬は山にも渡る故也、蜂か魚かにて可レ然。餘は是ニなぞらふ。一字露顯・二字返音、以下百韻俳諧取べからず。

○**和漢の事**　一大概可レ用ニ俳諧の法を一。

一和漢とも五句を以て限とす、但、漢の對ニ至て六句ニ可レ及事。一景物・草木等員數、和漢ニ通用すべし。百韻ニ一の物は和漢共ニ出次第たるべし。但、和の方よりはやく出たらば漢ニ又異名用る事有べし。二句の物は一づゝ也。一入韻の字は連哥の法度ニかゝはらず、いか様の事をもすべし。但、万葉書分字等不レ可レ用レ之。

○**四季の詞**

正月（青陽・陽春・孟春・改年・むつ月・いはひ月・太郎月）　立春・年越て・若水・門の松・かゞみ餅・今年・齒固・若夷・四方拜・院の拜禮・朝賀・朝拜・年德・書初（吉書）・年男・大ぶく・雜煮・謠初・藏びらき・かけ鯛・にし肴・數の子・ほだはら・ひらきまめ・しだ・ゆづりは・とし玉・玉ぶりぶり・羽子板・弓始の類・松ばやし・子日・初とら・けしやう文・さほ姫・水ぬるむ・若餅・卯杖・くすり子・千壽万歲・松の花（若綠・綠立）・梅（同前）・ほうびき・殘雪（雪しろ・雪なだれ・雪間）・氷流るゝ・霞（三月ニわたる）・霞の洞・春の宮・七草・白馬節會・菜つみ・くゝだち・鶯（三月ニわたる）・春鶯囀・落梅の曲・喜春樂・双調・柳（三月ニわたる）・うらゝ・長閑（三月ニわたる）・常陸帶の祭（十日）・踏哥の節會（十四日・十六日）・かざしの綿・左義長・厄神參（十九日・廿日）・だんご・木の目・具足の餅・あがた召・若草・下萠・椿の花・角ぐむ芦・東風（三月ニわたる）・おぼろ月（三月ニわたる）・やけ野・鳴鳥狩・雉子鳴・紅梅・白尾の鷹・雲雀・朝鷹（すゝこきす・山かへり）・鳥のさへづり・猫の妻戀・法然御忌（廿五日）・つくづくし・杉菜・山升の皮・あたゝか・いと遊・さえかへる、餘寒・根白草（せりの事也）・きゝすへ鳥。

二月（きさらぎ。梅見月。如月。令月　陽中）　中和節（一日）・田を返す・畑うつ・苗代・蛙・田にし・初午・歸鴈・つばめ・鳥の巢・佛の別・春日祭（上申）・大原祭（上卯）・石塔（十六日　塵頭の佛事）・百千鳥・よぶこ鳥・さくら・櫻貝（付鯛）・ぼけ・海棠・こてふ・あぶ・若紫・たんぽゝ・あざみ・くはゐ・いたどり・ばう風・うど・ところ・蕗のたう・つばな・菜大根の花・すぐろの薄・ちさ・すみれ・つぎ木・鱠たます・もづく・はすの根・薪の能・遺教經（九日より十五日迄也）（野ニあり。）

三月（彌生・花見月・桃月・季春）　巳の日秡（上巳共云、三日の節句）・曲水の宴・住吉塩干・鷄合・よもぎ餅・ひいな遊び・桃付（桃の酒）・遲き日・永日・よめがはぎ・花・やすらひ花（十日）・梨花・こぶし・はふこ

草・さがの念佛・みぶの念佛・千本念佛・釋迦の身拭十九日・御影供廿一日・天台禮拜講・わかめ・青のり・若鮎・のぼり簗・茶つみ・藤つぼ・遲櫻・やまぶき・つゝじ・春雨三月ニわたる・わらび・木蓮花・夏をまつ。

四月 卯月・卯の花月・孟夏・中呂・花殘月・清和　衣がへ一日・臼がさね・袷・綿ぬき・ほとゝぎす・新茶・風炉の茶・木の若葉・卯の花・杜若・いちはつ・ぼたん廿日草・ふかみ草・しやが・岩なし・芍藥・いちご・けしの花・ふき・若楓・夏木立・茂る草木・かものみあれ・れたま・白鳥花・石楠花・たで・玉巻葛・むぎ・あふひ・榊取同らたふ・神祭・立田四日・廣瀨四日・稲荷上卯・八瀨上ノ辰・山王申・多賀上巳・山科上巳・一乘寺五日・梅宮上酉・大原申・平野申・松尾　・吉田中子・嵯峨亥・當麻十四日・淸水地主九日・千だんご十六日・日光祭十七日。

五月 さつき・橘月・仲夏　足揃一日かも・競馬五日・五月雨・棟花・梅の雨・菖蒲同刀・粽・けづりかけの甲・藥玉・端午の節・印地・深草祭五日・ひとへ物・かたびら・栗花・たち花・柘榴の花・今宮祭九日今は十五日・室明神祭十三日・若竹・寄梅・早苗・さをとめ・蚊蚊帳・ほたる・鮎・鵜川・河がり・簗・水鷄・水鳥の巣・鶉の巣・つばめの子・かいこのまゆ・毛をかふる鷹・鹿の子・獸がり・ねらひがり・照射・ほぐし・あふち・青山升・くちなしの花・木の下やみ・枇杷・てまり・むばらの花・栗つむ花・百合・石菖・海松・和布刈・まこも刈・あぢさへ・菱・しもつけ・てつせん花・うづ・水草の花・黄鐘調三月ニわたる・住吉御田植廿八日。

六月 みな月・なるかみ月・林鐘・風ま月　氷室・氷餅祝ふ・とこなつ・なでしこ・石竹・瓜・なすび・さゝげ・土用ぼし・ひるのね・祇園會・熱田祭・竹生嶋祭・いつく嶋祭・くらま竹切廿日・富士まふで・橋立祭廿五日・扇・うちは・淸水むすぶ・せみ・涼露をむすびても・炎天・暑き日・泉・あせ・くわくらん・かうじゆ・夕立・きりむぎ・蓮・むぎの粉・ところてん・ほしいひ・風かほる・雲の峯・夕がほ・たかむしろ・すもゝ・忘草の花・蠅・やまもゝ・一夜酒・來ぬ秋・秋ちかき・蚤・御手洗だんご・御祓・水無月の能。

七月 文月・七夕月・をみなへし月・涼月・孟秋・夷則　立秋・一葉ちる桐也・柳ちる・殘暑・扇をく・秋涼し・攝待・霧三月ニわたる・露上同・七夕・願の糸・山伏の峰入・いなづま・桐・日ぐらし・粟ひえ・生見玉・さし鯖・蓮の飯・聖靈祭・花火・まはり灯籠・あげ灯籠・せがき・送火・をどり・うら盆・地藏祭廿四日・身にしむ・さび鮎・ひやゝか・ひゆる・くづれ簗・立田姫三月一わたる・萩・荻・ほやつくる・相撲・鹿三月ニわたる・鳩吹・薄三月一わたる・仙翁花・かるかや・しのぶ草・女郎花・ばせを・虫三月一わたる・秋風樂・千秋樂・律の調・平調三月ニわたる・桔梗・小車の花・草花。

八月 葉月・秋風月・月見月・南呂　たのむの祝ひ八朔・櫻の紅葉・初嵐・すさまじ・衣うつきぬた・司めし十一日・敦賀市十日・月望月・芋名月・初塩・月草露草也・放生會十五日・駒むかへ・鷹・いも同ずいき・花野・りんだう・蘭ふぢばかま・鷄頭花・朝がほ・むくげ・おばな・紫の花・思草・つた・ぶだう・野山の色・名木の散・野分・宇治の花園・小鷹・初鳥がり・うづら・色鳥・鳴・鵙・とや出の鷹・

長き夜・新酒・小鳥わたる・田をもる・御靈祭十八日・秋の色三月ニわたる・木綿とる。

九月 長月 菊月 ね覺月・木末の秋・季秋　北野祭四日・貴布禰九日・くらま九日・だいご九日・菊・重陽宴・あたゝめ酒・住吉の市十三日・青まめ・岩倉祭十五日・流廿三日・太秦廿三日・柿・くり・御香の宮九日・夜さむ・はだ寒・露寒・漸寒・ゑのみ・柑類・万木の實・落葉の色・柞・柏ちる・椎・楸・紅葉かつちる・芦の穂・茸がり・刈田・ひつぢ・紅葉餅・露時雨・鮭・江鮭・楓・うらがれ・まめ名月・今年米・住吉の神遊廿日。

十月 神な月・時雨月・小春・初冬・陽月　神の留主・時雨・霜・寒つめたき・達磨忌五日・法花會興福寺十日・金比羅會十一日・十夜念佛十五日より十五日まで・日蓮御影講十三日・東福寺開山忌十六日・ゑびす講廿日・壺の口切・いろり三月ニわたる・木の葉・朽葉・紅葉ちる・名草の枯・木がらし・枯野の露・ゐのこ・冬がまへ・たんぽ三月ニわたる・頭巾三月ニわたる・くき菜・菜飯・鷹がり・千鳥三月ニわたる・かへり花・納豆汁・麦まく。

十一月 霜月 神樂月・雪見月 黄鐘　暦奏・冬至・雪・ふぶき・霰・みぞれ・御火焼・鉢扣の行・豐明節會・ふすま・ふとん・日蔭の糸・小忌衣・盤渉調・紙子・火桶・うづみ火・髪をき・北祭酉・子祭・寒菊・びはの花・茶の花・山茶花・水仙花・綿綿子・露の氷・氷つららひ・つらゝ・氷魚・いさゞ・ふしづけ・なまこ・鱈・水鳥・鴛・大師講廿四日・あじろ・あかゞり・炭がま・鰤・親鸞忌廿八日・空也忌十三日・鯨つく・藥喰。

十二月 師走・春待月・臘月・極月・大呂・除月　乙子の朔日・神樂・あづま遊び・寒作の酒・ほだ焼・庭火・すゝはき・年わすれ・春ちかき・行年・ながるゝ年・年内の春・節季候・もちつき・佛名十九日・柊さす門・節分除夜・寶船敷・寒ごり・鷹つかふ・荷前の使十三日・歳暮・和布刈の神事。

○**四季の詞**　神事・梅の宮・鎮守の神・鹿野苑・楊柳觀音・妙法蓮花・佛事の花・雪山童子・いなびかり・初風・雷初雷ハ春也・柳が浦・柳の水・柞の森・藤原の都・櫻川・菜つみ川・鳰鳥かいつぶり・かし鳥・かげろふ・かもめ・鹿を指て馬と云・鹿の角・鹿の毛の筆・雲雀毛の馬・月毛の駒・もに住虫・みの虫・秋津・ひな遊び・黒牡丹牛ノ事也・花紅葉・和布・日蔭・榎の木・くちなし・柏・椋・櫻木の板・千種・まこも・青葉・むばら・しきみの花・菜たね・菜汁・干かぶら・土生姜・夕皃の上・薄殿・いけ栗・塩梅・いりまめ・櫻町中納言・干瓢・餅つく・菜種／芍藥・きび・瓜茄子の香の物・けし・からし・そば・あられ餅・乘かけぶとん・山のいも・わらび餅・葛もち・にごり酒・蛸の櫻いり・花のぼうし・經かたびら・鶚の鮨・塩からの類・皃のもみぢ・柳樽・柳營・眉の霜・鴈金ぼね・日星の花・柳また板・花貝壺・花かいらげ・花丁字・あじろの車・花子の狂言・[illegible]・呂の調・竹の子がさ・わらび繩・藤づな・藤つゞら・小櫻威の類・橡程の涙・扇あみ・霰釜・きこく・ごま・橘の都・鷺の巣・淺茅・梅花は春也・作り花の類但句作によるべし・灯の花・浪の花・ちまき柱・茶の花香・花がつほ・赤豆粥・かせぎ枯木を云也、鹿は秋也・子の年・丑の年の十二支但右いづれも句作によるべし。

はなひ草古來の本の奥書ニ

地藏頭ニ蓼すりこぎ、面を雄古來の制也。これをおもふに千手觀音とたこの入道と折をへたづへき歟、餘はなずらへてしるべし。

破盞子

此なく書は烏丸大納言樣被レ遊候と也

延寶著雍敦牂暮春陽吉旦

洛下　野田彌兵衛板行

通說

芭蕉が大阪に於て死の床に就いた時、「貧しくて有ながら切に心ざしをはこべる」(其角「枯尾華」)者は之道だつた。之道が貧しい中に師を思ひ、道を思ふ志の篤い事は「江鮭子」の自序に「湖水の名月をゆかしみ、貧家にいとまをうかゞひ得たり、馬に乘る力なければ、四文の草鞋を踏んで十六里……」と、十六里とは大阪から近江の馬場までゞあらう。其比(元祿三年)芭蕉は幻住庵を下りて木曾寺にゐた。鬼貫が之道の行を送る爲に、とも〴〵兩吟をなしてゐるのも注意をひく。

此集中の發句では

石山の石の形や秋の月　鬼貫

宵暗や狐火に寄る虫の聲　正秀

秋風や横にふかれて渡し舟　忠清

月晴てさし鯖しぶき今宵哉　加生

名月や磯邊〳〵の鴫の聲　之道

大阪の洒堂が江戸に下つて(元祿五年九月)深川の芭蕉庵に師を訪ね、江戸の同人達と交歡唱和してゐる様の覗はれる「俳諧深川」は面白い集である。

二日とまりし宗鑑が客、煎茶一斗、米五升、下戸は亭主の仕合なるべし

洗足に客と名の付く寒さ哉　酒堂
綿館ならぶ冬むきの里　許六
みそさゞい階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉
春は其まゝなゝくさも立ッ　嵐蘭

年忘れの會は素堂亭で催された

餘興

としわすれ盃に桃の花書ン　酒堂
膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂
宵の月よく寢る客に宿かして　芭蕉

友情の言葉を藝術的に表しあふ爲には、連句といふものが實に恰好なる形式だといふべきである。

芭蕉が奥羽の大旅行の途、金澤に立寄つて、それから其俳風が大に振興し、かうした集までが出來るやうになつた「卯辰集」は蕉門各地の作家達の句や、又宗鑑、貞室などいふ古い所までも載せて、規模を大きく見せてゐるけれどもやはり地もとの人々の作品を輯めてゐる上で、其意義があるのだらうし、佳作もおのづから其人々のものにあるやうである。

種ものや池にひたりて春の水　楚常
橋桁や日はさしながら夕霞　北枝
君いくつ我はやつくし五七本　李東

またもみる闇かは花のあかりある　秋の坊
蕣は咲ならべてぞしほみける　北枝
いつの間に背戸の木槿は咲ぬらん　如柳
月は山雨海鳴そふる夜比哉　秋の坊
秋風や息災すぎて野人也　北枝
鷺鳴て秋の日よはき曇り哉　牧童
はく跡も木の葉はもとの庵かな　句空
山茶花や蝶のをらぬも靜也　李東
初雪や人のありくと日のさすと　楚常

之は芭蕉在世中(元祿四年)の上梓になるもので、尾張から出た「あら野」に較べられる點もある。夫から星霜を經る事十年、支考が師翁の血脈を自分こそ嗣いだやうな顏をして、北陸の巡遊をしてあるいた頃は、嘗て蕉門に轡を並べた人々の句の風がずつと墮ちてゐるのは致し方もない。萬子・支考共選の「そこの花」に佳句を見出さうとする事は骨が折れる、たま／＼あれば

熊野路に知る人もちぬ桐の花　去來

の如く、芭蕉在世當時の作である。

蓮のあるところへ掃くぞきり／＼す　丈艸
ほた／＼と朝日さしこむ火燵かな　同

師翁亡き後に光つてゐたのは丈艸であつた、之は當時の俳壇意識に動かされず、孤栖閑寂にして、其境涯と其作品とが一枚のものとして生かされたからである。此點に於て、浪化も亦好いと思ふ。

極樂はいつも月夜に十夜かな　浪化

西行も雪の降る夜は茶飯かな　同

同じ頃（元祿十五年）、播州に於て惟然千山の一黨が俳諧の口語化運動を起した事は注意をひく。千山選の「花の雲」に

そこら嘸晝寢の連の揃ふづら　千山

是はかふ／＼かふ／＼の事　良、

すつぺりと殘らず山も空めいて　惟然

發句では

秋じやぞい噺に來たらはなさうよ　至樂

夜明かとおもへば雪のふるにほんに　同

寒さうにして居られたが去れたの　舍羅

見へましたお相撲見へた見えました　尙白

木陰の酒のさかなは苔である　木節

さあさらば花見の笠をかふかぶろ　定當

蚊やり火に女夫さうなが寢るさうな　千山

大阪の舍羅「寒さうに」の句は前書がないけれども恐くは悼句であらう）、大津の尙白、木節の如き古顔も此口語調を

試みてゐる程で、各地は賛同者は少くなかつたのであらうが、遂に此運動を徹底するには到らなかつた。又、「雜体」と稱して無季の句の運動も彼等は此時起してゐる、其趣旨はよろしい。此集の序に誠齋も云ふ如く「頃者(コノゴロ)、渠魁惟然ノ徒倡テ之ヲ誘フニ諸雜ノ發句ヲ以テス、予聞テ之ヲ然リトス、何ゾ無カルベケンヤ、蓋シ中古、古今和歌集ヲ撰スル、雜体ノ中誹諧体アルトキハ則チ今日ノ誹諧モ亦雜体アルベキヤ必セリ矣」である。けれども其習作は全然失敗してゐる。問題は季の有る無い、ではなくて、自然があるか無いか、なのであるから――。

さあ〳〵爰でサア〳〵盃を　至樂

あらましを口說ておいてやつとこな　雪柯

などが、發句でも何でもない事は勿論である。

名古屋の露川が剃髪して月空庵主となつた紀念の集「庵の記」に、

髮ゆふも世話成と拂ひ捨れば、風はなはだ染て元のくるしさにとならず

むづかしと剃てのければ又寒し　露川

圓頂となるといふ事は、當時の社交の一種たる風習であり、又俳諧者流の一つの伊達に類したもので、內部的に深い發心から來てゐるものではない。

世を見れば柘榴の中のへだて哉　露川

など〻悟つた風な事は口にしてゐるけれども……。

越人が其撰「鵲尾冠」のはじめに、「私は越路の者に候間、名も越人と申候、壯年に及ぶ比より故郷を出、流浪仕り

貧乏にて學文など申事不ㇾ存。本など讀ミ候事もなく候へば、しらぬ字は節用集にて見、それになく候へば其分にて置候樣成る文盲者に候間、物知り達、此本を御覽候はゞ笑ひ種にて可ㇾ存候はん」と云つてゐる、其正直さはいゝ。（彼は此正直さから、支考に眞向から喰つてかゝつたのである）。彼は又、芭蕉・其角・杜國の三人と殊に交を厚くしてゐた事を述べ、其三人とも既に亡き人となつた思ひ出を切りになつかしんでゐる、其純情もいゝ。其角に就ては「草の戸に我は蓼喰ふほたるかな」（其角）を擧げ、「予思ふに、其角此句の心にて一生を終らば原憲・子夏なるべきに、晩年には可ㇾ惜事あり」と云ひ、杜國に就ては「杜國子は予が羈客たるをあはれみ、旦暮懇情を盡さる、おもふに管鮑が昔に似たり、彼は富り、我は貧なり、與へて報を不ㇾ思、同志斷金の情不ㇾ淺、さらに予が俳諧の手を引、泣ミ笑みせしも去て三紀に近し、其馴睦ひし年月の深ければ、時として夢に入り、昔をかたり、さめて又夢を泣り」と書いてゐる。

日の色にまづ初秋のあはれなり　越人

行秋も伊良古をさらぬ鷗かな　杜國

露川は川窓居士となつてのち、其草庵に尻も据わらずして、好く旅をしてあるいた。中國、九州二十余ヶ國を巡る事約一年、「凡そ行程一千五百餘里にして好士同門のしたしみをなせる人、袋の芥子の數なるべし」と同行の燕說が云ふ如く、蕉翁在世時代の古老として地方では相當に歡迎され、それが面白いので、旅がやめられなかつたといふ風である。其紀行やら、所謂好士同門の詠草やらを集めた「西國曲」は或意味から見ればいゝ氣なものである、露川の句は、殆んど下手で仕樣もないが、其俳文は一寸面白い。「長崎賦」の一節に

寺院の刹竿梢にあらはれ、數萬の石碑片岨峨に立てり、續いて柿屋根葺を重ね、瓦の棟甲をならべて、長く谷に伏したるは、いかに實に、佛法あれば衆生あり、衆生あれば傾城あり、たけき武士、吝なる親仁も此所にして即

時に角を折らすと聞きし丸山なるべし、すべて神祇、釋教、戀、無常を一眼中におさめて、山郭市店麓に連り、稻佐、水の浦を向ふにかまへて、海の奇麗なる事、泉水のごとく……しばらく船をかけて、酒あれども呑人なし、茶あれども饅頭なしと興じ、爰にわたりかしこによぎり、虚然として桃源に行くかとうたがふ

石摺に長崎の繪や夏景色　（露川）

同じく露川の「北國曲」は此旅の延長であつて、伊勢から京都、大津を經て敦賀で北陸に入り、加越を過ぎて信濃に出で、木曾路をすぎて戻つた。

正風自在の世中に、いさゝか邪風の種こぼれて、人をあやかす類ありと、急に油斷をおどろかして、松本の總連中を示す

私をはなれてあそべはな薄　（露川）

斯んな風に、彼は正風を宣傳してあるいてゐるつもりなのだから、甚だいゝ氣なものである。

又、次の文を見ても彼の氣持はわかる。

老衰の遊行、信濃の寒さにこまりて旅行を急ぐに、松本新古の連衆にしたはるゝ事、離鳥の例に等しく、今日送り馬の鞭うつ處に、跡より正筑太河遊鳥の三子名殘を追ふて八里の贄川に來る、云ゝ

御所柿のしぶ〳〵ながら別れけり　（露川）

芭蕉に拾はれて人間となり、一ころ芭蕉を賣る者として疑はれ、芭蕉が臨終の際に許されたといはれる路通といふ人の生活及び藝術はなほ研究せられねばならぬが、其一資料としても彼の撰したる「桃舐集」は一讀してよい。

つゝくりとものいはぬ日も櫻花　路通

鹿の角なふてまだ初心也　長水

陽炎の野良平等にちらめきて　通

長水といふのは「此ごろ肥陽長水、京にのぼりて我と友たり、折ふし毎につぶやきあふ事、昔古き翁の俤をしたふなれば、古に馴、心に染て、感動する事有、かれ是思ひあはせて桃祇といはんとむべなり」と路通は書いてある。

松老てわかまつはへて嵯峨野哉　路通

ことし竹も淋しき秋の始哉　同

雲鈴が「笈の若葉」は好い紀行である。老て旅に疲れた伊勢の涼菟を、其國まで同行して送りとゞけた雲鈴の友情も美しい。

笠とれば爰闕山や岩つゝじ　涼菟

時鳥そなたに鳥居峠あり　同

そば切に晝の寐覺の若葉かな　雲鈴

若葉より虎溪の雨はしづか也　同

此名殘星崎に夜の明やすし　涼菟

「その濱いふ」は、伊勢から紀伊へかけての紀行である。嵐雪一門の百里、朝叟など打揃うて、さぞ賑かな面白い旅であつたらしく、其興は想像されるけれども、其收獲としての佳吟は見當らぬやうである。那智にて

暑雲の外瀑に奪はゞ人の色　嵐雪

いへばえに瀑に骨あり雲の峯　朝叟

「ばせをだらひ」は「筑前飯塚のやぶ薬師、姓は菊田、名は道專」と自ら名のる俳人有隣の撰する所だが、其に豐後の日田なる朱拙が序してゐる言葉に、

近來活計をもとめるへら〳〵行脚ども、蕉門と名乘りて蕉門をしらず、叨に秘事の傳授のと、荒唐の僞言を構へ、海曲山隈をたぶらかし、貴族富豪に追從して、其位にあらざるを撰集の主にして、烏なき郷の蝙蝠、鳥虫の間をまぎりて、やゝもすれば鴻鵠に並ばんとす、いと口惜きにあらずや、いまその風姿を見れば、俳諧に似てはいかゐるにあらず、つゐに蕉家の神をうしなふ、於乎亡師いまそからば、此體段をゆるし給はんや

彼の慷慨は尤もの事である。へら〳〵行脚とはうまく云つたが、其徒輩に較べれば、露川の行脚などは、單にいゝ氣だといふだけで、罪の少いものであらう。

柿の花ちるや野髮の馬の櫛　朱拙

灌佛や四月の山のはつ櫻　同

竹の子や仕舞てもどる大工箱　同

耳はゆき鍛冶のやすりや蟬の聲　同

いざよひやそゞろに藪のうらおもて　同

朱拙の句は相應に好い。彼が他を罵つて、それが決して一片の惡口にならない譯はこゝにある。

「野坡吟草集」の野坡は

長松が親の名で來る御慶かな　野坡

猫の戀初手から鳴てあはれ也　同

五人扶持とりてしだるゝ柳かな　同

鉢巻をとれば若衆ぞ大根引　同

の如き「炭俵集」にある卑近な句を以て有名な作者であるが、卑近はまだよい、卑俗の句が多いには弱る、然し、吟誦に値する句も拾はれぬことはない。

うぐひすや淀の橋守り起きぬ間に　野坡

花摘や影は谷越す女人堂　同

時もはや梅に塩するあつさ哉　同

薬研押す宿の寐時やきり〴〵す　同

山伏の火をきりこぼす花野かな　同

日は西に雨の木ずえや渡り鳥　同

小童の何處まで行きつ秋のくれ　同

人聲の夜半を過るさむさかな　同

村すゞめ照るとなか〴〵寒さかな　同

次に「誹諧御傘」（貞徳著）と「增補はなひ草」（立圃著）とに就ては、其當時はかうした書物も必要とせられる程、誹諧の作者といふものが低級であつたといふ事、又、左樣に低級になるなど誹諧といふものが一般的に流行してゐたといふ事の一文献として私は見ておきたい。今日でも人の集つた時など、其一座の一人に聞かしては好くない事を云ふた時に、「おさしあひ」があるといつて佃する言葉がある、これは誹諧に於ける「さしあひ」から來た言葉である。之

を以て見ても、誹諧の一般に流行してゐた事は解る。「今聖代を得えてたれとゞむるとなけれども、京田舎の高もいやしきも、老たるも若きも、此道(誹諧)といへば耳をそばだてゝ心をよろこばしむ、しかれども、さしあひにまどふ事多くて、評論絶せねば、丸が門弟のために此一帖をあらはすを……」貞德は「御傘」の序に斯う云つてゐる。連句は變化を貴ぶものだから、同想同類の事を繰返すやうではいけない爲に、さしあひを禁ずる主意は結構であらうが、そんな事は趣味的の常識で各自が判斷すべき事であつて、星月夜は月に三句去るとか何とか、そんな掟を定めるべきものではない、そんな掟を定めなければ、作を運びえないなどいふてあひの低級さは、つまり

花よめ、花聟　　戀也、雜也、正花を持也、人倫也、植物に非ず、春に非ず

と云つてきかせなければ解らぬやうなてあひなのである。さうした人々に、繁瑣な掟を作つて與へれば與へる程、其掟にしばられて、いよ〳〵クロスワーヅを阿呆が考へてゐるやうな事になるのは當然である。「增補はなひ草」にも

一、頭の雪　　冬にあらず、降物にあらず

などゝ、こんな事まで斷つて敎へねばならぬとは、あきれた次第である。花に吉野をつける事を嫌ふ、尤も吉野に花をつけることは差支ない、萩に宮城野、紅葉に龍田、月に更級など同前であると、此事は「御傘」にも「增補はなひ草」にも書いてある。之は花よめや頭の雪より難しいが、之とても趣味的の常識で考へれば解る。花といふ觀念から、花の名所を思ひ、吉野を思ふ事は、如何にも連想的なる連想であるからいけない。吉野の景色に花を點ずることは、如何にも自然であつて、吉野一句で投出して、花を之に點じなければ、冬枯の吉野らしく、却て吉野の趣を損ずる感じさへするからである。兎も角、斯様なくだらない掟を立てゝ、それで通俗的に流行してゐた所謂誹諧なるものが、芭蕉に依つて根本的に革新されたといふ事は、餘りにも當然なる歸結だといふべきである。然し、その芭蕉が貞德以來

の誹諧の傳統なるものを、形式としては全然放擲する事がなく、或點までは其傳統を保持してゐたといふ事實は、進化過程としてのやむをえない遺物でもあつたし、又、其を以て新しい俳風に對する世間的の是認をつなぐ方便でもあつたのであらうと思ふ。(荻原井泉水)

日本俳書大系篇外　終

昭和二年十一月五日印刷
昭和二年十一月十日發行

定價金四圓

日本俳書大系
篇外

著作者　神田豊穂
發行者　神田豊穂
東京市日本橋區數寄屋町一番地
印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四 二二二四